

関根赤城遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

2014.3

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

上武道路は一般国道17号が一級国道17号線と呼ばれた昭和30年代初めのバイパス線として計画され、昭和45年に着工されましたが、その上武道路も間もなく全線開通のときを迎えようとしております。そして本報告書に報告する関根赤城遺跡は、上武道路建設の最後の工区である第8工区に在り、上武道路の終点となる田口町南交差点の近くに在ります。

関根赤城遺跡は近年まで利根川の古い流路の中にあって遺跡がないとされてきましたが、主に平安時代から中世にかけての遺構、遺物が発見され、発掘調査が行われました。本遺跡からは平安時代、特に10世紀後半を中心とする時代の集落、遺構は確認されませんでした。製鉄関連の遺物、天仁元年(1108)の浅間山の噴火の前後の畠、中世の土壙墓や火葬土坑、長方形土坑などが確認されました。特に11世紀に入って衰退する集落の様子は、亡弊の国と呼ばれた当時の関東の姿を伝えるものであります。

この度、発掘調査成果をまとめ、埋蔵文化財発掘調査報告書として上梓することとなりました。発掘調査から報告書作成に至るまでご指導、ご協力を賜りました国土交通省関東地方整備局、群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会文化財保護課、並びに地元の関係者各位に感謝申し上げます。そして本報告書が今後地域の歴史を知るうえで広く活用されますことを願い、序と致します。

平成26年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 上原 訓 幸

例 言

1. 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財調査(その3)に伴い発掘調査された関根赤城(せきねあかぎ)遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 関根赤城遺跡は、群馬県前橋市関根町66・70・71-2・173-1・179番地に所在する。
3. 事業主体は国土交通省関東地方整備局である。
4. 調査主体は公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 発掘調査の期間と体制は次のとおりである。
調査期間 平成24年4月1日～平成24年7月31日(調査履行期間：平成24年4月1日～平成25年3月31日)
発掘調査担当者 久保 学(主任調査研究員) 相京建史(専門調査役)
遺跡掘工事削請負 技研測量設計株式会社
委託 地上測量：技研測量設計株式会社 土器洗浄・注記作業：(有)高澤考古学研究所
6. 整理事業の期間と体制は次のとおりである。
整理期間 平成25年4月1日～平成26年1月31日(整理履行期間：平成25年4月1日～平成26年3月31日)
整理担当 石守 晃(上席専門員)
7. 本書作成の担当者は次のとおりである。
編 集 石守 晃
本文執筆 第1章第1～3節は小島敦子が執筆し、第1節と第3節は石守 晃が加筆した。
第5章第2節は榑崎修一郎(生物考古学研究所)、第2節は宮崎重雄が執筆し、その他本文は石守 晃が執筆した。
デジタル編集 佐藤元彦(補佐(総括))
遺 物 観 察 石器・石製品：岩崎泰一(資料統括) 土師器・須恵器：徳江秀夫(資料統括)
中近世陶磁器・土器：大西雅広(上席専門員) 金属製品・製鉄遺物・炭化物：関 邦一(補佐(総括))
遺物写真撮影 佐藤元彦・岩崎泰一・大西雅広
保 存 処 理 関 邦一
8. 石材の一部鑑定は飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)に依頼した。
9. 発掘調査諸資料及び出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
10. 発掘調査及び本書作成に当たり諸氏、機関よりご協力、ご指導を得た。記して感謝の意を表します。
(五十音順・敬称略)
群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会文化財保護課、前橋市関根町自治会

凡 例

1. 関根赤城遺跡の遺構平面図は世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)を用いて測量した。
2. 遺構図の中で使用した北方位は、すべて座標北を示している。真北方向は+0° 27' 47.27"である。
3. 遺構の方位は、座標北を基準として主軸角度等の傾きを計測した。
4. 遺構平面図の縮尺はそれぞれの図に記した他は、以下のとおりである。
 竪穴住居 1:60、竈 1:30、溝 1:100、土壙墓・土坑・ピット 1:40、畠 1:80
 遺構断面図の縮尺は、竪穴住居・竈、土壙墓、土坑、ピット、畠は平面図に同じ。
5. 遺物図の縮尺は以下のとおりである。
 土器 1:3、石器・石製品 1:3 1:4、鉄製品 1:2、羽口 1:3
6. 遺物番号は出土遺構ごとの連番で、番号は本文・挿図・表・写真図版ともに一致する。
7. 図中で使用したスクリーンパターンやマークは、以下のことを表す。
 ■ 焼土 ▨ 炭化物粒 ▩ 硬化面 ▩ 攪乱
 ▨ スス □ 黒色 ▨ 灰袖 ■ 緑袖 ▨ 鉄(金属)
8. 本書では必要に応じて、浅間山C軽石(As-C)、浅間山Bテフラ(As-B)、榛名二ツ岳渋川火山灰(Hr-FA)、榛名二ツ岳渋川軽石(Hr-FP)などの主要テフラを略号のみで表記した。
9. 住居の面積は、デジタルプランニメーターで計測した。
10. 土層や土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』を使用した。
11. 本書で使用した各地図は、以下のとおりである。
 第1図 国土地理院20万分の1地勢図「宇都宮」平成18年発行
 第2図 「首都圏整備」(1959)に加筆転載
 第3図 国土地理院5万分の1地勢図「前橋」平成10年発行
 第5図 前橋市役所発行2千5百分の1現形図 平成21年測図
 第6図 国土地理院2万5千分の1地勢図「前橋」平成22年発行「渋川」
 第8図 国土地理院2万5千分の1一之尺「八木原」昭和4年測図、昭和7年7月25日発行
 国土地理院2万5千分の1一之尺「前橋」昭和4年測図、昭和7年8月25日発行

目 次

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査経過

- 第1節 上武道路について…………… 1
- 第2節 上武道路と埋蔵文化財…………… 2
- 第3節 調査に至る経過…………… 4
- 第4節 調査経過…………… 5

第2章 調査の方法

- 第1節 グリッド・調査区の設定…………… 7
 - 1 グリッドの設定…………… 7
 - 2 調査区の設定…………… 7
 - 3 遺跡番号…………… 7
- 第2節 発掘調査の方法…………… 10
 - 1 調査範囲…………… 10
 - 2 掘削…………… 10
 - 3 記録…………… 10
- 第3節 基本土層…………… 10

第3章 地理的・歴史的環境

- 第1節 地理的・地質的環境…………… 12
 - 1 地理的環境…………… 12
 - 2 地質的環境…………… 13
- 第2節 歴史的環境…………… 13
 - 1 旧石器時代…………… 13
 - 2 縄文時代…………… 13
 - 3 弥生時代…………… 13
 - 4 古墳時代…………… 13
 - 5 古代…………… 14
 - 6 中世…………… 14
 - 7 近世以降…………… 15

第4章 発見された遺構と遺物

- 第1節 1面の遺構と遺物…………… 18
 - 1 1面の遺構…………… 18
 - 2 溝…………… 20
 - 3 土坑…………… 22

- 第2節 2面の遺構と遺物…………… 26
 - 1 2面の遺構…………… 26
 - 2 竪穴住居…………… 29
 - 3 竪穴状遺構…………… 109
 - 4 溝…………… 111
 - 5 土壙墓・火葬土坑…………… 121
 - 6 土坑…………… 124
 - 7 ピット…………… 143
 - 8 畠…………… 146
- 第3節 遺構外の出土遺物…………… 150
 - 1 遺構外の出土遺物…………… 150
 - 2 製鉄関連遺物…………… 152

第5章 自然科学分析

- 第1節 出土人骨・獣骨の鑑定について…………… 153
 - 1 人骨及び歯牙の鑑定…………… 153
 - 2 獣骨及び歯牙の鑑定…………… 153
- 第2節 関根赤城遺跡出土人骨…………… 154
 - 1 89区出土人骨…………… 154
 - 2 90区出土人骨…………… 155
- 第3節 関根赤城遺跡出土の獣骨…………… 157

第6章 関根赤城遺跡のまとめ

- 第1節 概要…………… 160
 - 1 遺跡の経年的概要…………… 160
 - 2 竪穴住居—集落—…………… 160
- 第2節 おわりに…………… 161
 - 参考文献…………… 161

出土遺物観察表……………162～178
未掲載遺物一覧……………179～183

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	上武道路と遺跡地の位置図	1	第62図	17号住居出土遺物	64
第2図	首都圏連絡幹線道路と上武道路予定路線	2	第63図	18号住居	64
第3図	上武道路8工区の遺跡	3	第64図	18号住居掘り方及び竈	65
第4図	試掘調査	4・5	第65図	18号住居竈掘り方	66
第5図	関根赤城遺跡調査区周辺図	8	第66図	19号住居	67
第6図	上武道路調査測量グリッド設定図	9	第67図	19号住居竈と出土遺物	68
第7図	関根赤城遺跡基本土層図	11	第68図	20号住居	68
第8図	関根赤城遺跡周辺地質図	12	第69図	20号住居竈	69
第9図	関根赤城遺跡周辺遺跡分布図	14	第70図	20号住居出土遺物	70
第10図	89・90区1面の遺構	18	第71図	21号住居	71
第11図	100・91区1面の遺構	19	第72図	21号住居掘り方	72
第12図	1・2号溝	20	第73図	21号住居竈	73
第13図	8・9号溝	21	第74図	21号住居出土遺物	74
第14図	1・2・3号土坑	23	第75図	22号住居	75
第15図	100区・91区所在土坑群(その1)	24	第76図	23号住居	76
第16図	100区・91区所在土坑群(その2)	25	第77図	23号住居掘り方と出土遺物(1)	77
第17図	1面遺構外の出土遺物	25	第78図	23号住居出土遺物(2)	78
第18図	89・90区2面の遺構	26	第79図	24号住居	79
第19図	100・91区2面の遺構	27	第80図	25号住居竈と出土遺物	80
第20図	2面中世関連遺構分布図	28	第81図	26号住居	81
第21図	1号住居	29	第82図	26号住居掘り方と出土遺物	82
第22図	1号住居掘り方及び竈と出土遺物(1)	30	第83図	26号住居竈	83
第23図	1号住居出土遺物(2)	31	第84図	27号住居と出土遺物	84
第24図	2号住居	31	第85図	28号住居と出土遺物	85
第25図	2号住居掘り方と出土遺物	32	第86図	28号住居竈	86
第26図	3号住居	32	第87図	29号住居と出土遺物	87
第27図	3号住居掘り方	33	第88図	30・31・32号住居	88
第28図	3号住居竈と出土遺物	34	第89図	30・31・32号住居掘り方	89
第29図	4号住居竈	35	第90図	30号住居竈と出土遺物	90
第30図	5号住居と出土遺物	36	第91図	33号住居	91
第31図	6号住居竈	36	第92図	33号住居竈と出土遺物(1)	92
第32図	6号住居竈掘り方	37	第93図	33号住居出土遺物(2)	93
第33図	6号住居出土遺物	38	第94図	34号住居及び竈	94
第34図	7号住居竈	38	第95図	34号住居竈掘り方と出土遺物	95
第35図	8号住居	39	第96図	35号住居	96
第36図	8号住居掘り方及び竈	40	第97図	36号住居	97
第37図	8号住居出土遺物	41	第98図	36号住居竈	98
第38図	9号住居	42	第99図	36号住居出土遺物	99
第39図	9号住居竈と出土遺物	43	第100図	37号住居	99
第40図	10号住居	44	第101図	37号住居掘り方	100
第41図	10号住居掘り方及び竈	45	第102図	37号住居竈	101
第42図	10号住居出土遺物	46	第103図	37号住居出土遺物	102
第43図	11号住居	47	第104図	38号住居	103
第44図	11号住居掘り方及び竈	48	第105図	38号住居竈と出土遺物	104
第45図	11号住居竈掘り方と出土遺物(1)	49	第106図	39号住居	105
第46図	11号住居出土遺物(2)	50	第107図	39号住居掘り方及び竈	106
第47図	12号住居	50	第108図	39号住居竈掘り方と出土遺物(1)	107
第48図	12号住居掘り方と出土遺物	51	第109図	39号住居出土遺物(2)	108
第49図	13号住居	52	第110図	1号竪穴状遺構	109
第50図	13号住居掘り方	53	第111図	2号竪穴状遺構	109
第51図	13号住居竈	54	第112図	3号竪穴状遺構と出土遺物	110
第52図	13号住居竈掘り方	55	第113図	3号溝	111
第53図	13号住居出土遺物(1)	56	第114図	5号溝	111
第54図	13号住居出土遺物(2)	57	第115図	4・6・7・11・12号溝	113
第55図	14号住居と出土遺物	58	第116図	4号溝出土遺物(1)	114
第56図	14号住居竈	59	第117図	4号溝出土遺物(2)6・11・12号溝出土遺物	115
第57図	15号住居	60	第118図	10号溝と出土遺物及び13号溝	117
第58図	15号住居掘り方及び竈	61	第119図	14号溝と出土遺物及び15号溝	118
第59図	15号住居竈掘り方と出土遺物	62	第120図	17号溝	119
第60図	16号住居	63	第121図	18・19号溝と出土遺物	120
第61図	17号住居竈	63	第122図	1号土塚墓	121

第123図	3号土壙墓	121	第142図	土坑群出土遺物(2)	141
第124図	4号土壙墓	122	第143図	土坑群出土遺物(3)	142
第125図	5号土壙墓	122	第144図	1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・ 11・12・13・14号ピット	144
第126図	6号土壙墓	123	第145図	15・16・17・18・19・20・21・22・23・26・ 27・28・29号ピット	145
第127図	4・5・6・7・12・13号土坑	126	第146図	1号畠	146
第128図	14・15・16・17・18・19号土坑	127	第147図	3号畠	147
第129図	20・21・22・23・24・25・37・38・48号土坑	128	第148図	4号畠	147
第130図	26・28・29・31・32・76号土坑	129	第149図	5号畠	148
第131図	27・30・50・51・78号土坑	130	第150図	6・7号畠	149
第132図	33・34・35・36・39・40号土坑	131	第151図	89区2面遺構外の出土遺物(1)	150
第133図	41・42・43・44・45・85・86号土坑	132	第152図	89区2面遺構外の出土遺物(2)	151
第134図	46・47・49・52・53・54・88号土坑	133	第153図	90・100・91区2面遺構外の出土遺物	152
第135図	55・56・58・59・60・61・62号土坑	134	第154図	4号土壙墓平面図及び人骨出土位置	155
第136図	63・64・65・66・67・68・69号土坑	135	第155図	4号土壙墓出土火葬人骨出土部位図(左右鼻骨)	156
第137図	70・79・80・84・87・89号土坑	136	第156図	4号土壙墓出土火葬人骨出土部位図(右上顎骨)	156
第138図	90・91・92・93・94・95号土坑	137	第157図	4号土壙墓出土火葬人骨出土部位図(左上腕骨・右橈骨)	156
第139図	96・97・98・99・100号土坑	138			
第140図	101号土坑と出土遺物	139			
第141図	土坑群出土遺物(1)	140			

表 目 次

表1	上武道路8工区遺跡一覧	3
表2	周辺遺跡一覧	15～17
表3	1面土坑一覧	23
表4	2面土坑一覧	125
表5	2面ピット一覧	143
表6	2面畠測定値一覧	150
表7	関根赤城遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表	154
表8	関根赤城遺跡牛歯計測値	158
表9	90区15号溝No.1馬歯下顎臼歯計測値	158
表10	89区1号土壙墓馬歯計測値	158
表11	炭化物同定表	178

本文中写真

写真1	89・90区(仮2区)2面調査風景	123
写真2	100区東部ピット群	143
写真3	6号土壙墓(8号住居内)	154
写真4	4号土壙墓出土火葬骨(左右鼻骨)	155
写真5	4号土壙墓出土火葬骨(右上顎骨)	156
写真6	4号土壙墓出土火葬骨(左上腕骨)	156
写真7	4号土壙墓出土火葬骨(左橈骨)	156
写真8	89区1号土壙墓出土牛骨(頰側)	158
写真9	89区1号土壙墓出土牛骨(下顎骨)	158
写真10	89区1号竪穴状遺構出土馬歯	159
写真11	89区23号住居出土獣骨	159
写真12	89区26号住居出土獣骨	159
写真13	90区15号溝出土馬歯	159
写真14	90区15号溝出土馬歯咬合面	159
写真15	89区1号土壙墓出土臼歯咬合面	159

写真目次

PL. 1	1	1面89・90区調査区全景(北西より)	6	9号住居炭化物粒土層断面(北より)	
	2	91区土層断面(南より)	7	9号住居竈全景(北より)	
PL. 2	1	調査風景	8	9号住居竈掘り方全景(北より)	
	2	トレンチ(未調査区)	PL.12	1	9号住居掘り方全景(北より)
	3	89区北壁土層断面(南より)	2	10号住居竈全景(西より)	
	4	89区土層断面(北より)	3	10号住居竈掘り方全景(西より)	
	5	1号溝全景(北より)	4	10号住居掘り方全景(西より)	
	6	2号溝全景(南東より)	5	10号住居床下土坑2全景(西より)	
	7	2号溝土層断面(南東より)	6	11号住居全景(北より)	
	8	9号溝全景(北東より)	7	11号住居遺物出土状況(西より)	
PL. 3	1	1号土坑全景(東より)	8	11号住居竈全景(西より)	
	2	2号土坑全景(東より)	PL.13	1	11号住居竈掘り方全景(西より)
	3	3号土坑全景(東より)	2	11号住居竈掘り方遺物出土状況(西より)	
	4	8号土坑全景(南東より)	3	11号住居掘り方全景(北より)	
	5	9号土坑全景(南東より)	4	12号住居遺物出土状況(西より)	
	6	10号土坑全景(南東より)	5	12号住居掘り方全景(北より)	
	7	11号土坑全景(西より)	6	13・26号住居全景(西より)	
	8	11号土坑遺物出土状況(西より)	7	13号住居掘り方遺物出土状況(南より)	
	9	71号土坑全景(東より)	8	13号住居竈全景(西より)	
	10	72・73・74号土坑全景(東より)	PL.14	1	13・26号住居竈全景(西より)
	11	75号土坑全景(東より)	2	13・26号住居掘り方全景(西より)	
	12	81号土坑全景(北より)	3	13号住居床下土坑2遺物出土状況(南東より)	
	13	82号土坑全景(東より)	4	14号住居全景(西より)	
	14	83号土坑全景(北より)	5	14号住居竈全景(西より)	
PL. 4	1	2面89区調査区全景(北東より)	6	14号住居竈遺物出土状況(西より)	
	2	2面89・90区調査区全景(北西より)	7	14号住居竈掘り方全景(西より)	
PL. 5	1	2面91・100区調査区全景(北東より)	8	14号住居掘り方全景(西より)	
	2	2面91・100区調査区全景(南東より)	PL.15	1	15号住居全景(西より)
PL. 6	1	2面100区調査区全景(北東より)	2	15号住居竈全景(西より)	
	2	2面100区調査区全景(北東より)下位層確認調査	3	15号住居竈掘り方全景(西より)	
PL. 7	1	2面100区土層断面(北より)	4	15号住居掘り方全景(西より)	
	2	2面100区土層断面(北東より)	5	16号住居土層断面(東より)	
PL. 8	1	1号住居全景(南東より)	6	17号住居竈全景(南西より)	
	2	1号住居遺物出土状況(南東より)	7	17号住居竈全景(東より)	
	3	1号住居焼土遺存状況(南東より)	8	18号住居全景(西より)	
	4	1号住居竈全景(南西より)	PL.16	1	18号住居竈全景(西より)
	5	1号住居竈掘り方全景(南西より)	2	18号住居掘り方全景(西より)	
	6	1号住居掘り方全景(南東より)	3	19号住居遺物出土状況(東より)	
	7	2号住居全景(南東より)	4	20号住居全景(西より)	
	8	2号住居掘り方全景(南より)	5	20号住居遺物出土状況(東より)	
PL. 9	1	3号住居全景(南東より)	6	20号住居竈全景(西より)	
	2	3号住居竈掘り方全景(西より)	7	20号住居掘り方全景(西より)	
	3	3号住居掘り方全景(南より)	8	20号住居掘り方全景(西より)	
	4	3号住居床下土坑3全景(東より)	PL.17	1	20号住居土層断面(東より)
	5	4号住居竈全景(東より)	2	21号住居遺物出土状況(西より)	
	6	4号住居土層断面(東より)	3	21号住居掘り方土層断面(北より)	
	7	5号住居全景(南東より)	4	23号住居全景(西より)	
	8	6号住居全景(東より)	5	23号住居遺物出土状況(西より)	
PL.10	1	6号住居全景焼土遺存状況(東より)	6	23号住居掘り方全景(西より)	
	2	6号住居竈全景(西より)	7	23号住居床下土坑1全景(南より)	
	3	7号住居竈全景(南東より)	8	23号住居床下土坑3全景(南より)	
	4	7号住居竈煙道部(東より)	PL.18	1	24号住居全景(東より)
	5	7号住居竈土層断面(南西より)	2	25号住居全景(西より)	
	6	8号住居全景(西より)	3	25号住居全景(東より)	
	7	8号住居竈遺物出土状況(西より)	4	25号住居掘り方全景(北より)	
	8	8号住居竈遺物出土状況(西より)	5	26号住居遺物出土状況(南より)	
PL.11	1	8号住居竈掘り方全景(西より)	6	26号住居遺物出土状況(南より)	
	2	8号住居掘り方全景(西より)	7	27号住居床下土坑1全景(東より)	
	3	8号住居床下土坑1土層断面(北より)	8	28号住居全景(北東より)	
	4	9号住居遺物、炭化物出土状況(北より)	PL.19	1	28号住居掘り方全景(北東より)
	5	9号住居全景(北より)	2	29号住居遺物出土状況(北より)	

	3	29号住居遺物出土状況(西より)		5	11号溝遺物出土状況(西より)
	4	29号住居掘り方全景(北より)		6	12号溝全景(北より)
	5	30号住居全景(西より)		7	12号溝全景(南より)
	6	30号住居炭化物粒遺存状況(西より)		8	13号溝全景(北より)
	7	30号住居竈全景(西より)	PL.28	1	13号溝土層断面(北より)
	8	30号住居竈掘り方全景(西より)		2	14号溝全景(北より)
PL.20	1	30号住居掘り方全景(西より)		3	14号溝土層断面(北より)
	2	30・31・32号住居土層断面(北より)		4	15号溝全景(北より)
	3	31号住居全景(西より)		5	15号溝土層断面(北より)
	4	31号住居掘り方全景(西より)		6	15号溝遺物出土状況(西より)
	5	32号住居全景(西より)		7	15号溝遺物出土状況(西より)
	6	32号住居全景掘り方(西より)		8	17号溝土層断面(東より)
	7	33号住居全景(北西より)	PL.29	1	18・19号溝全景(南東より)
	8	33号住居遺物出土状況(北西より)		2	18号溝調査風景(北西より)
PL.21	1	33号住居遺物出土状況(北西より)		3	18号溝全景(西より)
	2	33号住居掘り方全景(北西より)		4	18号溝遺物出土状況(南東より)
	3	34号住居全景(北東より)		5	18号溝遺物出土状況(南東より)
	4	34号住居遺物出土状況(北より)		6	18号溝土層断面(北西より)
	5	34号住居竈全景(東より)		7	18・19号溝土層断面(北西より)
	6	34号住居竈掘り方全景(東より)	PL.30	1	1号土壙墓全景(東より)
	7	34号住居掘り方全景(北東より)		2	1号土壙墓全景(東より)
	8	35号住居掘り方全景(北より)		3	1号土壙墓全景(北より)
PL.22	1	36号住居全景(西より)		4	3号土壙墓炭化物粒遺存状況(東より)
	2	36号住居遺物出土状況(西より)		5	3号土壙墓全景(東より)
	3	36号住居竈全景(西より)		6	4号土壙墓炭化物粒遺存状況(東より)
	4	36号住居竈掘り方全景(西より)		7	4号土壙墓礫設置状況(西より)
	5	36号住居竈掘り方全景(西より)		8	4号土壙墓掘り方全景(東より)
	6	36号住居掘り方全景(西より)		9	5号土壙墓土層断面 57号土坑より(南より)
	7	37号住居全景(西より)		10	6号土壙墓(8号住居内)
	8	37号住居竈掘り方全景(西より)			人歯出土状況(北より)
PL.23	1	37号住居床下土坑1 全景(西より)		11	4号土坑全景(南東より)
	2	37号住居遺物出土状況(北より)		12	5号土坑全景(南より)
	3	37号住居竈全景(西より)		13	6号土坑全景(北より)
	4	37号住居掘り方全景(西より)		14	7号土坑全景(北より)
	5	38号住居遺物出土状況(北より)		15	12号土坑全景(東より)
	6	38号住居竈全景(北より)	PL.31	1	13号土坑全景(東より)
	7	38号住居竈全景(北より)		2	14号土坑全景(東より)
	8	38号住居竈掘り方全景(北より)		3	15号土坑全景(南より)
PL.24	1	38号住居竈掘り方全景(北より)		4	16号土坑全景(南より)
	2	38号住居掘り方全景(北より)		5	17号土坑全景(北東より)
	3	39号住居全景(西より)		6	18号土坑全景(南より)
	4	39号住居竈付近遺物出土状況(西より)		7	19号土坑全景(南より)
	5	39号住居竈全景(西より)		8	20号土坑全景(東より)
	6	39号住居竈掘り方全景(西より)		9	21号土坑全景(南より)
	7	39号住居掘り方全景(西より)		10	22号土坑全景(北東より)
	8	39号住居床下土坑1 全景(南東より)		11	23号土坑全景(南より)
PL.25	1	1号竪穴状遺構遺物出土状況(北東より)		12	24号土坑全景(南より)
	2	3号竪穴状遺構焼土遺存状況(南より)		13	25号土坑全景(西より)
	3	3号竪穴状遺構炭化物粒遺存状況(南より)		14	26号土坑全景(南西より)
	4	3号竪穴状遺構掘り方全景(南より)		15	27号土坑全景(南東より)
	5	3号竪穴状遺構掘り方土層断面(東より)	PL.32	1	28号土坑全景(東より)
	6	3号竪穴状遺構床下土坑2 全景(南より)		2	29号土坑全景(南西より)
	7	3号溝全景(東より)		3	30号土坑全景(東より)
PL.26	1	4・11号溝全景(北東より)		4	31号土坑全景(南より)
	2	4号溝遺物出土状況(西より)		5	32号土坑全景(西より)
	3	5号溝全景(南より)		6	33号土坑全景(北より)
	4	5号溝調査風景(南より)		7	33号土坑遺物出土状況(南東より)
	5	6号溝全景(南より)		8	33号土坑遺物出土状況(北より)
	6	7・10号溝全景(東より)		9	37号土坑全景(西より)
	7	7・12号溝土層断面(東より)		10	38号土坑全景(西より)
PL.27	1	10号溝全景(東より)		11	39号土坑全景(南より)
	2	10号溝全景(東より)		12	40号土坑全景(南より)
	3	11号溝遺物出土状況(西より)		13	41号土坑遺物出土状況(南より)
	4	11号溝遺物出土状況(南より)		14	42号土坑全景(南より)

	15	42号土坑遺物出土状況(南より)	7	101号土坑全景 2号土壇墓より(東より)
PL.33	1	42号土坑遺物出土状況(東より)	8	101号土坑土層断面 2号土壇墓より(北東より)
	2	42号土坑遺物出土状況(南より)	9	1号ピット全景(南東より)
	3	43号土坑全景(南より)	10	2号ピット全景(南東より)
	4	44号土坑全景(南より)	11	3号ピット全景(南東より)
	5	45号土坑全景(西より)	12	4号ピット全景(南東より)
	6	45号土坑遺物出土状況(北より)	13	5号ピット全景(南東より)
	7	45号土坑遺物出土状況(西より)	14	6号ピット全景(南東より)
	8	46号土坑全景(南より)	15	7号ピット全景(南東より)
	9	47号土坑全景(南より)	PL.37	1 8号ピット全景(南より)
	10	47号土坑遺物出土状況(南より)	2	9号ピット全景(南東より)
	11	47号土坑遺物出土状況(東より)	3	10号ピット全景(東より)
	12	48号土坑全景(南西より)	4	11号ピット全景(東より)
	13	49号土坑全景(西より)	5	12号ピット全景(東より)
	14	50号土坑全景(東より)	6	13号ピット全景(東より)
	15	51号土坑全景(東より)	7	14号ピット土層断面(北より)
PL.34	1	52号土坑遺物出土状況(南より)	8	15号ピット全景(南より)
	2	53号土坑全景(南西より)	9	16号ピット全景(南より)
	3	54号土坑全景(東より)	10	17号ピット全景(南より)
	4	54号土坑遺物出土状況(北東より)	11	26号ピット全景(南より)
	5	55号土坑全景(西より)	12	27号ピット全景(南より)
	6	56号土坑全景(東より)	13	27号ピット土層断面(西より)
	7	56号土坑遺物出土状況(北より)	14	28号ピット全景(南より)
	8	58号土坑遺物出土状況(西より)	15	29号ピット全景(南より)
	9	61・62号土坑全景(東より)	PL.38	1 1号畠全景(北より)
	10	63号土坑全景(西より)	2	1号畠全景(南より)
	11	64号土坑全景(北東より)	3	1号畠全景(北東より)
	12	65号土坑土層断面(東より)	4	1号畠検出状況(東より)
	13	66号土坑全景(南より)	5	1号畠土層断面(南より)
	14	69号土坑全景(東より)	6	1号畠土層断面(南東より)
	15	70号土坑全景(南より)	7	3・4・5・6・7号畠全景(北西より)
PL.35	1	76号土坑土層断面(東より)	8	3号畠全景(北東より)
	2	78号土坑全景(東より)	PL.39	1 3号畠土層断面(南西より)
	3	79号土坑全景(南より)	2	4号畠全景(北東より)
	4	80号土坑全景(南より)	3	5号畠全景(北東より)
	5	80号土坑遺物出土状況(北より)	4	6号畠全景(東より)
	6	85号土坑全景(東より)	5	6号畠全景(北より)
	7	86号土坑全景(西より)	6	6号畠土層断面(南より)
	8	87号土坑全景(東より)	7	7号畠全景(南西より)
	9	88号土坑全景(南より)	8	7号畠全景(北より)
	10	88号土坑遺物出土状況(南より)	PL.40	1面11号土坑、遺構外、2面1・3号住居出土遺物
	11	89号土坑土層断面(西より)	PL.41	8・9・10・11号住居出土遺物
	12	90号土坑土層断面(西より)	PL.42	12・13・14・15・19・20号住居出土遺物
	13	92号土坑全景(南より)	PL.43	21・23(1)号住居出土遺物
	14	93号土坑全景(東より)	PL.44	23(2)25・26・27・29・30号住居出土遺物
	15	94号土坑全景(南より)	PL.45	33・34号住居出土遺物
PL.36	1	95号土坑全景(南より)	PL.46	36・37・38・39(1)号住居出土遺物
	2	96号土坑全景(北より)	PL.47	39(2)号住居、3号竪穴状遺構、4・5・6・10・11・14・18・19号溝
	3	97号土坑全景(東より)	PL.48	4・7・33・35・41・42・45・47号土坑出土遺物
	4	98号土坑全景(北より)	PL.49	52・54・66・80・88・96・101号土坑出土遺物
	5	99号土坑全景(北より)	PL.50	遺構外出土遺物
	6	100号土坑全景(西より)		

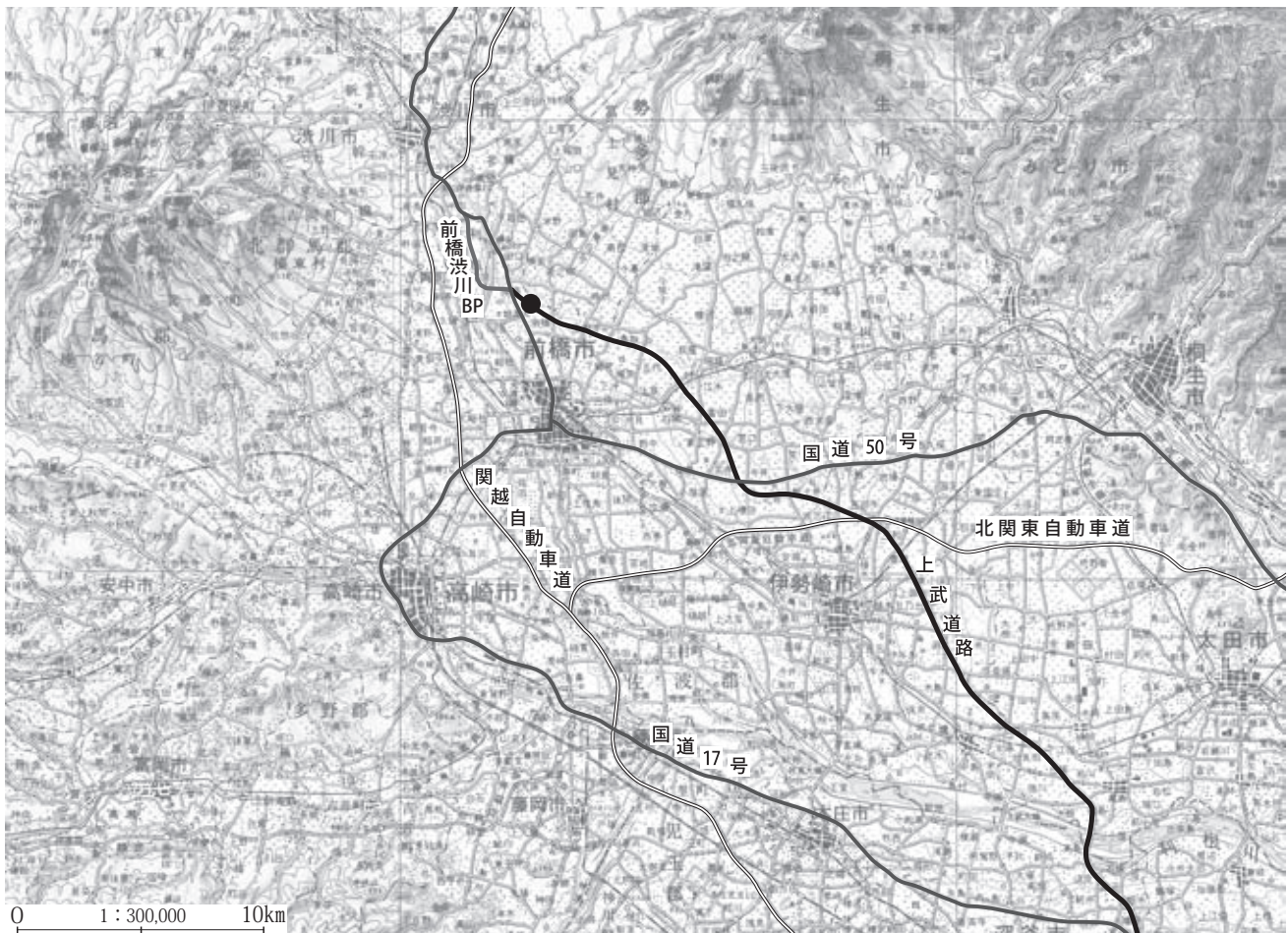
第1章 調査経過

第1節 上武道路について

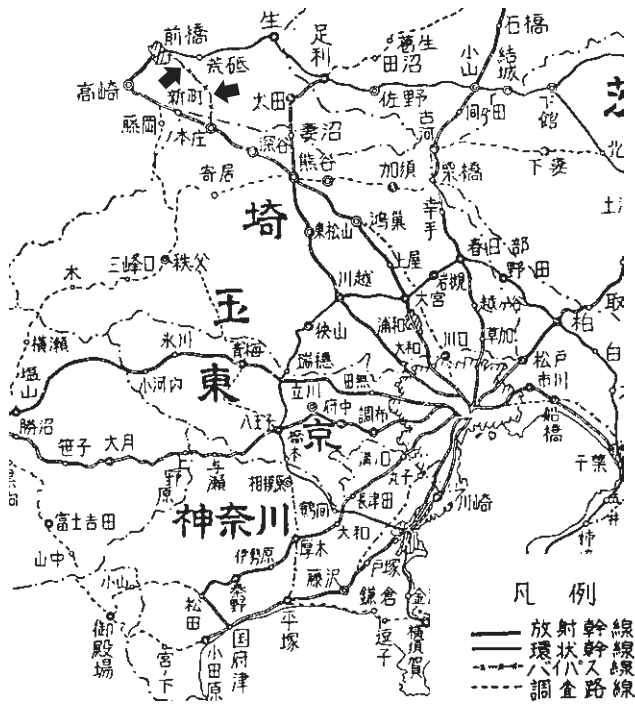
上武道路は一般国道17号の交通混雑の緩和と地域活性化を目的として計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市西別府で深谷バイパスから分岐する地点から、群馬県前橋市田口町で一般国道17号線と交差し且つ前橋渋川バイパスに接続する地点までの延長約40.5kmの大規模バイパス道路である。また上武道路は、国に於いては平成10年に計画路線の指定を受けた地域高規格道路「熊谷渋川連絡道路」の一部区間であり、群馬県に於いては『幹線交通乗り入れ30分構想』の中で主要幹線のひとつに位置付けられている。

そもそも上武道路建設の企画は、首都圏整備法(昭和31年法律第83号)に基づいて設置された首都圏整備委員

会での昭和31・32年の検討にまで遡る。同委員会ではバイパス線に関する検討も行っていたが、一般的な市街地をバイパスする路線とは別に「大きく幾つかのバイパス線を考えて」おり、このうち首都から放射線に延びるバイパスとして、第3京浜線と共に「1級国道17号線について前橋、本庄間のバイパス」が取り上げられている(首都圏整備委員会1958)。この時点で「上武道路」という呼称があったか否かの確認はできていないが、前橋市街地から(伊勢崎を経由し)本庄市街地を結ぶ東に張り出す弧状の想定路線が「首都圏連絡幹線道路網図」に示されている(第2図)。その後、昭和37年までの間に特段の動きはなかったが、昭和39年3月27日付の『首都圏整備委員会告示第1号』でその整備が告示され、昭和44年1月の『首都圏整備』(首都圏整備委員会1969)に附された「首都圏



第1図 上武道路と遺跡地の位置図 (国土地理院発行1/200000地勢図「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用)



第2図 首都圏連絡幹線道路と上武道路予定路線(←)
首都圏整備委員会『首都圏整備』(1959)に加筆

整備の長期展望」に「上武国道」の呼称と整備が明記されるに至った。

上武道路の建設は昭和45年度に着手され、平成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用が開始された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間(7工区)が、平成20年6月に暫定2車線で供用開始された。

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)が対象とする8工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7km区間が暫定開通し、全線開通までの最終3.5km区間の発掘調査と工事が進められている。

第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地が多く分布する地域である。群馬県は昭和48年に文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)が調査事業を受託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上泉町まで、③前橋市上泉町から前橋市田口町の現国道17号までの3区間に分けることができる。

埼玉県境から国道50号までの区間では、35箇所(35箇所)の遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行され、平成7年には冊子総集編『地域をつなぐ 未来へつなぐー上武道路埋蔵文化財22年の軌跡ー』が刊行された。この総集編では平野部での発掘調査や「芳郷」の墨書土器出土で話題となった古代勢多郡の芳賀郷、中世「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

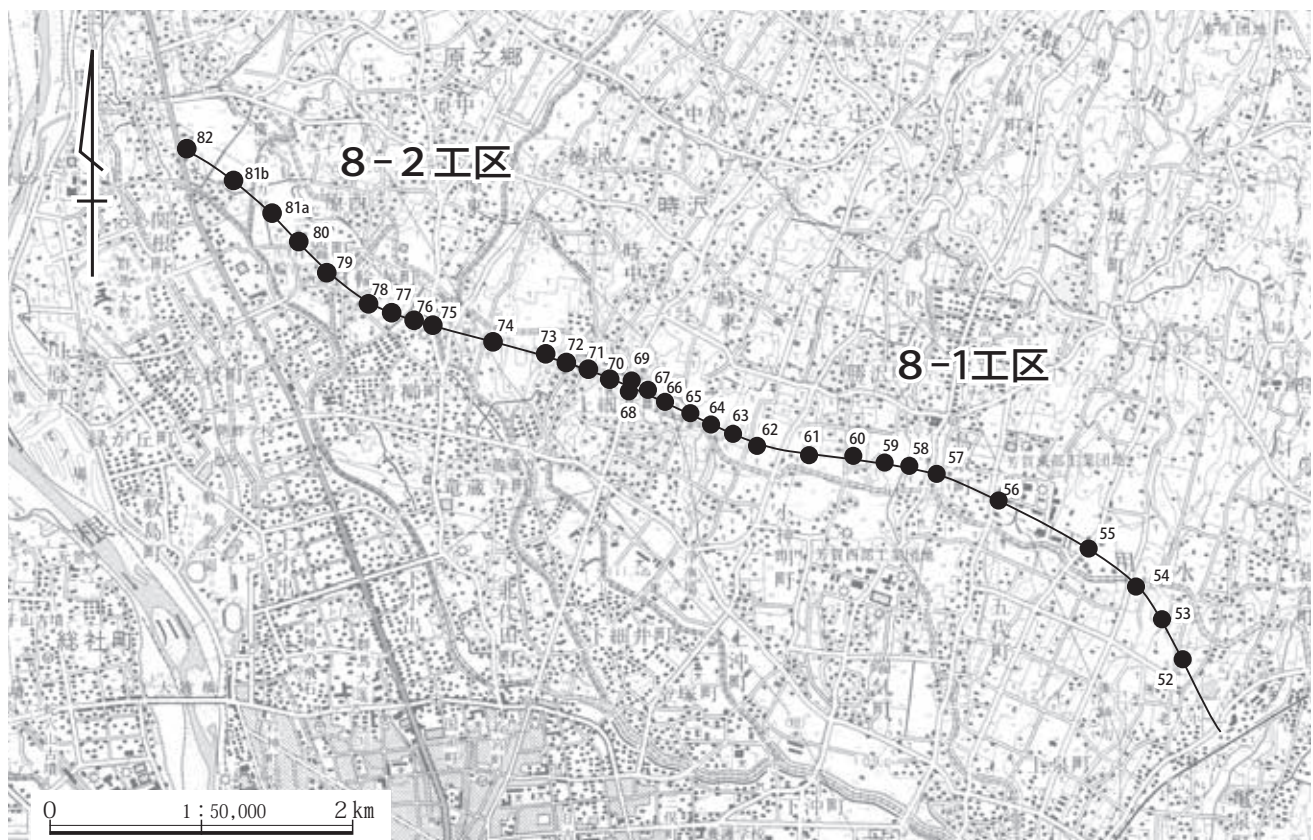
国道50号から前橋市上泉町までは7工区にあたる。ここでは17箇所の遺跡が発掘調査の対象となり、16冊の発掘調査報告書が刊行されている。この区間の発掘調査では、荒砥川の東で検出された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女堀の調査では浅間粕川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手掛かりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

前橋市上泉町から現国道17号までは8工区にあたり、31箇所の遺跡、約40万㎡が埋蔵文化財の調査対象となっている。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が8-1工区、西が8-2工区と呼ばれている。調査は、平成18年度に8-1工区の東端から始められ、工事工程との調整により、平成23年度からは8-2工区の西端である終点の田口下田尻遺跡の調査も開始された。

8-1工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、8-2工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が明らかになった。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器までの遺物が確認された。また広瀬桃ノ木低地帯では最西端の田口下田尻遺跡で大集落が調査され、従来の広瀬川低地帯の遺跡分布の

表1 上武道路8工区遺跡一覧

J K No.	遺跡名	所在地	市町村遺跡番号	調査年度	報告書刊行年度
52b	上泉唐ノ堀遺跡	前橋市 上泉町	00774	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上泉新田塚遺跡群	前橋市 上泉町	00775	平成18・19・20年度	平成23年度
54	上泉武田遺跡	前橋市 上泉町	00773	平成19年度	平成24年度
55	五代砂留遺跡群	前橋市 五代町	00772	平成19年度	平成23年度
56	芳賀東部団地遺跡	前橋市 五代町・鳥取町	00357	平成18・19・20年度	平成24年度
57	鳥取松合下遺跡	前橋市 鳥取町	00776	平成20年度	平成23年度
58	胴城遺跡	前橋市 鳥取町	00041	平成19・20・21年度	
59	鳥取塚田遺跡	前橋市 勝沢町		調査除外	
60	堤遺跡	前橋市 勝沢町	00034	平成20年度	平成24年度
61	小神明勝沢境遺跡	前橋市 小神明町	00778	平成20年度	
62	小神明富士塚遺跡	前橋市 小神明町・上細井町	00403	平成20・21年度	平成23年度
63	東田之口遺跡	前橋市 上細井町	00125	平成20年度	平成23年度
64	丑子遺跡	前橋市 上細井町	00134	平成20年度	平成24年度
65	上細井五十嵐遺跡	前橋市 上細井町	00777	平成20・21年度	平成24年度
66	天王・東紺屋谷戸遺跡	前橋市 上細井町	00131	平成20・21年度	
67		前橋市 富士見町	90094	平成20・21年度	
68	上町・時沢西紺屋谷戸遺跡	前橋市 上細井町	00798	平成21年度	平成24年度
69		前橋市 富士見町	90097	平成21年度	
70	王久保遺跡	前橋市 上細井町・富士見町	00794	平成21・24年度	平成24年度
71	新田上遺跡	前橋市 上細井町	00128	平成24年度	
72	上細井中島遺跡	前橋市 上細井町	00787	平成21・24年度	
73	上細井蟬山遺跡	前橋市 上細井町	00786	平成21・24年度	平成24年度
74	山王・柴遺跡群	前橋市 青柳町	00795	平成21・22・23・24年度	
75	引切塚遺跡	前橋市 青柳町	00434	平成24年度	
76	青柳宿上遺跡	前橋市 青柳町	00325	平成24年度	
77	日輪寺諏訪前遺跡	前橋市 日輪寺町		調査除外	
78	諏訪遺跡	前橋市 日輪寺町	00144	調査除外	
79	川端根岸遺跡	前橋市 川端町	00807	平成24年度	
80	川端山下(道東)遺跡	前橋市 川端町	00808	平成24年度	
81a	関根細ケ沢遺跡	前橋市 関根町	00802	平成24年度	
81b	関根赤城遺跡	前橋市 関根町	00803	平成24年度	
82	田口下田尻遺跡	前橋市 田口町	00804	平成23年度	平成26年度予定



第3図 上武道路8工区の遺跡 (国土地理院1/50000地形図「前橋」平成10年発行を使用)

第1章 調査経過

理解を見直す資料が得られている。

これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、Jが上武、Kが国道を指すJKを冠した遺跡略号が南側の起点から順次算用数字で付されている。8工区も、7工区の最終番号JK52に続けてこの略号を付したが、工区を跨ぐJK52（上泉唐ノ堀遺跡）は7工区分にJK52a、8工区分にはJK52bを付けて区別した。またJK59（鳥取塚田遺跡）は水田遺構が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番としなかった。更に関根遺跡群は関根細ケ沢遺跡、関根赤城遺跡、田口下田尻遺跡に細分されたものの、田口下田尻遺跡を先行してJK82としたことから、関根細ケ沢遺跡にJK81a、関根赤城遺跡にJK81bと付した。

第3節 調査に至る経過

上武道路7工区の発掘調査は平成16年度末で終了した。その後同16年度には国道17号の現道から西の前橋渋川バイパスが着工されたことから、8工区は、開通部分と前橋渋川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声が一段と強まっていた。

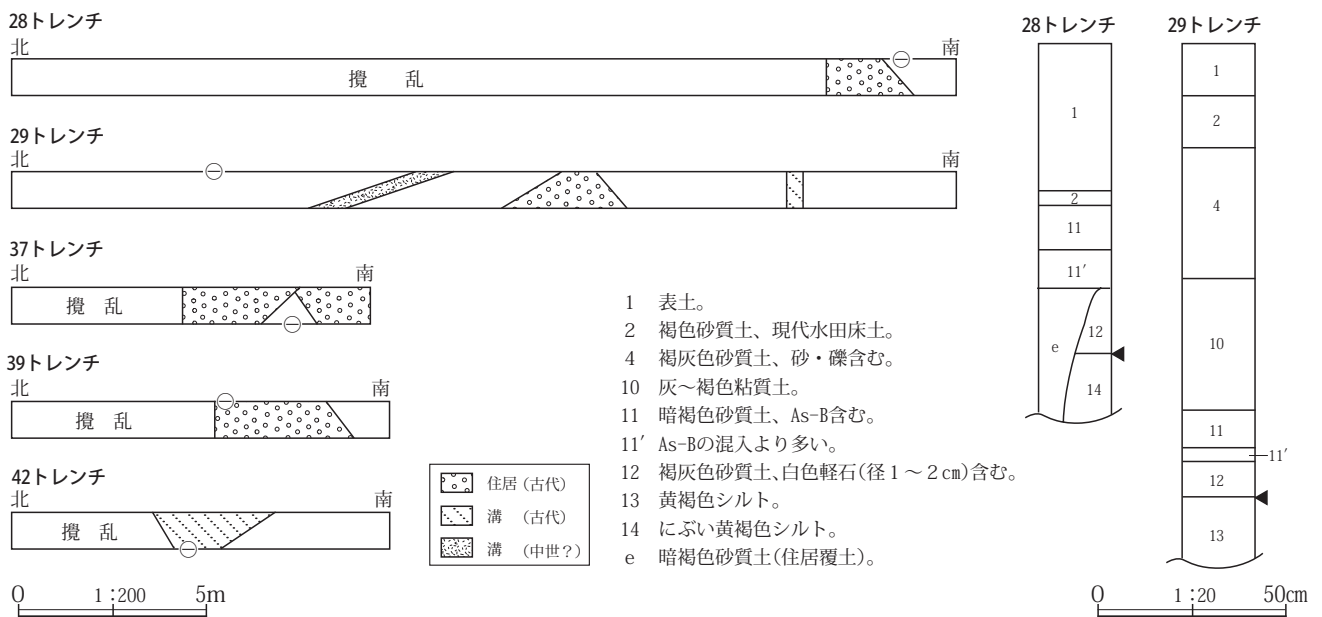
8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着

工準備が起点側から始まった。これまでの調査状況から埋蔵文化財の用地内での包蔵は明確であったため、埋蔵文化財の発掘調査実施のための調整がおこなわれた。

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日付で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月1日～平成29年3月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお「協定書」は、平成18年6月20日付で、調査期間開始を3ヶ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。

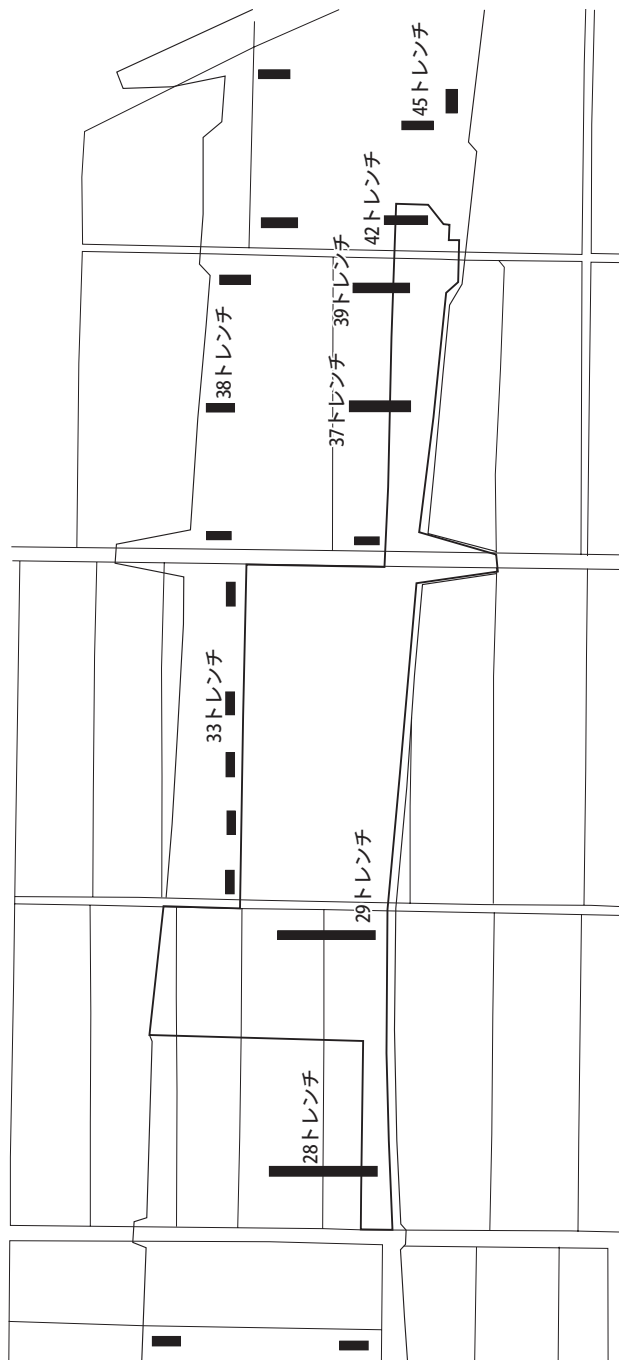
また各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課により、平成18年4・5月、同年8月、同年12月、平成19年8月、同年12月、平成21年1月、同年4月～5月、同年9月、平成22年12月、平成23年、同年8月、同年10月の13回(23年度末現在)に亘って、8工区の試掘調査が実施された。



第4図の1 試掘調査(詳細記録抜粋図)

このうち平成22年12月6日～20日の試掘調査が本遺跡を含む前橋市田口町・関根町・川端町を対象として実施されたものである。この試掘調査は延長1.3kmほどの対象地内に、約1m幅の試掘トレンチ47ヶ所を設定、掘削し、遺構検出面の認定と遺構の有無、遺物出土の有無の確認が行われた。このうち西半部を中心とした砂利採集に伴い遺構が失われた区域も見られた。

この試掘調査で、本遺跡では前橋市関根町66・69-2・70・71-1・71-2・173-1・178・179番地の8区画に対して28～47トレンチの20本のトレンチを設定し、試掘調



第4図の2 試掘調査（トレンチ配置及び発掘調査範囲図）

査が行われた。全体として北寄りと東端寄りは砂利採取によって遺構面が壊されていたが、南寄りには28トレンチで古代の住居、29トレンチでは全体に古代の住居、及び古代と中世の可能性のある溝、37・39トレンチで古代の住居、42トレンチで古代の溝が確認され、遺跡として認定され、発掘調査が必要との所見が得られた。

なお、このとき発掘調査とされた区域の中程の関根町68番地は、諸般の事情から試掘調査が施されなかったのであるが、関根町68番地北側の関根町69-2番地は砂利採取に伴い遺構面の壊されていたものの、東西両側の関根町66・70・179番地での試掘成果から遺跡の遺存の可能性が考慮されたため遺跡地に含まれている。しかしこの区域(仮3区)は本調査に伴って平成24年4月24日に実施された遺構確認調査で、当該区域は東西両端を除いて遺構が壊されていたことが判明したため、調査対象から除外されている。

さて、この試掘結果と平成18年2月16日付で国土交通省関東地方整備局長、群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長の三者で締結した「協定書」の定めるところにより、平成24年度に本調査が実施されることとなり、平成24年2月26日付けで群馬県教育委員会教育長(文化財保護課)から当事業団へ関根遺跡群(関根細ヶ沢遺跡、関根赤城遺跡)遺跡ほか9遺跡の発掘調査の依頼が出された。

これを受けて、平成24年2月13日付で、国土交通省関東地方整備局長と財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(平成24年4月1日より「公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団」と名称変更されている)理事長との間に発掘調査の委託契約が締結され、当事業団が本遺跡を含む11遺跡の本調査を実施することとなった。当初契約では調査・履行期間は平成24年4月1日～平成25年3月31日であった。

第4節 調査経過

本遺跡の発掘調査は平成24年4月2日に着手し、平成25年3月31日を以て完了している。この間、本格的な調査は4月12日の89区東部の表土掘削より開始され、89区東部(仮1区東部)、89区中西部から90区にかけての区域(仮1区中・西部)、100・91区(仮2区)の区域毎に1面、

第1章 調査経過

2面の調査をそれぞれ実施し、同年8月1日に西寄りの100・91区の遺構の調査終了を以て本遺跡の調査を終了し、同年8月9日の埋戻しの終了を以て発掘作業そのものを完了した。本遺跡は他の上武道路関連12遺跡と共に平成25年3月29日付けで調査完了報告書を提出して全業務を完了している。

本遺跡の当初の調査対象は前橋市関根町地内の10,702.64㎡であった。しかし当遺跡は土砂採取に伴う攪乱が広範囲で認められたため、調査の進捗に伴って随時範囲確認作業を行いながら調査範囲を確定していった。その結果、調査対象面積が1,36.92㎡に減じたことを受けて、調査対象面積の減少に伴う変更契約を平成25年2月1日に締結している。

以下、調査の概要を示す。

平成24年(2012)

【4月】

- 2日 調査担当着任。発掘調査準備着手。
- 9日 掘削請負、土木機械打ち合せ。県教委文化財保護課来跡。
- 10日 現地事務所用地整地開始。地元挨拶回り。
- 12日 調査区圍繞。89区東区(調査段階の仮称「1区」)表土掘削開始。作業員投入開始。国土交通省・県文化財保護課・河本工業(株)・事業団打ち合せ。
- 13日 89区東区記録化(写真撮影)開始。
- 18日 89区東端部調査区範囲確定調査。
- 19日 89区西区・90区(調査段階の仮称「2区」)表土掘削開始。
- 20日 89区東・西区1面表土掘削終了。遺構確認作業開始。
- 24日 89区東区1面遺構確認終了、遺構掘削作業開始。90～91区の間(「仮3区」、関根町68番地)への試掘調査を実施するも、両端を除き遺構なし。
- 25日 89区東区1面全景写真撮影、遺構測量作業。文化財保護課・事業団で仮称3区の調査範囲に関する協議(調査範囲から除外)。
- 27日 89区西区・90区遺構確認終了、遺構掘削開始。

【5月】

- 1日 89区西区・90区1面平面測量。
- 7日 手掘りによる1区2面への掘削及び遺構確認開始。

- 8日 89区西区・90区2面への掘削、基礎整理開始。
- 9日 100・91区(6月1日までは仮称「4区」とした)1面の表土掘削開始。
- 10日 89区東区2面遺構確認終了。同遺構掘削、遺構記録(測量、写真撮影)開始。89・90区2面遺構確認(11日まで)。
- 89区西区・90区2面の表土掘削終了、遺構確認。
- 14日 89区西区・90区2面遺構掘削開始。100・91区1面の表土掘削終了、遺構確認、遺構掘削開始。
- 16日 100・91区1面遺構確認・掘削終了。同遺構記録作成開始。同区2面遺構掘削・記録化開始。
- 17日 100・91区1面遺構記録終了。同2面への機械掘削開始。
- 18日 国土交通省渋川土木工事事務所・河本工業(株)・事業団、進入路・工事用道路に関する打ち合せ。100・91区2面遺構確認開始(～21日)。

- 21日 100・91区2面目への機械掘削終了。同区東部でAs-B畠検出作業。
- 23日 As-B畠検出作業終了に伴い100・91区2面の調査中断。
- 25日 出土遺物整理。

【6月】

- 6日 89区東区2面Hr-FP混土層除去し遺構確認、住居址検出
- 26日 89・90区空中写真撮影。

【7月】

- 2日 100・91区2面調査再開。同区As-B混土下掘り下げて遺構確認(3日まで)。(公財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団昼間部長、笠原氏来跡。
- 4日 100・91区2面遺構掘削、記録化再開。
- 23日 89・90区2面遺構掘削完了。
- 25日 89・90・100・91区2面全景写真撮影。
- 26日 89・90区下位層確認作業(27日まで)。
- 27日 89区東区埋戻し開始。
- 30日 89区東区埋戻し完了。89区西側埋戻し開始。

【8月】

- 1日 100・91区2面調査完了。
- 2日 100・91区埋戻し開始。
- 8日 89・90区埋戻し完了。
- 9日 100・91区埋戻し完了。

第2章 調査の方法

第1節 グリッド・調査区の設定

1 グリッドの設定

① 概要

グリッドの設定は、上武道路の一般国道50号との交差点以北の区域の発掘調査にあたっては国家座標IX系統を使用した統一のグリッドを設定することとした。しかし同区域のうち前橋市上泉町地内の市道07-136号線を境として南東側と北西側に分離される7工区と8工区では、世界測地系適用のための測量法(昭和24年6月3日法律第188号)の改正(平成13年6月12日法律第53号)に伴い、7区が日本測地系によるものを用いているのに対し8区は世界測地系によるものを用いているので付記しておく。

② 大グリッドの設定(第6図)

上述のように、上武道路全長8.2kmに亘る8工区では、世界測地系を用いた全域を覆う大グリッドを設定した。大グリッドは東西1km、南北1kmの大きさを1グリッドとして、第6図に示したように上武道路の路線に沿って東南東から西北西に向かって設定し、当該大グリッドにはNo.1～No.13の大グリッド番号を付した。

なお、関根赤城遺跡が入る大グリッドは、No.11・12大グリッドである。No.11大グリッドは、世界測地系IX系のX=48000～49000、Y=-69000～-70000、No.12大グリッドはX=48000～49000、Y=-70000、-74000をその範囲としている。

③ 中グリッドの設定(第6図)

中グリッドは大グリッドを東西10区画、南北10区画に分割して設定したものであり、1大グリッドの中に中グリッド100区画が設定されている。中グリッド1区画は100m四方である。

中グリッドの番号は南東隅をNo.1として、No.1の北側はNo.11、その北側をNo.21というようにNo.91までの番号を付し、この下一桁が1となるグリッドからはそれぞれ西側に向かってNo.1からNo.10、No.11からNo.20というように番号を付し、北西隅がNo.100になるようにグリッド番号が付けられている。

④ 小グリッドの設定(第6図)

小グリッドは1区画5m四方であり、中グリッドを東西方向、南北方向にそれぞれ20区画に区切ったものである。小グリッドは1中グリッドに対して400小グリッドが設定されている。

小グリッド番号は北側へ1から20の算用数字を付し、西側に向かってはAからTまでのアルファベットを附して、「A-1」「T-20」のようにグリッド番号を表記している。

2 調査区の設定

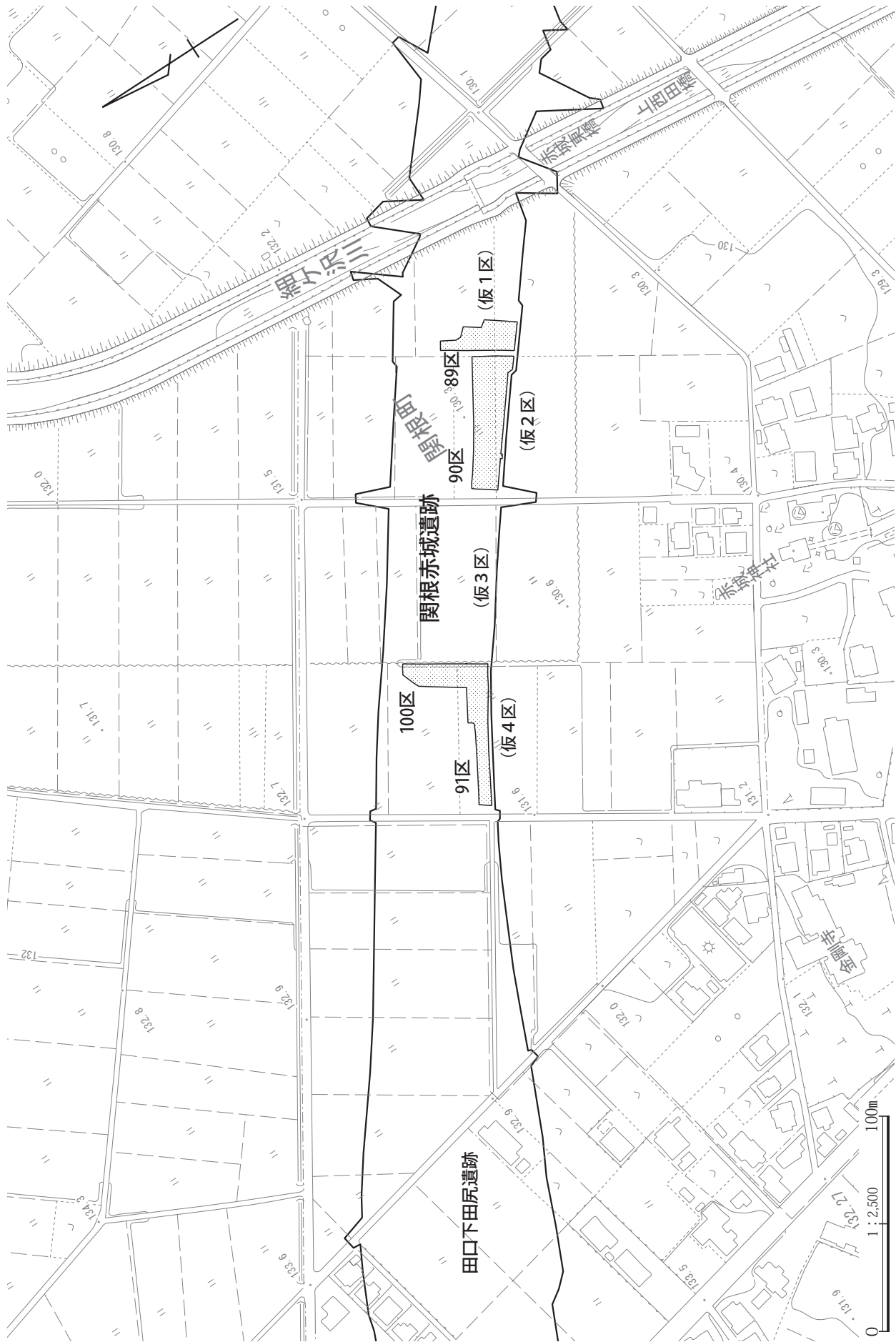
本遺跡に於いて区は、中グリッドを指している。該当する中グリッドはNo.11大グリッドのNo.89・90・100中グリッドと、No.12大グリッドのNo.91中グリッドである。区の呼称は大グリッドと中グリッドの「No.」を省略して、「89区」「90区」「100区」「91区」とした。

正式にはこの中グリッドに基づく89・90・100・91区を用いているのであるが、発掘調査に当たっては便宜上仮の調査区を設定した。この仮の調査区は実質的掘削範囲によるものであり、89区のうち水路によって区画される、89区東部を「仮1区」(以下区名称の混同を避けるため、便宜上の調査区には「仮」の字を付することとする)、水路以西の89区中・西部と90区を「仮2区」、100・91区を「仮4区」とした。また第1章第4節に記したように発掘対象範囲から除外したが、仮2区と仮4区の間を「仮3区」と呼称した。調査日誌を含む調査記録には89・90・100・91区と共に、この仮1～4区が「1区」「2区」「3区」「4区」として記されている。

3 遺跡番号

上武道路関連の調査遺跡では、遺跡毎に上武道路の略称記号「JK」を付した遺跡番号で管理されている。関根赤城遺跡は当初「関根遺跡群」として「JK81」が付されていたが、関根遺跡群は関根細ヶ沢遺跡と本遺跡に分けられたため、関根細ヶ沢遺跡には「JK81a」が付され、本遺跡の遺跡番号は「JK81b」が付された。

なお、本遺跡の遺跡略号は遺跡番号を以て充てられている。



第5図 関根赤城遺跡調査区周辺図 (前橋市役所発行 1/2500前橋市現市形図(平成21年測図)を使用)

第2節 発掘調査の方法

1 調査範囲

本遺跡の発掘調査範囲は、本調査開始後の確認調査によって大幅に減ぜられ、実質的な調査範囲は89・90区(仮1・2区)と100・91区(仮4区)の東西2ヶ所であり、上武道路建設予定地の南寄りに限られた範囲に限定された。

その調査範囲は仮1区はNo.11大グリッドNo.89中グリッド内に在り、東はH-7小グリッド、西はM-3小グリッド、南はK-2小グリッド、北はJ-7小グリッドの範囲に在って、その調査区は北北東-南南東方向に延びる長方形を呈している。

仮2区はNo.11大グリッドNo.89・No.90中グリッドの範囲内に在り、東はNo.89中グリッドK-7小グリッド、南は同M-4小グリッド、西はNo.90中グリッドC-12小グリッド、北は同B-14小グリッドの範囲に在って、西北西-東南東方向に延びる長方形を呈している。

仮4区はNo.11大グリッドNo.100中グリッドからNo.12大グリッドNo.91中グリッドの範囲内に在る鉤形の調査区であり、東側がNo.11大グリッドNo.100中グリッドL-8小グリッド、南側が同P-1小グリッド、西側がNo.12大グリッドNo.91中グリッドG-8小グリッドに在り、北端は西端に近いF-9小グリッドに在った。

2 掘削

調査対象面のうち1面は後述の11層付近、2面は同じく15層付近で確認された。

各面までは、表土層或いは間層を建設機械(バックホー)を用いて掘削し、人力にて遺構確認面を精査し、或いはテフラや氾濫土壌を除去して遺構面の表出を行っ

た。火山テフラや洪水層土で覆われたものを除く遺構は、その中央を基本として随時土層断面観察位置を設定して掘削し、また遺構の半載、ベルトの設定或いは湧水対策用の溝掘削を利用して土層観察を行った。

3 記録

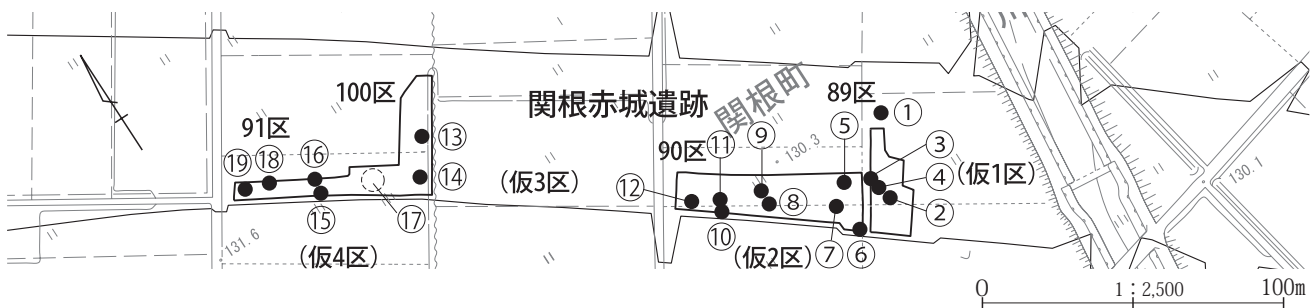
出土した遺構は記録保存の資料とするため、適宜平・断面図の測量、出土遺物の取り上げ位置の記録と遺物の取り上げ、或いはデジタルカメラによるカラー写真撮影と、ブローニー版によるモノクロ写真撮影、及び空中写真撮影を実施した。

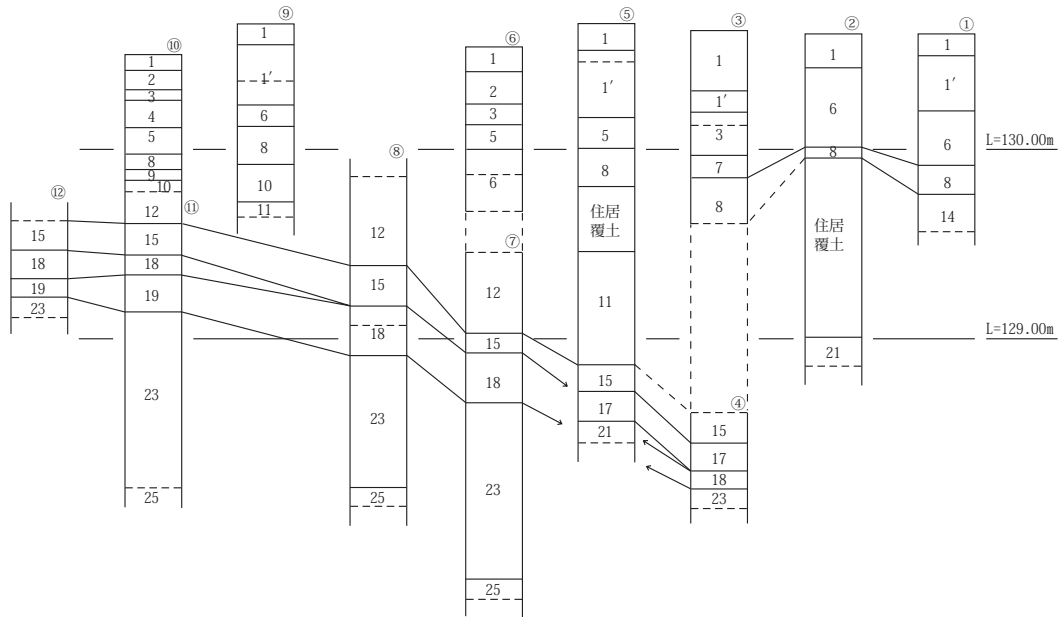
第3節 基本土層

本遺跡の土層は位置により堆積状況に違いがあるが、これらをまとめて25層に分層した。

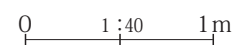
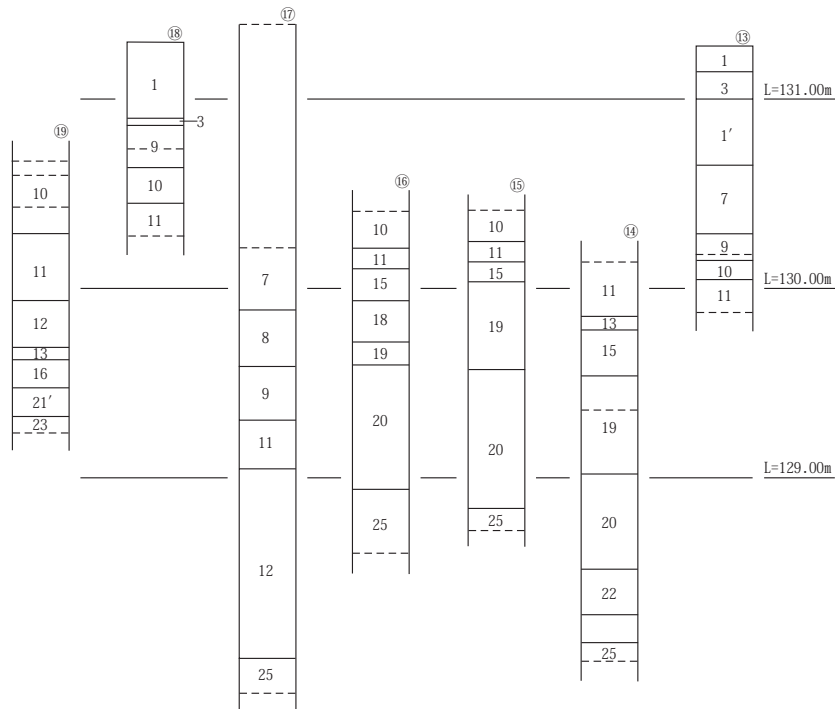
本遺跡の基盤層は利根川の旧流路に起因すると思慮される砂利層、礫層等の土層群(22~25層)である。この砂利・礫層の上には川砂層(21)、更にシルト質の土壌(17~20層)が乗り、この上にAs-C(16)が堆積している。このAs-C層の上には、As-C(15層)を含む土壌が乗り、更に灰褐色シルト(14)を挟んでHr-FA層(13層)が堆積し、Hr-FA層の上にHr-FA泥流(12層)、Hr-FP泥流等の土層群(10・11層)が乗る。このHr-FP泥流層群の上にはAs-Bを混入する土層(8・9)が乗り、更にやや淡い色を呈する砂質土(6・7層)、更に暗褐色等の土壌(4・5層)が乗るが、利根川に近い本遺跡の西に在る田口下田尻遺跡等では、この6・7層と4・5層の土層群の間にAs-A泥流が堆積している。そしてその上に近現代の水田土壌を含み、一部客土の積まれた土層(1~3層)が乗っている。

なお、1層は人為的埋め土(1')と耕作土(1)に、21層は砂層(21)と砂質土(21')に分けられる。





- | | |
|--|-----------------------|
| 1 表土、現耕作土(客土)。 | 14 灰褐色シルト。 |
| 1' 人為的埋土、ローム土或いは礫等含む。 | 15 黒褐色～黒色土、As-C混入。 |
| 2 水田耕作土、灰褐色土(5YR5/2)。 | 16 AS-C。 |
| 3 水田床土、酸化鉄凝縮層含む。 | 17 黒褐色土。 |
| 4 にぶい褐色土(7.5YR5/3)～暗褐色土(10YR3/3)、Hr-FP含む。 | 18 褐色シルト。 |
| 5 暗褐色土(10YR3/3)。 | 19 黄褐色シルト。 |
| 6 灰～褐灰色砂質土。 | 20 黄色橙色シルト。 |
| 7 灰～褐色粘質土。 | 21 灰～灰褐色砂。 |
| 8 暗褐色砂質土(10YR3/4)、As-B含む。 | 21' 黄褐色細砂質土(10YR5/6)。 |
| 9 暗褐色土(10YR3/4)～黒褐色土、As-B多量に含む。 | 22 砂利層。 |
| 10 褐色土～褐灰色砂質土(5YR5/1)、Hr-FP泥流土起源。 | 23 円礫層。 |
| 11 にぶい黄褐色・暗黄褐色シルト、Hr-FP泥流土起源。 | 24 黄褐色中粒砂。 |
| 12 Hr-FA泥流、Hr-FAと砂利または明褐色シルト質土(7.5YR5/6)の互層。 | 25 砂利層、部分的に大型の礫混入。 |
| 13 Hr-FA。 | |



第7図 関根赤城遺跡基本土層図

第3章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的・地質的環境

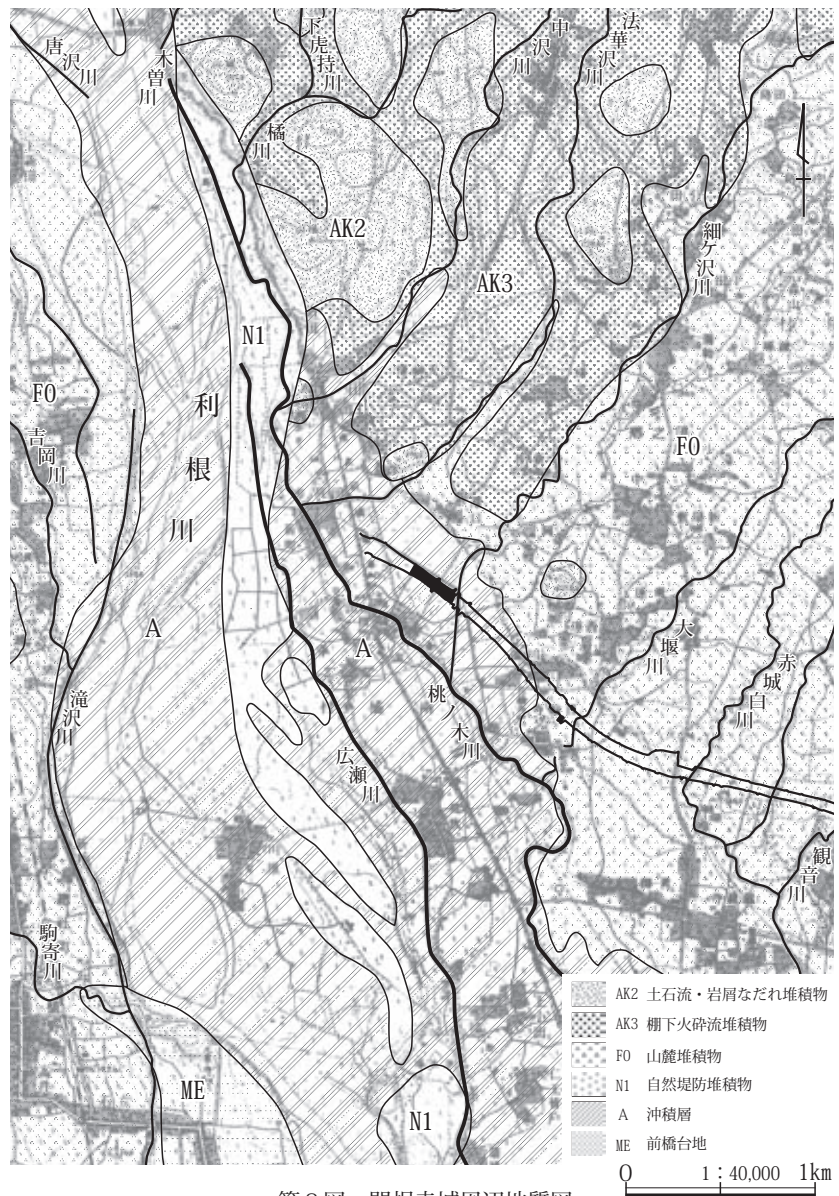
1 地理的環境

本遺跡は群馬県で中毛^{ちゅうもう}と呼称される県中南部に在り、関東平野の北西最奥近くに位置している。遺跡地は県庁の北5.4kmに在って、水田地帯の中に立地し、南には前橋市関根町、北東には同市川端町の集落が近接する。付近は戦後しばらくまでは典型的な農村地帯であり、一般国道17号が南北に縦断しているが、この道路は鉄道馬車を敷設した国道として建設され、昭和29年までは路面電車が通行していた。その後本遺跡付近は、本遺跡の南西に群馬大学荒牧キャンパスが建設され、西方の群馬県総合スポーツセンターが建設されたが、同センター以南を中心として区域には住宅団地が順次造成されて、一般国道17号沿いには商業施設も展開するなど、市街化が進んできている。

関根赤城遺跡は、北東側の更新世に発達した火山である赤城山と、西側の坂東太郎と称される関東を代表する大河である利根川との間に挟まれた平坦地に立地している。本遺跡の位置は赤城山麓までは300mと至近であり、利根川迄の距離は1km程である。本遺跡の在る利根川左岸部では利根川に沿って幅250m内外の自然堤防(NI)が形成され、その内側、赤城山麓との間の幅1kmの間には沖積地(A)が広がる。この沖積地の中には、いずれも利根川の分流である広瀬川が自然堤防沿いに、桃ノ木川が沖積地を縦断するように南南東方向に流下している。一方、赤城山麓の縁辺は河成段丘が形成され、かつて利根川が赤城山に沿って流れていたことを示しているが、赤城山麓は赤城白川、細ヶ沢川等の中小河川で開析

され、本遺跡付近以南の地域では白川扇状地等が形成されている。これらの中小河川はいずれも桃ノ木川に合流しているが、本遺跡付近では沖積地に降りた後、直線的に短く桃ノ木川に流入するものの、下流域では屈曲して桃ノ木川に並走するようしてから桃ノ木川に合流している。

第8図に記したように、平野部における近代の集落は、沖積地中の微高地等に営まれている。また耕地は畑作と水田耕作に分かれるが、これらの水田耕作は近世中期の



第8図 関根赤城周辺地質図

(国土地理院1/25000地形図「八木原」「前橋」を使用し群馬県地質図作成委員会(1995)所載図に加筆した)

前橋藩主酒井忠孝による用水の整備を伴う新田開削によるものであり、従前は桃ノ木川や小河川沿いに細々と営まれていたに過ぎなかった。

2 地質的環境

第8図に示した範囲に見られる地質は何れも中期或いは後期更新世から完新世にかけて形成されたもので、赤城山の西麓には赤城火山の造山活動第3期の火山噴出物であり、溶結凝灰岩等から成る棚下火砕流堆積物(A k 3)、南麓には礫、砂、ロームから成る山麓堆積物(F o 赤城白川扇状地)があって、棚下火砕流堆積物の分布範囲を中心に赤城火山の第2期の火山噴出物である溶結凝灰岩・火山岩塊・火山礫・火山灰から成る土石流・岩屑なだれ堆積物(A k 2)が見られる。また、榛名山の東麓には山麓堆積物(F o)が見られ、一部に火山岩塊・火山礫・火山灰から成る榛名山の火山活動第5期に区分される行幸田・陣馬岩屑なだれ堆積物(H r y)が見られる。

また繰り返しになるが、本遺跡を含む赤城山麓に接する地域から利根川の流域にかけては沖積層(A)が見られ、利根川左岸側には砂等の自然堤防堆積物(N I)が南北に連なっている。この他、第8図左下の山麓堆積物(F o)と沖積層(A)の間には前橋台地上部ロームの堆積段丘面に区分される前橋砂礫層、2万5千年前の浅間山の山体崩壊に伴って形成された前橋泥石流堆積物、寒冷期の沼沢地の存在を窺わせる前橋泥炭層などで構成される前橋台地(M E)が見られる。なお、本遺跡においても前橋砂礫層、前橋泥石流層が埋没しているものと思慮される。

第2節 歴史的環境

1 旧石器時代

上述のように本遺跡は沖積地に立地し、本遺跡西側の自然堤防も2.3万年以降に形成されたとされているので、本遺跡を含む平野部に当該時期の遺物の包蔵されている可能性はないものと思慮される。

また第9図に示した範囲で旧石器時代の遺跡として確認されるのは赤城山麓地域に限られ、上武道路関連の調査で発掘調査された上細井中島遺跡(18)、上細井蟬山遺跡(19)、青柳宿上遺跡(21)など僅かな遺跡を確認できたに過ぎなかった。

2 縄文時代

第9図に示した本遺跡周辺地域の縄文時代の遺跡も、赤城山麓或いは榛名山麓に分布し、平野部での分布は見られない。また図示した範囲では晩期の遺構は確認されていない。

周辺域で確認された遺跡のうち、最も古い時期のものは渋川市の旧北橋村域の城山遺跡(90)の早期の集落遺跡で、竪穴住居6軒などが確認されている。

前期の遺跡は赤城山麓に多く分布し、田中田遺跡(48)、下庄司原西遺跡(57)、下庄司原東遺跡(58)、陣馬遺跡(59)、上庄司原東遺跡(63)、愛宕山遺跡(71)、芝山遺跡(87)、下箱田向山遺跡(91)で集落遺跡が確認され、その他、瓜山遺跡(88)で集石遺構、上庄司原北遺跡(64)でも遺物包含層が確認されている。

中期の遺跡では瓜山遺跡(88)、旭久保遺跡(33)で集落遺跡が確認されている。

3 弥生時代

第9図に示した範囲の弥生時代の遺跡の分布範囲は赤城山麓(赤城白川扇状地)に限られ、遺跡数も少ない。

確認された遺跡には引切塚遺跡(23)、原之郷山ノ後遺跡(30)、旭久保遺跡(33)、田中田遺跡(48)がある。

4 古墳時代

古墳時代に入ると遺跡の分布域が広がり、平野部にもその分布が及んでいる。本遺跡付近はもともと沖積地であることから、古い時代の遺跡は遺残していないものと認識されていたが、平成18年からの田口下田尻の発掘調査により、平野部に於いても古墳時代前期の集落遺構が確認されるに至り、従来の認識が覆われている。

さて古墳時代の墳墓では、前期の遺構として下庄司原東遺跡(58)と上庄司原西遺跡(63)で方形周溝墓が確認されているが、前者では前方後方形周溝墓が確認されている。また、古墳は第9図に示した範囲では赤城山麓上の荒井古墳(42)、横室古墳(44)、田口八幡I遺跡(50)、塩原塚古墳(53)、田口冠木遺跡(54)、上庄司原東遺跡(63)、陣馬古墳(67)が知られる。また近隣地区では唯一の前方後円墳とされる九十九山古墳(29)や終末期古墳が八幡遺跡(55)、陣馬遺跡(59)、上庄司北原遺跡(64)で調査されている。

第3章 地理的・歴史的環境

一方集落では、前期のものとして田中田遺跡(48)、下庄司原東遺跡(58)があるが、田口下田尻遺跡(2)・田口上田尻遺跡(3)遺跡では70軒の住居が確認され拠点集落であったことが窺われる。古墳時代中期は田口下田尻遺跡(2)・田口上田尻遺跡(3)で25軒の住居址が確認されている。また後期の集落は田口下田尻遺跡(2)・田口上田尻遺跡(3)で13軒、田中田遺跡(48)で住居24軒が確認されているものの、他は小規模なもので下庄司原遺跡(58)、東篠遺跡(89)が確認できていないに過ぎない。

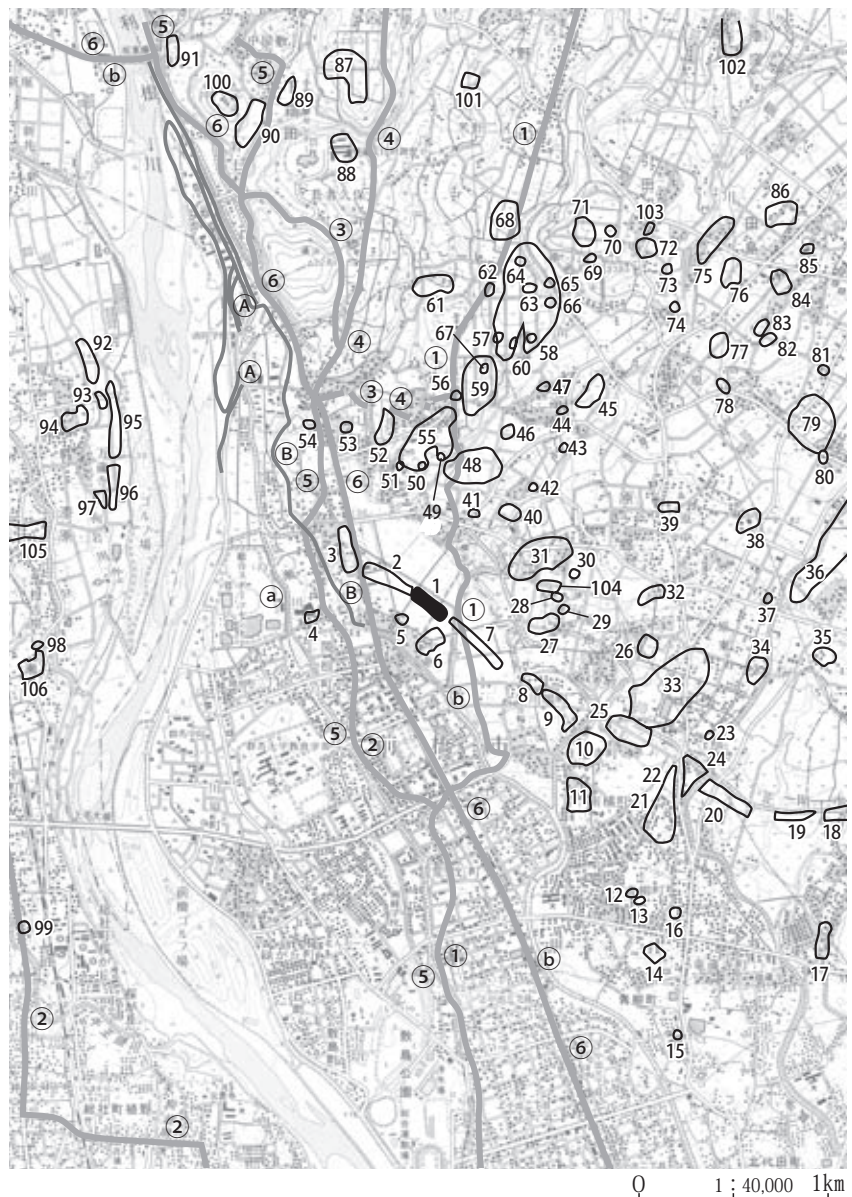
5 古代

第9図に示した範囲に於ける古代(飛鳥・奈良・平安時代)における行政区分は、延喜式や倭名類聚抄によれば利根川左岸(東側)は上野国勢多郡(評)に属し、同図北寄りには真壁郷(里)、中から南にかけては時澤郷(里)であり、本遺跡付近も時澤郷に含まれていたと考えられる。一方、利根川右岸は群馬郡(車評)に属し、本遺跡の対岸の一角は桃井郷(桃井里)に比定されている。

第9図に示した範囲でも古代の遺跡は広く分布しているが、平野部(低地部)に於いては田口下田尻遺跡(2)・田口上田尻遺跡(3)で7世紀から10世紀にかけての集落が営まれている。また田口八幡Ⅰ遺跡(50)・田口八幡Ⅱ遺跡(49)などに集落が確認され、赤城山麓部に於いては下庄司原東遺跡(58)、陣馬遺跡(59)で集落が確認されている。また利根川の対岸側(右岸部)では利根川の河岸段丘上に立地する万蔵寺廻り遺跡(97)では、本遺跡の集落に近い10世紀後半から11世紀の集落が確認されている。

この他、田口下田尻遺跡(2)では8世紀と10世紀の鍛冶遺構が確認されている。

なお、平安時代末、源平盛衰記の承安4年条に上州荒牧で源義経が伊勢三郎義盛と主従となったという記述がある。この荒牧は現前橋市荒牧町付近という説もある。



第9図 関根赤城遺跡周辺遺跡分布図
(国土地理院1/25000地形図「前橋」「渋川」を使用し加筆)

6 中世

中世の所産と認識されている遺跡は少なく、田口上田尻遺跡(3)で15～16世紀の屋敷遺構と見られる遺構群などが確認されている外は、上庄司原東遺跡(63)で土壇墓、城山遺跡(90)で炭窯、十二廻り遺跡(93)では中世に特徴的な梁間1間型の掘立柱建物や土壇墓への転用が見られる大型の井戸などが確認されている程度である。

鎌倉時代の様相は不明であるが室町時代のもので想定されている遺構には、本遺跡の南に、南面を桃ノ木川に託す単郭方形の関根の寄居(146)がある。「寄居」という呼称は室町時代にあつて関東管領上杉氏家宰の長尾氏と関連があるとされるものであるが、関根の寄居に拠った

武士集団は南東の荒牧を領していたと考えられる荒蒔氏の配下にあったものと推定される。荒蒔氏は長尾氏の元に総社衆に含まれていたことが永禄3年(156)の関東幕注文に知られていることから寄居の説を裏付けるものと思われる。

また本遺跡の東側には近世の沼田往還が近接して走っていたが、本遺跡南方の厩橋(前橋)と北方の利根郡の沼田は共に戦略拠点であり、この街道の元となる道路が中世においても付近を走っていたものと想定される。

7 近世以降

近世には利根川左岸側は前橋藩領であり、右岸側は高崎藩領、天領などへの変遷ののち前橋藩領になっている。本遺跡周辺は一貫して農村地帯を形成し、現在のそれぞれ

れの大字(町)が1ヵ村を形成していた。

本遺跡周辺の近世以降の遺跡として特筆されるものは、天明3年(1783)の浅間山の大噴火、所謂「浅間焼け」のとき発生した泥流被災地の遺跡がある。利根川右岸の吉岡町十二廻り遺跡(93)、桑原田遺跡(95)、阿久津遺跡(96)、万蔵寺廻り遺跡(97)では泥流に埋没した水田址や用水堀、中町遺跡(92)では畑地などが検出され、一方、左岸側の前橋市田口町では桃ノ木川の東側の田口下田尻・上田尻遺跡(2・3)で屋敷跡、耕地復旧の天地返し痕跡である復旧溝群などが検出されている。

また、本遺跡付近には北方の利根地方や、更には新潟方面へ続く街道や旧国道等が敷設され、広瀬川、桃ノ木川を利用した用水の敷設も見られた。

表2 周辺遺跡一覧

分布番号	市長村遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考	文献
1	803	関根赤城遺跡				○		○	○	○		
2	804	田口下田尻遺跡				○	○	○	○	○		
3	755	田口上田尻遺跡				○	○	○	○	○		
4	771	関根内山遺跡								○	江戸畑9・溝1	28
5	145	関根の寄居遺跡							○		中世砦	5
6	146	関根寄居遺跡				○						
7	802	関根細ヶ沢遺跡				○	○	○	○	○		
8	808	川端道東遺跡					○	○	○	○		
9	807	川端根岸遺跡			○	○	○	○	○	○		
10	144	諏訪遺跡				○						
11	767	南橋東原遺跡					○	○				
12	120	神明B遺跡				○						
13	121	神明古墳				○						
14	722	青柳宿前遺跡						○				
15	414	青柳寄居遺跡						○			水田時期不明確	29
16	119	神明A遺跡				○						
17	141	八幡山の砦							○			
18	787	上細井中島遺跡	○	○				○	○	○	上武道路調査 中近世掘立建物・井戸	3
19	786	上細井蟬山遺跡						○			上武道路調査	3
20	795	山王・柴遺跡		○		○	○	○		○	上武道路調査 近世土壌墓・水田	3・4
21	325	青柳宿上遺跡	○	○		○					昭和27年群大史研調査	24
22	122	宿上遺跡				○						
23	434	引切塚遺跡		○	○	○						25・26
24	123	引切塚古墳				○						25
25	90107	旭久保Ⅲ遺跡		○		○		○				13
26	90116	原之郷東原遺跡		○			○	○				
27	90032	原之郷善養寺遺跡				○						
28		富士見塚古墳										
29	90037	九十九山古墳				○					前方後円墳1	9・29
30	90033	原之郷山ノ後遺跡			○							
31	90035	金山城址							○			
32	90140	原之郷後原遺跡		○			○	○				
33	90031	旭久保遺跡		○	○	○	○	○	○	○	中近世溝	13・15・18
34	90034	原之郷下白川遺跡				○						19・20
35	90098	念仏遺跡						○				

第3章 地理的・歴史的環境

分布番号	市長村遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考	文献
36	90073	時沢中島遺跡				○						
37	90030	原之郷白川遺跡				○						18
38	90115	原之郷鰻沢遺跡		○				○				17
39	90141	原之郷中子遺跡					○					
40	90088	岩之下遺跡		○		○	○	○			縄文土坑3、古墳住居9、奈良～平安住居15・掘立2、他	9
41	90028	横室東沢口遺跡				○						
42	90020	荒井古墳				○					円墳1	9・30
43	36	寄居遺跡		○					○	○	中・近世溝4	9・30
44	90013	横室古墳				○					円墳10	9・30
45	90027	田中遺跡		○								
46	90122	横室中遺跡		○		○					不明土坑	14
47	90024	横室薊遺跡		○								
48	90025	田中田遺跡		○	○	○		○			縄文前期住居1・中期住居1、古墳前期住居37・後期住居24・溝1、他	8
49	1021(11B7)	田口八幡Ⅱ遺跡					○	○			平安住居24	31
50	1021(11B6)	田口八幡Ⅰ遺跡				○	○	○			円墳1、平安住居14	30
51	159	南橋35号墳				○						
52	150	千手堂遺跡		○								
53	149	塩原塚古墳				○					円墳1	13・30
54	16B11	田口冠木遺跡				○					円墳4	27
55	160	八幡遺跡		○		○						
56	148	天神窪遺跡		○								
57	90022	下庄司原西遺跡		○		○	○	○			縄文前期住居4・土坑5、終末期円墳1、平安住居20・溝2・ピット	10
58	90022	下庄司原東遺跡		○		○	○	○			縄文前期住居5・中期住居1、古墳前期住居1・方形周溝墓3・前方後方形周溝墓1・後期住居9、奈良～平安住居41、他	
59	90019	陣場遺跡		○		○	○	○			縄文前期住居7・中期住居15・後期住居2・土坑50以上、終末期円墳2、平安住居73	10
60	90018	狐塚古墳		○		○						
61	151	入田遺跡										
62	90022	上庄司原西遺跡				○	○	○			古墳時代前期方形周溝墓1・中期溝1・終末期住居6、奈良～平安時代住居6	10
63	90022	上庄司原東遺跡		○		○	○	○	○		縄文前期住居4、後期円墳2、平安住居7・土坑墓1、中世墓1	10
64	90022	上庄司原北遺跡		○		○					縄文前・中期包含層・土坑群、終末期円墳1	10
65	90017	庄司原古墳				○						
66	90129	上庄司原1号墳				○						
67	90019	陣場古墳				○					終末期円墳1	9・30
68	90045	米野下原遺跡		○		○						
69	90016	初室古墳				○						
70	90021	十二山裏遺跡										
71	90026	愛宕山遺跡		○			○	○			縄文前期住居11・土坑150、平安炭窯1・道路1	12
72	90093	日向遺跡							○			
73	90014	森山古墳				○						
74	90015	道上古墳				○						
75	90012	引田高橋遺跡		○		○						
76	90091	由森遺跡		○				○				
77	90090	久保田遺跡		○		○	○	○				
78	90029	原之郷鎌塚遺跡		○		○						
79	90134	原之郷慶阿弥遺跡		○		○						
80	90113	小沢的場遺跡		○		○		○			中近世溝	12
81	90036	鎌塚古墳				○						
82	90003	田島上の台遺跡				○						

第2節 歴史的環境

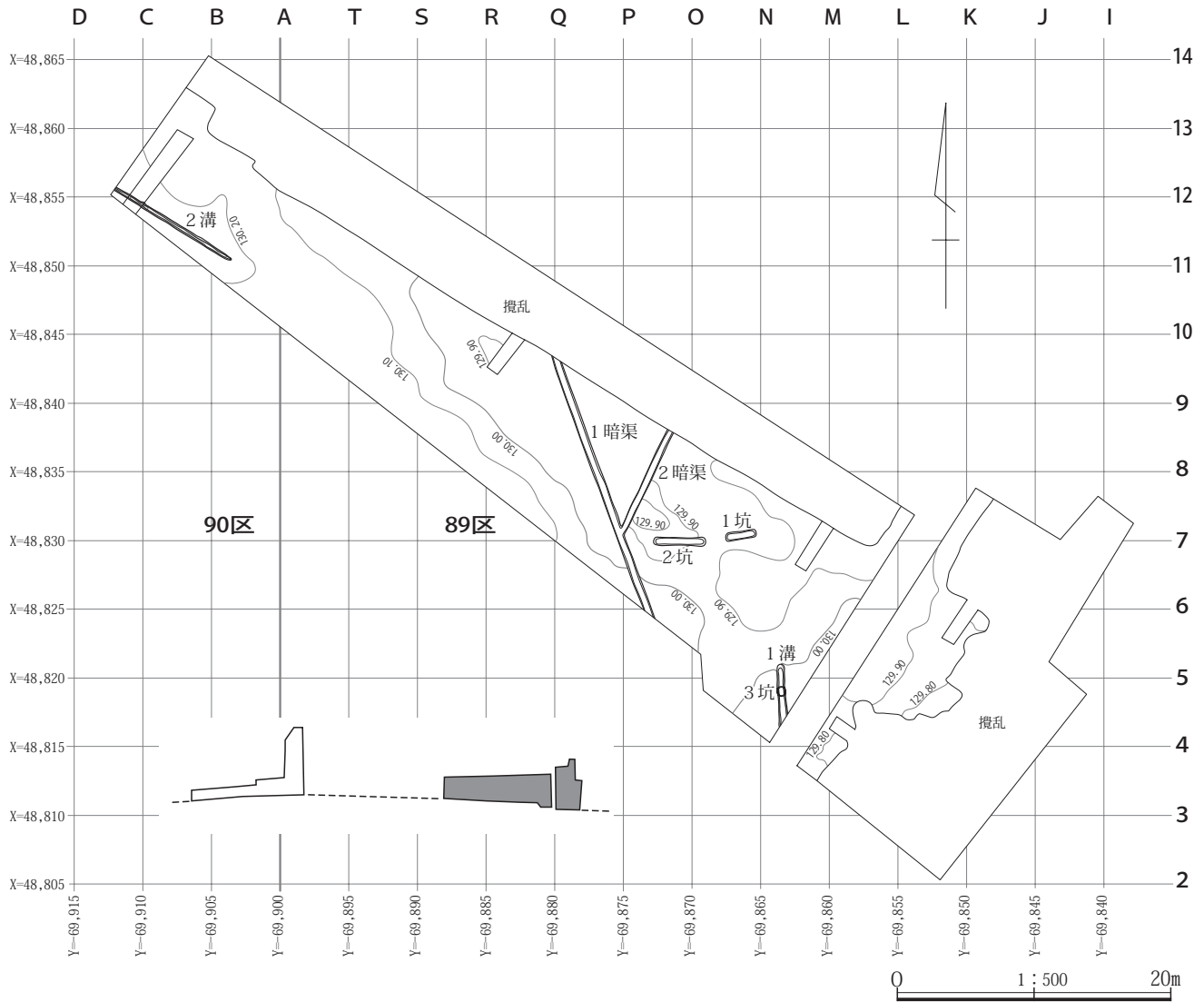
分布番号	市長村遺跡番号	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考	文献
83	90002	田島城址										
84	90089	白川遺跡		○		○	○	○				
85	90001	田島清水遺跡		○		○						
86	90096	長泉寺遺跡		○				○				11
87	H0028	芝山遺跡		○				○	○		縄文前期住居16・中期住居1・土坑73・陥し穴4	23
88	H0034	瓜山遺跡		○							縄文中期住居2・土坑12	22
89	H0030	東篠遺跡		○		○	○	○	○	○	縄文前期集石遺構4・土坑12、古墳～平安住居6、中・近世掘立10・柵列2・道路1	22
90	H0031	城山遺跡		○			○	○	○		縄文早期住居6・集石6・土坑31、平安住居1、中世炭窯5、箱田城掘跡	21
91	H0023	下箱田向山遺跡		○				○	○	○	縄文前期住居7・中期住居1・土坑24・溝1、中世溝8・土坑26・墓壇1・柵列2	2
92	156	中町遺跡						○	○	○	近世水田43・溝6	11
93	169	十二廻り遺跡						○	○		中世井戸1、不明土坑16・井戸2・溝2・ピット24	11
94	74	長塩屋敷遺跡							○		堀、土居	6
95	169	桑原田遺跡								○	水田102・溝21・畑8	11
96	169	阿久津遺跡								○	近世水田80・溝20・道3・土坑8	11
97	170	万蔵寺廻り遺跡					○	○		○	平安住居42・掘立2、不明土坑272・井戸1・溝10・ピット37・竪穴遺構1	11
98	134	瀬来遺跡		○		○			○		堀、堀切、土居、戸口	6
99	162	大下遺跡		○		○	○				縄文時代土坑1、古墳時代溝1、奈良時代住居3・溝1、不明土坑2	
100	H0128	箱田城							○			
101	90039	丸山城							○			
102	90067	漆窪城							○			
103		森山城(引田城)										
104		九十九山の砦										
105	136	漆原城							○			
106		瀬来城									近世	
①		沼田往還									近世	
②		佐渡奉行街道									近世	
③		清水越往還									近世	
④		前橋中道									近世	
⑤		清水新道									明治時代	
⑥		国道17号線									現在	
㉑		広瀬川									近世以降	
㉒		桃ノ木川									近世以降	
㉓		広瀬用水										
㉔		桃ノ木用水										

参考文献

- 群馬県埋蔵文化財調査事業団(2011)『阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・半田常法院遺跡』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(1990)『下箱田向山遺跡』
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(2010)『年報』第29集
- 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(2011)『年報』第30集
- 群馬県文化事業振興会(1978)『群馬県古城墓址の研究』上巻
- 渋川市教育委員会(1990)『市内遺跡Ⅲ』
- 南橋村誌編纂委員会(1955)『南橋村誌』
- 富士見村教育委員会(1986)『富士見遺跡群 田中田遺跡 窪谷遺跡 見眼遺跡』
- 富士見村教育委員会(1987)『富士見遺跡群 向吹張遺跡 岩之下遺跡 田中遺跡 寄居遺跡』
- 富士見村教育委員会(1991)『富士見地区遺跡群 陣場・庄司原古墳群』
- 富士見村教育委員会(1993)『富士見地区遺跡群 赤城遺跡・長泉寺遺跡』
- 富士見村教育委員会(1994)『富士見地区遺跡群 愛宕山遺跡 初室古墳 愛宕遺跡 日向遺跡』
- 富士見村教育委員会(1997)『平成8年度 村内遺跡』
- 富士見村教育委員会(1998)『平成9年度 村内遺跡』
- 富士見村教育委員会(1998)『旭久保B遺跡』
- 富士見村教育委員会(1998)『小沢の場遺跡』
- 富士見村教育委員会(1998)『原之郷鰻沢遺跡』
- 富士見村教育委員会(1999)『平成10年度 村内遺跡』
- 富士見村教育委員会(2001)『平成12年度 村内遺跡』
- 富士見村教育委員会(2002)『平成13年度 村内遺跡』
- 北橋村教育委員会(1989)『北橋遺跡群発掘調査報告書Ⅰ 城山遺跡』
- 北橋村教育委員会(1990)『北橋遺跡群発掘調査報告書Ⅱ 東篠遺跡・瓜山遺跡』
- 北橋村教育委員会(1993)『北橋遺跡群発掘調査報告書Ⅲ 芝山遺跡』
- 前橋市(1971)『前橋市史』第1巻
- 前橋市教育委員会(1988)『引切塚遺跡』
- 前橋市教育委員会(1993)『引切塚Ⅱ遺跡』
- 前橋市教育委員会(2004)『文化財調査報告書』第35集
- 前橋市教育委員会(2007)『年報』第38集
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団(1984)『青柳寄居遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団(2000)『田口八幡Ⅰ遺跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査団(2000)『田口八幡Ⅱ遺跡』

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 1面の遺構と遺物



第10図 89・90区1面の遺構

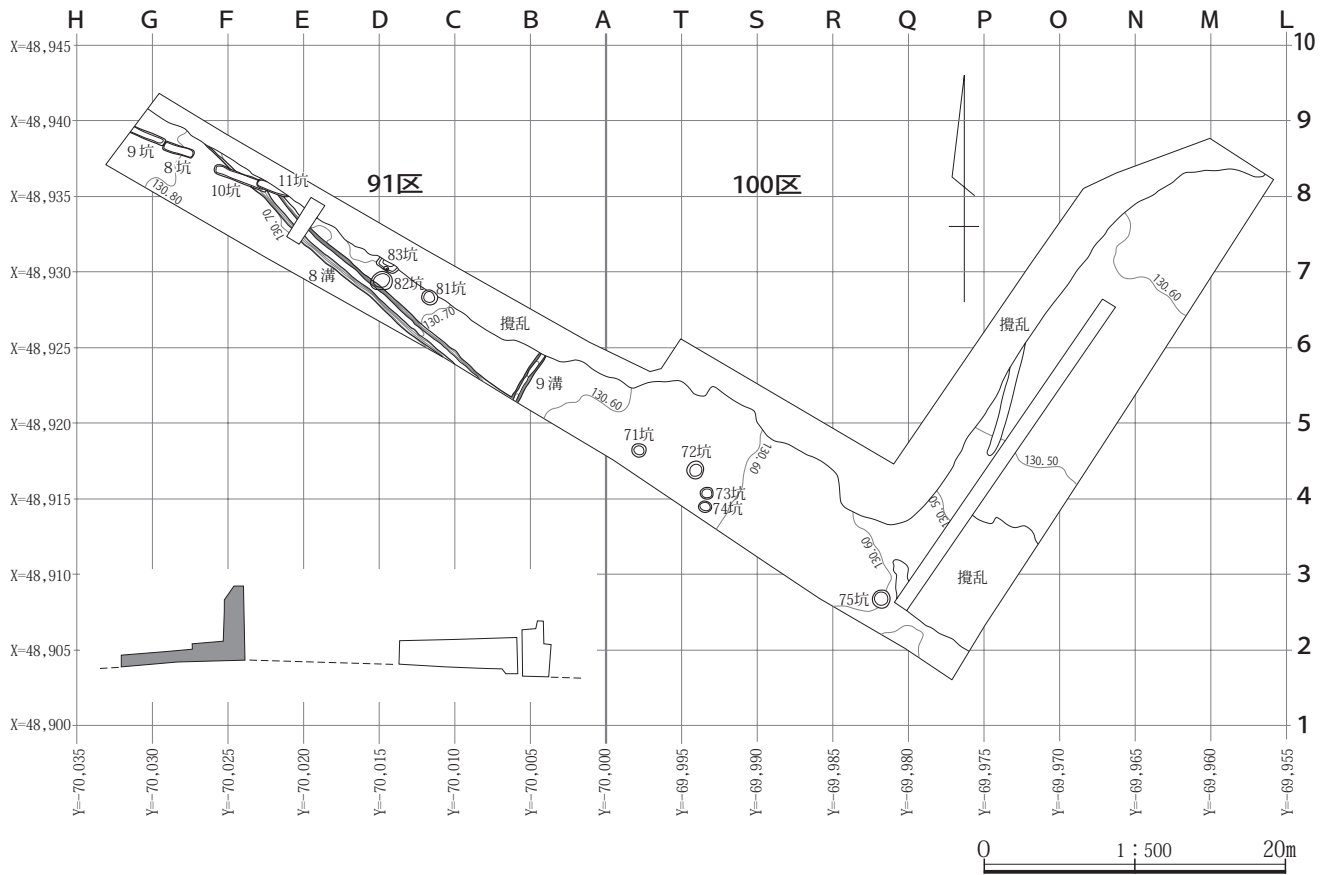
1 1面の遺構

本遺跡の調査第1面は基本土層11層土付近を確認面とした。中世面として報告するが、1面の遺構からの出土遺物は無いが、出土してもわずかな量であったため各遺構の細かい時期は特定できず、またテフラによる時期区分は天明3年(1783)であることもあって、本遺跡に於いては中世から近世中期までの遺構の分割が困難であった。以下に報告する各遺構は凡そ中世と認識されるものの、確実に近世の所産ではないと断定するには至ること

はできない。明らかに近世以降の所産と判断された遺構を除いては中世のものとして報告することとする。

さて、1面に於いては溝4条、土坑15基を確認、調査した。

このうち東西に離れて設定された調査区のうち、東側の89・90区(仮2区)では溝2条と土坑3基を確認、調査した。このうち調査区南西隅に在った2号溝は自然の土地の傾斜に沿って掘削されたものと判断されるものであるが、凡そ中世の所産と判断される。また土坑3基は調



第11図 100・91区1面の遺構

査区中東部に在って直交する南北或いは東西方向に主軸を置いて掘削され、調査区東部の仮2区南東隅に確認された水路と目される1号溝もこれらの土坑と同じ軸線上に掘削されている。何れも凡そ中世の所産と想定される遺構であるが、1号溝と土坑群は或いは、往時までその痕跡が残されていた条里方眼に依拠して掘削された遺構である可能性が考えられる。

一方、西側の調査区である100・91区(仮4区)では溝2条と土坑12基が遺存しているが、東南を隅とする鉤形の調査区の南寄りにその分布は限られている。これらの遺構のうち溝遺構は調査区西部の91区にのみ確認されており、凡そ北西-南東方向の8号溝とこれに垂直に接す

る9号溝があるが、これらの溝も先の2号溝同様に土地傾斜に合わせて掘削されたものと考えられ、共に凡そ中世の所産と認識されるものである。また土坑群は何れも凡そ中世の所産と想定されるもので、そのプランには円形のものや短冊形や長方形のものがあり、前者は東寄りの100区に5基、西側の91区に7基が分布しているが、その分布に規則性を見ることはできない。また短冊形や長方形の土坑は91区西部にやや集まって分布し、それらは西北西-東南東方向に、やや南に膨らみを持つ緩やかな弧状を呈するライン上に掘削され、土地区画の境に掘削された可能性が考慮される。

(1面)

2 溝

1号溝(第12図、PL. 2)

位置 89区M-4・5グリッド。89区中部南東寄り、仮2区南東隅部に在る。

方位 N-88°-E

規模 確認長4.16m、幅60cm、深さ12cm

形状・構造 南側が調査区外に出ているので全容は確認できなかったが、調査範囲では凡そ南北に直線的に走行し、箱堀状を呈する。

埋没土 灰オリーブ色土だが、上下層の間に酸化鉄層が形成される。

重複 3号土坑と重複し、本溝が切られている。

出土遺物 僅かな量の土師器片が得られたに過ぎなかった。

所見 掘削意図は特定されなかった。またその時期は確認面と覆土から推して凡そ中世の所産と判断される。

2号溝(第12図、PL. 2)

位置 90区A~C-11・12グリッド。90区(仮2区)北西部に位置する。

方位 N-58°-W

規模 確認長9.92m、幅35cm、深さ14cm

形状・構造 西側が調査区外に出ているので全容は確認

できなかったが、調査範囲では凡そ西北西-東南東方向に直線的に走行し、横断面形は丸底を呈する。

埋没土 黄灰色・暗褐色土で覆われる。

重複 他遺構との調査区は見られなかった。

出土遺物 僅かな量の土師器・須恵器片を出土したに過ぎなかった。

所見 本溝の掘削意図は確認できなかった。またその時期も特定できず、確認面と覆土から推して凡そ中世の所産と判断されるに過ぎない。

8号溝(第13図)

位置 91区B~F-5~8グリッド。91区、仮4区西部に位置する。

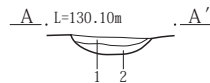
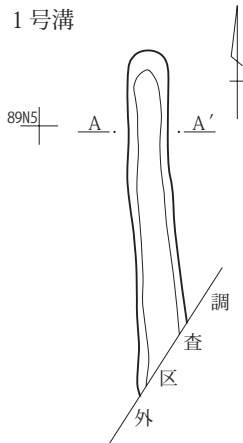
方位 N-46°-W

規模 確認長26.2m、幅110cm、深さ29cm

形状・構造 本溝は東西両側が調査区外に出ているため全容は詳らかでないが、調査範囲に於いて本溝は調査区北側より入り、西寄りで僅かに反時計回りに屈曲している。

埋没土 褐色~暗褐色土。上位にAs-Bが入る。

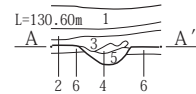
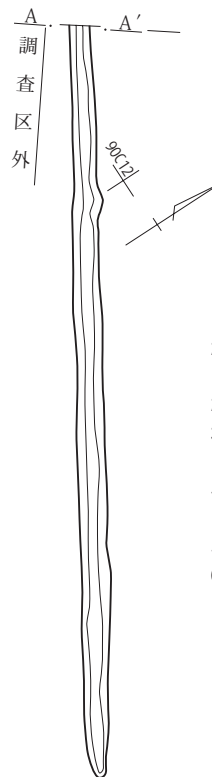
1号溝



1号溝

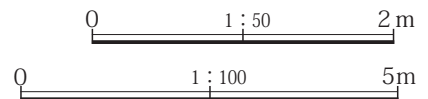
- 1 灰オリーブ色土(5Y5/3) 炭化物を少量含む。炭化物 1個/20cm²。
- 2 灰オリーブ色土(5Y5/3) 1層とほぼ同じだが、酸化鉄が多い。

2号溝



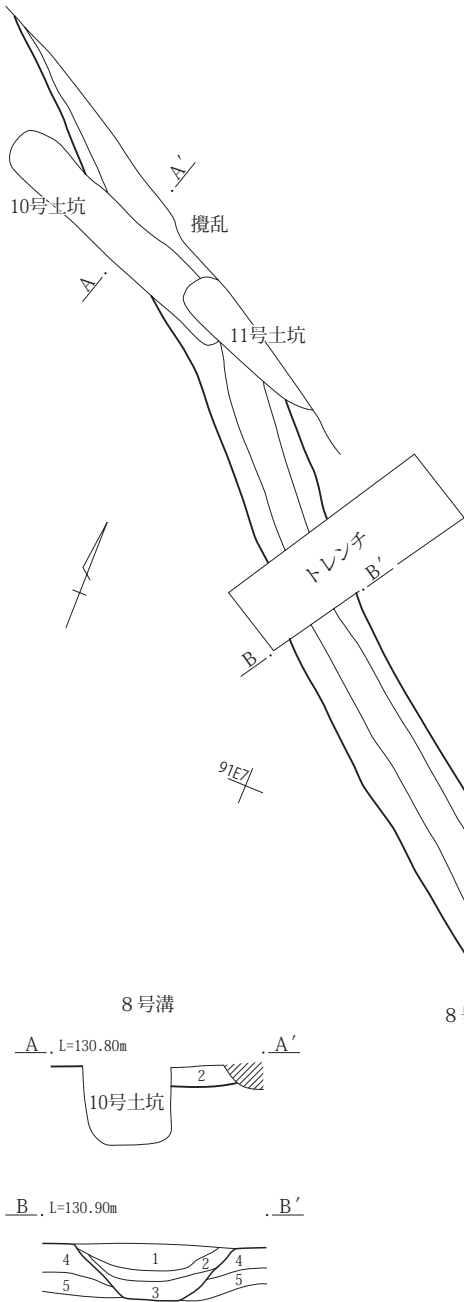
2号溝

- 1 表土(基本土層1層)。
- 2 オリーブ黒色土(7.5Y3/2) 現代水田の床土。
- 3 暗赤褐色土(5YR3/3) 水田床土下酸化鉄層(固く締まっている)。
- 4 褐灰色土(7.5YR4/1) 砂が流れ込んで堆積した状況である。
- 5 黄灰色土(2.5Y4/1)シルト質。
- 6 暗褐色土。



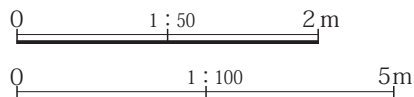
第12図 1・2号溝

8・9号溝



8号溝

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ロームブロック、As-Bを僅かに含む。φ 5mmのFP軽石粒を僅かに含む。ややブロック状の土で固さがある。
- 2 褐色土(7.5YR4/4) φ 1～5cmのFP軽石粒を1個/5cm²。
- 3 暗褐色土(7.5YR3/4) 4層に含まれているFP軽石粒が、壁(立ち上がり付近)際に流れ込んでいる。サラサラした土。
- 4 上位部分がある。
- 5 にぶい黄褐色シルト(基本土層11層)。



重複 東端で9号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 少量の須恵器片を出土が見られた。

所見 本溝は比較的大型の溝であったが、流水の痕跡はなく、掘削意図は特定できなかった。またその時期も確認面と覆土から凡そ中世の所産と判断されるに過ぎなかった。

9号溝(第13図、PL. 2)

位置 91区A～B-5グリッド。89区東部、仮4区中央やや西寄りに位置する。

方位 N-35°-E

規模 確認長3.58m、幅58cm、深さ26cm

形状・構造 北側は攪乱に切られ、南側は調査区外に出るため全容は確認できなかったが、調査範囲では凡そ北東-南西方向に直線的に走行し、箱堀状を呈する。

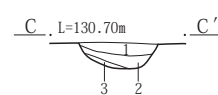
埋没土 黒褐色土主体とする。Hr-FP含む。

重複 8号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 土師器・須恵器片を各1点出土したに過ぎなかった。

所見 本溝も流水の痕跡はなく、掘削意図も確認できなかったが、8号溝に直交して在るため、8号溝との関係が想定される。またその時期は確認面と覆土から推して凡そ中世の所産と判断される。

9号溝



9号溝

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) φ 1～5mmのFP軽石粒を含む。砂が混じっていて、一部ブロック状に堆積している。
- 2 黒褐色土(7.5YR3/2) 粘性あり。1層と同じだが粘性があり、FP軽石粒はほとんど混入していない。
- 3 明褐色土(7.5YR5/6) 壁からの崩落土が堆積したものと2層が混じっている。

調

査

区

外

9号溝

第13図 8・9号溝

(1面)

3 土坑

1号土坑(第14図、PL. 3)

位置 89区N7グリッド。89区中部やや東寄り、仮2区東部に位置する。

方位 N-80°-E

規模 長軸225cm、短軸58cm、深さ38cm

形状・構造 プランは短冊形を呈し、掘削箱形を呈する。

埋没土 Hr-FPを含む暗褐色土。

重複 他遺構との重複はないが、後述の2号土坑と140cm程隔たってほぼ同一軸の線上に位置している。

出土遺物 土師器・灰釉陶器片等僅かな遺物を出土したに過ぎなかった。

所見 掘削意図は不明だが、中・近世に多く見られる形状を呈し、貯蔵穴の可能性が考慮される。本土坑の時期は特定できなかったが確認面と覆土から推して凡そ中世の所産と判断される。

2号土坑(第14図、PL. 3)

位置 89区N6~O7グリッド。89区中部やや東寄り、仮2区東部に位置する。

方位 N-88°-E

規模 長軸380cm、短軸56cm、深さ55cm

形状・構造 短冊形のプランを呈し、箱形を呈する。

埋没土 Hr-FPを含む黒褐色土だが、炭化物を含み、下位層にその量は多い。

重複 他遺構との重複は無いが、上述のように1号土坑とほぼ同一軸線上に位置している。

出土遺物 少量の土師器・須恵器片を出土したに過ぎなかったが、この中には黒色土器碗の出土も見られ、鉄滓1点の出土もあった。

所見 掘削意図は不明であり、覆土に炭化物が入る特徴があるが、1号土坑と同様貯蔵穴の可能性が考慮される。また縦列に短冊形または長方形プランの土坑は地境に沿って配置されるケースも見られるが、本遺跡付近は早く圃場整備が入っているため確認できていない。なお、本土坑の時期は特定できなかったが、確認面と覆土から推して凡そ中世の所産と判断される。

3号土坑(第14図、PL. 3)

位置 89区M4グリッド。89区中部南東寄り、仮2区南東隅部に位置する。

方位 N-6°-E

規模 長軸72cm、短軸58cm、深さ19cm

形状・構造 円形に近い楕円形のプランを呈し、掘削形態は井筒形を呈する。

埋没土 粘性の弱い灰色土。

重複 1号溝と重複し、これに切られている。

出土遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 掘削意図は不明であり、その時期は確認面と覆土から推して凡そ中世の所産と判断される。

100区の土坑群(第15・16図、PL. 3)

位置 表3参照。71~74号土坑は100区西部、仮4区中程のS3~T4に集中して在り、75号土坑は100区・仮4区南東隅部に単独で在る。

方位 表3参照。

規模 表3参照。

形状・構造 71~75号土坑は円形を呈し、井筒形の掘削形態を呈する。

埋没土 [記録なし]

重複 何れも単独で在る。

出土遺物 71号土坑で土師器片1点を出土したのみで、他の土坑からの出土遺物は得られなかった。

所見 掘削意図は不明であり、その時期は確認面と覆土から推して凡そ中世の所産と判断されるに過ぎない。

91区の土坑群(第15・16図、PL. 3・40)

位置 表3参照。91区の土坑群は91区中部、仮4区西寄りに在る81~83号土坑と、91区西部、仮4区西端部に在る8~11号土坑の2グループに分けられるが、後者は西北西-東南東のライン上に乗る。

方位 表3参照。

規模 表3参照。

形状・構造 81・82号土坑は円形、83号土坑は方形状、8~11号土坑は短冊形を呈する。井筒形または箱形を呈し、何れも掘削底面は平底状を呈する。

埋没土 8~11号土坑は黒褐色土、暗褐色土、にぶい褐色土等で埋まり、何れの土坑もHr-FPと少量の炭化物

を含む。他の土坑の覆土の記録は残せなかった。

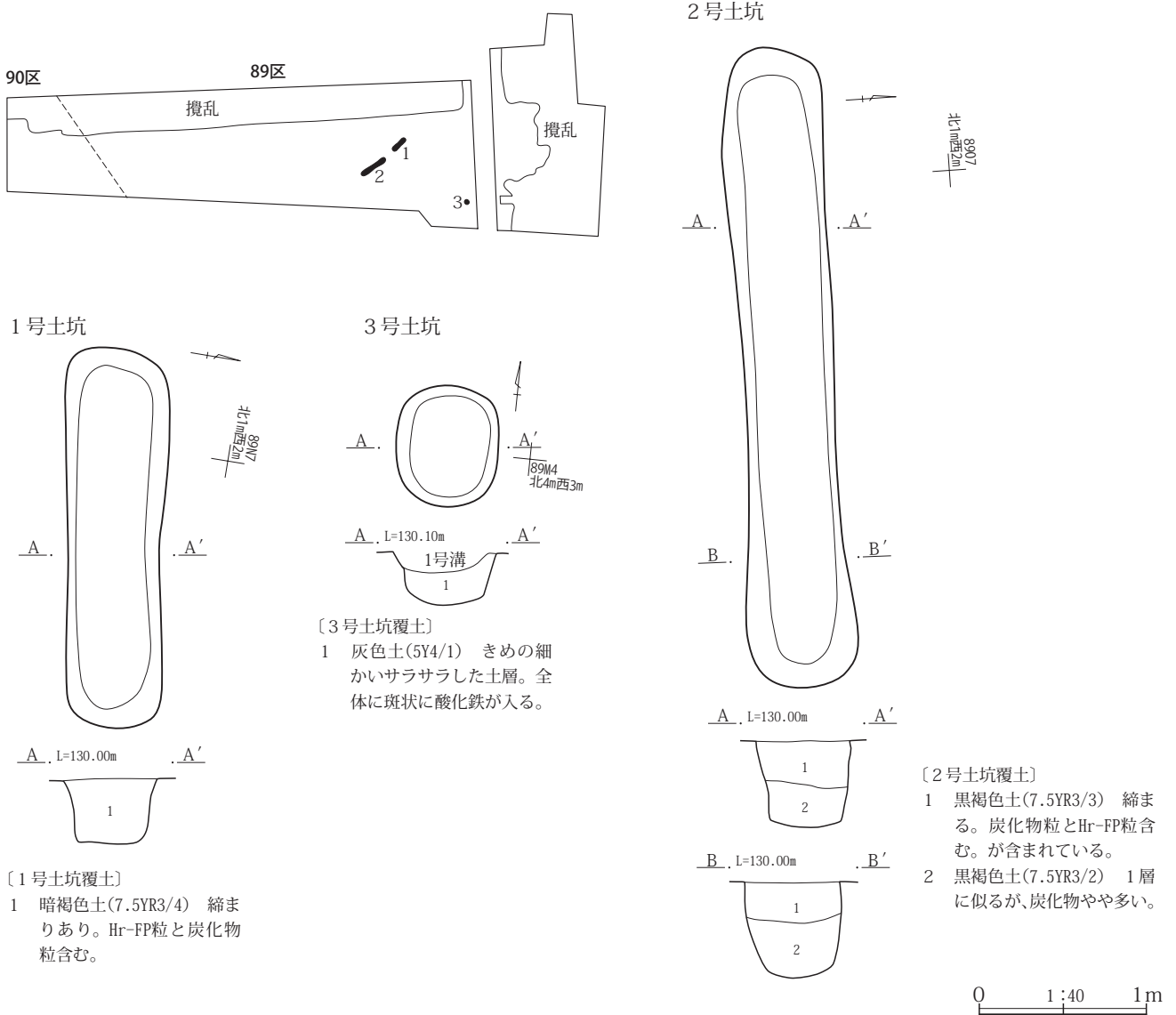
重複 81～83号土坑は単独で在る。8・9号土坑、10・11号土坑はそれぞれ重複するが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 8号土坑で土師器片と少量の須恵器片、9号土坑から僅かな土師器片、10号土坑から僅かな土師器・須恵器片、11号土坑からは有孔石製品(2)、82号土坑では羽釜(3)と丸瓦(4)及び僅かな灰釉陶器片、鉄滓1点の出土が見られたが、他の土坑からの遺物の出土は見られなかった。

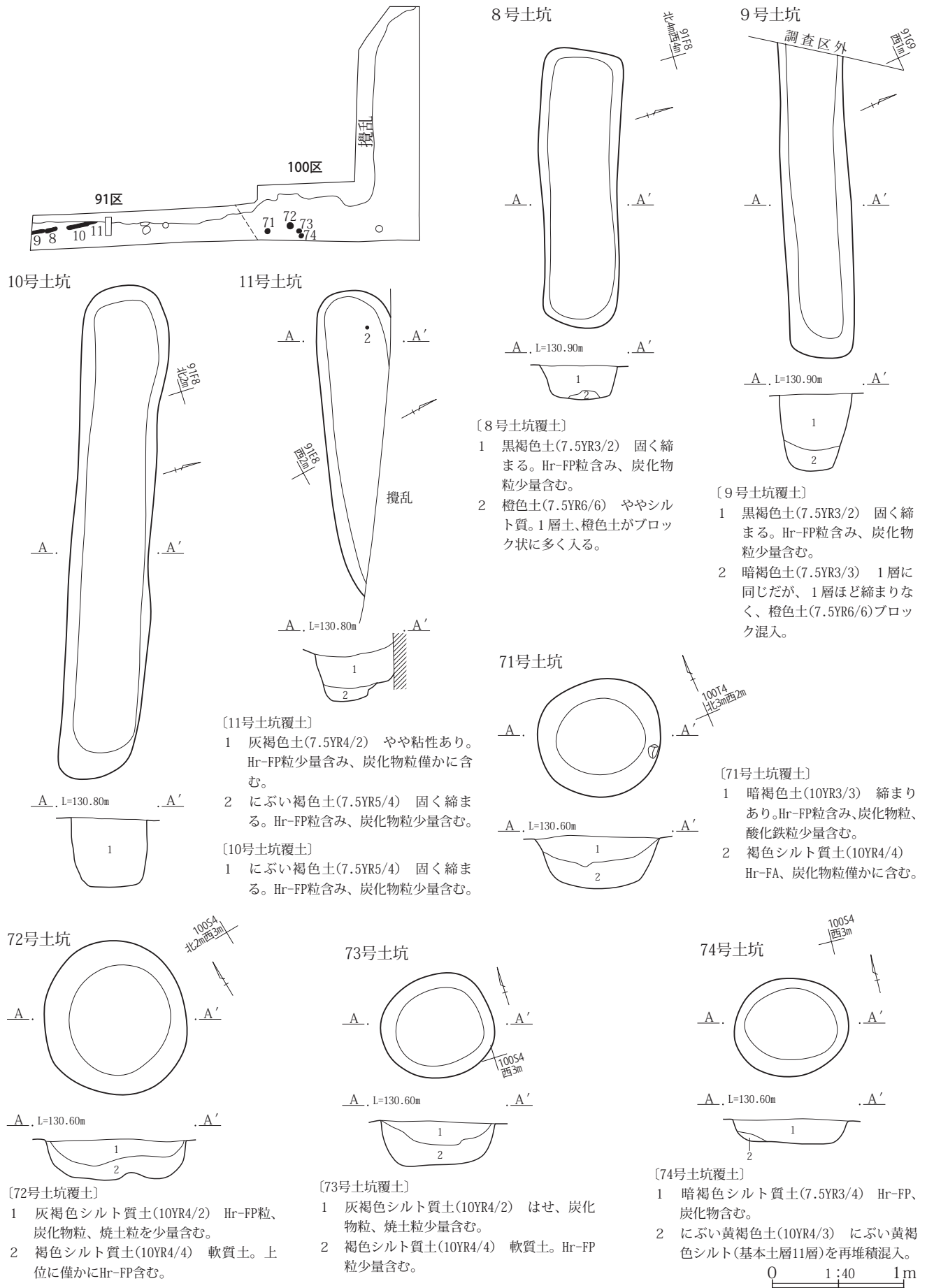
所見 何れの土坑も意図は特定できなかったが、8～11号土坑は1号土坑同様貯蔵穴であった可能性が思慮される。その時期も確認面と覆土から推して凡そ中世の所産と判断されるに過ぎなかった。

表3 1面土坑一覧

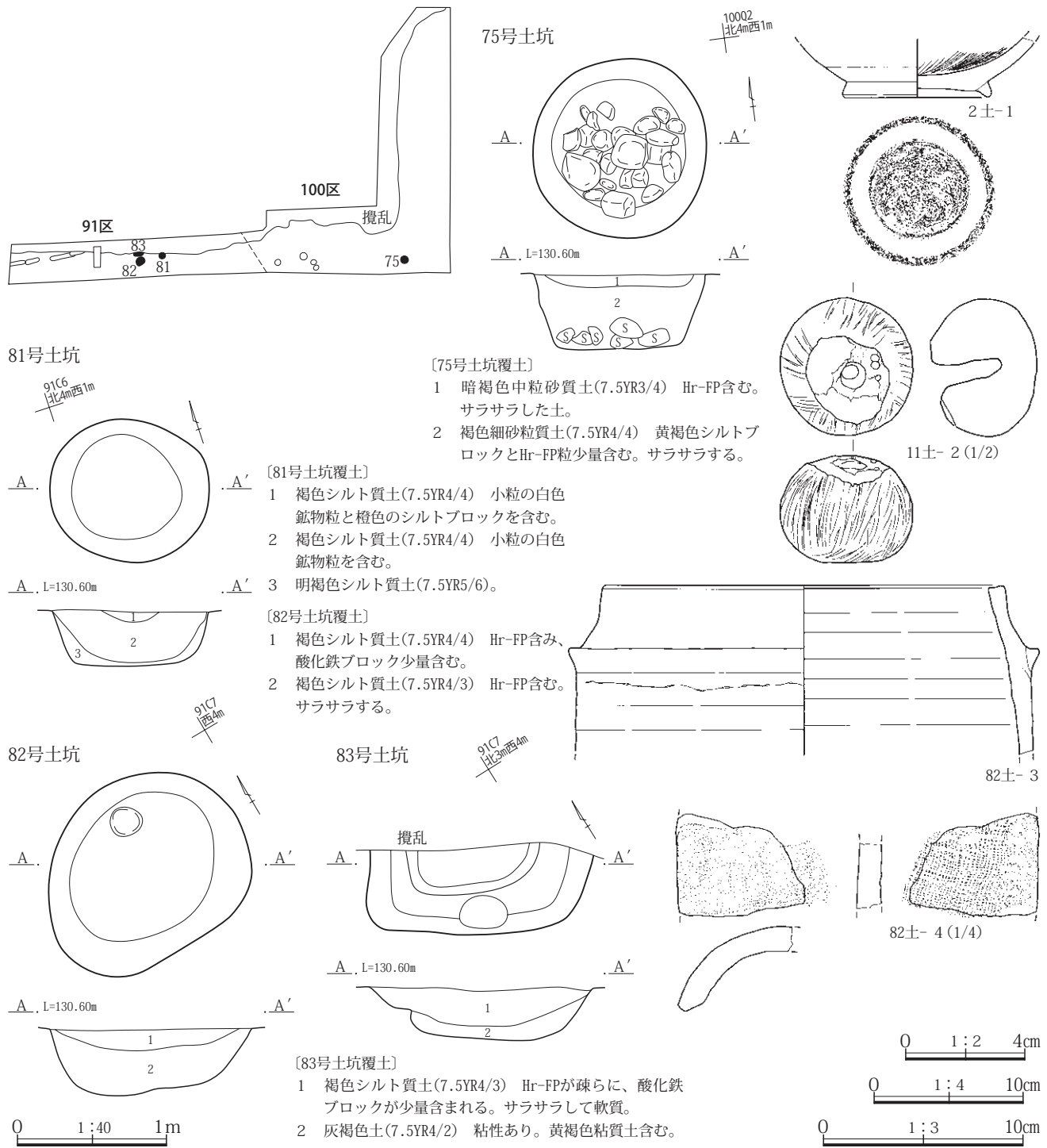
No.	位置	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	方位	挿図	写真
1	89N7	短冊形	2.25	0.58	0.38	N-80°-E	14	3
2	89N6	短冊形	3.8	0.56	0.55	N-88°-E	14	3
3	89M4	楕円	0.72	0.58	0.19	N-6°-E	14	3
8	91F8	短冊形	2.19	0.62	0.25	N-70°-W	15	3
9	91F8	短冊形	(2.32)	0.54	0.58	N-67°-W	15	3
10	91E8	短冊形	3.73	0.58	0.52	N-71°-W	15	3
11	91E8	短冊形	2.28	(0.56)	0.34	N-65°-W	15	3
71	100T4	円形	0.93	0.88	0.38	-	15	3
72	100S4	円形	1.16	1.08	0.29	-	15	3
73	100S4	円形	0.84	0.80	0.34	-	15	3
74	100S3	円形	0.85	0.75	0.18	-	15	3
75	100Q2	円形	1.19	1.17	0.49	-	16	3
81	91C6	円形	1.05	0.96	0.37	-	16	3
82	91C6	円形	1.46	1.20	0.42	-	16	3
83	91C7	方形	1.48	(0.55)	0.34	N-56°-W	16	3



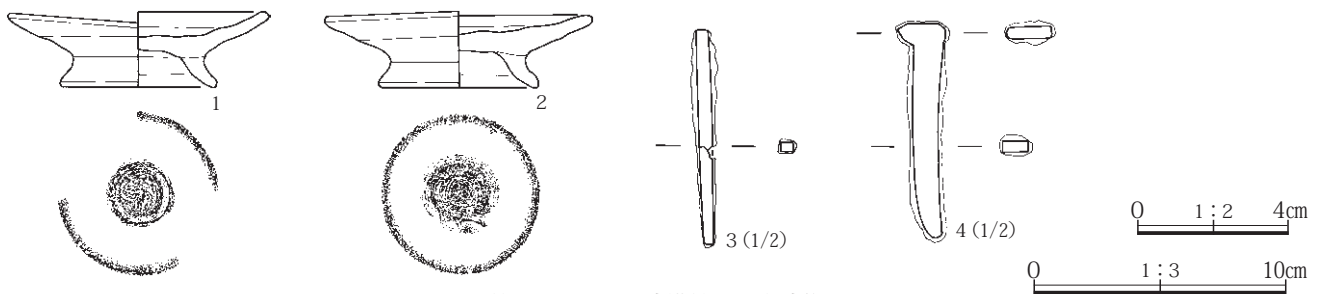
第14図 1・2・3号土坑



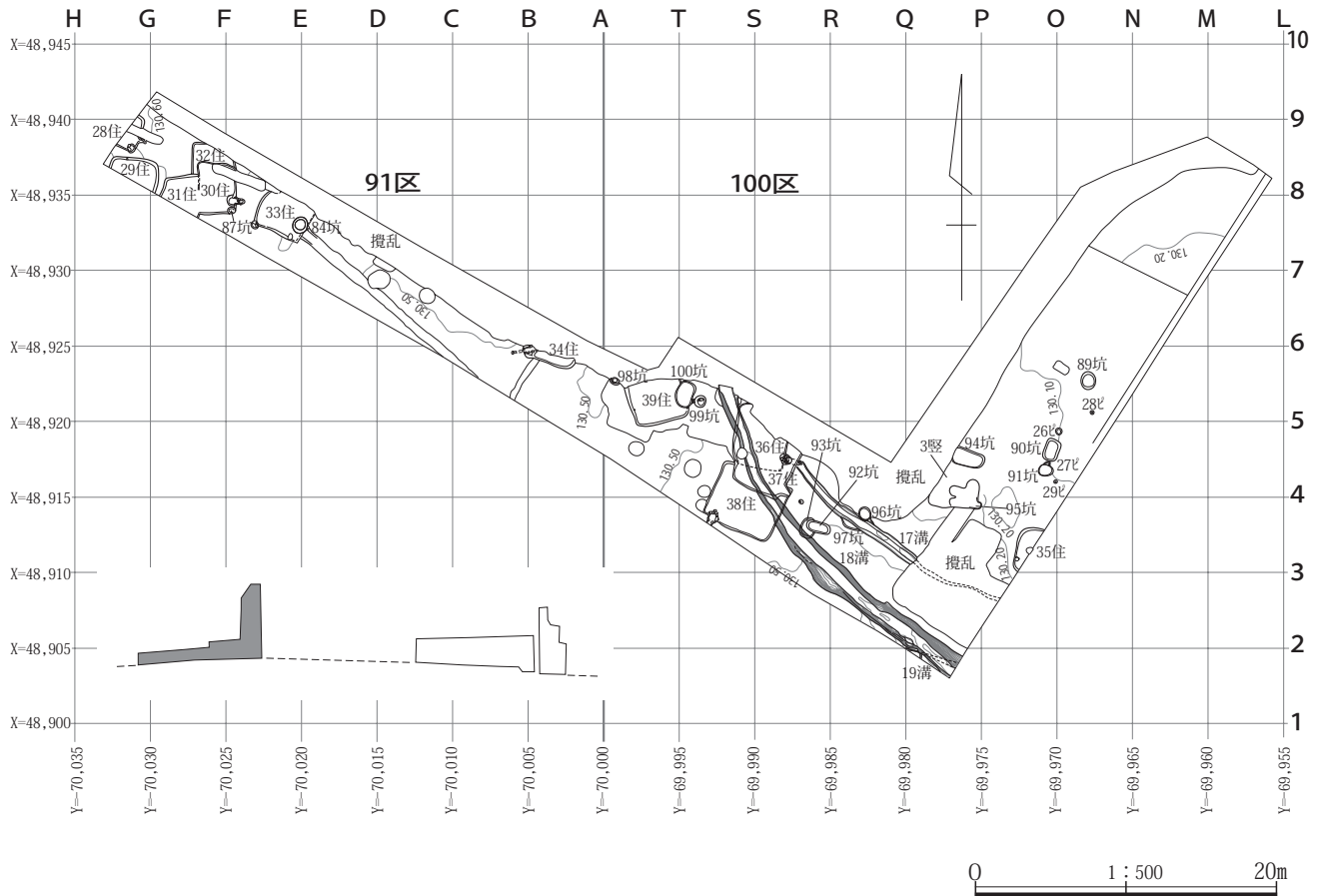
第15図 100区・91区所在土坑群(その1)



第16図 100区・91区所在土坑群(その2)



第17図 1面遺構外の出土遺物



第19図 100・91区2面の遺構

溝は89区に9条、90区に2条、100区に3条があった。出土遺物及び覆土に包含するテフラ等から、平安時代のものが4条、平安時代から中世にかけてのものが5条、中世のものが4条と判断した。その掘削意図は水路或いは水路の可能性を持つものが7条であったが、時期的な片寄は見られなかった。また89区11号溝は15世紀と見られる薬研堀の溝で区画溝と解釈したが、他の溝の掘削意図は特定できなかった。

土坑は89・90区で70基、100・91区で14基あった。全ての土坑について掘削意図は確認できず、その時期は10世紀以前1基、10世紀後半12基、中世15基で、他の56基は古代から中世の所産とできるに過ぎなかった。

ピットは89区で23基、100区で4基を確認した。全て

のピットのプランは円形若しくは楕円形で方形のものは無かった。これらのピットの掘削意図は特定できず、その時期も古代から中世の所産とできるに過ぎなかった。

埋葬に関する遺構では遺構未確認の一つを含んで6箇所あり、5号土墳墓(57号土坑)はヒトを埋葬した土葬墓であり、6号土墳墓(8号住居内)出土の人歯も遺構としては確認できなかったものの土墳墓に伴うものと想定される。また3・4号土墳墓は典型的な中世の火葬土坑(茶毘所)であった。竪穴状遺構1基と1号土墳墓は家畜の埋葬坑と考えられる。

その他89区でHr-FP噴火後の古代の畠1面、100区でAs-Bで埋没した畠2面、As-Bの復旧畠3面があった。

(2面)

2 竪穴住居

1号住居(第21～23図、PL. 8・40)

位置 89区L3～M4グリッド。89区東部、仮1区南西隅部に位置する。

方位 N-65°-E

規模 残存長302×190cm、深さ7cm

竈 奥行48cm、幅45cm 焚口幅42cm

床下土坑1 径66×56cm、深さ9cm

形状・構造 本住居は、南東側が攪乱で壊され、西側が調査区外に出ており、上位が大きく削られているため全容は詳らかでない。プランは方形状を呈する。

掘り方に幾つかの土坑、ピット状の掘り込みを有し、これを褐色土等で埋め戻して床面を造る。なお、床下土坑1の断面観察では上位で燃烧の痕跡が見られ、灰・焼土の堆積も見られている。

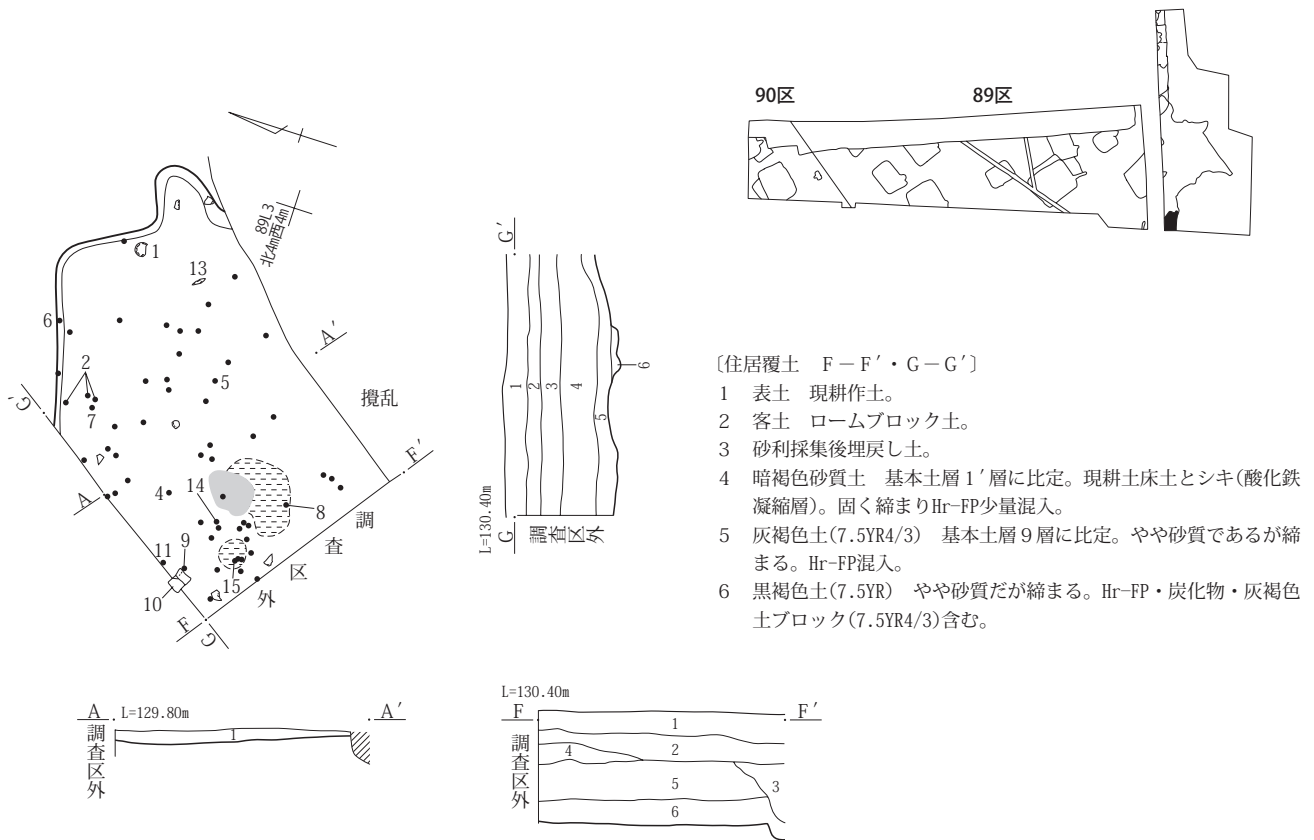
竈は東壁北寄りに設けられ、凹凸のある竈の掘り方を、炭化物粒を僅かに含む褐色土で埋め戻して燃烧面を造り出している。袖等は残されていない。柱穴は確認されなかった。

埋没土 炭化物粒を含む黒褐色土。

重複 他遺構との重複は見られない。

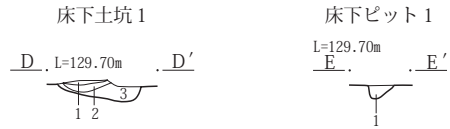
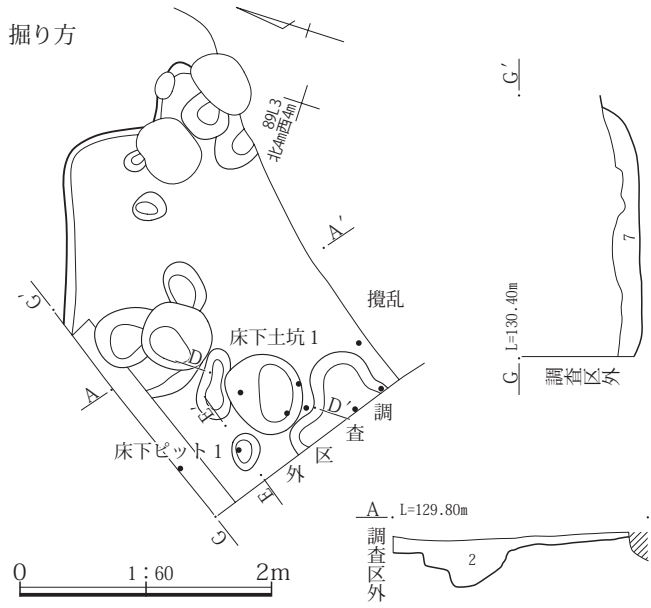
出土遺物 多量の土師器、及び須恵器、灰釉陶器片の出土を見たが、この中には黒色土器杯(1)、須恵器杯(2～7)・椀(8)・皿(9)、羽釜(10・11)があり、この他に鉄鏝(13)、角釘と見られる鉄製品(14・15)、不明鉄製品(16)、羽口(12・17)、流動滓(18)等多くの鉄滓の出土が見られた。

所見 上記床下土坑1の断面観察で確認された灰、焼土の遺存から焼却を伴う建て替えの可能性も考慮される。またその時期は出土遺物から推して10世紀後半と判断される。



0 1:60 2m

第21図 1号住居



〔床下土坑1 覆土〕

- 1 にぶい褐色土(7.5YR5/4) ややしと質。炭化物和灰を非常に多く、Hr-FPを僅かに含む。全体的に焼土化する。
- 2 にぶい褐色土(7.5YR5/4、ややシルト質)と黄褐色シルトの混土 炭化物を含み、上位は被熱による変色を見る。
- 3 明褐色シルト質土(7.5YR5/6) 軽石粒と炭化物粒僅かに含む。

〔床下ピット1 覆土〕

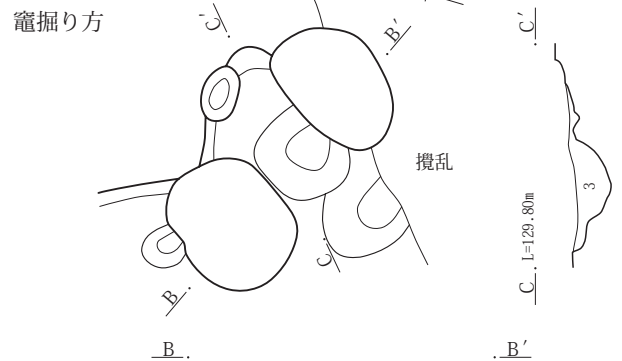
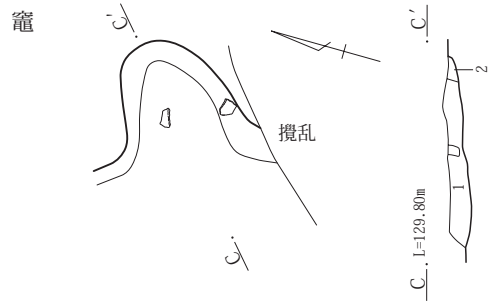
- 1 にぶい褐色土(7.5YR5/3) ややしと質。炭化物粒を僅かに含む。地山黄褐色シルトに住居掘り方覆土が混入。

〔住居掘り方覆土〕

- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) Hr-FPを極少量含む。サラサラする。

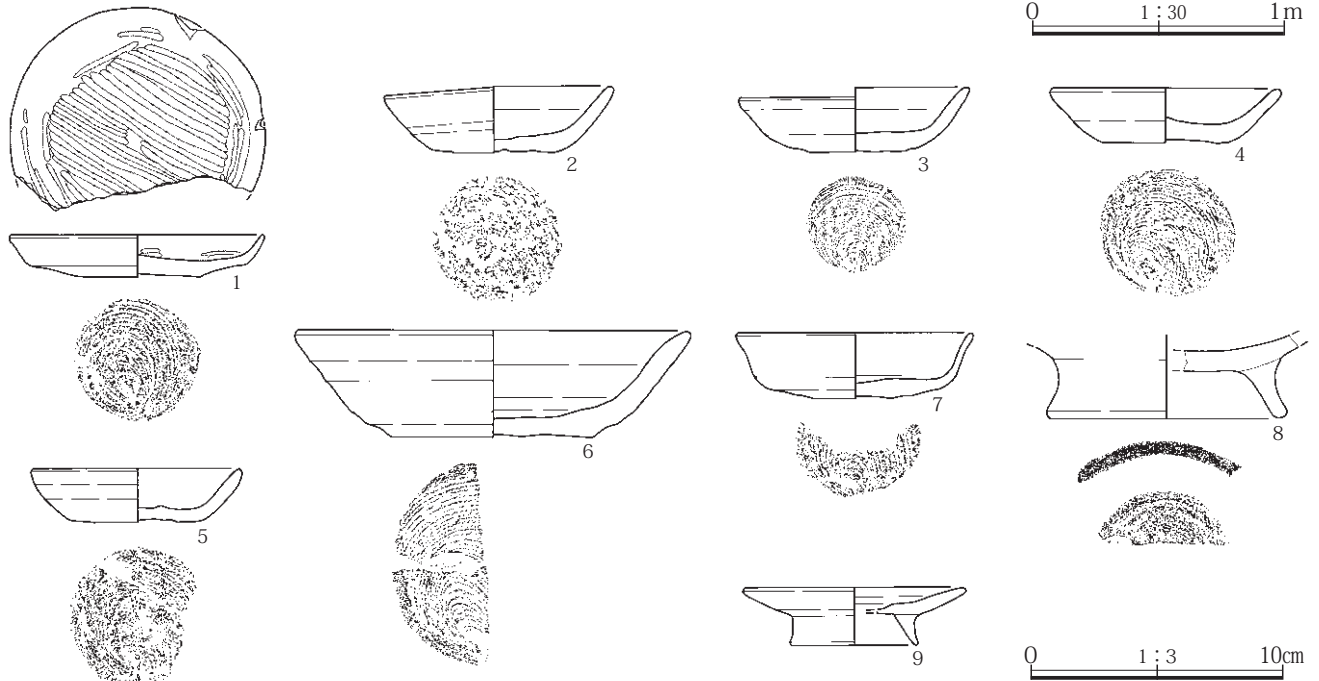
〔掘り方覆土〕

- 2 褐色土(7.5YR4/3)と暗褐色土(7.5YR3/3)の混土 締まりあり。地山(黄褐色シルト、基本土層11層土相当)のブロック土、少量の炭化物粒を含み、Hr-FPを僅かに含む。

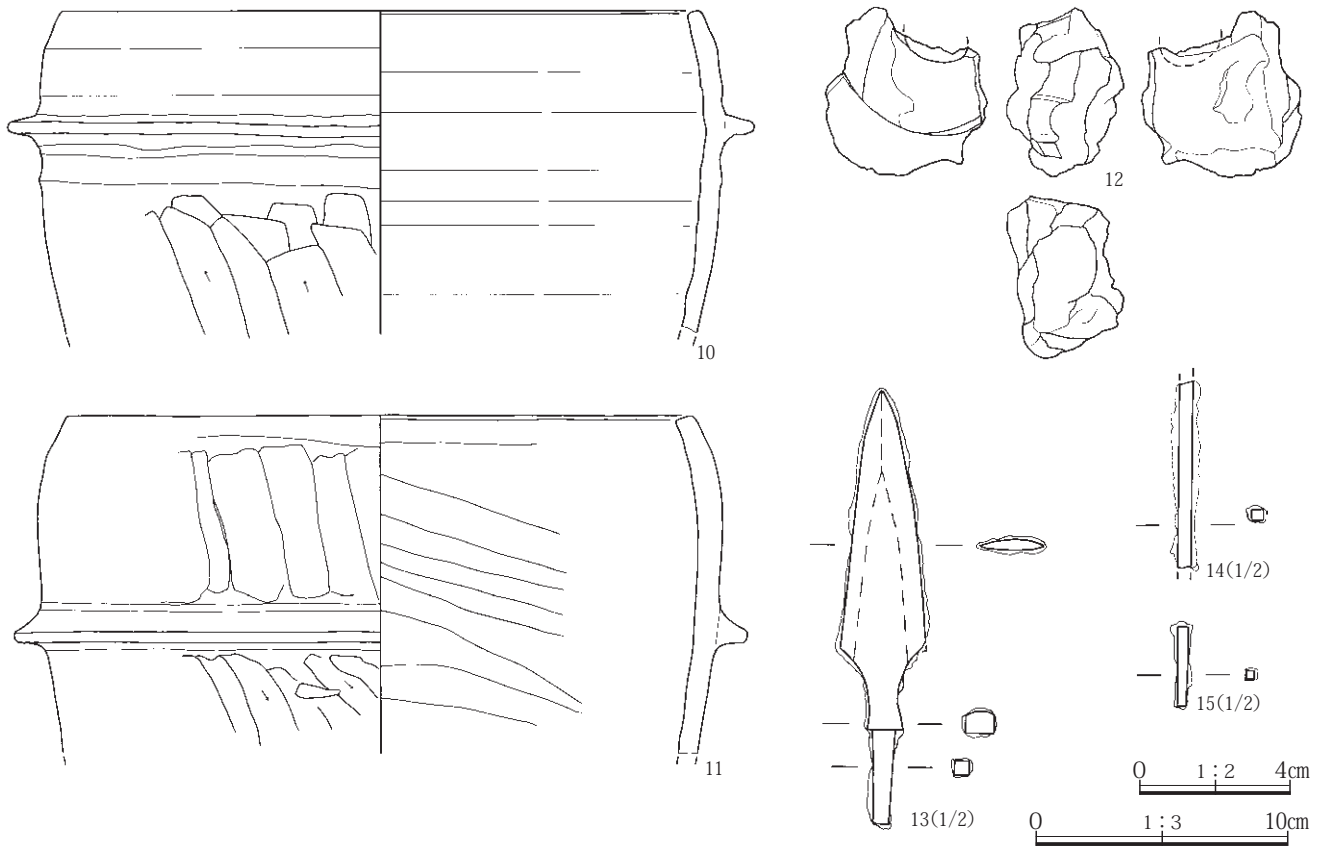


〔竈覆土〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ややしと質。炭化物粒・焼土ブロック少量含む。下部で灰らしきもの部分的に厚さ1mm弱で点在。
- 2 橙色土(7.5YR5/6) 炭化物粒を僅かに含む。壁の崩落土か。
- 3 褐色土(7.5YR4/3) 炭化物粒を僅かに含む。地山黄褐色シルト質土(基本土層11層相当)ブロック状に入る。



第22図 1号住居掘り方及び竈と出土遺物(1)



第23図 1号住居出土遺物(2)

2号住居(第24・25図、PL. 8)

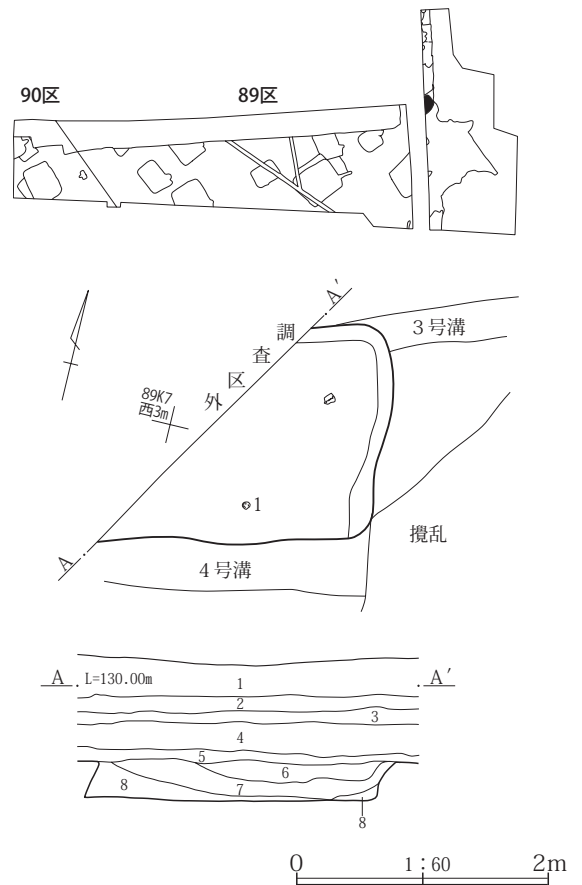
位置 89区K 6～7グリッド。89区東部、仮1区西壁際の中程に位置する。

方位 N-65°-E

規模 残存長176×168cm、深さ23cm

形状・構造 本住居は、南東側が攪乱で壊され、西側が調査区外に出ており、上位が大きく削られているため全容は詳らかでない。プランは方形状を呈する。

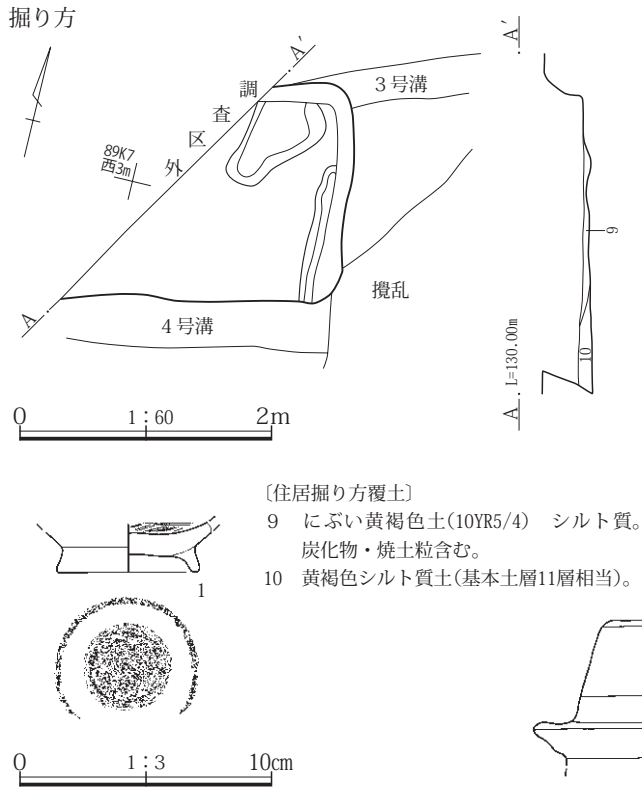
掘り方を有し幾つかの土坑、ピット状の掘り込みを有し、これをにぶい黄褐色土等で埋め戻して床面を造る。



第24図 2号住居

- 1 現耕作土。
- 2 客土 ロームブロック土。
- 3 灰褐色土(5YR5/2) 近世以降の開削土。
- 4 赤褐色土(5YR4/6) 近世以降の開削土。
- 5 暗褐色土(7.5YR) 砂やや多く、炭化物少量含む。
- [3号溝覆土]
- 6 暗褐色砂質土(7.5YR3/3) 軟質土。
- [2号住居覆土]
- 7 黒褐色土(7.5YR3/2) ややしルト質で軟質。白色鉱物・Hr-FP少量含む。
- 8 黒褐色シルト質土(7.5YR2/2) サラサラする。床に部分的に平らに炭化物遺存。

第4章 発見された遺構と遺物



竈、柱穴等の施設は確認できなかったが、掘り方で東壁下に幅13cm、深さ2cmの周溝が見られる。

埋没土 下位に黒褐色土(②・③層土)が堆積し、上位に暗褐色砂質土(①層土)が堆積するので、本住居は第一次の埋没の後暫くの間は窪みとして残っていたものと判断される。

重複 4号溝と重複しこれに切られている。

出土遺物 少量の土師器・須恵器・灰釉陶器片、鉄滓1点の出土があったが、この中には黒色土器碗(1)、羽釜(2)が見られた。

所見 本住居は炭化物の遺存から焼失家屋の可能性はある。また出土遺物から推して10世紀前半の所産と判断される。

第25図 2号住居掘り方と出土遺物

3号住居(第26～28図、PL. 9・40)

位置 89区J 8～K 7グリッド。89区東部、仮1区中北部、調査区西壁際に位置する。

方位 N-117°-E

規模 残存長438cm、残存幅162cm、深さ13cm

竈 残存長72cm、焚口幅65cm

左袖幅38cm、長さ72cm

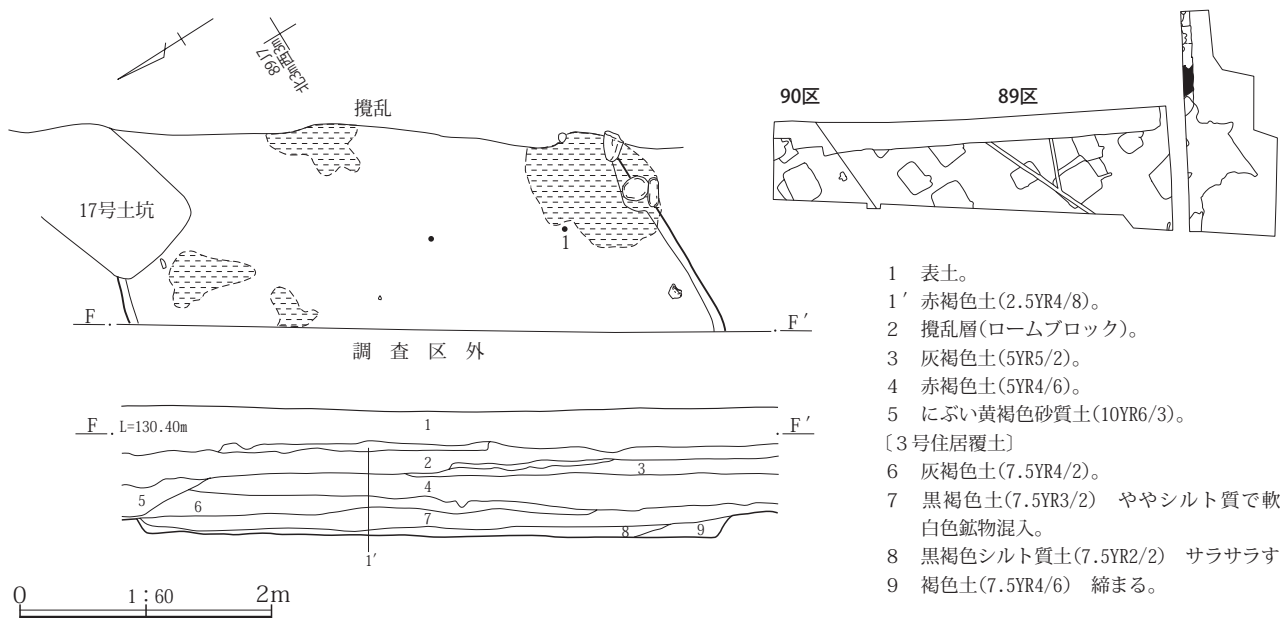
右袖幅16cm、長さ67cm

床下土坑1 径52×(35)cm、深さ11cm

床下土坑2 径77×56cm、深さ13cm

床下土坑3 径(69)×(91)cm、深さ35cm

床下土坑4 径(41)×67cm、深さ13cm



第26図 3号住居

床下土坑5 径(46)×(91) cm、深さ17cm

床下土坑6 径(100)×(77) cm、深さ38cm

形状・構造 本住居は、東側が攪乱により削られ、西側は調査区外に出ているため一部を調査できたに過ぎない。プランも明確ではないが、方形状を呈するものと想定される。

掘り方に幾つかの土坑状の掘り込みを有し、これを褐色土等で埋め戻して床面を造っている。床下土坑5もその覆土に炭化物を含むためその可能性を有するが、床下土坑6はその覆土に炭化物や焼土を含むため、所謂床下粘土坑に相当する竈構築作業に伴うものであった可能性が考慮される。

竈は住居南壁に設けられるが、上位が削られ、煙道側が失われていたため全容は詳らかでない。残存長80×50cmの楕円形様の浅い竈掘り方を掘削し、その北側は左袖部分に使われ掘り残し、竈掘り方の両側東寄りには小型の掘り込み2箇所、南側には大型の掘り込み1箇所が

設けられる。竈掘り方は黒褐色土等で埋め戻して焼面を造る。焼面の右袖は袖石を据えて黒褐色土を用い、左袖は灰褐色土で造られている。

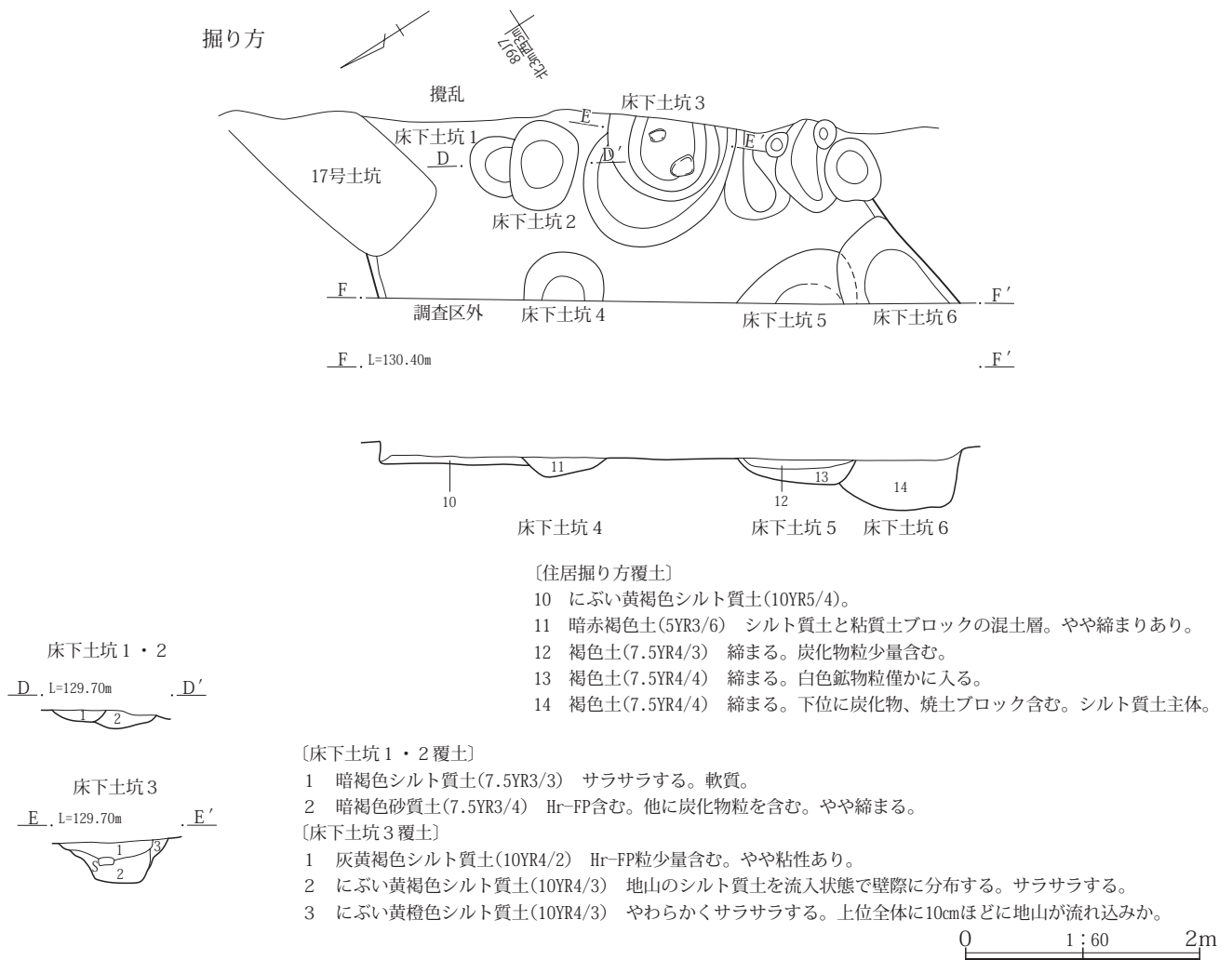
また床面に於いて柱穴等は確認されなかった。

埋没土 所謂壁際の三角堆積は褐色土(9層)であり、2号住居同様、下位に黒褐色土(7・8層)が堆積し、上位に灰褐色土(6層)が堆積するので、本住居も埋没後暫くの間は窪みとして残っていたものと判断される。

重複 17号土坑と重複関係にあるが、本住居が切られている。

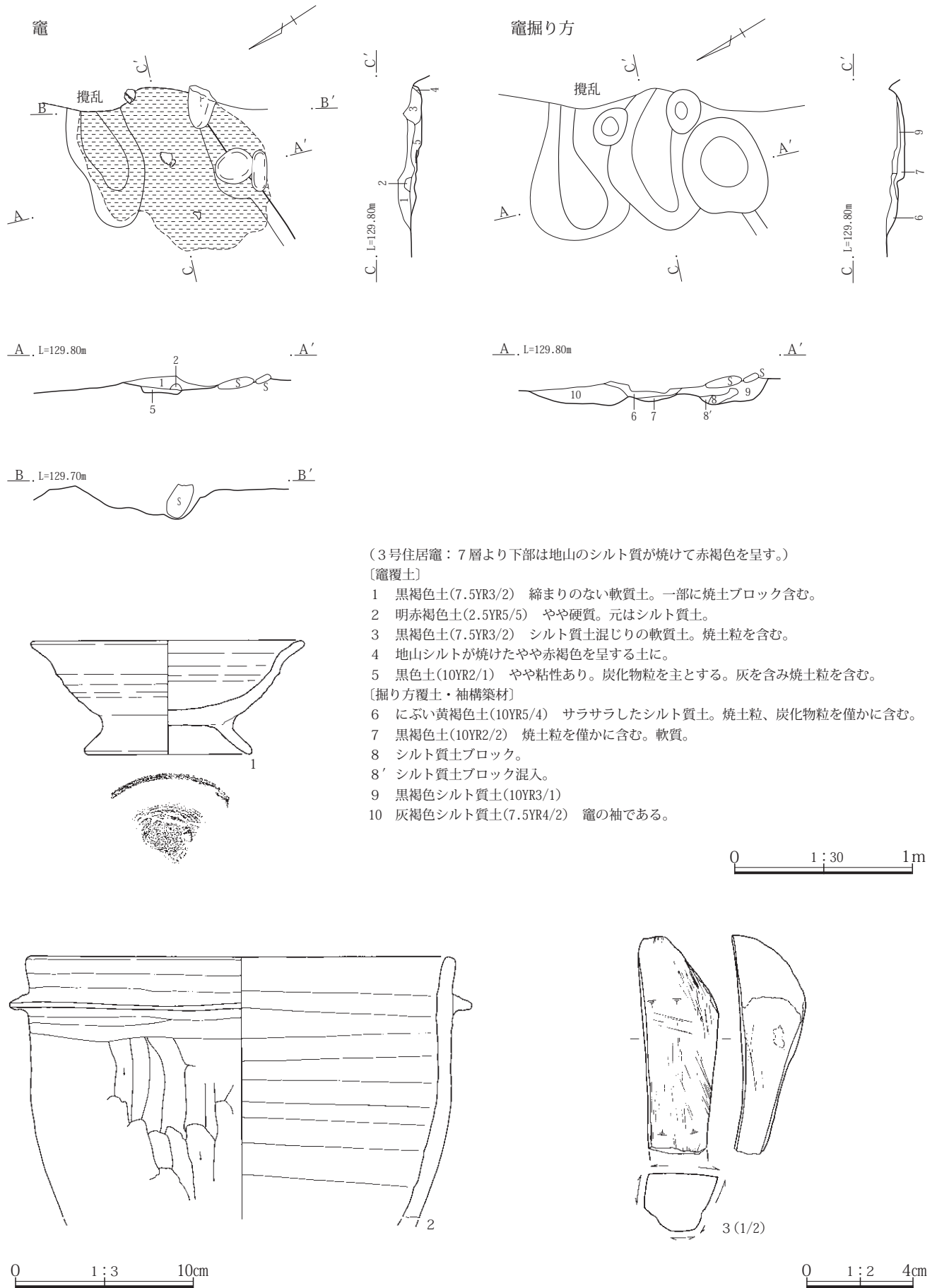
出土遺物 やや少量の土師器・須恵器片、少量の灰釉陶器片の出土があったが、この中には須恵器椀(1)、羽釜(2)、灰釉陶器片や砥石(3)の出土が見られた。

所見 確認範囲内の異なる範囲に灰の平面的堆積が見られる。またその時期は出土遺物から推して10世紀中葉と判断される。



第27図 3号住居掘り方

第4章 発見された遺構と遺物



(3号住居竈：7層より下部は地山のシルト質が焼けて赤褐色を呈す。)

[竈覆土]

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 締まりのない軟質土。一部に焼土ブロック含む。
- 2 明褐色土(2.5YR5/5) やや硬質。元はシルト質土。
- 3 黒褐色土(7.5YR3/2) シルト質土混じりの軟質土。焼土粒を含む。
- 4 地山シルトが焼けたやや赤褐色を呈する土に。
- 5 黒色土(10YR2/1) やや粘性あり。炭化物粒を主とする。灰を含み焼土粒を含む。

[掘り方覆土・袖構築材]

- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/4) サラサラしたシルト質土。焼土粒、炭化物粒を僅かに含む。
- 7 黒褐色土(10YR2/2) 焼土粒を僅かに含む。軟質。
- 8 シルト質土ブロック。
- 8' シルト質土ブロック混入。
- 9 黒褐色シルト質土(10YR3/1)
- 10 灰褐色シルト質土(7.5YR4/2) 竈の袖である。

第28図 3号住居竈と出土遺物

4号住居(第29図、PL. 9)

位置 89区J 8グリッド。89区東部、仮1区北部、調査区西壁際に位置する。

方位 N-131°-E

規模 竈 残存長71cm、残存幅76cm、
 燃烧部(28)×(59) cm、深さ7cm
 煙道幅10cm、煙道長38cm

形状・構造 本住居は、建物本体は西側調査区外或いは攪乱によって失われており、竈を確認できたに過ぎない。

竈は東壁側に造られており、残存長70×40cmの楕円形様を呈すると想定される掘り方を有し、これを灰褐色土で埋め戻して燃烧部を造っている。袖は地山で下位の畠遺構に伴うHr-FPと灰褐色砂質土が含まれている。天井

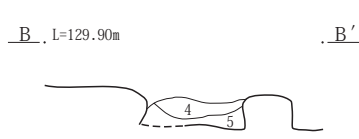
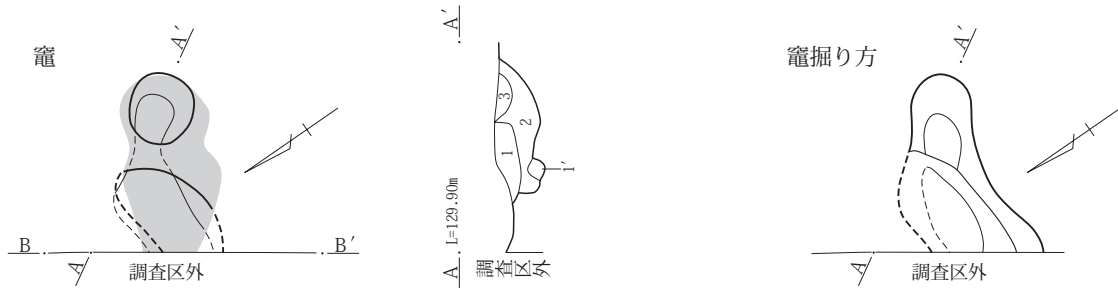
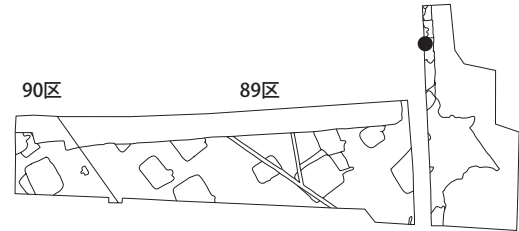
は残されていない。また煙道はくり抜きで造られており、トンネル部は高さ5cm、幅10cmを測る。

埋没土 覆土は褐色土、暗褐色土、黒褐色土であった。

重複 他遺構との重複は見られない。

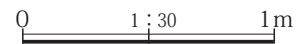
出土遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本住居の時期は特定できなかったが、周辺に分布する住居群の集落の1軒として、凡そ10世紀の所産と想定される。



〔竈覆土〕

- 1 暗赤褐色土(2.5YR3/6) シルト質土の焼土化したものか。竈煙道付近。
- 1' 天井部が1層で残っているがその一部が崩落してブロック状に落下。
- 2 灰褐色土(7.5YR5/2) 焼土が混入の軟質土。サラサラする。
- 3 黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土粒を含む。軟質土。
- 4 シルト質土 やや焼けた土が入る。
- 5 暗褐色土 炭化物、焼土、灰混入。



第29図 4号住居竈

5号住居(第30図、PL. 9)

位置 89区I 9～J 8グリッド。89区東部、仮1区北部西端に位置する。

方位 N-65°-E

規模 残存長262cm、幅143cm、深さ75cm

形状・構造 本住居は、東が攪乱で壊され、西側が調査区外に出ていて全容は詳らかにできなかった。プランは方形状を呈すると見られる。

掘り方は無く、自然堆積層と多くは6号住居覆土を以て床としている。

竈・柱穴・貯蔵穴等は確認されなかった。

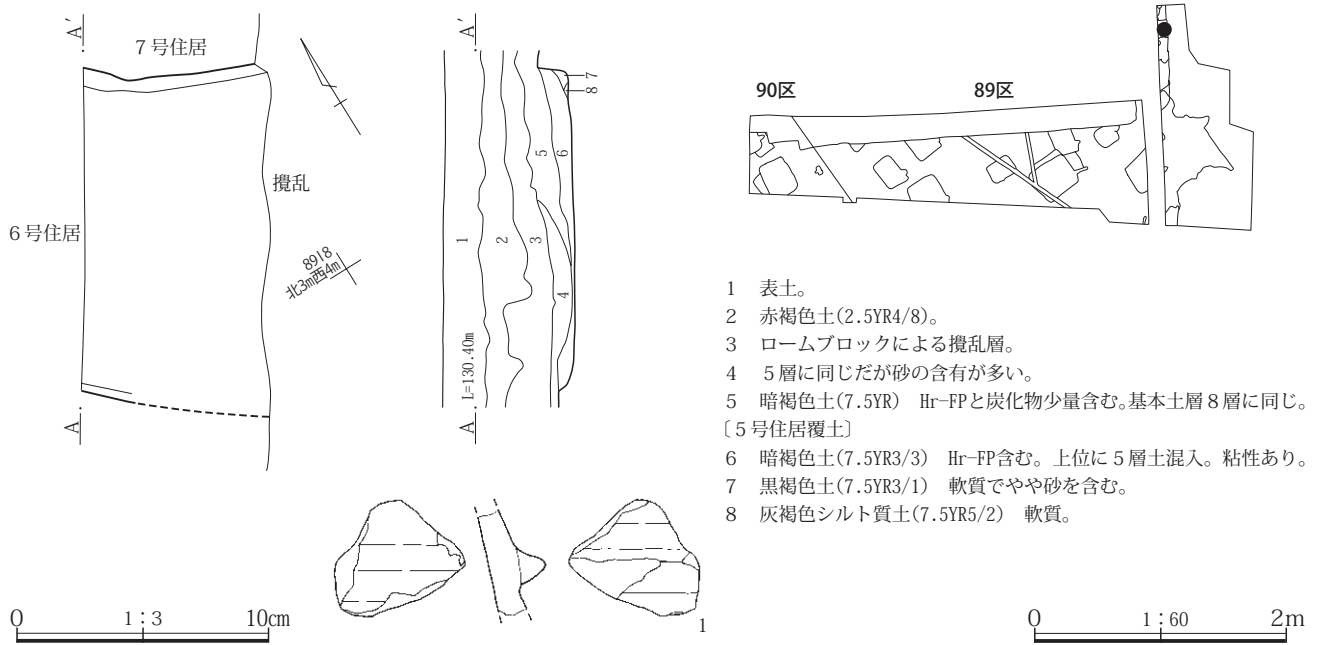
埋没土 壁際の所謂三角堆積土は黒褐色土である。住居の中程は軟質の暗褐色砂質土で埋没した後、窪地として残されていた時期があり、その後、灰褐色砂質土で埋没している。

重複 本住居は6・7号住居と重複するが、孰れ両方に対して本住居の方が新しい。

出土遺物 土師器片や少量の須恵器・灰釉陶器片、鉄滓が出土したが、羽釜(1)の出土も見られた。

所見 本住居の時期は出土遺物から推して10世紀と認識される。

第4章 発見された遺構と遺物



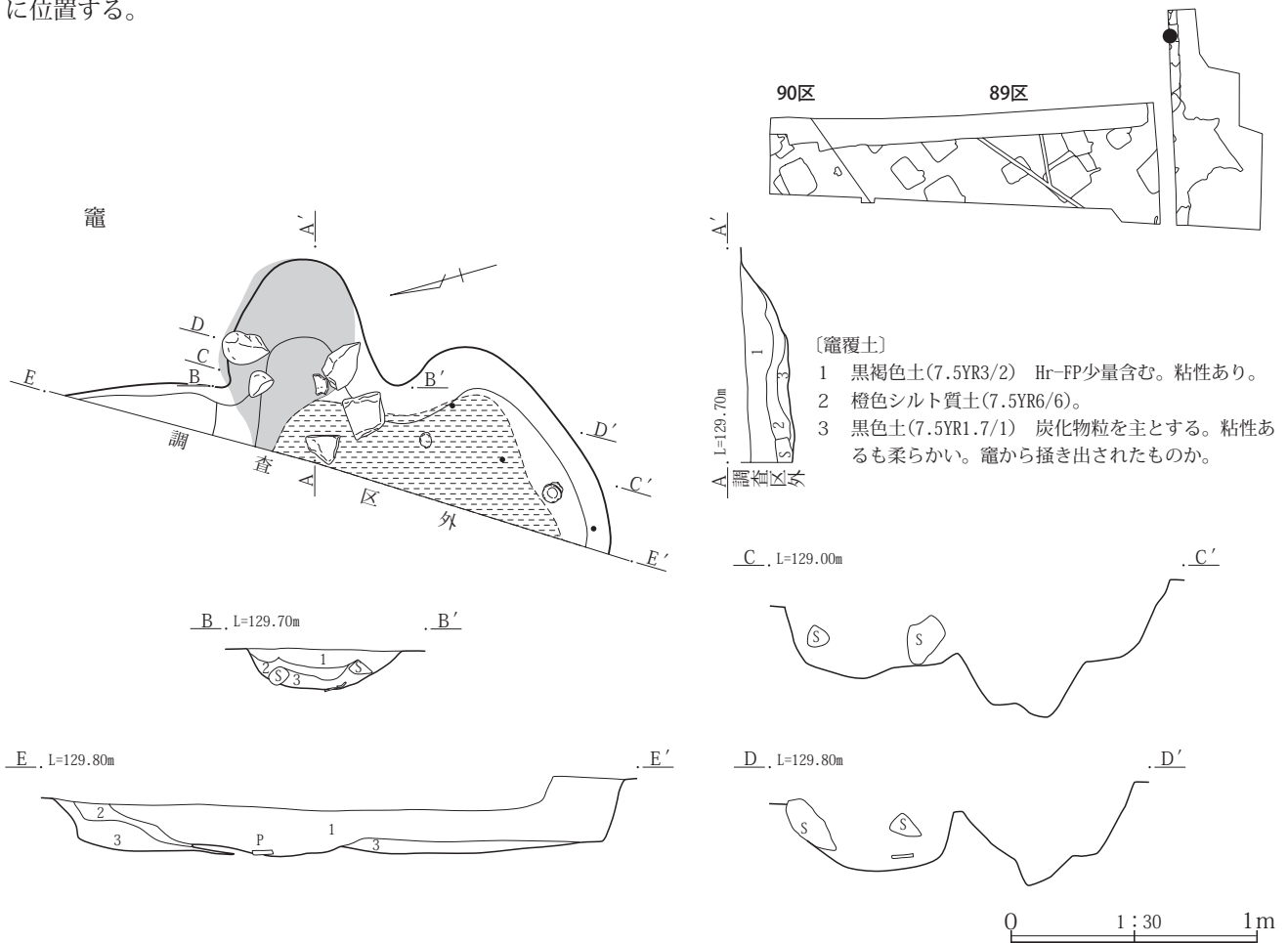
第30図 5号住居と出土遺物

6号住居(第31～33図、PL. 9・10)

方位 N-106°-E

位置 89区J 8グリッド。89区東部、仮1区北部西端に位置する。

規模 残存長210×100cm、深さ0cm



第31図 6号住居竈

竈 残存長78cm、幅60cm 焚口幅50cm

貯蔵穴 径50×40cm、深さ21cm（床面からの高さ25cm）

形状・構造 本住居は、南東隅部が確認できたに過ぎなかった。プランは隅丸方形状を呈すると思慮される。

比較的平坦な掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して床面を造っている。

竈は東壁南寄りに設けられ、中央には径20cm、深さ10cm程の掘り込みを伴う残存長41×67cmの浅い掘り方を壁面を越えて掘削し、これを焼土を含む黒褐色土、黒褐色砂質土で埋め戻して燃焼面を造り出している。右袖は

地山の掘り残しである。また竈から右側、住居南東隅部には炭化物の分布が見られる。

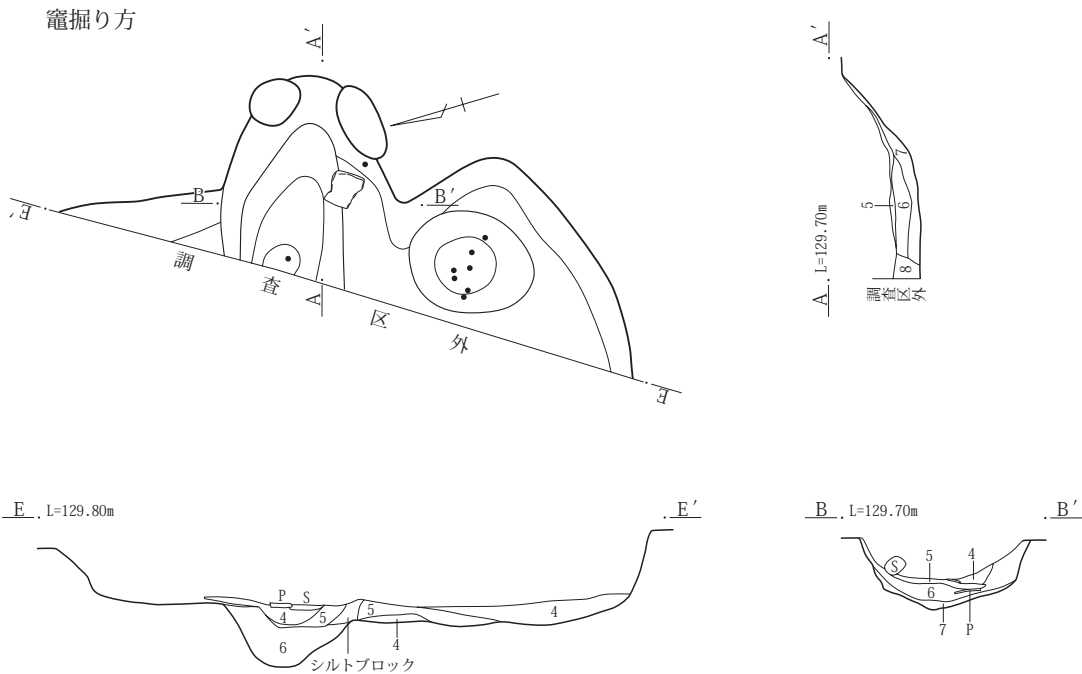
柱穴は確認されなかったが、掘り方面に於いて、横長楕円形プランの貯蔵穴が確認された。

埋没土 灰褐色土、黒褐色土。

重複 他遺構との重複は見られない。

出土遺物 少量の土師器・須恵器・灰釉陶器片、鉄滓の出土が見られたが、この中には須恵器椀(1)・甕(2)が見られた。

所見 本住居の時期は出土遺物から推して10世紀と認識される。



〔竈掘り方覆土E-E'〕

- 4 明褐色土(5YR5/6)。
- 5 黒色粘質土(7.5YR2/1) 炭化物と焼土から成る。
- 6 灰褐色シルト質土(7.5YR4/2)。

〔竈覆土A-A'・B-B'〕

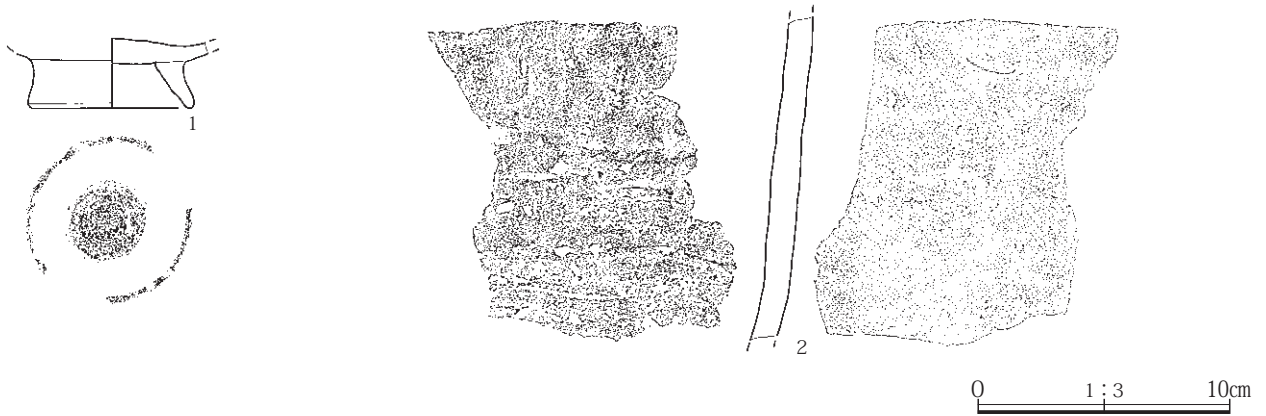
- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) シルト質土、焼土粒含む。サラサラする。上位にはHr-FPと炭化物粒が僅かに入る。
- 2 暗赤褐色土(5YR3/6) シルト質土の焼土に一部暗褐色土入る。天井部の落ちた可能性がある。焼土はあまり硬くない。
- 3 極暗褐色土(7.5YR2/3) 竈床面と焼土(2層)の中間に位置し、僅かに焼土粒が混入する。軟質土である。

〔竈掘り方覆土A-A'・B-B'〕

- 4 黒褐色土(10YR3/1) レンズ状に炭化物粒を含む。粘性土が入る。
- 5 暗赤褐色土(2.5YR3/6) 床面の焼土。シルト質土が床面全体に赤味を帯びて広がっている。焼けているため、サラサラしている。
- 6 黒褐色土(10YR3/2) 焼土ブロックを含む。砂質土。サラサラしている。
- 7 黒褐色土(10YR2/3) 焼土粒を含む。シルト質土。やや粘性がある。
- 8 黒色土(10YR2/1) 炭化物の集合。

0 1:30 1m

第32図 6号住居竈掘り方



第33図 6号住居出土遺物

7号住居(第34図、PL.10)

位置 89区I 9グリッド。89区東部、仮1区北部西端に位置する。

方位 N-120°-E

規模 竈 残存長45cm 残存幅38cm

煙道幅14cm、煙道長28cm

形状・構造 本住居は、竈の煙道付近を確認できたに過ぎなかった。西側は調査区外に在って仮2区に於いても住居本体を確認することはできなかった。

竈は東に設けられている。燃烧部の一部を調査したが、

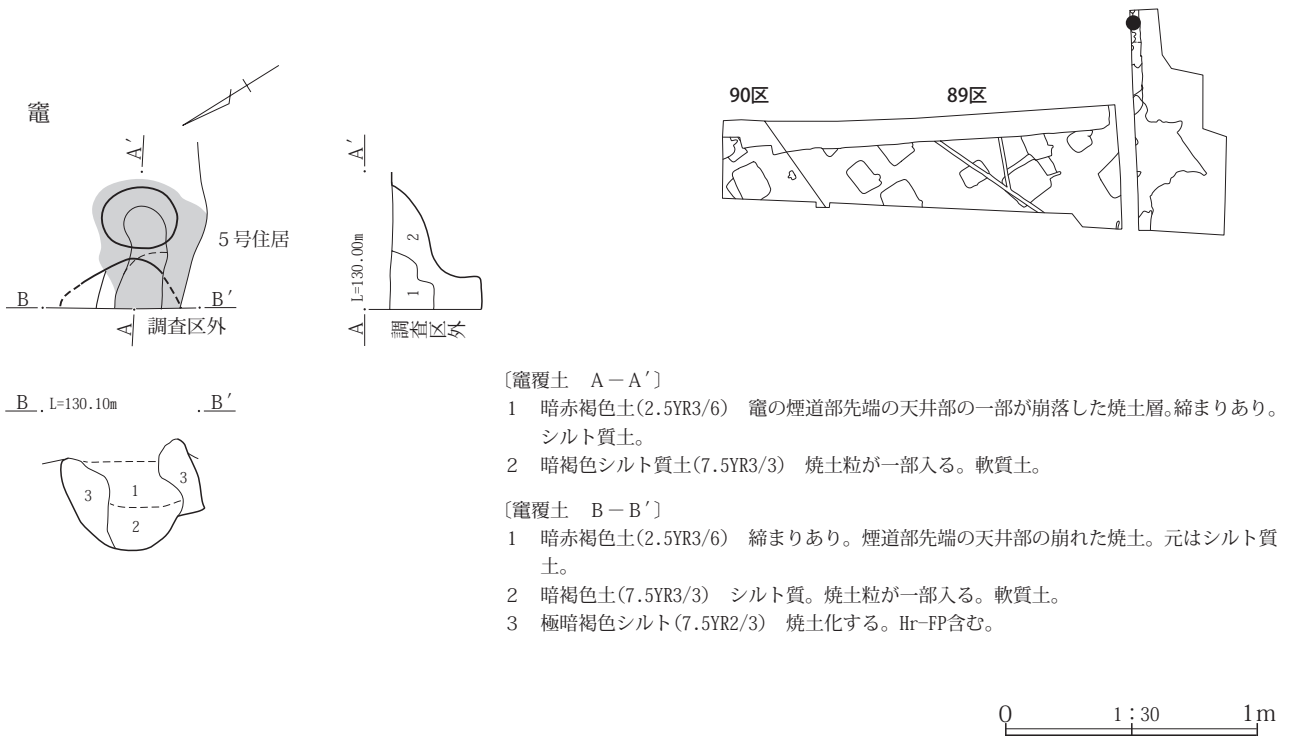
掘り方は確認されなかった。また、煙道部は遺存状況から推してくり抜かれていたものと判断される。

埋没土 暗褐色土。

重複 5・6・25号住居と重複するが、5・6号住居よりは古く、25号住居よりは新しい。

出土遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本住居の時期は特定できなかったが、本住居周辺に分布する住居群の集落に含まれるものと認識されるので、凡そ10世紀の所産と想定したい。



〔竈覆土 A-A'〕

- 1 暗赤褐色土(2.5YR3/6) 竈の煙道部先端の天井部の一部が崩落した焼土層。締まりあり。シルト質土。
- 2 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) 焼土粒が一部入る。軟質土。

〔竈覆土 B-B'〕

- 1 暗赤褐色土(2.5YR3/6) 締まりあり。煙道部先端の天井部の崩れた焼土。元はシルト質土。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) シルト質。焼土粒が一部入る。軟質土。
- 3 極暗褐色シルト(7.5YR2/3) 焼土化する。Hr-FP含む。

8号住居(第35～37図、PL.10・11・41)

位置 89区M6～7グリッド。89区東部、仮2区北東部に位置する。

方位 N-88°-E

規模 残存長326cm、残存幅305cm、深さ32cm

竈 残存長138cm、残存幅102cm 焚口幅88cm

燃烧部(99)×113cm、深さ5cm

煙道長26cm、煙道幅20cm

床下土坑1 径55×43cm 深さ14cm

床下土坑2 径57×51cm 深さ20cm

形状・構造 本住居は北東側が攪乱により失われている。

本住居のプランは縦長の隅丸長方形を呈する。

若干の掘り込みのある掘り方を有し、これを暗褐色土等で埋め戻して床面を造っている。

竈は東壁のやや北寄りに設置されている。壁面を跨いで径70×114cmの浅い掘り方を有し、にぶい褐色土等で埋め戻して燃烧面を造っている。燃烧面の上には焼土・灰層が乗る。袖、天井は失われていたが、燃烧部右側の壁面ライン付近に径35×25cm、深さ9cm程の掘り込みが

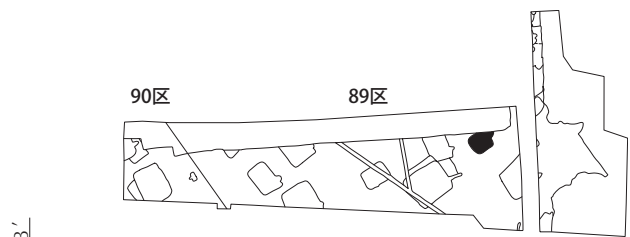
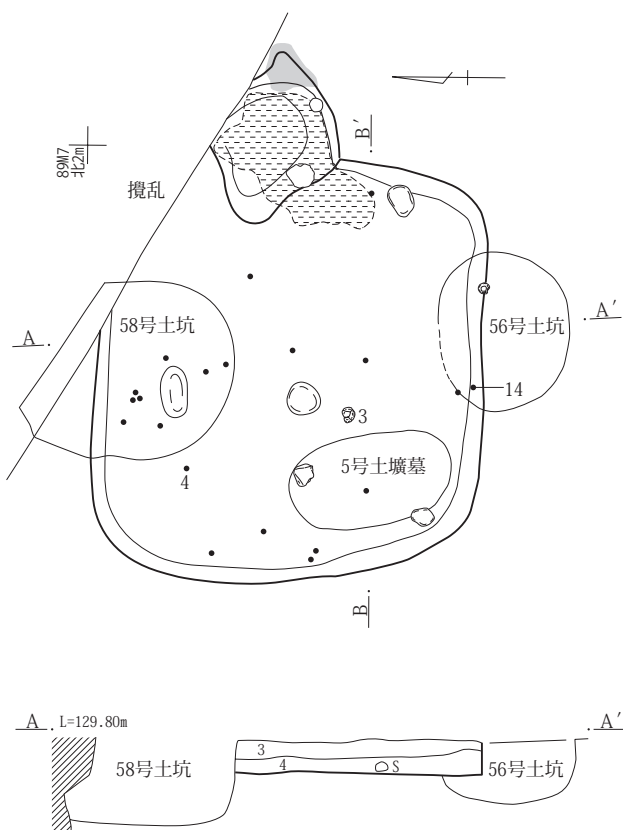
有り、袖石の設置されていた可能性が考えられる。

また床面に於いて柱穴、貯蔵穴は確認されなかったが、掘り方面に検出された床下土坑2が位置的に貯蔵穴であった可能性を有する。

埋没土 炭化物粒を含む灰褐色土、褐色土で覆われている。

重複 5号土壙墓、56・58号土坑と重複するが、本住居は56号土坑よりは新しく、5号土壙墓、58号土坑よりは古い。出土遺物 土師器、須恵器、灰釉陶器等多くの遺物が得られたが、この中には黒色土器椀(1・2)、土師器甕(15)、須恵器杯(3～10)・椀(12・13)・椀と見られるもの(11)・皿(14)、羽釜(16・17)、緑釉陶器の杯と思われるもの(18)が見られた。この他、羽口や多量の鉄滓の出土も見られた。また竈付近で人歯の出土が見られたが、遺存状態が非常に良好なことから、(中世の)別遺構に伴うものと判断された。

所見 本住居は出土遺物から推して10世紀後半の所産と判断される。

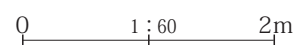


〔住居覆土〕

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) やや砂質。締まりあり。Hr-FP粒を含み、炭化物粒を少量含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) やや砂質。Hr-FP粒と炭化物粒を少量含む。
- 3 灰褐色土(7.5YR4/2) 粘性強い。Hr-FP軽石粒含み、炭化物粒を少量含む。
- 4 褐色土(7.5YR4/3) やや粘性あり。Hr-FP軽石粒と炭化物粒少量含む。部分的に黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)ブロック状・粒状に混入。
- 5 明褐色土(7.5YR5/6) ややシルト質。4層土に黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)混入。

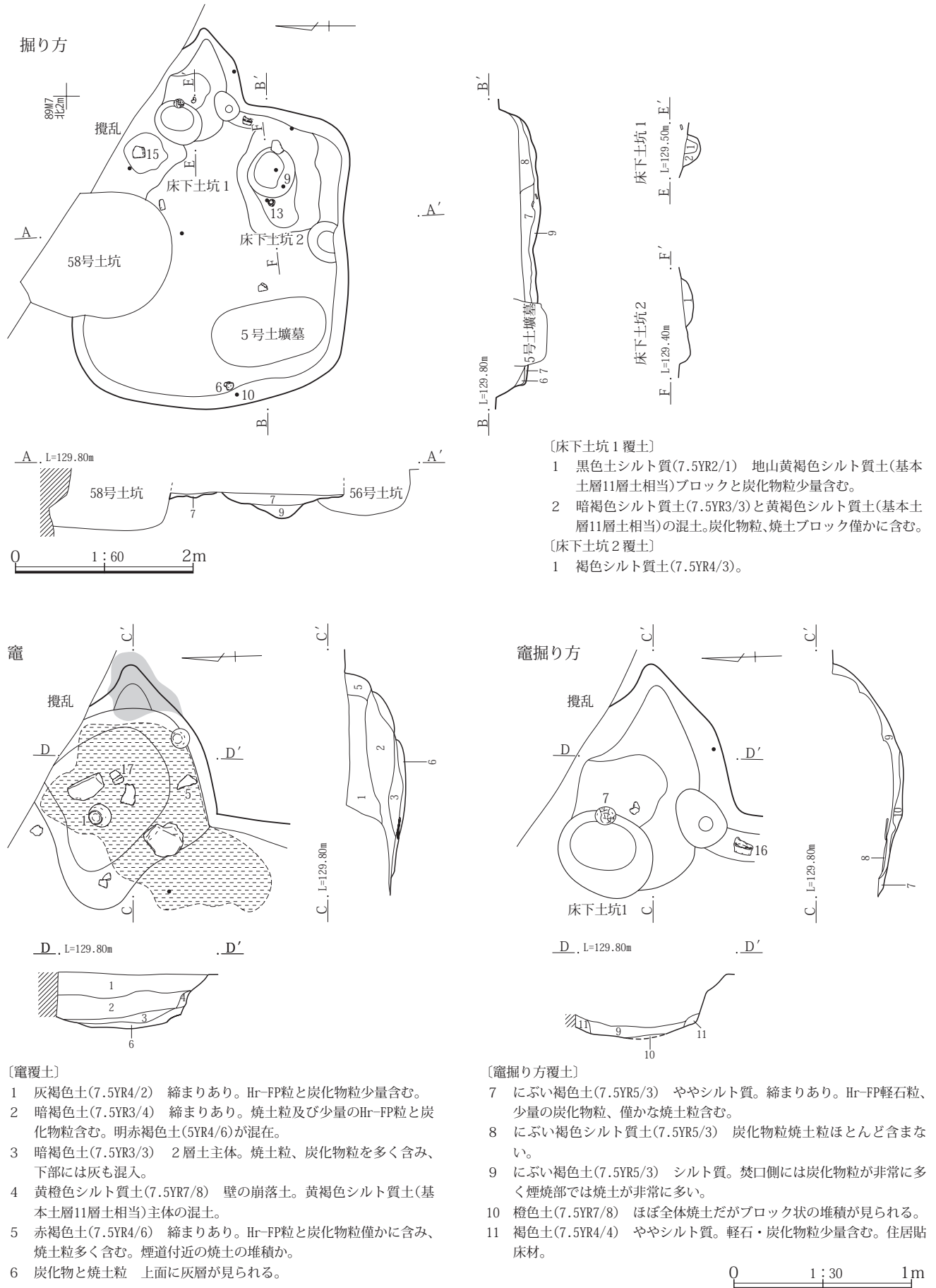
〔住居掘り方覆土〕

- 6 橙色シルト質土(7.5YR7/6) 地山黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)崩落土。4層土が少量混入。
- 7 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) 締まりあり。Hr-FP粒と炭化物粒を少量含む。
- 8 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) 締まりあり。7層に同じ。炭化物粒と少量の灰も含む。竈付近で掻き出されたものか数回の被熱が考えられる。
- 9 橙色土(7.5YR7/6) シルト質。黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)に7層土入る混土。

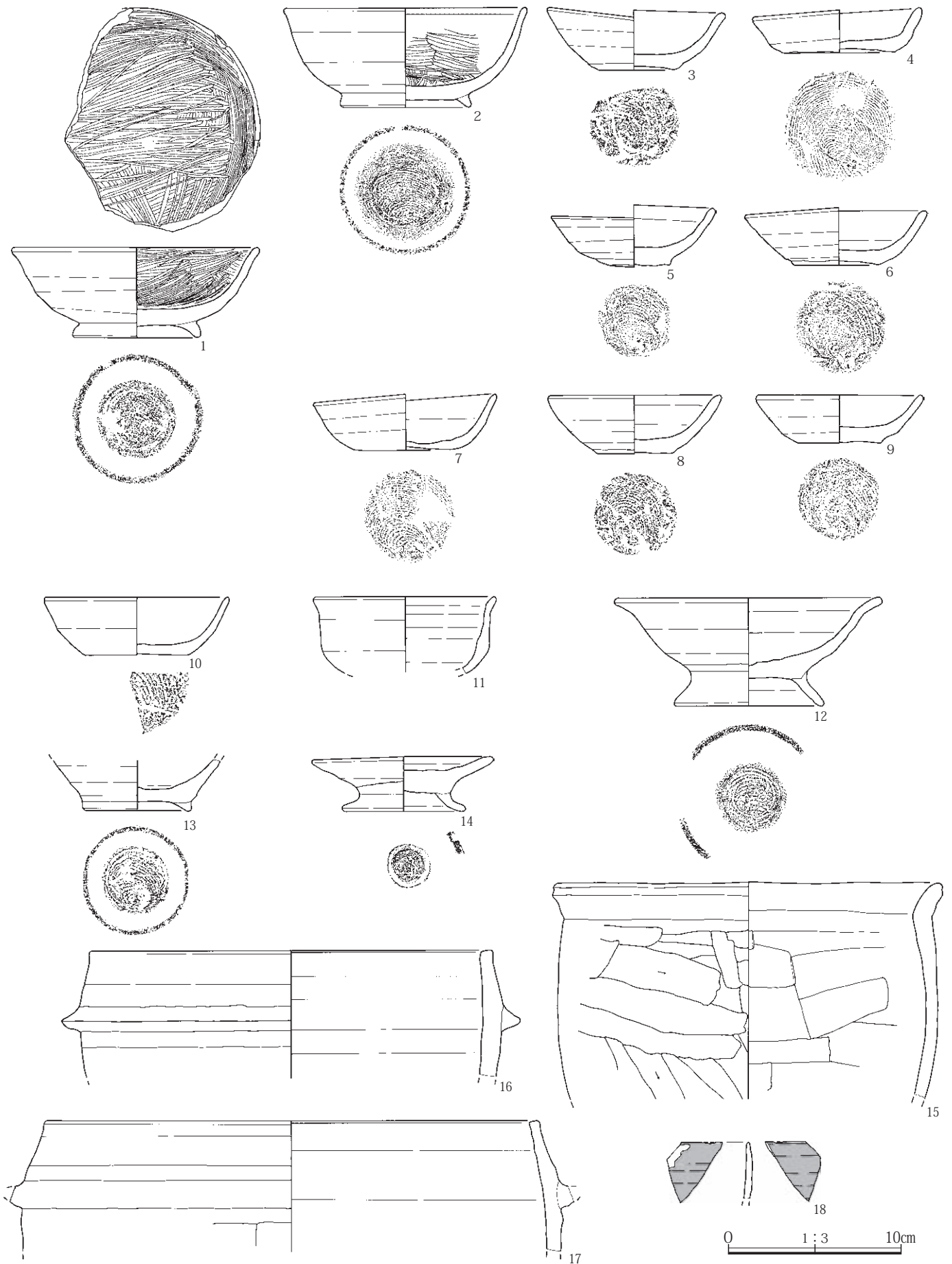


第35図 8号住居

第4章 発見された遺構と遺物



第36図 8号住居掘り方及び竈



第37図 8号住居出土遺物

第4章 発見された遺構と遺物

9号住居(第38・39図、PL.11・12・41)

位置 89区P7～Q8グリッド。89区中部やや西寄り、仮2区中部東寄りに位置する。

方位 N-2°-W

規模 長424cm、幅311cm、深さ35cm

竈 奥行71cm、幅71cm 燃烧部径30×51cm

床下土坑1 径107×98cm 深さ5cm

床下土坑2 径164×141cm 深さ18cm

床下土坑3 径65×56cm 深さ10cm

形状・構造 本住居のプランは横長の隅丸長方形を呈する。

土坑状、ピット状の浅い掘り込みを伴う浅い掘り方を有し、これを褐色土で埋め戻して床面を造り出している。

竈は南壁西寄りに設置され、浅い掘り方を床材と同じ

褐色土に炭化物や灰を多く混ぜた土で埋め戻して燃烧面を造っている。袖は炭化物粒を多く含む暗褐色土などで造っている。

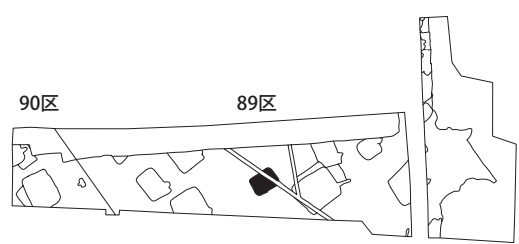
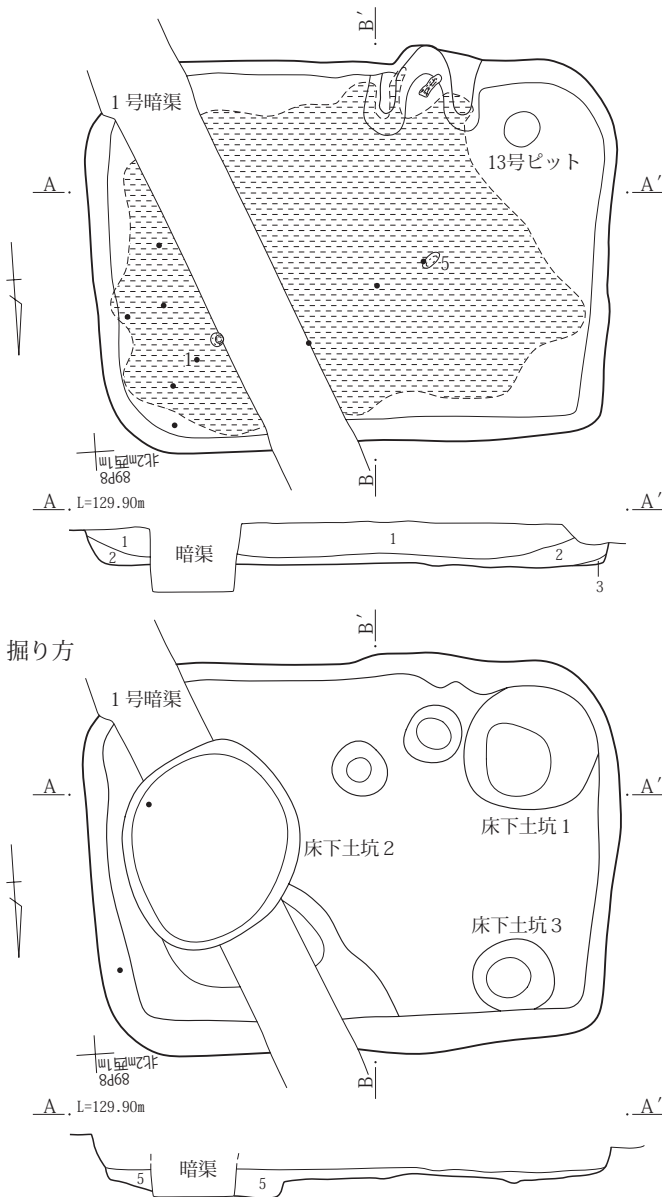
また柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。なお、住居全体に炭の分布が見られた。

埋没土 炭化物粒を含む黒褐色土。

重複 13号ピットと重複するが新旧関係は不明。

出土遺物 土師器・須恵器片と少量の灰釉陶器片の出土があり、須恵器杯(1～3)・椀(4)・段皿(5)、角釘と見られる鉄製品(6)を図示した。

所見 本住居は所謂焼失家屋であり、焼却処分されたものと認識される。またその時期は出土遺物から推して10世紀後半と判断される。

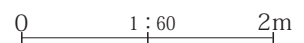


〔住居覆土〕

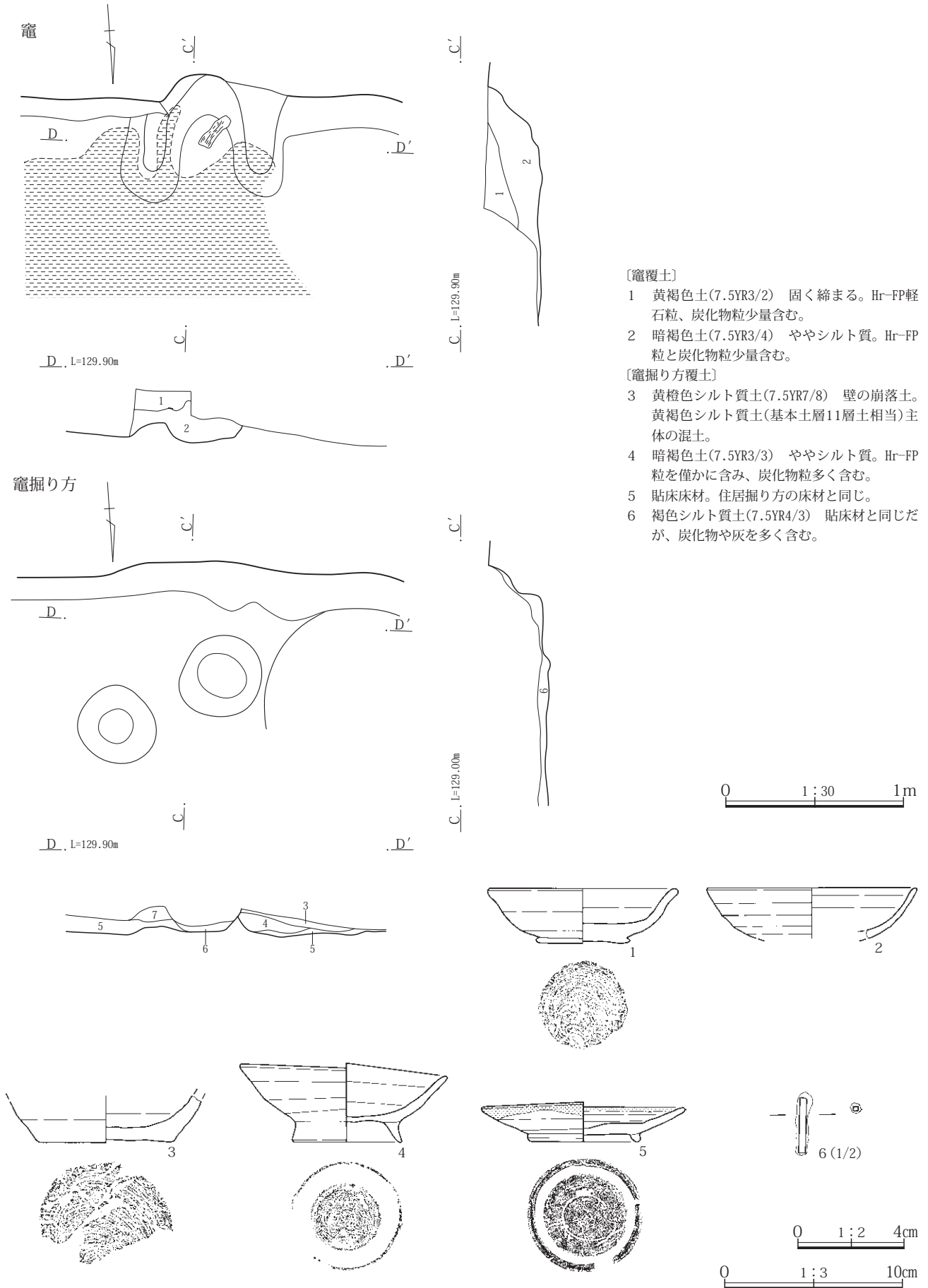
- 1 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 粘性強く締めりあり。Hr-FP粒と少量の炭化物粒を含む。
- 2 にぶい褐色土(7.5YR6/3) 粘性の強い土とシルトの混土。やや締めりあり。Hr-FP軽石粒少量含み、炭化物粒含む。
- 3 黄橙色シルト質土(7.5YR7/8) 地山黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)の崩落土主体。
- 4 褐色土(7.5YR4/3) やや粘性強い。2層と同じだが炭化物粒と粘土ブロックを多く含み焼土粒含む。

〔住居掘り方覆土〕

- 5 褐色シルト質土(7.5YR4/3) Hr-FP軽石粒僅かに含み、炭化物粒少量含む。



第38図 9号住居



第39図 9号住居竈と出土遺物

第4章 発見された遺構と遺物

10号住居(第40～42図、PL.12・41)

位置 89区Q9～R10グリッド。89区北西部、仮2区中部西寄りに位置する。

方位 N-86°-E

規模 残存405×350cm、深さ14cm

竈 残存長112cm 残存幅86cm 焚口幅40cm

床下土坑1 径88×85cm、深さ12cm

床下土坑2 径94×91cm、深さ40cm

床下土坑3 径69×50cm、深さ17cm

形状・構造 本住居は北東側が攪乱により失われており、全容は把握できなかった。本住居は、やや隅丸の横長の長方形プランを呈する。

本住居の床面は地床に近いが、土坑状の掘り込みの部分にはぶい橙色土で埋め戻して床面を造っている。

竈は東壁南寄りに(90)×68cm、深さ13cmの隅丸長方形

様のプランの掘り方を壁面を跨いで掘削し、これを凹凸のある竈の褐色土等で埋め戻して焼面を造り出しているが、焼面は3面確認されている。袖は袖石を据えて褐色土等で造り出している。焼部の奥壁にも石が積まれ、煙道部との境は中空になるように積まれている。

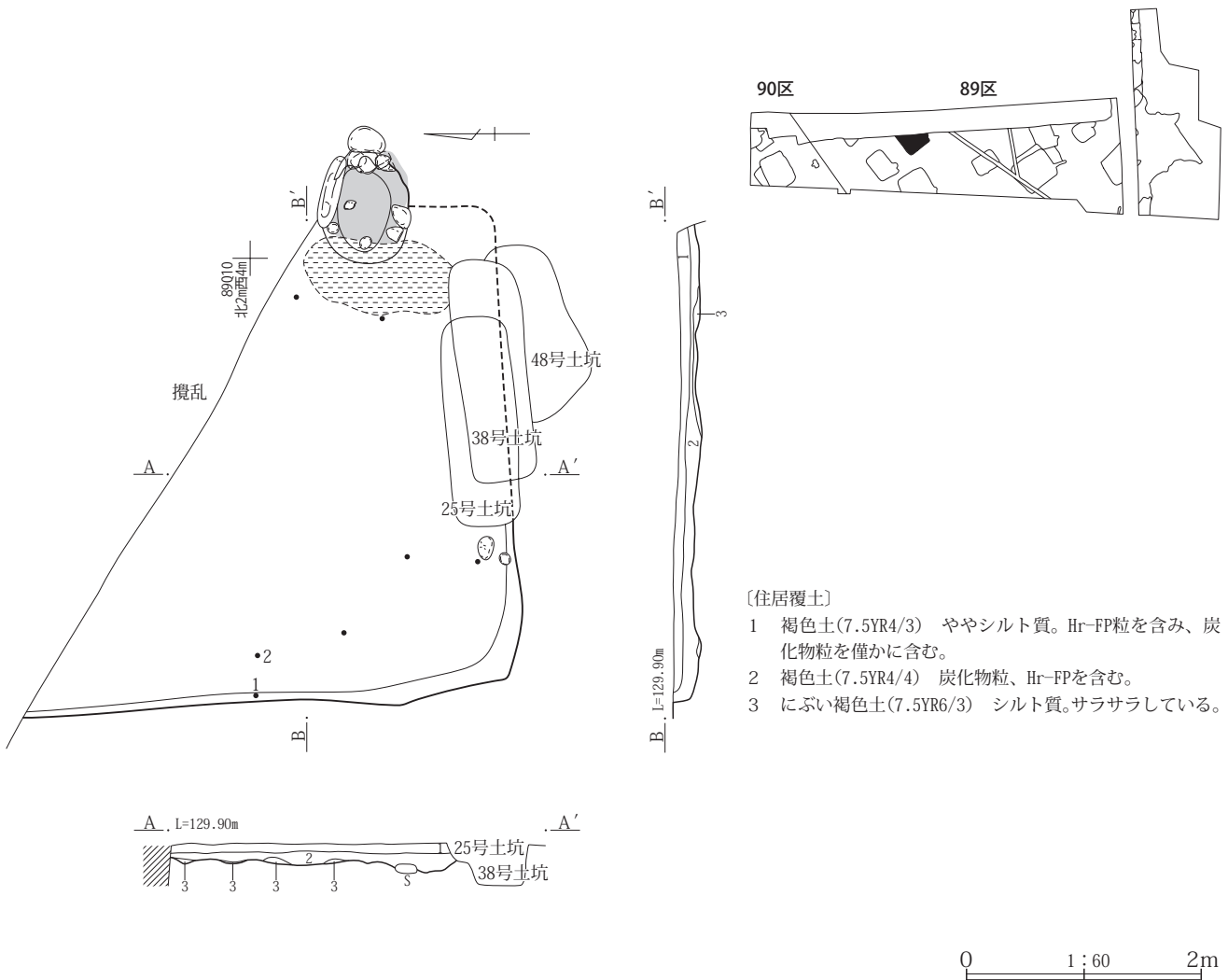
また柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 褐色土で覆われている。

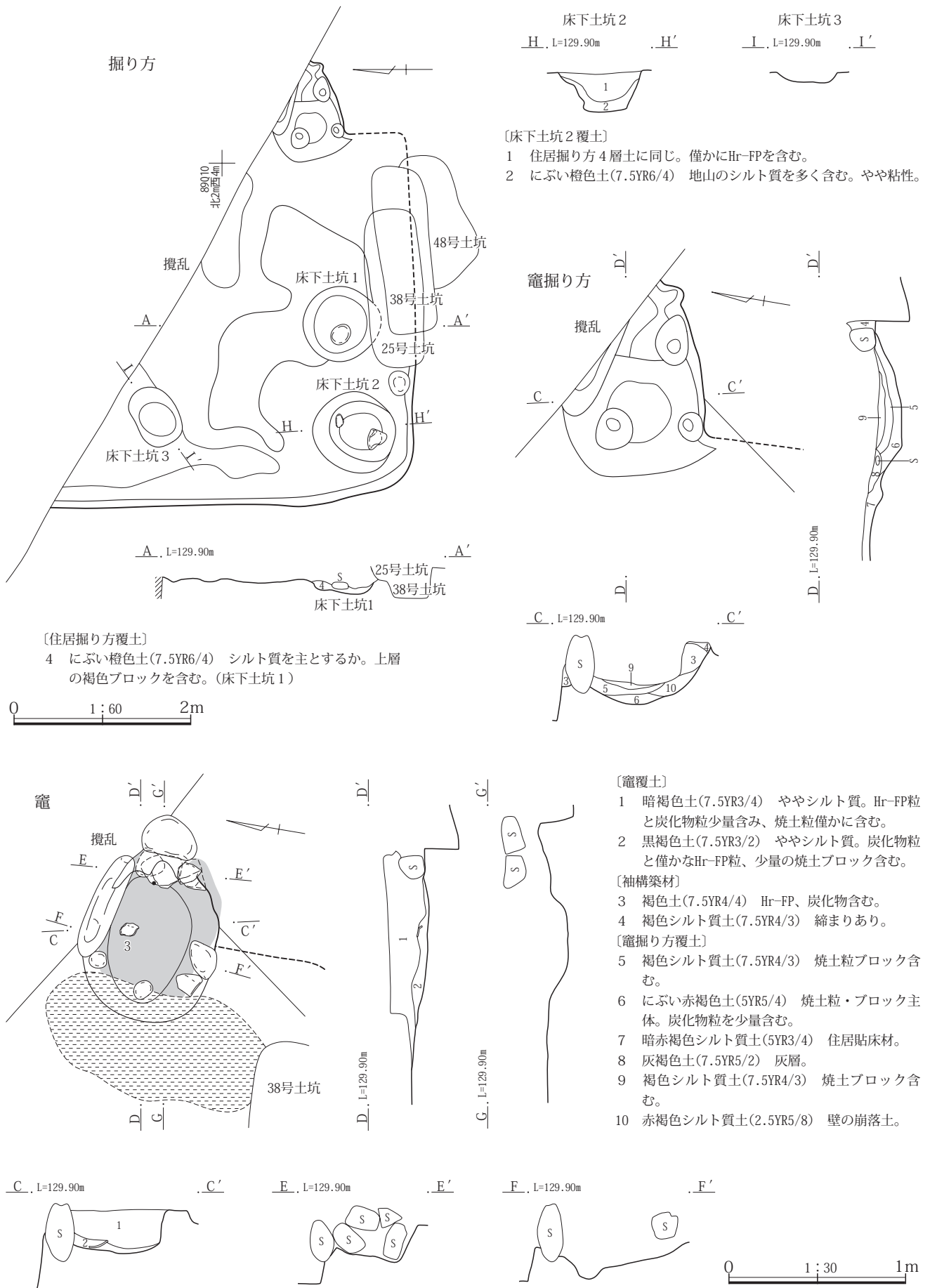
重複 25・27・37・38・48号土坑と重複する25・38号土坑は本住居より新しく、他の遺構との新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 土師器片と少量の須恵器片が出土し、須恵器杯(1)、土釜(2)、土師器甕(3・4)を図示した。その他、砥石(5)や鉄滓1点の出土があった。

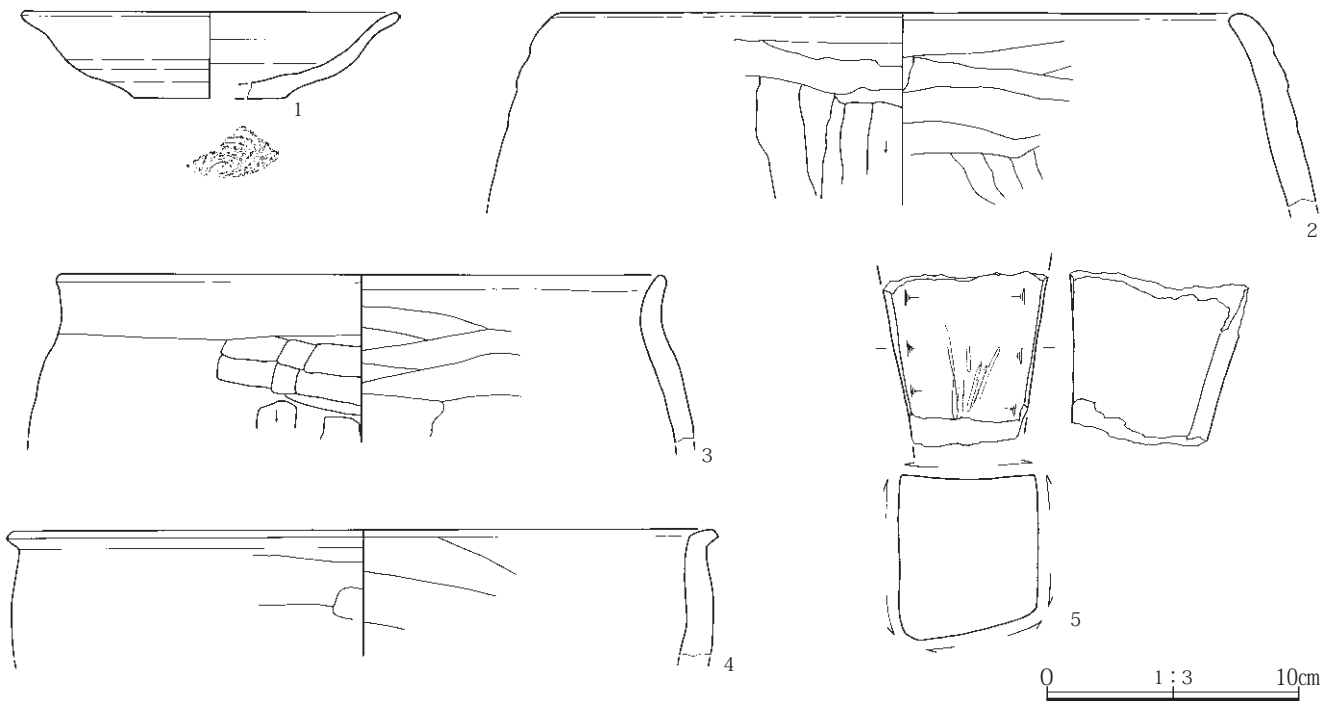
所見 本住居の時期は出土遺物から推して10世紀後半と判断される。



第40図 10号住居



第41図 10号住居掘り方及び竈



第42図 10号住居出土遺物

11号住居(第43～46図、PL.12・13・41)

位置 89区R8～S9グリッド。89区西部、仮2区中南部西寄りに位置する。

方位 N-87°-E

規模 残存長(385)cm、幅(525)cm、深さ18cm

竈 奥行184cm、幅90cm 燃烧部70×87cm

煙道幅12cm、煙道長94cm

左袖幅23cm、左袖長36cm

形状・構造 本住居は南西寄りが調査区外に在り、全容は確認できなかった。本住居は、横長の隅丸長方形のプランを呈する。

北東隅と南東隅に土坑状の浅い掘り込みを持つ掘り方を有し、その一部を黄褐色土で埋め戻し、北寄りには暗褐色土、南寄りには黒褐色土で貼床状に床面を造っている。

竈は東壁の恐らく南隅部寄りに設けられ、壁面手前に幅132cm以上、奥行85cm程、深さ7cmの半円形プラン(以下「竈掘り方1」とする)、更に壁面を跨ぐ位置に幅72cm、奥行66cm、深さ13cmの縦長の隅丸台形逆プラン(以下「竈掘り方2」とする)の掘り方を掘削している。掘り方は埋め戻されて燃烧面を造り出しているが、最初に掘り方1を掘削し、黄褐色土で埋め戻したのち、掘り方2を掘削し直して暗褐色土で埋めるといった新旧2回の補修の在ったことが確認される。少なくとも2度目の施工の際には掘

り方1の左右両側に礫の形に合わせた形状の10cm以下の掘り込みを伴って河床礫が縦位に据えられ、掘り方2の左側には幅12～16cm、長さ22～28cmの縦長楕円形様プランの、また右側には幅18cm、長さ62cmの隅丸短冊形プランの、共に深さ10cm程の掘り込みを伴って左側に2基、右側に1基の河床礫が表裏面を内側にして横位で据えられ、左側の中程には1個の河床礫が乗せられ、右側の礫の上には手前側に1個の河床礫、奥側に須恵器椀(2)が置かれていた。また奥壁側には左右両側の礫に乗せて河床礫が据えられ、その上に土釜片(5)が架けられていた。煙道は掘り抜きで、先端に径37×47cmの楕円形様のプランの竪坑が入っている。

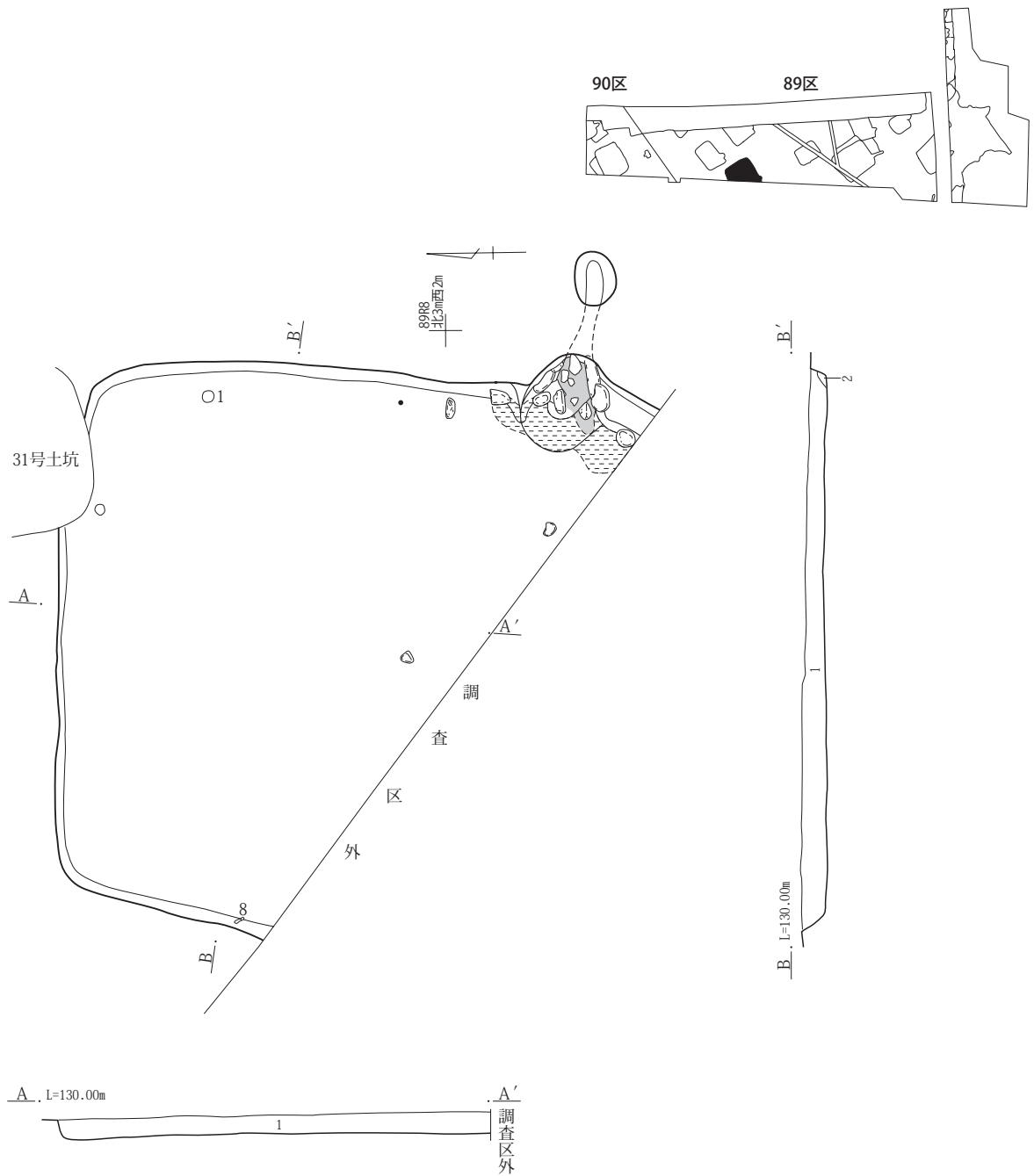
床面に於いては柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 炭化物粒を少量含む褐色土。

重複 31・76号土坑と重複するが、本住居は31号土坑より古く、76号土坑より新しい。

出土遺物 土師器・須恵器片と少量の灰釉陶器片の出土があり、須恵器杯(1)・椀(2・3)、土釜(4・5)、土師器甕と思われる土器片(6)、羽釜(7)、鉄鏝(8)や鉄滓4点の出土があった。

所見 本住居の遺存状況は比較的良好で、横位に据えた礫を袖石に用いた例は珍しい。また本住居は出土遺物から推して10世紀後半の所産と判断される。



〔住居覆土〕

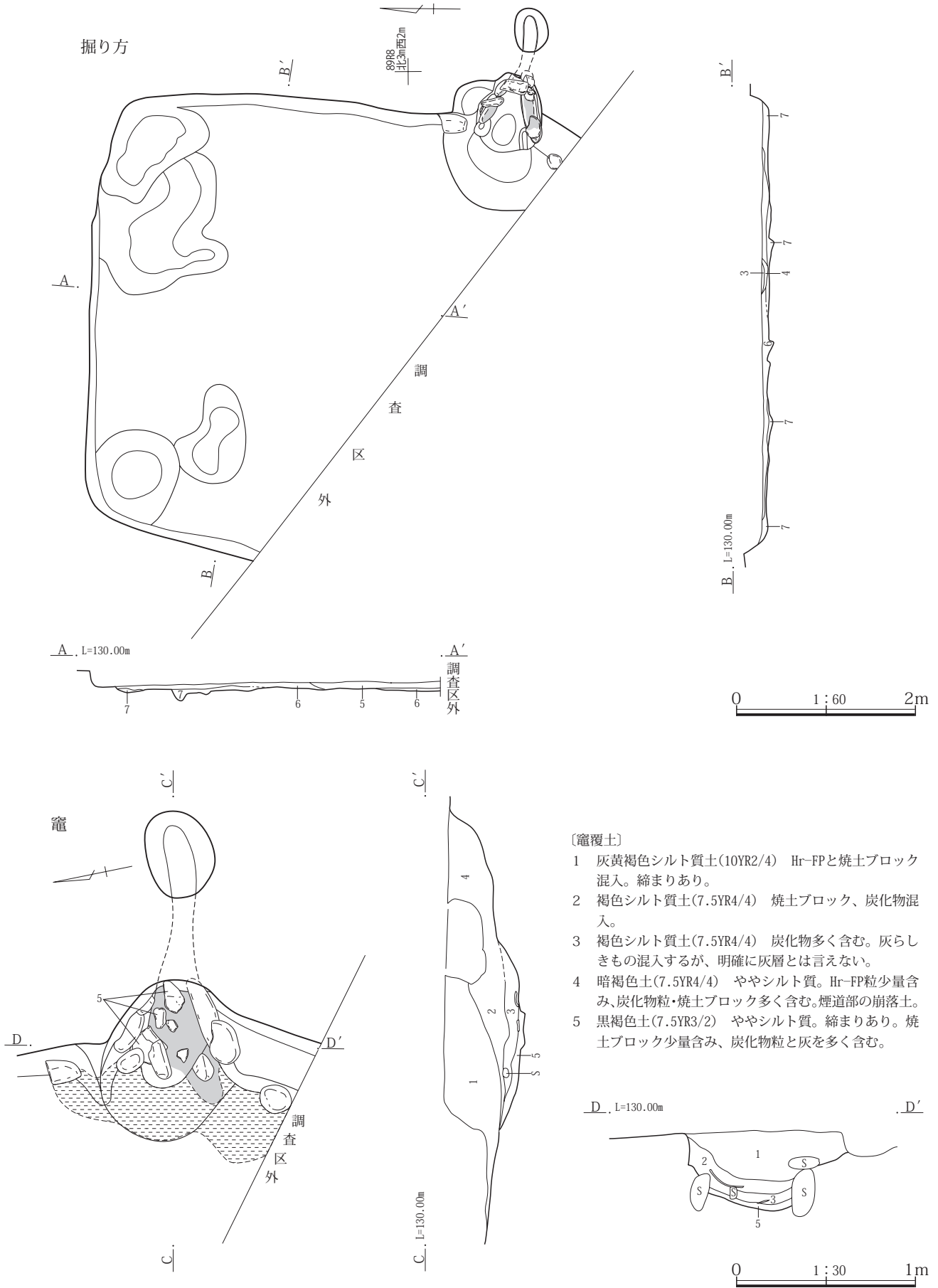
- 1 褐色土(7.5YR4/3) ややシルト質。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
- 2 黄橙色シルト質土(7.5YR7/8) 地山黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)の崩落土。

〔住居掘り方覆土〕

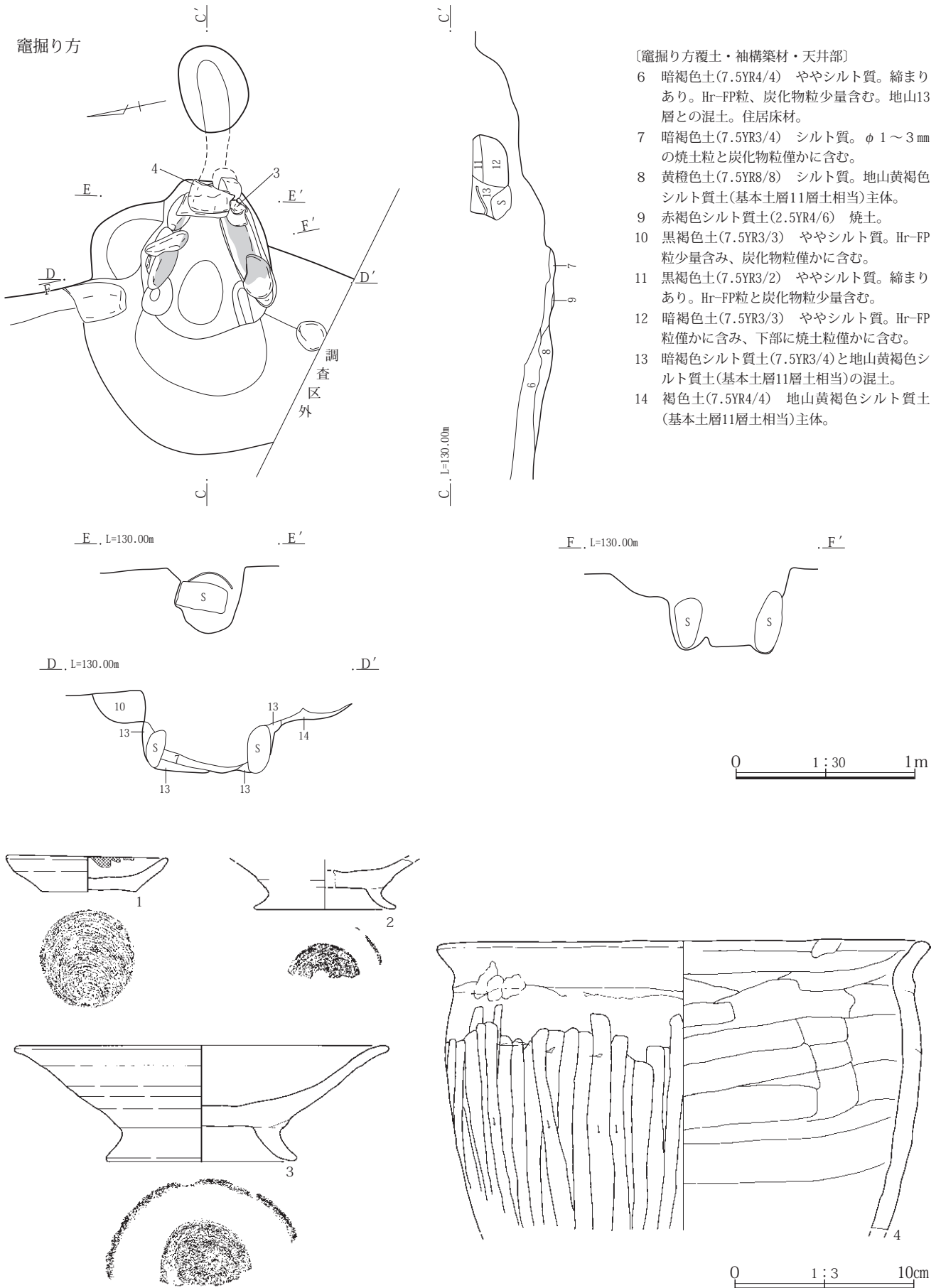
- 3 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) Hr-FP粒僅かに含み、炭化物粒と少量の焼土粒含む。
- 4 赤橙色シルト質土(10R6/6) やや締まりあり。
- 5 黒褐色土(7.5YR3/2) 締まりあり。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
- 6 暗褐色土(7.5YR3/4) やや締まりあり。Hr-FP軽石粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)主体で暗褐色土(7.5YR4/3)が少量入る混土。
- 7 黄橙色シルト質土(7.5YR8/8) 締まりなし。Hr-FP粒と炭化物粒僅かに含む。黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)主体で暗褐色土(7.5YR4/3)少量混入。

0 1:60 2m

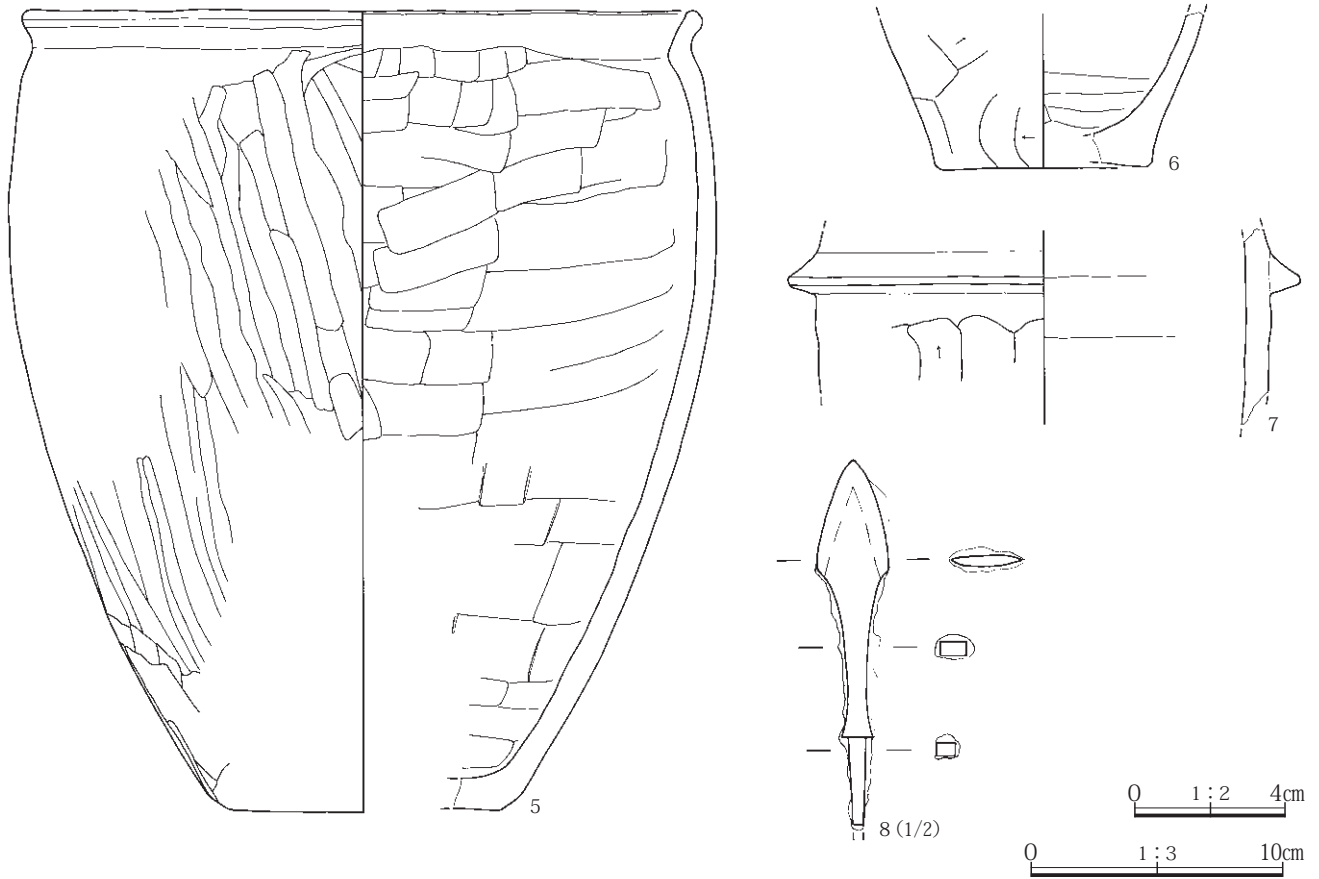
第43図 11号住居



第44図 11号住居掘り方及び竈



第45図 11号住居竈掘り方と出土遺物(1)



第46図 11号住居出土遺物(2)

12号住居(第47・48図、PL.13・42)

位置 89区 S11～T11グリッド。89区北西隅部、仮2区西部に位置する。

方位 N-86°-E

規模 残存長166×125cm、深さ28cm

形状・構造 本住居は殆どが攪乱により失われ、南西隅部を確認したに過ぎない。

浅い掘り方を有し、これをにぶい褐色土で埋め戻して床面を造り出している。

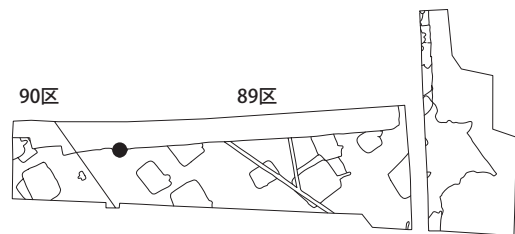
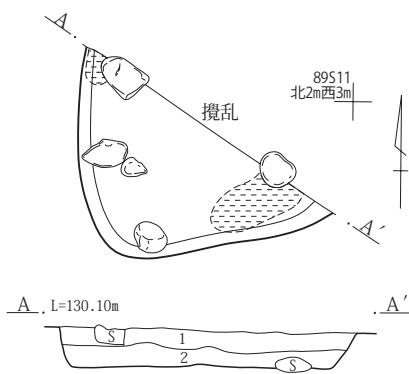
竈、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 暗褐色土、褐色土で覆われる。

重複 他遺構との重複は見られなかった。

出土遺物 少量の土師器・須恵器・灰釉陶器片の出土があったが、この中には須恵器の杯(1)・椀(2)・段皿(3)が見られた。

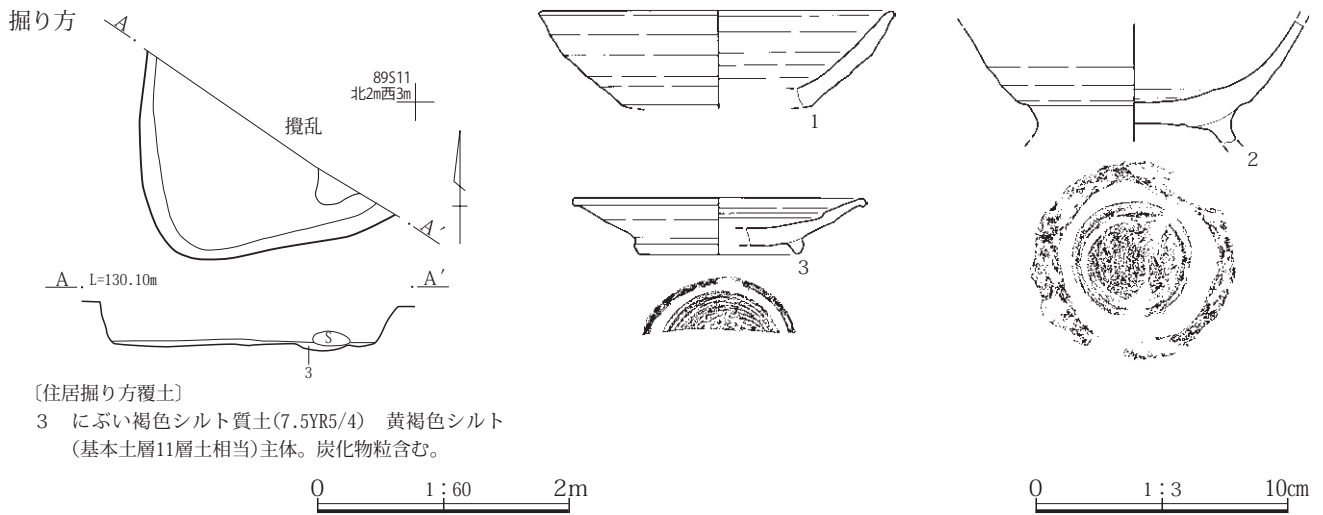
所見 床面に炭化物の分布が見られることから、焼失家屋の可能性を有する。また時期は出土遺物から推して10世紀前半と認識される。



〔住居覆土〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしilt質。Hr-FP粒含み、炭化物粒少量含む。
- 2 褐色silt質土(7.5YR4/4) Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。

第47図 12号住居



〔住居掘り方覆土〕
3 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/4) 黄褐色シルト
(基本土層11層土相当)主体。炭化物粒含む。

第48図 12号住居掘り方と出土遺物

13号住居(第49～54図、PL.13・14・42)
位置 89区N6～P7グリッド。89区中部やや西寄り、
仮2区東部のやや西寄りに位置する。
方位 N-92°-E
規模 長696cm、残存幅546、深さ23cm
竈1A 奥行158cm、幅74cm
焼部 径30×75cm、
左袖 幅12cm、長さ25cm
右袖 幅(36)cm、長さ32cm
煙道 幅31cm、長さ68cm
竈1B 奥行215cm、幅(72)cm
竈2 奥行240cm、幅60cm、煙道幅21cm
床下土坑1 長さ194cm、幅115cm、深さ23cm
床下土坑2 長さ234cm、幅131cm、深さ22cm

形状・構造 本住居は南縁が4号溝と重複して失われているため全容は詳らかにできなかった。本住居は、プランは明確ではないが凡そ縦長の隅丸方形を呈すると思慮される。

本住居は掘り方を有しており、壁際に沿って高さ10cm程のテラス状の掘り残しが遺されている。南西寄りに南壁に沿って2基の床下土坑が東西方向に縦列に掘削されている。またその北寄りに1基の床下土坑が掘削されている。こうした構造を伴う掘り方をにぶい橙色土や黒褐色土等で埋め戻して床面を造り出している。

竈は東壁の南端近くに設置されているが、廃絶時の竈(竈1A)の他に、同じ位置に先に設置されていた竈(竈1B)、竈1A・Bの北側に設置された竈(竈2)の3ヶ

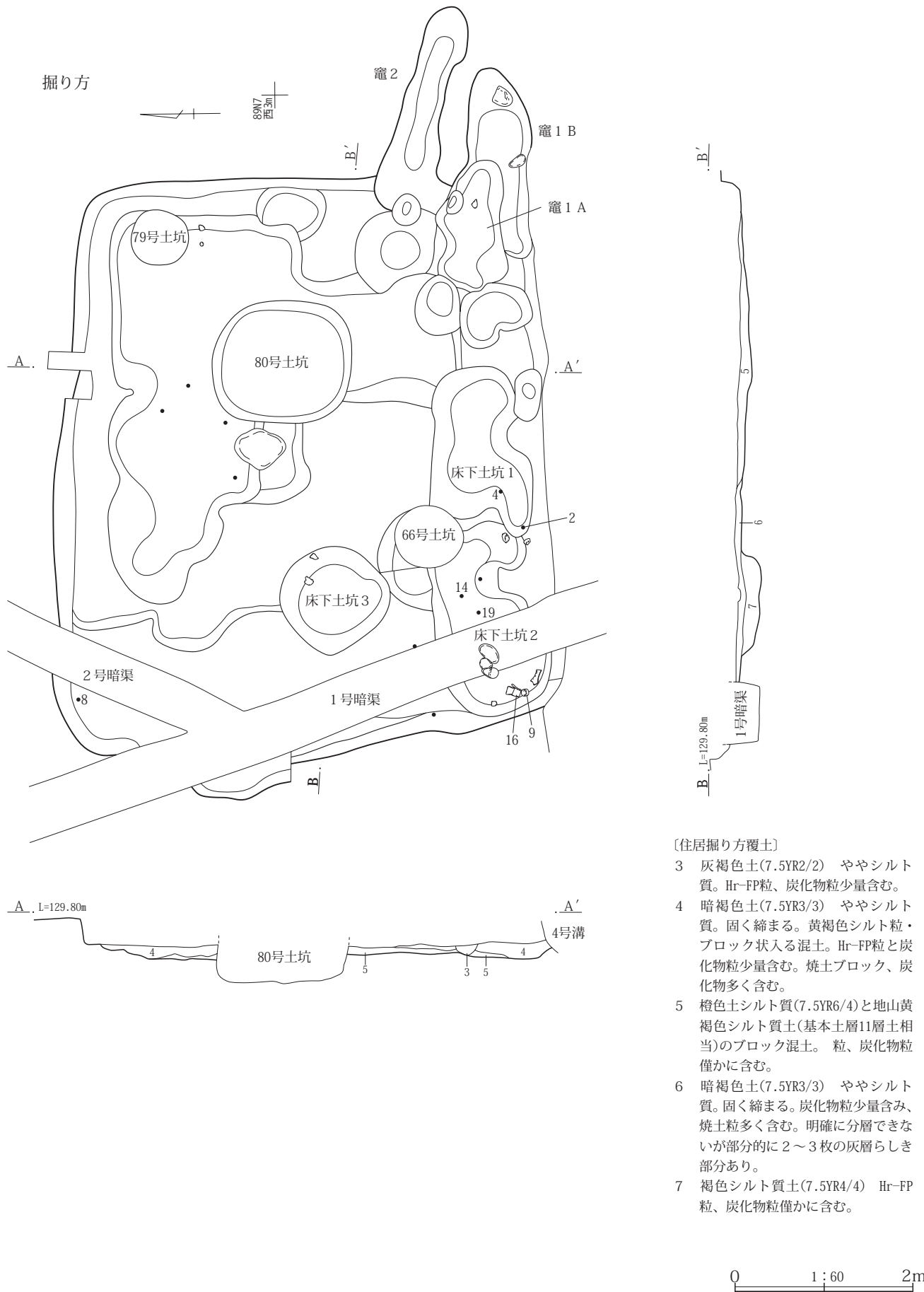
所の竈が確認されていた。また、竈2は26号住居の竈である可能性が考慮する。なお竈2については83頁に後述する。

竈1Aは竈を跨いで掘削された縦長不定形の掘り方を有し、これを焼土ブロック等で埋め戻して焼面を造り出しているが、この焼面は壁面手前側に設置されている。焼面両側には袖が設置され、黒褐色土等でよく締めて造られているが、右袖には袖石も残されている。

竈1Bは竈1Aより僅かに南壁寄りに造られている。壁面を跨いで形状不特定の掘り方を有し、褐色土等で埋め戻して焼面を造り出している。袖や天井は残されていない。煙道は72×215cmを測る楕円形様の掘り込みを持ち、南側壁は黒褐色土に煙道側面に暗褐色土を貼って造っている。

なお、貯蔵穴や柱穴等は確認されなかったが竈1A・1Bから西へ延びる溝は26号住居の周溝と判断される。埋没土 炭化物粒を少量含む黒褐色土で覆われているが、床面上に炭化物が広い範囲で分布している。

重複 上位面の2号土坑、1・2号暗渠、2面の14号住居、4号溝、66・79・80号土坑と重複し、14・26号住居より新しいが、他の遺構に対しては本住居の方が古い。
出土遺物 須恵器・灰釉陶器片や多量の土師器片の出土があったが、この中には黒色土器碗(1)・須恵器杯(2～6・8)・碗(7・9・10)・大甕(16・17)、灰釉陶器碗(11)・壺(14)・皿と思われるもの(12)、緑釉陶器皿(13)、羽釜(15)が見られ、この他にも土製有孔円板(18)、不明土器(19)、不明石製品(22)、刀子(21)、鉄製紡錘車(20)、

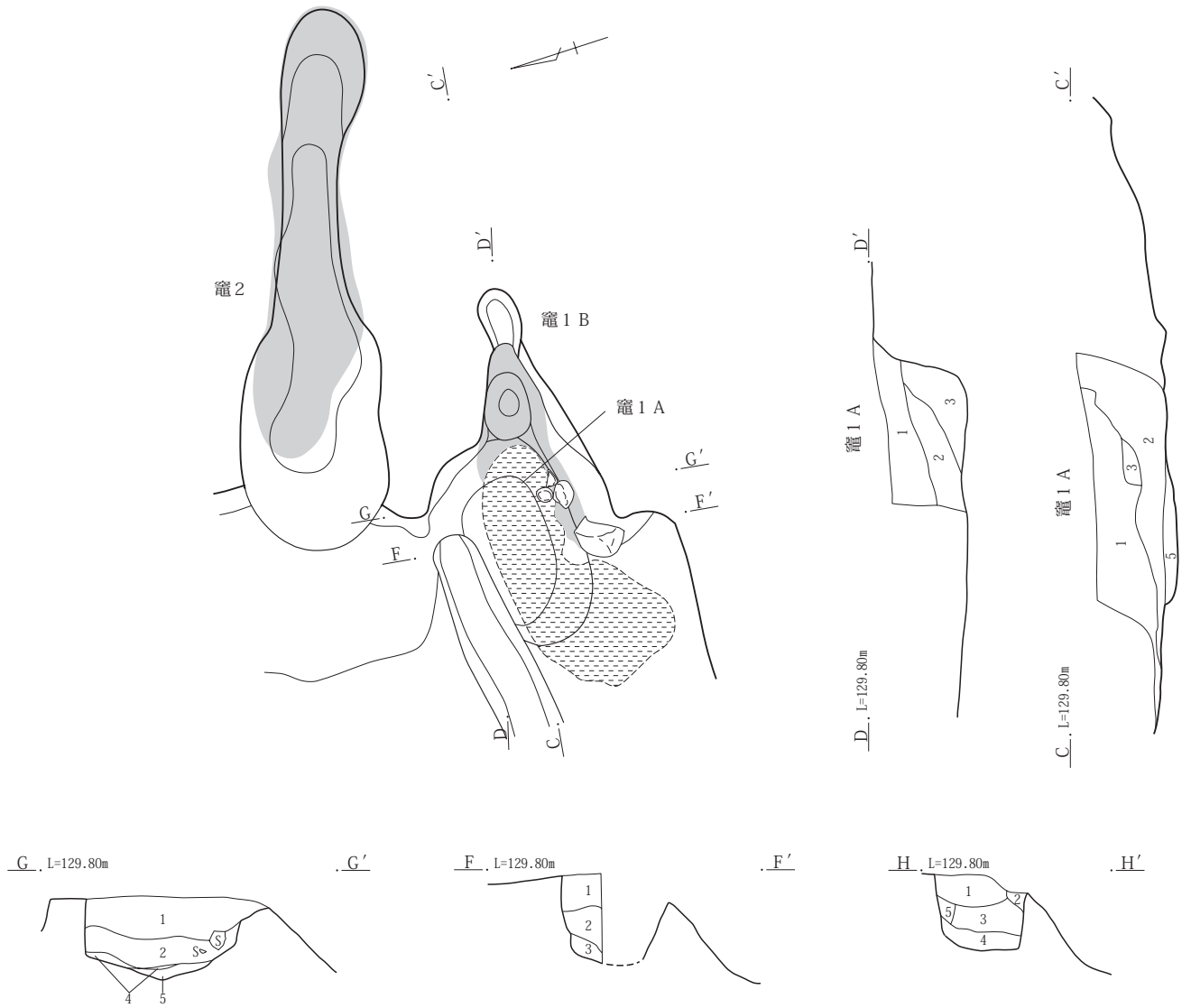


〔住居掘り方覆土〕

- 3 灰褐色土(7.5YR2/2) ややシルト質。Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。
- 4 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。固く締まる。黄褐色シルト粒・ブロック状入る混土。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。焼土ブロック、炭化物多く含む。
- 5 橙色土シルト質(7.5YR6/4)と地山黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)のブロック混土。粒、炭化物粒僅かに含む。
- 6 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。固く締まる。炭化物粒少量含み、焼土粒多く含む。明確に分層できないが部分的に2~3枚の灰層らしき部分あり。
- 7 褐色シルト質土(7.5YR4/4) Hr-FP粒、炭化物粒僅かに含む。

第50図 13号住居掘り方

竈



〔竈覆土 C-C'・G-G'〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) ややシルト質。縮まりあり。Hr-FP粒、炭化物粒少量含み、焼土粒僅かに含む。
- 2 黒褐色土(7.5YR3/2) Hr-FP粒僅かに含む。炭化物粒少量含む。特に使用面付近に焼土粒ブロックを少量含む。
- 3 褐色シルト質土(7.5YR4/4) 縮まりあり。Hr-FP粒を含む。炭化物粒、焼土粒は殆ど見られない。
- 4 褐色土(7.5YR4/4) ややシルト質。Hr-FP粒僅かに含み、炭化物粒や灰を多く含む。
- 5 褐灰色土(7.5YR5/1) サラサラする。ややシルト質。灰を非常に多く含む。焼土粒を少量含むが炭化物粒殆ど見られない。

〔竈覆土 D-D'〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) ややシルト質。固く締まる。焼土粒と少量のHr-FP、僅かな炭化物粒含む。内面に近い部分は被熱による焼土化見る。
- 2 黒褐色土(7.5YR3/1) ややシルト質。固く締まる。Hr-FP軽石粒、焼土粒ブロック、褐灰色粘土(7.5YR4/1)を少量含み、炭化物粒僅か含む。
- 3 黒褐色土(7.5YR3/2) 焼土粒ブロックを含む天井部の壁の崩落土と考えられる。底面付近では灰も埋まるが炭化物は僅かしか見られない。

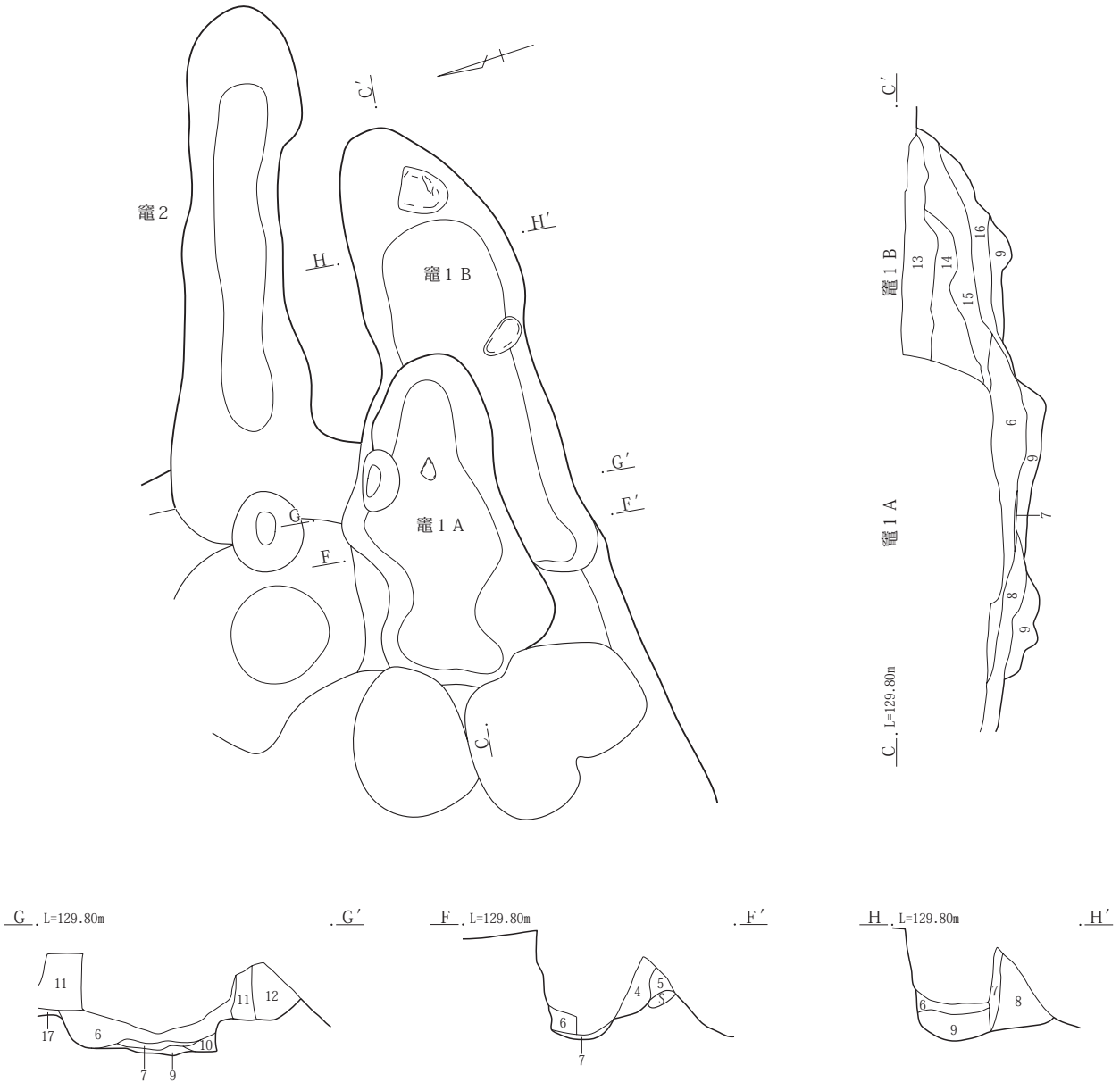
〔竈覆土 F-F'〕

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) Hr-FP粒、炭化物粒、焼土粒ブロック少量含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土粒・焼土粒ブロックを非常に多く含み、Hr-FP粒、炭化物粒を僅かに含む。
- 3 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土粒・焼土粒ブロックを含む混土。Hr-FP粒、炭化物粒をごく僅かに含む。径1～2mm程の塊で灰らしきものも僅かに混入。

0 1:30 1m

第51図 13号住居竈

竈掘り方



〔竈掘り方覆土 C-C'・G-G'〕

- 6 橙色土(2.5YR6/8) 焼土粒ブロックが主体で5層土との混土。左袖付近には焼土粒が少なく暗褐色土(7.5YR3/4)が多い。
- 7 黒褐色土(7.5YR3/2) 灰層。
- 8 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしilt質。固く締まる。Hr-FP粒を少量含む。13層土少量含む。
- 9 褐色silt質土(7.5YR4/4) サラサラする。Hr-FP粒を僅かに含む。φ 1～5mmの焼土粒炭化物粒を少量含む。
- 10 6層土と同じ焼土ブロック主体の混土。
- 11 黒褐色土(7.5YR3/2) 締まりあり。Hr-FP粒、炭化物粒を僅かに含む。
- 12 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしilt質。地山黄褐色silt質土(基本土層11層土相当)粒含む混土。少量のHr-FP粒、僅かな炭化物粒含む。
- 13 黒褐色土(7.5YR3/2) Hr-FP粒、炭化物粒、焼土粒ブロックを少量含む。
- 14 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土粒・焼土粒ブロックを非常に多く含む、Hr-FP粒、炭化物粒を僅かに含む。6層に似るが15層により分層した。
- 15 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土粒・焼土粒ブロックを含む混土。Hr-FP粒、炭化物粒を極僅かに含む。灰らしきもののブロックも僅かに混じる。
- 16 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしilt質。炭化物粒、焼土粒を少量含む、Hr-FP粒を僅かに含む。
- 17 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしilt質。焼土粒を多く含む。Hr-FP粒を僅かに含む、炭化物粒を極僅かに含む。

0 1:30 1m

第52図 13号住居竈掘り方

第4章 発見された遺構と遺物

〔竈掘り方覆土 F-F'〕

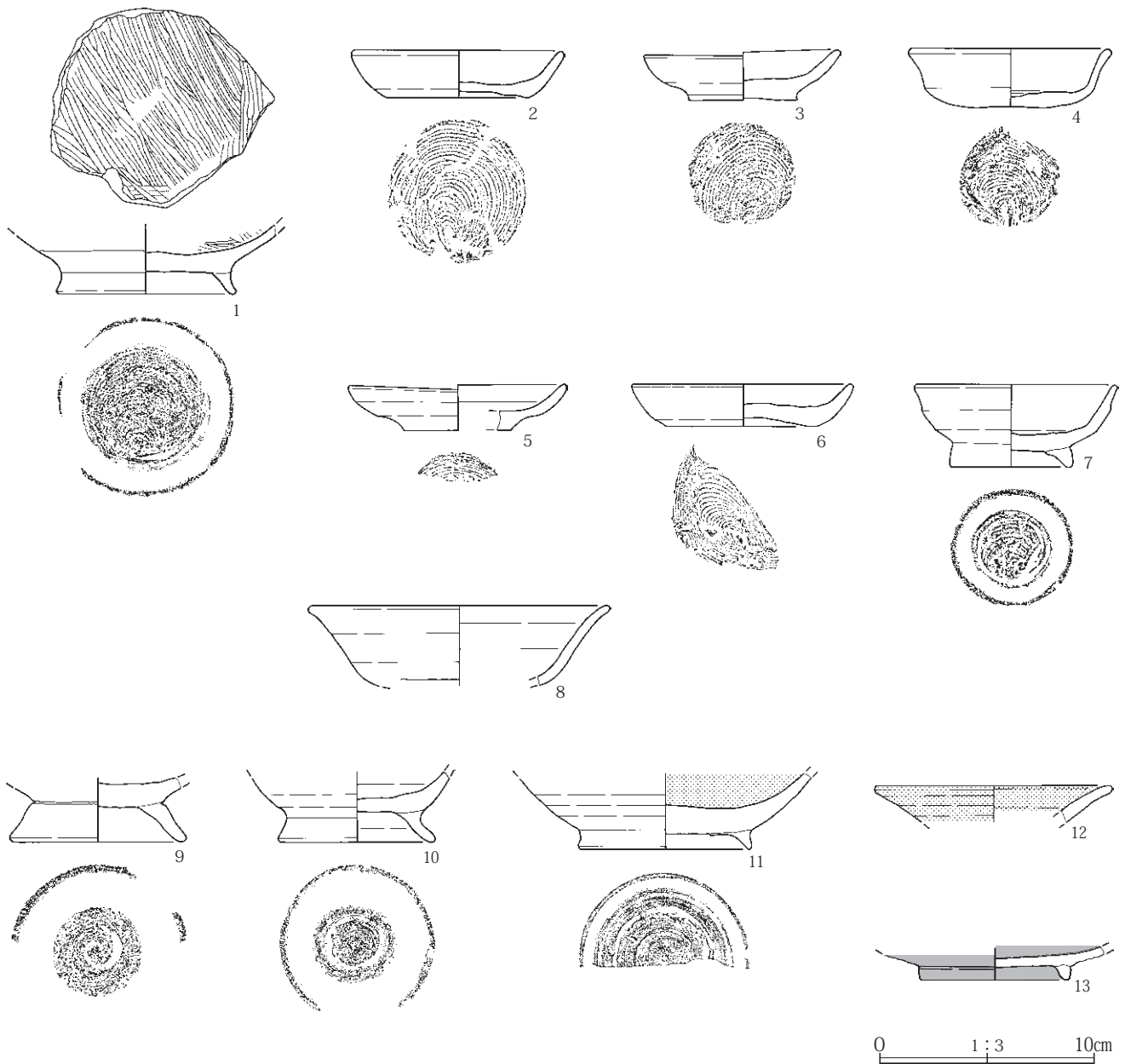
- 4 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしルト質。固く締まる。Hr-FP粒を少量含み、炭化物粒を僅かに含む。焼土粒を含み内面に近い部分は被熱による焼土。
- 5 黒褐色土(7.5YR3/2) ややしルト質。固く締まる。Hr-FP粒、焼土粒ブロック、褐灰色粘土(7.5YR4/1)少量含む。炭化物粒を僅かに含む。
- 6 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしルト質。炭化物粒、焼土粒を少量含み、Hr-FP粒を僅かに含む。
- 7 褐色シルト質土(7.5YR4/4) さらさらする。焼土粒炭化物粒を少量含み、Hr-FP粒を僅かに含む。

〔竈覆土 H-H'〕

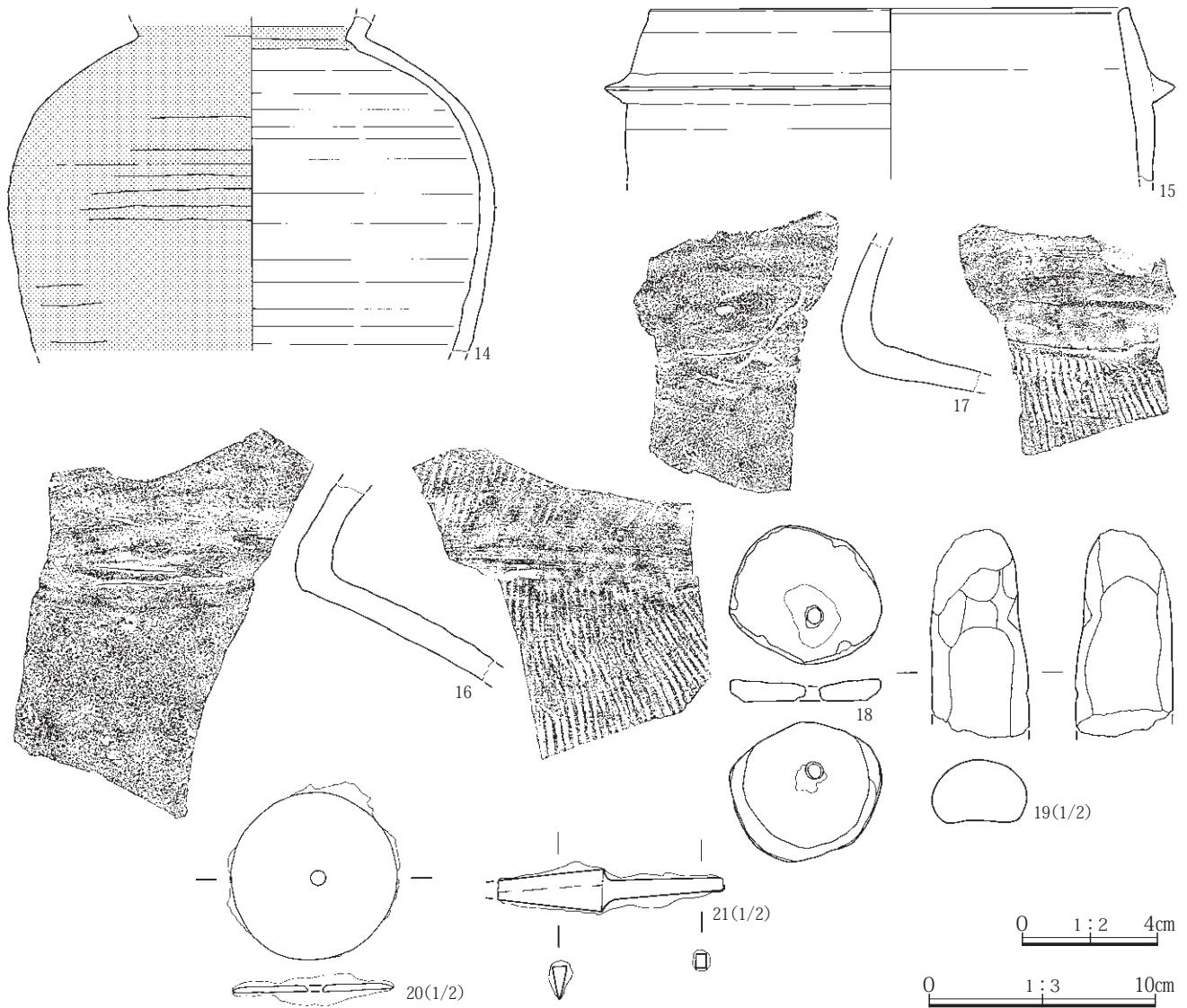
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) Hr-FP粒、炭化物粒、焼土粒・ブロックを少量含む。
- 2 橙色土(2.5YR6/8) 焼土。
- 3 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土粒・ブロックを非常に多く含む。Hr-FP粒、炭化物粒僅かに含む。
- 4 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土粒・焼土粒ブロックを含む混土。Hr-FP粒、炭化物粒をごく僅かに含む。径1~2mm程の灰らしきものも僅かに混じる。
- 5 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしルト質。微細焼土粒を多く含み、Hr-FP粒、炭化物粒僅かに含む。

〔竈掘り方覆土 H-H'〕

- 6 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしルト質。炭化物粒、焼土粒少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。
- 7 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしルト質。固く締まる。F-F' 1層と同じだが被熱による焼土化は殆ど見られない。
- 8 黒褐色土(7.5YR3/2) ややしルト質。固く締まる。Hr-FP粒、焼土粒ブロック、褐灰色粘土(7.5YR4/1)を少量含み、炭化物粒を僅かに含む。
- 9 褐色シルト質土(7.5YR4/4) さらさらする。焼土粒炭化物粒を少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。



第53図 13号住居出土遺物(1)



第54図 13号住居出土遺物(2)

14号住居(第55・56図、PL.14・42)

位置 89区N6～7グリッド。89区中東部、仮2区東寄りに位置する。

方位 N-100°-E

規模 残存長212cm、残存幅384cm、深さ36cm

竈 奥行121cm、幅62cm

右袖残存長8cm、幅28cm

形状・構造 本住居は、西側の多くが13号住居に切られ、北側は土坑群、南部が4号溝に切られているため全容は詳らかにできなかったが、プランは方形状を呈すると見られる。

東壁際に幅1mの極僅かな深さの掘り残しを伴う掘り方を有し、これを褐色土で埋め戻して床面を造っている。

竈は東壁に設け、形状不明の竈掘り方を暗褐色・黒褐

色土で埋め戻して焼面を造り出している。袖は暗褐色土で造っている。

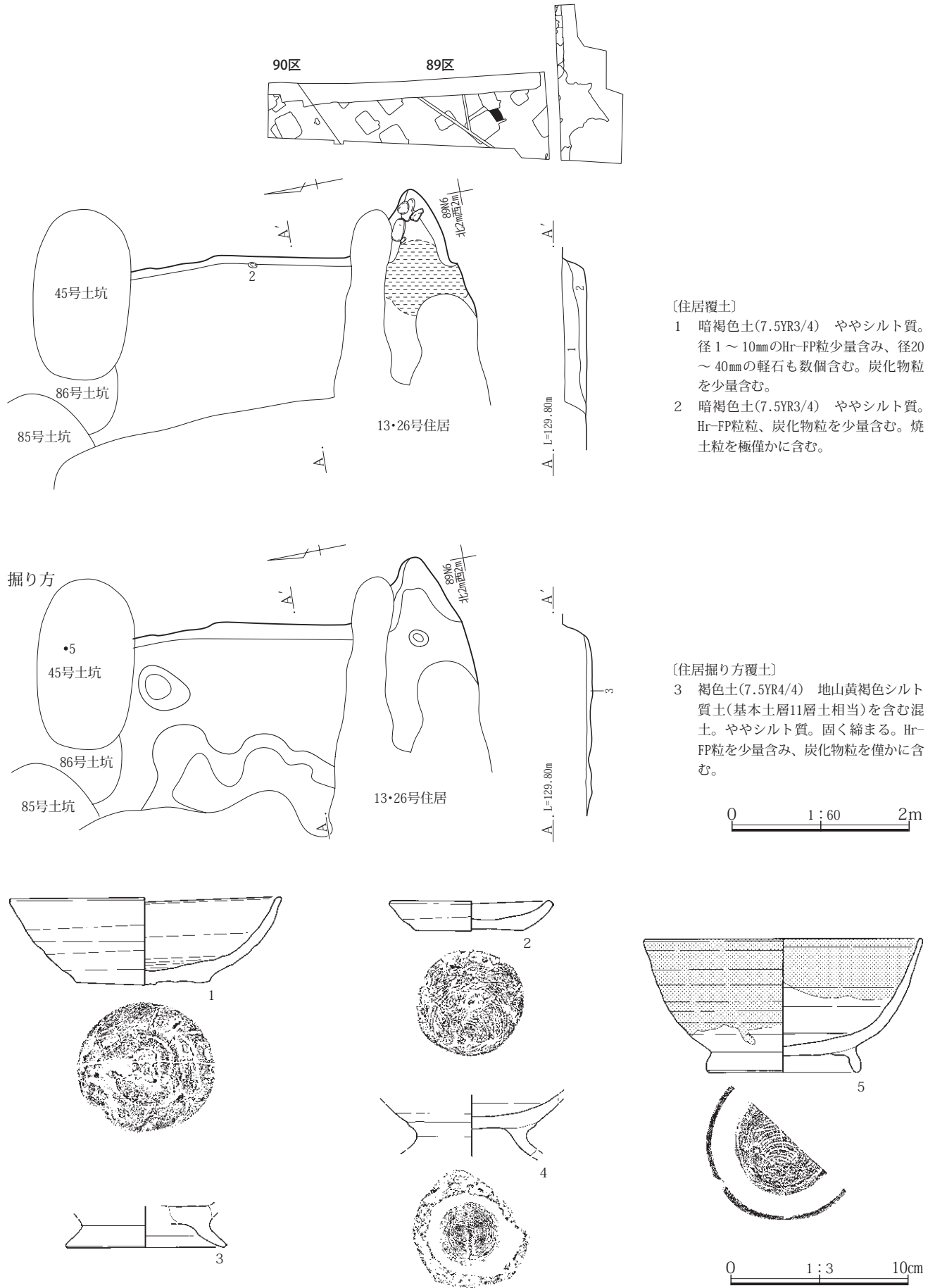
なお、本住居に柱穴や貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 黒褐色土。

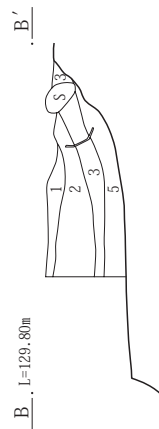
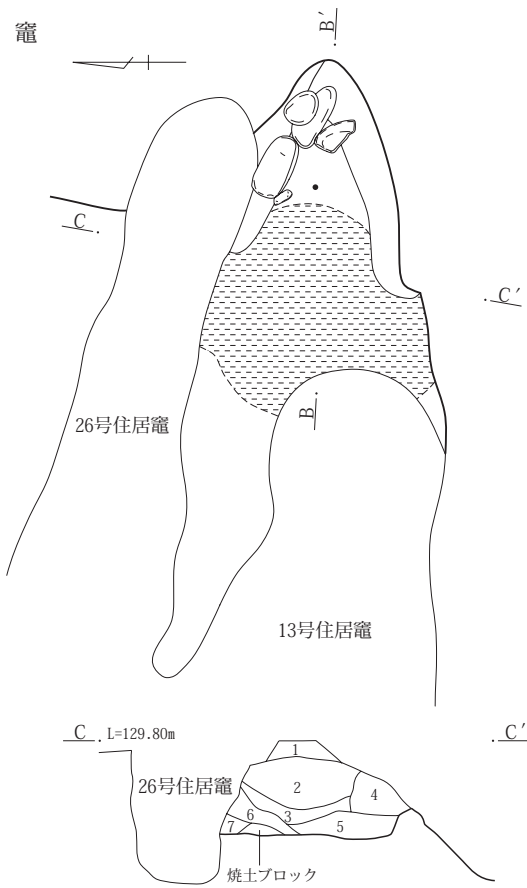
重複 13・26号住居、4号溝、45・86・85号土坑と重複し、その何れよりも本住居は古い。

出土遺物 土師器・須恵器・灰釉陶器片、鉄滓1点の出土が見られたが、この中には須恵器の杯(1・2)や椀(3・4)灰釉陶器の椀(5)があった。

所見 上記床下土坑1の断面観察で確認された灰、焼土の遺存から焼却処分を伴う建て替えの可能性も考慮される。また本住居は出土遺物から推して10世紀後半の所産と判断される。

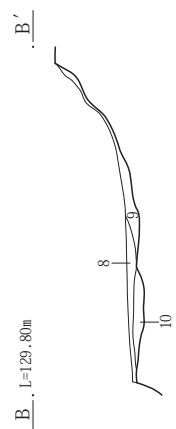
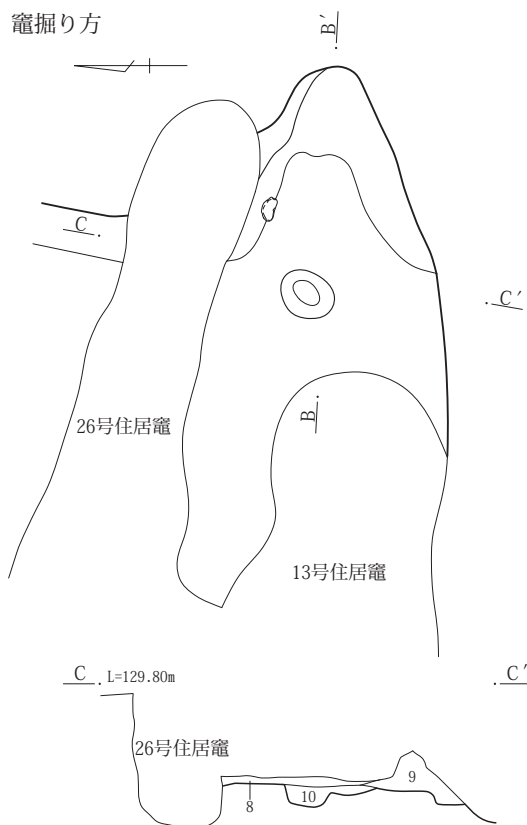


第55図 14号住居と出土遺物



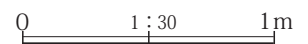
〔竈覆土〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。
- 2 褐色土(7.5YR4/6) ややしルト質。灰褐色粘土をブロック状に含む混土。Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。
- 3 灰褐色土(7.5YR5/2) ややしルト質。粘性あり。焼土粒を少量含むが、焚口付近は少なく煙道付近に多い。Hr-FP粒、炭化物粒を僅かに含む。
- 4 黒褐色土(7.5YR3/2) Hr-FP粒、炭化物粒、焼土粒少量含む。
- 5 暗褐色土(7.5YR3/4) 明褐灰色粘土、焼土粒ブロック、焼土粒、炭化物粒を少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。
- 6 褐色土(7.5YR4/3) やや粘性あり。焼土粒僅かに含む。
- 7 赤褐色土(2.5YR4/6) 粘土、焼土中心の混土。炭化物粒とFP軽石粒を僅かに含む。



〔竈掘り方覆土〕

- 8 黒褐色土(7.5YR3/2) 灰層。炭化物粒含む。
- 9 暗褐色土(7.5YR3/4) 炭化物粒少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。灰が層をなす部分もあり、造り直しの可能性考慮される。
- 10 褐色土(7.5YR4/4) 住居貼床材。



第56図 14号住居竈

第4章 発見された遺構と遺物

15号住居(第57～59図、PL.15・42)

位置 89区N7～8グリッド。89区中東部、仮2区北東部に位置する。

方位 N-112°-E

規模 残存幅386cm、長345cm、深さ33cm

竈 奥行114cm、幅100cm 焚口径66×70cm

右袖 幅27cm、長29cm

煙道 幅37cm、長26cm

床下土坑 径78×75cm、深さ18cm

床下ピット1 径52×55cm、深さ34cm

床下ピット2 径33×38cm、深さ18cm

床下ピット3 径58×(44)cm、深さ15cm

床下ピット4 径33×25cm、深さ19cm

形状・構造 本住居の南端は26号住と45・85・86号土坑の重複により失われている。北側は攪乱によって壊されているため全容は明らかにできなかった。プランは横長の長方形を呈すると想定される。

掘り方に幾つかの土坑・ピット状の掘り込みを有し、これに褐色土、暗褐色土等で埋め戻して床面を造る。

竈は東壁南寄りに設けられ、幅105cm、奥行115cm、深

さ15cm程の楕円プランの竈掘り方を有し、これを明赤褐色土等で埋め戻して焼面を造っている。袖は暗褐色土に褐灰色土を混ぜた土で造っている。

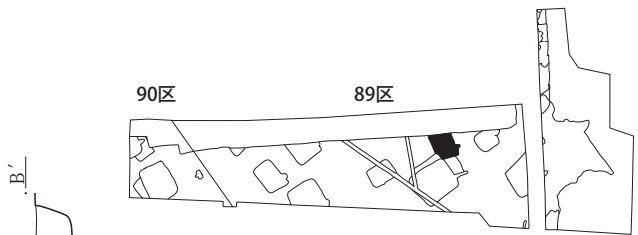
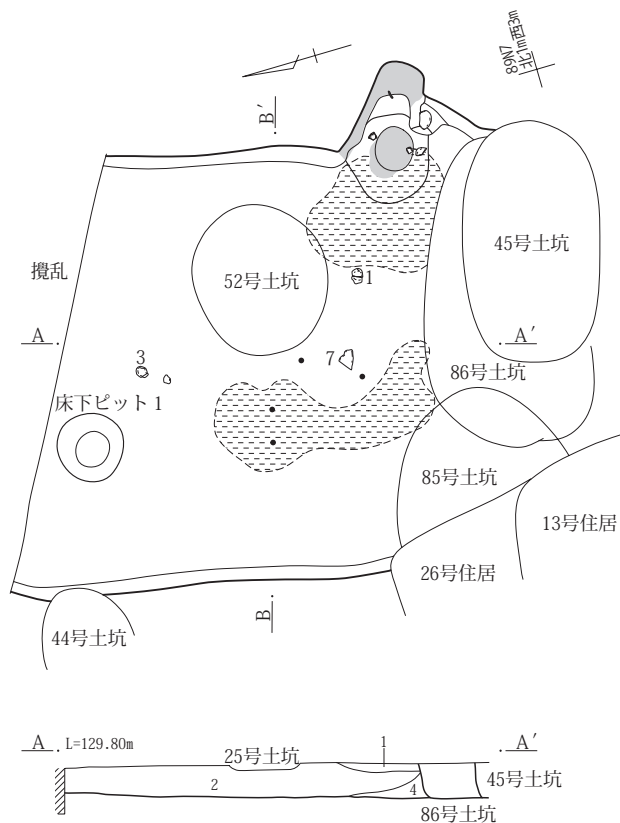
また本住居の床面に於いて柱穴、貯蔵穴は確認されなかったが、掘り方面の竈左側東壁際に掘削された床下土坑が貯蔵穴であった可能性があり、その深さは床面から20cm程を測る。また同じく掘り方面に確認された床下ピットのうち、床下ピット2～4は壁柱穴の可能性を有する。

埋没土 褐色土。

重複 13・26号住居、45・52・85・86号土坑との重複関係にあるが、本住居は26号住居より新しいと見られるが、他の重複する遺構よりは古い。

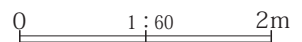
出土遺物 土師器・須恵器片や若干の灰釉陶器片、鉄滓と羽口各1点の出土があったが、この中には黒色土器碗(1・2)、須恵器の杯(3～5)灰釉陶器の碗(6)、土師器甕(7)、須恵器羽釜(8・9)が見られた。

所見 本住居の時期は出土遺物から推して10世紀後半と判断される。

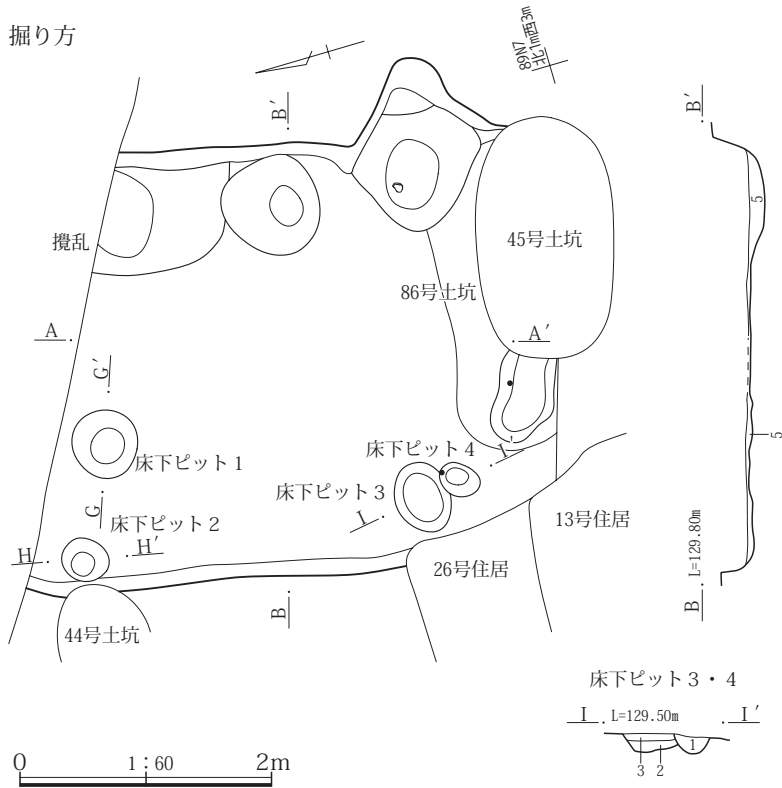


〔住居覆土〕

- 1 黒褐色シルト質土(7.5YR2/2) Hr-FP粒と炭化物粒を少量含む。
- 2 にぶい褐色シルト質土(7.5YR6/3) 粘性あり。強く締まる。Hr-FP粒を少量含み、炭化物粒極僅かに含む。
- 3 灰褐色シルト質土(7.5YR5/2) Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
- 4 灰褐色土(7.5YR5/2) ややシルト質。3層と同じ土質。炭化物粒含む。地山黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)粒・ブロック少量混じる。

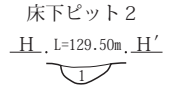


第57図 15号住居



〔住居掘り方覆土〕

- 5 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。締まりあり。炭化物粒を少量含み、Hr-FP粒を僅かに含む。



〔床下ピット1覆土〕

- 1 黒褐色土(7.5YR3/1) ややシルト質。粘性あり。炭化物粒を含み、Hr-FP粒、焼土粒僅かに含む。
- 2 褐色シルト質土(7.5YR4/4) 地山の黄褐色・にぶい黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)を多く含む混土(崩落土)。ふかふかする。Hr-FP粒僅かに含む。

〔床下ピット2覆土〕

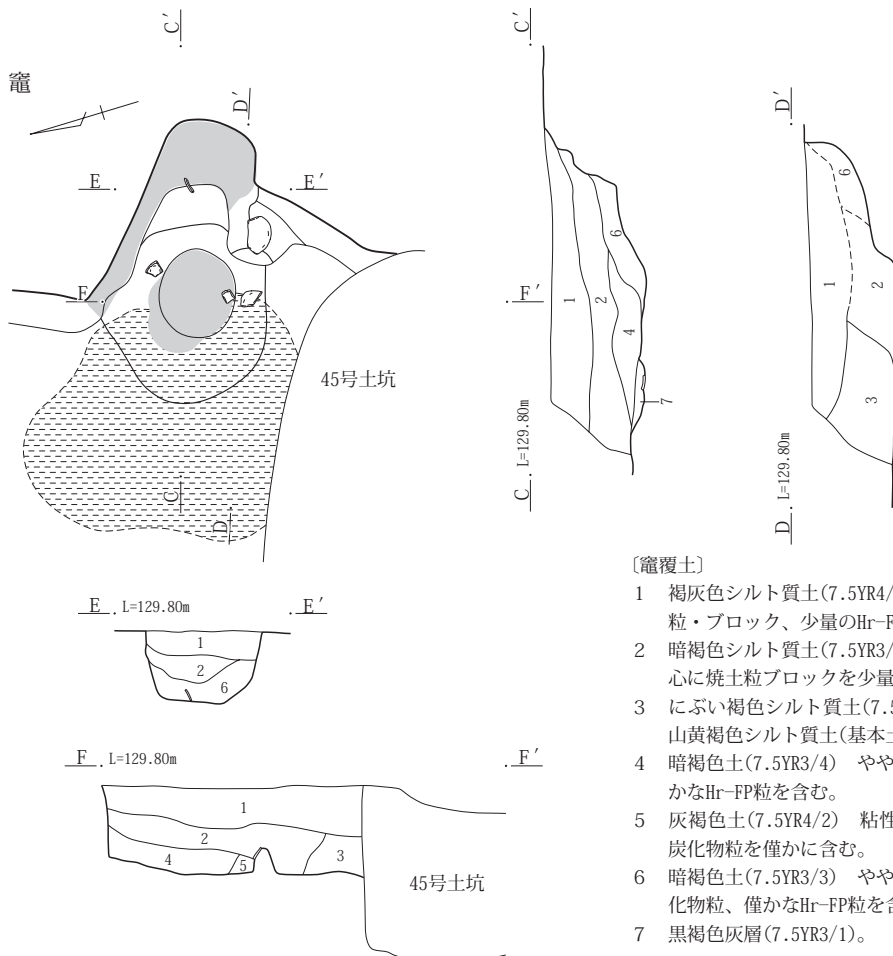
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 褐灰色土粒ブロックを含み、Hr-FP粒、炭化物粒を僅かに含む。

〔床下ピット4覆土〕

- 1 黒褐色土(7.5YR3/3) 炭化物粒を少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。

〔床下ピット3覆土〕

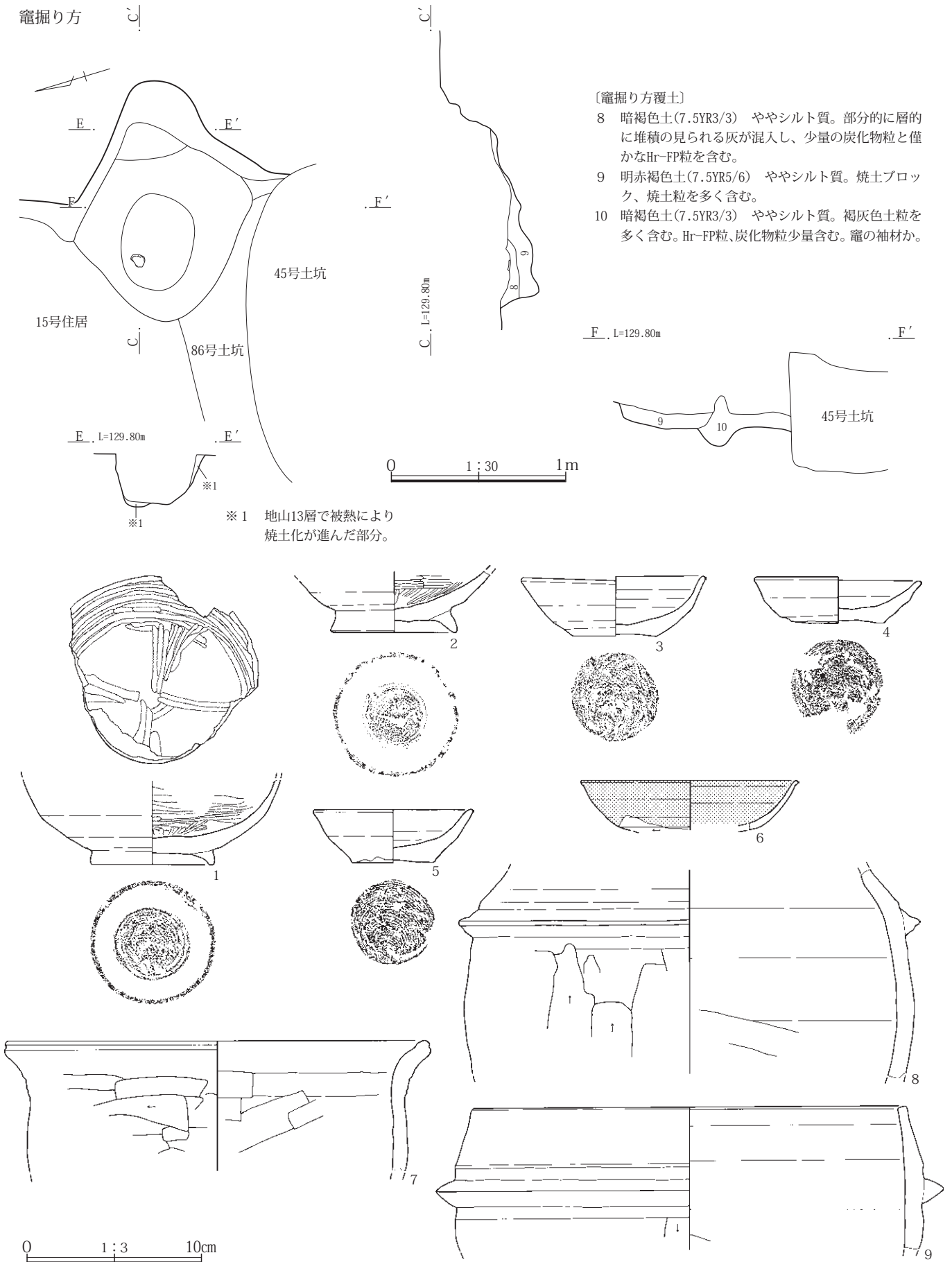
- 2 褐色土(7.5YR4/3) ややシルト質。褐灰色土粒ブロックと少量の炭化物粒、僅かなHr-FP粒含む。
- 3 明褐色シルト質土(7.5YR5/6) 褐灰色土粒ブロックとの混土。



〔竈覆土〕

- 1 褐灰色シルト質土(7.5YR4/1) 粘性あり。炭化物粒を多く含み、灰白色粘土粒・ブロック、少量のHr-FP粒含む。
- 2 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) 粘性あり。混入物は1層と同じで底面付近中心に焼土粒ブロックを少量含む。
- 3 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/2) 粘性あり。Hr-FP粒含み、炭化物粒と地山黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)を少量含む。
- 4 暗褐色土(7.5YR3/4) ややシルト質。焼土粒ブロックと少量の炭化物粒、僅かなHr-FP粒を含む。
- 5 灰褐色土(7.5YR4/2) 粘性あり。灰褐色粘土(7.5YR5/2)を含み、Hr-FP粒と炭化物粒を僅かに含む。
- 6 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。粘性強い。焼土粒ブロックと少量の炭化物粒、僅かなHr-FP粒を含む。
- 7 黒褐色灰層(7.5YR3/1)。

第58図 15号住居掘り方及び竈



第59図 15号住居竈掘り方と出土遺物

16号住居(第60図、PL.15)

位置 89区K 6～L 5グリッド。89区東部、仮1区西壁際の中程に位置する。

方位 N-5°-W

規模 残存長101×68cm、深さ40cm

形状・構造 断定はできないが本住居と見られる。過半が調査区外に出ていて南東隅部を確認、調査できたに過ぎなかった。プランは隅丸方形様を呈すると推定される。

深さ20cmの掘り方を有し、これを埋め戻して床面を造っている。

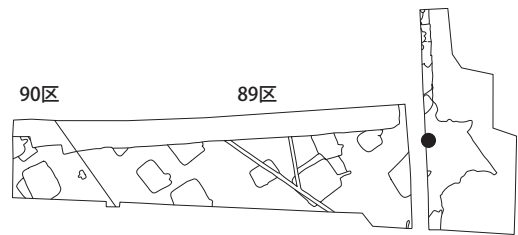
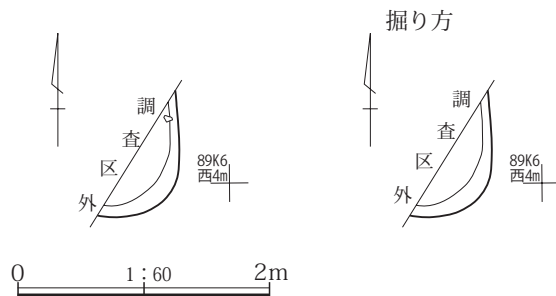
竈、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 所謂三角堆積は黒褐色土であり、住居全体は暗褐色土、褐色土で覆われている。

重複 他遺構との重複は見られなかった。

出土遺物 僅かな土師器・須恵器・灰釉陶器片の出土が見られた。

所見 本住居は出土遺物も少なく、時期特定には至らなかったが、出土遺物から推して平安時代以降の所産と推定される。



第60図 16号住居

17号住居(第61・62図、PL.15)

位置 89区L 5グリッド。89区東部、仮1区西壁際南寄りに位置する。

方位 N-103°-E

規模 竈 残存長79cm 残存幅80cm

形状・構造 本住居は、西側が調査区外に出ていて、竈の煙道側を調査できたに過ぎなかった。

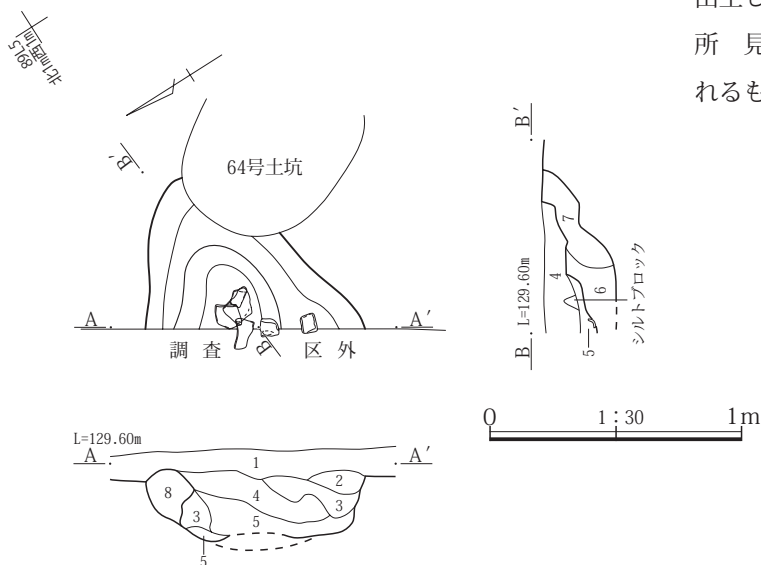
竈は東竈である。壁面を跨込みで掘削された掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して燃烧面や煙道壁を造りだしている。袖は焼けてにぶい赤褐色を呈する(暗褐色の)シルト質土で造っている。

埋没土 黒褐色土。

重複 64号土坑と重複する。

出土遺物 僅かに須恵器広口瓶(1)土師器・須恵器片を出土したに過ぎない。

所見 本住居は出土遺物から推して平安時代と想定されるものの、明確な時期は特定できなかった。



第61図 17号住居竈

第4章 発見された遺構と遺物

〔住居廃絶後の堆積層〕

1 シルト質土。

〔竈覆土〕

2 にぶい赤褐色土(7.5YR5/6) ややしルト質。炭化物粒を含む。全体にうっすらと焼けて赤褐色を呈すが焼き締まってない。サラサラしている。

3 にぶい赤褐色シルト質土(7.5YR4/4) 炭化物、ローム粒を含む。2層に比してやや焼けが強い。赤褐色土を呈すが焼き締まっていない。サラサラしている。袖が崩落して再堆積した状態と考えられる。

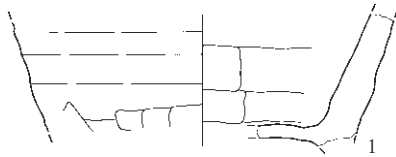
4 黒褐色土(7.5YR3/2) やや粘性があるがシルト質を僅かに含む。焼土は全く無いが炭化物が微量に含まれる。

5 暗褐色土(7.5YR3/3) 焼土にやや締まりあり。シルト質を中心とし僅か粘性土である。

6 黒褐色シルト質土(7.5YR1/3) やや焼けた状況を呈す。サラサラしている。

7 極暗褐色土(7.5YR2/3) 粘性で締まりあり。全体が焼けている。

8 にぶい赤褐色シルト質土(7.5YR4/4) 地山に近い土壌。袖の一部が残っているものと考えられるが崩落しかけているようで、赤褐色土の間に暗褐色土が入り込んでいる部分がある。



第62図 17号住居出土遺物

18号住居(第63～65図、PL.15・16)

位置 89区S9～10グリッド。89区西部、仮2区中西部に位置する。

方位 N-93°-E

規模 幅485cm、長328cm、深さ20cm

竈 幅145cm、残存長120cm 焚口幅82cm

左袖 幅30cm、長21cm

右袖 残存幅26cm、長15cm

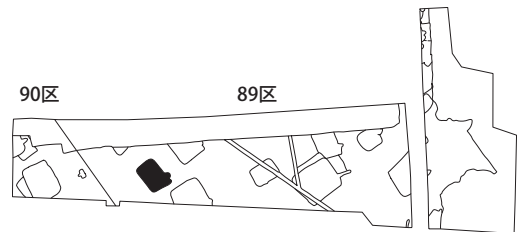
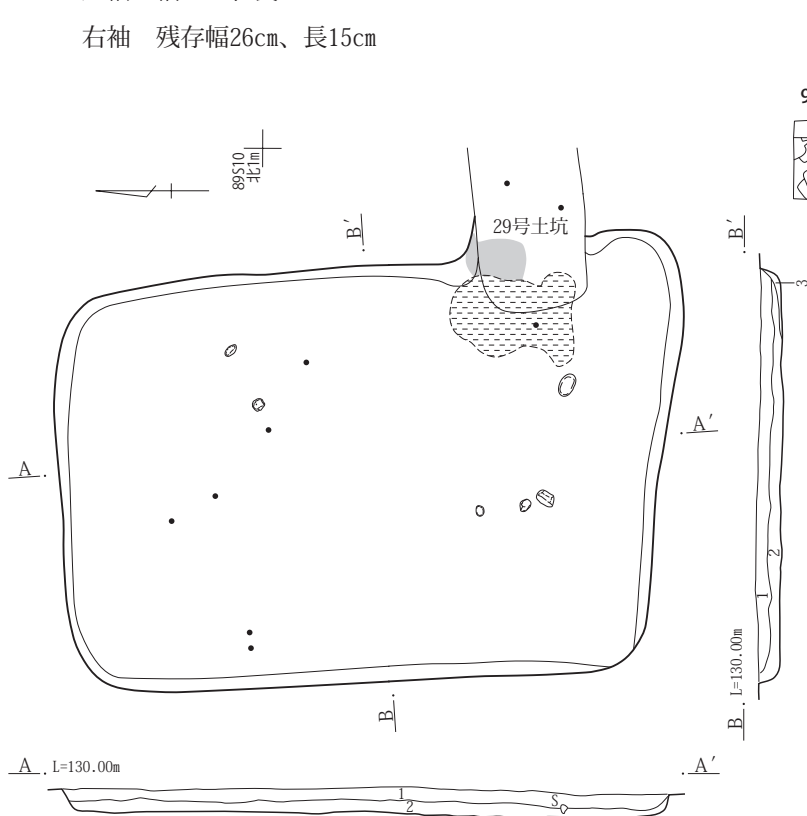
床下土坑1 径52×45cm、深さ21cm

床下土坑2 径47×76cm、深さ23cm

床下土坑3 径62×60cm、深さ53cm

形状・構造 本住居は、横長の隅丸長方形プランを呈する。

掘り方は、南壁際中・東部に幅144cm以下、深さ10cm

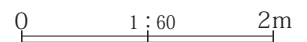


〔住居覆土〕

1 にぶい褐色土(7.5YR5/3) ややしルト質。Hr-FP粒を少量含み、炭化物粒を僅かに含む。

2 にぶい褐色土(7.5YR5/4) ややしルト質。炭化物粒を少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。

3 明褐色シルト質土(7.5YR5/6) 2層に壁面の崩落土を多く含む。



第63図 18号住居

の不定形の掘り込みが掘削される。この掘り込みの周辺に楕円形若しくは円形の土坑状の掘り込み3基が掘削される。このような掘り方を褐色土でやや締めるようにして床面を造り出している。

竈は東壁南寄りに設置されているが、焚口部の半ばかり煙道部にかけて29号土坑で壊されている。竈掘り方を有し、これをにぶい黄褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。袖は褐色土で造られている。

床面に於いては柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。しかし、掘り方で調査された床下土坑1及び床下土坑3は位置的に貯蔵穴であった可能性が考慮される。なお床

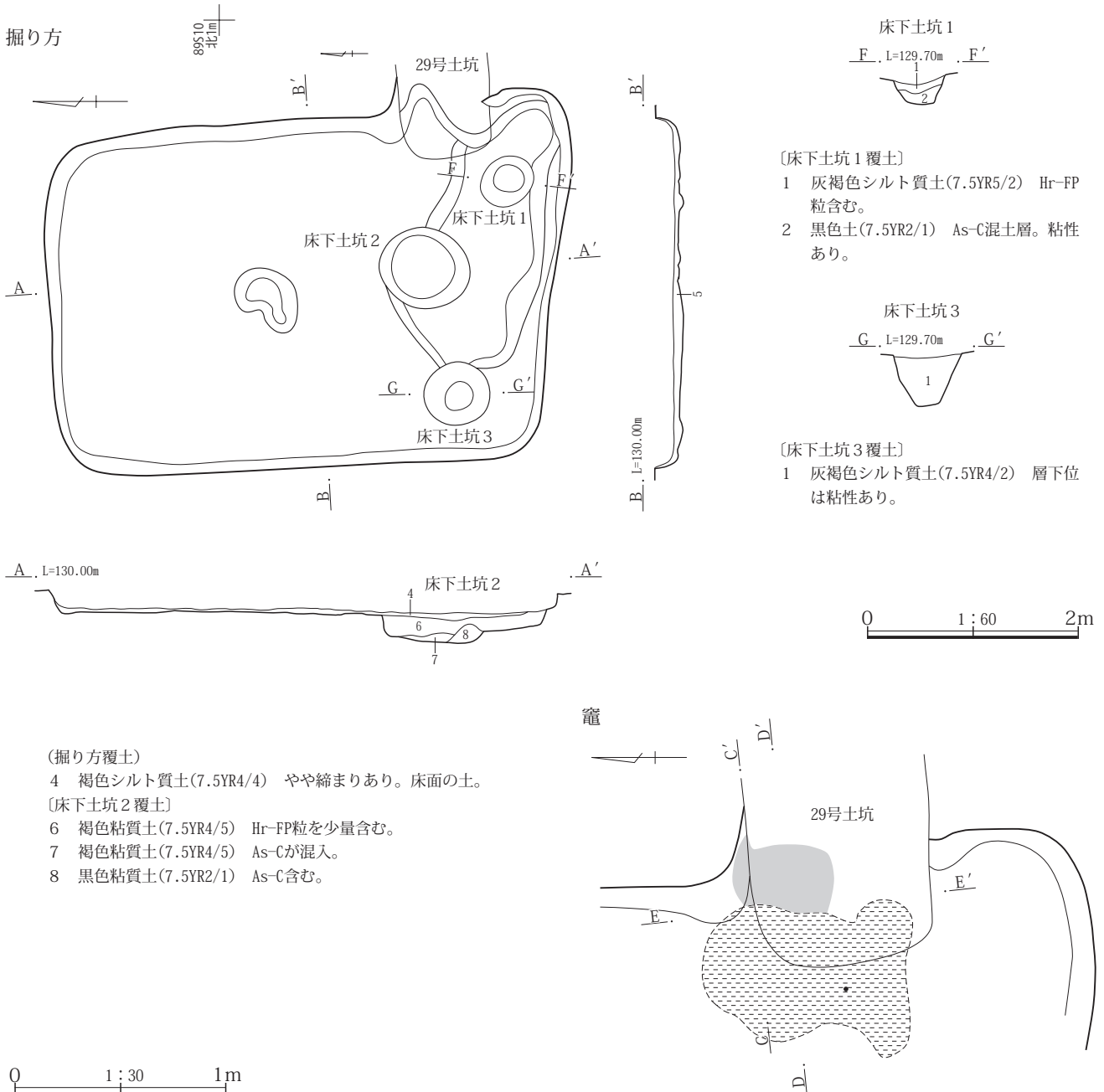
下土坑3は柱穴の可能性も考慮されるが、相対する柱穴が確認されておらず、掘削位置もやや住居隅部に寄り過ぎていることから柱穴と断定するには至らなかった。

埋没土 褐色土。

重複 29号土坑と重複するが、本住居の方が古いと認識される。

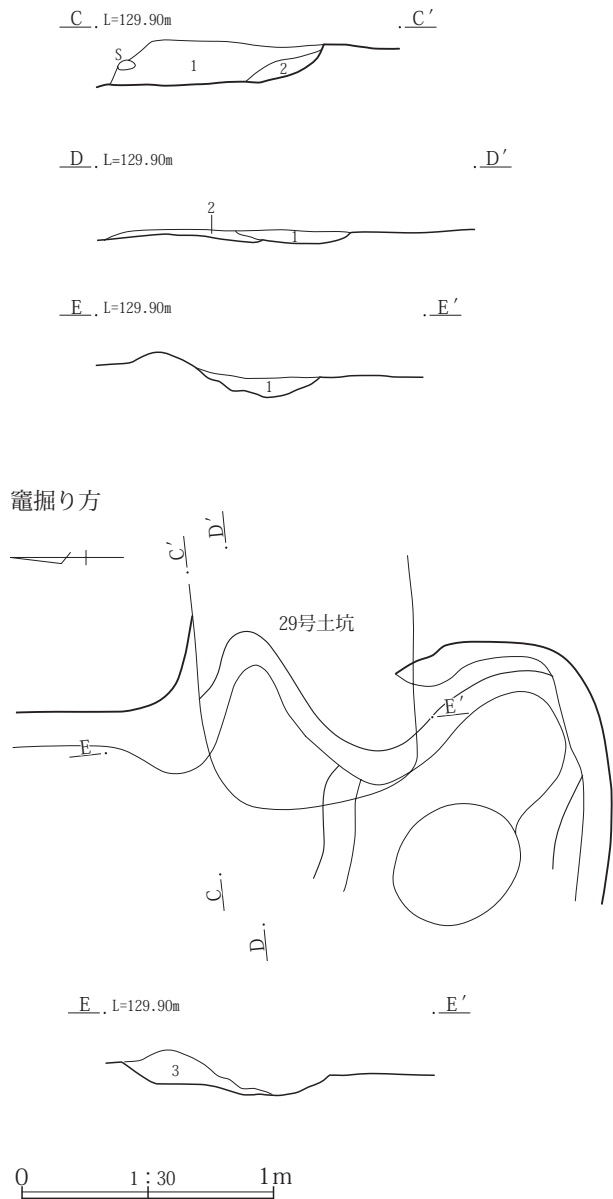
出土遺物 土師器片と若干の須恵器・灰釉陶器片、鉄滓が出土したが、図示すべき遺物は見られなかった。

所見 本住居の時期は特定できなかったが、出土遺物から推して平安時代の所産と認識され、周囲の集落の一部と解釈すれば10世紀段階の所産と推定される。



第64図 18号住居掘り方及び竈

第4章 発見された遺構と遺物

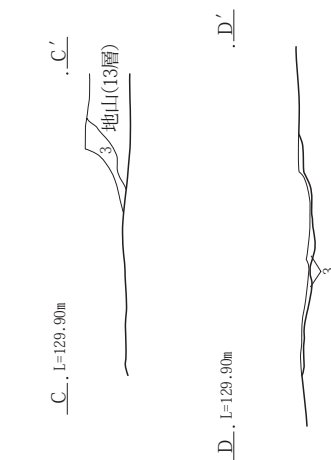


〔竈覆土 C-C'〕

- 1 灰褐色土(7.5YR4/2) ややシルト質。Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。
- 2 灰褐色シルト質土(7.5YR5/2) 焼土ブロック、炭化物を含む。煙道寄りに焼土が多く、竈壁や天井部が崩落土と判断される。

〔竈覆土 D-D'・E-E'〕

- 1 暗褐色シルト質土(7.5YR4/3) 貼床材と同じだが、少量の焼土粒ブロックを含む。僅かな炭化物粒をに含むが灰や灰層は殆ど確認できない。
- 2 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) 炭化物と焼土を多く含む。やや粘性があり。黄色シルトブロック入る。



〔竈掘り方覆土 C-C'〕

- 3 橙色シルト質土(7.5YR7/8) 黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)で被熱する範囲。

〔竈掘り方覆土 D-D'・E-E'〕

- 3 褐色シルト質土(7.5YR4/4) 焼土混じりの地山(竈の床下で地山が焼けている状態)。

第65図 18号住居竈掘り方

19号住居(第66・67図、PL.16・42)

位置 90区A10～B11グリッド。90区東部、仮2区西端部に位置する。

方位 N-93°-E

規模 残存長378cm、幅520cm、深さ10cm

竈 残存長92cm、幅36cm 焚口残存幅42cm

形状・構造 本住居は、東部が1号竪穴状遺構や13号溝、3号土壌墓や4号火葬土坑と重複して失われ、中位が14・15号溝に壊されているため、全容は確認できなかった。プランは横長の長方形を呈する。

掘り方を有し、褐色土等で埋め戻して床面を造る。

竈は東壁のやや南寄りに設けられているが、上位は1

号竪穴状遺構に削られて掘り方面を確認したに過ぎなかった。竈掘り方は確認範囲では炭化物粒、焼土粒を含むにぶい褐色土で埋め戻されている。

また柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 炭化物粒を含む褐色土の上に暗褐色土が乗る。上下層の境付近に炭化材が散見される。

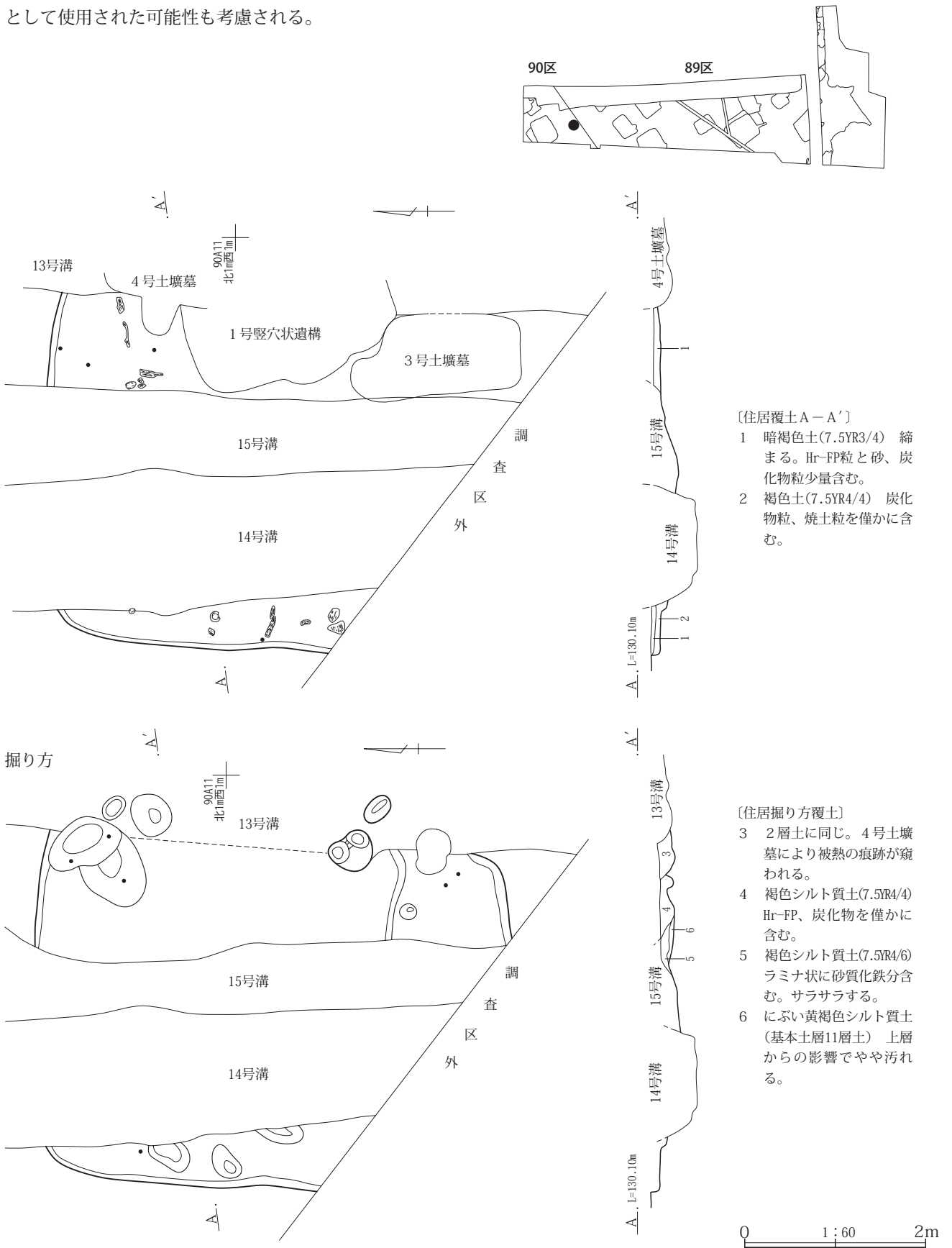
重複 1号竪穴状遺構や13・14・15号溝、3号土壌墓、4号火葬土坑と重複するが、何れに対しても本住居の方が古い。

出土遺物 土師器片と須恵器椀(1)を含む少量の須恵器・灰釉陶器片、鉄滓1点の出土が見られた。

所見 炭化材の分布状況から、本住居は焼失家屋で

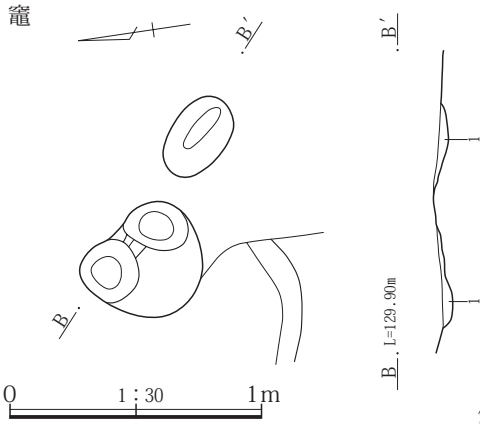
あったものと判断される。また覆土の上下層間付近に炭化材が遺ることから、上位層である暗褐色土が土葺き材として使用された可能性も考慮される。

なお、本住居の時期は出土遺物から推して10世紀後半と認識される。



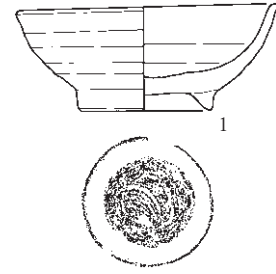
第66図 19号住居

第4章 発見された遺構と遺物



〔竈掘り方覆土〕

1 にぶい黄褐色(7.5YR5/4) にぶい黄褐色シルト質土(基本土層11層土)の焼土化したもの。炭化物粒焼土粒を含む。



第67図 19号住居竈と出土遺物

20号住居(第68～70図、PL.16・17・42)

位置 90区B12～13グリッド。90区西部、仮2区北西隅部に位置する。

方位 N-93°-E

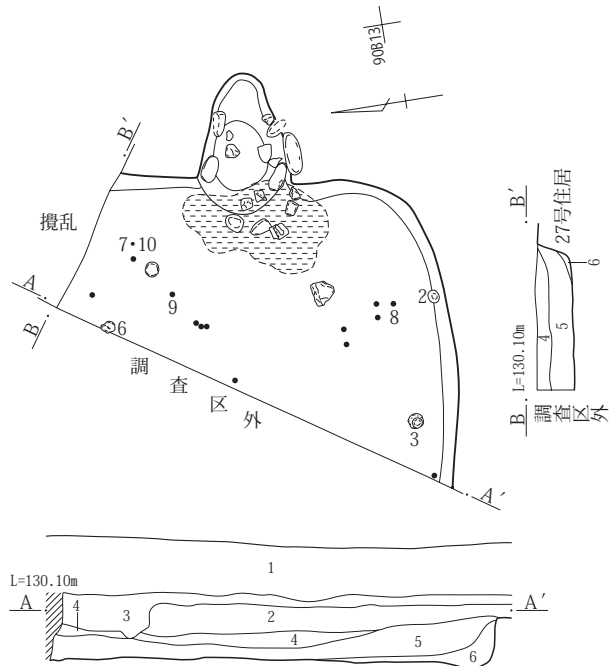
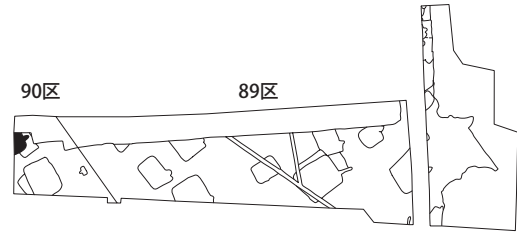
規模 残存幅321cm、残存長190cm、深さ7cm

竈 奥行115cm、幅75cm 焚口径62×82cm

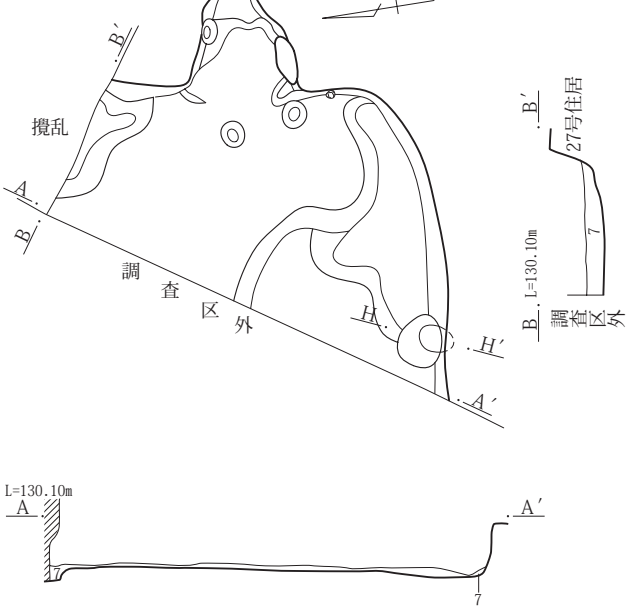
煙道 幅41cm、長さ30cm

床下ピット1 径43×34cm、深さ37cm

形状・構造 本住居は、西側と北側が調査区外に在り、住居の南東部を調査できたに過ぎないので全容は確認できなかった。プランは凡そ隅丸方形様を呈する。



掘り方



(住居廃絶後の土層)

- 1 現代の客土。
- 2 客土の影響をうけたC層。
- 3 褐色土シルト質(7.5YR4/4) Hr-FP粒含み、炭化物粒、酸化鉄ブロック多く含まれる。

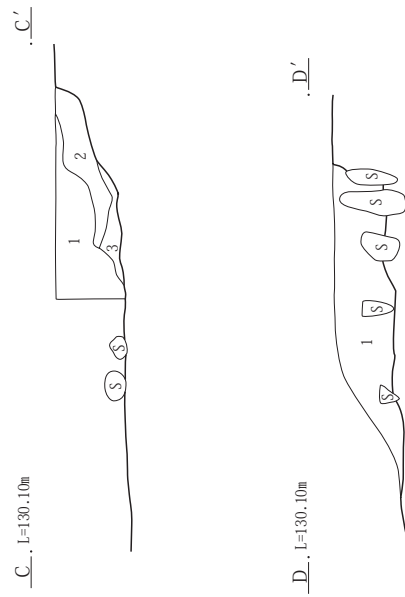
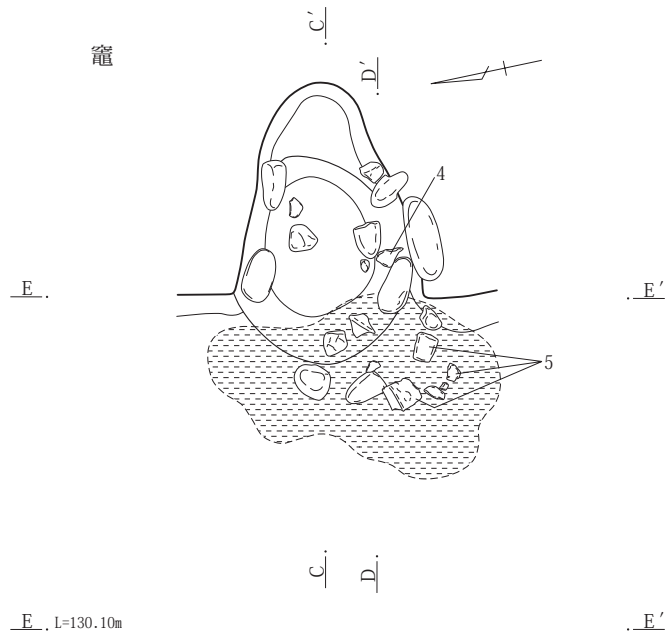
(20号住居覆土)

- 4 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) 固く締まる。Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。
- 5 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) 4層と同じ土質だが、Hr-FP粒は僅か。黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)、焼土粒を僅かに含む。
- 6 褐色シルト質土(7.5YR4/3) 5層と同じだが、黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)の崩落土が混入。

(掘り方覆土)

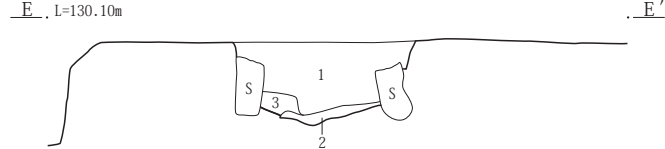
- 7 暗褐色土(7.5YR3/4) Hr-FP粒、焼土粒を少量含み、炭化物粒を僅かに含む。床材。

第68図 20号住居

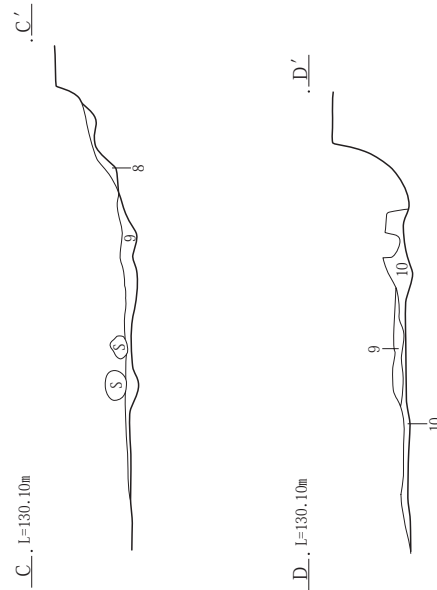
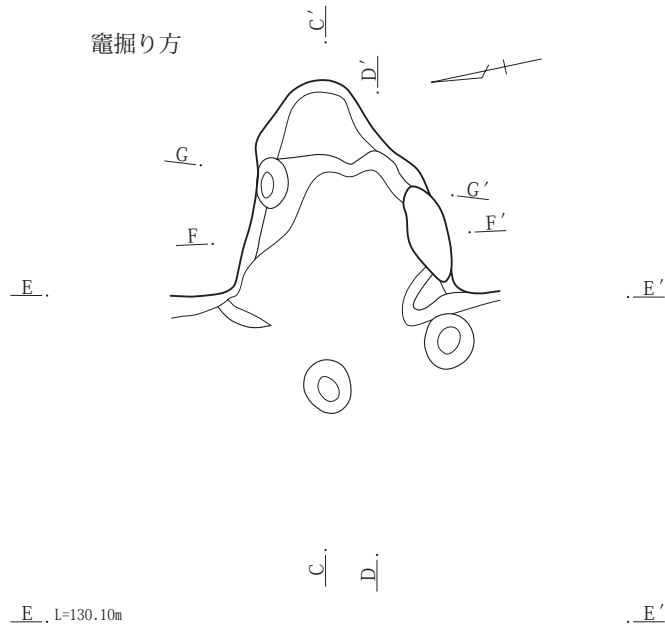


〔竈覆土〕

- 1 暗褐色土(10YR3/3) ベースは細砂粒であり、Hr-FP粒含み、炭化物粒、焼土粒と酸化鉄粒少量含む。
- 2 黒褐色シルト質土(10YR2/3) 焼土粒多く含み、炭化物を少量含む。天井または竈壁の崩落土。
- 3 暗褐色土(10YR3/4) にぶい黄褐色シルト質土(基本土層11層)ブロックを含み、焼土粒僅かに含む。

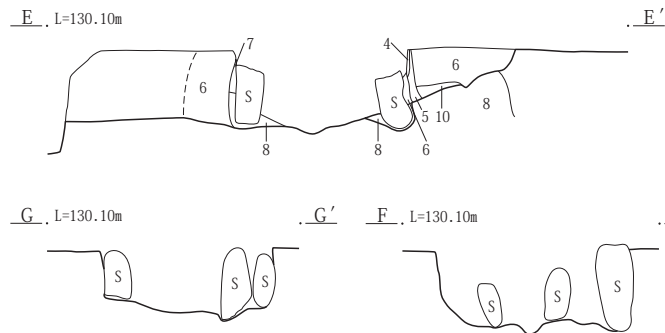


竈掘り方



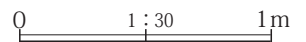
〔袖材〕

- 4 黒褐色土(10YR2/3) 白色鉱物少量含む。竈右袖付近の構築材。内傾した袖石と6の隙間への流入土。
- 5 6層が崩落土。袖石の裏込めの役割を有すると判断される。
- 6 灰黄褐色細砂質土(10YR4/2) 締まる。Hr-FP粒含み。
- 7 黄褐色シルト質土(基本土層11層)
- 8 6層に同じ。炭を含む。



〔竈掘り方覆土〕

- 9 黒褐色シルト質土(10YR3/1) 焼土ブロックと炭化物少量含む。
- 10 黒色土(10YR7/1) 竈床。灰を含む。やや粘性あり。



第69図 20号住居竈

第4章 発見された遺構と遺物

外周に幅広で10cm以下の深さに掘り込まれる傾向が見られ、これを暗褐色土で埋め戻して床面を造っている。掘り方の南壁際には床下ピット1が掘削されているが、外側斜め方向に掘削されているため、自然木等本住居に伴わないものである可能性も考慮される。

竈は東壁に設けられているが、その設置個所は南に寄っているものと想定される。隅丸三角形プランの掘り方を有し、これを黒褐色土等で埋め戻して焼面を造り出している。袖は左袖に2個、右袖に3個の河床礫を袖石として立位に設置した後、黒色土、黒褐色土で造っている。また焼部には左右並列に河床礫を立位に設置

して支脚としている。

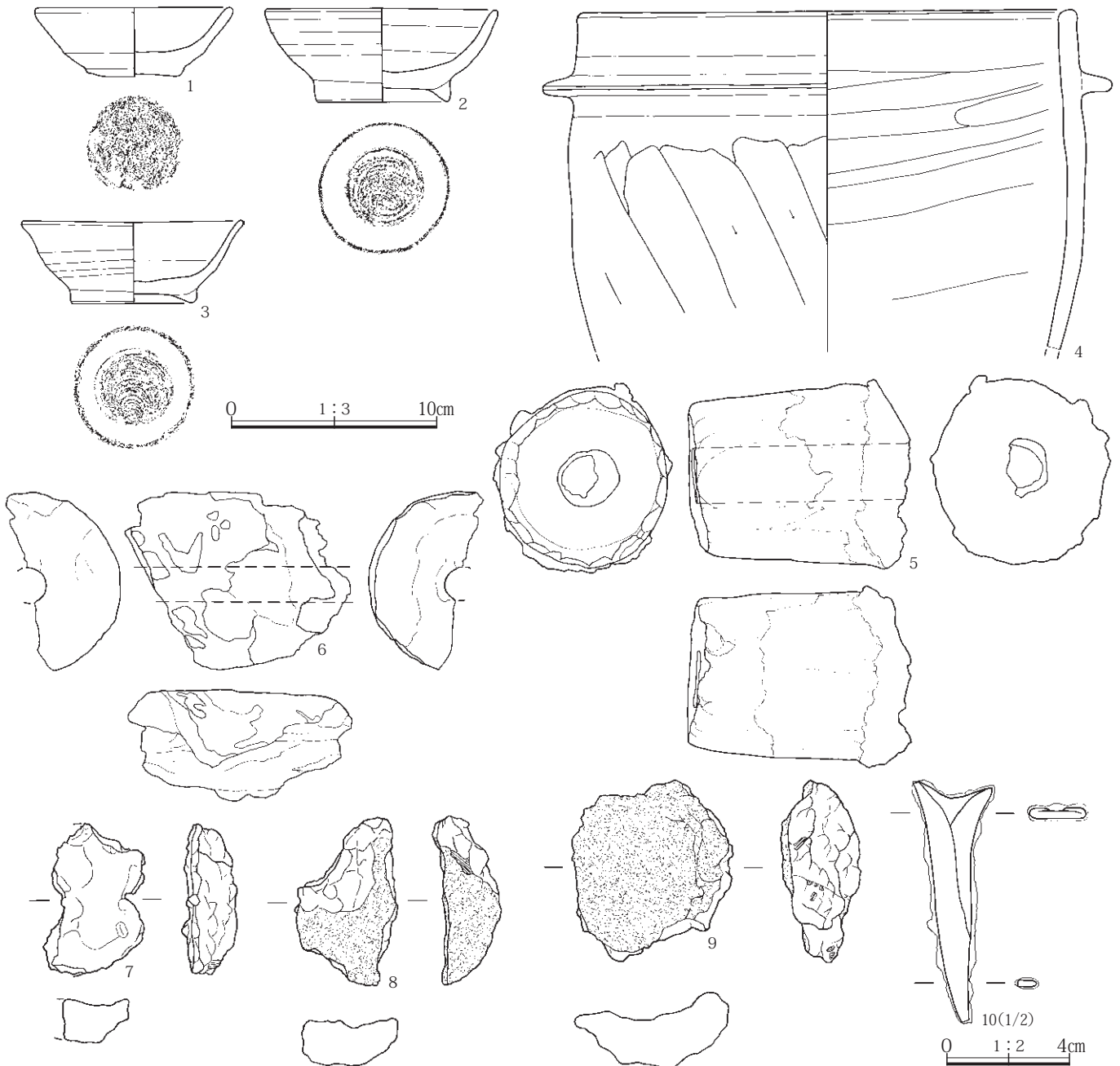
なお、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 暗褐色土。

重複 27号住居と重複するが、本住居が新しい。

出土遺物 須恵器杯(1)・椀(2・3)、土師質の羽釜(4) 土師器・須恵器片と若干の灰釉陶器片、羽口(5・6)、椀型鉄滓(7・8・9)等の多量の鉄滓、不明鉄製品(10)の出土があった。

所見 本住居の時期は出土遺物から推して10世紀後半と判断される。



第70図 20号住居出土遺物

21号住居(第71～74図、PL.17・43)

位置 90区B11～12グリッド。90区南西部、仮2区南西隅部に位置する。

方位 N-100°-E

規模 長460cm、幅576cm、深さ35cm

竈 残存長92cm、幅52cm 焚口径48×(90) cm

左袖 長48cm、幅21cm

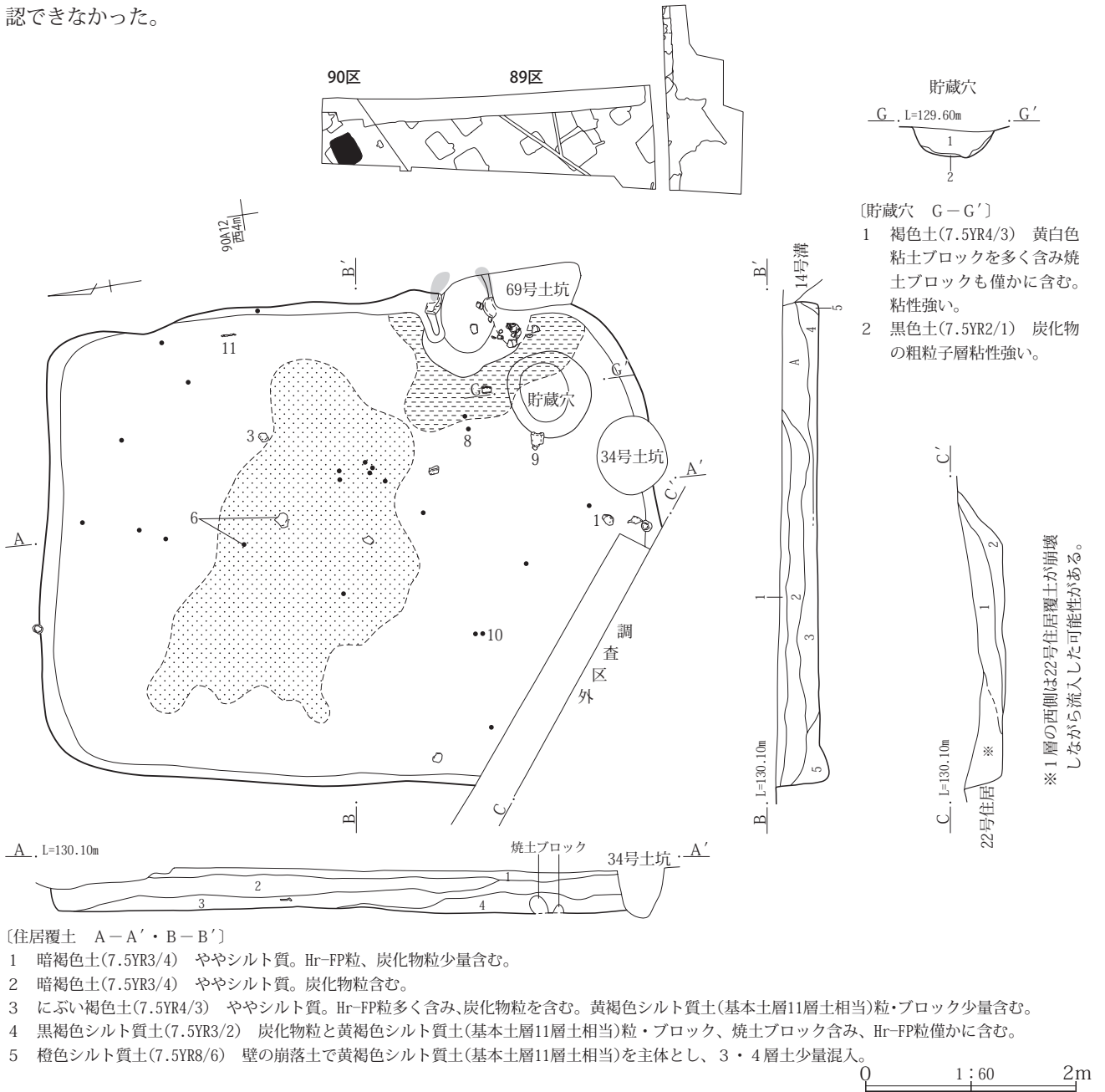
右袖 想定残存長33cm、想定幅36cm

貯蔵穴 径78×82cm 深さ29cm

形状・構造 本住居は、プランは横長の隅丸長方形を呈する。14号溝・69号土坑に東壁と竈の一部が壊され、確認できなかった。

掘り方は中央部と南東隅、北壁西より際に不定型な周溝状の掘り込みを伴い、橙色等の土壌で埋め戻した上面に黒褐色土を固く締めた厚さ2cm程の貼床を施している。

竈は東壁南寄りに設置され、径88×(105) cm、深さ21cmの楕円形プランの掘り方を有し、この竈掘り方を、褐色土で埋め戻して焼面を造る。袖は竈掘り方の壁際の左側に径21×82cm、深さ9cm、右側に径9×17cm、深さ8cmの楕円形様プランの掘り込みを掘削して河床礫を従位に据えて袖石とし、褐色土或いは暗褐色土を積んで造る。煙道部は失われていた。



第71図 21号住居

第4章 発見された遺構と遺物

柱穴等はなかったが、竈右側手前に貯蔵穴があった。また掘り方面の竈左側の東壁際1.8mの範囲に、幅18cm、深さ5cm以下の周溝状の掘削が見られた。

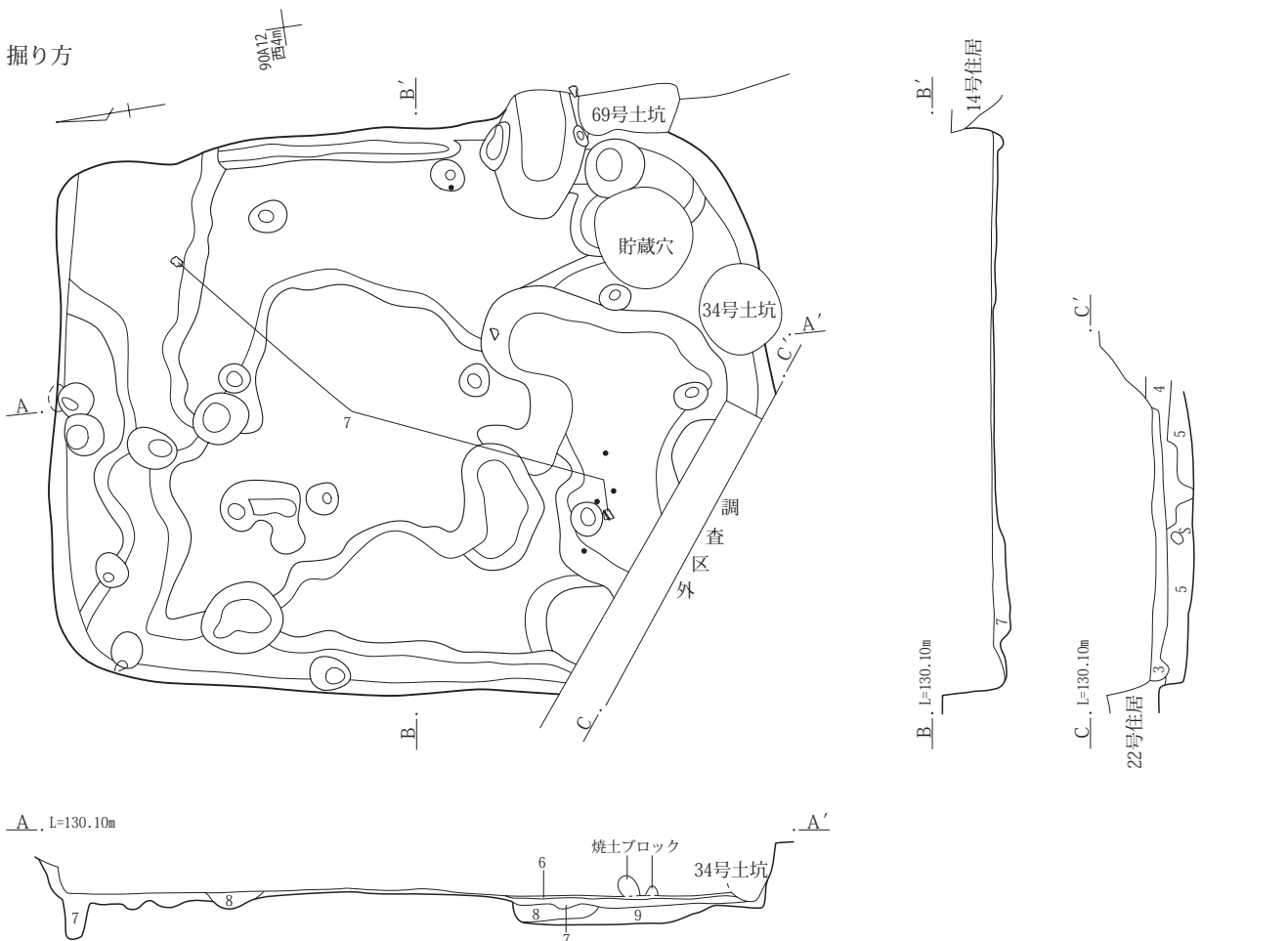
埋没土 暗褐色土、黄褐色土で覆われている。床面付近に黒色灰の分布が見られる。

重複 14号溝、34・69号土坑と重複するが、何れの遺構よりも本住居は古い。

出土遺物 黒色土器椀(1)、須恵器の杯(2・3)や甕

(5)、灰釉陶器椀(4)、羽釜(6・7)、やや量の多い土師器片や少量の須恵器・灰釉陶器片、可能性のあるものを含む羽口(8～10・14～17)、不明鉄製品(11・12・13)の出土があった。

所見 本住居は黒色灰の分布から焼失家屋であったと認識される。またその時期は出土遺物から推して10世紀後半の所産と判断される。



〔住居掘り方覆土 A-A'・B-B'〕

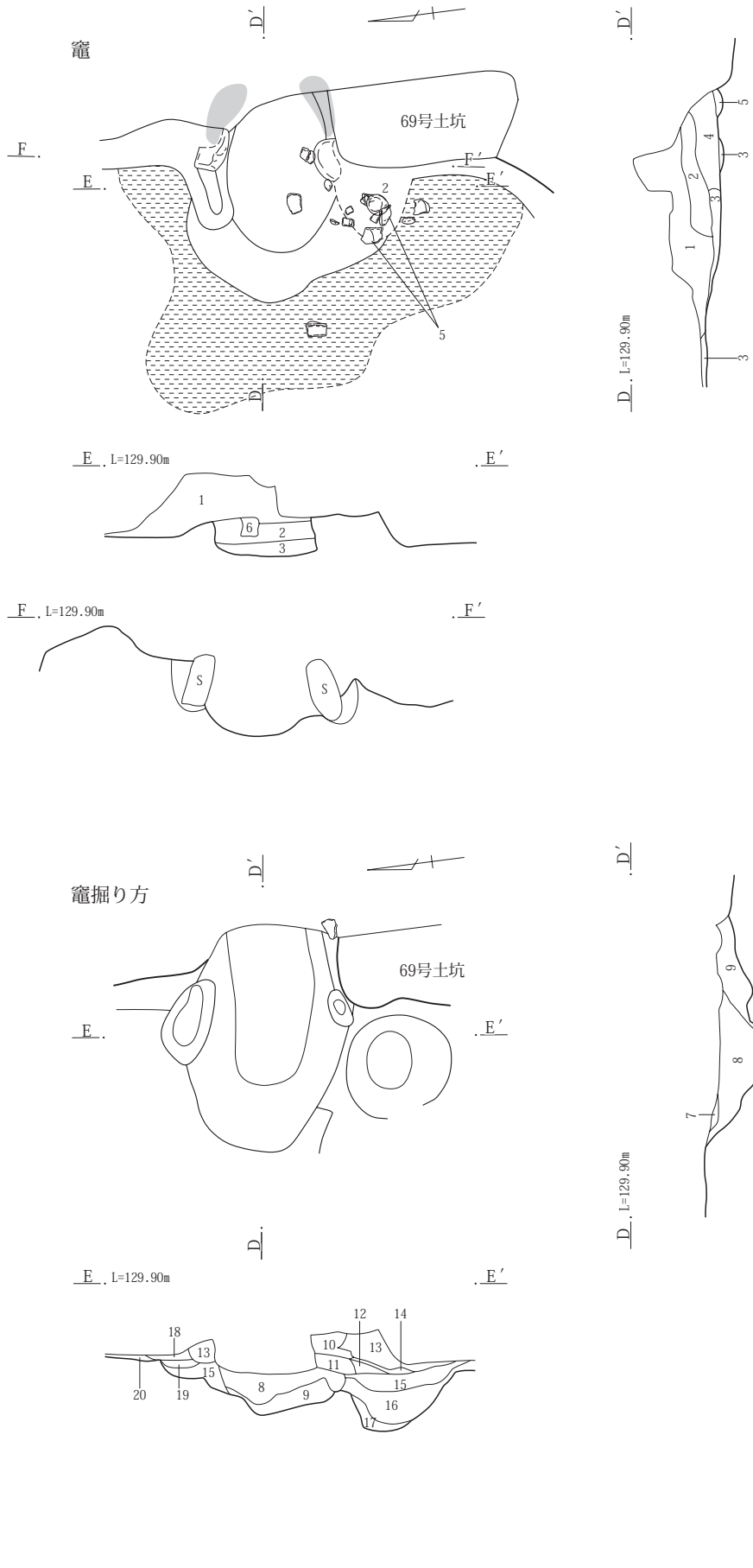
- 6 黒褐色土(7.5YR3/1) 固く締まる。Hr-FP、炭化物少量含む。
- 7 橙色シルト質土(7.5YR6/6) 僅かにAs-C混黒色土含む。
- 8 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/4) As-C混黒色土僅かに混入する。
- 9 褐色シルト質土(7.5YR4/4) As-C混黒色土ブロック混入れ。酸化鉄ブロックを少量含む。

【住居C-C'】

〔住居掘り方覆土〕(1層の西側は22号住居覆土が崩落、流入した可能性あり)

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) やや粘性あり。Hr-FP粒と白色粘土ブロックを含み、炭化物粒少量含む。
- 2 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) 黄褐色シルト質土(基本土層11層土)、焼土含み、Hr-FP粒僅かに含む。
- 3 橙色シルト質土(7.5YR6/6) 僅かにAs-C混黒色土を含む。
- 4 基本土層15層土 As-C混黒褐色土。
- 5 灰褐色細砂質土。

第72図 21号住居掘り方



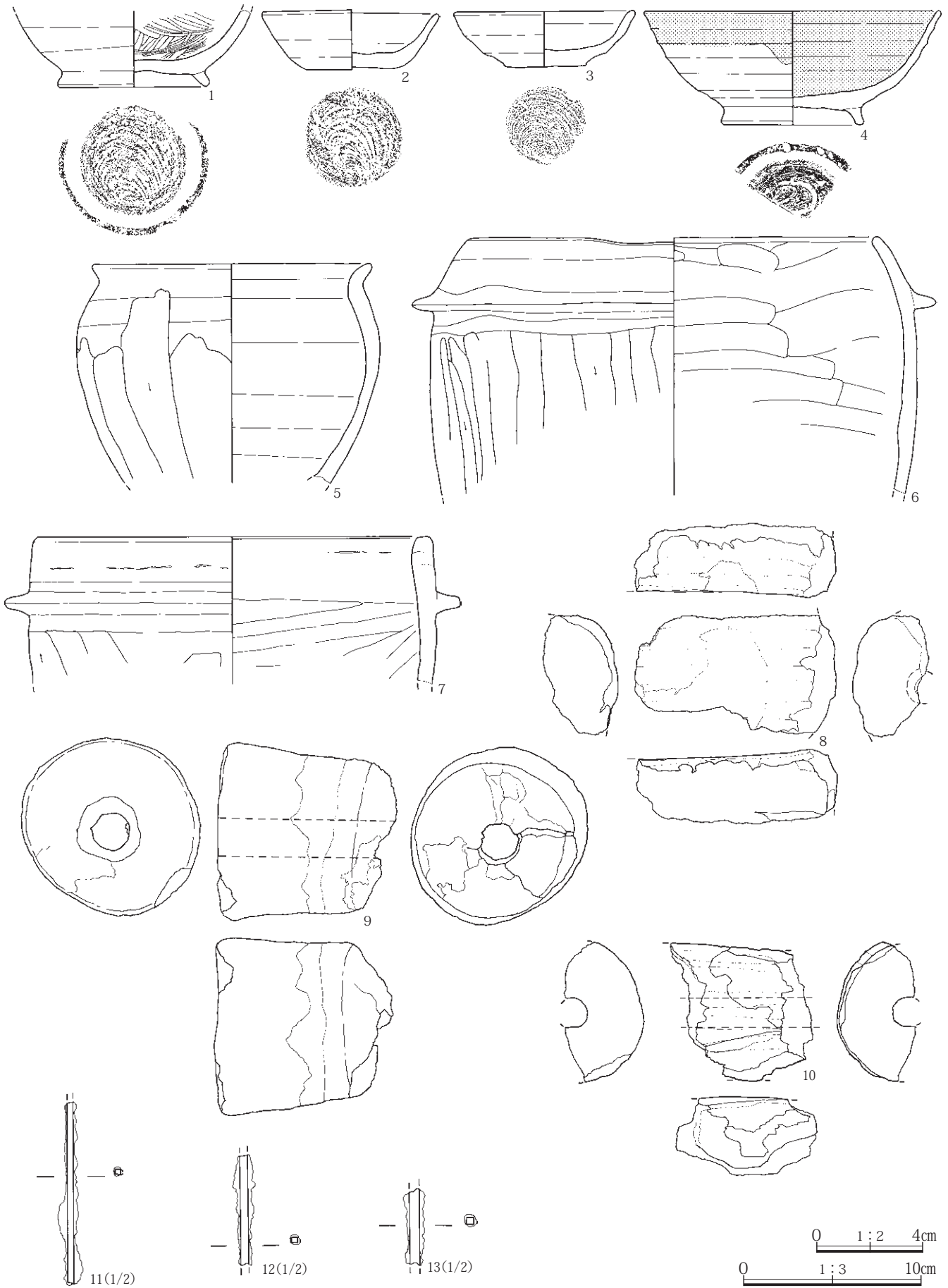
〔竈覆土〕

- 1 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) Hr-FP粒、焼土ブロック、黄褐色粘土ブロックが僅かに入る。竈の崩落土。
- 2 黄褐色粘土(10YR5/8)ブロック層 僅かに1層土含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/1) 燃烧面上の灰層に僅かに焼土粒含む。
- 4 明赤褐色土(5YR5/8) 焼土。天井及び壁の崩落土。
- 5 極暗褐色シルト質土(7.5YR2/3) 焼土ブロックを含む
- 6 焼土ブロック：天井、壁の崩落土。

〔竈掘り方覆土〕

- 7 極暗褐色土(7.5YR2/3)。
- 8 褐色土(7.5YR4/4) As-C混土ブロックと黄褐色粘土ブロック、焼土ブロック混入。粘性あり。
- 9 にぶい黄褐色シルト質土(基本土層11層土)。
- 10 13層の崩落土。
- 11 暗褐色シルト質土(7.5YR4/3) 細かに焼土粒入る。
- 12 黒褐色土(7.5YR2/3) 粘性あり。一部に炭化物含む。
- 13 褐色土(10YR4/6) 黄褐色粘土ブロック含む。
- 14 黒色土(10YR2/1) 炭化物を主とする。やや粘性あり。
- 15 褐色土(7.5YR4/4) 竈構築時に掘り込まれ黄色ブロックを多く含み、僅かに焼土粒が混じる。袖下に入る。
- 16 灰褐色土(7.5YR4/2) にぶい黄褐色シルト質土(基本土層11層土)ブロック含む。袖下の掘り込み覆土か。
- 17 (地山)細砂粒 灰褐色土。As-C混黒色土の下位層。
- 18 黒色土(10YR2/1) 炭化物を主とする。3層土に似る。
- 19 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 竈構築時に掘り込まれ黄色ブロックを多く含み、僅かに焼土粒が混じる。シルト質土を敷き込む。
- 20 褐色土(7.5YR4/6) しっかりしている。

第73図 21号住居竈



第74図 21号住居出土遺物

22号住居(第75図)

位置 90区B11～C12グリッド。90区西端部、仮2区西部に位置する。

方位 N-2°-E

規模 残存長271×134cm、深さ41cm

形状・構造 本住居は、北西隅部を中心とする区域を調査できたに過ぎなかった。プランは概ね方形様を呈するものと判断される。掘り方は確認されていない。

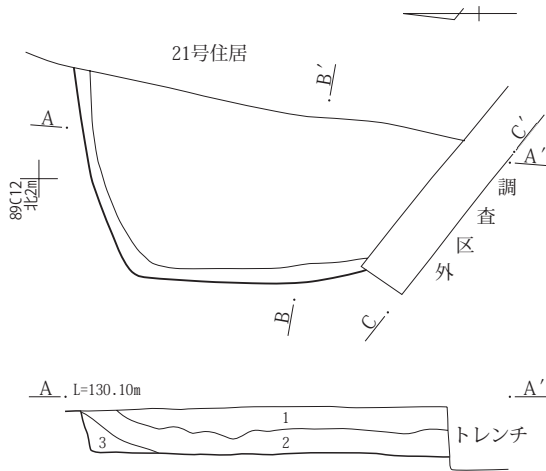
また竈、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 にぶい黄褐色細砂質土。

重複 21号住居と重複し、これに切られている。

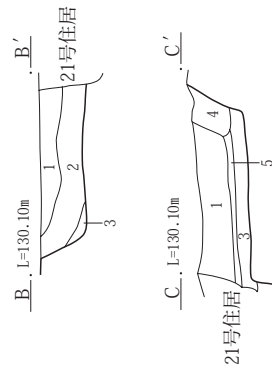
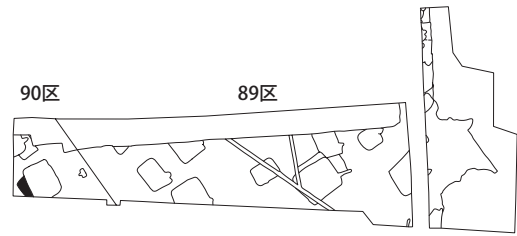
出土遺物 土師器・須恵器片、羽釜片の出土を見たが、図示するものは得られなかった。

所見 本住居の時期は、10世紀後半以前というだけで特定できなかった。



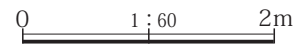
【住居覆土 A-A'・B-B'】

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。粘性あり。白色粘土ブロックとHr-FP粒を含み、炭化物を少量含む。
- 2 褐色シルト質土(7.5YR4/3) 径3cm以下Hr-FP粒を少量含み、炭化物僅かに含む。
- 3 橙色シルト質土(7.5YR6/6) 黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)主体で2層が含まれる。壁の崩落土。



【住居 C-C'】

- 1 にぶい黄褐色細砂質土(10YR5/4)土 Hr-FP粒を少量含む。サラサラしている。
- 3 As-C含む黒褐色土(基本土層15層)。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土(基本土層11層)。
- 5 褐灰色シルト質土。



第75図 22号住居

23号住居(第76～78図、PL.17・43・44)

位置 89区M4～L6グリッド。89区中東部、仮2区東端部に位置する。

方位 N-3°-E

規模 幅635cm、残存長345cm、深さ39cm

床下土坑1 径91×128cm、深さ34cm

床下土坑2 径72×91cm、深さ19cm

床下土坑3 径80×85cm、深さ29cm

床下ピット1 径35×43cm、深さ18cm

形状・構造 本住居は、南東側の過半が調査区外に出ており、北側は攪乱により削平されていたため全容は詳らかにできなかった。プランは隅丸方形形状を呈する。

掘り方は、中央から南にかけて浅い掘り込みを持ち、

土坑、ピット様の掘削を伴う掘り方を有し、これを暗褐色土や橙色土で埋め戻して床面を造っている。

竈、柱穴、貯蔵穴は確認されなかったが、掘り方面に確認された床下ピット1は位置的、且つ底面に柱に荷重される荷重による18×16cmの長方形プランの塑性変形と見られる落ち込みが見られることから、これが北西側の柱穴であった可能性が考慮される。この場合位置的に床下土坑2が南西側の柱穴であった可能性が考慮される。埋没土 床面付近に灰褐色土が堆積し、その上に褐色土が堆積するが、この土には炭化物(黒色灰)が多く入ることから土葺き材の可能性が考えられる。その上に黒褐色土が厚く堆積している。

重複 4・10・11・12号溝と重複するが、何れの遺構

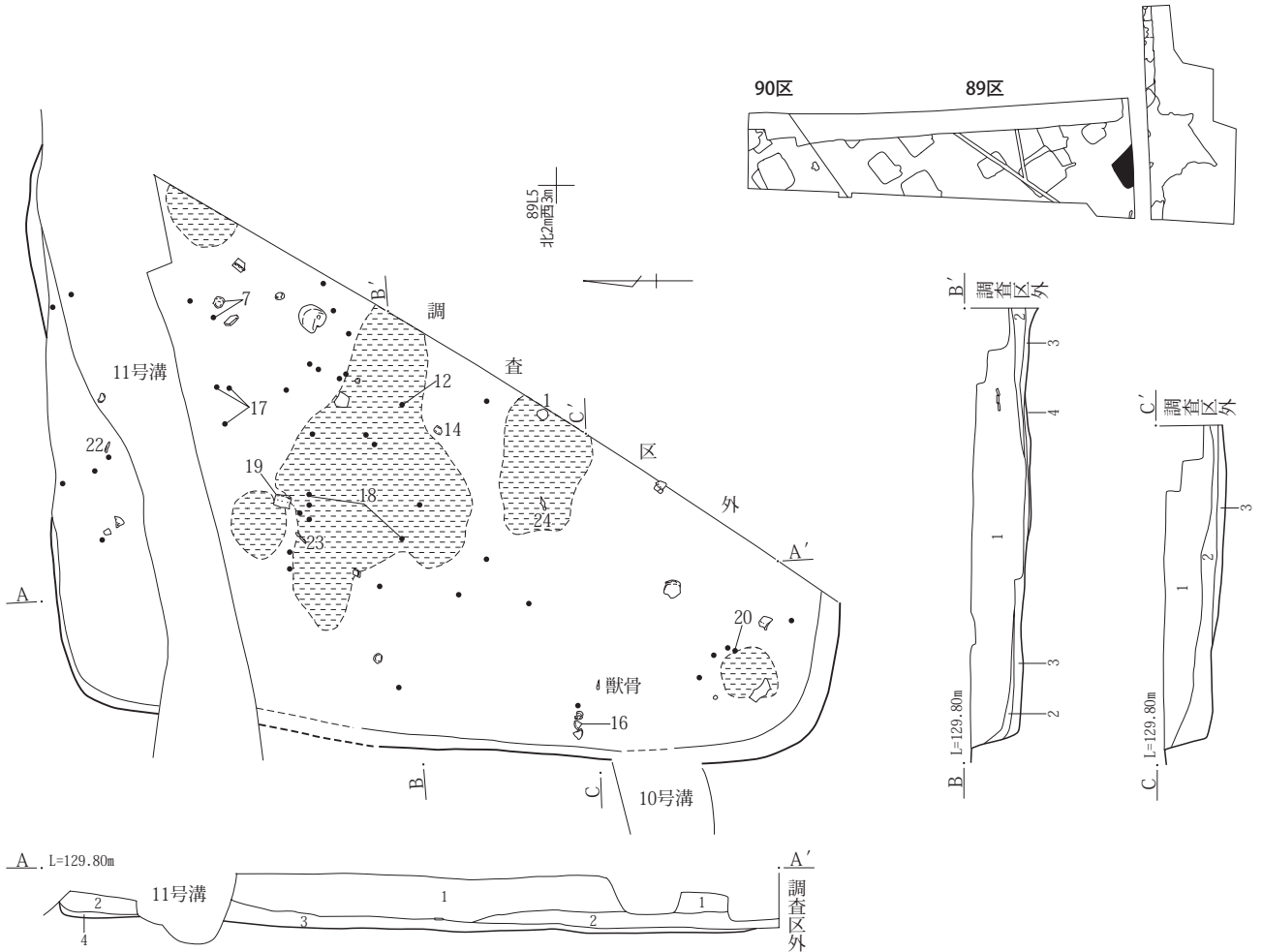
第4章 発見された遺構と遺物

にも本住居は切られている。

出土遺物 黒色土器碗(1)、須恵器の杯(2~6)・碗(7~14)・甕(19)、灰釉陶器の碗(15)・壺(16)、羽釜(17~18)、不明土製品(20)、須恵器・灰釉陶器片と多くの土師器片が出土し、この他、刀子(23)、鉄鏃(21・24)、槍

鉋(22)、鉄滓(25) 10点の出土も見られた。

所見 本住居は炭化物や黒色灰の分布から焼失家屋であると判断される。またその時期は、出土遺物から推して10世紀後半と判断される。



[住居覆土 A-A'・B-B'・C-C']

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 細砂粒を主とする。縮まりあり。FP軽石粒、炭化物を含む。
- 2 褐色土(7.5YR4/4) シルト質土が主であるが黄色シルトブロック入る。炭化物が多く入り、Hr-FP粒、炭化物含む。
- 3 灰褐色土(7.5YR4/2) 黄色シルト質土と褐色シルト質土が斑に混じる。床面下土層。炭化物少量含む、Hr-FP粒僅かに含む。
- 4 褐色土(7.5YR4/3) やや粘性あり。

[住居掘り方覆土]

- 5 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。粘りあり。縮まりあり。φ1~5mmのFP軽石粒とφ1~3mmの炭化物粒を僅かに含む。住居床材。
- 6 橙色土(7.5YR6/6) シルト質。縮まりなし。ふかふかしている。基本土層13層が主体で暗褐色土を含む混土。住居床材。

[床下土坑1覆土 D-D']

- 1 褐色土(7.5YR4/4) やや粘性あり。炭化物と黄白色シルト質ブロックを少量含む。
- 2 灰褐色土(7.5YR4/2) 炭化物、焼土ブロック含む。床面は炭化粒と焼土粒が僅かに含まれ広く焼ける。床面の下はにぶい黄褐色シルト(基本土層11層)
- 3 褐色シルト質土(7.5YR4/3) シルトブロックを含む混土。炭化物粒僅かに含む。
- 4 明褐色シルト質土(7.5YR5/6) 灰白色粘土ブロックを多く含む混土。炭化物粒や焼土粒を僅かに含む。
- 5 褐色シルト質土(7.5YR4/3) 炭化物粒を少量含む。

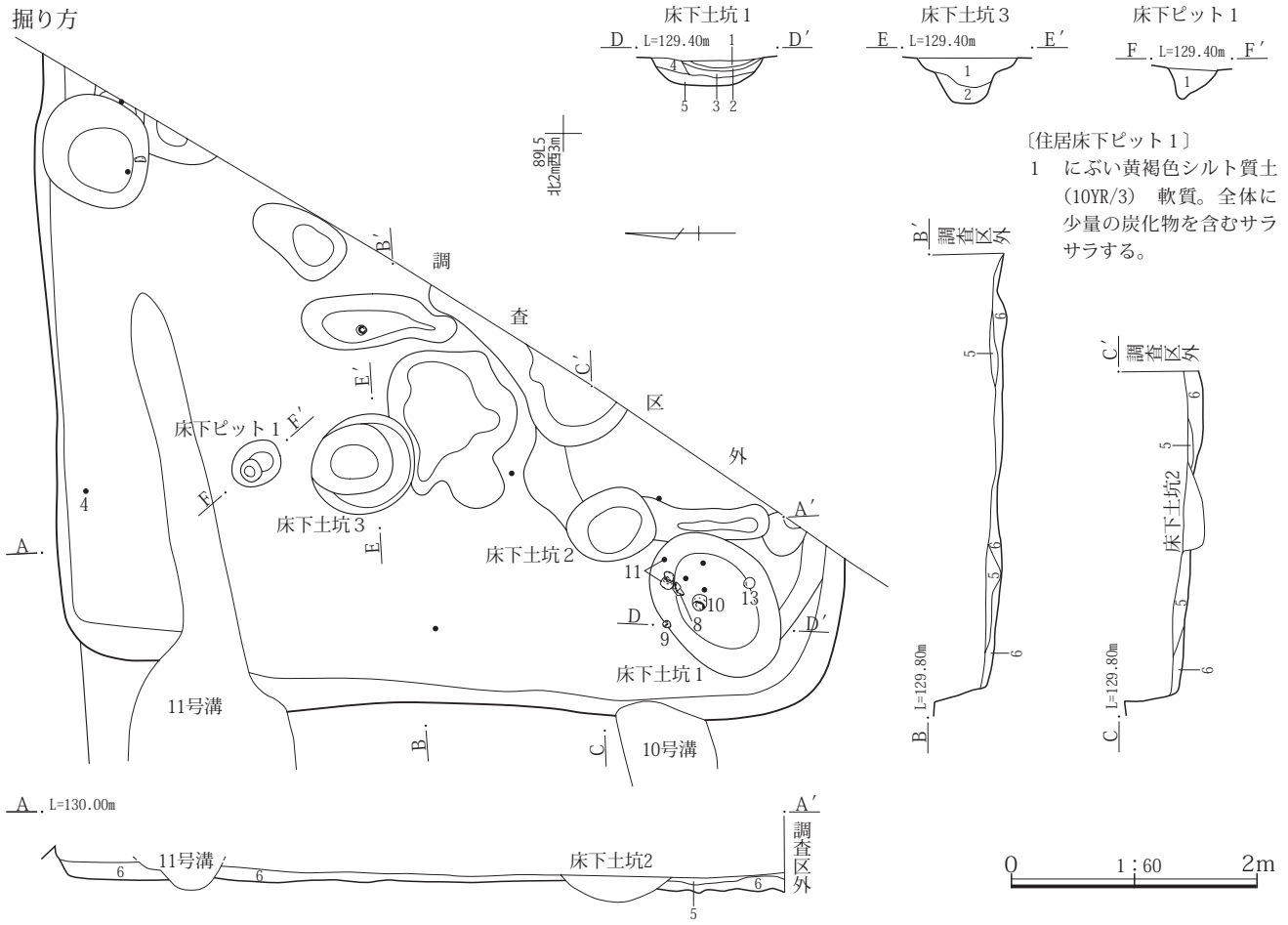
[床下土坑3覆土 E-E']

- 1 褐色シルト質土(7.5YR4/3) シルトブロックを含む混土。炭化物粒僅かに含む。
- 2 にぶい褐色(7.5YR5/4) にぶい黄褐色シルト(基本土層11層)に炭化物混入。

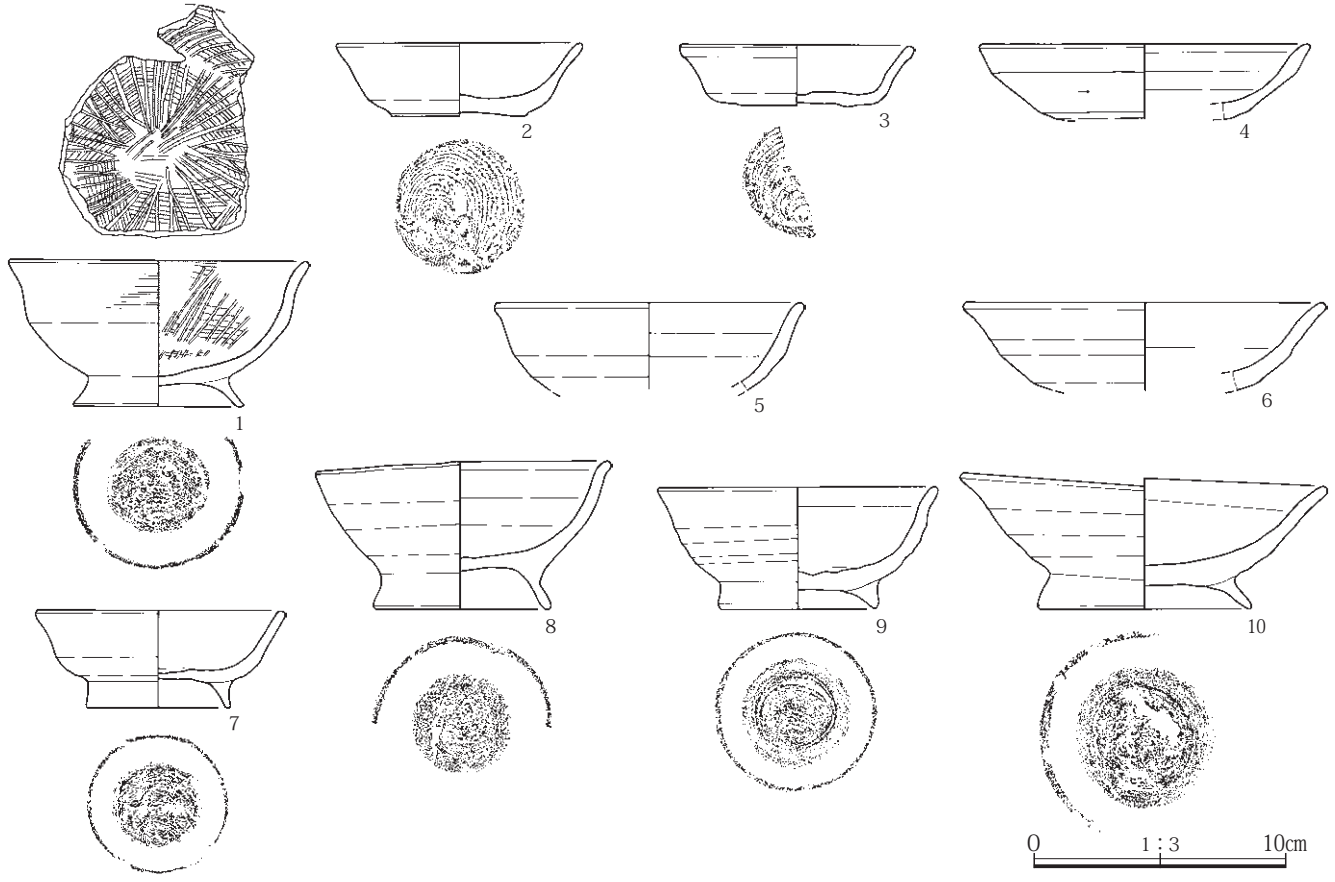
0 1:60 2m

第76図 23号住居

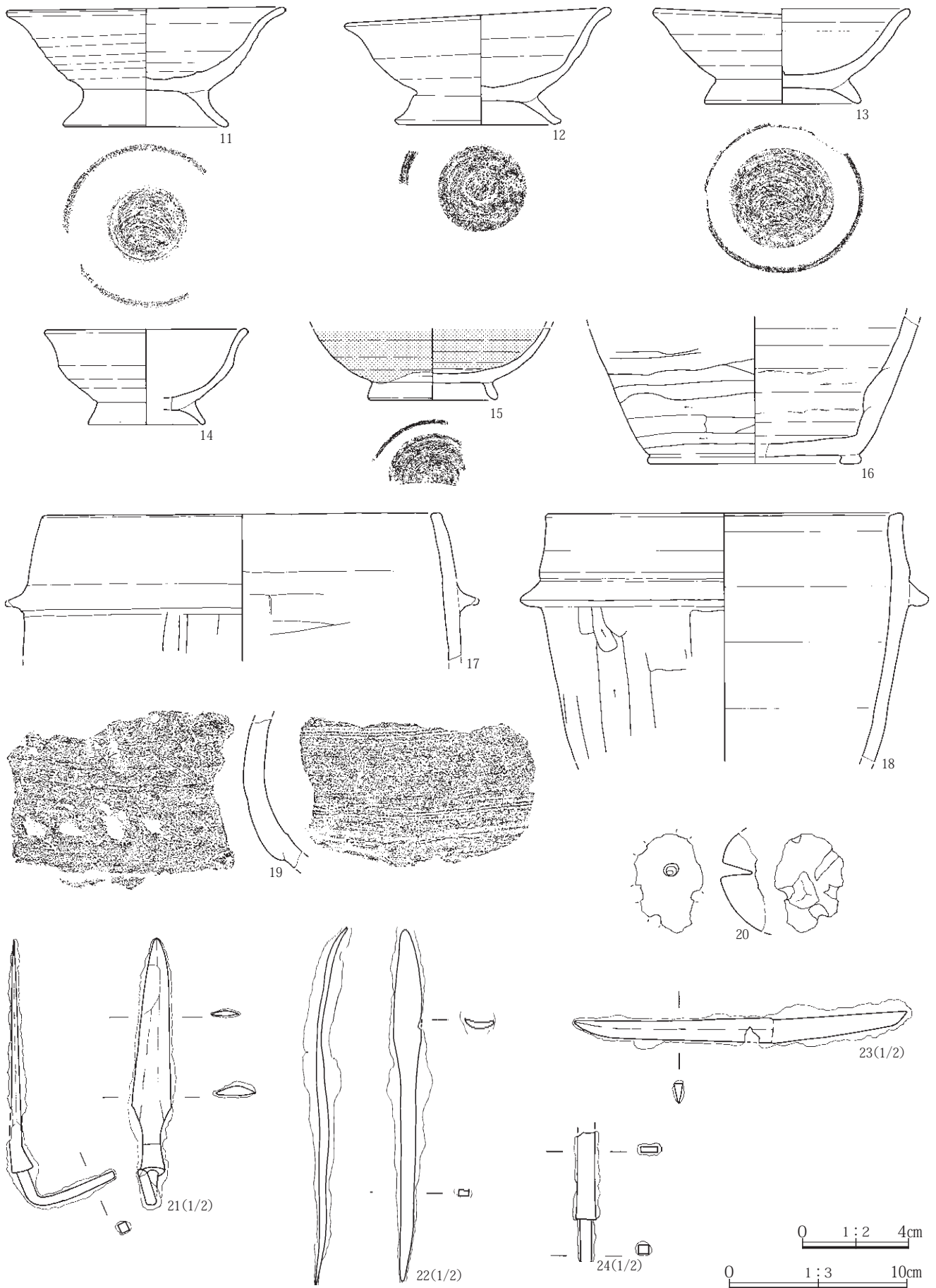
第2節 2面の遺構と遺物



〔住居床下ピット1〕
 1 にぶい黄褐色シルト質土 (10YR/3) 軟質。全体に少量の炭化物を含むサラサラする。



第77図 23号住居掘り方と出土遺物(1)



第78図 23号住居出土遺物(2)

24号住居(第79図、PL.18)

位置 89区M4～N4グリッド。89区東部、仮2区南東隅に位置する。

方位 N-41°-E

規模 残存長124×89cm、深さ20cm

形状・構造 本住居は調査区外東側と南側に延びており、北西隅付近を調査できたに過ぎなかった。プランは隅丸方形を呈すると想定される。

北西隅に西壁に沿って幅58cm、109cmを測る楕円形プランの土坑状の掘り込みを有する掘り方を有し、これを

埋め戻して床面を造っている。

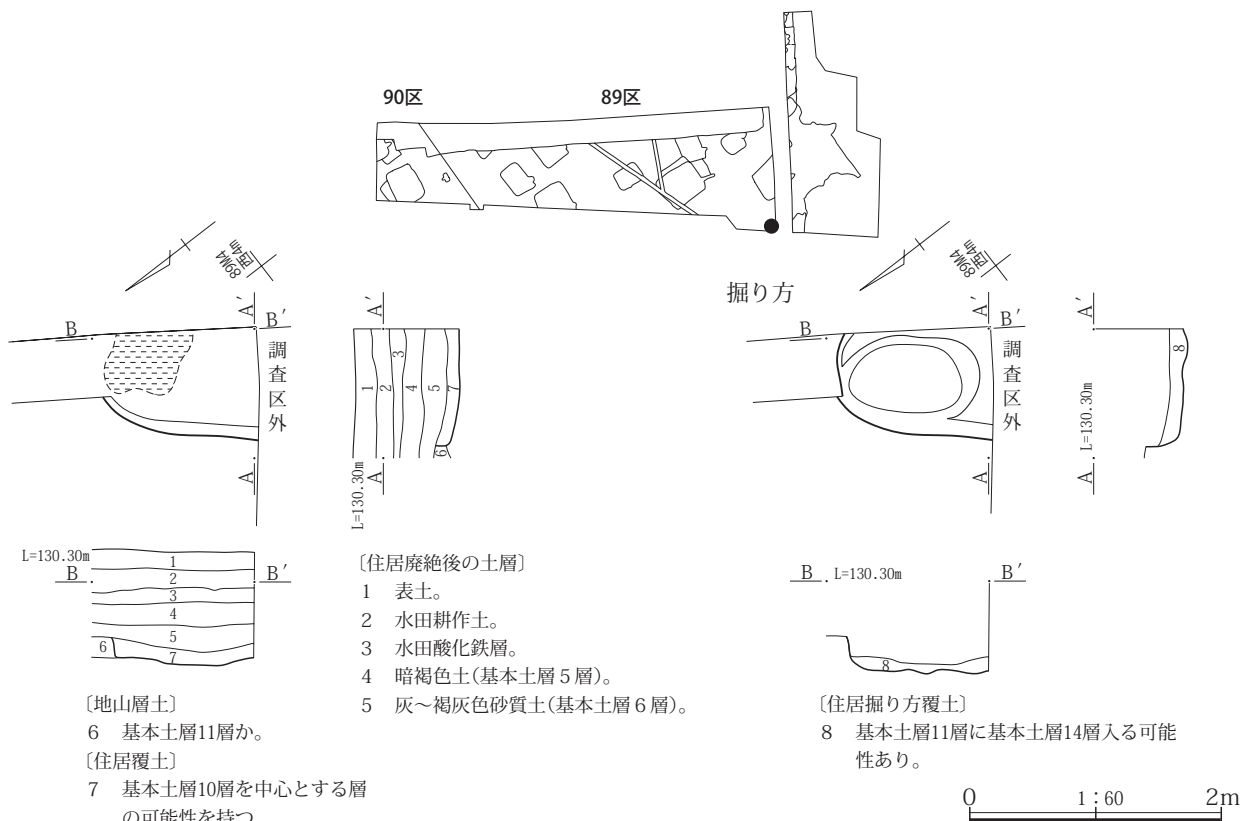
竈、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 基本土層10・11層上を主体とする。灰褐色系の土壌で埋没していた。

重複 他遺構との重複は見られなかった。

出土遺物 出土遺物は認められなかった。

所見 本住居はその一部を調査したのみで全容は不明である。また周囲の住居群の一部と想定されるものの、出土遺物もなくその時期は不明である。



第79図 24号住居

25号住居(第80図、PL.18・44)

位置 89区I9グリッド。89区北東部隅部、仮1区北西隅に位置する。

方位 N-131°-E

規模 残存長52cm、残存幅161cm、深さ21cm

竈 残存長68cm、残存幅50cm

燃烧部径(40)×70cm、深さ7cm

煙道部 残存幅15cm、長さ37cm

形状・構造 本住居は、北側と西側の大半が調査区外に延びていて、南東隅付近を調査できたに過ぎなかった。また、プランも方形様を呈すると推定されるに過ぎな

かった。

掘り方は竈左手前側深さ16cm程が認められ、これをにぶい黄褐色シルト質土で埋め戻して床を造り出している。

竈は東壁南寄りに設けられ、壁面を跨いで、盾形プランと想定される掘り方を有し、これをにぶい黄褐色シルト質土で埋め戻して燃烧面を造り出している。確認できた右袖には河床礫が縦位に据えられていた。また煙道の燃烧部側は掘り込みである。

なお、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

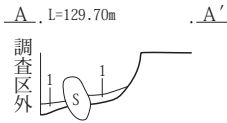
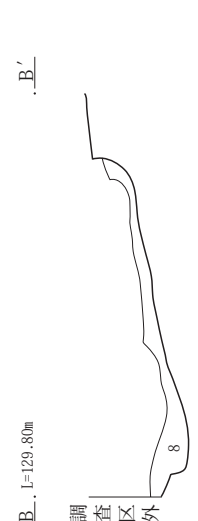
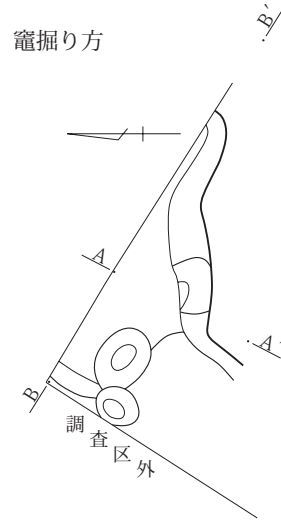
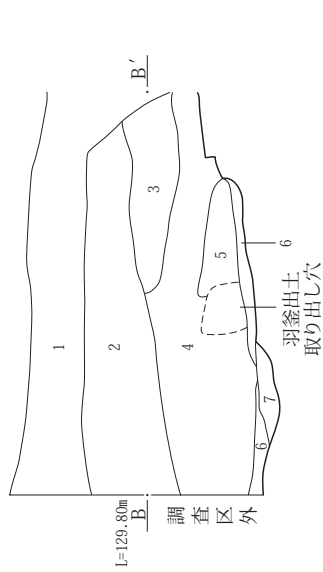
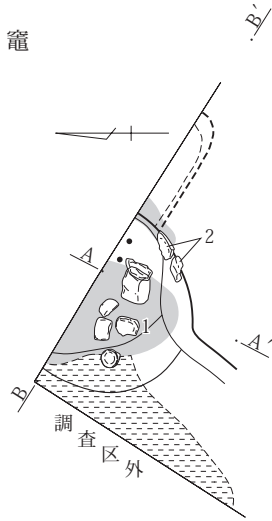
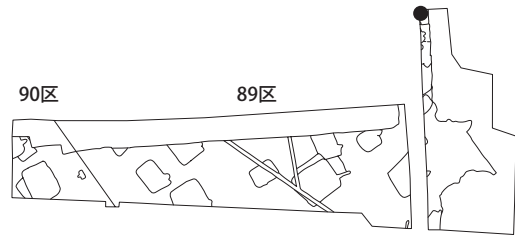
埋没土 暗褐色土で埋没されている。

第4章 発見された遺構と遺物

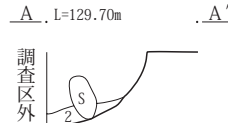
重複 7号住居と重複するが本住居の方が新しいと認識される。

出土遺物 土師器片と若干の灰釉陶器片の出土があり、須恵器碗(1)、羽釜(2)の出土も見られた。

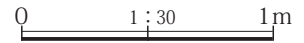
所見 本住居は出土遺物が少なかったものの、その時期から推して概ね10世紀後半の所産と判断される。



〔竈覆土 A-A'〕
1 にぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3) 軟質。Hr-FP僅かに含む。



〔竈掘り方覆土 A-A'〕
2 にぶい黄褐色シルト(基本土層11層)。



〔住居 B-B'〕

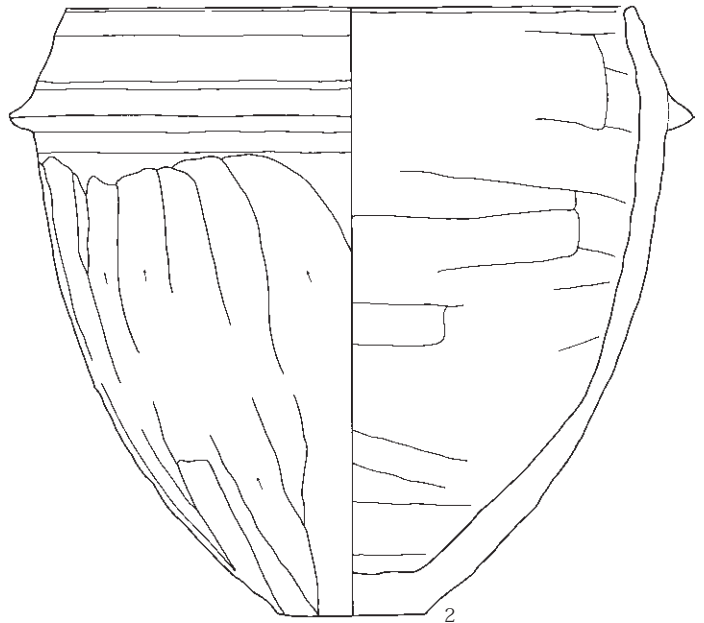
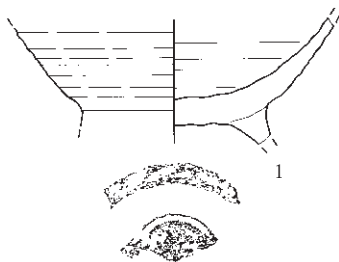
- 1 表土。
- 2 人為的埋め土 ローム主体。
- 3 人為的埋め土 礫を含む暗褐色砂質土。

〔住居覆土〕

- 4 明褐色土(7.5YR5/6) 細砂粒。僅かにHr-FP含む。
- 5 赤褐色シルト質土(5YR4/6) 天井や壁の崩落焼土。
- 6 黒色土(7.5YR2/1) 炭化物層が主。僅かに焼土粒入る。
- 7 赤褐色シルト質土(5YR4/8) サラサラする。(竈1層土に焼土入るか)。

〔掘り方覆土〕

- 8 にぶい黄褐色シルト(基本土層11層)。



第80図 25号住居竈と出土遺物

26号住居(第81～83図、PL.14・18・44)

位置 89区N7～O7グリッド。89区中部、仮2区中東部に位置する。

方位 N-89°-E

規模 長さ492、幅472cm、深さ28cm

竈 奥行240cm、幅60cm、煙道幅21cm

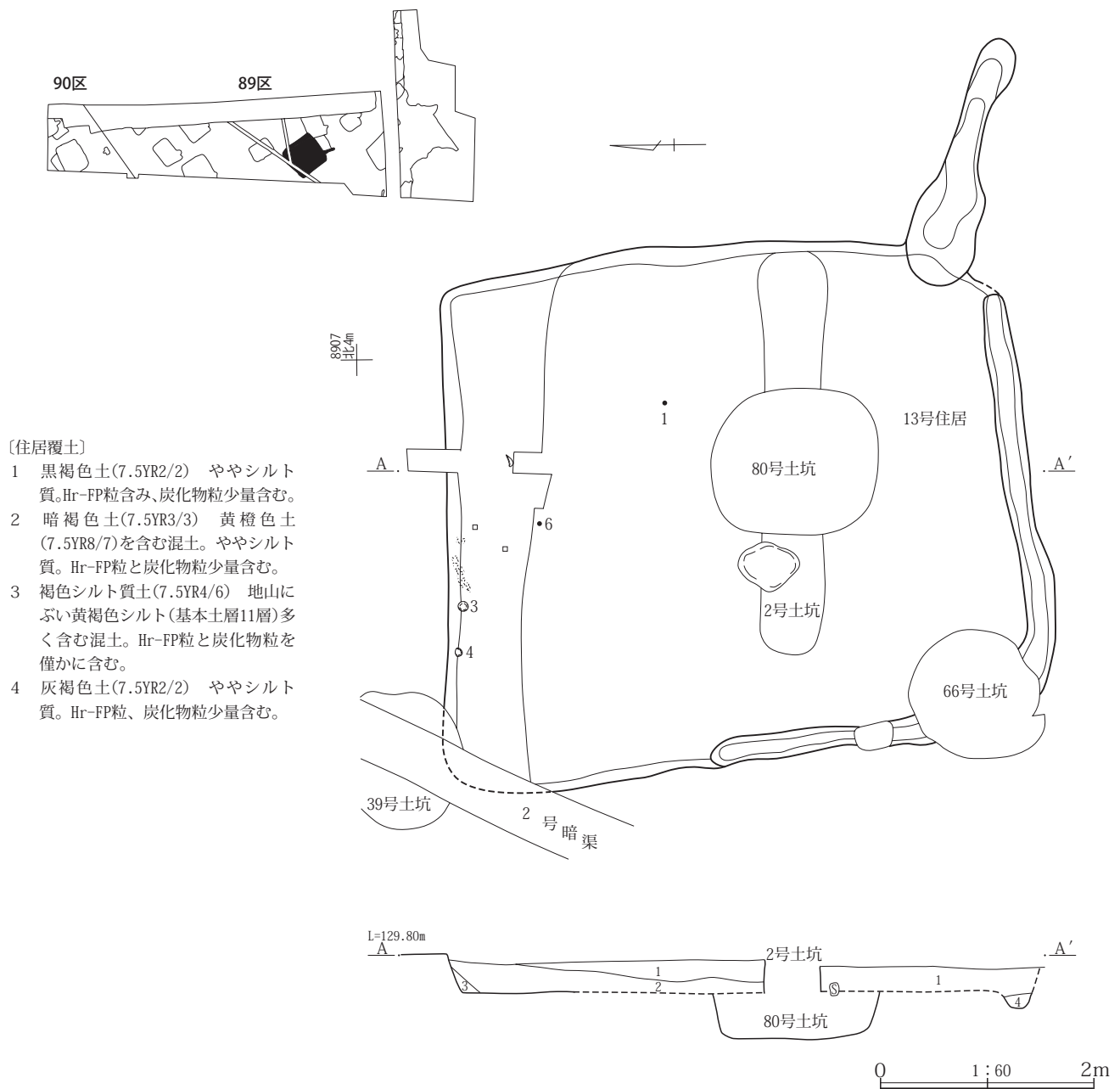
周溝 幅17～28cm、推定深16cm

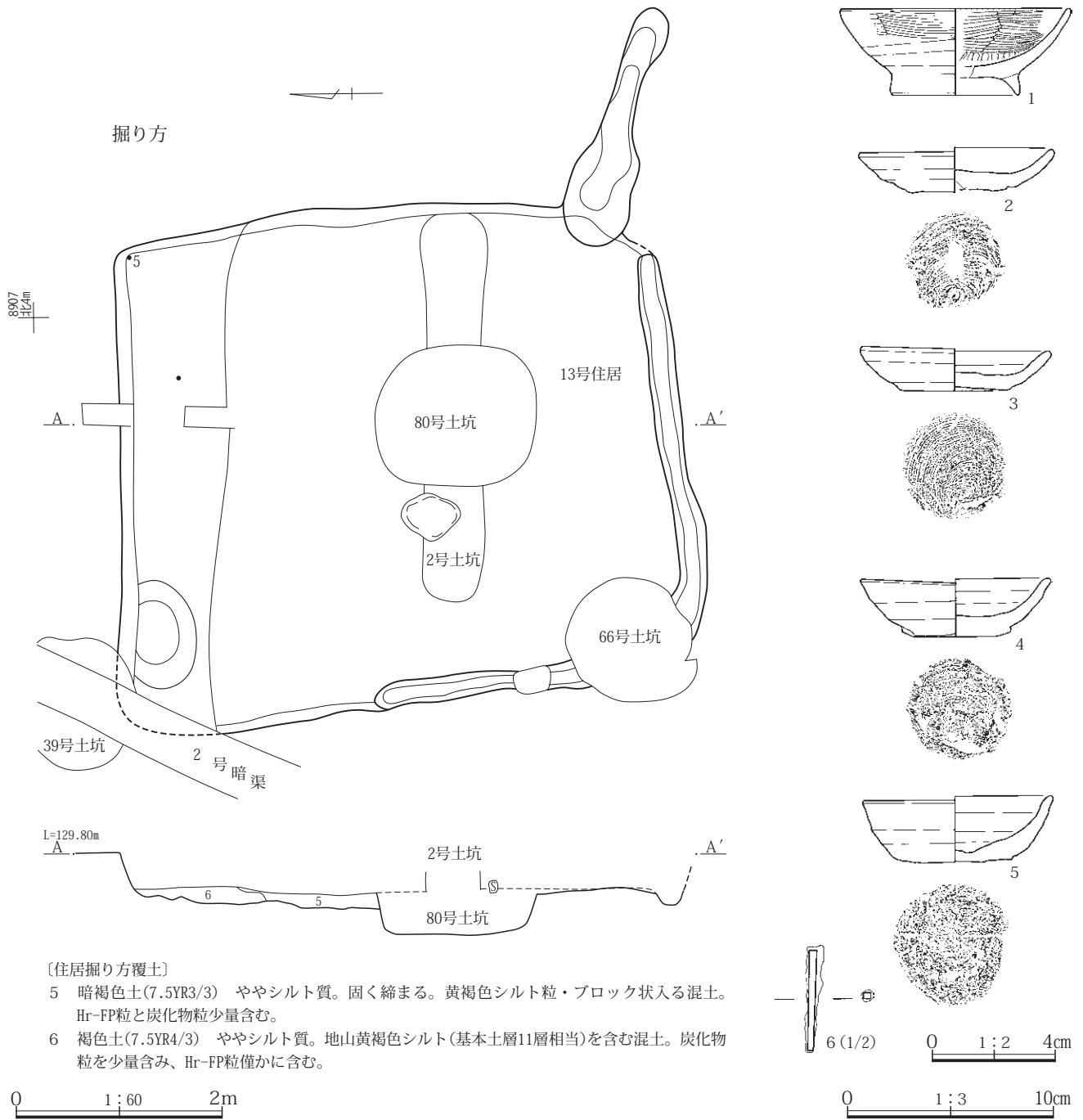
形状・構造 本住居は西側が2号暗渠に壊され、南側が13号住居と一括掘削したため、全容は詳らかにできなかった。本住居は横長の長方形のプランを呈するものと思慮される。

掘り方を有し、これを褐色土で埋め戻して床面を造っているが、13号住居との重複箇所では13号住居覆土と重複していたため、本住居の床面及び掘り方面を確認することはできなかった。

竈は13号住居の一部として調査された竈2が本住居に伴うものと判断される。この竈は、東壁の住居南東隅部近くに設置されている。煙道が確認されたものの、燃烧部を確認できなかったため、その構造も把握できなかった。煙道部には楕円形様の掘り込みを持ち、これを黒褐色土等で埋めて煙道の底面としている。

なお、柱穴、貯蔵穴は確認されなかったが、13号住居





第82図 26号住居掘り方と出土遺物

を掘り込む溝が本住居の周溝ではないかと思慮される。周溝は竈右側手前から掘削され、想定される南壁から西壁の2/3程までに沿う位地に掘削されている。

埋没土 所謂三角堆積は褐色土で、住居全体は黒褐色土で覆われている。

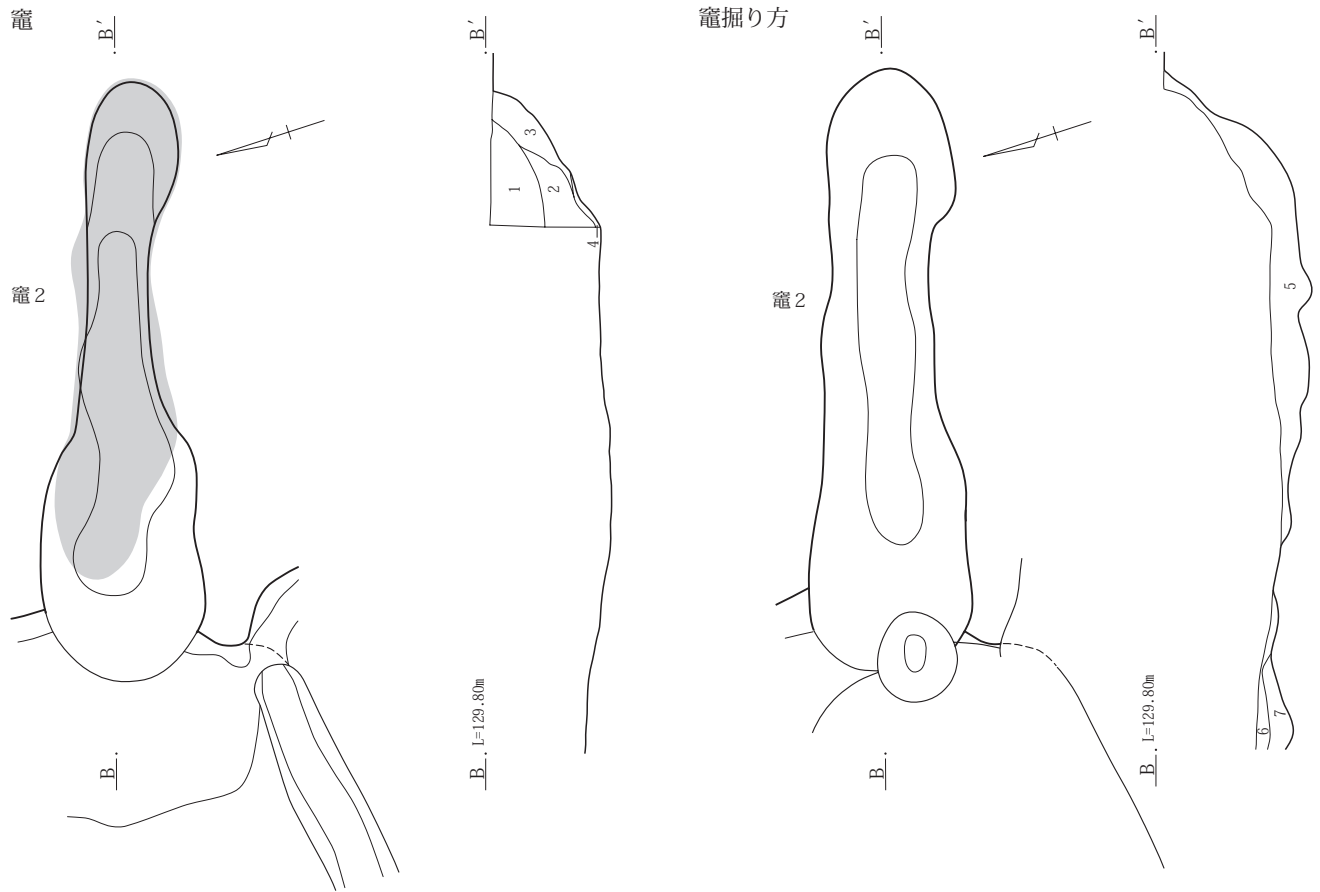
重複 上位層の2号暗渠や第2面の13号住居、39号土坑と重複するが、本住居は13号住居より新しく、これ以外の遺構に対しては本住居の方が古い。

出土遺物 土師器・須恵器片と少量の灰釉陶器片の出土

が見られ、この中には黒色土器碗(1)、須恵器杯(2~5)、不明鉄製品(6)の出土が見られた。

所見 上述のように、本住居は13号住居との重複箇所には明瞭に分離することができず、全容を詳らかにすることはできなかったが、凡その平面形態等を確認することができた。

本住居の時期は出土遺物から推して10世紀後葉のものと判断される。



〔竈覆土〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 焼土粒少量みHr-FP粒を僅かに含む。
- 2 褐色土(7.5YR4/3) Hr-FP粒、炭化物粒極僅かに含む。
- 3 ややシルト質の暗褐色土(7.5YR3/4)と焼土の混土。Hr-FP粒、炭化物粒僅かに含む。崩落による堆積土。
- 4 褐灰色土(7.5YR4/1) 焼土粒を多く含み、褐灰色粘土粒含む灰層。

〔竈掘り方覆土〕

- 5 暗褐色土(7.5YR3/4) ややシルト質。焼土粒ブロック多く含み、Hr-FP粒僅かに含む。使用面付近は被熱による焼土がみられる。
- 6 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。締まる。Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。上面に2mm程の灰層が見られる。
- 7 明褐色シルト質土(7.5YR3/4) 黄褐色シルト質土(基本土層11層土相当)を多く含む混土。炭化物粒を極僅かに含む。

0 1:30 1m

第83図 26号住居竈

27号住居(第84図、PL.18・44)

位置 90区B12～13グリッド。90区北西部、仮2区北西隅部に位置する。

方位 N-92°-E

規模 残存長345cm、残存幅286cm、深さ31cm

床下土坑1 径92×183cm、深さ17cm

床下土坑2 径69×45cm、深さ10cm

形状・構造 本住居は、北側が20号住居に切られ、東側は攪乱によって失われているため全容は詳らかでない。プランは概ね隅丸方形様を呈するものと認識される。

南壁際に土坑状の掘り込みを持つ掘り方を有し、床下

土坑1を暗褐色土で、更に住居全体をにぶい褐色土等で埋め戻して床面を造り出している。

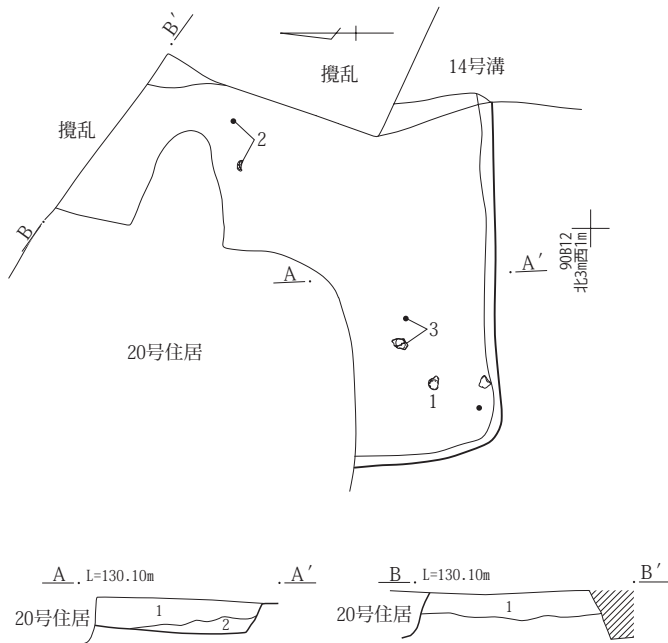
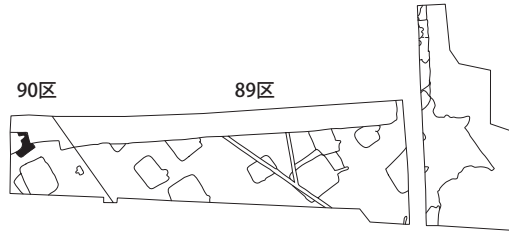
竈、柱穴、貯蔵穴は確認できなかった。

埋没土 にぶい褐色土で埋没している。2層が所謂三角堆積に該当する。

重複 他遺構との重複は見られない。

出土遺物 黒色土器碗(1)、須恵器杯(2・3)と若干の灰釉陶器片、鉄滓1点の出土が見られた。

所見 出土遺物は少ないものの、その所見から推して、本住居は10世紀後葉の所産と認識される。



〔住居覆土 A-A'〕

1 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/4) Hr-FP粒を少量、炭化物粒僅かに含む。

2 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/3) Hr-FP粒と焼土粒僅かに含む。

〔住居掘り方覆土〕

3 にぶい褐色土(7.5YR5/4) ややシルト質。やや縮まりあり。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒、焼土粒僅かに含む。

4 暗褐色土(7.5YR3/4) ややシルト質。やや粘りあり。炭化物粒を多く含み、Hr-FP粒、焼土粒少量含む。

〔住居覆土 B-B'〕

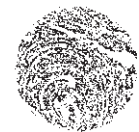
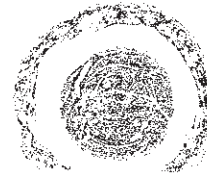
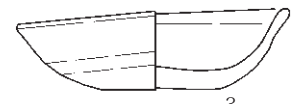
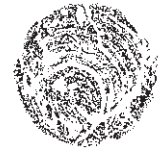
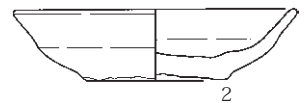
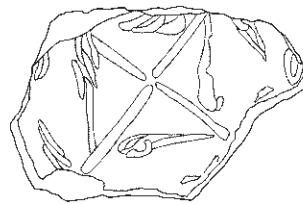
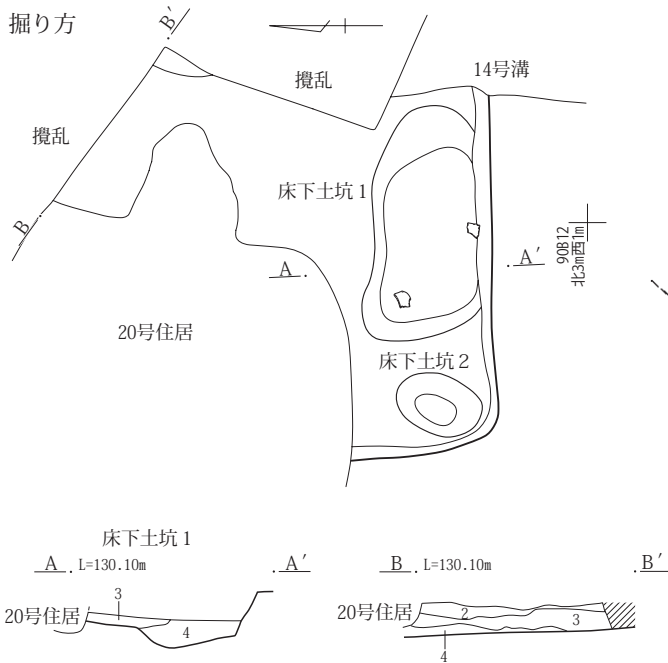
1 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/4) Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。

〔住居掘り方覆土〕

2 褐色土(7.5YR4/6) ややシルト質。あまり縮まりない。炭化物粒、3層土ブロック少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。

3 黄褐色シルト(基本土層11層土相当)。

4 基本土層15層土 As-C混黒色土。



0 1:60 2m

0 1:3 10cm

第84図 27号住居と出土遺物

28号住居(第85・86図、PL.18・19)

位置 91区G 8～9グリッド。91区北西端部、仮4区北西端部に位置する。

方位 N-108°-E

規模 残存長113cm、幅242cm、深さ18cm

竈 奥行62cm、残存幅40cm

燃烧部 残径40×13cm、深さ2cm

形状・構造 本住居は、北西側が調査区外に延びており、また住居の南北方向中央付近を9号土坑が横切って本住居を壊していたため全容は確認できなかった。本住居のプランは隅丸形状を呈するものと判断される。

中央に土坑状の浅い掘り込みを伴う掘り方を有し、これを暗褐色土で埋めて戻して床面を造る。

竈は明褐色土で埋めて燃烧面を造り出している。燃烧部の右側に河床礫を立てて袖石としているが、袖の構築材等は確認されなかった。

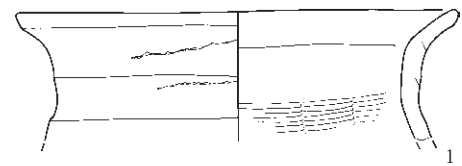
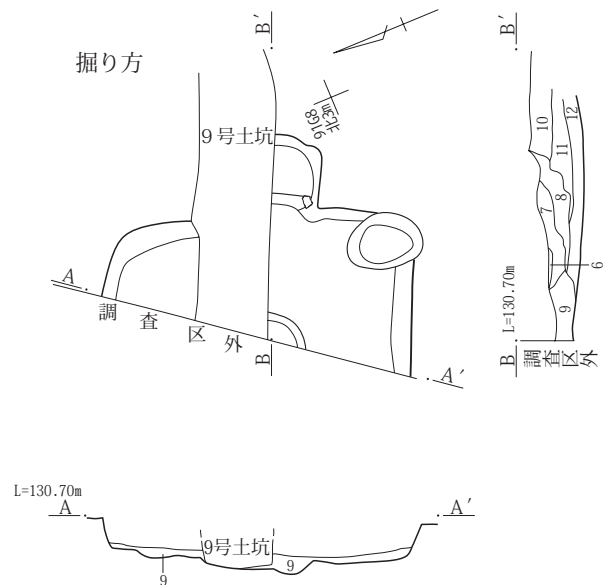
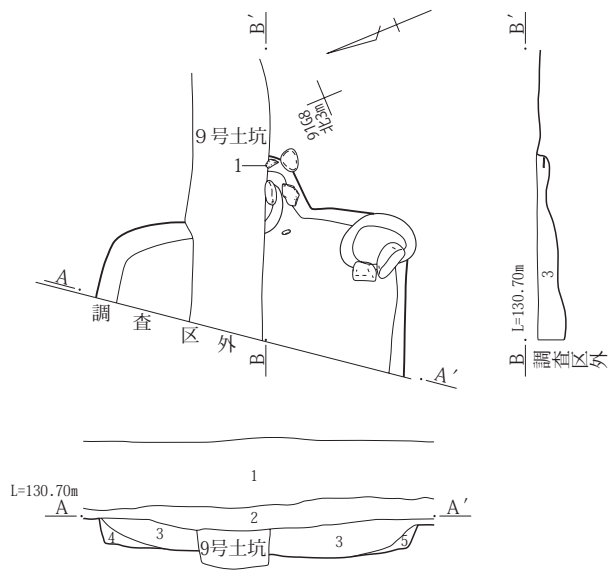
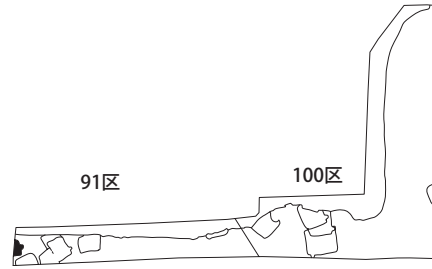
また柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 黒褐色土。

重複 上位面の9号土坑に切られる以外は、他遺構との重複は見られなかった。

出土遺物 僅かに土師器甕片(1)が出土したに過ぎなかった。

所見 出土遺物が1点しかないため明確ではないが、出土遺物は9世紀後半の所産であり、本住居はその前後の時期の所産と想定される。



0 1:3 10cm

0 1:60 2m

〔住居廃絶後の覆土〕

- 1 水田等土壤 酸化鉄分互層をなす。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) やや粘性あり。Hr-FP粒含む。

〔住居覆土〕

- 3 暗褐色土(10YR3/3) シルトベース。Hr-FP粒含み、炭化物、焼土粒少量含む。
- 4 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2)。
- 5 黒褐色シルト質土(7.5YR3/1) 暗褐色シルトブロックと白色鉱物粒含む。所謂三角堆積層。

〔住居掘り方覆土〕

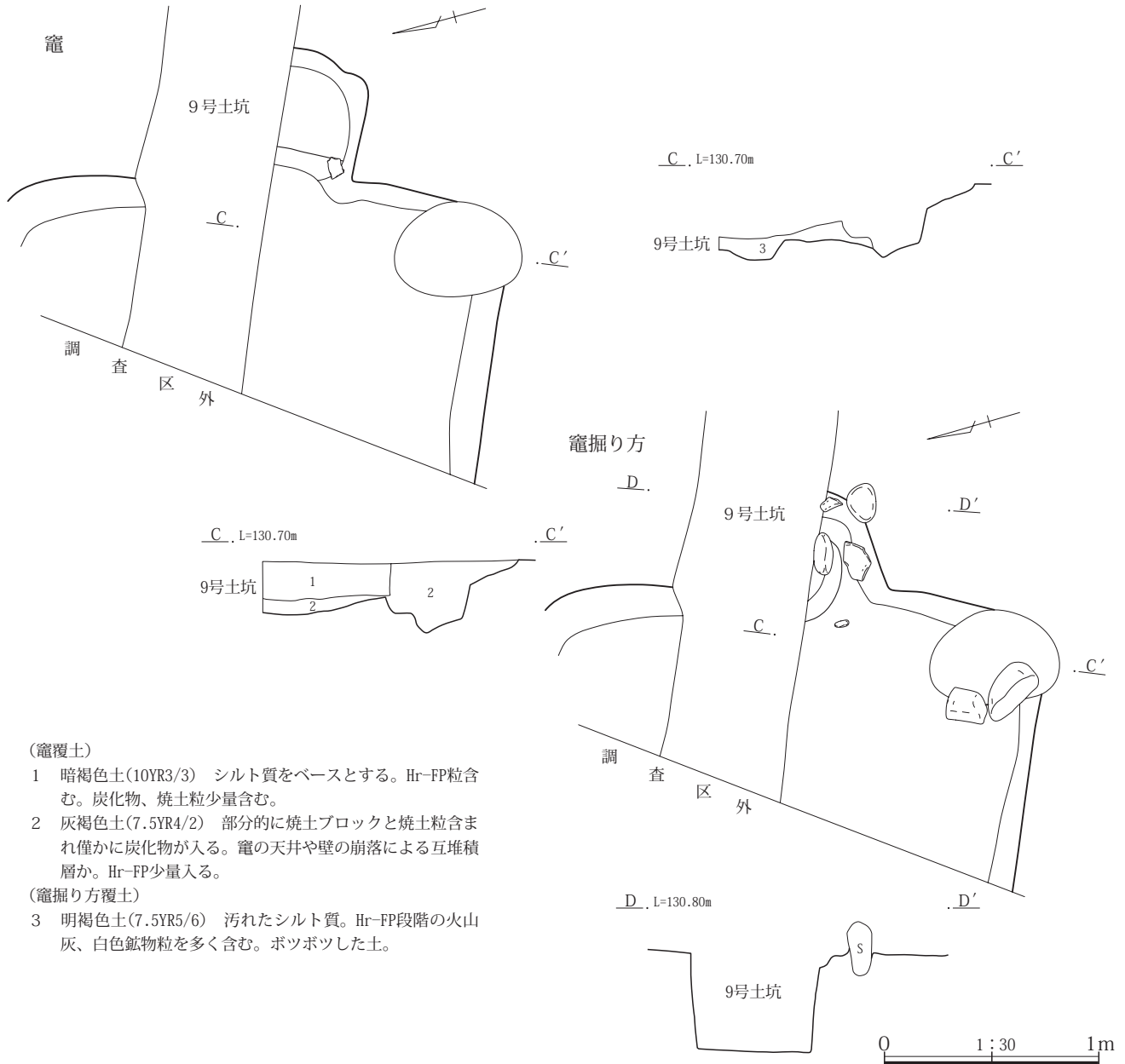
- 6 黒褐色シルト質土(7.5YR3/1) 炭化物粒入る。竈付近の炭化物粒の層が薄く水平堆積する。
- 7 灰褐色土(7.5YR4/2) 部分的に焼土ブロックと焼土粒含まれ僅かに炭化物が入りHr-FP少量入る。竈の天井、壁の崩落による互堆積層。
- 8 明褐色土(7.5YR5/6) よごれたシルト質。Hr-FPの火山灰ブロック、白色鉱物粒多く含む。ポツポツした土。
- 9 暗褐色シルト土(7.5YR3/4) Hr-FP火山灰・軽石、酸化鉄ブロックを少量含む。

〔地山層〕

- 10 褐灰色砂質土〔基本土層10層〕 白色軽石含む。
- 11 黄褐色シルト(基本土層11層相当)。
- 12 にぶい黄褐色シルト(基本土層11層)。

第85図 28号住居と出土遺物

第4章 発見された遺構と遺物



(竈覆土)

- 1 暗褐色土(10YR3/3) シルト質をベースとする。Hr-FP粒含む。炭化物、焼土粒少量含む。
- 2 灰褐色土(7.5YR4/2) 部分的に焼土ブロックと焼土粒含まれ僅かに炭化物が入る。竈の天井や壁の崩落による互堆積層か。Hr-FP少量入る。

(竈掘り方覆土)

- 3 明褐色土(7.5YR5/6) 汚れたシルト質。Hr-FP段階の火山灰、白色鋳物粒を多く含む。ポツポツした土。

第86図 28号住居竈

29号住居(第87図、PL.19・44)

位置 89区F 8～G 8グリッド。91区西南隅部、仮4区西端部に位置する。

方位 N-65°-E

規模 残存長330cm、幅162cm、深さ28cm

形状・構造 本住居は、南側が大きく西側が調査区外に延びているため全容は詳らかでない。プランは隅丸方形を呈する。

北壁際の中中部から東部にかけて幅50cm程、深さ13cm以下の周溝状の掘り込みを持つ掘り方を有し、西寄りには砂や角閃石安山岩の入る泥流層上面の土を地床とし、他は

部分は褐色土で埋め戻して床を造り出している。

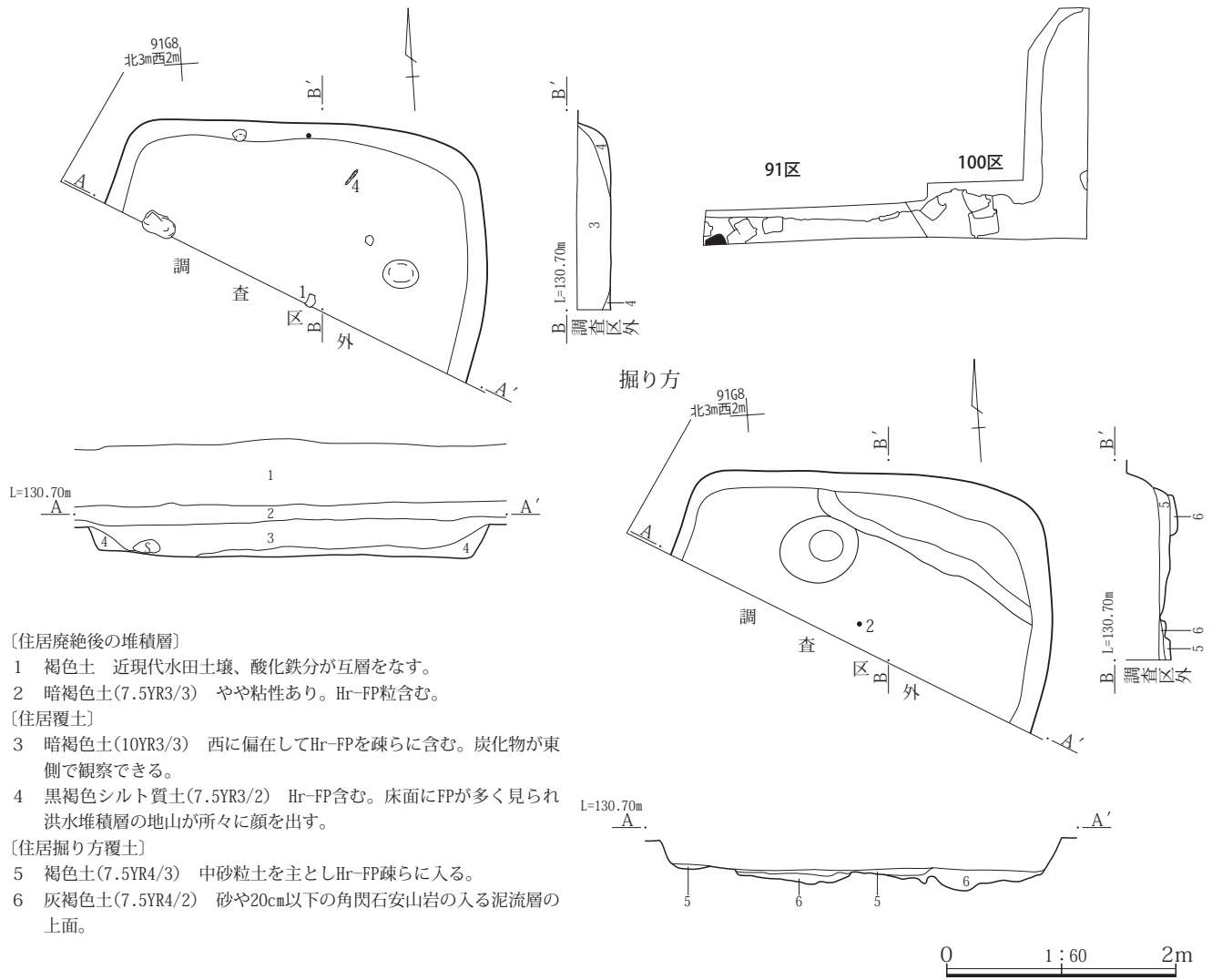
竈、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 所謂三角堆積は黒色土であり、住居全体は暗褐色土で覆われる。

重複 他遺構との重複は見られない。

出土遺物 羽釜(1)、土錘(2)や、土師器・須恵器片と若干の灰釉陶器片、鉄鏃(4)、不明鉄製品(3)の出土が見られた。

所見 本住居の時期は羽釜の時期から推して10世紀の所産とできる可能性を有する。



〔住居廃絶後の堆積層〕

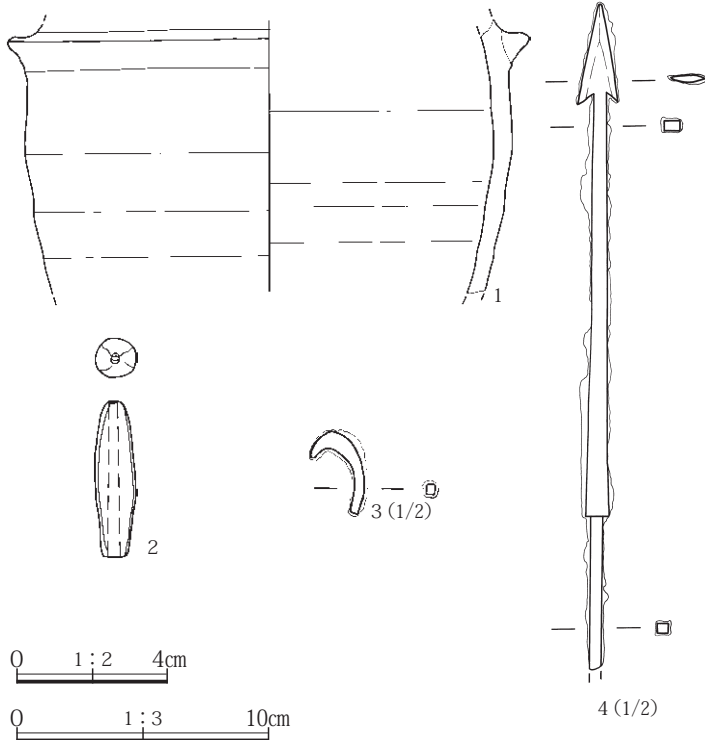
- 1 褐色土 近現代水田土壌、酸化鉄分が互層をなす。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) やや粘性あり。Hr-FP粒含む。

〔住居覆土〕

- 3 暗褐色土(10YR3/3) 西に偏在してHr-FPを疎らに含む。炭化物が東側で観察できる。
- 4 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) Hr-FP含む。床面にFPが多く見られ洪水堆積層の地山が所々に顔を出す。

〔住居掘り方覆土〕

- 5 褐色土(7.5YR4/3) 中砂粒土を主としHr-FP疎らに入る。
- 6 灰褐色土(7.5YR4/2) 砂や20cm以下の角閃石安山岩の入る泥流層の上面。



第 87 図 29 号住居と出土遺物

30号住居(第88～90図、PL.19・20・44)

位置 91区E 7～F 8グリッド。91区西部、仮4区西端部に位置する。

方位 N-95°-E

規模 長254cm、幅330cm、深さ39cm

竈 奥行114cm、幅42cm

燃烧部径37×82cm

左袖 幅23cm、長29cm

煙道 幅33cm、長31cm

貯蔵穴 径44×53cm、深さ17cm

形状・構造 本住居は、横長の隅丸長方形プランを呈する。

中央に2基の小坑状の掘り込みを有する浅い掘り方を有し、これを褐色土で埋め戻して床面を造る。

竈は東壁の南寄りに設けられ、壁面にやや掛る

第4章 発見された遺構と遺物

位置に径65×62cm、深さ9cmの隅丸方形プランの竈掘り方を掘削し、これを黒褐色土で埋めて焼面を造っている。焼部の住居壁際と奥側30cm程の左右両側に河床礫を縦位に据えて袖石とし、左袖では表面に黒褐色土、明褐色砂質土を裏込めとして袖を造っている。また竈掘り方の中央奥縁に径20×25cm、深さ13cmの小穴を掘削して河床礫を縦位に据えて支脚を設けている。煙道は短く掘り抜いて造られている。

また柱穴は確認されなかったが、貯蔵穴は竈右側の住居左南隅部に掘削されている。

埋没土 黒褐色土であるが竈を含む東壁近くに炭化物粒の分布が見られた。

重複 上位面の10号土坑に切られるが、同一面の31・32号住居を切っている。

出土遺物 須恵器の杯(1)・椀(2)・壺(3)、角釘(4)の他、土師器・須恵器片と僅かな灰釉陶器片の出土が見られた。

所見 炭化物粒や炭化物の分布状況から本住居は焼失

家屋と判断される。また炭化物の遺存状態から風向きは北北東、着火地点は北壁中央であった可能性が考えられる。またその時期は出土遺物から推して10世紀後葉と判断される。

31号住居(第88・89図、PL.20)

位置 91区F7～8グリッド。91区西部、仮4区南西端部に位置する。

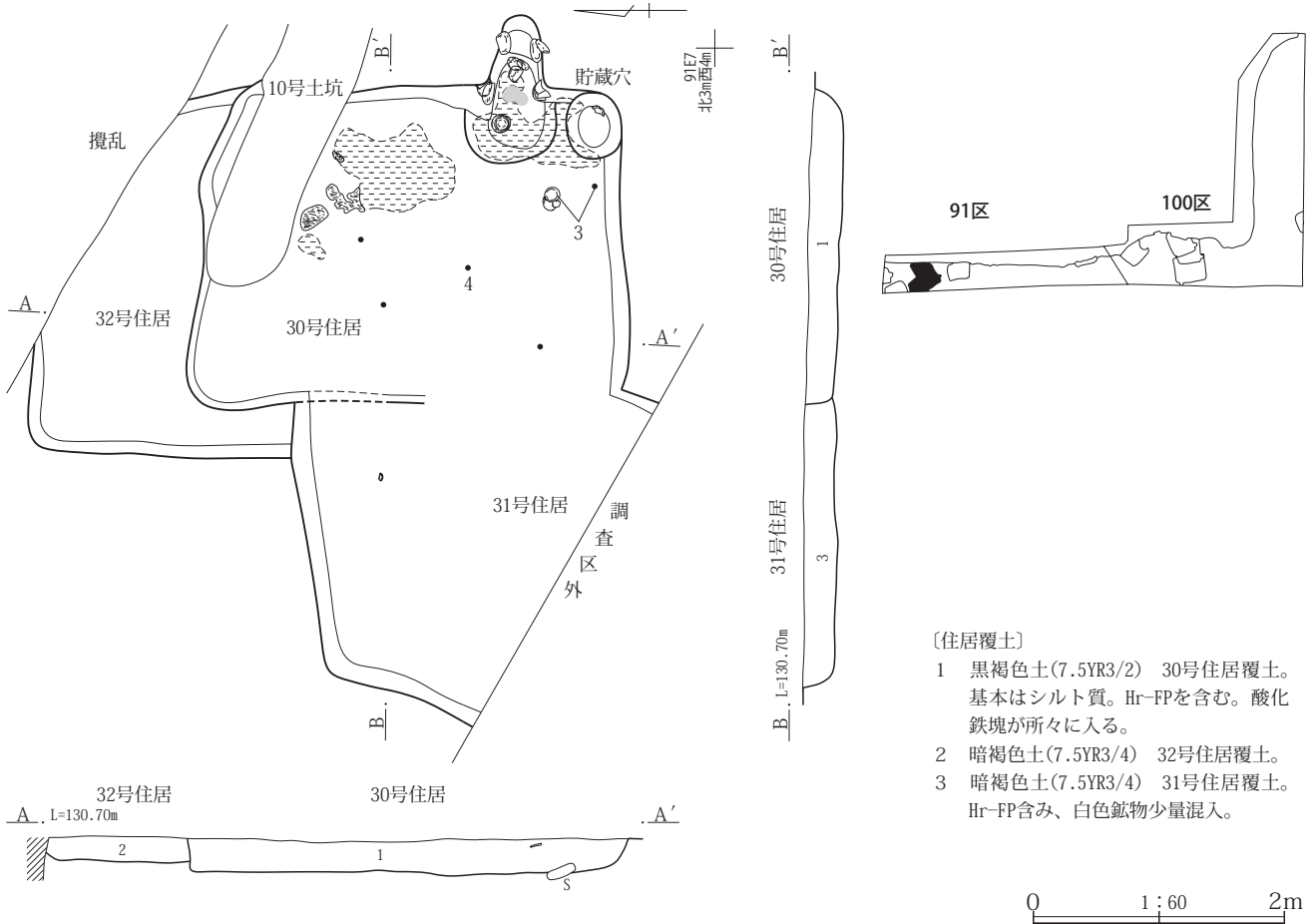
方位 N-5°-E

規模 長297cm、幅250cm、深さ36cm

竈 奥行48cm、幅45cm 焚口幅42cm

床下土坑1 径100×116cm、深さ15cm

形状・構造 本住居は南側が調査区外に在り、東側が30号住居に切られているため全容は詳らかではない。しかしながら、規模、形態から推して本住居は竪穴住居と判断される。またそのプランはも明瞭にはできないが、残存部から推して横長の逆台形状を呈するように見受けられる。



第88図 30・31・32号住居

東壁際に大型の土坑状の掘削を伴う掘り方を有し、これを極暗褐色土で埋め戻して床面を造っている。

竈、柱穴、貯蔵穴は見られなかった。

埋没土 暗褐色土。

重複 30号住居と重複するが、本住居の方が古い。

出土遺物 僅かな土師器片と灰釉陶器片が出土したに過ぎない。

所見 本住居は10世紀後葉よりは古いものの、その時期を特定することはできなかった。

32号住居(第88・89図、PL.20)

位置 91区E 8～F 8グリッド。89区東部、仮1区南西隅部に位置する。91区西部、仮4区北西端部付近に位置する。

方位 N-5°-E

規模 残存長径302×190cm、深さ7cm

竈 奥行48cm、幅45cm 焚口幅42cm

床下土坑1 径125×56cm、深さ9cm

形状・構造 本住居は、南東側が攪乱で壊され、西側が調査区外に出ており、上位が大きく削られているため全容は詳らかにできなかった。プランは方形状を呈する。

掘り方は、幾つかの土坑、ピット状の掘り込みを伴い、これを褐色土等で埋め戻して床面を造り出している。なお、床下土坑1の断面観察では上位で燃焼の痕跡が見られ、灰や焼土の堆積も見られる。

竈は東壁北寄りに設けられ、凹凸のある竈の掘り方を、炭化物粒を僅かに含む褐色土で埋め戻して燃焼面を造り出している。しかし袖や天井等は残されておらず、煙道も確認されなかった。

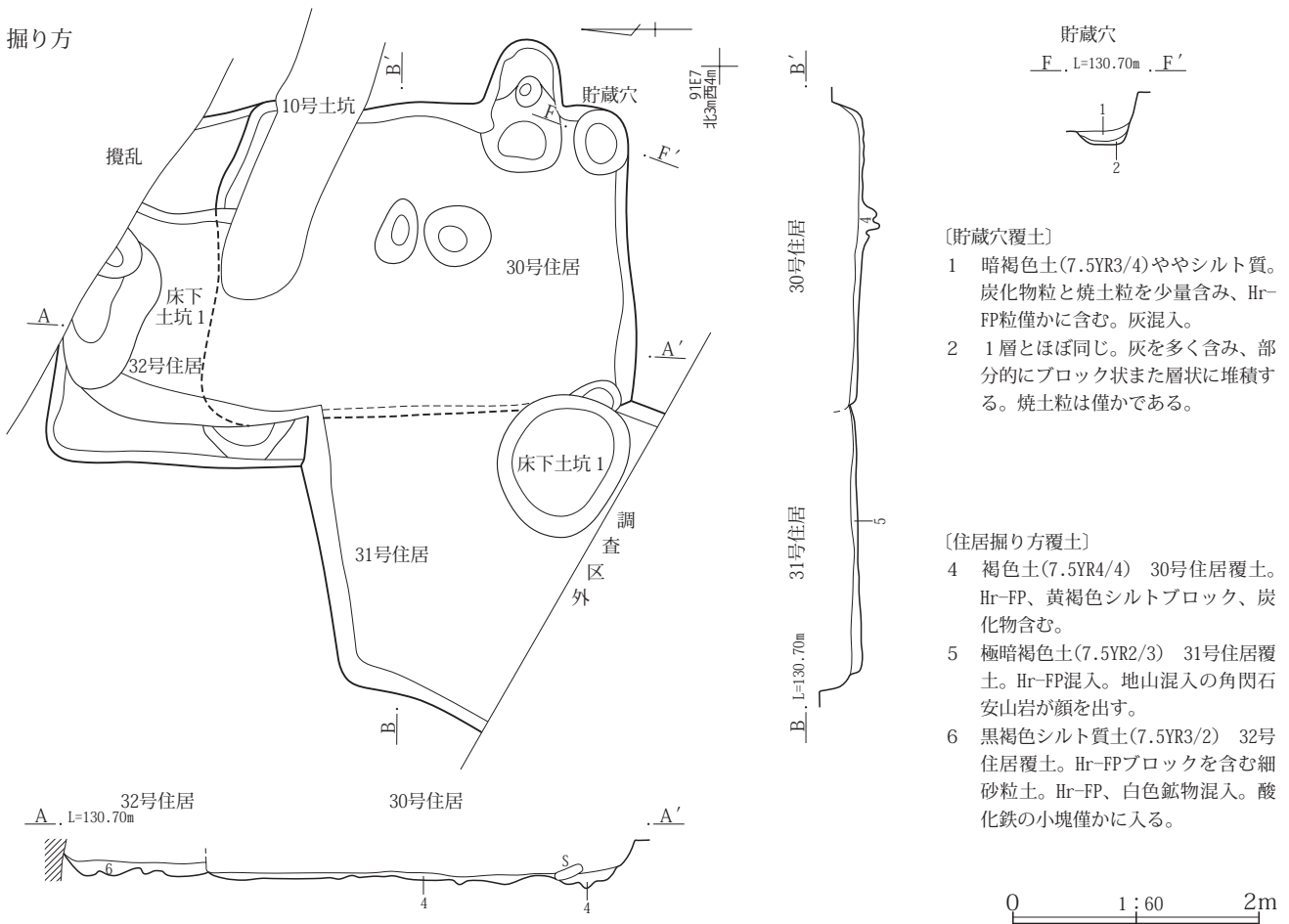
また柱穴も確認されなかった。

埋没土 炭化物粒を含む黒褐色土。

重複 他遺構との重複は見られない。

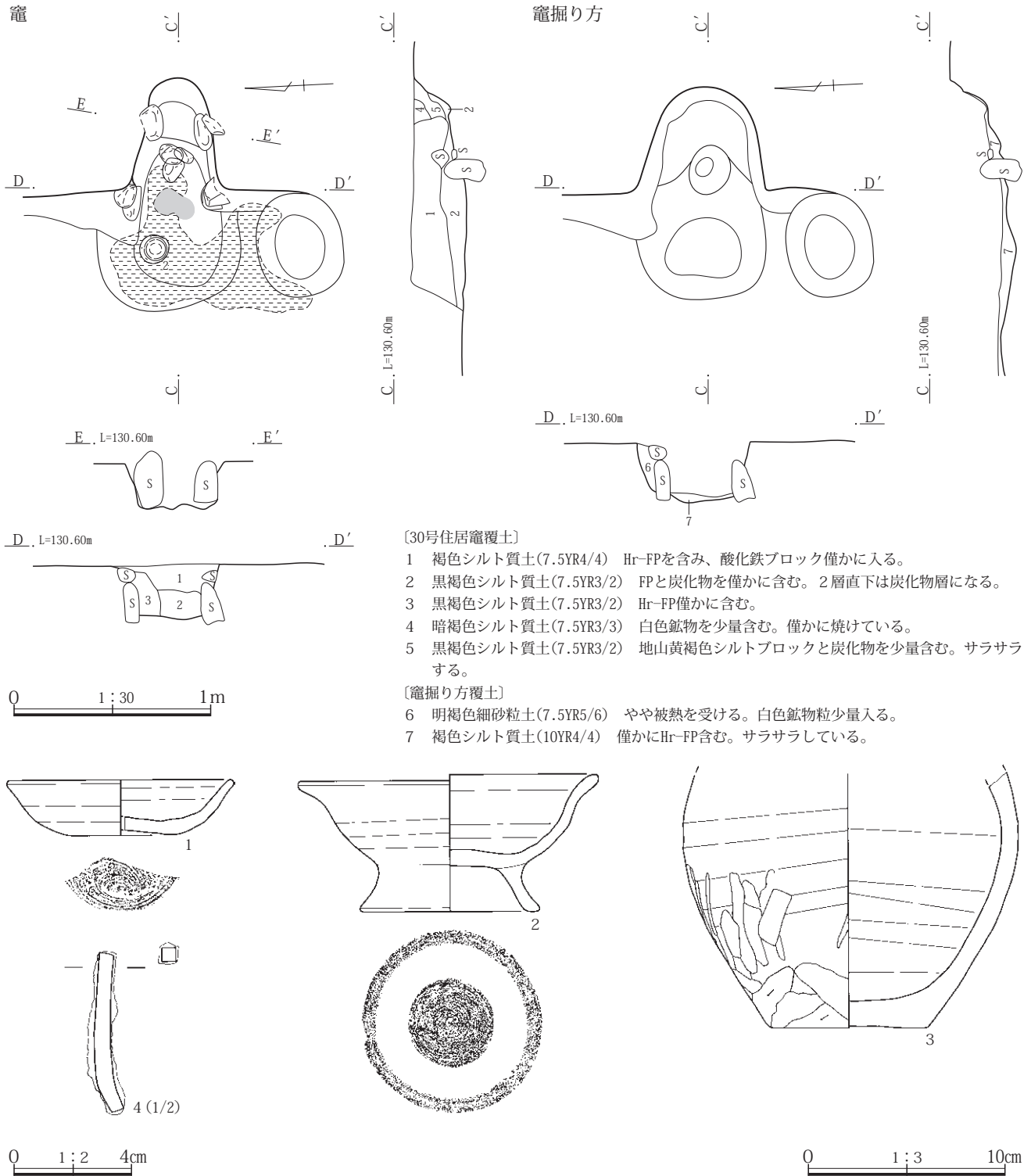
出土遺物 出土遺物は得られなかった。

所見 本住居は30号住居に切られるため、10世紀後葉よりは古いことは確認されるが、その時期を特定することはできなかった。



第89図 30・31・32号住居掘り方

第4章 発見された遺構と遺物



第90図 30号住居竈と出土遺物

33号住居(第91～93図、PL.20・21・45)

位置 91区D7～E8グリッド。91区西部、仮1区西部に位置する。

方位 N-118°-E

規模 長354cm、残存幅259cm、深さ22cm

形状・構造 本住居は東端が試掘トレンチに掘削され、

北側が攪乱によって壊されているため全容は詳らかにできなかった。プランは方形状を呈する。

掘り方は、これを褐色土等で埋め戻して床面を造り出している。

竈は東壁の中心より南寄りに設けられているが、竈部分には84号土坑並びに上位面の8号溝が重複して掘削さ

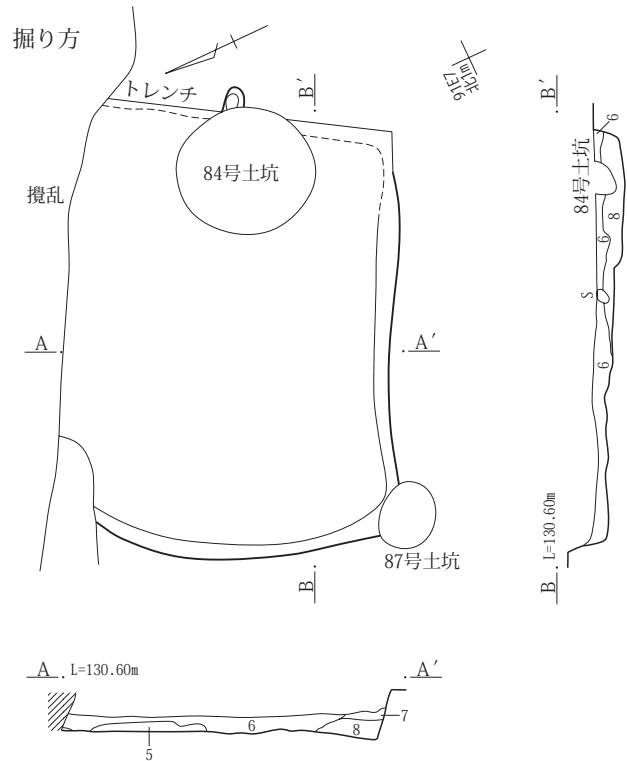
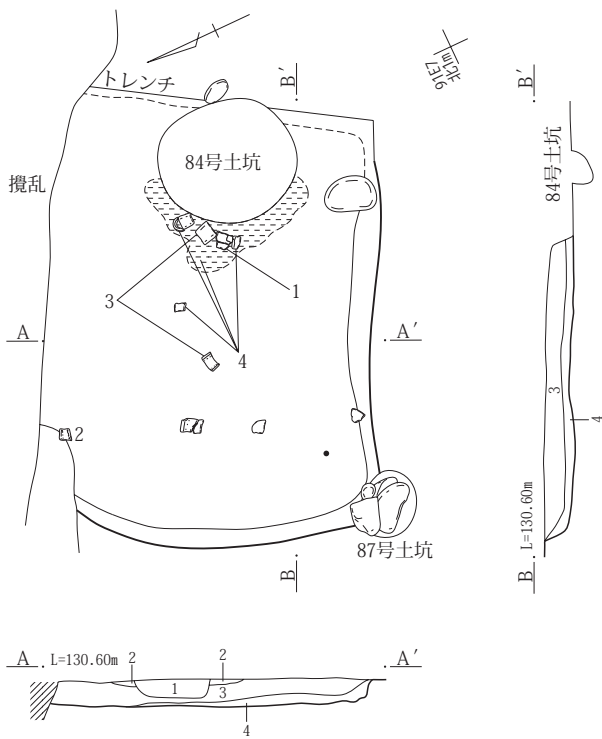
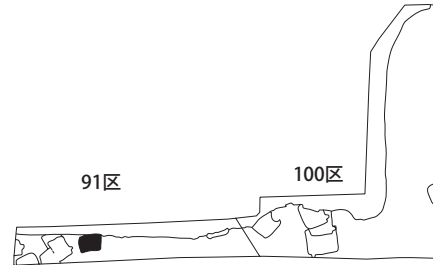
れて竈の殆どは壊されており、僅かに左袖の袖石が確認できたに過ぎなかった。遺存していた左袖の袖石は住居壁面を越えた位置に径15×(20) cm、深さ15cmの袖石の形状に合わせた小孔を掘削し、ここに河床礫を縦位に据えたものであった。

また柱穴、貯蔵穴の住居内の施設も確認されなかった。埋没土 下位に黒褐色土、上位に褐色土が堆積している。また竈前には黒色灰の分布も見られた。

重複 上位面の8号溝、同一面の84・87号土坑と重複するが、本住居は8号溝、84号土坑よりは古いものの、87号土坑との新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 少量の土師器・須恵器・灰釉陶器片、鉄滓と共に羽釜(1)、丸瓦(2~4)の出土が見られた。

所見 炭化物粒の分布状態から本住居は焼失家屋であった可能性も考慮される。またその時期は明確できないが、出土遺物から推して凡そ10世紀頃の所産と認識される。



[33号住居 A-A'・B-B']

1 1号溝覆土。

[住居覆土]

2 暗褐色土(7.5YR3/4) 炭化物多く含む。

3 褐色土(7.5YR4/6) 炭化物、焼土ブロック少量含む。Hr-FP住居中央寄りに多く含まれる。

4 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) Hr-FP少量含む。

[住居掘り方]

5 橙色土(7.5YR6/8) Hr-FPと火山灰のブロックを含む泥流層土。

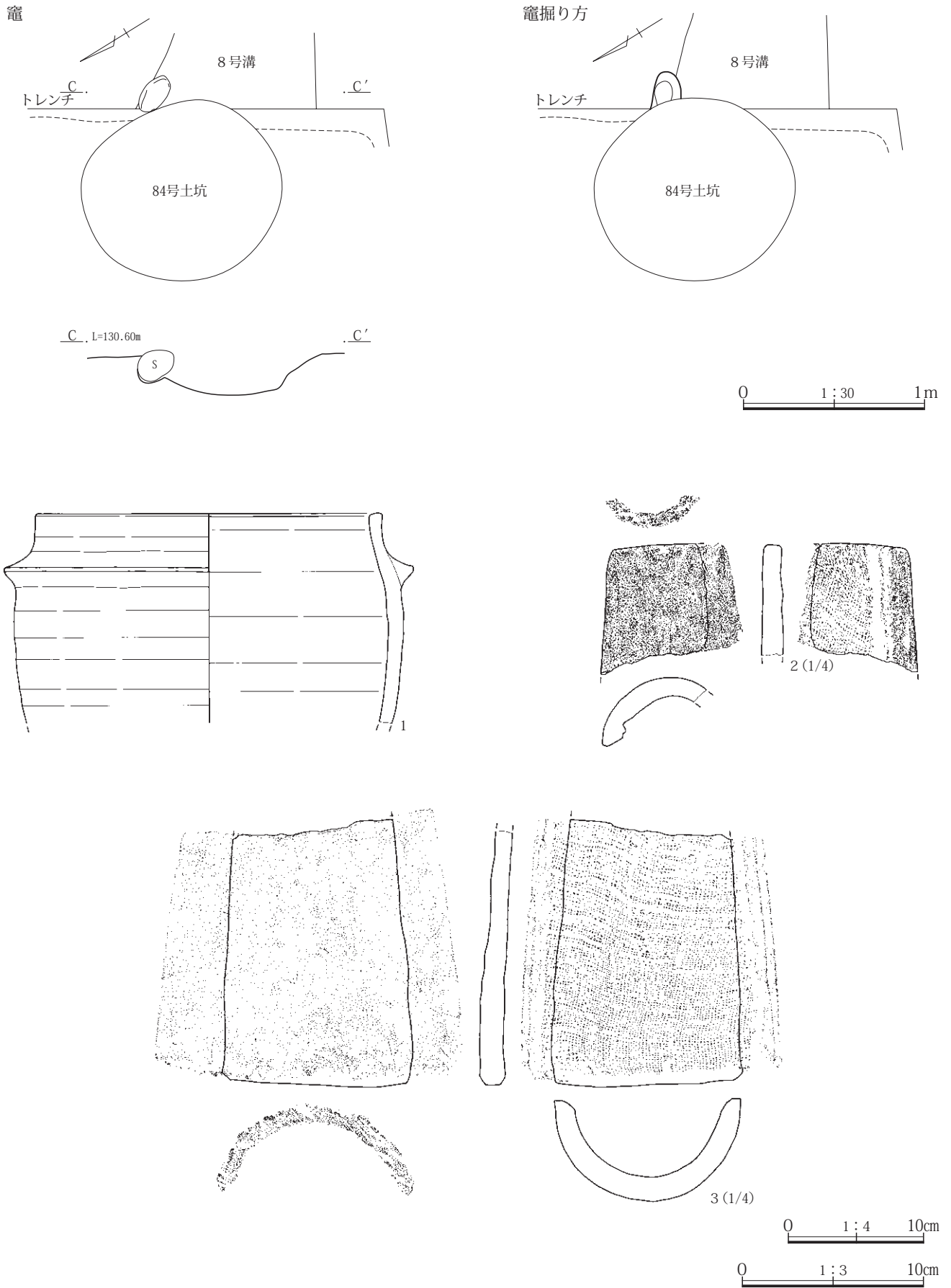
6 褐色土(7.5YR4/4) FPとアッシュブロック、黄褐色シルト質の混合土。

7 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/4) 褐灰色砂質土(基本土層10層土)。Hr-FPを含む。

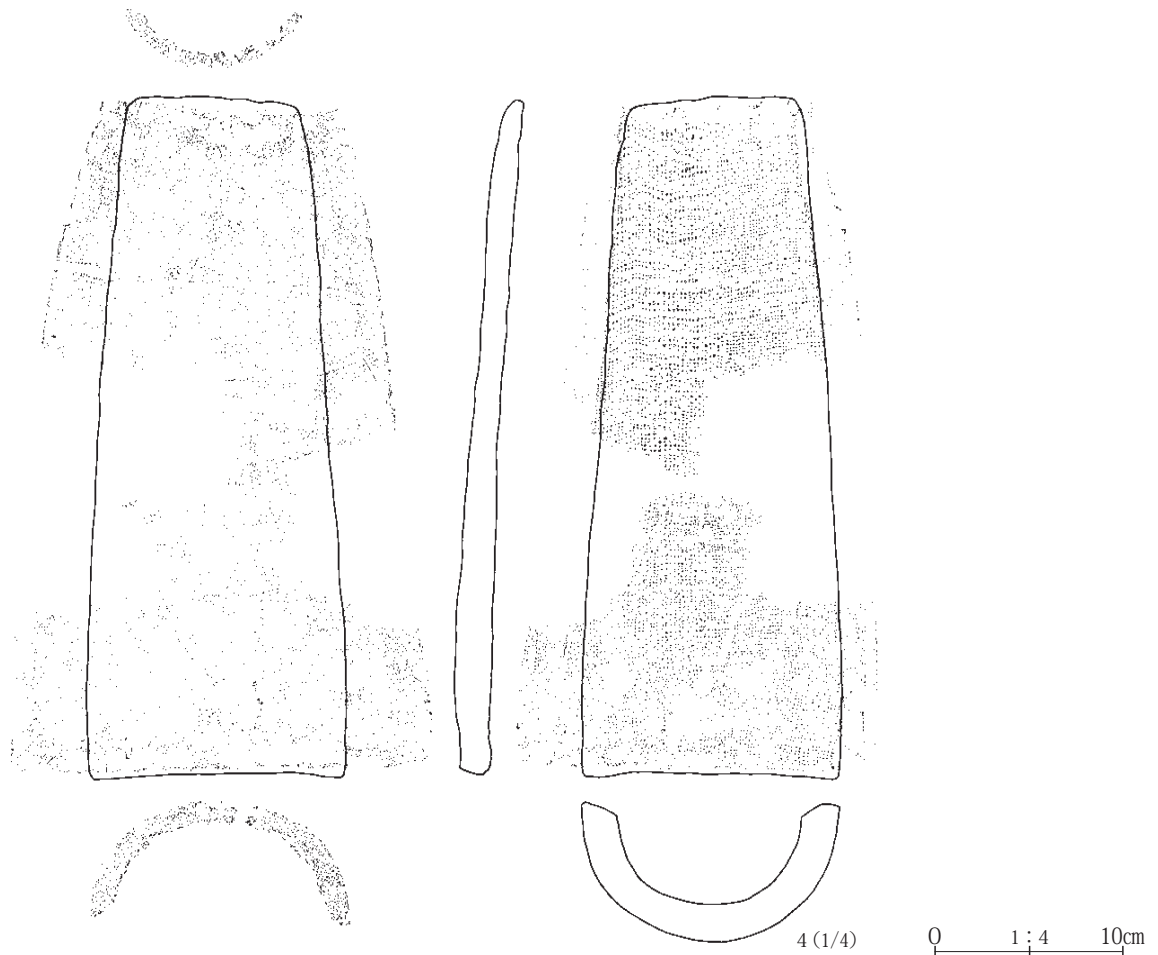
8 黒褐色土(7.5YR3/1) As-C混を含む。所謂C黒である。

0 1:60 2m

第91図 33号住居



第92図 33号住居竈と出土遺物(1)



第93図 33号住居出土遺物(2)

34号住居(第94・95図、PL.21・45)

位置 89区A 5～B 5グリッド。89区東部、仮4区中部に位置する。

方位 N-86°-W

規模 残存長152cm、残存81cm、深さ52cm

竈 奥行48cm、幅45cm 燃烧部径24×86cm

左袖 幅33cm、長さ91cm

右袖 幅37cm、残長61cm

煙道 幅9cm、長さ80cm

床下土坑1 径(70)×(32)cm、深さ22cm

床下土坑2 径55×50cm、深さ22cm

形状・構造 本住居は、北側が大きく攪乱で壊されているため、南縁付近が遺存しているに過ぎない。従ってプランは明確ではないが、凡そ隅丸方形形状を呈するものと判断される。

本住居は土坑状の掘削のある掘り方を有し、これを明褐色シルト質土で埋め戻して床面を造っている。

竈は西壁の住居南西隅部に接して設けられている。壁面手前に残幅80cm、奥行87cmを測る不整形プランの、更に壁面を跨いで幅47cm、奥行48cmを測る楕円形プランの二段構成の浅い掘り方を有し、これを埋め戻して燃烧面を造っている。袖は左右の奥側に掘り残しが見られ、左袖2基、右袖には1基が遺存する河床礫を立位に据えた袖石を立てて、明褐色土で固めて造り出している。煙道はトンネル状に掘削し、先端に径22×15cmの竪坑が掘られる。

また柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

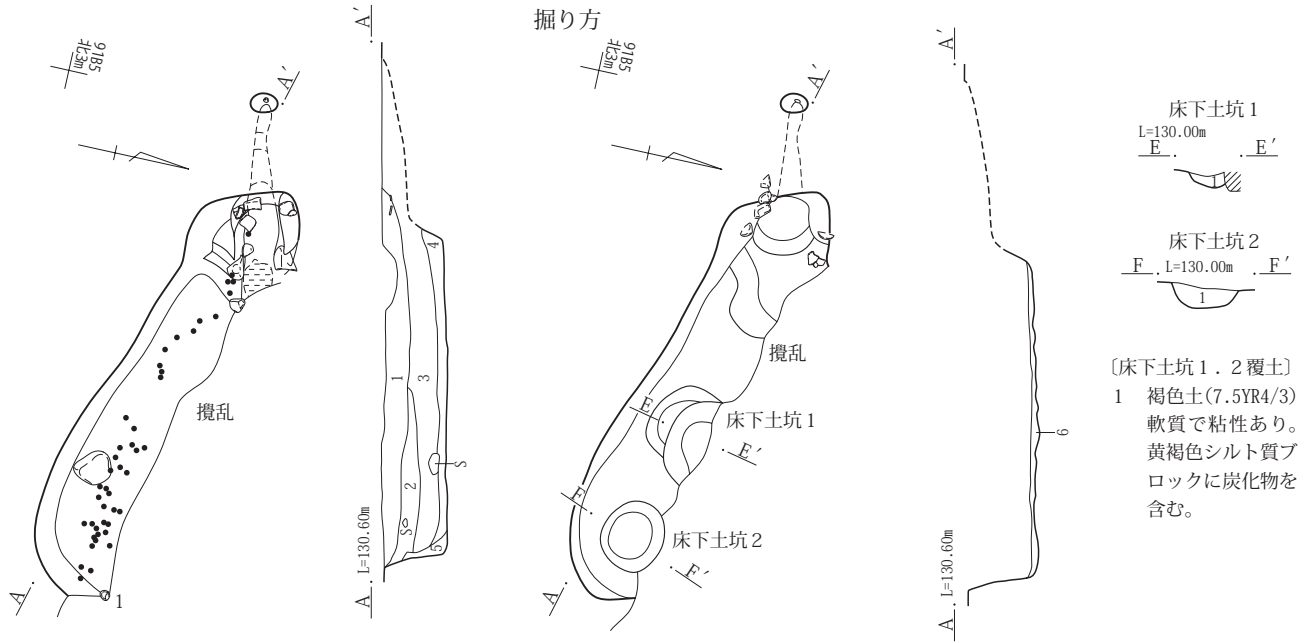
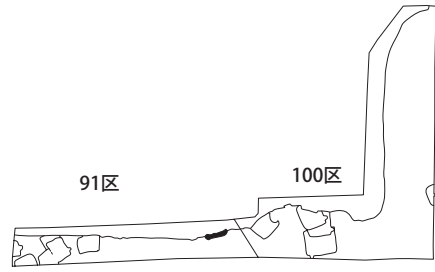
埋没土 所謂三角堆積は橙色土で幅狭に堆積し、住居全体は灰褐色土、褐色土で埋没している。

重複 他遺構との重複は見られない。

出土遺物 少量の土師器・須恵器片に混じり、須恵器杯(1)、土釜(2)の出土が見られた。その他、流動滓(3～11・16～20・23)、炉内滓(12～14・21)等多量の鉄滓、炉壁(15・22)の出土も見られた。

第4章 発見された遺構と遺物

所見 本住居は竈が西側に設けられる珍しい竪穴住居である。その時期は出土遺物から推して凡そ11世紀前葉の所産と判断される。なお、多量の製鉄関連遺物の出土が見られたが、本住居そのものにこれに伴う構造は認められないことから、本住居は製鉄に直接伴うものではなく、本住居廃絶後の埋没段階で生じたクレーター状の窪みを利用した製鉄行為に伴うものと判断される。



床下土坑1
L=130.00m
E. E'

床下土坑2
F. L=130.00m F'

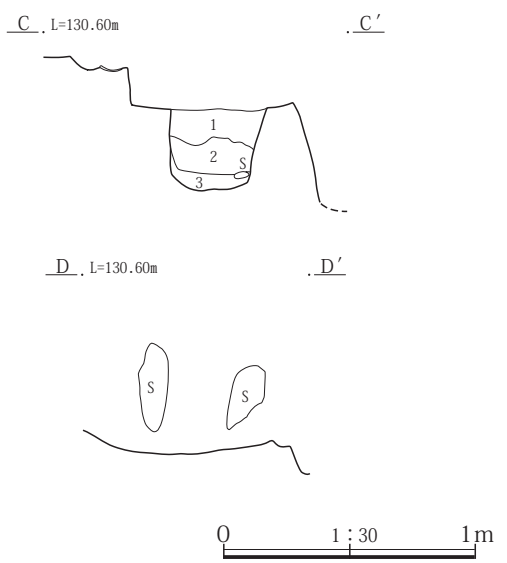
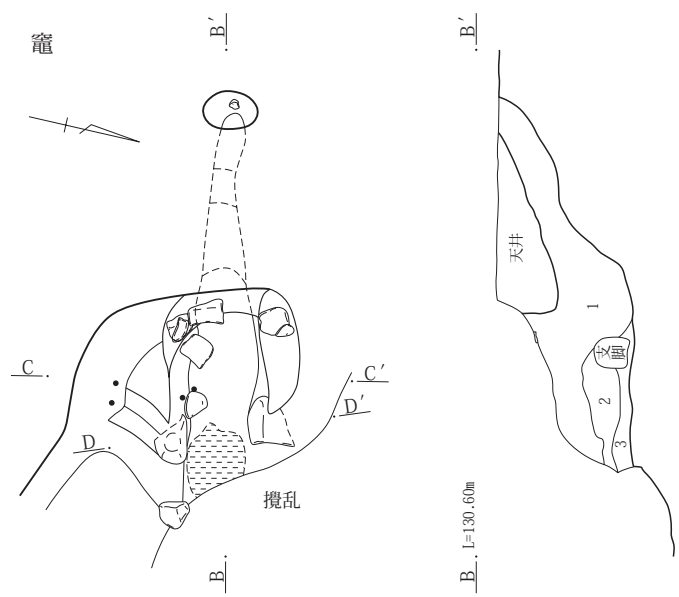
〔床下土坑1・2覆土〕
1 褐色土(7.5YR4/3) 軟質で粘性あり。黄褐色シルト質ブロックに炭化物を含む。

〔住居覆土〕

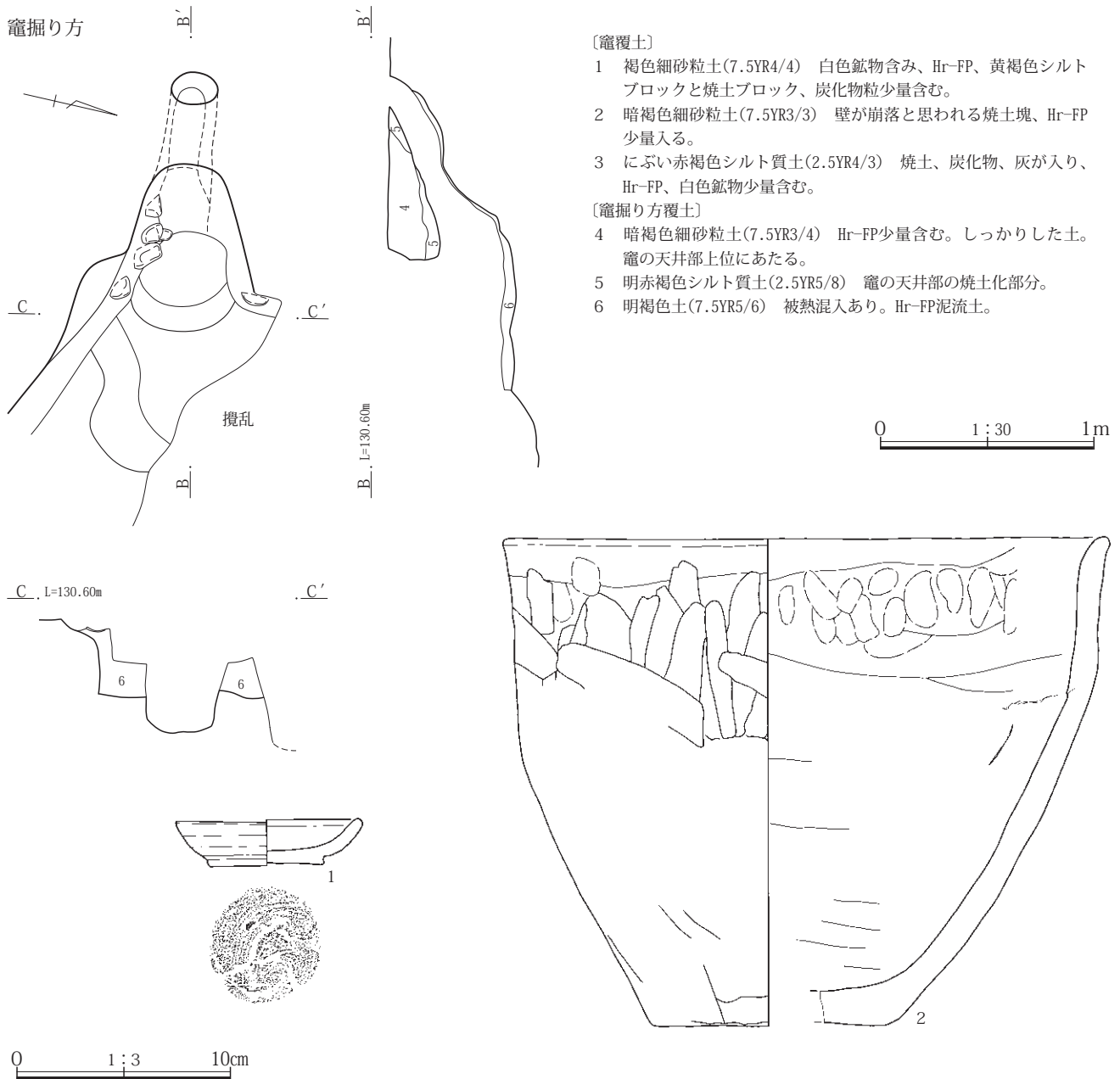
- 1 褐色土(7.5YR4/3) 細砂粒主体にHr-FP、焼土ブロックと少量の炭化物含む。
- 2 灰褐色土(7.5YR4/2) 1層とほぼ同じだが、焼土粒は殆どない。
- 3 灰褐色土(7.5YR4/2) やや粘性を帯びる。Hr-FPが少なくない。Hr-FPに伴う火山灰や焼土ブロック混入する。
- 4 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 粘性あり。Hr-FP火山灰ブロック、酸化鉄ブロック含み、Hr-FP軽石少量含む。
- 5 橙色土(7.5YR6/6) 地山のシルト質(基本土層14層)壁土の流れ込み。流入土にFPが僅かに混入。サラサラしている。

〔住居掘り方覆土〕

- 6 明褐色土(7.5YR5/6)シルト質。Hr-FAブロックとHR-FAブロックが酸化し明赤褐色化したブロックを含む。



第94図 34号住居及び竈



第95図 34号住居竈掘り方と出土遺物

35号住居(第96図、PL.21)

位置 100区O3グリッド。100区南東部、仮4区東端南寄りに位置する。

方位 N-8°-E

規模 残存長116cm、残存幅315cm、深さ55cm

形状・構造 本住居は、東側が大きく調査区外に延びているため、西縁部を調査できたに過ぎなかった。そのため全容は詳らかでないが、プランは凡そ隅丸方形様を呈するものと判断される。

南西隅付近に若干の土坑状の浅い掘り込みを伴い掘り

方は、これを明黄褐色土で埋め戻して床面を造っている。

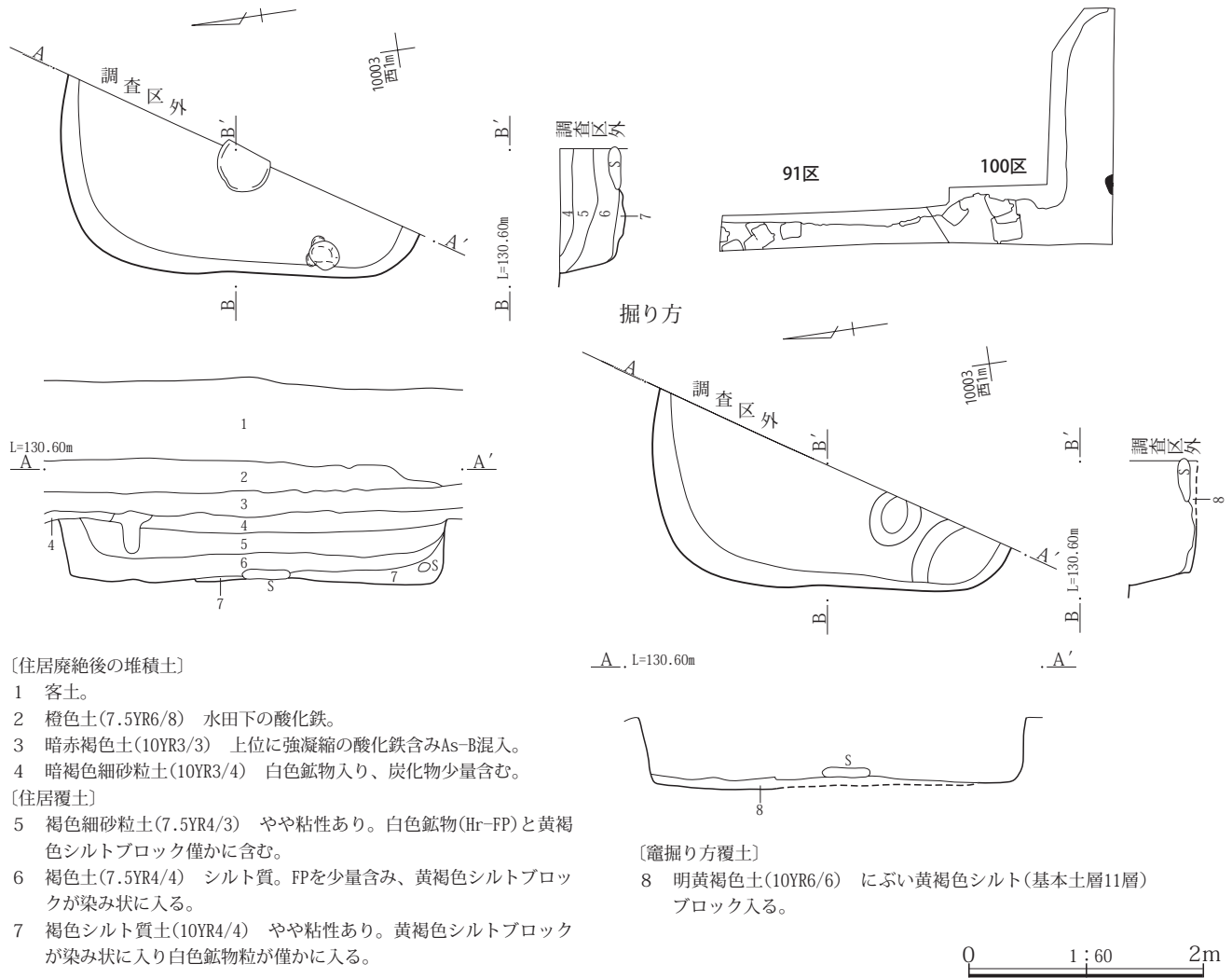
また竈、柱穴、貯蔵穴の内部構造は確認されなかった。
埋没土 所謂三角堆積は褐色土であり、住居全体は褐色土と暗褐色土で埋没している。

重複 他の遺構との重複は見られなかった。

出土遺物 土師器片と須恵器片各2点が出土したに過ぎなかった。

所見 出土遺物も少なく本住居の時期特定できなかった。僅かに平安時代の所産として把握できるに過ぎない。

第4章 発見された遺構と遺物



第96図 35号住居

36号住居(第97～99図、PL.22・46)

位置 100区R 4～S 5グリッド。100区西部、仮4区中部東寄りに位置する。

方位 N-100°-E

規模 長226cm、残存幅362cm、深さ55cm

竈 奥行150cm、幅68cm

燃焼部径28×125cm

煙道 幅28cm、長さ74cm

床下土坑1 径78×70cm、深さ40cm

形状・構造 本住居は、北東側が攪乱によって壊されて全容は把握できていない。プランはやや横長の隅丸方形を呈する。

南西隅近くに1基の土坑(床下土坑1)が掘削され、37号との重複部分は37号の床を転用している。

竈は東壁南寄りに設けられ、掘り方は、住居壁面より内側に径93×97cm、深さ10cm程の楕円形プランの竈掘り

方を掘削し、これを灰褐色シルト質土で埋め戻して燃焼部を造り出している。燃焼部は住居壁面を跨いで設けられ、住居壁面より外側に左側で2箇所、右側に1箇所の小穴を掘って河床礫を表裏側の面を表にして立位に据え、暗褐色シルト質土で燃焼部側面を造る。煙道はトンネル式で、煙道先端には径20×27cmの竪孔を掘削している。

なお、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

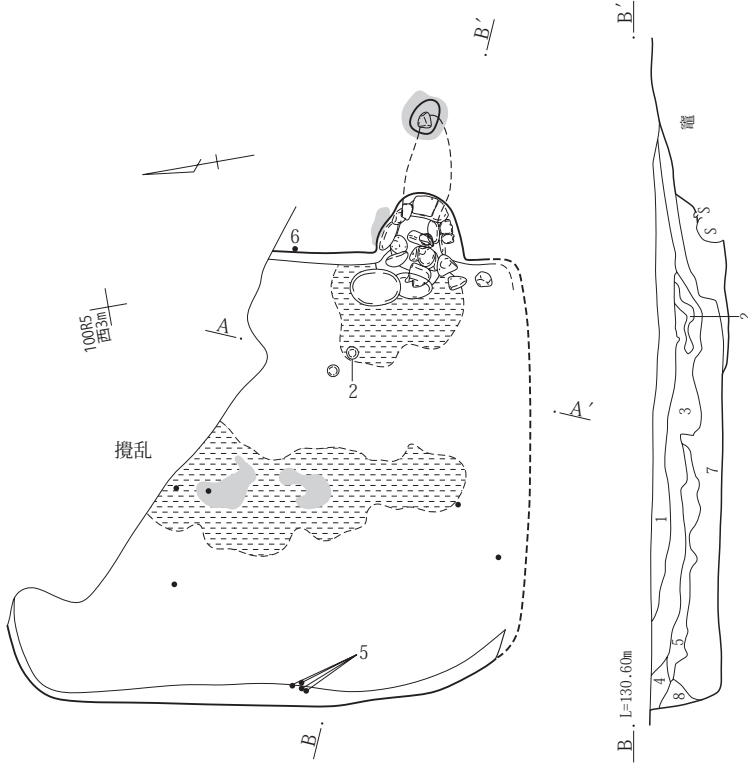
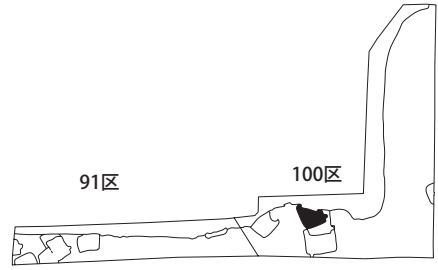
埋没土 本住居は暗褐色土(7層土)で埋まった後クレータ状の窪みとして暫く残されていたと想定される。また竈前と住居中央の南北方向の床面に炭化物粒或いは焼土の分布が見られた。

重複 37・38号住居及び19号溝との重複が見られたが、何れの遺構に対しても本住居の方が新しい。

出土遺物 土師器片と少量の須恵器・灰釉陶器片と共に須恵器杯(1～4)、須恵器碗(5)、土釜(6)、また鉄滓

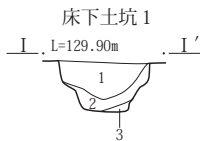
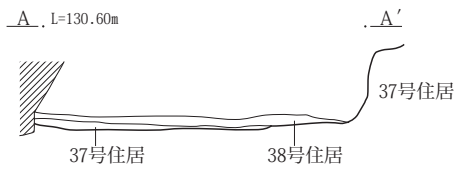
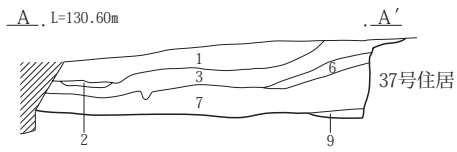
(7・8)、炉壁(9)の出土を見た。

所見 本住居は黒色灰や焼土の分布から焼失家屋と見られ、黒色灰中の焼土の遺存から土葺き屋根であったものと思慮される。本住居は出土遺物から推して11世紀前葉の所産と判断される。



[住居覆土 A-A'・B-B']

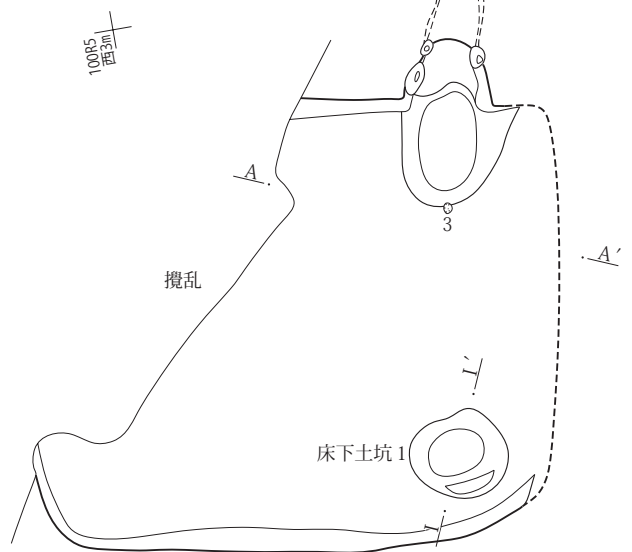
- 1 暗褐色砂質土(7.5YR3/4) As-B主体で暗褐色土が僅かに混じる。
- 2 灰赤色土(2.5YR4/2) 固く締まる。灰赤灰色火山灰主体で細かな軽石粒がブロック状に混じる。
- 3 明黄褐色土(10YR6/6) 軽石粒主体で部分的に灰赤色火山灰や暗青灰色火山灰(5B4/1)が1~5mm程度の厚さで層を形成する。
- 4 褐色砂質土(7.5YR4/4) ザラザラする。褐色土主体でAs-Bを非常に多く含む。
- 5 As-B層 細かな軽石粒の中に厚20~30mmの灰赤色、厚10~20mmの暗青灰色の火山灰が堆積する。
- 6 褐色土(7.5YR4/3) ややしと質。Hr-FP粒を含み、炭化物粒僅かに含む。
- 7 暗褐色土(7.5YR3/4) ややしと質。Hr-FP粒を少量含む、炭化物粒を僅かに含む。
- 8 7層とほぼ同じ。4層に類似した砂質土が入る。
- 9 褐色土(7.5YR4/6) 締まる。Hr-FP粒と炭化物粒を僅かに含む。地山黄褐色シルト(基本土層11層相当)住居床材。



[床下土坑1 覆土]

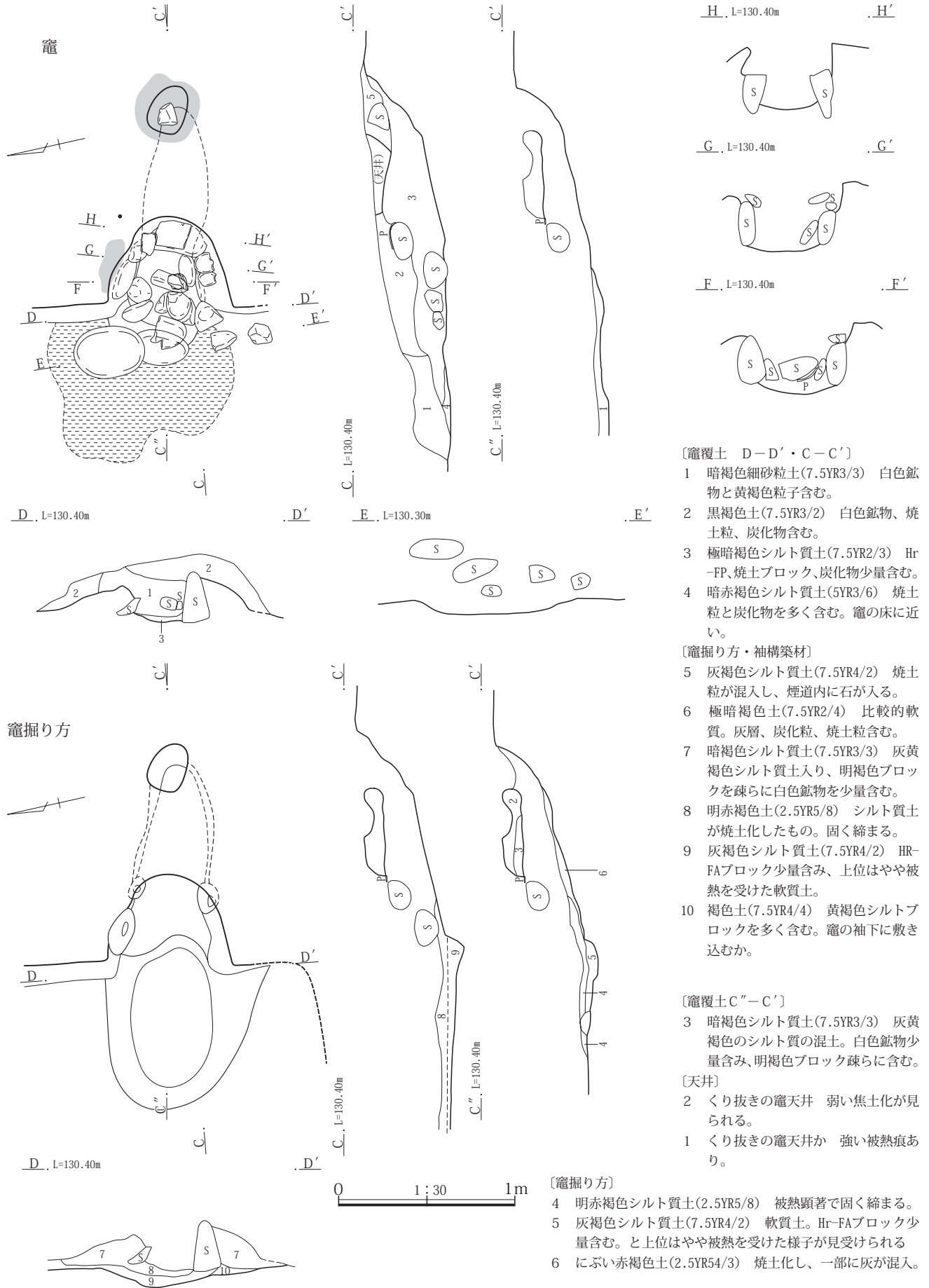
- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 軟質土。Hr-FP、黄褐色ブロック、炭化物を僅かに含む。
- 2 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) 僅かにHr-FAブロック含む。やや粘性あり。
- 3 橙色シルト質土(7.5YR7/6) Hr-FA少量含む。

掘り方

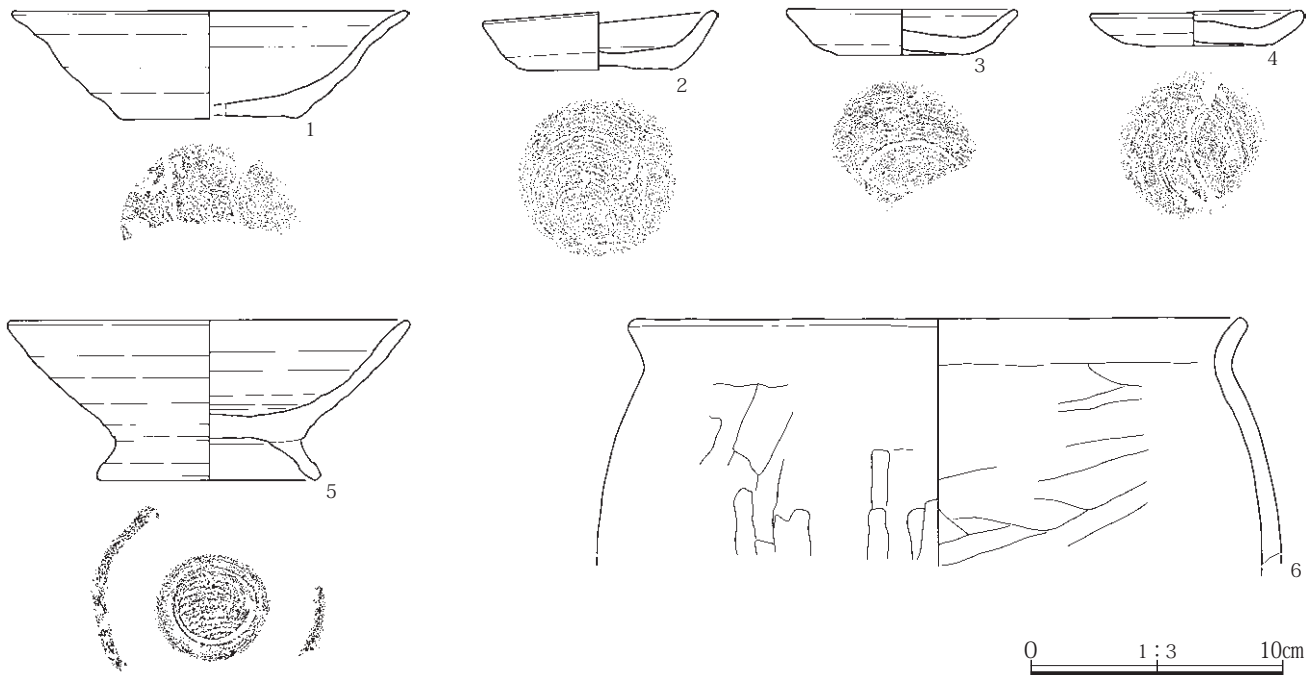


0 1:60 2m

第97図 36号住居



第98図 36号住居竈



第99図 36号住居出土遺物

37号住居(第100～103図、PL.22・23・46)

位置 100区R3～S4グリッド。100区西部、仮4区中部東寄りに位置する。

方位 N-122°-E

規模 残存長340cm、残存幅385cm、深さ38cm

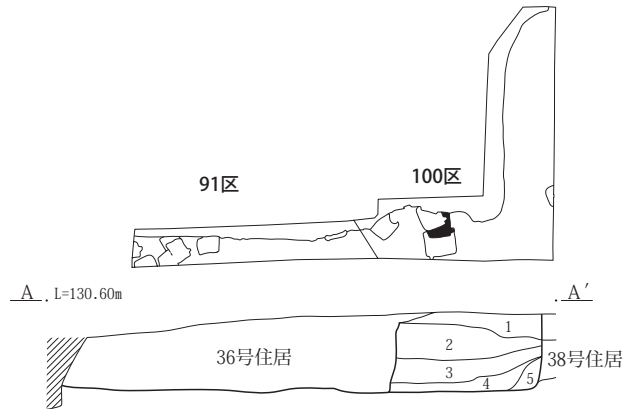
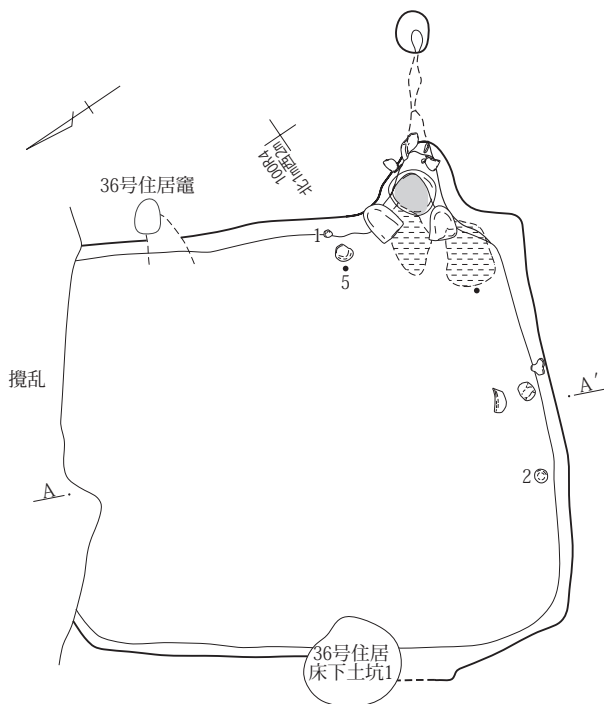
竈 奥行178cm、幅68cm 燃烧部径54×70cm

煙道 幅5cm、長さ102cm

床下土坑1 径72×55cm、深さ35cm

形状・構造 本住居は、北側が攪乱により失われている。プランは横長の長方形を呈する。

掘り方は、南西隅に床下土坑1が掘削され、比較的浅



37号住居 A-A'

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) φ1～5mmのFP軽石粒を多く含む。φ1～5mmの炭化物粒を僅かに含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) 暗褐色シルト質 φ1～5mm 20個/10cm²のFPと黄褐色ブロック5個/20cm² φ1～5mm 炭化物3個/10cm² φ5mm以下を含む。締まった土。
- 3 褐色土(7.5YR4/3) シルト質。FPφ10mmを少量とφ1～3mmを1個/10cm²含む。他に炭化物少量φ2～10mmを7個/10cm²含む。黄褐色ブロックφ3mmは僅かに見られる。やや粘性あり。
- 4 にぶい褐色土(7.5YR5/3) シルト質。FPφ5mm以下と黄褐色シルトブロックφ2mm以下 焼土と炭化物を少量含む。
- 5 灰褐色土(7.5YR4/2) シルト質。住居の壁の流入土。僅かにFPが入る。

0 1:60 2m

第100図 37号住居

第4章 発見された遺構と遺物

い掘り方を、これを黄白色土を少量含む褐色シルト質土で埋め戻し、更に黄褐色土、焼土、炭化物を少量含む褐色シルト質土を乗せて床を造っている。

竈は東壁の住居南東隅近くに設置され、径102×192cmを測る角張った瓢箪形プランの掘り方を壁面手前から壁面を跨いだ位置に掘削し、これを褐色シルト質土や黒色土で埋め戻して燃烧部を造り出している。袖は残されていないが、壁面際の両側に袖材として使用されたと思しき河床礫が見られ、これらを袖材として袖が造られていたものと思慮される。

柱穴、貯蔵穴は確認されなかったが、掘り方面の竈左側の東壁際に幅25～47cm、深さ10cmの周溝状の掘り込

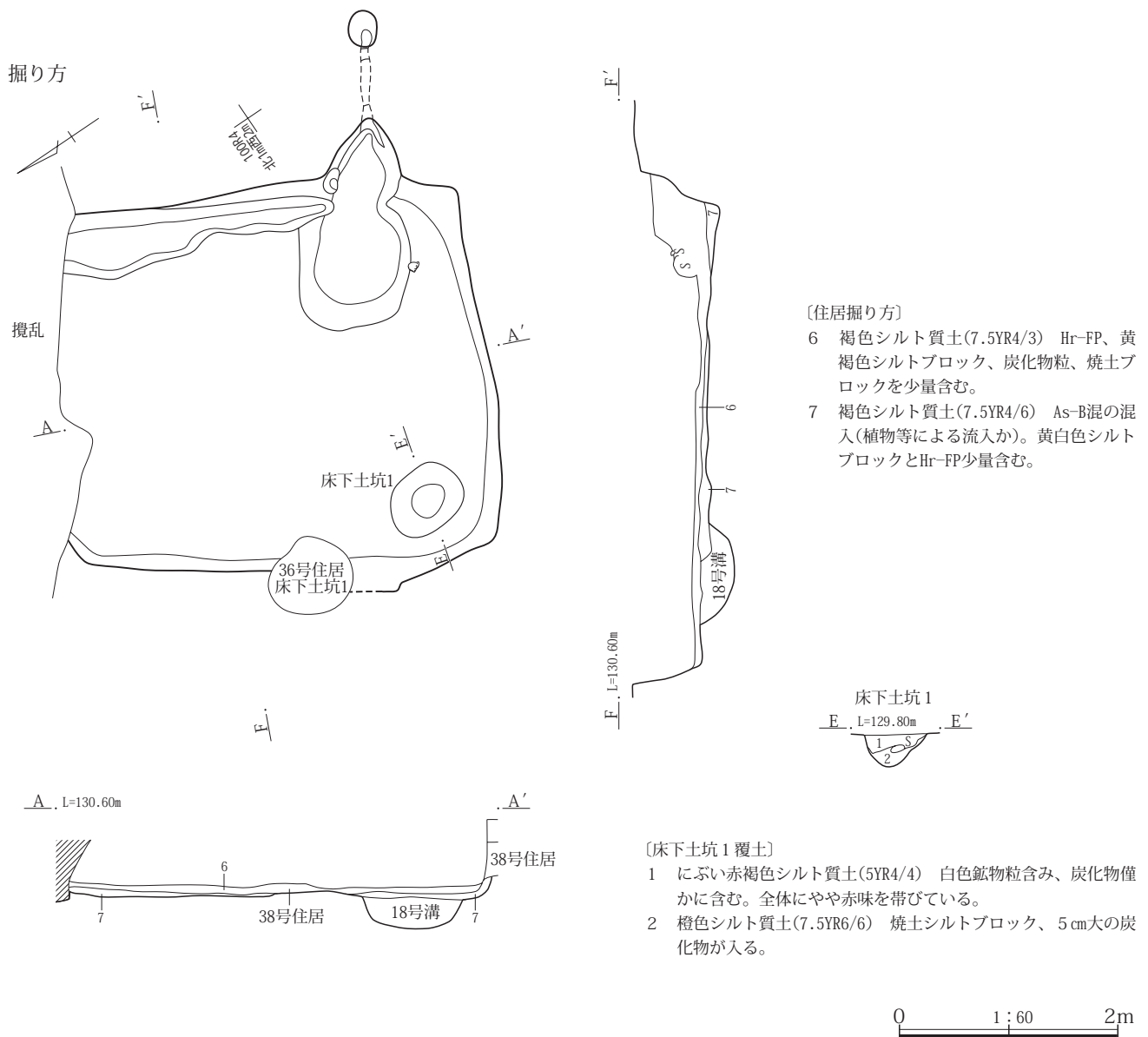
みが見られた。

埋没土 所謂三角堆積土は灰褐色シルト質土で、住居全体はにぶい褐色・褐色・暗褐色のシルト質土で埋設されている。

重複 重複する遺構のうち36号住居より本住居は古く、38号住居、18号溝よりは新しい。

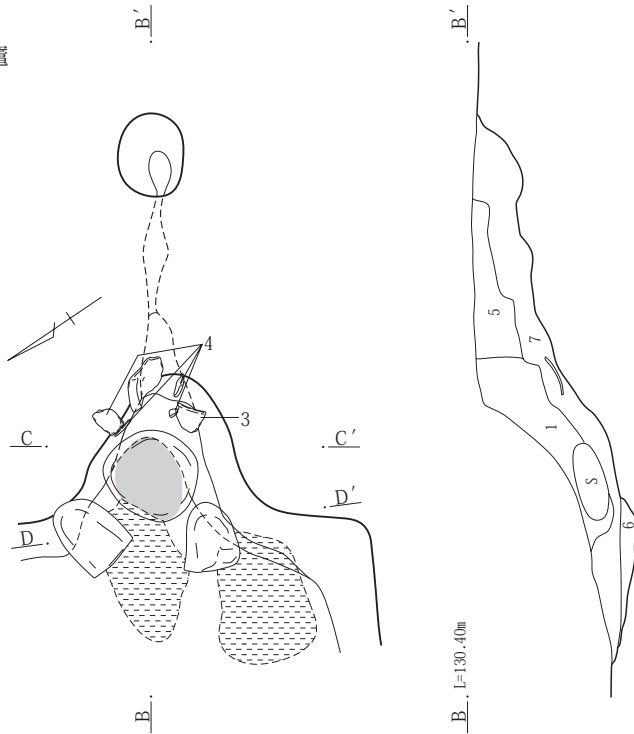
出土遺物 土師器片と少量の須恵器片の出土があり、この中には黒色土器杯(1)、須恵器杯(2)、土師器の甕または土釜(3)・甕(4)が見られた。また不明鉄製品(5)の出土もあった。

所見 本住居の時期は出土遺物から推して11世紀前葉と判断される。



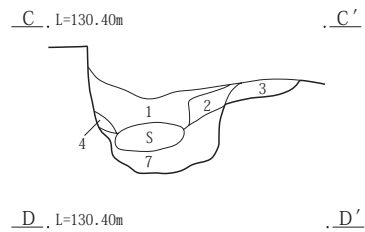
第101図 37号住居掘り方

竈

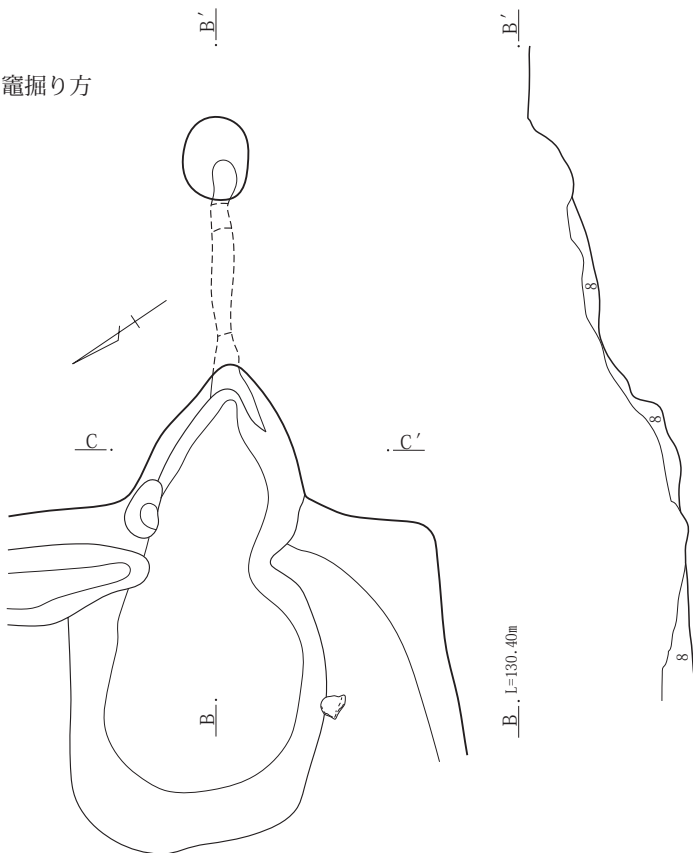


〔竈覆土〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。少量のHr-FP粒と僅かな炭化物粒、極僅かな焼土粒含む。
- 2 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) 少量のHr-FP粒、焼土粒、極僅かの炭化物粒を含む。
- 3 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) 黄褐色シルト(基本土層11層相当)含み、少量のHr-FP粒、僅かな炭化物粒含む。
- 4 明赤褐色土(2.5YR5/8) 焼土主体でブロック状に焼土が堆積する。崩落による堆積。
- 5 明褐色シルト質土(7.5YR5/8) 煙道付近はやや焼ける。白色鉱物粒僅かに含む。
- 6 黒色土(7.5YR2/1) 上位に焼土混じりの炭化物層があり、下位は黒褐色シルト質土が被熱を受ける。
- 7 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。Hr-FP、炭化物粒を少量含む。焼土粒・焼土ブロック少量含む。

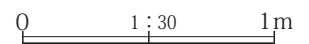


竈掘り方

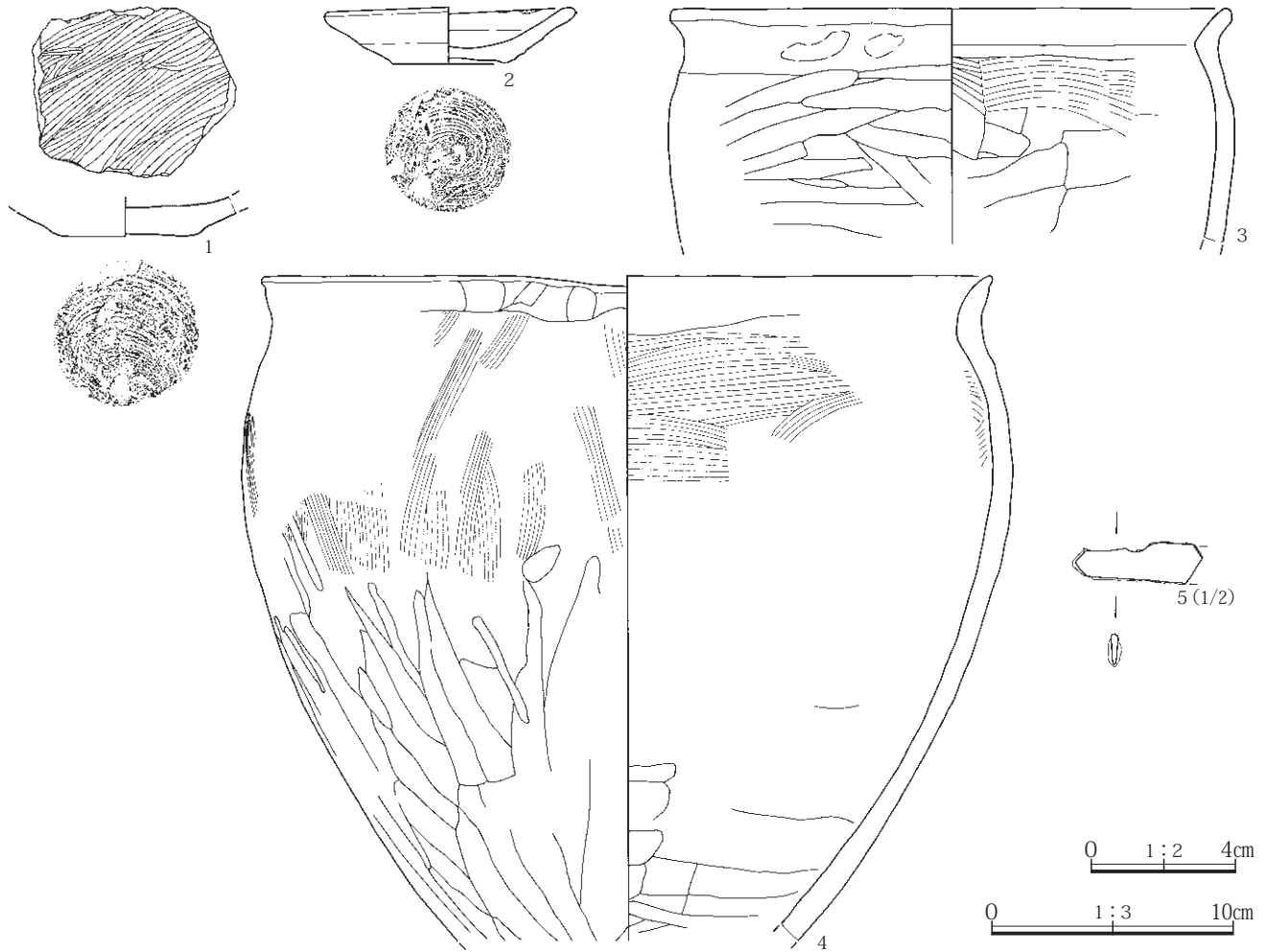


〔竈掘り方覆土〕

- 8 褐色シルト質土(7.5YR4/3) As-C混入。被熱を受ける。



第102図 37号住居竈



第103図 37号住居出土遺物

38号住居(第104・105図、PL.23・24・46)

位置 100区R3～S4グリッド。100区西部、仮4区中部東寄りに位置する。

方位 N-65°-E

規模 残存長290cm、幅480cm、深さ30cm

竈 残存長98cm、幅87cm 焚口幅43cm

左袖 幅20cm、長さ23cm

右袖 幅15cm、長さ29cm

煙道 幅42cm、残長35cm

床下土坑1 径66×56cm、深さ9cm

形状・構造 本住居は、竈の先端が南側調査区外に延びて、北側は37号住居に切られて壊されている。プランはやや横長の方形状を呈する。

掘り方は、部分的に狭いテラスを伴い幅72～144cm、深さ15cm程の幅広の周溝状の掘り込みを伴う。この掘り方に明褐色シルト質土で埋め戻して床面を造っている。

また、床下土坑1は轆轤・ピットの可能性を有する。

竈は南壁の南西隅近くに位置する。極浅い竈掘り方を黒褐色粘質土で埋め戻して焼成面を造る。竈の掘り方面には左側に2基、右側に3基、中央に1基の小穴が掘られ、ここに河床礫を従位に設置して左右の袖石及び支脚を設置している。袖は袖石の裏込めには褐色或いは明褐色のシルト質土を用いている。煙道は緩やかに上げている。

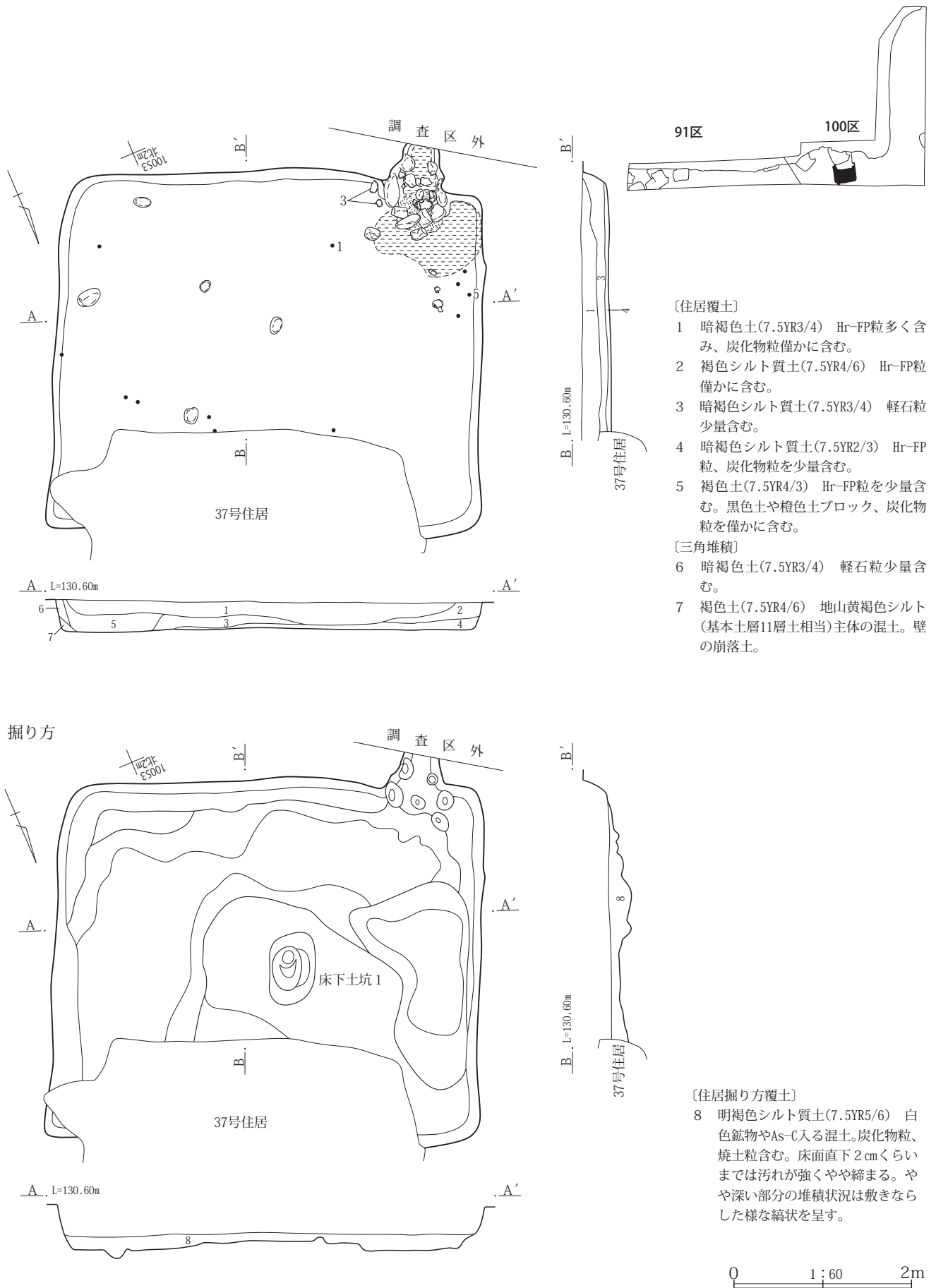
なお、柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

埋没土 所謂三角堆積は褐色土や暗褐色土で狭く残り、住居全体は暗褐色土で覆われる。

重複 37号住居、18号溝と重複するが、本住居は37号住居よりは古く、18号溝よりは新しい。

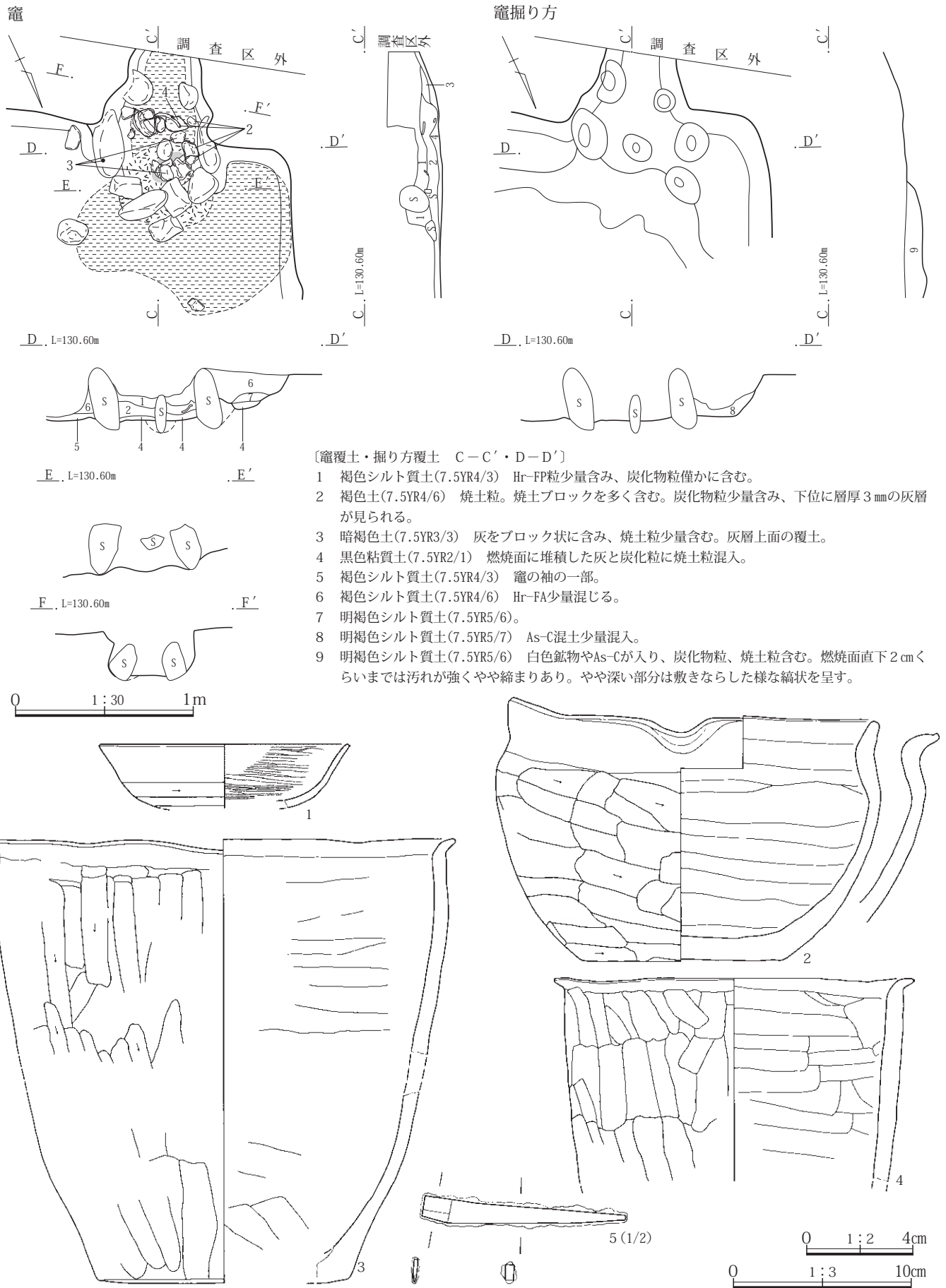
出土遺物 須恵器杯(1)、土師器の片口と見られる遺物(2)、土師器の甕または土釜(3)と甕(4)や土師器片と少量の須恵器片の出土があり、この他、刀子(5)、羽口2点、鉄滓1点の出土も見られた。

所見 37号住居跡との重複関係から、10世紀末～11世紀初頭。



第104図 38号住居

第4章 発見された遺構と遺物



第105図 38号住居竈と出土遺物

39号住居(第106～109図、PL.24・46・47)

位置 100区T4～S5グリッド。100区の西端部、仮4区中部に位置する。

方位 N-74°-E

規模 長374cm、残存幅278cm、深41cm

竈 残存長80cm 煙道 幅5cm、長さ45cm

床下土坑1 径106×103cm、深さ50cm

床下土坑2 径76×62cm、深さ22cm

床下土坑3 径53×39cm、深さ10cm

形状・構造 本住居は、北側が攪乱によって壊されている。プランは隅丸形状を呈する。

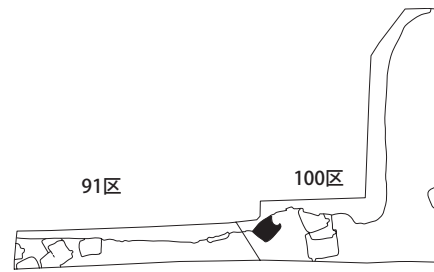
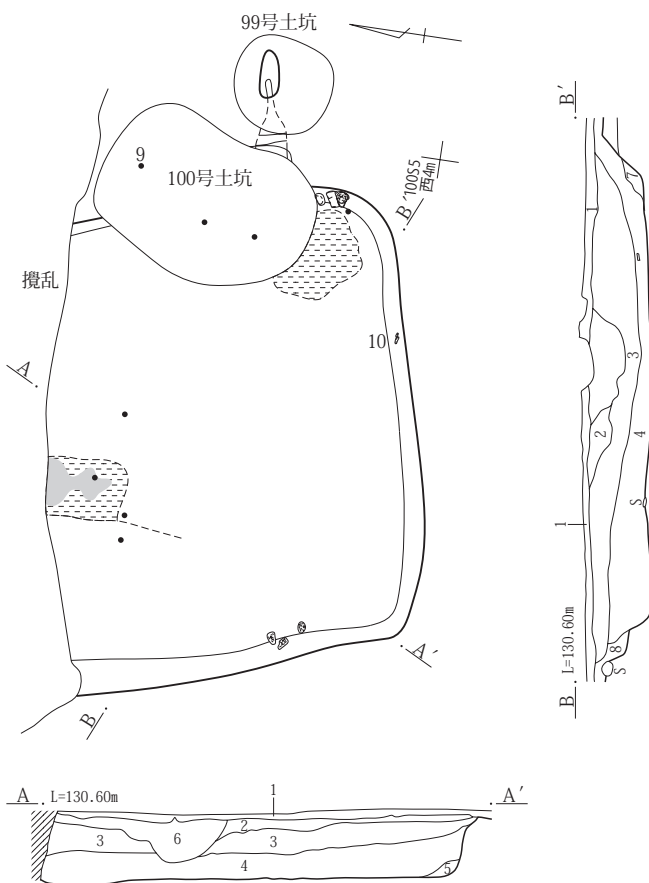
南西部に極低い掘り残しがあり、幾つかの土坑状の掘り込みを伴う掘り方を有し、これを暗褐色土で埋め戻して床面が造られている。また床下土坑2は底面に、何れも締りの弱い炭化物粒を主とする黒色土と黄褐色粘質土が2～4cmで堆積し、その上に削り取られた痕跡が見られる黄褐色シルト混じりの褐色シルトが入っていることから、この土坑は竈構築材をこねた所謂床下粘土坑であった可能性が高い。

竈は東壁南寄りに設けられている。燃烧部は壁面を跨いで造られているが、100号土坑に掘削されて失われているためその構造は明確にはできなかった。なお、燃烧部奥壁側の燃烧部の残存幅は32cm、残存長は11cmで隅丸方形のプランを呈していた。竈は掘り方を伴うがこれを埋め戻して燃烧部を造っている。右袖は明赤褐色・にぶい褐色等のシルト質土で造られ、天井部は明赤褐色シルト質土で造られていた可能性がある。煙道はトンネル状に掘られ、先端に幅15cm、奥行き方向の長さ37cmの竪孔が掘削されている。

また柱穴、貯蔵穴は確認されなかった。

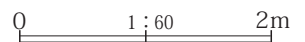
埋没土 所謂三角堆積は西壁際では明褐色土、南壁際では黒褐色土であるが、両者の上面付近には少量の炭化物が乗る。また住居全体は黒褐色シルト質土で覆われるが、その上面はクレーター状を成し、その上に暗褐色シルト質土が乗る。また竈右前と、調査範囲の北際中程の床面には黒色灰と焼土の分布を確認した。

重複 99・100号土坑と重複するが、何れの土坑よりも本住居は古い。



〔住居覆土〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) As-BとHrFP、炭化物を少量含む。ザラザラする。
- 2 褐色土(7.5YR4/3) 炭化物と白色鉱物粒を含みAs-Bも一部混入する。
- 3 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) Hr-FAブロック、Hr-FPを含む。炭化物を少量含む。
- 4 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) やや粘性あり。Hr-FAブロック・粒が住居中央に流れ込むように堆積する。Hr-FP、黄褐色ブロック、炭化物を少量含む。
- 5 黒褐色土(7.5YR2/2) As-C混土。やや粘性あり。黒色土ブロックと4層の混入土の流れ込み。
- 6 黒褐色土(10YR2/3) 炭化物とHr-FPを多く含む。
- 7 明褐色土(7.5YR5/6) Hr-FAブロックが多く入り、4層を混入する。
- 8 褐色細砂粒土(10YR4/6) Hr-FPを少量含む。黄褐色シルトブロック含む。やや崩れている。



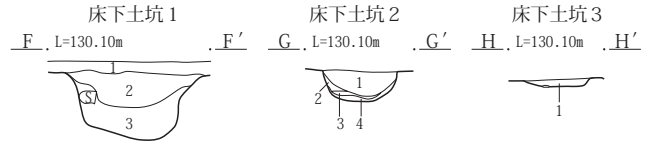
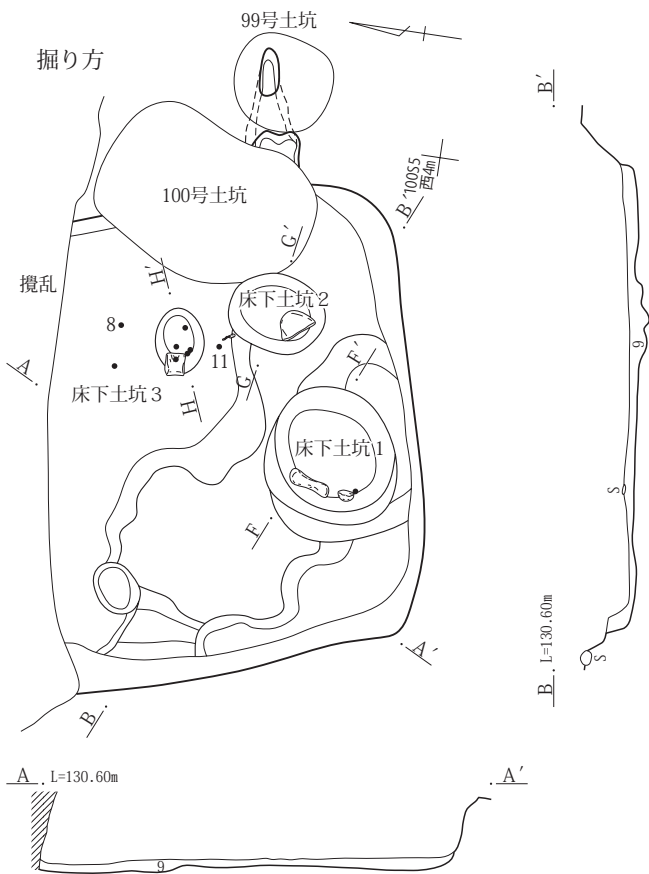
第106図 39号住居

第4章 発見された遺構と遺物

出土遺物 須恵器杯(1・3・4)と土師質の羽釜(2)、砥石(5)、礫石器金床石(6)が出土した他、土師器片と少量の須恵器・灰釉陶器片の出土が見られた。この他、若干の羽口(7)、流動滓(12・13)等の鉄滓、炉壁(14)、角釘(10)、鉄製楔(8)、不明鉄製品(9・11)の出土も見られた。

所見 炭化材及び炭や焼土の分布から、本住居は所謂

焼失家屋であったものと判断される。またその時期は出土遺物から推して10世紀後半と判断される。なお、本住居からは多くの製鉄関連遺物の出土が見られたが、これらのを産出した製鉄関連遺構は本住居に直接伴うものではなく、本住居廃絶後の埋没段階で生じたクレーター状の窪みを利用した製鉄行為に伴うものと想定される。



〔床下土坑1覆土〕

- 1 暗褐色シルト(7.5YR3/4) 炭化物粒、焼土粒含み、黄褐色シルトブロック、Hr-FPを少量含む。汚れた土層で床面付近は固い部分がある。
- 2 褐色シルト(7.5YR4/4) 締まる。Hr-FP、炭化物入り、焼土ブロックは少量含む。
- 3 黒褐色粘質土(7.5YR3/2) Hr-FP、黄褐色シルトブロック、炭化物含む。

〔床下土坑2覆土〕

- 1 暗褐色シルト(10YR3/3) 軟質。黄白色粘質土ブロック、Hr-FP、炭化物を含む
- 2 褐色シルト(7.5YR4/4) 軟質。黄褐色シルトブロック混入する。
- 3 黒色土(7.5YR2/1) 炭化物粒を主とする。軟質土。
- 4 黄褐色粘質土(10YR5/6) 軟質。

〔床下土坑3覆土〕

- 1 極暗褐色土(7.5YR2/3) 炭化物 焼土ブロックφ2~10mmを多量に含む。土器片が多く出土している。軟質土。

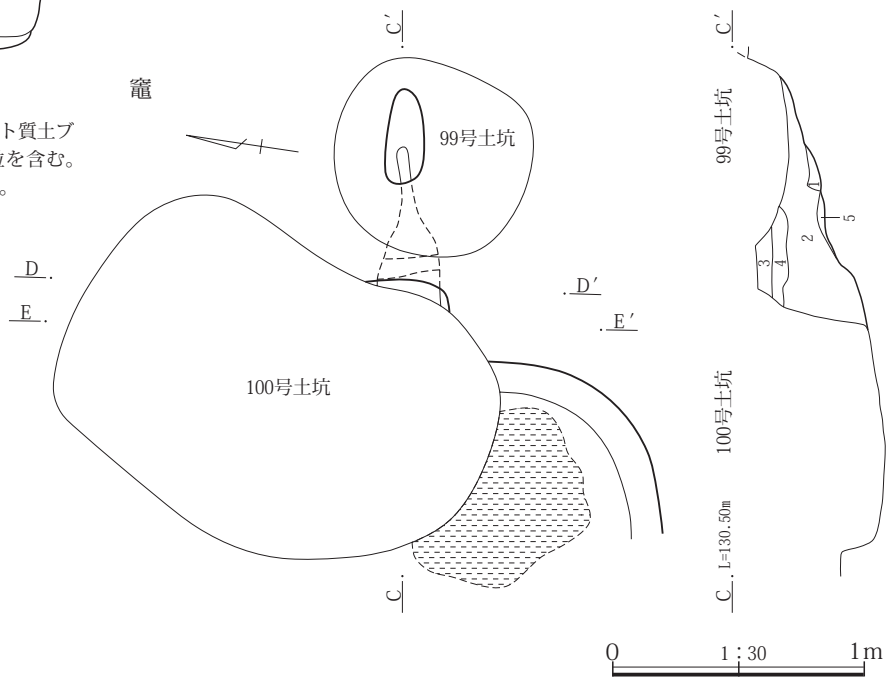


〔掘り方覆土〕

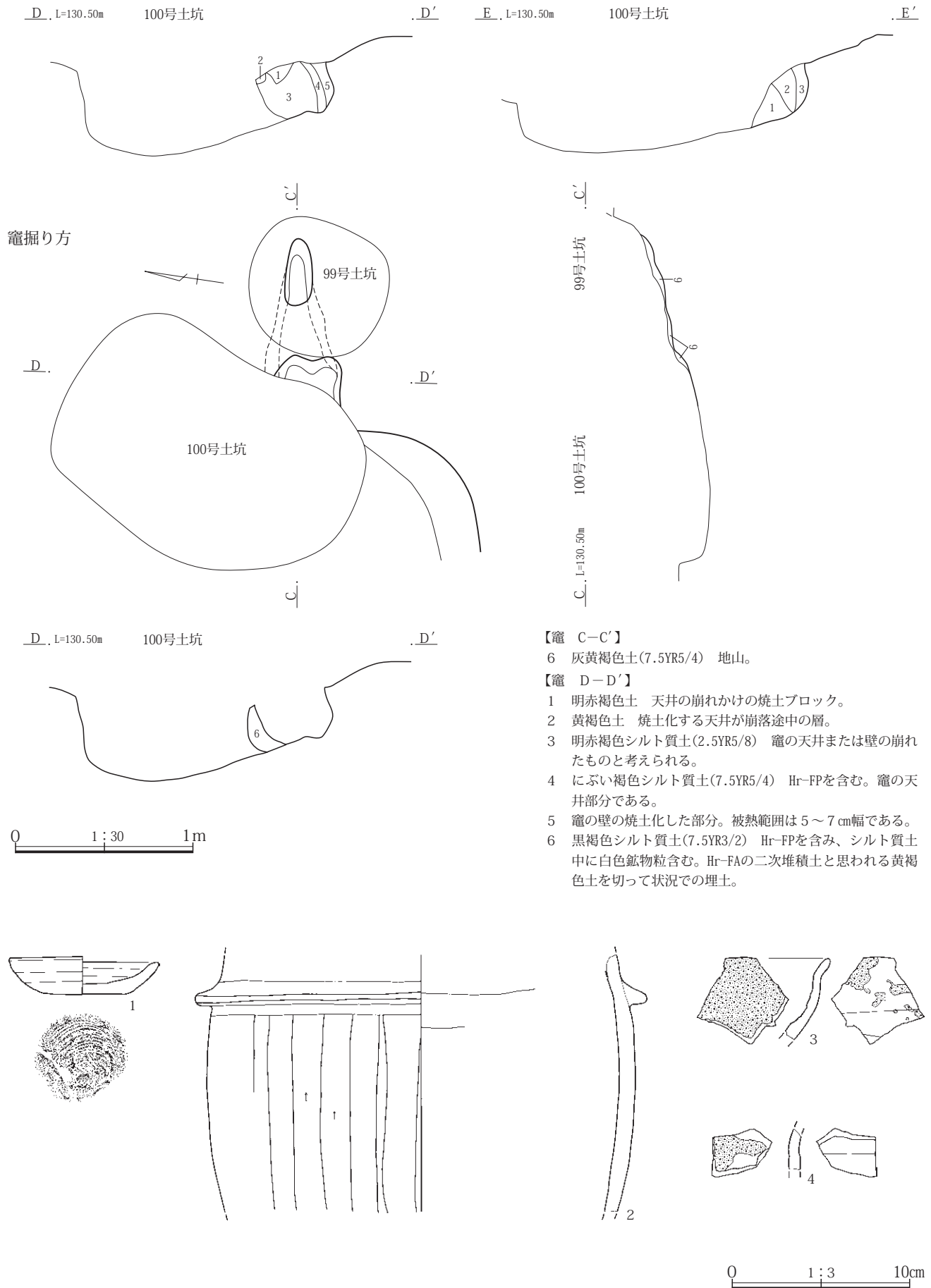
- 9 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) を黄褐色シルト質土ブロック、Hr-FP少量含む。炭化物粒、焼土粒を含む。汚れた土層で上位床面付近は固い部分がある。

〔竈 C-C'・E-E'〕

- 1 明褐色シルト質土(7.5YR5/6) 軟質。白色鋳物粒、灰のブロックを含む。
- 2 明赤褐色土(2.5YR5/8) シルト質。竈の天井或いは壁の崩落土か。
- 3 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/4) Hr-FP含む。竈の天井部分。
- 4 赤褐色シルト質土(2.5YR4/8) Hr-FPを含む。3層と同じ土質だが被熱により赤褐色を呈する。
- 5 黒褐色シルト質土(10YR2/3) 軟質。灰が混入し焼土を含む。竈燃焼面下。



第107図 39号住居掘り方及び竈



【竈 C-C'】

6 灰黄褐色土(7.5YR5/4) 地山。

【竈 D-D'】

1 明赤褐色土 天井の崩れかけの焼土ブロック。

2 黄褐色土 焼土化する天井が崩落途中の層。

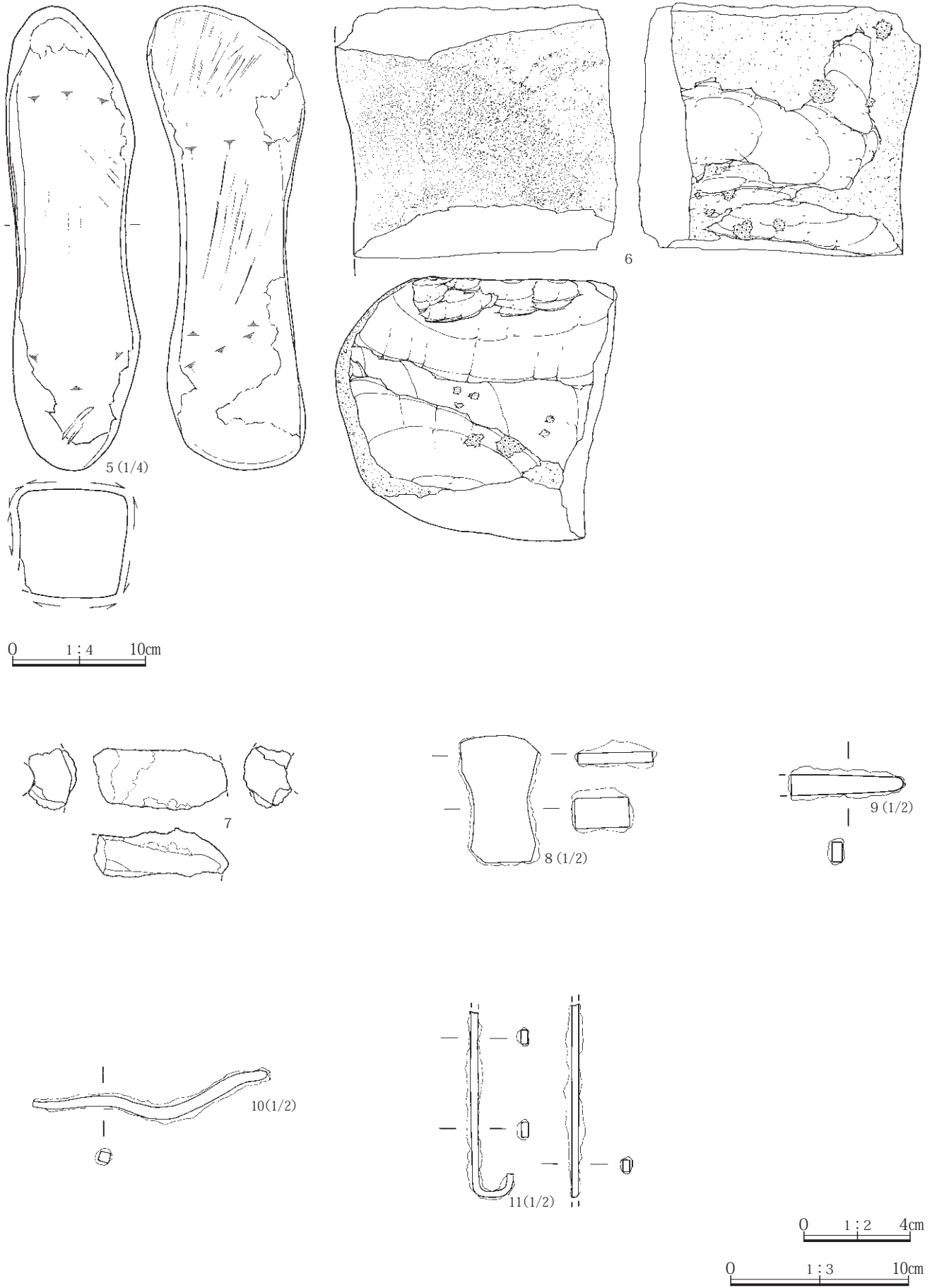
3 明赤褐色シルト質土(2.5YR5/8) 竈の天井または壁の崩れたものと考えられる。

4 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/4) Hr-FPを含む。竈の天井部分である。

5 竈の壁の焼土化した部分。被熱範囲は5～7cm幅である。

6 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) Hr-FPを含み、シルト質土中に白色鉱物粒含む。Hr-FAの二次堆積土と思われる黄褐色土を切った状況での埋土。

第108図 39号住居竈掘り方と出土遺物(1)



第109図 39号住居出土遺物(2)

(2面)

3 豎穴状遺構

1号豎穴状遺構(第110図、PL.25)

位置 90区A-10グリッド。その殆どは90区東端部に在り、仮2区西部に位置する。

方位 N-75°-E

規模 長240cm、幅222cm、深さ9cm

形状・構造 北片の一部が4号土壙墓と重複して確認できなかったが、プランは隅丸方形を呈する。掘削底面は平底である。

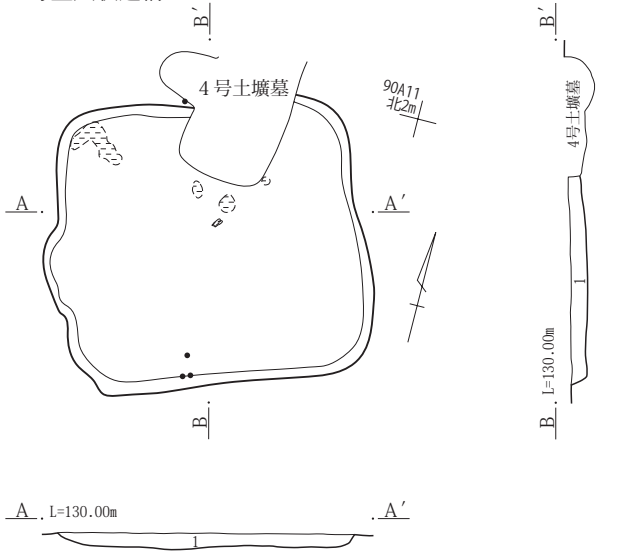
埋没土 褐色土で覆われる。

重複 3号土壙墓と重複するが本遺構が古く、13号溝と重複するが新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 馬歯と牛歯の出土が見られた他は、僅かな土師器片を出土したに過ぎなかった。

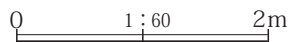
所見 本遺構の掘削意図は明らかにできなかったが、馬歯と牛歯が出土することから、家畜用の墓壙或いは遺体を遺棄した可能性が考慮される。またその時期は確認面と歯牙の遺存とその状態から推して凡そ中世の所産と判断される。

1号豎穴状遺構



[1号豎穴状遺構覆土]

1 褐色土(7.5YR4/3) 全体にHr-FPを含み、炭化物粒を少量含む。締まりあり。



第110図 1号豎穴状遺構

2号豎穴状遺構(第111図)

位置 89区L-4グリッドに位置する。89区東端域に在り、仮1南部の西壁際に在る。

方位 N-55°-W

規模 残存長195cm、残存幅147cm、深さ0cm

形状・構造 北西側が大きく調査区外に出ていて、南東部を調査できたに過ぎなかった。底面が確認されただけに過ぎない。プランは隅丸方形を呈すると判断される。

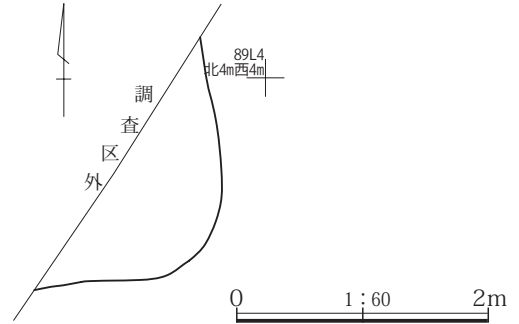
埋没土 覆土は削平され記録は残せなかった。

重複 7・12号溝と重複するが、新旧関係は不明である。

出土遺物 出土遺物はなかった。

所見 本遺構の掘削意図は明らかにできなかった。またその時期も確認できなかった。

2号豎穴状遺構



第111図 2号豎穴状遺構

3号豎穴状遺構(第112図、PL.25・47)

位置 100区P-4グリッド。100区東南部に位置し、仮4南部の東南部に在る。

方位 N-10°-E

規模 長422cm、残存幅339cm、深さ3cm

床下土坑1 径66×59cm、深さ25cm

床下土坑2 径77×70cm、深さ4cm

床下土坑3 径(74)×72cm、深さ27cm

形状・構造 北西側が攪乱に、東部が攪乱と試掘トレンチによって壊されていて全容は確認できなかったが、プランは隅丸台形状を呈すると思慮される。

南東部と北部壁際に浅い掘り込みがあり、小土坑状の床下土坑を伴う掘り方を有し、これを褐色土と明褐色土で埋め戻して床面を造っている。

埋没土 床面には黒褐色土が乗り、所謂三角堆積は極暗

第4章 発見された遺構と遺物

褐色土と暗褐色シルト質土であり、遺構全体は暗褐色土、黒褐色土で覆われている。

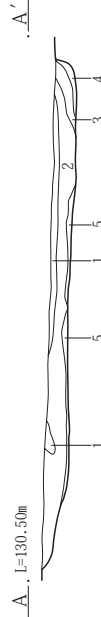
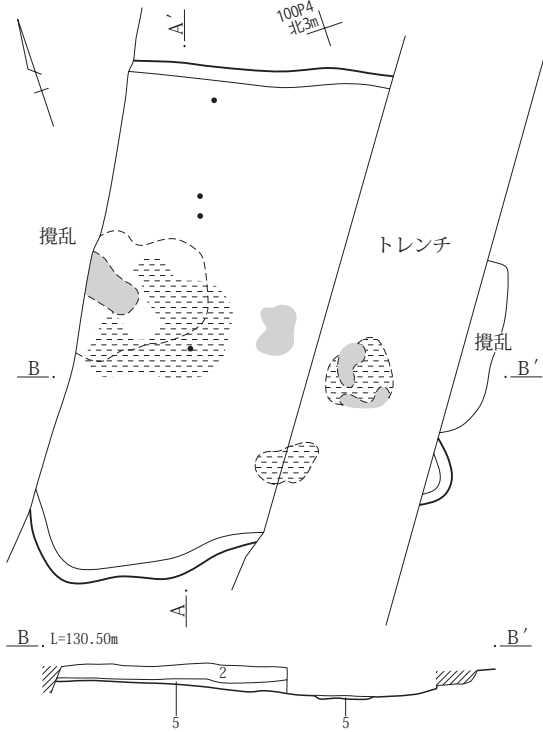
重複 本遺構は他の遺構との重複は見られなかった。

出土遺物 砥石(1)の出土が見られたが、その他は土師

器3片、須恵器1片が出土したに過ぎなかった。

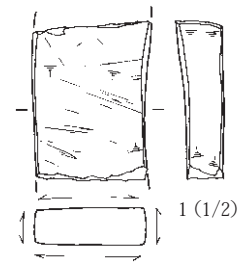
所見 本遺構の掘削意図は明らかにできなかった。またその時期も覆土から推して中世の所産と確認できたに過ぎなかった。

3号竪穴状遺構



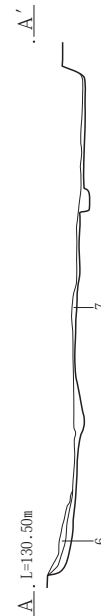
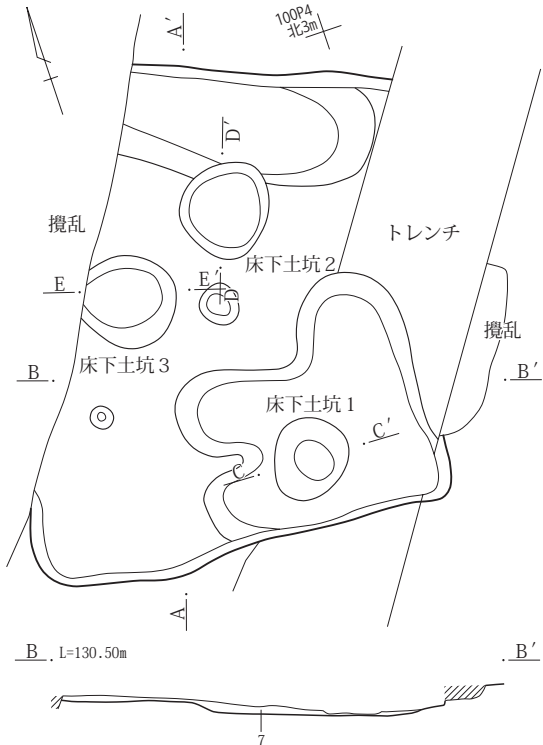
〔3号竪穴状遺構覆土〕

- 1 黒褐色土(7.5YR2/2) As-B、Hr-FAを含む。砂質状のザラザラした土。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) Hr-FP、白色鉱物粒と少量のAs-B含む。やや粘性あり。
- 3 極暗褐色土(7.5YR2/3) As-B多量を含む。
- 4 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) As-Bを含む。
- 5 黒褐色土(7.5YR3/1) やや締まりあり。As-B・Hr-FP少量含む、粘土ブロックと、僅かに焼土ブロック・炭化物を含む。



0 1:2 4cm

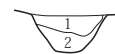
掘り方



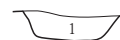
〔掘り方覆土〕

- 6 褐色土(7.5YR4/4) 白色物粒とHr-FP 1個含む。
- 7 明褐色土(7.5YR5/8) Hr-FP含む。

床下土坑1
C, L=130.50m C'



床下土坑2
D, L=130.50m D'



床下土坑3
E, L=130.50m E'



〔床下土坑1覆土〕

- 1 褐色土(7.5YR4/4) As-Bと少量のHr-FP含み、炭化物と焼土粒混入。
- 2 暗褐色細砂粒土(7.5YR3/3) やや粘性あり。Hr-FPと炭化物極稀に入る。

〔床下土坑2覆土〕

- 1 褐色土(7.5YR4/6) Hr-FP見られ、黄褐色シルトブロック少量入る。上位層にAs-B少量含まれ、下位層は粘性あり。

〔床下土坑3覆土〕

- 1 黒褐色土(7.5YR3/1) やや締まりあり。As-Bと黄褐色粘土ブロックと少量含み、僅かに焼土ブロックと炭化物含む。

0 1:60 2m

第112図 3号竪穴状遺構と出土遺物

(2面)

4 溝

3号溝(第113図、PL.25)

位置 89区J-7~K-7グリッド。89区東部、仮1区西壁際中央付近に位置する。

方位 N-68°-W

規模 確認長2.50m、幅35cm、深さ8cm

形状・構造 本溝は西側が調査区外に出て、東側が攪乱によって壊されているため、部分的に調査できたに過ぎなかった。その走行は西南西-東北東方向に直線的に走行し、横断面形は丸底を呈する。

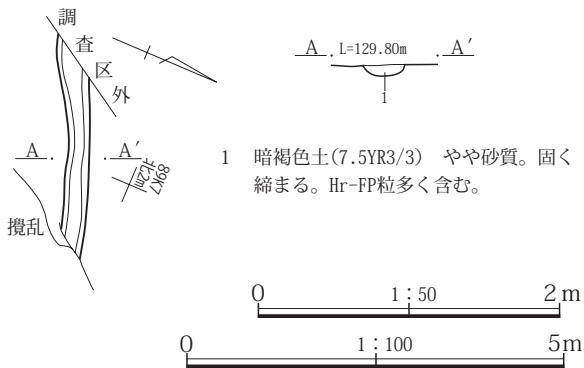
埋没土 暗褐色土で覆われる。

重複 2号住居と重複するが、本溝はこれを切っている。

出土遺物 土師器・須恵器片を各1点出土したに過ぎなかった。

所見 本溝の掘削意図は確認できなかった。またその時期も特定できなかったが、確認面と覆土から推して凡そ古代末から中世の所産と判断される。

3号溝



第113図 3号溝

5号溝(第114図、PL.26・47)

位置 89区J-3~K-6グリッド。89区東部、仮1区中南部に位置する。

方位 N-2°-W

規模 確認長11.13m、幅131cm、深さ82cm

形状・構造 本溝は北側が攪乱で壊され、南側が削平で失われていたため一部が調査できたに過ぎなかった。そ

の走行は北北西-南南東方向に直線的に走行し、横断面形は丸底を呈する。

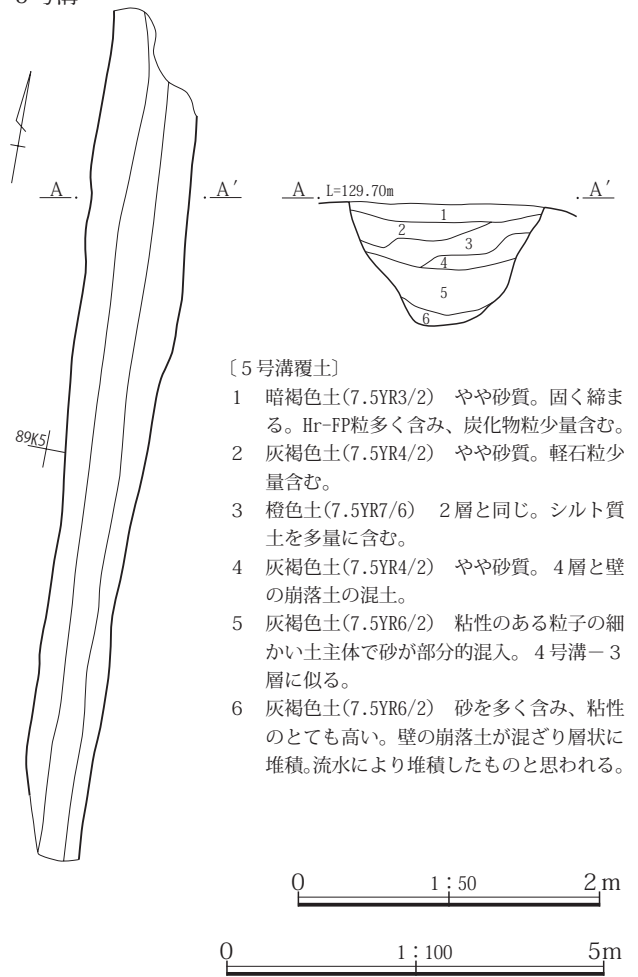
埋没土 暗褐色土、灰褐色土で覆われる。

重複 7号溝、61・63号土坑と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 土師器と少量の須恵器・灰釉陶器片を出土したが、この中には流動滓(1)の出土も見られた。

所見 本溝はその覆土と底面形態に流水の痕跡が確認されたため、水路として使用された可能性が考慮される。またその時期は確認面等から、凡そ古代末から中世の所産と判断されるに過ぎない。

5号溝



第114図 5号溝

4・11号溝(第115~117図、PL.26・27・47)

位置 4・11号溝は89区K-6~P6・O5グリッド。両溝は89区中東部に位置し、仮1区西端中央付近から仮2区南西部にかけて位置する。

方位 [4号溝] N-80°-E

第4章 発見された遺構と遺物

[11号溝] N-77°-E

規模 [4号溝] 確認長24.9m、幅232cm、深さ18.2cm

[11号溝] 確認長21.2m、幅222cm、深さ15.2cm

形状・構造 4・11号溝は西側が調査区外に出ており、東側が攪乱によって失われているため全容は詳らかでない。その走行は西南西-東北東方向に取り、直線的に走行する。またその横断面形は4号溝は丸底を呈し、11号溝は薬研堀状を呈する。

埋没土 4号溝は明褐色土、11号溝はにぶい褐色土、灰褐色土で覆われる。

重複 4号溝と2・13・14・23・26号住居、11・12号溝と重複関係にあるが、12号溝以外の遺構より新しく、重複する11号溝と12号溝との新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 4号溝からは土釜(1)、埴輪(2)、龍泉窯系青磁碗(3)、在地系土器片口鉢(4)、常滑陶器甕(7・8)や壺と見られるもの(5)、渥美陶器甕と見られるもの(6)、石棒(9)、羽口(10~12)が出土した他、須恵器片と少量の土師器・灰釉陶器片の出土が見られた。

一方、11号溝は須恵器杯(14・15)や土錘(16)、流動滓(17・18)の出土が見られた他、土師器・須恵器片と少量の灰釉陶器片、僅かな量の土師器・須恵器片の出土があった。

所見 4号溝は覆土の状態から水路であったものと考えられる。一方、11号溝は薬研堀として掘削されているため、屋敷を含む土地区画のために掘削されたものと思慮される。

なお、その時期は溝という性格のため正確な所見を提示できるものではないが、出土遺物から推して11号溝は10世紀後半、4号溝は11世紀の所産の可能性が考えられる。本溝の掘削意図は確認できなかった。

両溝共に、条里方眼の土地区画に依拠した区画線上に掘削されたものと思慮される。

6号溝(第115・117図、PL.26・47)

位置 89区L-4~5グリッド。89区東部、仮1区南西隅部に位置する。

方位 N-14°-W

規模 確認長3.02m、幅80cm、深さ24cm

形状・構造 本溝は北側が調査区外に在り、南側が攪乱

で壊されているため、その一部を調査できたに過ぎなかった。その走行は北北西-南南東方向にほぼ直線的に走行し、横断面形は丸底を呈する。

埋没土 黄褐色シルトや黒褐色土で覆われる。

重複 7号溝と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 須恵器杯(13)と少量の土師器片と須恵器1片を出土したに過ぎなかった。

所見 本溝の掘削意図は確認できなかったが、その時期は出土遺物から推して凡そ10世紀後半の所産と思慮される。

7・12号溝(第115・117図、PL.26・27)

位置 7号溝はJ-M4グリッドに在り、89区東南部、仮1区南西部に位置する。

12号溝はL4~N7グリッドに在り、89区中東部、仮1区南西部から仮2区北東部にかけて位置する。

方位 [7号溝] N-75°-E

[12号溝] N-20°-W

規模 [7号溝] 確認長10.4m、幅38cm、深さ6cm

[12号溝] 確認長15.26m、幅282cm、深さ17.8cm

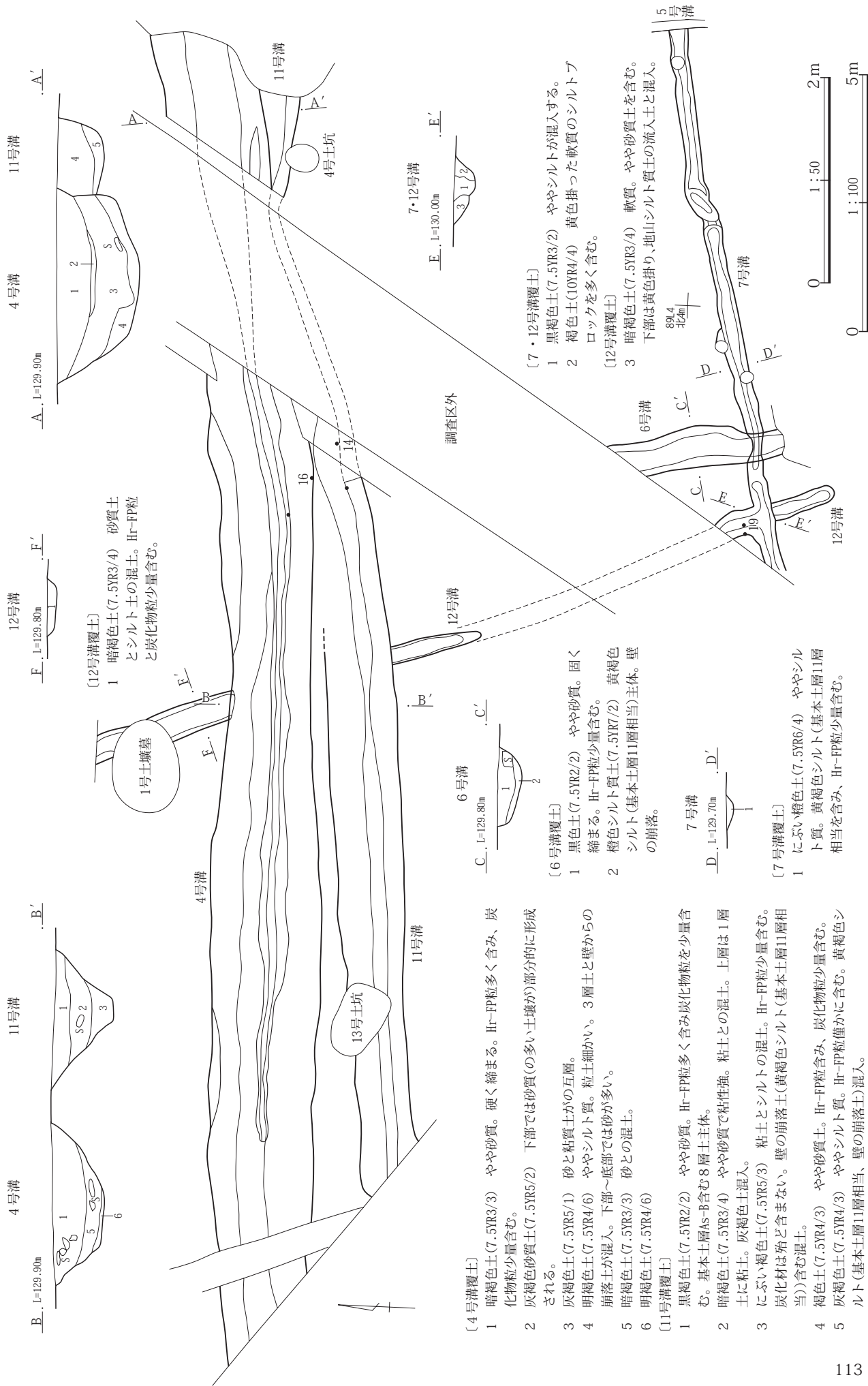
形状・構造 7号溝は、東側は5号溝に繋がって、5号溝以東では確認できず、西側も調査区外にあって確認できなかった。その掘削ラインは部分的な蛇行が見られるものの、全体としては直線的な走行を呈し、その掘削底面の横断面形は丸底を呈する。

一方、12号溝は南北側端が攪乱によって失われているが、途中、23号住居、4・11号溝との重複によって切断され、或いは水路によって調査できなかったため、確認範囲の半分程を調査できたに過ぎなかったが、その走行は概ね北北西-南南東方向に極緩やかな蛇行が見られるものの、直線的な走行を見せている。また掘削底面は平底状を呈する。

埋没土 7号溝はにぶい黄橙色・黒褐色・褐色土、12号溝は暗褐色土で覆われる。

重複 7号溝は12号溝と重複するがこれを切っており、12号溝は23号住居、4・7・11号溝と重複するが、23号住居よりは新しく、7号溝より古いことを確認したが、4・11号溝との新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 7号溝からは僅かな土師器片の出土が見られ



〔4号溝覆土〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) やや砂質。硬く締まる。Hr-PP粒多く含み、炭化物粒少量含む。
- 2 灰褐色砂質土(7.5YR5/2) 下部では砂質(の多い土壌が)部分的に形成される。
- 3 灰褐色土(7.5YR5/1) 砂と粘質土が互層。
- 4 明褐色土(7.5YR4/6) ややシルト質。粒土細かい。3層土と壁からの崩落土が混入。下部～底部では砂が多い。
- 5 暗褐色土(7.5YR3/3) 砂との混土。
- 6 明褐色土(7.5YR4/6)

〔11号溝覆土〕

- 1 黒褐色土(7.5YR2/2) やや砂質。Hr-PP粒多く含み炭化物粒を少量含む。基本土層As-B含む8層土主体。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/4) やや砂質で粘性強。粘土との混土。上層は1層土に粘土。灰褐色土混入。
- 3 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 粘土とシルトの混土。Hr-PP粒少量含む。炭化材は殆ど含まない。壁の崩落土(黄褐色シルト(基本土層11層相当))含む混土。
- 4 褐色土(7.5YR4/3) やや砂質土。Hr-PP粒含み、炭化物粒少量含む。
- 5 灰褐色土(7.5YR4/3) ややシルト質。Hr-PP粒僅かに含む。黄褐色シルト(基本土層11層相当、壁の崩落土)混入。

〔6号溝覆土〕

- 1 黒色土(7.5YR2/2) やや砂質。固く締まる。Hr-PP粒少量含む。
- 2 橙色シルト質土(7.5YR7/2) 黄褐色シルト(基本土層11層相当)主体。壁の崩落。

〔7号溝覆土〕

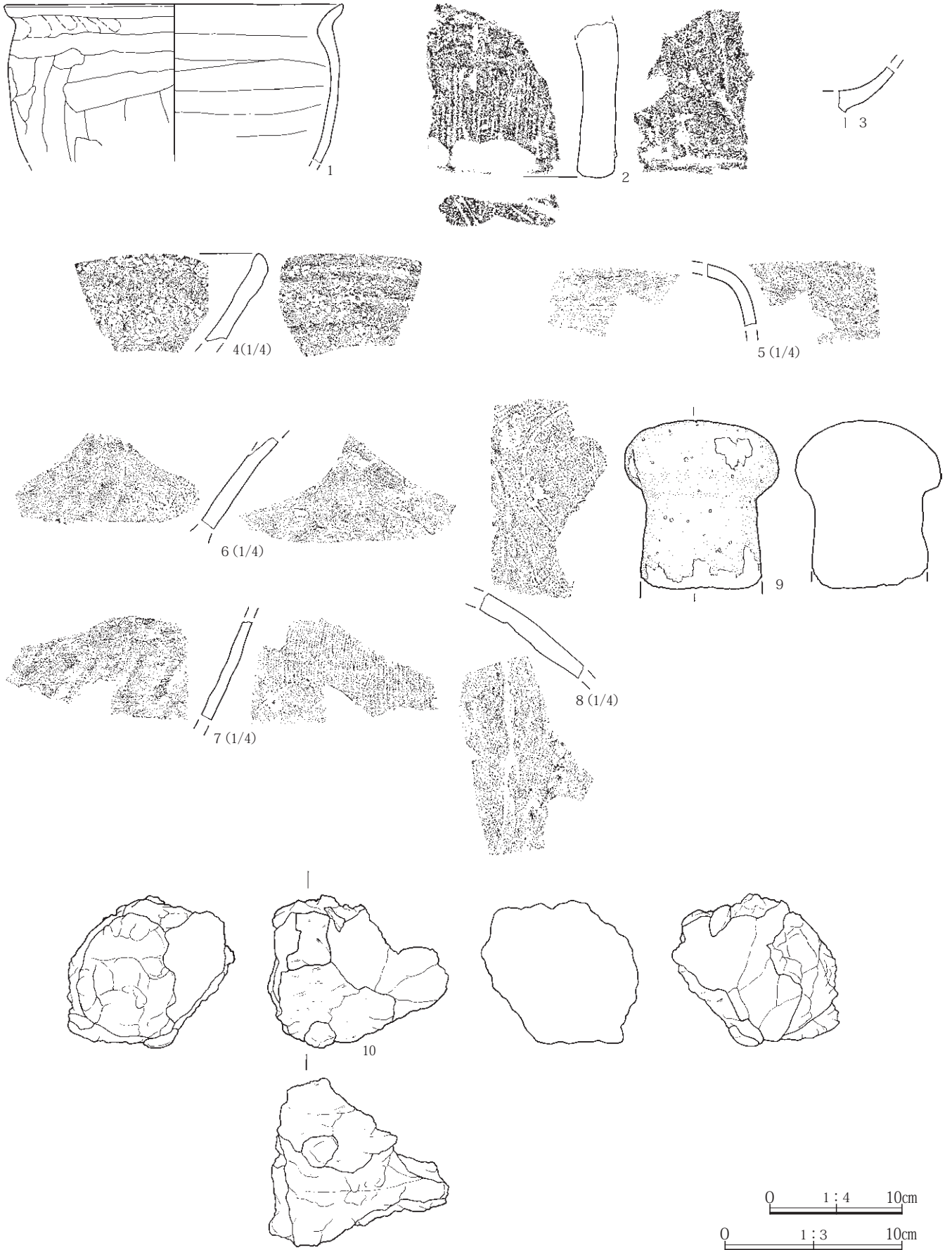
- 1 にぶい褐色土(7.5YR6/4) ややシルト質。黄褐色シルト(基本土層11層相当)を含み、Hr-PP粒少量含む。

〔7・12号溝覆土〕

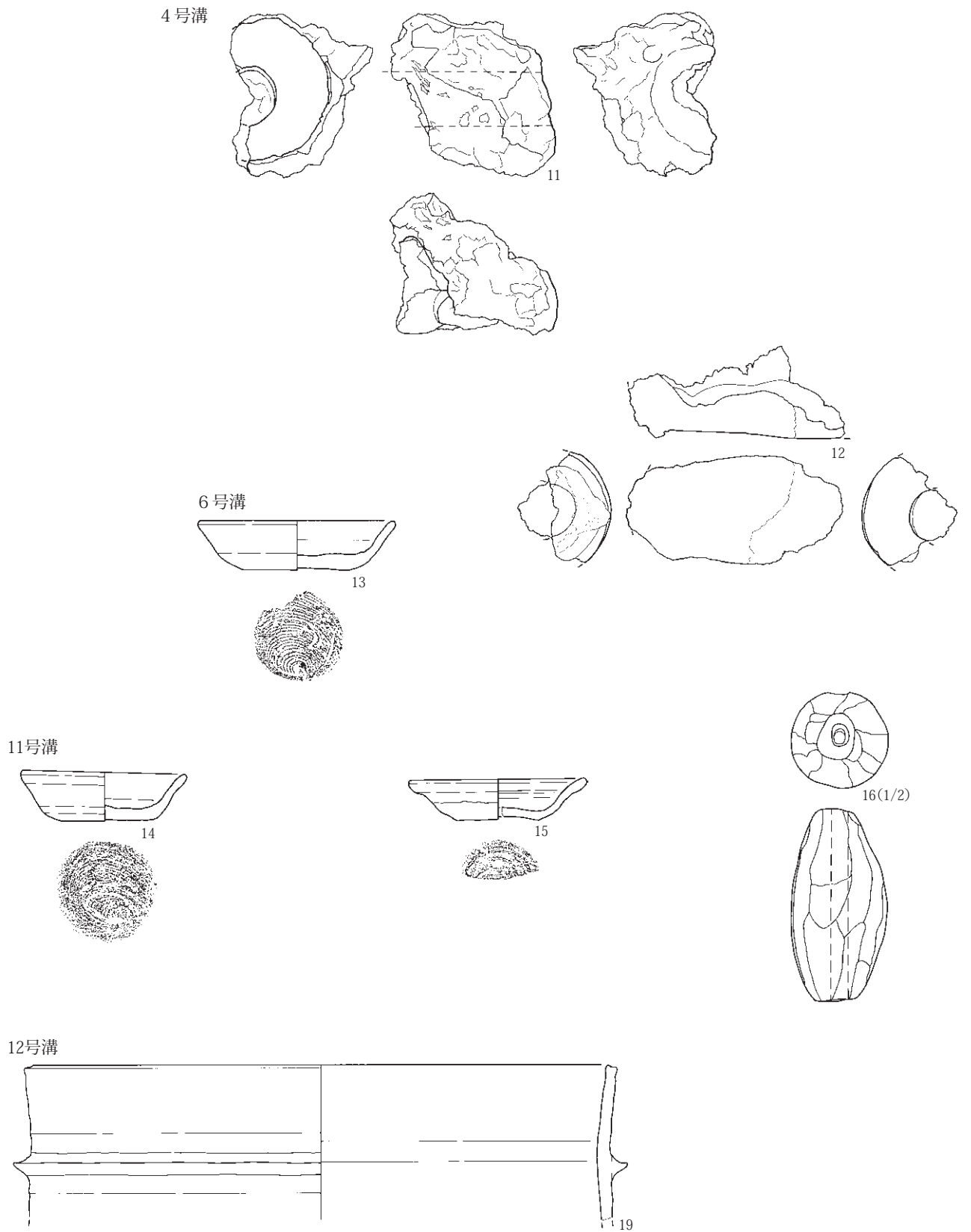
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) ややシルトが混入する。
- 2 褐色土(10YR4/4) 黄色掛った軟質のシルトブロックを多く含む。
- 〔12号溝覆土〕
- 3 暗褐色土(7.5YR3/4) 軟質。やや砂質土を含む。下部は黄色掛り、地山シルト質土の流入土と混入。

第115図 4・6・7・11・12号溝

4号溝



第116図 4号溝出土遺物(1)



第117図 4号溝出土遺物(2)・6・11・12号溝出土遺物

第4章 発見された遺構と遺物

たに過ぎなかった。

一方、12号溝は須恵器羽釜(19)出土したに過ぎなかった。

所見 7号溝、12号溝は共に掘削意図を特定するには至らなかった。またその時期は、出土遺物から推して12号溝は10世紀後半頃となる可能性を有するが、溝という性格のため正確な所見を提示できるものではないが、出土遺物から推して11号溝は10世紀後半、4号溝は11世紀の所産の可能性が考えられる。本溝の掘削意図は確認できなかった。

両溝共に、条里方眼等の土地区画に依拠した区画線上に掘削されたものと思慮される。

10号溝(第118図、PL.27・47)

位置 89区K-5～N-5グリッド。89区中東部、仮1区西部から仮2区南東隅部に位置する。

方位 N-86°-E

規模 確認長17.8m、幅98cm、深さ28cm

形状・構造 本溝は西側が調査区外に在り、中位が水路によって調査できなかったため、全容を詳らかにすることはできなかった。その走行は緩やかな蛇行をしつつも西南西-東北東を向くが、東端で走行をE-38°-Sに時計回りに転ずる。掘削底面はほぼ平底である。

埋没土 黒褐色土で覆われる。

重複 23号住居、12号土坑と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 本溝からは須恵器の杯(1)と甕(3)、壺(2)等の灰釉陶器、常滑焼の片口鉢(4)と甕(5)が出土したに過ぎなかった。

所見 本溝の掘削意図は確認できなかったが、その時期は出土遺物から概ね中世の遺構と判断される。

13号溝(第118図、PL.27・28)

位置 89区T-10～90区B-12グリッド。89区、90区の境、仮2区西部に位置する。

方位 N-3°-E

規模 確認長9.14m、幅220cm、深さ20cm

形状・構造 本溝は南側が調査区外に在り、北側が攪乱によって削られているため全容を確認できなかった。その走行は南北に直線的であり、掘削底面は平底である。

埋没土 黒褐色土で覆われる。

重複 1号竪穴状遺構、3・4号土墳墓と重複するが、何れの遺構に対しても本土坑は古いものと思慮される。

出土遺物 本溝からは土師器片2点、須恵器片1点が出土したに過ぎなかった。

所見 本溝は覆土の1層にラミナ状の堆積があり、底面にも小孔が空いていることなどから推して、水路であった可能性が考えられる。

その時期は確認面等から推して平安時代後期以降から中世の間と考えられるが、1号竪穴状遺構、3・4号土墳墓と重複することから14世紀を下ることはない判断される。

また後述の14号溝と2m、15号溝と1m隔てて平行に在ることから、同様の土地区画の認識に基づいて掘削されている可能性が考慮される。

14号溝(第119図、PL.28・47)

位置 90区A～B-10～12グリッド。90区のやや東寄り、仮2区西端部近くに位置する。

方位 N-0°-E

規模 確認長10.4m、幅161cm、深さ48cm

形状・構造 本溝は南側が調査区外に延び、北側が攪乱で壊されているため全容は確認できなかった。その走行は南北に直線的であり、掘削形態は箱堀状を呈する平底である。

埋没土 暗褐色土で覆われるが、2回の掘り直しの痕跡があり、1・2、3・4、3・5層の組み合わせで堆積が確認される。

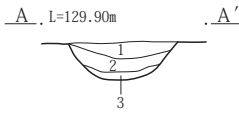
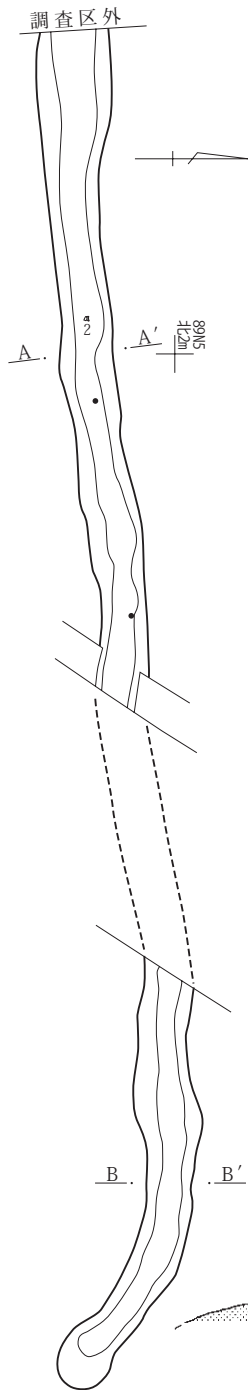
重複 35・59・60・69号土坑と重複し、35号土坑に対しては本溝が切られているように見受けられ、他の土坑は掘削順位から本溝より古い可能性があるが、明確ではない。

出土遺物 本溝からは須恵器杯(1)、砥石(2)の他、若干の土師器・須恵器・灰釉陶器片、鉄滓3点が出土したに過ぎなかった。

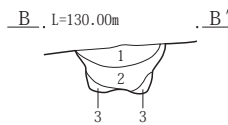
所見 本溝の掘削意図は明瞭ではなかったが、掘り直し等の状況から水路としての使用の可能性も考慮される。なお、その時期は出土遺物から推して10世紀後半の所産の可能性が考えられる。

また前述の13号溝と2m隔たり、後述の15号溝とは接して平行に在ることから、同様の土地区画の認識に基づいて掘削された可能性が考慮される。

10号溝

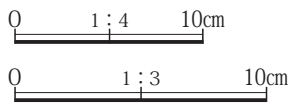
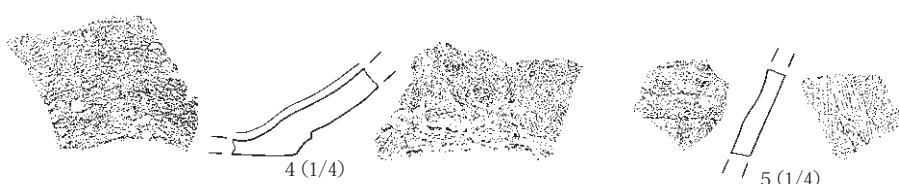
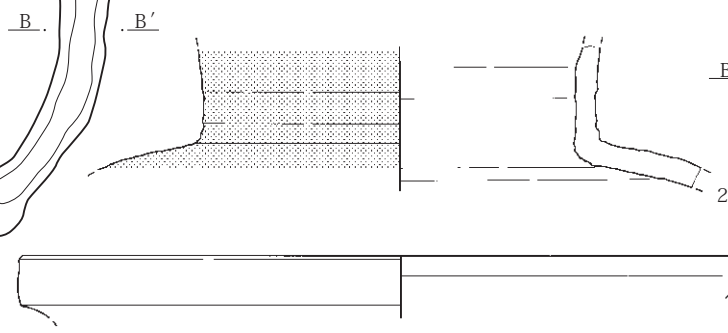


- 【A-A'】
〔10号溝覆土〕
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 締まる。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒を僅かに含む。
 - 2 褐色土(7.5YR4/3) 橙色土(7.5YR5/6)との混土。Hr-FP粒少量含む。
 - 3 明褐色土(7.5YR5/6) ややシルト質。壁からの崩落主体。

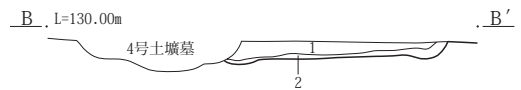
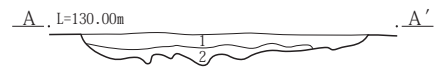
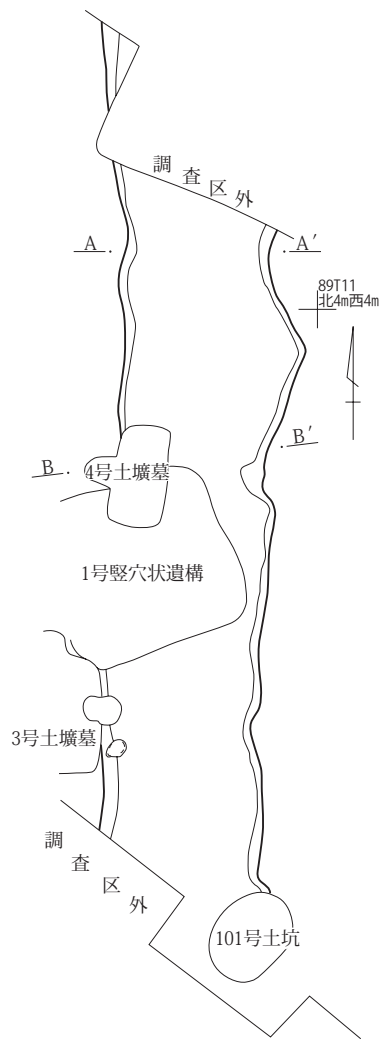


- 【B-B'】
〔10号溝覆土〕
- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) やや締まりあり。Hr-FP、黄色ブロック含む。
 - 2 黒褐色土(7.5YR2/2) ややシルト質。締まる。Hr-FP含むが1層に比し少ない。
 - 3 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 地山に類似。やや軟質でサラサラする。

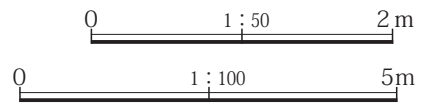
10号溝



13号溝



- 〔13号溝覆土〕
- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) シルト質をベースに砂質土が混入。締まる。Hr-FP含む。シルト質土のラミナ状の堆積が数枚認められる。
 - 2 明黄褐色土(7.5YR7/6) 基盤層のシルト質土であるが、ラミナ状の堆積土である。



第118図 10号溝と出土遺物及び13号溝

第4章 発見された遺構と遺物

15号溝(第119図、PL.28)

位置 90区A10-12〜グリッド。90区のやや東寄り、
仮2区西端部近くに位置する。

方位 N-89°-W

規模 確認長10.4m、幅128cm、深さ26cm

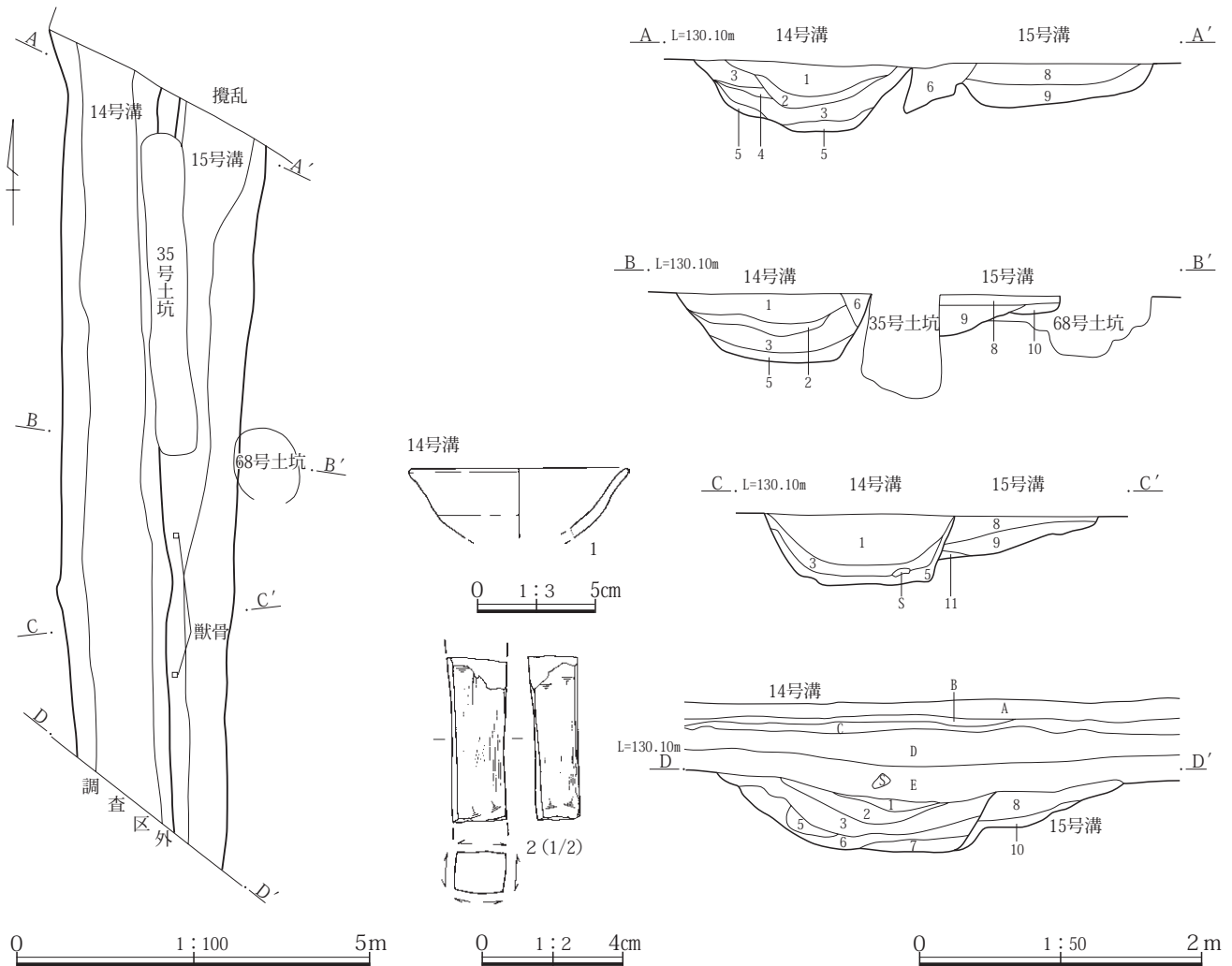
形状・構造 本溝も南側が調査区外に延び、北側が攪乱

14・15号溝

で壊されているため全容は確認できていない。その走行
は南北に直線的であり、掘削形態は箱堀状を呈し、底面
の横断面形は丸底状と想定される。

埋没土 褐色土、黒褐色土、灰褐色土で覆われる。

重複 35・59・60号土坑と重複し、35号土坑は本溝を
切っているように見受けられ、他の土坑は掘削順位から



[溝廃絶後の堆積層]

- A 地表(表土)水田面。
- B 水田床土。
- C 水田床土下 酸化鉄分を含む。
- D 灰褐色砂質土(7.5YR4/2) Hr-FP含む。締まる。
- E 褐色砂質土(7.5YR4/4) 炭化物とHr-FP含む、シルト少量含む。

[14号溝覆土]

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 締まる。Hr-FP、砂、炭化物粒を少量含む。
- 2 明褐色粘性土(7.5YR5/8) 明褐色シルトブロック多く含む。1層をベースとし、含有物も同程度入る。
- 3 褐色粘性土(7.5YR4/4) Hr-FP、炭化物粒、焼土粒僅かに含む。
- 4 明褐色シルト質土(7.5YR5/6) Hr-FP少量含む。サラサラする。

- 5 明褐色シルト質土(7.5YR5/6) 一部As-Cを含み、黒色土が混じる。暗黄色シルトブロックを全面に含む。

- 6 暗褐色土(7.5YR3/3) やや砂質。締まる。Hr-FP少量含む。
- 7 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) 粘性あり。流入したにぶい黄褐色シルト(基本土層11層)。ラミナ状に堆積。

[15号溝覆土]

- 8 灰褐色土(7.5YR4/4) やや砂質。締まりあり。Hr-FP含む。
- 9 黒褐色土(7.5YR3/2) やや粘性土。Hr-FPとシルト質土少量含む。
- 10 褐色土(7.5YR4/6) 汚れたシルト質で軟質(サラサラしている)。僅かに炭化物粒含む。
- 11 褐色シルト質土(7.5YR4/4) サラサラする。ラミナ状に酸化鉄分を含む。

第119図 14号溝と出土遺物及び15号溝

本溝より古い可能性がある。

出土遺物 本溝からは若干の土師器・須恵器片と鉄滓4点が出土したに過ぎなかった。

所見 本溝の掘削意図は明瞭ではなかったが、11層等の状況から水路の使用の可能性も考慮される。

なお、その時期は特定できなかったが、隣接する13・14号溝との関係から平安時代後期から鎌倉時代頃の所産の可能性が考慮される。

また前述の13号溝と1m隔たり、14号溝とは接して何れも平行に在ることから、両溝と同様に同様の土地区画の認識に基づいて掘削された可能性が考慮される。

17号溝(第120図、PL.28)

位置 100区P 3～R 4グリッド。100区中南部、仮4区東南部に位置する。

方位 N-40～54°-W

規模 確認長10.14m、幅78cm、深さ13cm

形状・構造 本溝は東側が攪乱で壊され、西側が37号住居と重複して確認できなかった。その走行は大凡西北西-南南東方向を向くが蛇行しており、掘削形態は箱堀状を呈し、底面形態は平底である。

埋没土 褐色土で覆われる。

重複 37号住居と重複するが、新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 本溝からは須恵器片3点を出土したに過ぎない。

所見 本溝の掘削意図は明瞭ではない。その時期も特定できなかった。

なお、後述する18・19号溝と2～3m隔たって平行に近い位置に掘削されているため、両溝と同様の土地区画の認識に基き掘削された可能性が考慮される。

18・19号溝(第121図、PL.29・47)

位置 [18号溝] 100区P 1～S 5グリッド。

[19号溝] 100区P 1～R 3グリッド。

18・19号溝は100区中南部、仮4区東南部に位置する。

方位 N-20～42～53°-W

規模 [18号溝] 確認長24.6m、幅196cm、深さ104cm

[19号溝] 確認長15.9m、残存幅26cm、深さ一

形状・構造 18号溝は東側が調査区外に延び、北側は攪

乱で壊されていて全容は確認できなかった。また19号溝は18号溝と重複して過半が重複している。

その走行北北西から入り、反時計回りに20度程回転して、東部で東南東に走行を変じて、6mほど直進して調査区外に出ている。両溝共に掘削形態は箱堀状を呈し、底面形態は平底である。

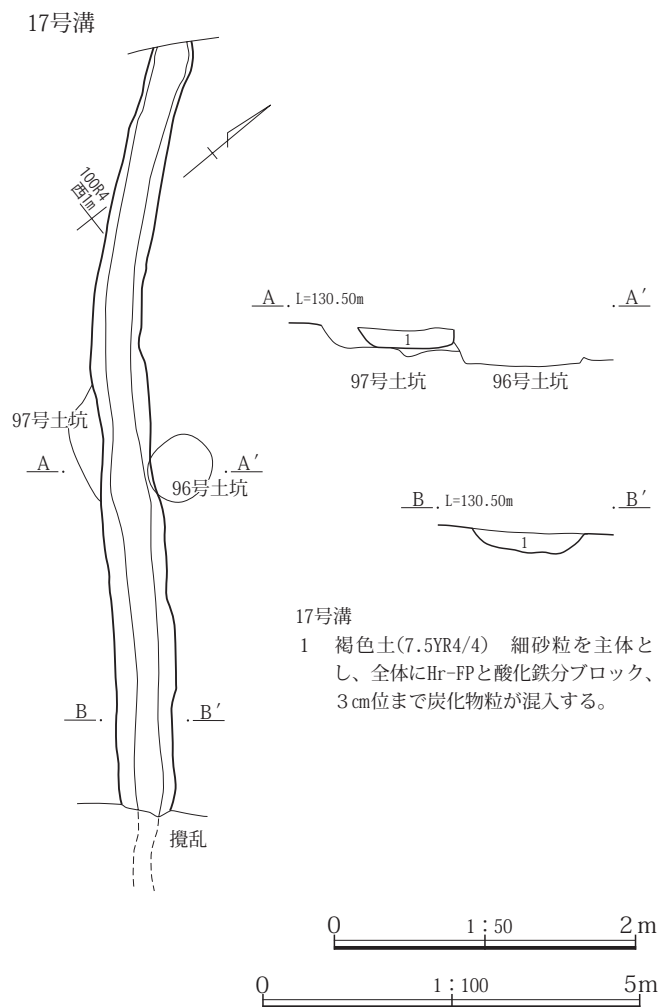
埋没土 両溝共に黒褐色土、黄褐色土で覆われる。

重複 18・19号溝は重複しているが、19号溝の方が新しい。また18号溝(19号溝は)は36・37・38号住居と重複するが、これらの住居よりは古い。

出土遺物 18号溝は土師器杯(1・2)、19号溝からは刀子(3)の出土が見られた。

所見 18・19号溝は覆土の所見から水路と認識される。

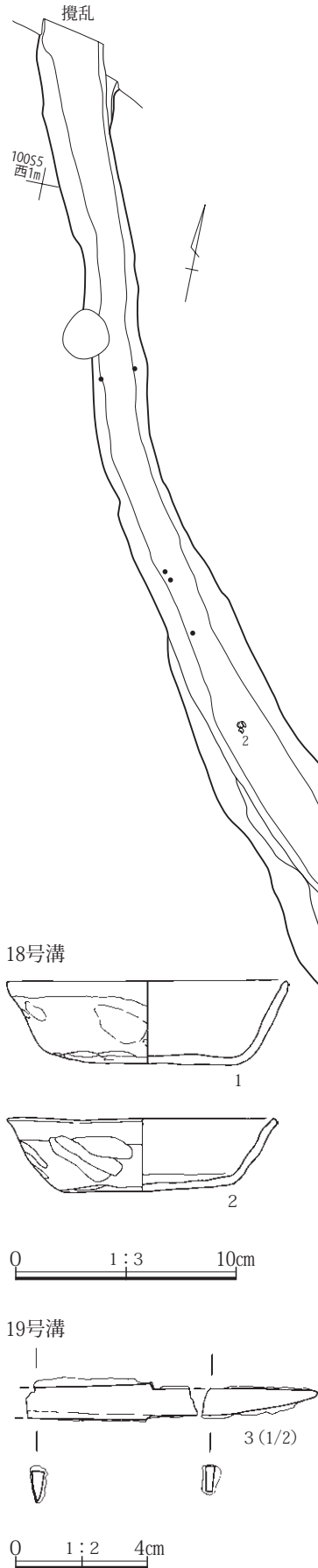
その時期は出土遺物は9世紀後半を示しているが、覆土にAs-Bが確認されることから、中世の所産と判断される。



第120図 17号溝

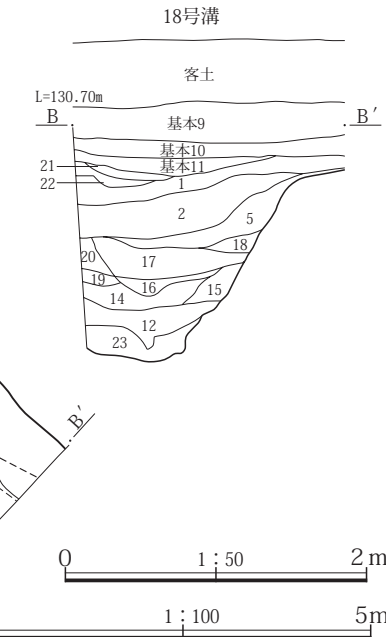
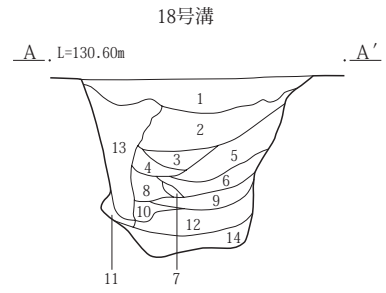
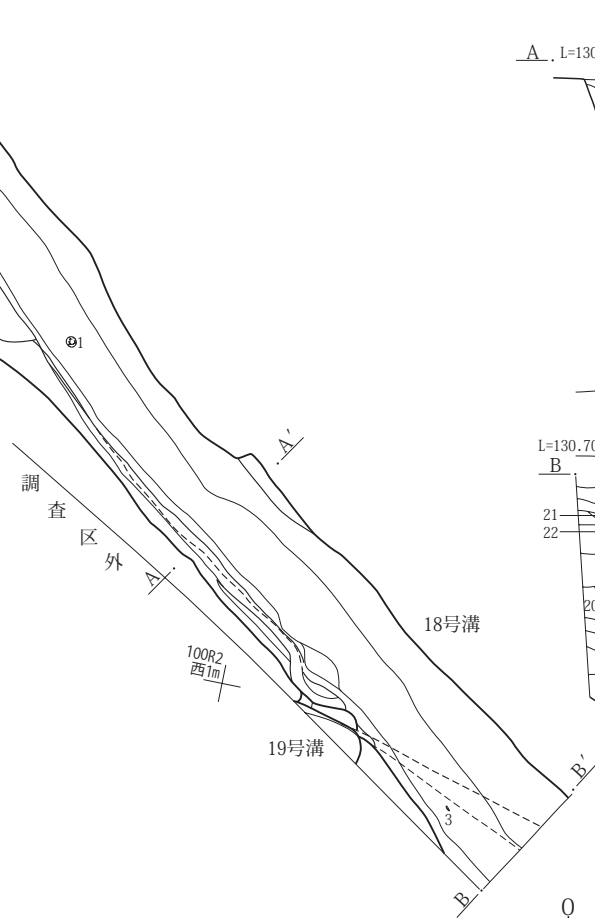
第4章 発見された遺構と遺物

18・19号溝



[18・19号溝覆土]

- 1 褐色土中砂粒土(7.5YR4/6) Hr-FP、白色鉱物僅かに含む。サラサラしている。
- 2 褐色細砂粒土(7.5YR4/4) Hr-FPと黄褐色シルトブロックを含むサラサラしている。
- 3 褐色土(7.5YR4/6) 1層土と5層土の混土。細砂粒土片と黄褐色シルトブロックが僅かに入る。サラサラしている。
- 4 黄褐色細砂粒土(10YR5/8) Hr-FAブロックと思われる。黄白色のHr-FP少量流れ込む。
- 5 明黄褐色細砂粒土(10YR6/6) 僅かにHr-FPを含む。
- 6 にぶい褐色土(7.5YR5/4)・浅黄橙色土(7.5YR8/4)シルト質土と褐色土の互層。
- 7 暗褐色砂質土(7.5YR3/3)ブロック層。
- 8 黄褐色細砂粒土(10YR5/6) サラサラしている。
- 9 黒褐色土(10YR2/3) 中砂粒を主とするがHr-FP含む。互層であり、水平堆積に近い。
- 10 褐色土(7.5YR4/4) 小礫層とシルトブロック混入。
- 11 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) 軟質。黄褐色シルトブロック含む。
- 12 明褐色シルト細砂粒土(7.5YR5/6)と橙色シルト細砂粒土(7.5YR6/6)の互層で水成堆積の状況を示す。
- 13 橙色細砂粒土(7.5YR6/6) Hr-FP、黄褐色シルトブロック、酸化鉄ブロック少量含む。
- 14 黒褐シルト質土(7.5YR3/1) As-C混入。
- 15 褐色シルト質土(7.5YR4/6) サラサラしている。
- 16 黄褐色土(10YR5/3) Hr-FP粒と中砂粒土、小砂粒土の互層。サラサラしている。19溝の底面堆積土。
- 17 黄褐色細砂質土(2.5Y5/4) 10数枚の互層で水平堆積。最上層はシルト質1層あたり0.5～2cmの厚さ。サラサラしている。
- 18 灰褐色シルト質土(7.5YR4/2)。
- 19 にぶい黄褐色細砂粒土(10YR7/3) サラサラしている。
- 20 褐色細砂粒土(7.5YR4/4) Hr-FP少量含む。サラサラしている。
- 21 灰黄褐色細砂粒土(10YR4/2) 白色鉱物粒とAs-Bが混入。固い。
- 22 21層に同じだが、白色鉱物粒とAs-B少なくなる。
- 23 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) 壁際に酸化鉄分付着。サラサラしている。



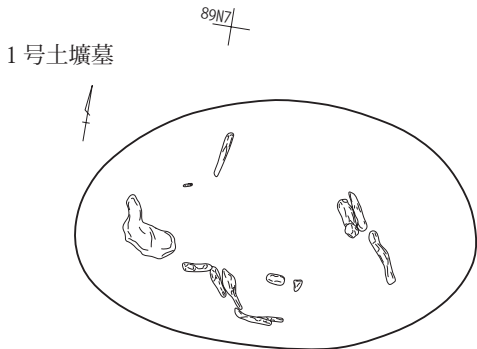
第121図 18・19号溝と出土遺物

(2面)

5 土壙墓・火葬土坑

1号土壙墓(第122図、PL.30)

位置 89区M-7~N-7グリッド。89区中部に位置し、仮2区東部に在る。
 方位 N-85°-E
 規模 長212cm、幅131cm、深さ32cm
 形状・構造 プランは楕円形を呈し、掘削底面はやや北に中心の寄る丸底状を呈する。

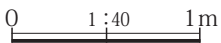
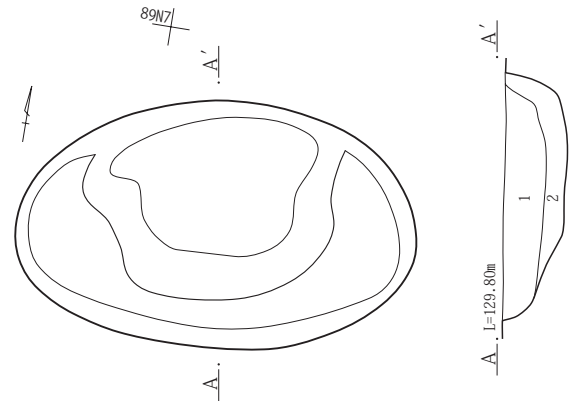


埋没土 褐色土で覆われる。

重複 本遺構は単独で在り、他遺構との調査区は見られなかった。

出土遺物 馬歯と牛歯の出土が見られた他は、僅かな土師器・須恵器片を出土したに過ぎなかった。

所見 本遺構の掘削意図は明らかにできなかったが、馬歯と牛歯が出土することから、家畜用の墓壙或いは遺体を遺棄した可能性が考慮される。またその時期は確認面と歯牙の遺存とその状態から推して凡そ中世の所産と判断される。



[1号土壙墓覆土]

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) やや砂質。Hr-FP粒含み、As-Bも含むと見られ、少量の炭化物粒含む。
- 2 黄橙色シルト質土(7.5YR8/8) 黄褐色シルト(基本土層11層相当)主体で1層土混入するブロック混土層。

第122図 1号土壙墓

3号土壙墓(第123図、PL.30)

位置 90区A-10グリッド。90区東部、仮2区西部に位置する。

方位 N-4°-W

規模 長157cm、幅89cm、深さ12cm

形状・構造 本遺構のプランは隅丸形状を呈し、北壁西側に半円形の突出部がある。掘削底面は平底を呈する。

埋没土 褐色土主体に覆われ、底面南半に炭化物粒が面的に分布し、北半は底面が焼土化して炭化物が分布する。

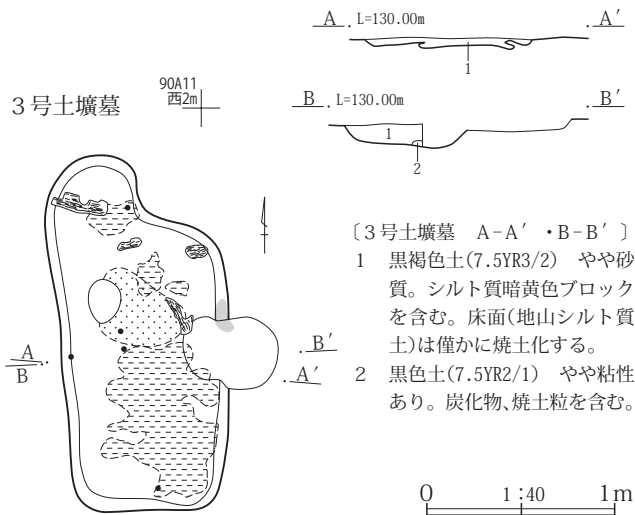
重複 1号竪穴状遺構、13・14号溝と重複するが、本墓壙は1号竪穴状遺構を切っているものの、13・14号溝との新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 少量の灰釉陶器片が出土したに過ぎなかった。

所見 焼土面の遺存や炭化物、炭化物粒の分布、遺構の規模や形態から推して本土壙墓は火葬土坑(茶毘所)と

判断される。その時期は特定できなかったが、概ね中世の所産と認識される。

なお、骨の遺存は無く、東日本型の拾骨方法によるものと判断される。



[3号土壙墓 A-A'・B-B']

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) やや砂質。シルト質暗黄色ブロックを含む。床面(地山シルト質土)は僅かに焼土化する。
- 2 黒色土(7.5YR2/1) やや粘性あり。炭化物、焼土粒を含む。

第123図 3号土壙墓

第4章 発見された遺構と遺物

4号土壙墓(第124図、PL.30)

位置 90区A-11グリッド。90区東部、仮2区西部に位置する。

方位 N-10°-E

規模 長134cm、幅110cm、深さ28cm

煙道 長38cm、幅43cm、深さ8cm

形状・構造 本土壙墓は隅丸長方形のプランを呈し、西側の長辺中央に半楕円形の煙突を有す。掘削底面はやや北に中心の寄る丸底状を呈する。本体の煙道部延長線上の底面には通風のためと判断される径68×51cm、深さ14cmを測る、長軸を煙道に向けた楕円形プランの掘り込

みが設けられている。またこの掘り込みの南北両側に二個ずつの河床礫が配置されているが、これは棺置きのもとと判断される。

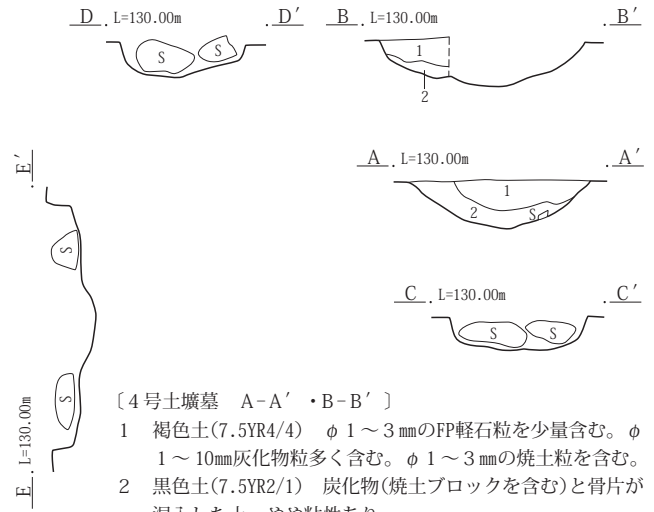
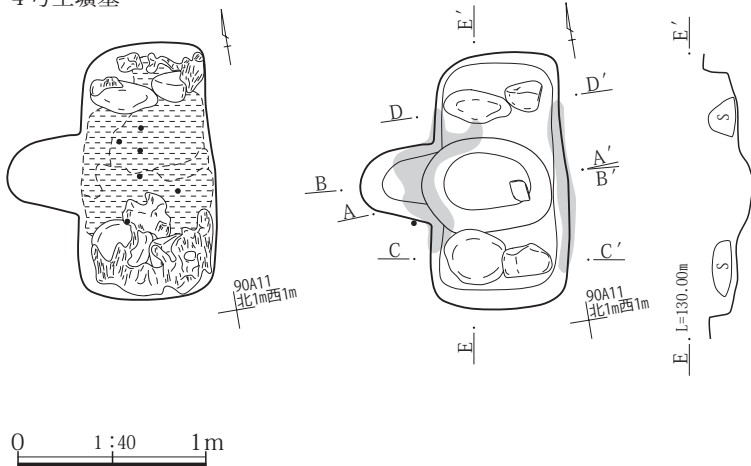
埋没土 褐色土、黒褐色土で覆われる。

重複 19号住居、1号竪穴状遺構、13号溝と重複するが、何れの遺構に対しても本墓壙の方が新しい。

出土遺物 少量の人骨が出土したに過ぎなかった。

所見 本遺構はその形態や炭等の遺存状態、人骨の出土から判断して、火葬土坑(茶毘所)と断ぜられる。なお、拾骨の方法は東日本型である。

4号土壙墓



〔4号土壙墓 A-A'・B-B'〕

- 1 褐色土(7.5YR4/4) φ1~3mmのFP軽石粒を少量含む。φ1~10mm灰化物粒多く含む。φ1~3mmの焼土粒を含む。
- 2 黒色土(7.5YR2/1) 炭化物(焼土ブロックを含む)と骨片が混入した土。やや粘性あり。

第124図 4号土壙墓

5号土壙墓(57号土坑) (第125図、PL.30)

位置 89区M-7~8グリッド。89区東部、仮2区北東部に位置する。

方位 N-13°-W

規模 長133cm、幅74cm、深さ24cm

形状・構造 本土壙墓のプランは南北に長い長楕円形を呈し、掘削底面はほぼ平底を呈する。

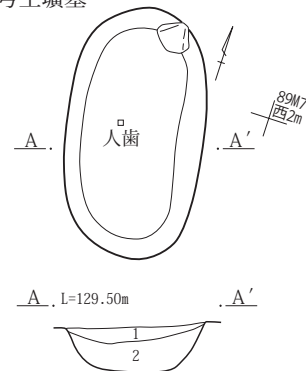
埋没土 黒褐色シルト質土で覆われる。

重複 8号住居と重複するが、本土壙墓の方が新しい。

出土遺物 若干の土師器片と須恵器片1片が出土した他、人歯の歯冠片が僅出土したに過ぎなかった。

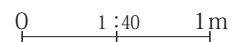
所見 本遺構は人歯の出土からヒトを埋葬した土壙墓であると認識される。またその時期は歯牙の遺存から中世の可能性を有するものの、その特定には至らなかった。

5号土壙墓



〔5号土壙墓〕

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) ややシルト質。黄褐色シルト(基本土層11層相当)含む混土。Hr-FP粒含み炭化物粒少量含む。
- 2 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。



第125図 5号土壙墓

6号土壙墓(8号住居内)(第126図、PL.30)

位置 89区M-7グリッド付近。89区東部、仮2区北東部に位置し、8号住居竈右手前付近に人歯が出土しているためその存在を想定したものであり、8号住居東壁に沿って竈より南側に位置していたものと想定される。

方位 測定不能

規模 測定不能。なお、本遺構は後述のように中世土壙墓と見られるが、中世土壙墓は通常長軸の長さは1m強を測るものである。

形状・構造 上述のように本土壙墓は人歯の出土からその存在を想定したもので、遺構として確認されていない。しかしながら人歯の出土位置から推して、8号住居東壁に沿って南北に長い楕円形或いは隅丸長方形に掘削されたものと想定される。

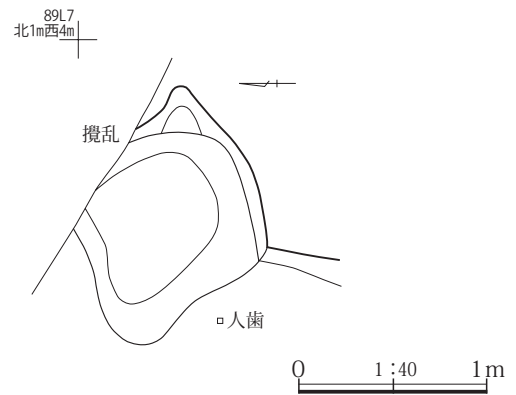
埋没土 記録なし

重複 本遺構(出土人歯)は8号住居の一部として調査されたものであるが、覆土中に遺存するため8号住居よりは新しいものと判断される。

出土遺物 8本の人歯の出土があっただけである。

所見 繰り返しになるが、本土壙墓は歯の遺存状態から土壙墓の存在を想定したものであり、遺構としては確認されなかった。また歯列を確認できる状態で出土した下顎臼歯が咬合面を上にして出土しているが、座棺による近世土壙墓では遺体の腐食によって頭部が脱落して頭

6号土壙墓(8号住居内)



第126図 6号土壙墓

部が逆位になることが多いため近世土壙墓の可能性は無く、一方古代に一般的な伸展葬であれば人歯の出土位置から推して北頭位での埋葬と想定されるものの8号住居と重複せずに墓壙を掘削することが困難であるため、本土壙墓(人歯)は北頭位の中世土壙墓として埋葬されたものと思慮される。

本土壙墓の被葬者は鑑定の結果、被葬者は11歳の男児であることが確認された。

なお、想定される墓壙形態と歯牙の遺存状態に照らして凡そ中世の所産と判断されるため、中世土壙墓による埋葬の行われる14～17世紀の所産と認識されるものの、細かい時期は特定できなかった。



写真1 2面89・90区(仮2区)調査風景

(2面)

6 土坑

89・90区の土坑群(第127～137・140図、PL.30～36・48・49) 位置 表4参照。89・90区(仮1・2区)の第2面に於いては4～7・12～56・58～70・76・78～80・85・86・88・101号土坑の70基の土坑が確認されている。

その分布は89・90区全体に広がりを見せるが、このうち25～32・37・38・48・50・51・76・78号土坑の15基が9グリッドライン上に連続的に配置し、その主軸方向は26号土坑を除いて東西方向を向いている。

方位 表4参照。

規模 表4参照。

これらをまとめると長軸は46～456cm、平均134.30cmを測り、短軸は12～90cm、平均79.88cmを測った。

形状・構造 プランは7・18～21・27・34・39・42～44・46・53・54・59・62・66・79号土坑が円形、4・12～16・22・24・33・40・45・47・49・52・55・56・58・60・61・63～65・67～70・85・86・88号土坑が楕円形、23・31号土坑が方形、28・29・76・80号土坑が隅丸方形、5・6・17・36・48号土坑が長方形、25・26・30・32・35・37・38・51号土坑は短冊形、41・50・78号土坑が不整形を呈する。

また底面の形態は14・18・19・21・40・42・56・60～62・79・88号土坑が丸底、12号土坑が尖底を呈する他は平底である。また44・64・68号土坑の底面にはピット状の掘り込み、若しくは塑性変形が認められる。

埋没土 [個々の平断面図に記載]

重複 幾つかの土坑で重複が見られたが、新旧関係が特定できたのは25・37・38・48号土坑では25号土坑は37・38号土坑に対して新しく、38号土坑は48号土坑に対して新しく、28・29号土坑では28号土坑の方が新しい。26・31・32・76号土坑では前者では32号土坑に対して26・31号土坑が新しく、30・50・51・78号土坑では78号土坑に対して30・50号土坑が新しい。また45・85・86号土坑では86号土坑に対して45・85号土坑が新しく、92・93号土坑では92号土坑の方が新しい。16・22号土坑、47・88号土坑、65・66号土坑の新旧関係は特定できなかった。

また他の遺構との重複も見られたが、6号土坑は7号

溝と8号ピットより新しく、17号土坑は4号住居、25・38号土坑は10号住居、29号土坑は18号住居、31号土坑は12号住居、34・69号土坑は21号住居、39号土坑は26号住居、45・85・86号土坑は14号住居、45・52・85・86号土坑は15号住居、58号土坑は8号住居、66・79・80号土坑は13号住居、84号土坑は33号住居より新しい。また37号土坑は12号住居、56号土坑は8号住居より古く、27・37・48号土坑と10号住居、65号土坑と17号住居、87号土坑と33号住居の新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 4～7・12～70・76・78～80・84～89

4・5・8～10・13～25・27・29・30～33・35・36・39～43・45～47・50～56・58・59・63～67・76～78・80・84～86・88号土坑からは土師器、須恵器、灰釉陶器片の一種類以上が、また7・15・29・35・41・45・46・53・55・58・68・80号土坑からは鉄滓、35・36号土坑からは羽口の出土があり59号土坑からは炭化物の出土があった。

こうした出土遺物のうち4号土坑から須恵器杯(1)、7号土坑から炉内滓(2)、14号土坑から須恵器椀(3)、33号土坑から黒色土器杯(5)、須恵器杯(4)、敲石(6)、磨石と思われる石製品(7)、35号土坑から羽口(8)、40号土坑から支脚と思われる土師製品(9)、41号土坑から炉内滓(10)、42号土坑から土師器甕(12)、45号土坑から須恵器の杯(14～18)・椀(19)、灰釉陶器椀(20)、羽釜(21)、鉄鏝(22)、角釘(23)、刀子(24)、47号土坑から須恵器杯(26)、灰釉陶器の皿(27・28)と段皿(29)、土釜と思われる土師質の土器(30)、敲石(31)、52号土坑から黒色土器椀(33)、壺と思われる須恵器(32)、大型の台石(34)、53号土坑から土釜と思われる土師質の土器(35)、54号土坑から灰釉陶器壺(36)、須恵器の甑(37)と大甕(38)、56号土坑から須恵器椀(40)、80号土坑から須恵器杯(42)、88号土坑から灰釉陶器椀(44・45)と須恵器大甕(46)の出土が見られた。

所見 何れの土坑も、掘削意図は特定できなかった。また不明であり、その時期は出土遺物から推して33・45・47・52・80・88号土坑は10世紀後半の所産と判断され、4・14・42・56・66号土坑も同時期の可能性が考慮される。また37号土坑は住居との重複から10世紀前半以前の所産と判断される。また本土坑群は全体に10世紀以降の所産と認識されるが、短冊形を呈するそのプラ

ンから25・26・30・32・35・37・38・51号土坑は中世の所産と認識され、長方形プランを呈する5・6・17・36・48号土坑もその可能性が考慮される。

100・91区の土坑群(第137～139図、PL.35・36・49)

位置 表4参照。100・91区2面の土坑群は100区を中心に散布するように在り84・87・89～100号土坑の14基の土坑を確認、調査した。

方位 表4参照。

規模 表4参照。

形状・構造 プランは84・89・96・99号土坑は円形、90・92号土坑が隅丸長方形、95・97号土坑は不定形で、他の土坑は楕円形を呈する。また掘削底面は99号土坑が丸底を呈する以外は平底を呈する。

表4 2面土坑一覧

No.	位置	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	方位	挿図	写真
4	89K6	楕円形	0.67	0.54	0.26	N-10°-E	127	30
5	89K5	長方形	1.60	0.91	0.29	N-5°-W	127	30
6	89K4	長方形	(2.32)	0.94	0.09	N-6°-W	127	30
7	89L4	円形	0.55	0.51	0.24	-	127	30
12	89N5	楕円形	0.98	0.80	0.28	N-89°-E	127	30
13	89N5	楕円形	1.43	0.90	0.17	N-62°-W	127	31
14	89P7	楕円形	1.29	1.04	0.38	N-80°-E	128	31
15	89Q7	楕円形	1.05	0.90	0.23	N-10°-W	128	31
16	89Q7	楕円形	1.98	1.70	0.18	N-74°-E	128	31
17	89J7	長方形	(1.36)	0.88	0.27	N-72°-E	128	31
18	89P7	円形	0.94	0.86	0.17	-	128	31
19	89P7	円形	1.14	1.12	0.32	-	128	31
20	89Q8	円形	0.99	0.93	0.18	-	129	31
21	89Q8	円形	0.89	0.76	0.24	-	129	31
22	89Q7	楕円形	1.43	1.26	0.32	N-74°-E	129	31
23	89P9	方形	(1.17)	1.11	0.09	N-60°-E	129	31
24	89Q8	楕円形	1.28	1.16	0.19	N-75°-E	129	31
25	89Q9	長方形	1.78	0.62	0.18	N-88°-E	129	31
26	89Q9	隅丸方形	2.12	0.89	0.08	N-27°-W	130	31
27	89R9	円形	0.99	0.98	0.09	-	131	31
28	89R9	隅丸方形	0.88	0.52	0.07	N-70°-E	130	32
29	89R9	隅丸方形	1.75	0.86	0.17	N-87°-E	130	32
30	89S9	隅丸方形	3.02	0.76	0.09	N-88°-W	131	32
31	89R9	方形	1.48	1.36	0.26	N-15°-W	130	32
32	89R9	隅丸方形	(2.48)	0.85	0.28	N-80°-E	130	32
33	89Q7	楕円形	1.82	1.43	0.26	N-8°-W	132	32
34	90B11	円形	0.72	0.68	0.55	-	132	-
35	90A11	隅丸方形	4.56	0.55	0.76	N-2°-W	132	-
36	90B12	長方形	2.18	1.3	0.13	N-88°-E	132	-
37	89Q9	長方形	2.08	0.76	0.13	N-89°-E	129	32
38	89Q9	長方形	1.87	0.61	0.36	N-82°-E	129	32
39	89O7	円形	1.25	1.2	0.32	-	132	32
40	89Q8	楕円形	0.85	0.65	0.28	N-62°-W	132	32
41	89P8	不整形	2.27	1.38	0.25	N-36°-E	133	32
42	89N5	円形	1.04	0.94	0.23	-	133	32-33
43	89O8	円形	0.62	0.62	0.3	-	133	33
44	89N8	円形	0.89	0.76	0.26	-	133	33
45	89N7	楕円形	1.94	1.1	0.75	N-78°-W	133	33
46	89O7	円形	1.03	1.03	0.26	-	134	33
47	89O7	楕円形	0.92	0.73	0.32	N-5°-E	134	33
48	89Q9	長方形	1.51	(0.36)	0.3	N-89°-E	129	33
49	89T11	楕円形	1.04	0.88	0.14	N-86°-E	134	33

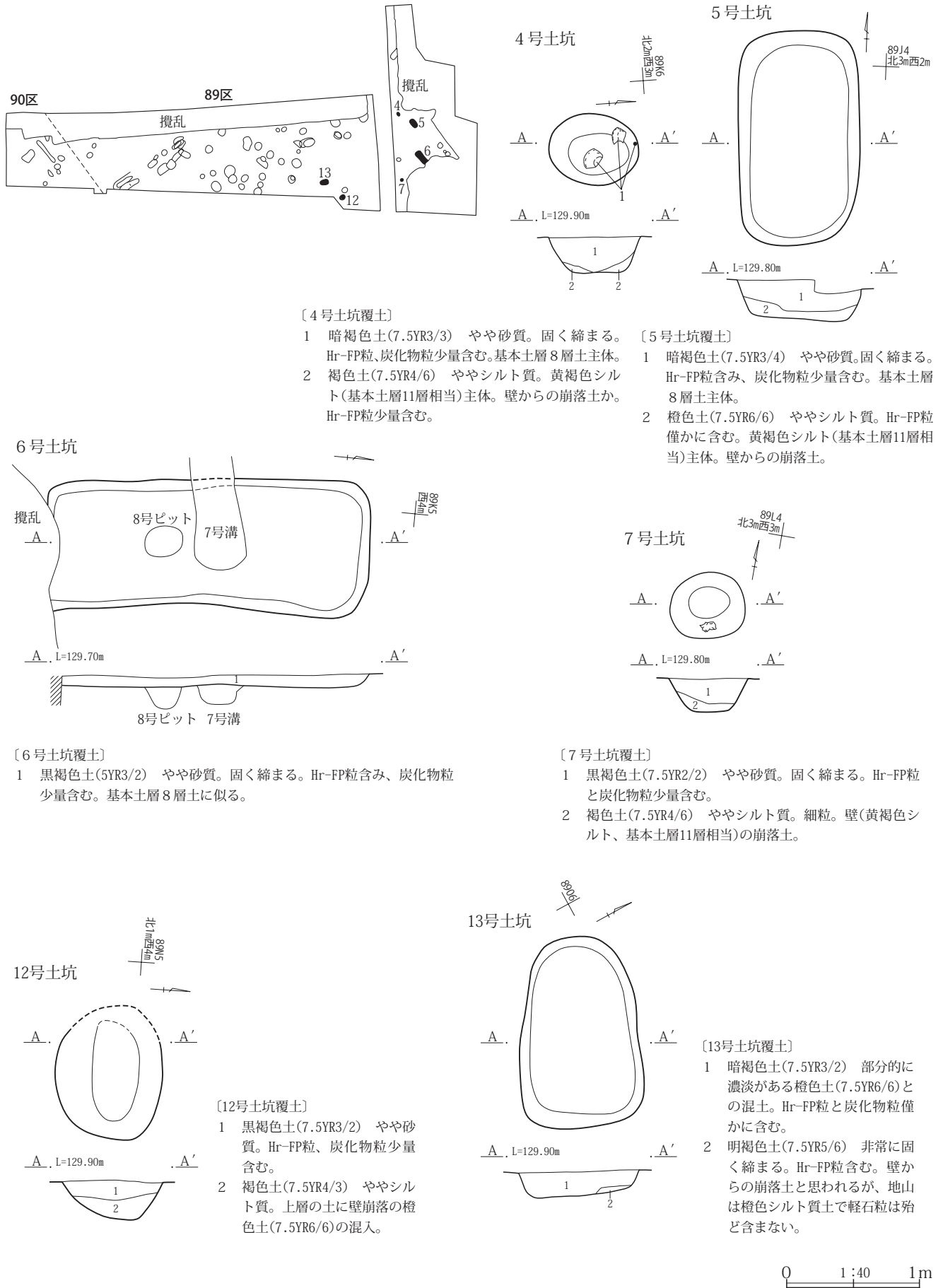
埋没土〔個々の平断面図に記載〕

重複 92・93号土坑が重複するが、92号土坑の方が新しい。また他の遺構との重複では91号土坑が27号ピットと重複し、91号土坑が新しく、96・97号土坑は17号溝と重複するが、両土坑とも17号溝に切られている。

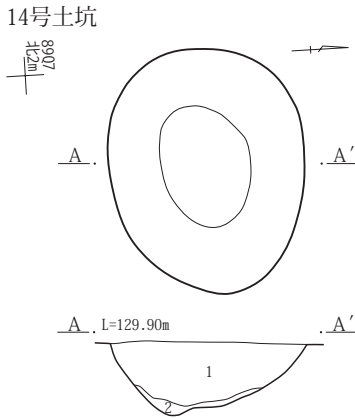
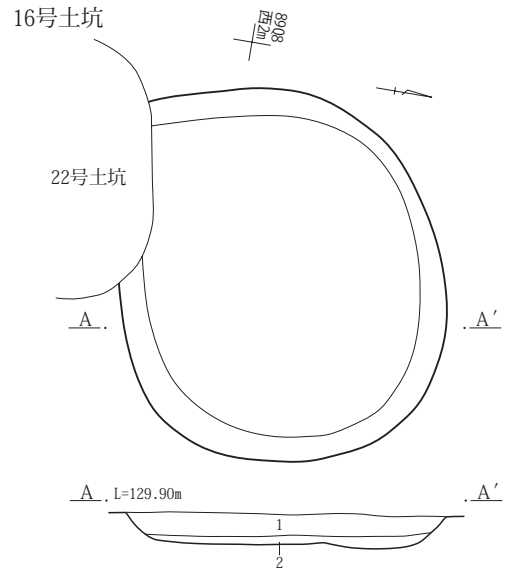
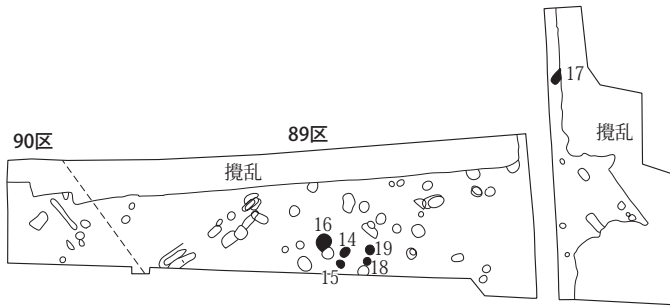
出土遺物 各土坑からの出土遺物は少なく、94号土坑からは土師器2片、96号土坑から須恵器杯(47)と須恵器片1点、99号土坑からは須恵器1片、100号土坑からは土師器4片と須恵器1片の出土しか見られなかった。

所見 何れの土坑も意図は特定できなかった。またその時期も96号土坑は出土遺物から推して、10世紀後葉の所産の可能性があり、覆土から推して99・100号土坑は中世、94号土坑は凡そ平安時代以降の所産と認識されるだけで、他の土坑の時期も確認面から古代から中世の所産と把握できるに過ぎなかった

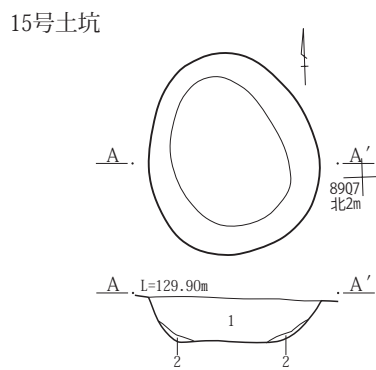
No.	位置	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	方位	挿図	写真
50	89T9	不整形	(1.62)	1.21	0.46	N-88°-W	131	33
51	89S9	不整形	(1.60)	0.8	0.35	N-88°-W	131	33
52	89N7	楕円形	1.20	1.04	0.07	N-88°-W	134	34
53	89N6	円形	1.66	(0.94)	0.45	-	134	34
54	89P6	円形	1.37	(1.10)	0.52	-	134	34
55	89M6	楕円形	(1.28)	(1.14)	0.34	N-12°-W	135	34
56	89M6	楕円形	1.28	1.04	0.49	N-88°-E	135	34
58	89M7	楕円形	1.45	(1.40)	0.42	N-17°-E	135	34
59	90A11	円形	1.01	0.95	0.47	-	135	-
60	90A11	楕円形	0.78	0.58	0.44	N-9°-E	135	-
61	89J4	楕円形	0.72	0.71	0.28	N-81°-W	135	34
62	89J4	円形	0.46	0.44	0.14	-	135	34
63	89J4	楕円形	(0.85)	0.84	0.13	N-72°-E	136	34
64	89L5	楕円形	0.78	0.62	0.18	N-26°-W	136	34
65	89O6	楕円形	1.23	1.16	0.32	N-79°-E	136	34
66	89O6	円形	0.75	0.7	0.22	-	136	34
67	90A12	楕円形	(0.80)	0.75	0.23	N-40°-E	136	-
68	90A11	楕円形	1.02	0.9	0.45	N-6°-E	136	-
69	90B11	楕円形	1.38	(0.52)	0.35	N-8°-E	136	34
70	89T11	楕円形	0.80	0.68	0.16	N-64°-E	137	34
76	89R9	隅丸方形	(1.86)	(1.32)	0.31	N-78°-E	130	35
78	89T9	不整形	(3.90)	(1.33)	0.18	N-88°-W	131	35
79	89N7	円形	0.63	0.61	0.1	-	137	35
80	89N6	隅丸方形	1.56	1.46	0.35	N-2°-E	137	35
84	91D7	円形	1.05	1.00	0.28	-	137	-
85	89N7	楕円形	1.50	(1.00)	0.25	N-62°-E	133	35
86	89N7	楕円形	(2.45)	(1.33)	0.32	N-70°-W	133	35
87	91E7	楕円形	0.54	0.44	0.2	N-55°-W	137	35
88	89P7	楕円形	2.15	(0.90)	0.46	N-15°-W	134	35
89	100Q5	円形	1.16	0.97	0.34	-	137	35
90	100O4	隅丸長方形	1.45	0.99	0.35	N-20°-E	138	35
91	100O4	楕円形	0.98	0.76	0.36	N-82°-W	138	-
92	100R3	隅丸長方形	1.61	0.73	0.36	N-76°-W	138	35
93	100R3	楕円形	1.37	1.02	0.28	N-22°-E	138	-
94	100P4	楕円形	(2.06)	1.06	0.21	N-71°-W	138	35
95	100S5	不整形	-	-	0.08	-	138	36
96	100Q3	円形	0.88	0.85	0.24	-	139	36
97	100Q3	不整形	-	-	0.14	N-74°-W	139	36
98	100T5	楕円形	(0.70)	(0.48)	0.44	N-64°-W	139	36
99	100S5	円形	0.78	0.75	0.17	-	139	36
100	100S5	楕円形	1.72	1.16	0.55	N-18°-E	139	36
101	90T10	楕円形	1.28	0.98	0.54	N-40°-E	140	36



第127図 4・5・6・7・12・13号土坑

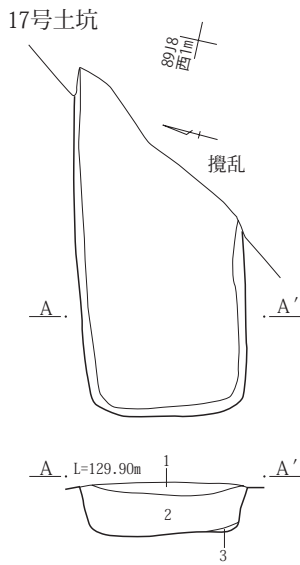


- [14号土坑覆土]
- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。炭化物粒を少量含み、Hr-FP粒僅か含む。
 - 2 橙色シルト質土(7.5YR7/6) 壁からの崩落土主体。

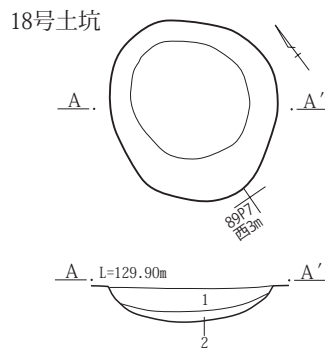


- [15号土坑覆土]
- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。炭化物粒を少量含み、Hr-FP粒僅か含む。
 - 2 橙色土(7.5YR6/6) 壁からの崩落土主体の混土。

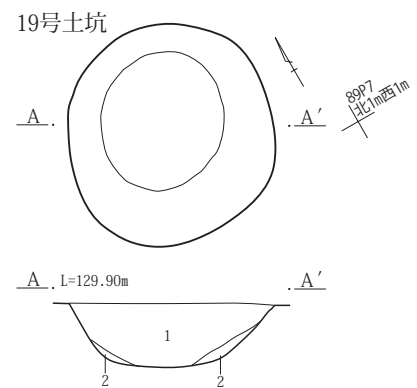
- [16号土坑覆土]
- 1 褐色土(7.5YR4/3) Hr-FP粒少量含み炭化物粒を僅かに含む。
 - 2 明褐色土(7.5YR5/6) ややシルト質。上層に黄褐色シルト(基本土層11層相当)、黄橙色土(7.5YR8/8)が混入。ブロック状には混じらないので壁の崩落による混土。



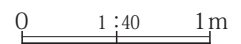
- [17号土坑覆土]
- 1 褐色土(7.5YR4/3) やや砂質。固く締まる。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
 - 2 黒褐色土(7.5YR3/2) 1層に似るが更に砂質。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
 - 3 にぶい褐色土(7.5YR5/4) ややシルト質。壁の崩落土の混土。



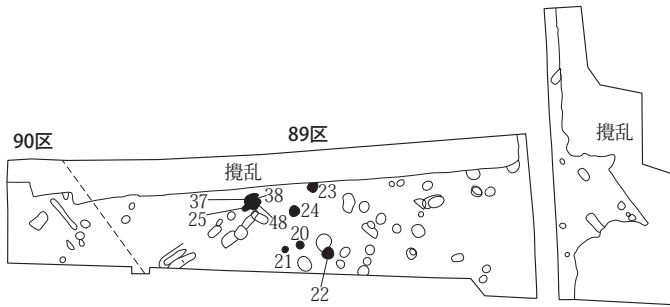
- [18号土坑覆土]
- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。締まりあり。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
 - 2 橙色土(7.5YR6/6) ややシルト質。上層に壁の地山土粒が混入。



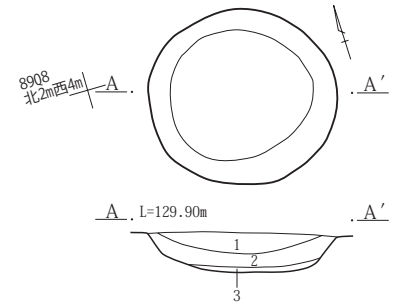
- [19号土坑覆土]
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 締まる。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。
 - 2 橙色土(7.5YR6/6) ややシルト質。壁の崩落土主体の混土。



第128図 14・15・16・17・18・19号土坑



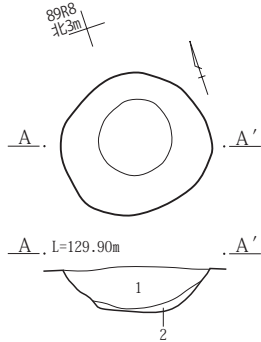
20号土坑



[20号土坑覆土]

- 1 褐色土(7.5YR4/3) 締まる。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) ややしと質。はせと炭化物粒僅かに含む。
- 3 橙色シルト質土(7.5YR7/6) 2層に壁黄橙(7.5YR7/8)の崩落土入る混土。

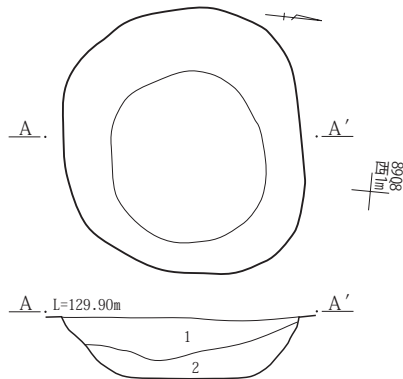
21号土坑



[21号土坑覆土]

- 1 褐色土(7.5YR4/3) ややしと質。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
- 2 橙色シルト質土(7.5YR7/6) 上層に壁の崩落土(黄橙7.5YR7/8)の混入。

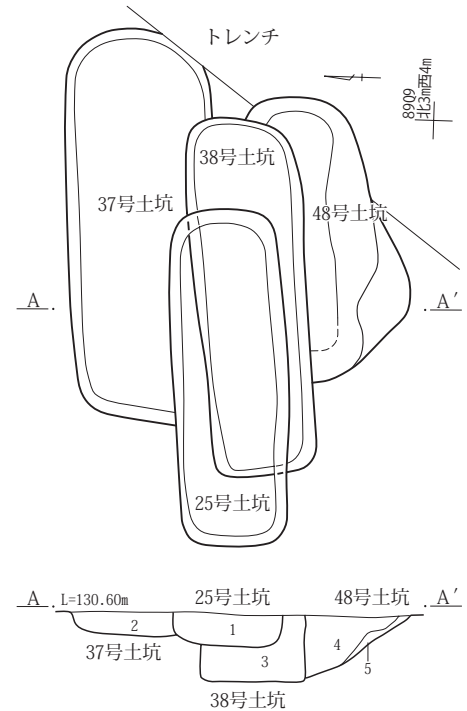
22号土坑



[22号土坑覆土]

- 1 にぶい黄褐色土(10YR6/4) ややしと質。ベースはシルト質土で、同系色の粘性のある土との混土。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
- 2 にぶい橙色シルト質土(7.5YR7/3) Hr-FP粒と炭化物粒僅かに含む。1層に似るが、粘土は殆ど混ざらない。

25・37・38・48号土坑



[25号土坑覆土]

- 1 暗褐色土(7.5YR3/5) 炭化物粒少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。ブロック状の堆積はなく均質な堆積状態。

[37号土坑覆土]

- 2 褐色土(7.5YR4/3) Hr-FP粒少量含み、炭化物粒と焼土粒を僅かに含む。

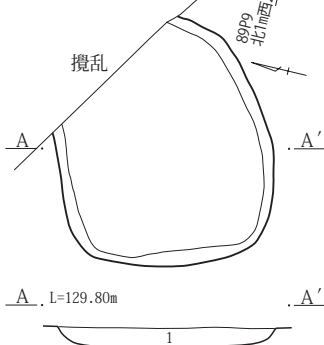
[38号土坑覆土]

- 3 褐色土(7.5YR4/3) ややしと質。Hr-FP粒、炭化物粒を僅かに含む。

[48号土坑覆土]

- 4 褐色土(7.5YR4/6) ややしと質。Hr-FP粒、炭化物粒僅かに含む。
- 5 橙色シルト質土(7.5YR6/8) 黄褐色シルト(基本土層11層相当)主体に4層土入る混土。壁の崩落土。

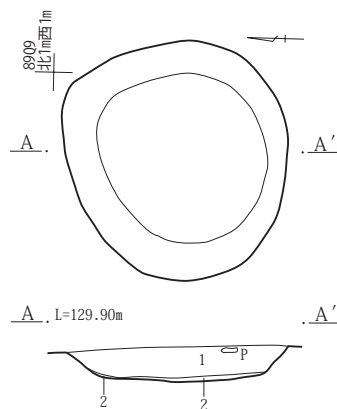
23号土坑



[23号土坑覆土]

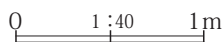
- 1 褐色土(7.5YR4/4) 締まりあり。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。

24号土坑

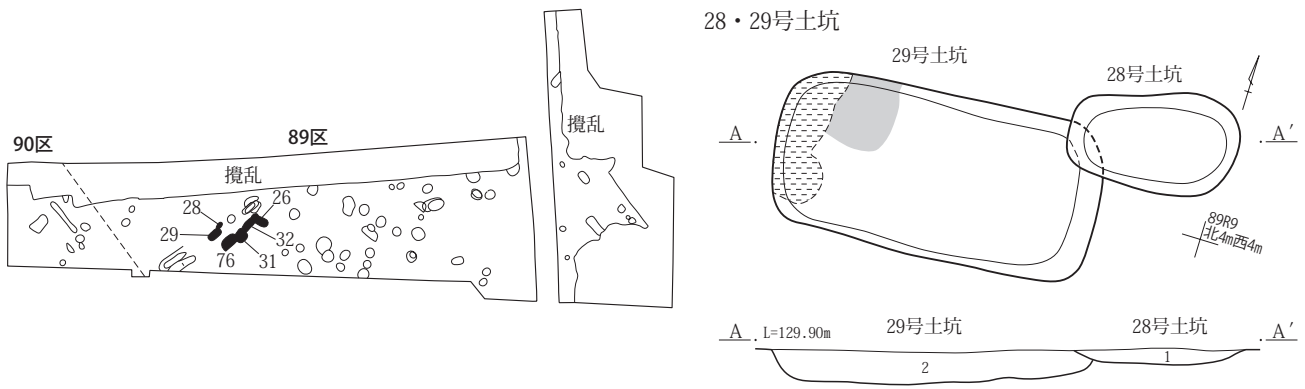


[24号土坑覆土]

- 1 褐色土(7.5YR4/3) 黄褐色シルト(基本土層11層相当)入る混土。ややしと質。Hr-FP粒と炭化物粒を少量含む。自然堆積土。
- 2 橙色シルト質土(7.5YR7/6) 黄褐色シルト(基本土層11層相当)主体で1層土を部分的に含む。壁の崩落土。



第129図 20・21・22・23・24・25・37・38・48号土坑



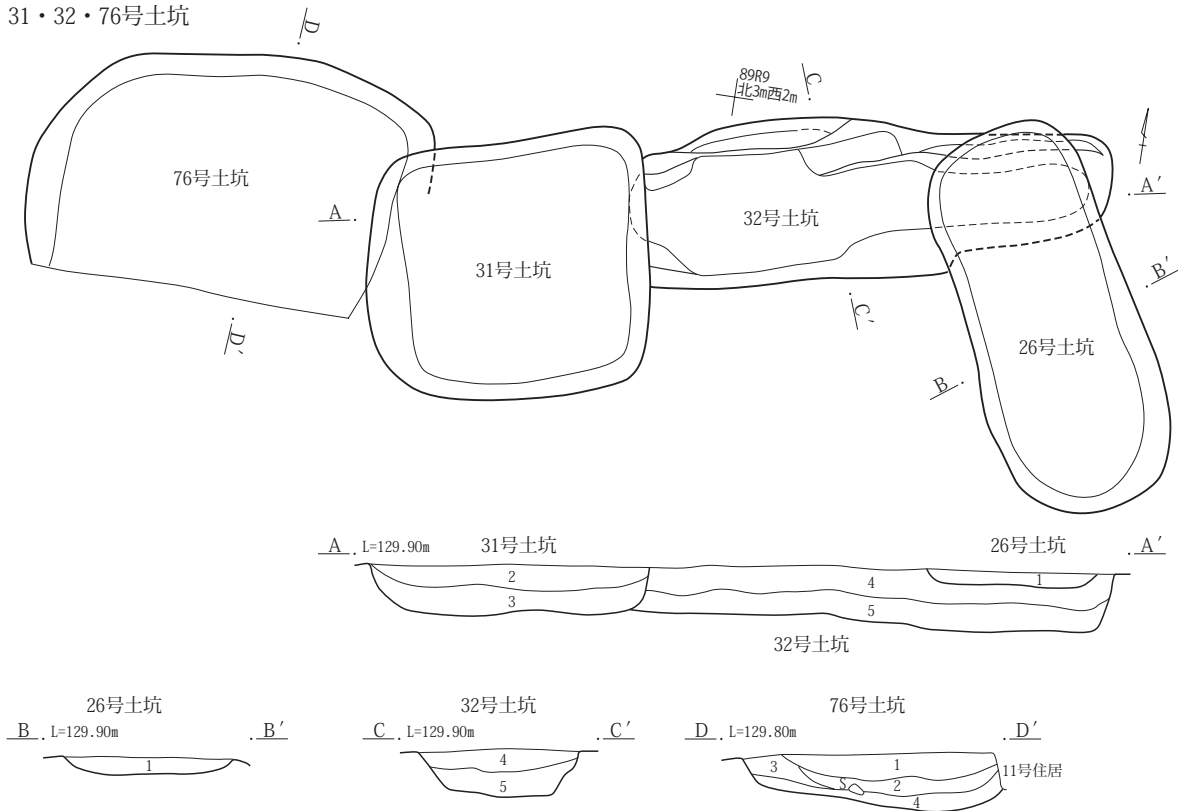
[28号土坑覆土]

1 にぶい褐色土(7.5YR5/3) ややシルト質。Hr-FP粒と炭化物粒僅かに含む。

[29号土坑覆土]

2 暗褐色土(7.5YR3/4) Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。

26・31・32・76号土坑



[26号土坑覆土 A-A'・B-B']

1 褐色土(7.5YR4/4) ややシルト。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。黄褐色シルト(基本土層11層相当)ブロック混入。

[31号土坑覆土 A-A']

2 褐色土(7.5YR4/3) Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。

3 明褐色土(7.5YR5/6) ややシルト質。Hr-FP粒、炭化物粒僅かに含む。2層と黄褐色シルト(基本土層11層相当)の混土。

[32号土坑覆土 A-A'・C-C']

4 橙色土(7.5YR6/6) 固く締まる。Hr-FP粒含み、炭化物粒少量含む。シルト質土と粘土が多く他の遺構覆土との混土。

5 明褐色土(7.5YR3/4) ややシルト質。Hr-FP粒ふみ、炭化物粒僅かに含む。4層と同様に粘土ブロック、灰白色土10Y8/2)少量含む。

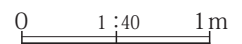
[76号土坑覆土 D-D']

1 暗褐色土(7.5YR3/4) ややシルト質。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。

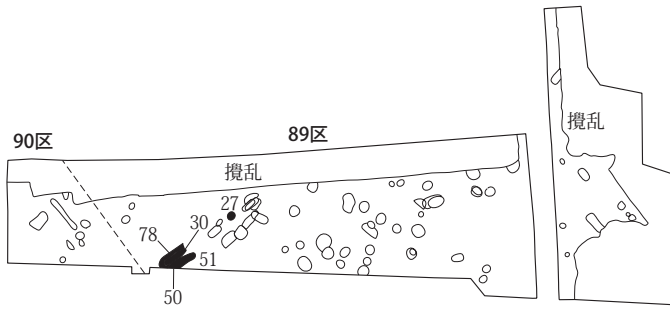
2 黒褐色土(7.5YR3/2) ややシルト質。炭化物粒少量含みHr-FP粒僅かに含む。

3 褐色シルト質土(7.5YR4/3) Hr-FP粒と炭化物粒を僅かに含む。

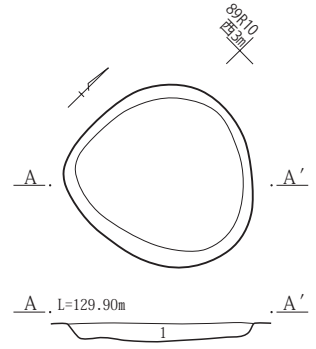
4 褐色土(7.5YR4/6) 炭化物粒僅かに含む。



第130図 26・28・29・31・32・76号土坑



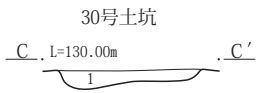
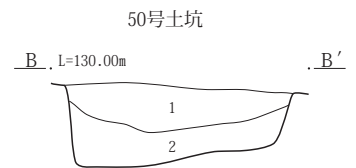
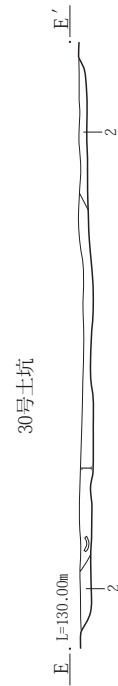
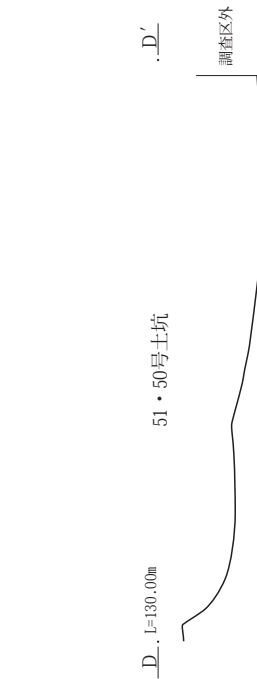
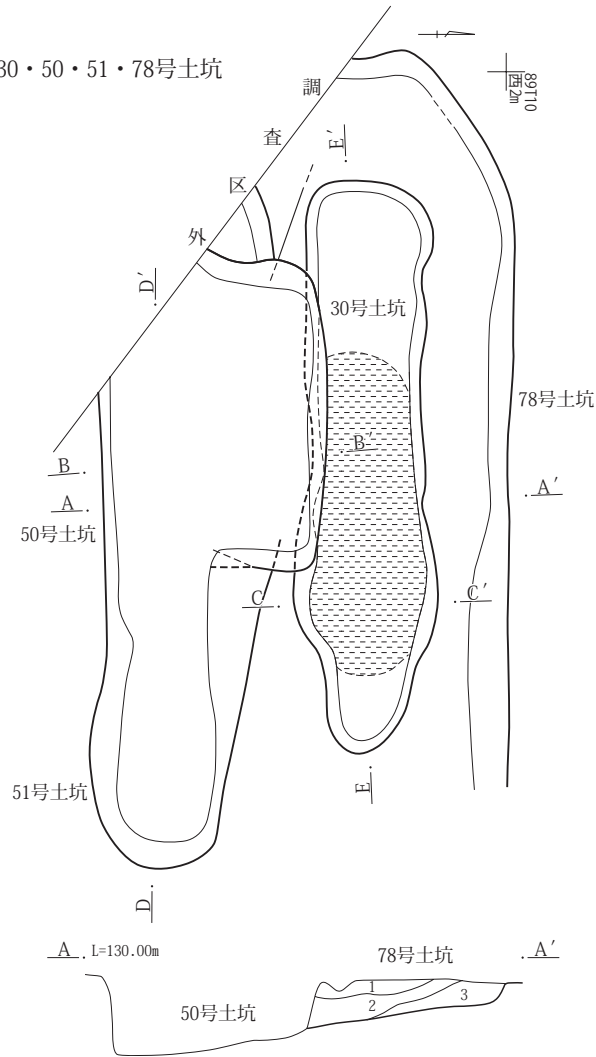
27号土坑



[27号土坑覆土]

- 1 褐色土(7.5YR4/3) Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。

30・50・51・78号土坑



[78号土坑覆土]

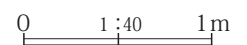
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 締まる。Hr-FP粒含み、炭化物粒僅かに含む。
- 2 褐色土(7.5YR4/4) ややシルト質。Hr-FP粒含み、炭化物粒を極僅かに含む。黄褐色シルト(基本土層11層相当)少量含む。
- 3 褐色シルト質土(7.5YR4/6) 地山黄褐色シルト(基本土層11層相当)主体で上位の1・2層土との混土。

[30号土坑覆土]

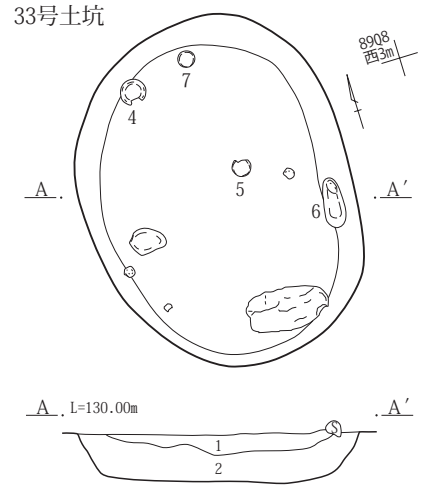
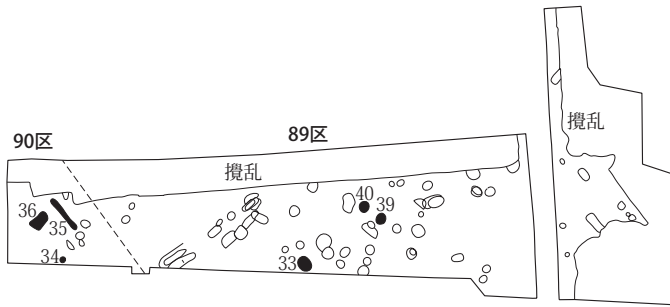
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 多くの炭化物粒と少量の焼土粒、僅かなHr-FP粒を含む。
- 2 褐色土(7.5YR4/3) Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。焼土粒の混入は殆どない。

[50号土坑覆土]

- 1 褐色土(7.5YR4/6) やや砂質。Hr-FP粒と少量の炭化物粒含む。
- 2 灰褐色土(7.5YR4/2) 砂質土とシルト質の混土だが砂質が強い。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。

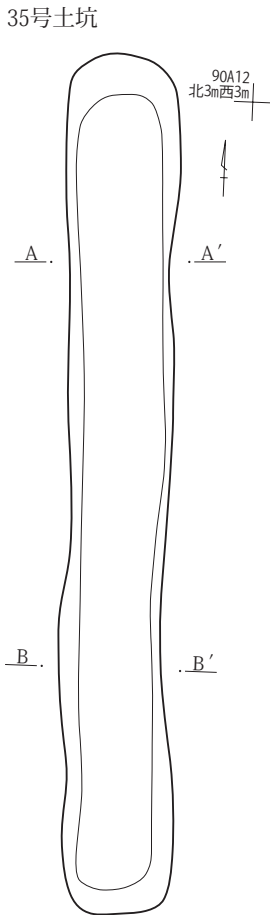


第131図 27・30・50・51・78号土坑



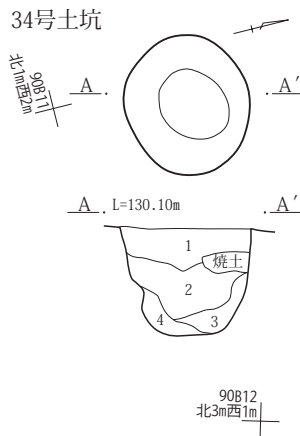
[33号土坑覆土]

- 1 褐色土(7.5YR4/6) ややしと質。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。
- 2 明褐色土(7.5YR5/6) 1層土と黄褐色シルト(基本土層11層相当)の混土。同系色の粘土がブロック状に混ざっていて粘性痕ある土。



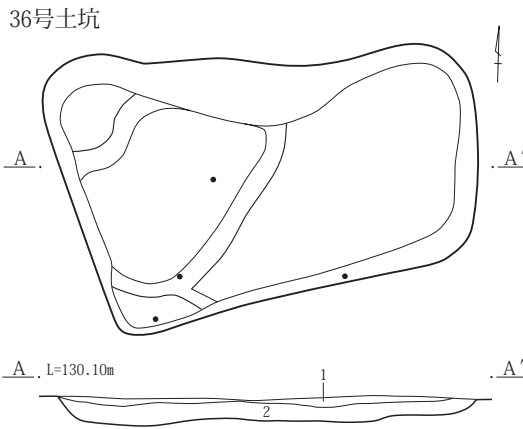
[35号土坑覆土]

- 1 褐色土(7.5YR4/4) Hr-FP、黒色ブロック含む。上部は砂質。下部はやや粘質。
- 1' 1層に類似。粘性がより強くなる。



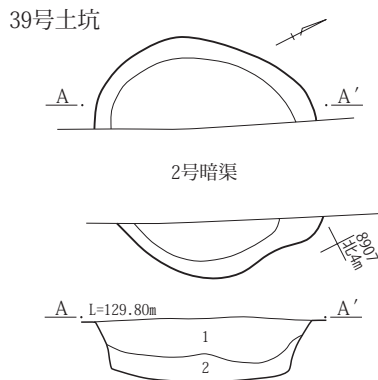
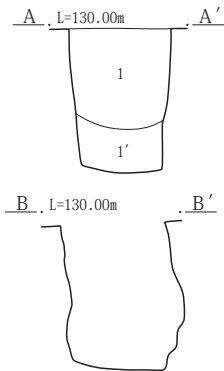
[34号土坑覆土]

- 1 灰褐色土(7.5YR4/2) As-B混入。締まる。Hr-FP全体に含む。
- 2 灰褐色土(7.5YR5/2) ややしと質。Hr-FPとAs-B僅かに見られ、上面に焼土と灰化物僅かに入る。
- 3 灰褐色土(7.5YR5/2) やや粘性あり。ロームブロック多く含む。
- 4 黒色粘質土(7.5YR5/2) As-C混土層。



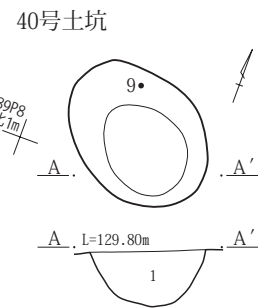
[36号土坑覆土]

- 1 褐灰色土(7.5YR4/1) 炭化物を含む。酸化鉄化する部分があり。
- 2 にぶい褐色土(7.5YR6/3) Hr-FP粒と炭化物含み、砂質で褐灰色の酸化鉄ブロックを疎らに含む。



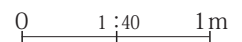
[39号土坑覆土]

- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) 締まる。やや砂質。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。
- 2 暗褐色土(7.5YR3/3) ややしと質。



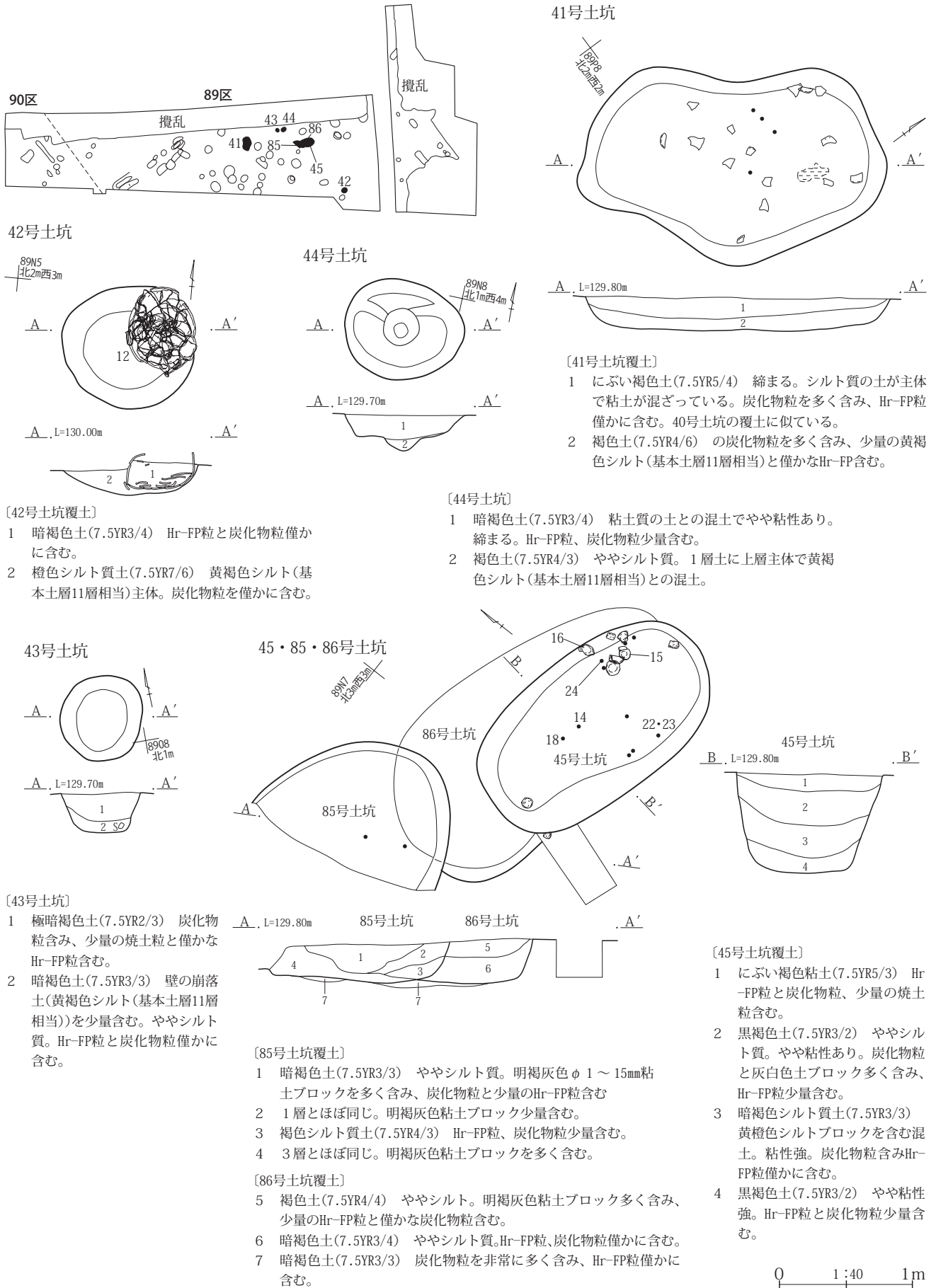
[40号土坑覆土]

- 1 にぶい褐色土(7.5YR5/4) シルト質土と粘土の混土。締まる。炭化物粒少量含み、Hr-FP粒僅かに含む。

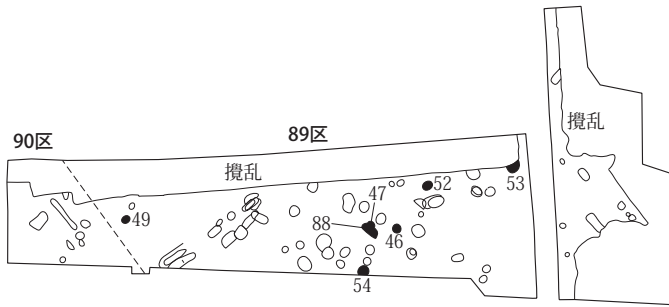


第132図 33・34・35・36・39・40号土坑

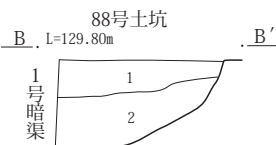
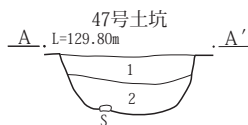
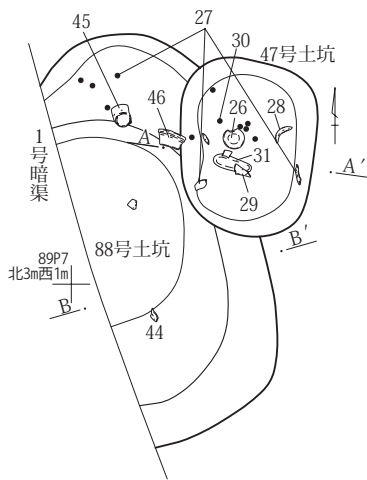
第4章 発見された遺構と遺物



第133図 41・42・43・44・45・85・86号土坑



47・88号土坑



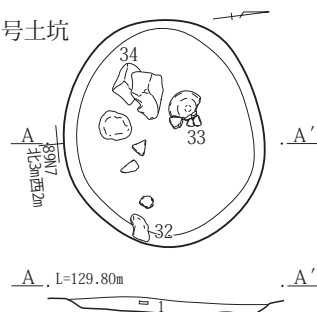
[47号土坑覆土]

- 1 橙色シルト質土(7.5YR6/6) Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
- 2 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/3) 炭化物粒を含み、Hr-FP粒僅かに含む。

[88号土坑覆土]

- 1 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/3) Hr-FP粒ふみ、炭化物粒僅かに含む。
- 2 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/3) 1層にほぼ同じだがHr-FP粒が少ない。

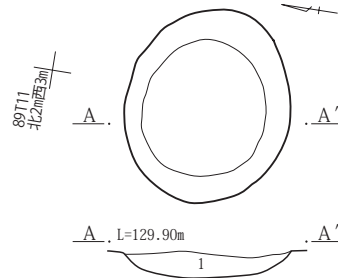
52号土坑



[52号土坑覆土]

- 1 灰褐色土(7.5YR4/2) 粘性強。褐灰色土(7.5YR6/1)の粘土ブロック含む混土。炭化物粒を多く含み、Hr-FP粒僅かに含む。

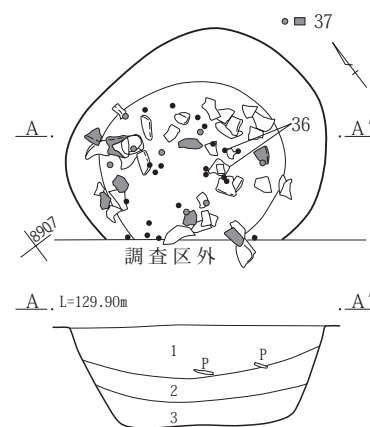
49号土坑



[49号土坑覆土]

- 1 明褐色土(7.5YR6/5) ややシルト質。黄褐色シルト(基本土層11層相当)だが明褐色粘土(7.5YR5/6)が細かいブロック状に混入。Hr-FP粒少量、炭化物粒僅かに含む。

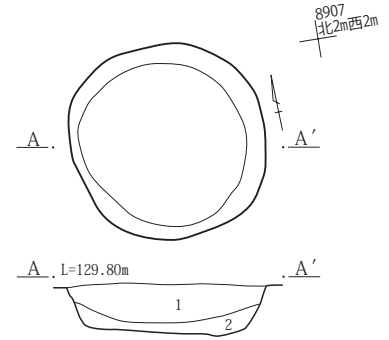
54号土坑



[54号土坑覆土]

- 1 暗褐色土(7.5YR4/3) やや締まる。Hr-FP粒僅かに含む。
- 2 褐色土(7.5YR4/4) ややシルト質。炭化物粒を多く含み、Hr-FP粒僅かに含む。
- 3 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/4) 2層土に黄褐色シルト(基本土層11層相当)入る混土。

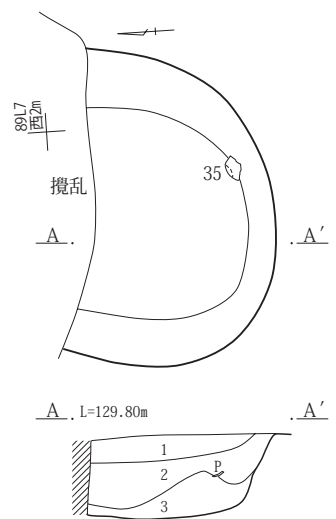
46号土坑



[46号土坑覆土]

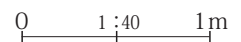
- 1 暗褐色土(7.5YR3/4) やや砂質。FP軽石粒を含み、少量の炭化物粒を含む。基本土層8層土主体。
- 2 褐色土(7.5YR4/3) ややシルト質。上層主体だが13層が粒状に混ざっている。

53号土坑

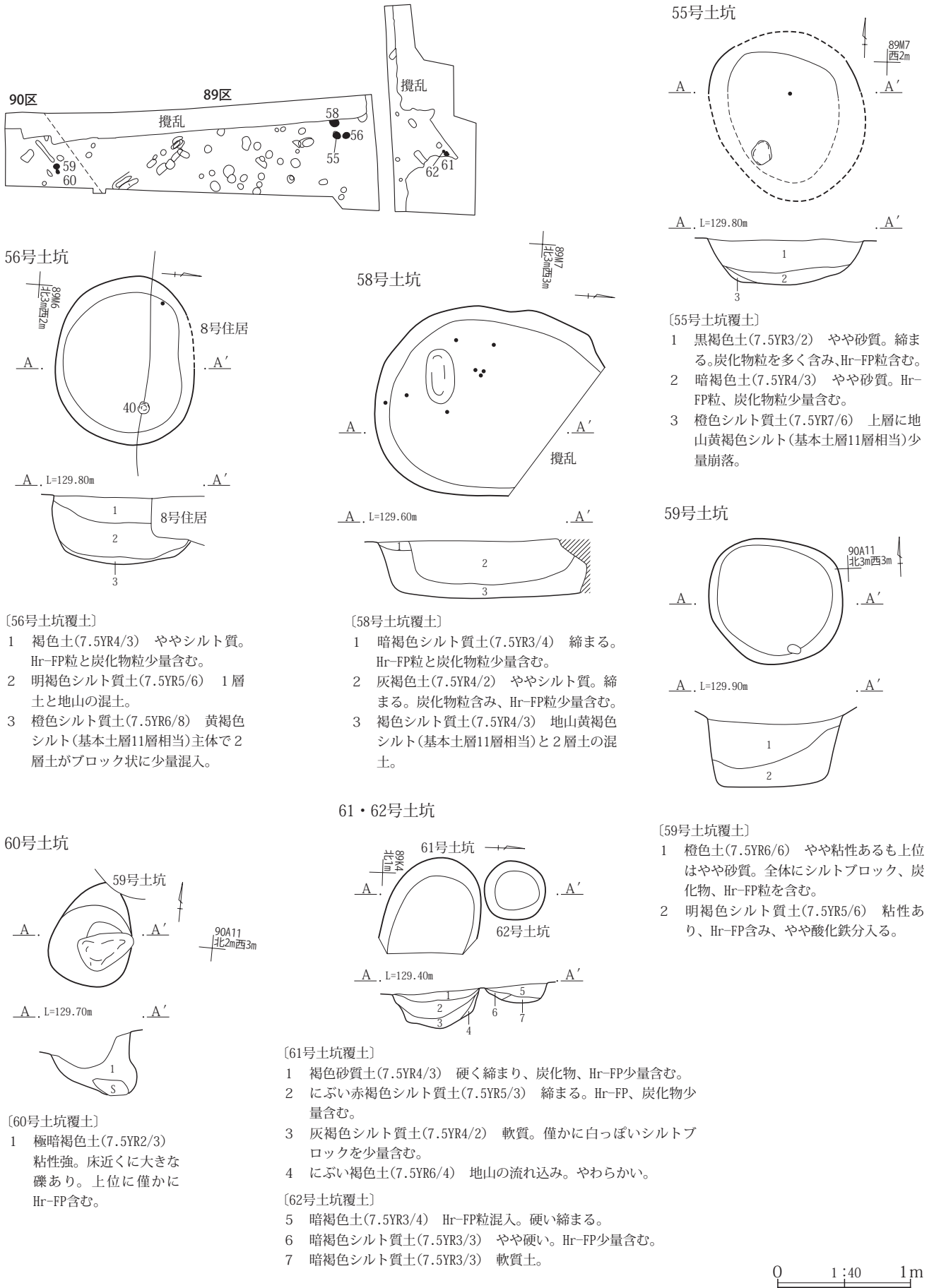


[53号土坑覆土]

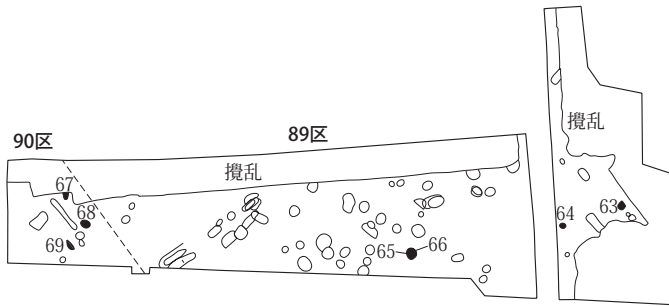
- 1 黒褐色土(7.5YR3/2) 基本土層8層土主体。やや砂質。Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。
- 2 褐色土(7.5YR4/3) ややシルト質。1層に地山黄褐色シルト(基本土層11層相当)入る混土。
- 3 橙色シルト質土(7.5YR6/6) 地山黄褐色シルト(基本土層11層相当)主体。壁の崩落などによる堆積。炭化物粒少量含む。



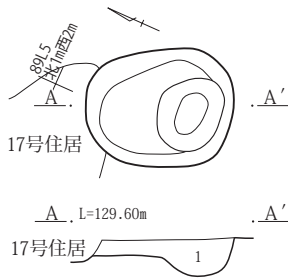
第134図 46・47・49・52・53・54・88号土坑



第135図 55・56・58・59・60・61・62号土坑



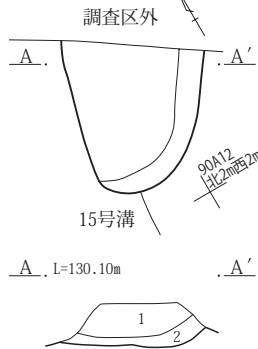
64号土坑



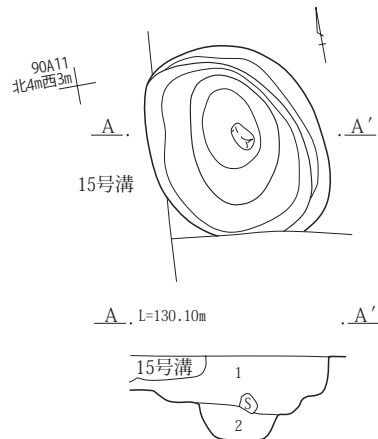
[64号土坑覆土]

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) 砂質土を含むがやや粘性があり。夾雑物なし。

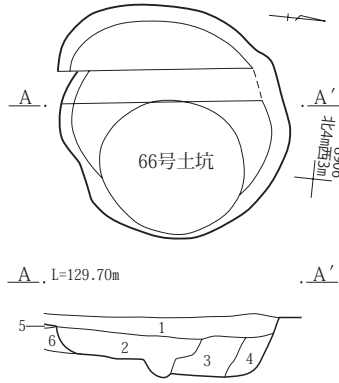
67号土坑



68号土坑



65号土坑



[65号土坑覆土]

- 1 灰褐色土(7.5YR4/2) ややシルト質。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。
- 2 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) Hr-FP粒と炭化物粒僅かに含む。
- 3 黒褐色土(7.5YR3/1) ややシルト。As-C混黒色土と黄褐色シルト(基本土層11層相当)の混土。
- 4 褐色土(7.5YR4/4) 黄褐色シルト(基本土層11層相当)との混土。Hr-FP粒、炭化物粒殆ど含まない。
- 5 灰褐色土(7.5YR4/2) ややシルト。Hr-FP粒と炭化物粒少量含む。
- 6 暗褐色土(7.5YR3/3) ややシルト質。硬く締まる。黄褐色シルトが粒状、ブロック状に入る。焼土ブロック、炭化粒多く含み、Hr-FP・炭化物粒少量含む。

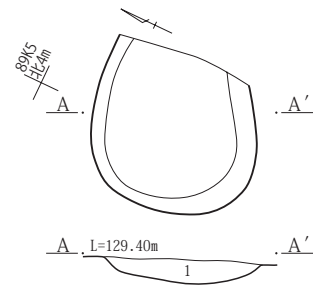
[67号土坑覆土]

- 1 褐色シルト質土(7.5YR4/3) 締まる。Hr-FP粒少量含み、炭化物粒僅かに含む。
- 2 明褐色シルト質土(7.5YR4/3) 締まりなし。Hr-FP粒僅かに含む

[68号土坑覆土]

- 1 褐色土(10YR4/4) シルト質が基本。Hr-FP、鉄分ブロックと炭化物少量入る。中央部に角閃石安山岩、床面には角礫あり。
- 2 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) やや粘性あり。As-C混入。

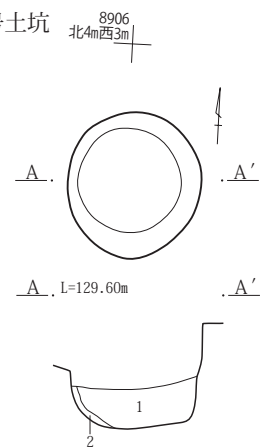
63号土坑



[63号土坑]

- 1 褐色シルト質土(7.5YR4/3) サラサラして軟質。Hr-FP少量含む。

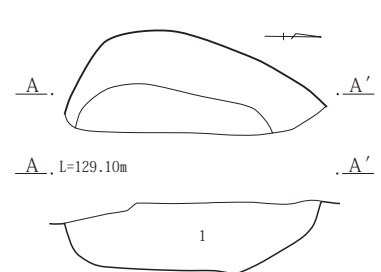
66号土坑



[66号土坑覆土]

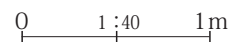
- 1 暗褐色シルト質土(7.5YR3/4) Hr-FP粒、炭化物粒少量含む。
- 2 1層土と黄褐色シルト(基本土層11層相当)の混土。

69号土坑

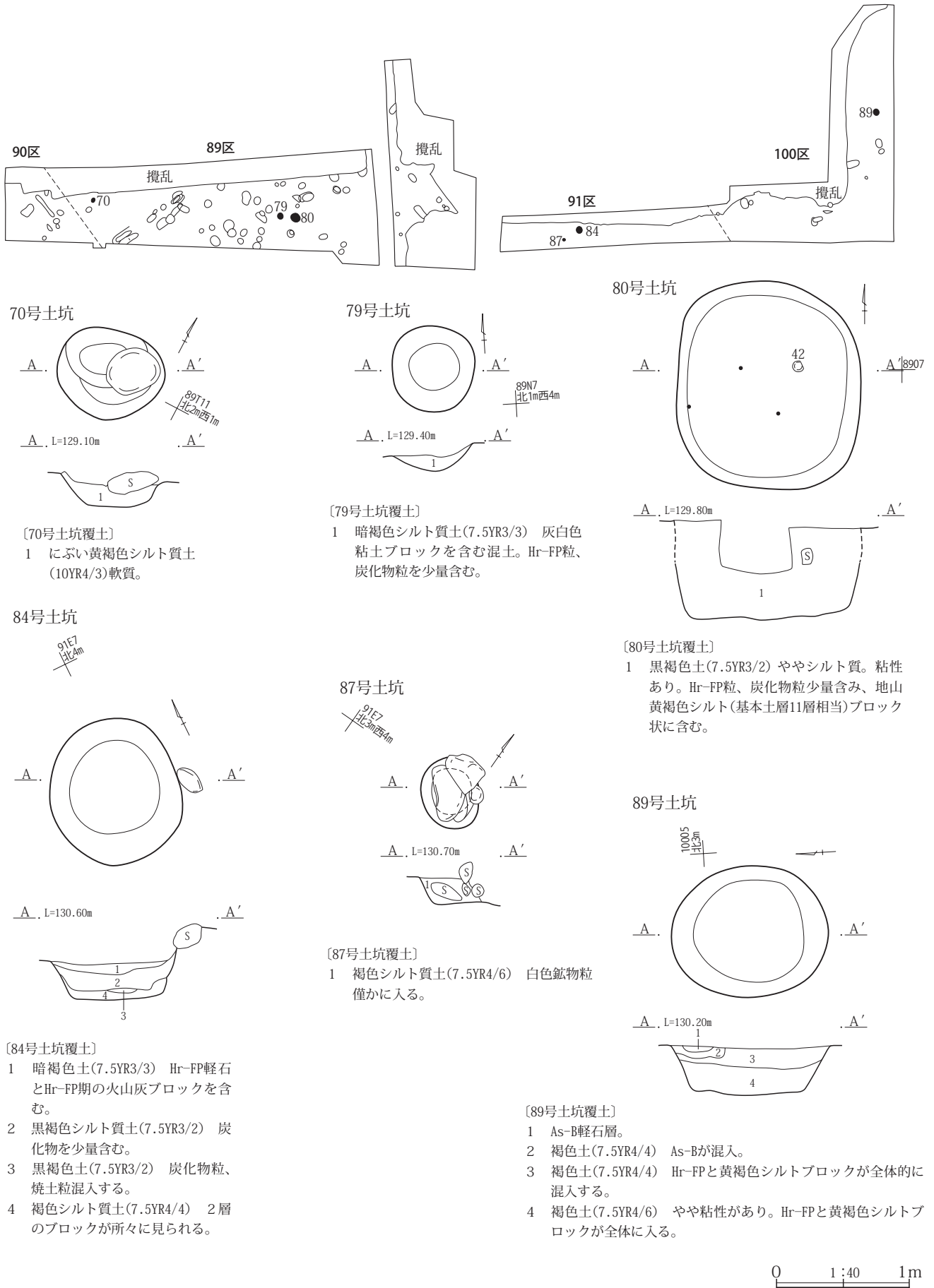


[69号土坑覆土]

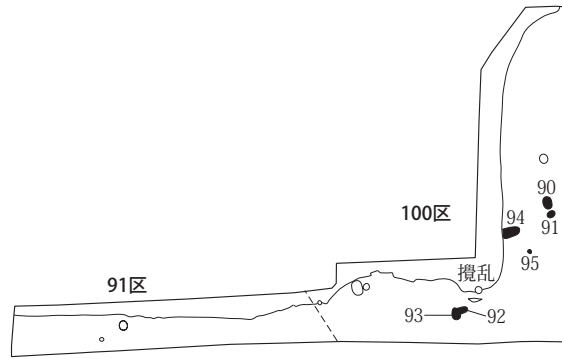
- 1 にぶい黄褐色シルト質土(7.5YR4/3) 炭化物粒、焼土粒、焼土ブロック、Hr-FP含む。



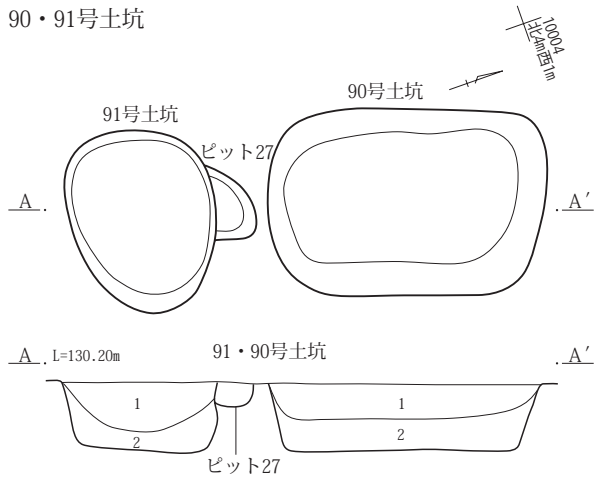
第136図 63・64・65・66・67・68・69号土坑



第137図 70・79・80・84・87・89号土坑



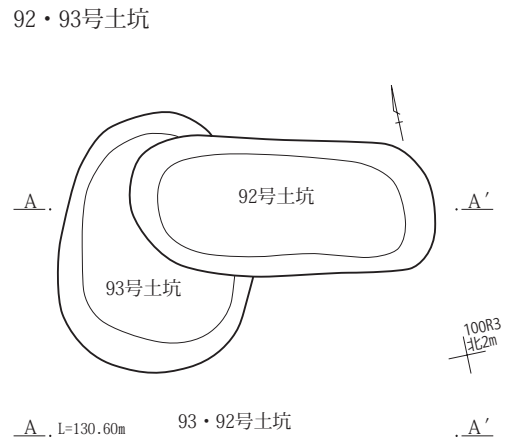
90・91号土坑



[90・91号土坑覆土]

- 1 褐色土(7.5YR4/4) Hr-FPと黄褐色シルトブロックが全面に入る。
- 2 褐色土(7.5YR4/6) やや粘性あり。Hr-FPと黄褐色シルトブロックが全体に入る。

92・93号土坑



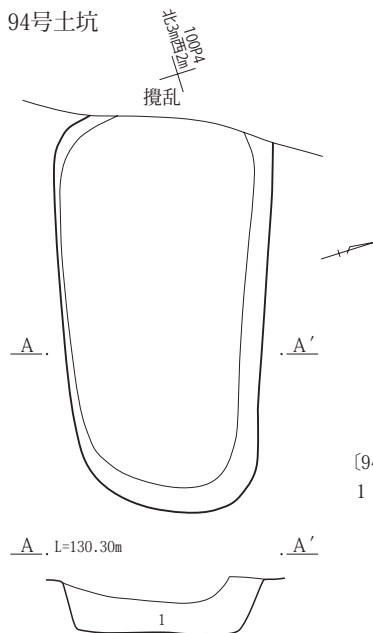
[92号土坑覆土]

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) 細砂粒。白色鉱物と橙色シルトブロック含む。

[93号土坑覆土]

- 2 褐色シルト質土(7.5YR4/6) 白色鉱物粒と炭化物粒を含み黄褐色のシルトブロックが僅かに見られる。

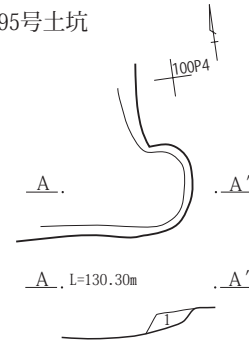
94号土坑



[94号土坑覆土]

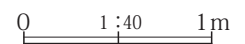
- 1 褐色シルト質土(7.5YR4/4) 白色鉱物粒、Hr-FP、橙色土(7.5YR6/8)シルトブロック含む。

95号土坑

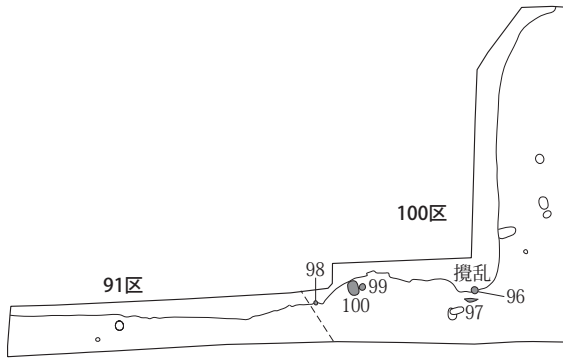


[95号土坑覆土]

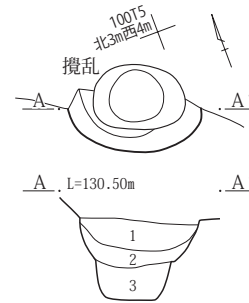
- 1 暗褐色シルト質土(7.5YR3/3) 締まりあり。Hr-FP、黄橙色土(7.5YR7/8)シルトブロック含む。



第138図 90・91・92・93・94・95号土坑

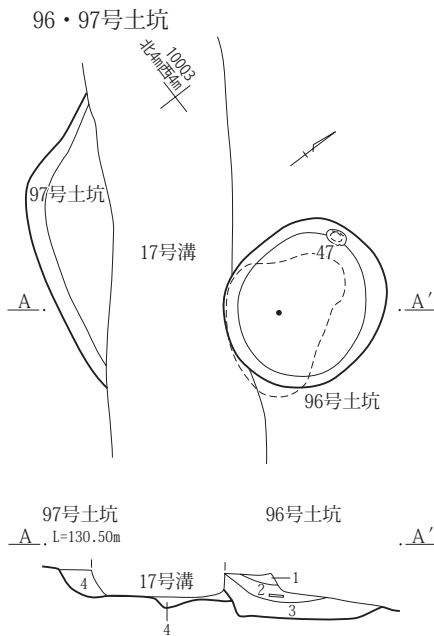


98号土坑



〔98号土坑覆土〕

- 1 褐色シルト質土(7.5YR4/4) しっかりと締まる。Hr-FP混入し、一部に黄褐色ブロック入る。
- 2 にぶい褐色シルト質土(7.5YR5/3) 白色鉱物粒を僅かに含む。
- 3 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) 粘性あり。白色鉱物粒Hr-FP少量入り、やや粘性ある黄褐色シルトブロック含む。



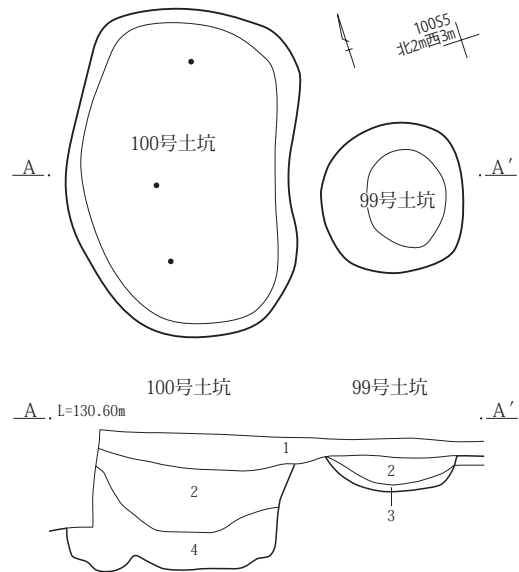
〔96号土坑覆土〕

- 1 褐色シルト質土(7.5YR4/4)
- 2 褐灰色シルト質土(7.5YR4/1) シルト質土に炭化物粒が互層に堆積する。Hr-FP少量入る。
- 3 黄褐色シルト質土(10YR5/6) Hr-FPと酸化鉄ブロック少量入る。

〔97号土坑覆土〕

- 4 褐色シルト質土(7.5YR4/2) 締まる。Hr-FPと黄褐色シルトブロックを少量含む。

99・100号土坑



〔土坑廃絶後の土層〕

- 1 褐色土(7.5YR4/4) As-B僅かに含む。白色鉱物粒を含み、橙色シルト質土ブロックを少量含む。

〔99・100号土坑覆土〕

- 2 灰褐色細砂粒土(7.5YR4/2) 白色鉱物粒と炭化物粒少量含む。
- 3 黒褐色シルト質土(7.5YR3/2) 白色鉱物粒含む。ガラガラする。
- 4 褐色土(7.5YR4/3) やや粘性あり。締まる。白色鉱物粒含み、焼土ブロックと炭化物粒を僅かに含む。黄褐色シルトブロックが斑状に入る。

0 1:40 1m

第139図 96・97・98・99・100号土坑

101号土坑(2号土壙墓)(第140図、PL.36・49)

位置 89区T-10～90区A-10グリッド。89区・90区境の調査区南部、仮2区西部に位置する。

方位 N-36°-E

規模 長さ129cm、幅96cm、深さ22cm

形状・構造 プランは楕円形を呈し、掘削底面は平底状を呈する。

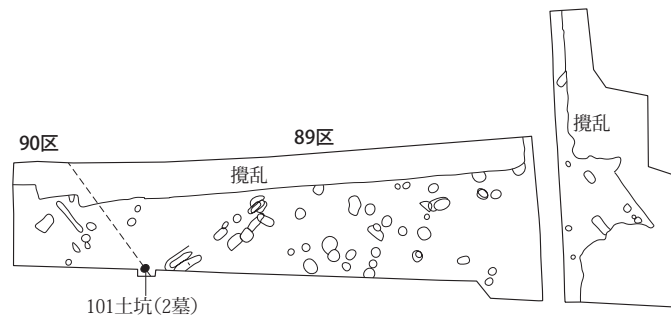
埋没土 褐色土、灰褐色土で覆われる。

重複 本土坑も単独で在り、他遺構との重複は見られなかった。

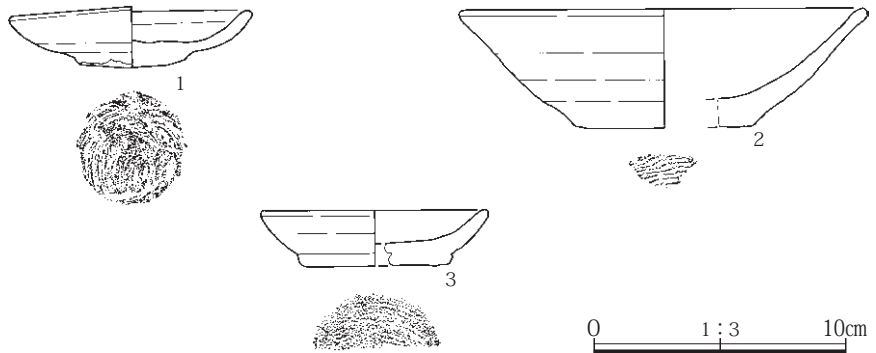
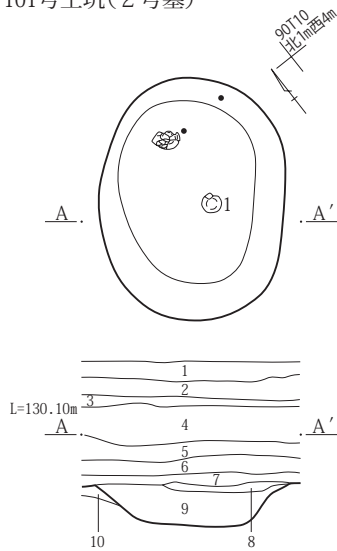
出土遺物 須恵器杯(1～3)が出土した他、僅かな土師

器・須恵器片が出土したに過ぎなかった。

所見 本遺構は上位に炭化物が遺存し、副葬品と思しき須恵器碗が出土していることなどから茶毘所の可能性を考慮して墓壙として調査されたが、明確な墓や墓制に伴う遺構としての証左は確認されていない。また本土坑の時期は出土遺物から推して、概ね11世紀の所産と認識されるが、遺構の規模は所謂中世土壙墓や同時期の火葬土坑と認識されるものの、当該以降の確認される時期(14～17世紀)とかい離しており、この点からも土壙墓、或いは茶毘所としての可能性は低いものと判断される。



101号土坑(2号墓)



101号土坑(2号墓)

[墓壙廃絶後の土層]

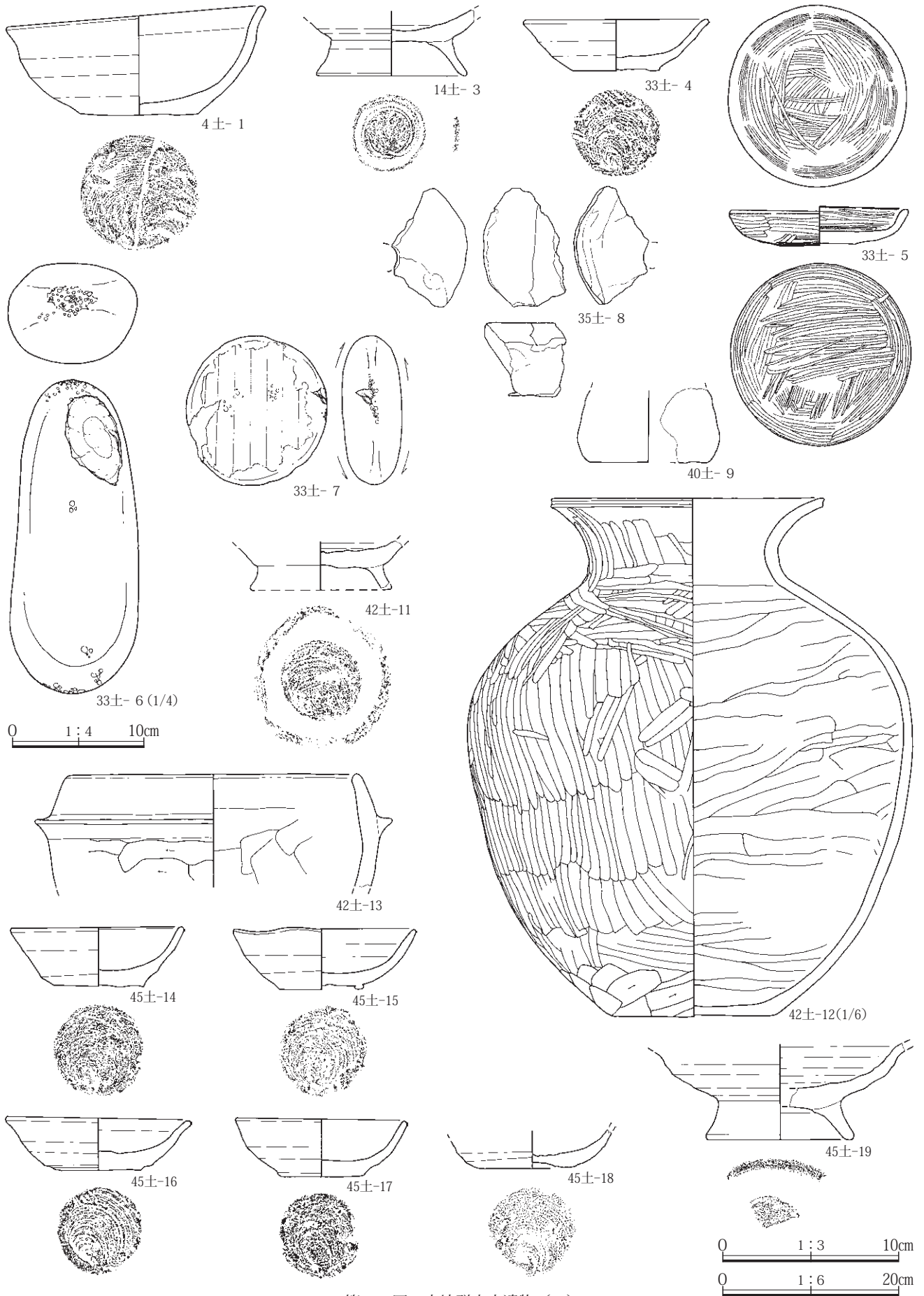
- 1 現代の水田 表土。
- 2 現代の水田 耕作土。
- 3 現代の水田 床土(褐色土)。
- 4 にぶい褐色土(7.5YR5/3) Hr-FP含む。
- 5 暗褐色土(10YR3/3)。
- 6 暗褐色砂質土(10YR3/4) As-B含む。

[101号土坑覆土]

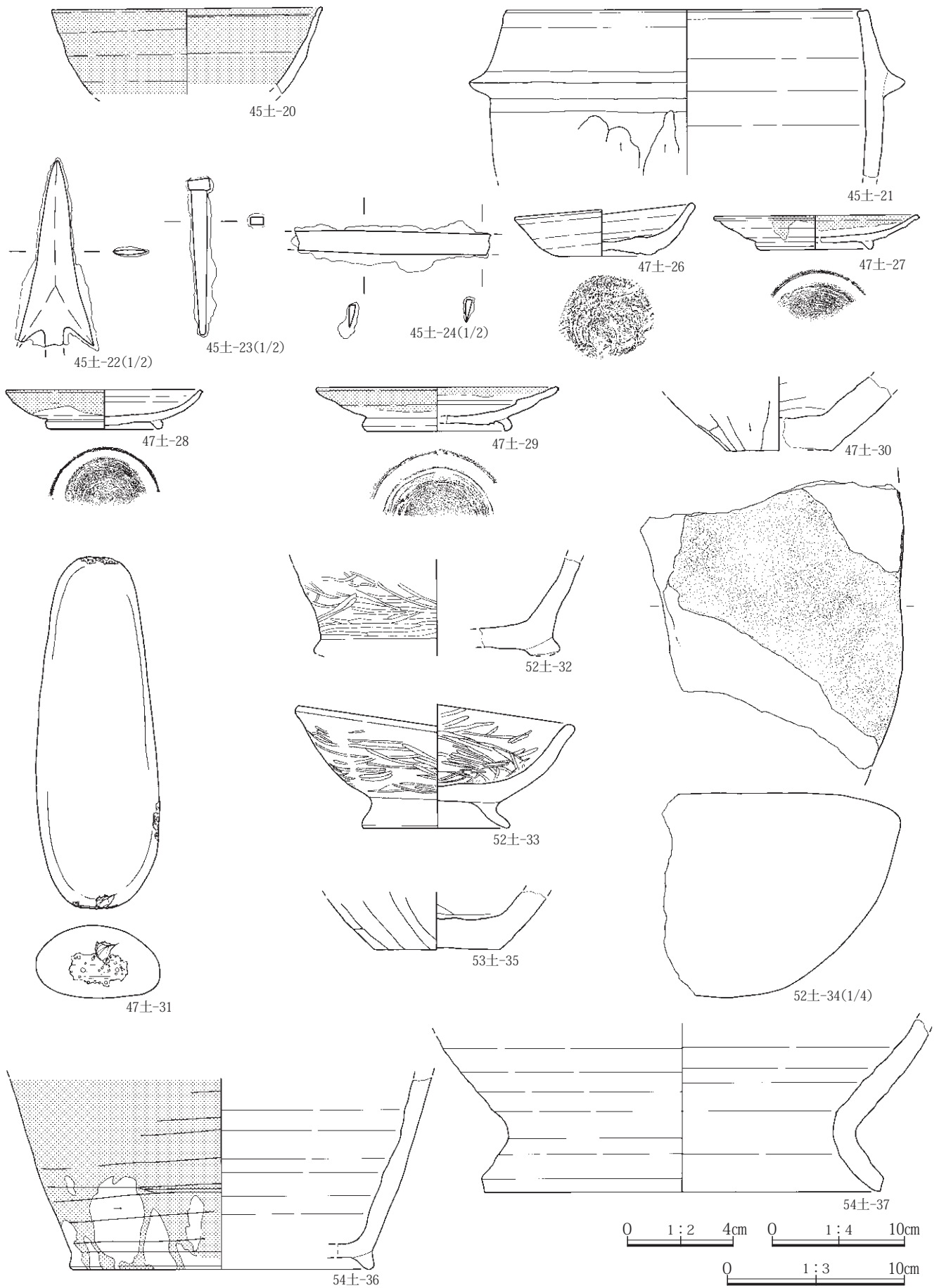
- 7 暗褐色砂質土(10YR3/4) As-Bを多く含む。
- 8 褐色シルト質土(10YR4/3) 上位に少量の灰白色シルトブロックと僅かなHr-FPに含む。下面是灰化物が多く出土する。
- 9 8層とほぼ同じだが、Hr-FPと灰白色シルトブロックが多い。
- 10 褐灰色砂質土(5YR5/1) Hr-FPを含む。

0 1:40 1m

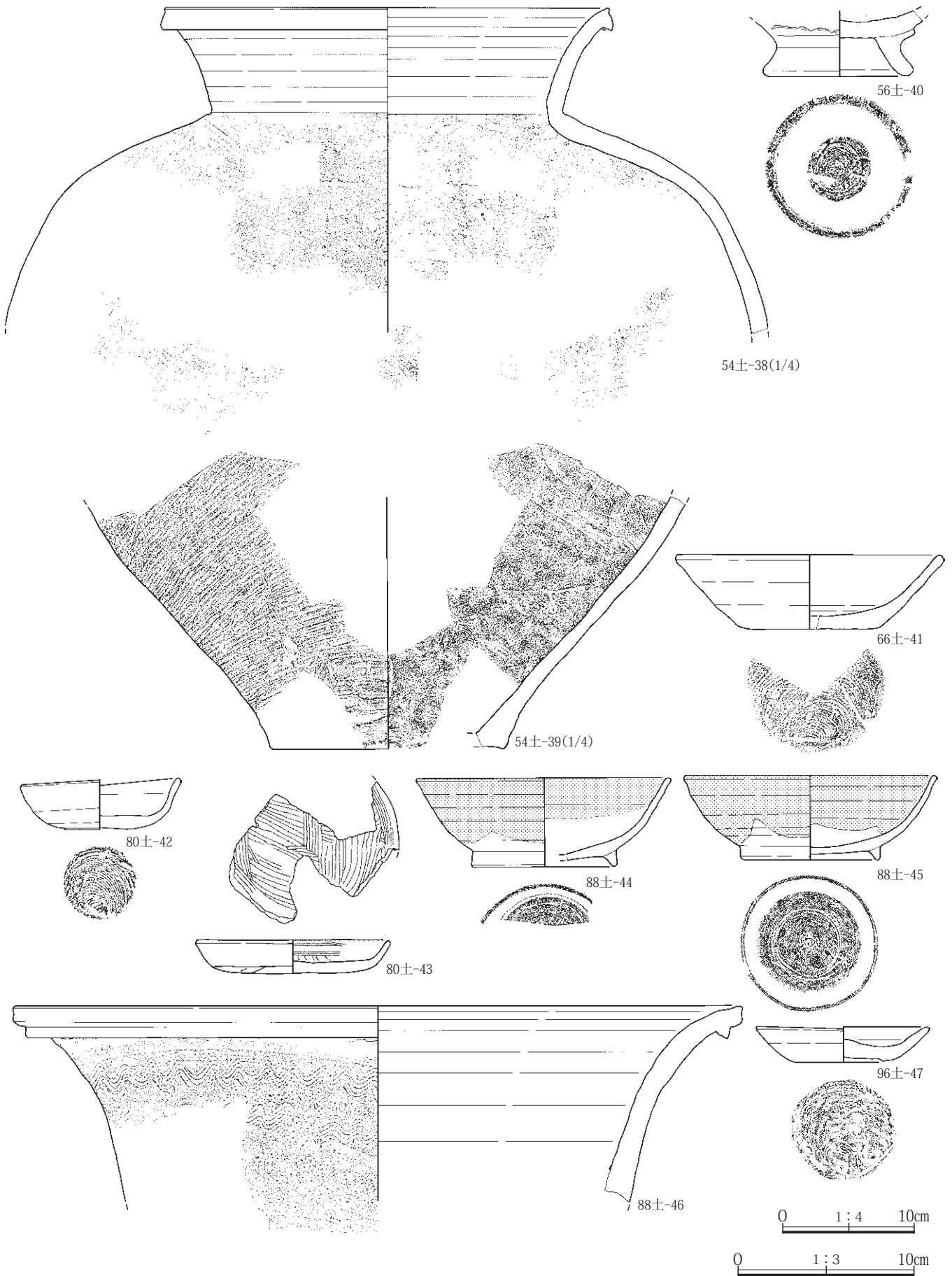
第140図 101号土坑と出土遺物



第141図 土坑群出土遺物(1)



第142図 土坑群出土遺物(2)



第143図 土坑群出土遺物(3)

(2面)

7 ピット

89区のピット群(第144・145図、PL.36・37)

位置 表5参照。89区2面に於いては1～23号ピットの23基のピットを確認、調査した。これらのピットは10～14号ピットがP7～R8グリッド付近に集中し、15～17号ピットが89区西端部に散布する以外は89区東部の仮1区の調査範囲内にある。また現時点で建物の配置を確認することはできなかった。

方位 表5参照。

規模 表5参照。

形状・構造 プランは3・17・22号ピットが楕円形を呈する以外は円形を呈する。また掘削底面は4・14・15・22号ピットが平底、10・11・19・20号ピットが尖底を呈する以外は平底を呈する。

埋没土〔個々の平断面図に記載〕。

重複 8号ピットが6号土坑と重複して8号ピットが古い。また9・18・23号ピットが7号溝、13号ピットが9号住居と重複するが、どれも新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 何れのピットからも遺物の出土は見られなかった。

所見 各ピット共に掘削意図は特定できなかった。またその時期も確認面から推して、凡そ古代から中世の所産として把握できるに過ぎなかった。

100区のピット群(第145図、PL.37)

位置 表5参照。100区2面に於いては26～29号ピットの4基のピットを確認、調査した。これらのピットはN5～O4グリッドに集中してある。また建物の配置を抽出することはできなかった。

方位 表5参照。

規模 表5参照。

形状・構造 プランは全て円形を呈する。また掘削底面は26・27号ピットが平底、28・29号ピットが丸底を呈する。

埋没土〔個々の平断面図に記載〕。

重複 27号ピットが91号土坑と重複するが新旧関係は特定できなかった。

出土遺物 何れのピットからも遺物の出土は見られなかった。

所見 各ピット共に掘削意図は特定できなかった。またその時期は29号ピットが覆土に多量のAs-B軽石を含むことから12世紀に近い時期の所産である可能性を有するが、他のピットは確認面から推して、凡そ古代から中世の所産として把握できるに過ぎない。

表5 2面ピット一覧

No.	位置	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	方位	挿図	写真
1	89K5	円形	0.21	0.20	0.09	-	144	36
2	89K5	円形	0.21	0.20	0.09	-	144	36
3	89K5	楕円形	0.27	0.21	0.13	N-50°-W	144	36
4	89K5	円形	0.25	0.24	0.24	-	144	36
5	89K4	円形	0.28	0.28	0.14	-	144	36
6	89K4	円形	0.26	0.25	0.10	-	144	36
7	89K5	円形	0.30	0.28	0.16	-	144	36
8	89K4	円形	0.28	0.24	0.18	-	144	37
9	89L4	円形	0.26	0.23	0.27	-	144	37
10	89Q8	円形	0.46	0.42	0.22	-	144	37
11	89Q8	円形	0.44	0.39	0.48	-	144	37
12	89R8	円形	0.45	0.40	0.25	-	144	37
13	89P7	円形	0.39	0.25	0.35	-	144	37
14	89R8	円形	0.42	0.39	0.64	-	144	37
15	89T11	円形	0.32	0.27	0.40	-	145	37
16	89T10	円形	0.39	0.36	0.41	-	145	37
17	89S9	楕円形	0.47	0.41	0.32	N-70°-E	145	37
18	89K4	円形	0.25	0.25	0.21	-	145	-
19	89K5	円形	0.27	0.24	0.11	-	145	-
20	89K5	円形	0.38	0.36	0.18	-	145	-
21	89K5	円形	0.20	0.16	0.13	-	145	-
22	89L5	楕円形	0.34	0.27	0.15	N-16°-E	145	-
23	89L4	円形	0.24	0.23	0.36	-	145	-
26	100O4	円形	0.45	0.44	0.08	-	145	37
27	100O4	円形	0.39	0.21	0.08	-	145	37
28	100N5	円形	0.26	0.26	0.09	-	145	37
29	100O4	円形	0.26	0.21	0.03	-	145	37

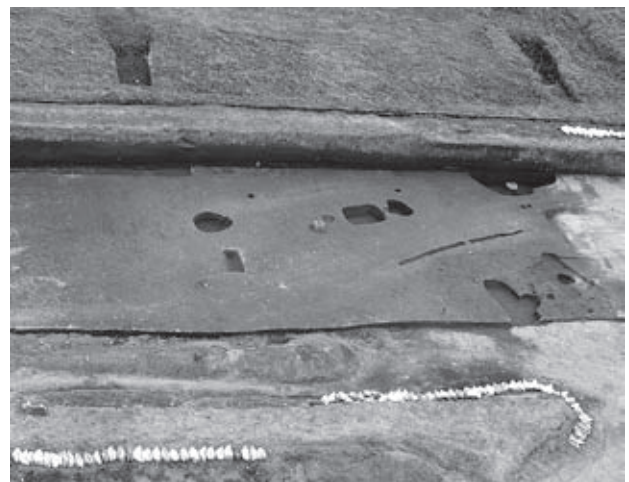
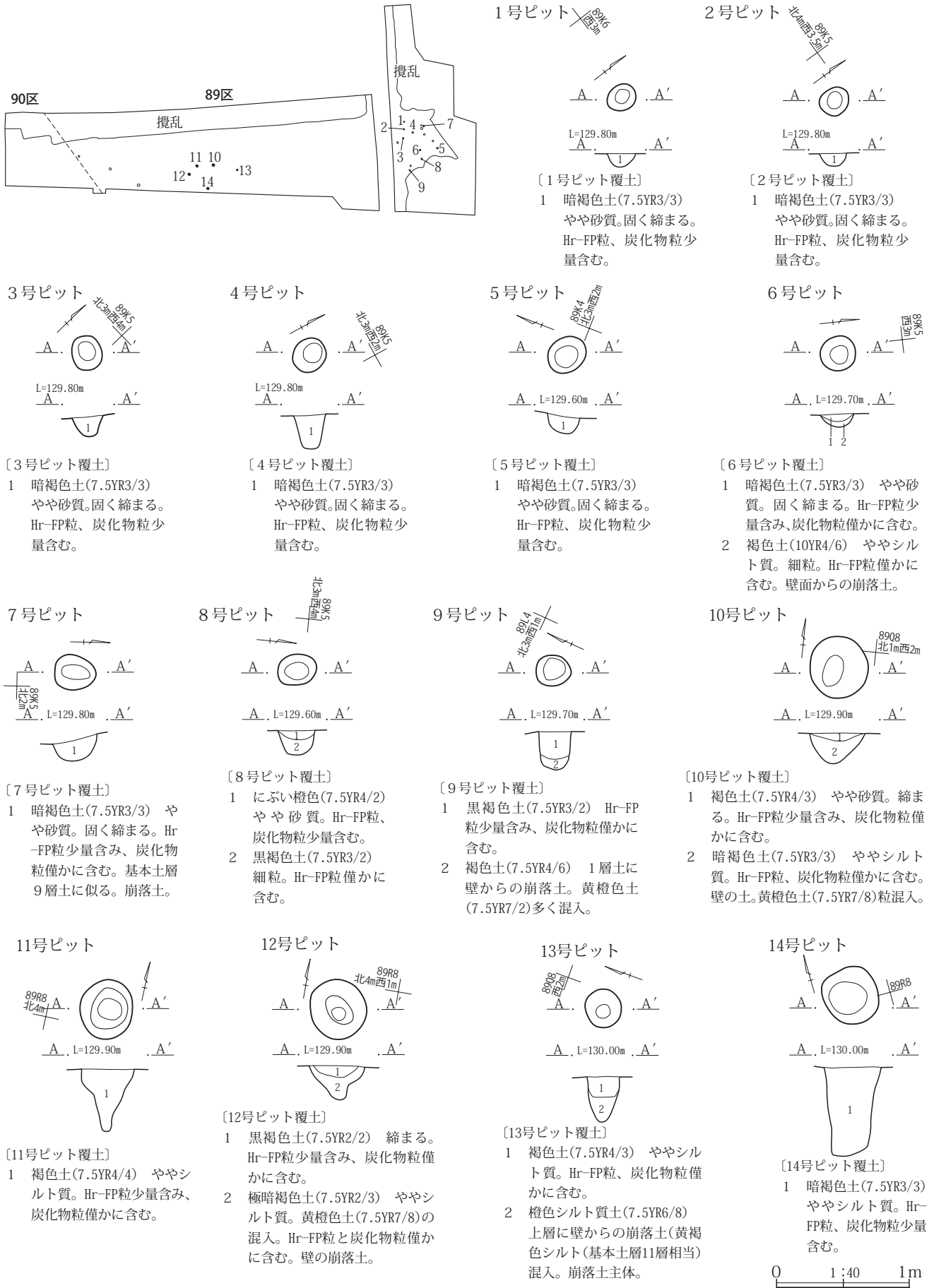
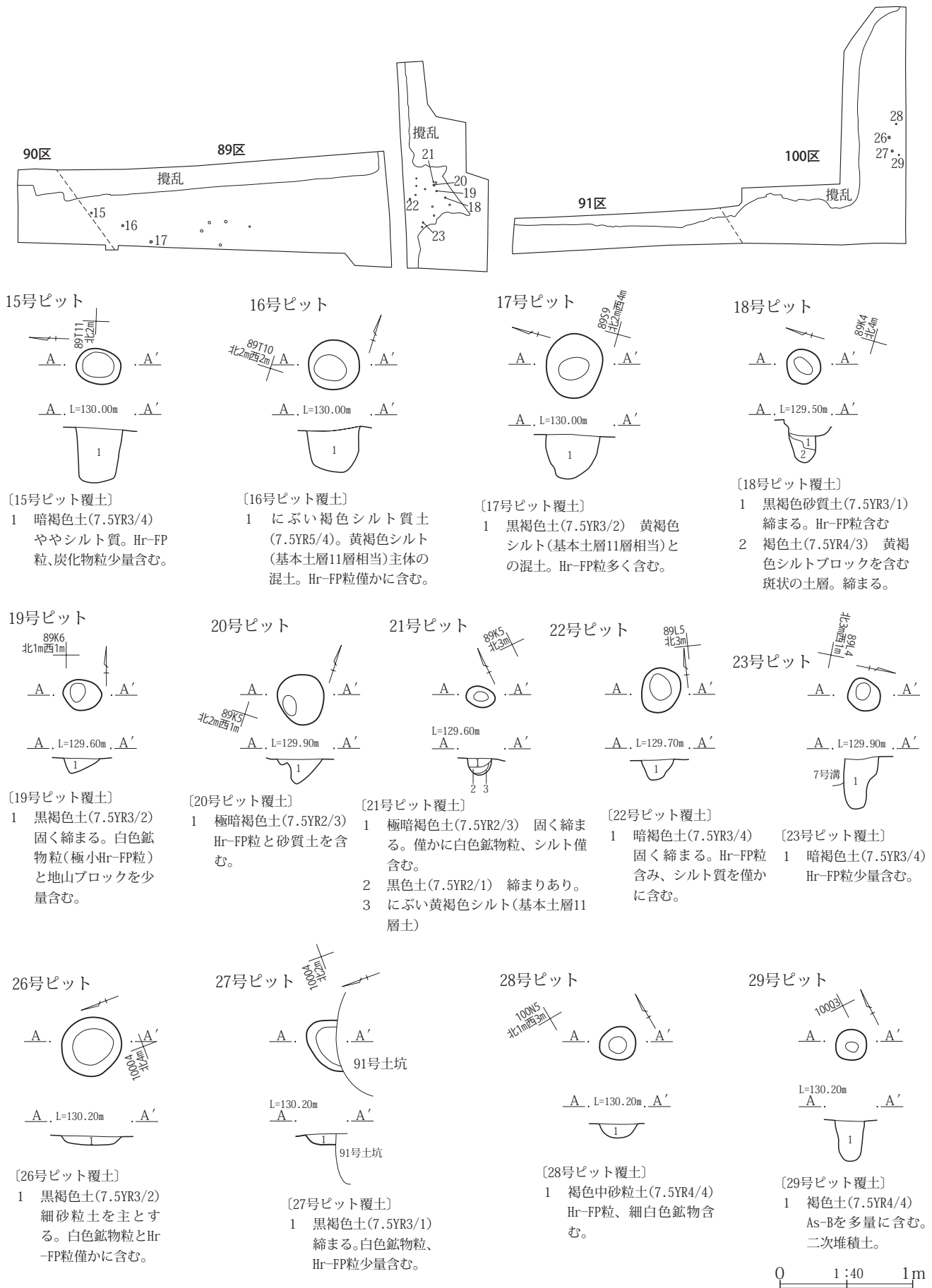


写真2 100区東部ピット群

第4章 発見された遺構と遺物



第144図 1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14号ピット



第145図 15・16・17・18・19・20・21・22・23・26・27・28・29号ピット

(2面)

8 畠

1号畠(第146図、PL.38)

位置 89区I-9~J-8グリッド。89区東部、仮1区北部の調査区西壁際に位置する。

方位 N-17°-W

規模 全体 残存長5.35m、残存幅5.52m

サク(畝間)・サク間(畝幅)は表6参照

形状・構造 本畠は7条のサク(東からサク1、サク2のように番号を付した)から成るが、北東側は攪乱に壊され、北西側は調査区外に出ていて全容は確認できなかった。

サク(畝間)は概ね北北西-南南東方向に掘削され、サ

クの幅は20~36cm、平均31.33cmであり、畝幅(サクとサクの間)は42~88cm、平均57.50cmを測る。しかし畝幅はサク3、即ちJラインを境にその幅に違いがあり、Jライン以東の畝幅は59~88cm、平均71.67cm、以西は42~46cm、平均43.39cmを測り、Jラインの東側に比して西側は狭くなっている。

埋没土 Hr-FA火山灰等で覆われている。

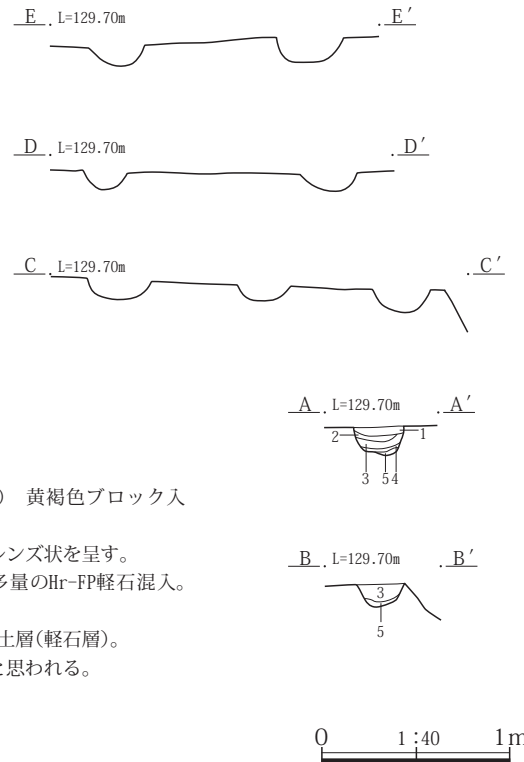
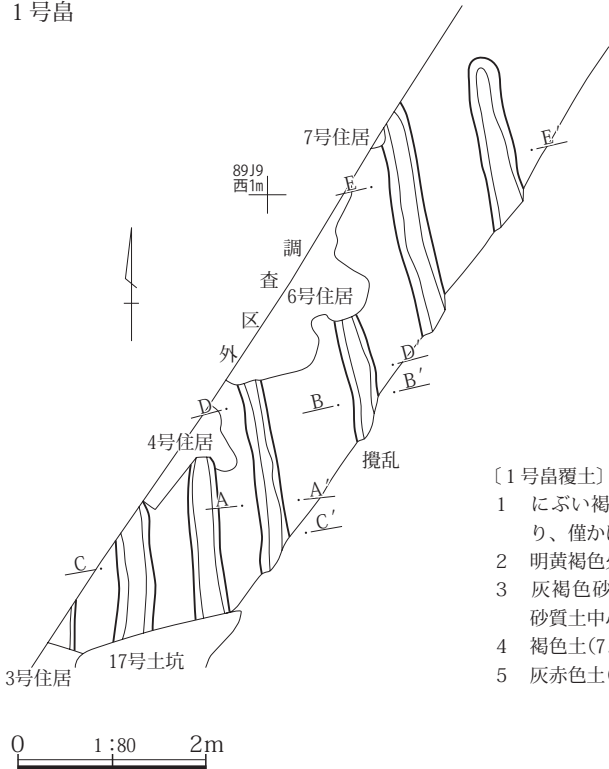
重複 4・6号住居と重複するが、本畠の方が古い。

出土遺物 出土遺物は見られなかった。

所見 サクの覆土のHr-FA火山灰、Hr-FP軽石等の堆積状況から、榛名山期限の泥石流被害に対する耕地復旧時の所産と認識される。その時期は6世紀後半から9世紀頃と見られるが、特定はできなかった。

また耕作物については確認できなかった。

1号畠



[1号畠覆土]

- 1 にぶい褐色砂質土(7.5YR5/4) 黄褐色ブロック入り、僅かにHr-FP小粒が入る。
- 2 明黄褐色火山灰(10YR6/6) レンズ状を呈す。
- 3 灰褐色砂質土(5YR5/2) に多量のHr-FP軽石混入。砂質土中心部に多い。
- 4 褐色土(7.5YR4/3) 中粒砂質土層(軽石層)。
- 5 灰赤色土(2.5YR4/2) Hr-FAと思われる。

第146図 1号畠

3号畠(第147図、PL.38・39)

位置 100区I-9~J-8~グリッド。100区西部、仮4区の東西区画域の中部東寄りに位置する。

方位 [サク1] N-31°-E

[サク2] N-23°-E

規模 全体 残存長2.70m、残存幅1.14m

サク(畝間)・サク間(畝幅)は表6参照

形状・構造 本畠は2条のサク(東側のものをサク1、西側のものをサク2とした)から成るが、全体に遺存状態は悪く、北側は攪乱に一部壊されている。

サク(畝間)は概ね北北東-南南西方向に掘削され、サクの配置は弱い逆八字状に9°程を呈しているが、サク

の幅は平均39.00cmであり、畝幅(サクとサクの間)は8～35cmを測る。

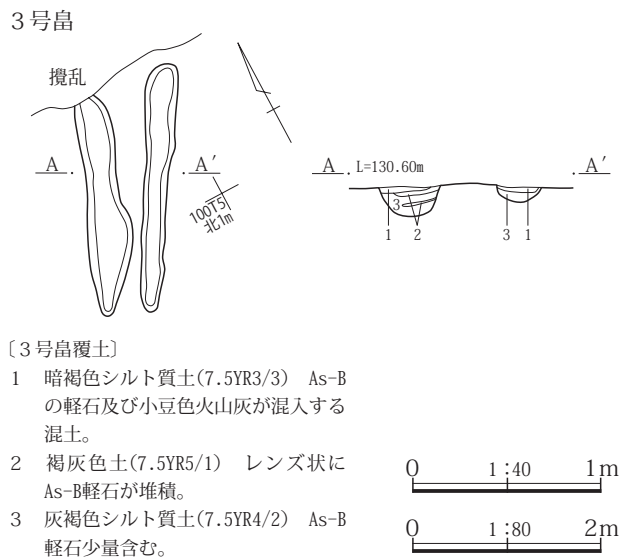
埋没土 As-B軽石を多く混入し、As-B火山灰も混入する。

重複 39号住居と重複するが、本畝は新しい。

出土遺物 土師器片が僅かに出土したに過ぎなかった。

所見 本畝はAs-Bが鋤込まれたような状態で遺存しているため、As-B災害後の耕地復旧に伴うものと思慮される。従って、本畝は概ね12世紀の所産と認識される。

またサク1とサク2の走行の違いから、両サクは同一の畝遺構を形成していたものではないと思われる。尚、耕作物については確認できなかった。

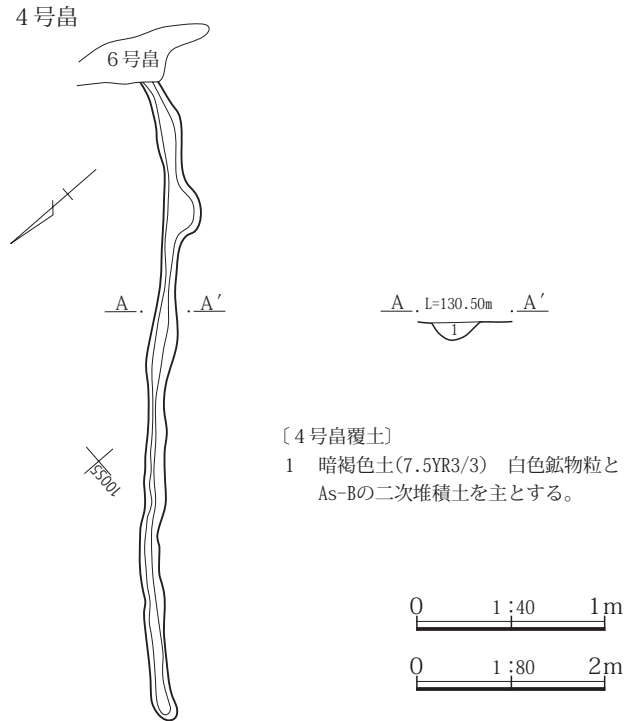


第147図 3号畝

出土遺物 僅かな量の土師器・須恵器片を出土したに過ぎなかった。

所見 本畝は1条のサクだけが確認されているため畝遺構と断ずることはできないが、重複する6号畝の形態と遺存状態に鑑み畝遺構と判断した。また覆土の遺存状態から推して3号畝と同様、本畝は概ね12世紀の所産と認識される。

なお、本畝も耕作物については確認できなかった。



第148図 4号畝

4号畝(第148図、PL.38・39)

位置 100区R-4～S-5グリッド。100区西部、仮4区中部東寄りに位置する。

方位 N-44°-W

規模 全体 残存長5.35m、残存幅5.52m

サク(畝間)は表6参照

形状・構造 本畝は1条のサクから成るが、南端は6号畝に壊されて確認できなかった。

サク(畝間)は概ね北西-南東方向に掘削されている。

埋没土 As-Bの二次堆積土を主体とする。

重複 本畝は36号住居や6号畝と重複するが、36号住居よりは新しく、6号畝との新旧関係は特定できなかった。

5号畝(第149図、PL.38・39)

位置 100区Q-2～R-3グリッド。100区東部、調査区の鈎形の屈曲部付近、仮4区南東隅部寄りに位置する。

方位 N-60°-W

規模 サク(畝間)は表6参照

形状・構造 本畝は概ね西北西-南南東に走行する溝遺構である。極緩やかな弧状のラインで横断面形は丸底状を呈する。

埋没土 Hr-FPとAs-B軽石・火山灰が入る褐色シルト質土で覆われている。

重複 19号溝と重複するが、本畝の方が上位面となり新しい。

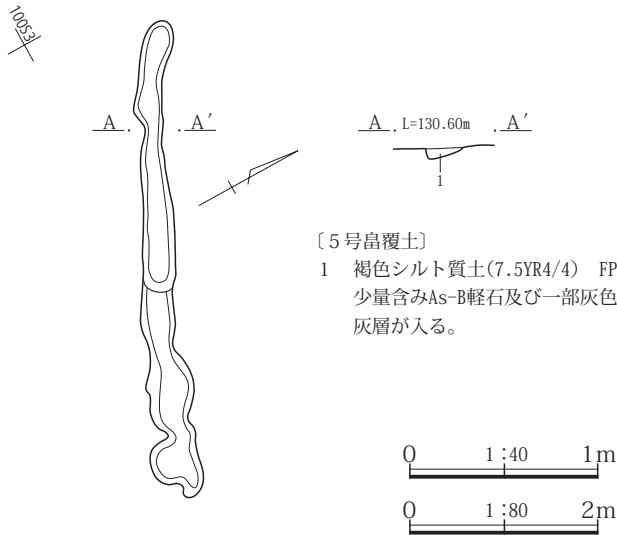
第4章 発見された遺構と遺物

出土遺物 出土遺物は見られなかった。

所見 本畠も1条のサクだけが確認されているため畠遺構と断ずることはできないが、他の溝遺構、畠遺構のサクの形状等に鑑み畠遺構と判断した。また覆土の遺存状態から推して3号畠と同様、本畠は概ね中世の所産と認識される。

なお、本畠も耕作物は確認できなかった。

5号畠



第149図 5号畠

6号畠(第150図、PL.38・39)

位置 100区P-3~R-4・Q2グリッド。100区東部、仮4区東部西寄りに位置する。

方位 N-65°-W

規模 全体 残存長10.3m、残存幅5.96m

サク(畝間)・サク間(畝幅)は表6参照

形状・構造 本畠は8条のサク(東からサク1、サク2と順次番号を付した)から成るが、北側は攪乱に壊されていて全容は確認できなかった。

サク(畝間)は概ね北北東-南南西方向に掘削され、その長さを測定できたものは2条にすぎないが、サク7の長さ456cmが本来の長さであったものと想定される。サクの幅は20~48cm、平均33.38cmであり、畝幅(サクとサクの間)は92~134cm、平均113.33cmを測る。

埋没土 As-Bの純層と見られる軽石・火山灰で覆われている。

重複 本畠は17号溝等2面の遺構と重複するが、本畠

の調査面は2面のうち上位に設定されているため、本畠の方が新しい。

出土遺物 土師器2片が出土したに過ぎなかった。

所見 サクの覆土のAs-B軽石・火山灰の状態から、本畠はAs-Bの降下した天仁元年(1108)に廃絶したものと思慮され、凡そ西暦A.D.1100年を前後する時期の所産と判断される。

なお、耕作物は特定できなかった。

7号畠(第150図、PL.38・39)

位置 100区N-7~O-5・P4~5グリッド。100区東南部、仮4区東南部に位置する。

方位 N-22°-E

規模 全体 残存長10.60m、残存幅8.0m

サク(畝間)・サク間(畝幅)は表6参照

形状・構造 本畠は7条のサク(東からサク1、サク2と順次番号を付す)から成るが、西側と北側は攪乱に壊され、東部はトレンチの掘削で壊されている箇所があるため、全容を詳らかにすることができなかった。

サク(畝間)は概ね北北東-南南西方向に掘削されている。サクの幅は32~50cm、平均42.33cmであり、畝幅(サクとサクの間)は72~132cm、平均92.00cmを測る。

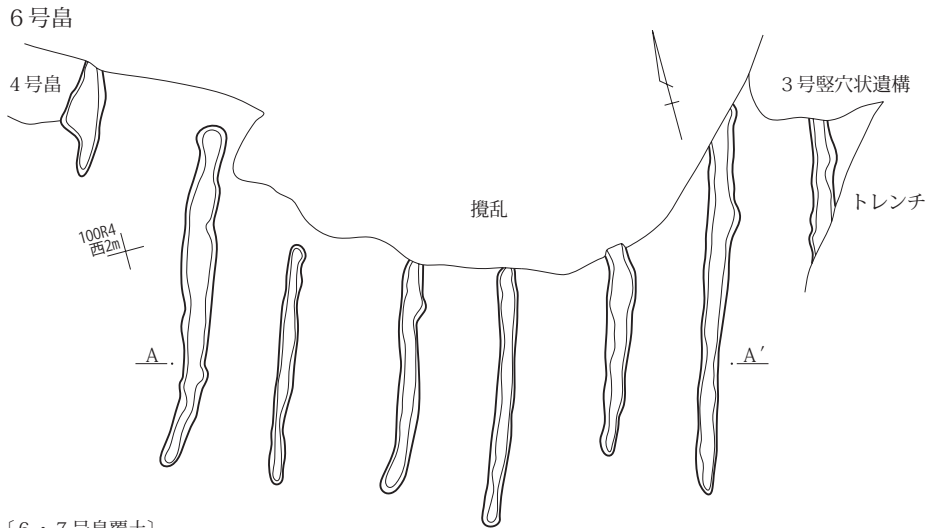
埋没土 As-Bの純層と見られる軽石・火山灰で覆われている。

重複 本畠は35号住居、91号土坑等2面の遺構と重複するが、本畠の調査面も6号畠と同様2面のうち上位に設定されているため、本畠の方が新しい。

出土遺物 出土遺物は見られなかった。

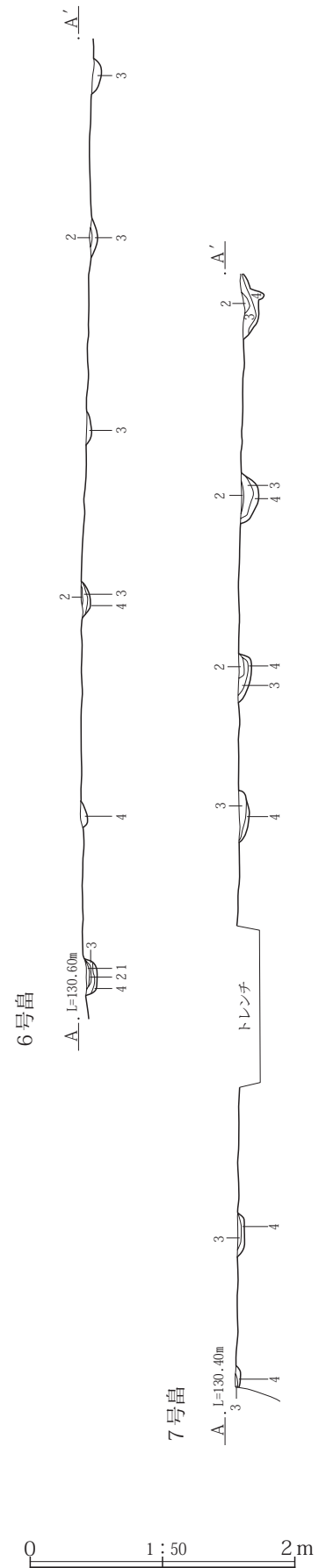
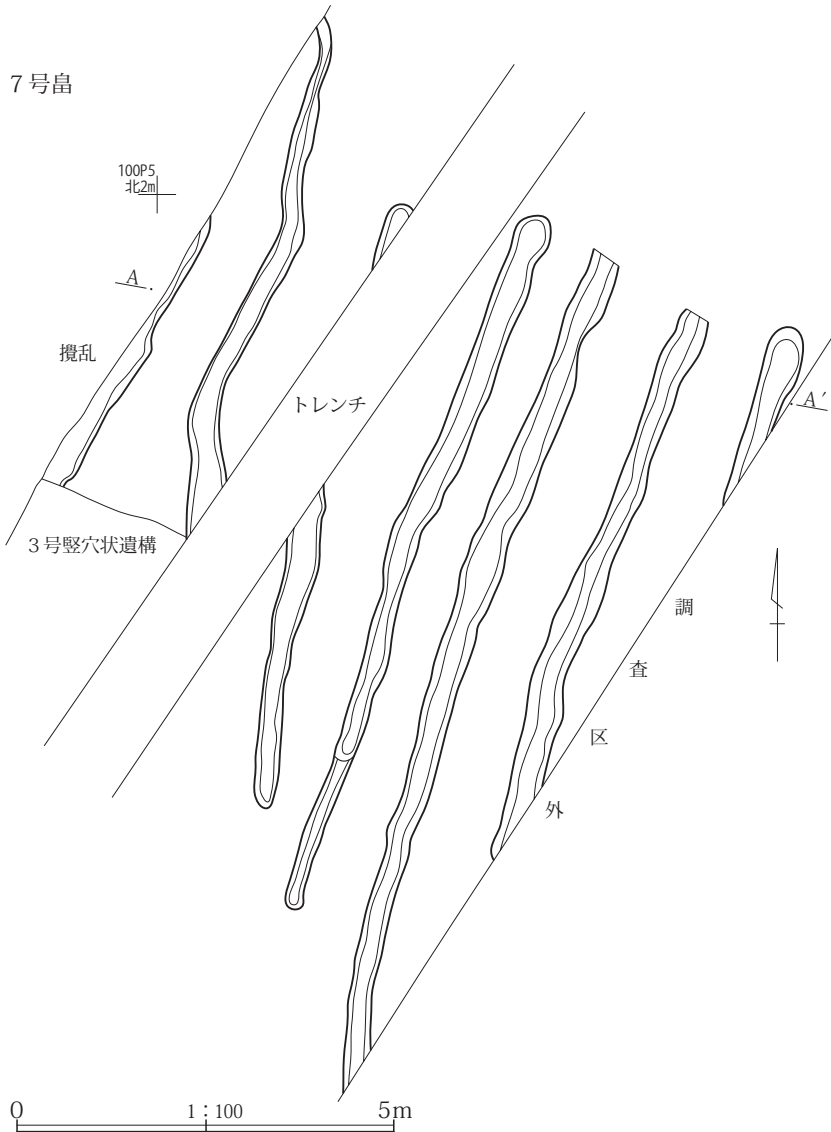
所見 サクの覆土のAs-B軽石・火山灰の状態から、本畠もAs-Bの降下した天仁元年(1108)に廃絶したものと思慮され、凡そ西暦A.D.1100年を前後する時期の所産と判断される。

耕作物は特定できなかった。



[6・7号畠覆土]

- 1 暗褐色土(7.5YR3/3) As-B軽石がレンズ状に堆積。
- 2 褐灰色土(7.5YR4/1) 2mm厚程の灰層がレンズ状に堆積。
- 3 黄褐色土(7.5YR4/2) As-B軽石が2cm厚さで堆積。この層の中間に1mm厚の灰層がレンズ状に堆積。全体的に酸化鉄分を含む。
- 4 褐色土(7.5YR4/4) 地山シルト層上にAs-B混入。やや掘りすぎの可能性有。全体的に酸化鉄分含む。



第150図 6・7号畠

第4章 発見された遺構と遺物

表6 2面畠測定一覧

1号畠

サク (畝間)	残存長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	サク間 (畝幅) (cm)	幅 (cm)
1	1.73	35	12	1-2	68
2	2.16	35	8	2-3	59
3	1.06	31	10	3-4	88
4	1.75	25	10	4-5	42
5	1.70	34	7	5-6	42
6	1.22	36	10	6-7	46
7	0.42	(0.29)	-		

3号畠

サク (畝間)	残存長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	サク間 (畝幅) (cm)	幅 (cm)
1	2.62	35	8	1-2	8~40
2	2.35	43	15		

4号畠

サク (畝間)	残存長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)
1	6.75	0.18~ 0.40	9

5号畠

サク (畝間)	残存長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)
1	4.98	47	5

6号畠

サク (畝間)	残存長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	サク間 (畝幅) (cm)	幅 (cm)
1	(1.52)	30	-	1-2	110
2	(4.98)	31	7	2-3	92
3	(2.80)	39	6	3-4	118
4	(3.46)	28	4		
5	(3.10)	29	6		
6	3.18	20	5	5-6	132
7	4.56	22~48	7	6-7	94
8	(1.48)	42	-	6-8	134

7号畠

サク (畝間)	残存長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	サク間 (畝幅) (cm)	幅 (cm)
1	2.31	50	22	1-2	100
2	(7.62)	48	24	2-3	102
3	(11.41)	42	19	3-4	72
4	9.70	38	18	4-5	90
5	(8.20)	44	-	5-6	98
6	(6.90)	32	10	6-7	90
7	(4.08)	(30)	9		

第3節 遺構外の出土遺物

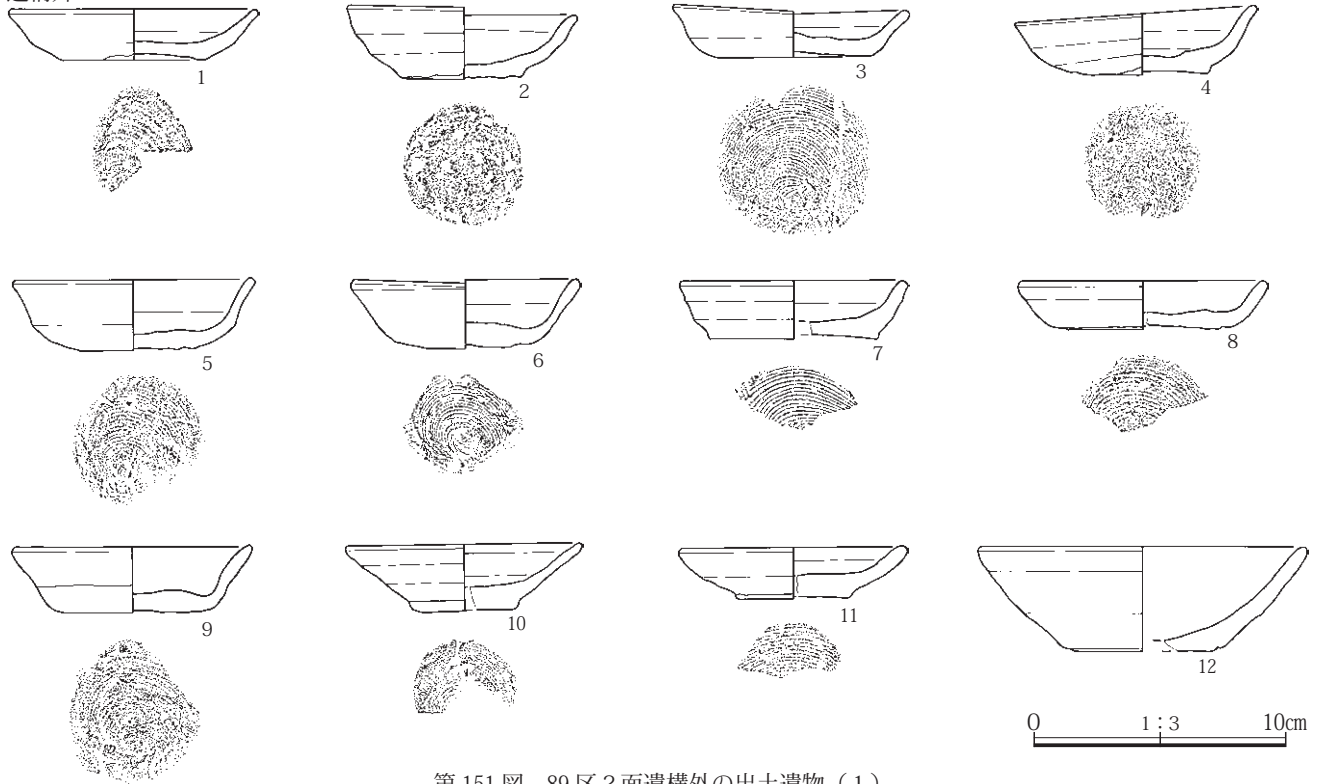
1 遺構外の出土遺物 (第151~153図、PL.50)

本遺跡に於いては遺構外からも、土師器・須恵器片として遺物の出土を見たが、このうち図示すべきものとし

て40点、写真のみを示したものの11点について述べる。

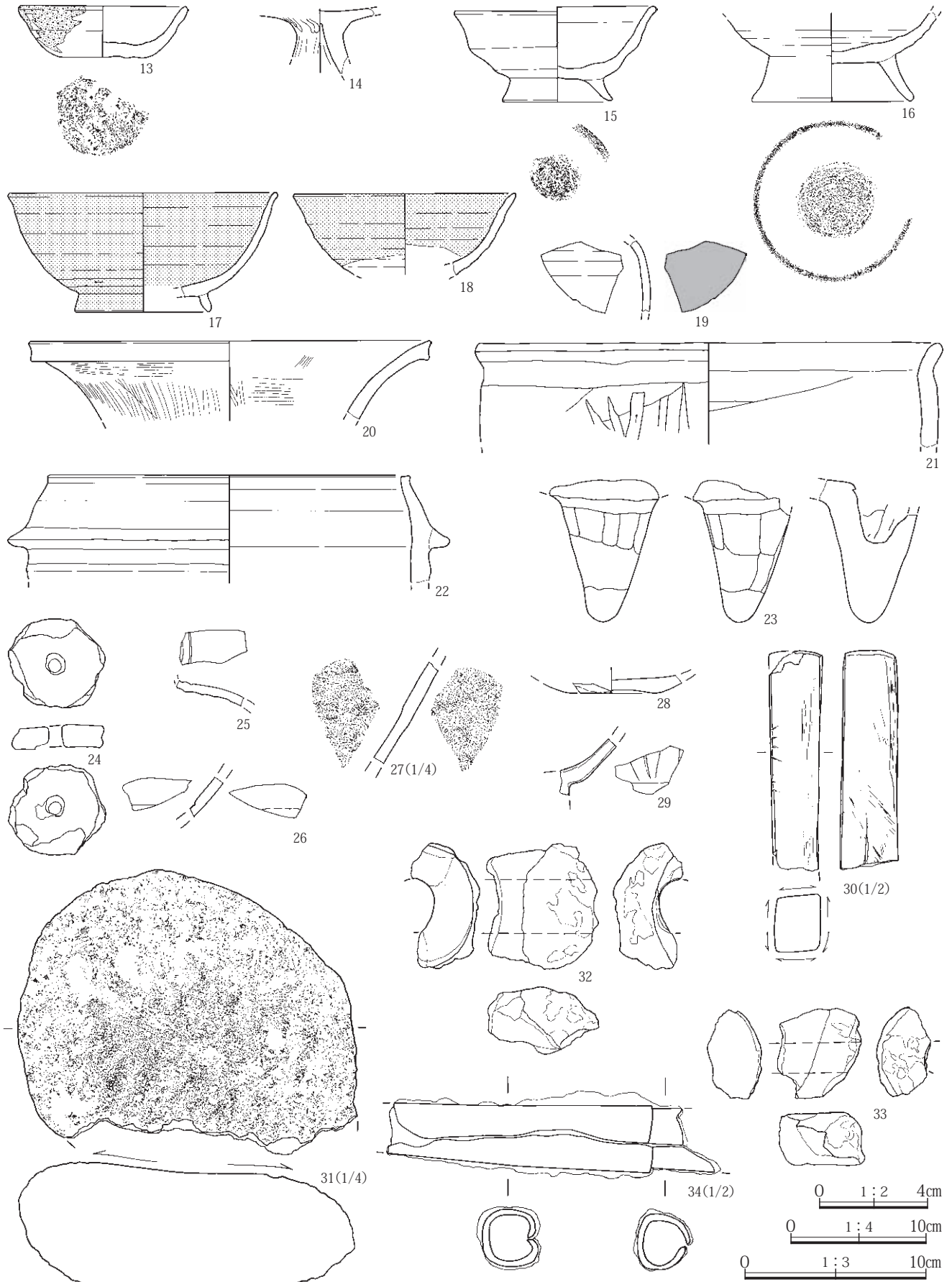
このうち仮1・2区の89区からは須恵器杯(1~13)、土師器高杯(14)、須恵器碗(15・16)、灰釉陶器碗(17・18)、緑釉小壺と思われるもの(19)、土師器の壺(20)・甕(21)、土師質の不明品(23)、土製円板(24)、中国青磁瓶類(25)、白磁碗(26)、常滑製甕(27)、龍泉窯青磁皿・

遺構外

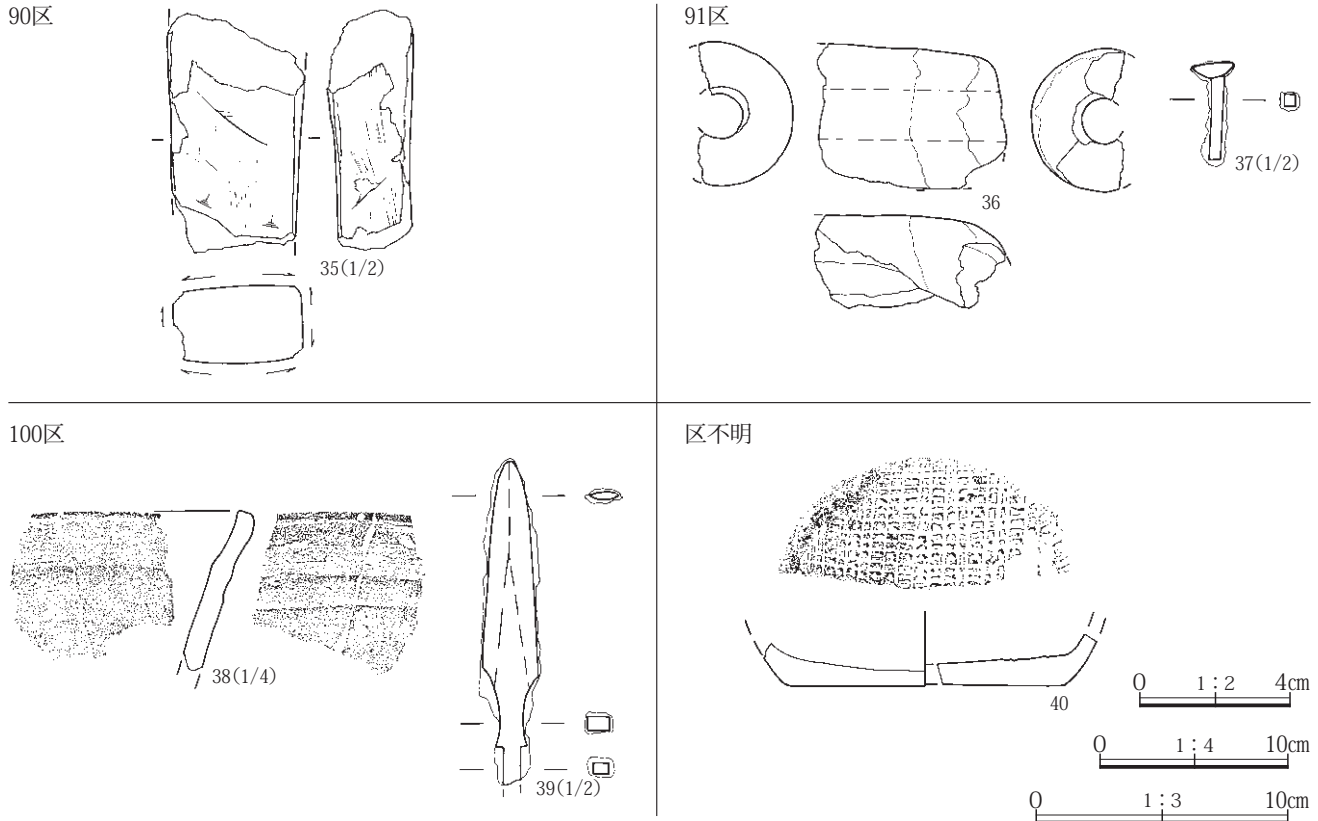


第151図 89区2面遺構外の出土遺物(1)

遺構外



第152図 89区2面遺構外の出土遺物(2)



第153図 90・100・91区2面遺構外の出土遺物

椀(28・29)、砥石(30・31)、羽口(32・33)、不明鉄製品(34・41～44)の出土を見た。また90区では砥石(35)点を取り上げた。このうち図示したものは1～35の遺物である。

一方、仮4区の100区、91区に於いては、100区で在地区内耳鍋(38)、鉄鏃(39)、91区では羽口(36)、角釘(37)を取り上げたが、このうち図示したもの(36～39)である。

また遺跡全体からの出土遺物として、古瀬戸のおろし皿(40)の出土が見られ、これを図示した。

2 製鉄関連遺物

既に各遺構、或いは遺構外の出土遺物として各項に図示、或いは写真図版に示したが、本遺跡に於いては製鉄関連遺物の分布が見られた。これらは製鉄関連遺構の存在を示唆するものではあったが、遺構として確認されたものは無かった。

鉄滓の分布は遺跡全体に及んでいる。例えば鉄滓の破片には大小あったが、その20片以上を出土した遺構を挙げると35片を出土した89区東部(仮1区南西隅)の1号住居、22片を出土した89区中央部(仮2区東部)の8号住

居、132片を出土した90区西部(仮2区北西隅)の20号住居、32片を出土した90区西部(仮2区南西隅部)の21号住居、何れも仮4区中部の27片を出土した100区西端部の39号住居と、66片を出土した91区東端部の34号住居が挙げられる。

これらの住居のうち1号住居からは羽口3片、8号住居からは羽口2片、20号住居からは椀型鉄滓2片、羽口2片、21号住居からは羽口8片、34号住居からは炉内滓5片と炉壁2片、39号住居からは羽口2片の出土が見られた。

このうち20号住居と21号住居、34号住居と39号住居は近接しており、更に20号住居は小型の住居であり、34号住居はその過半が壊されていることを考えれば、それぞれ鉄滓の出土が132片、66片とその量が多いため、両住居を中心とした区域に製鉄関連遺構の在った可能性が高いと思慮される。またそれらの製鉄関連遺構は埋没途中の竪穴住居跡の窪みを利用した鍛冶遺構であった可能性が考慮される。

第5章 自然科学分析

第1節 出土人骨・獣骨の鑑定について

関根赤城遺跡では89区5号土壙墓(57号土坑)、6号土壙墓(8号住居内)、90区4号土壙墓から人骨或いは人歯の出土が見られ、89区1号土壙墓、23号住居、26号住居、90区1号竪穴状遺構から獣骨或いは歯牙の出土が見られた。これらの出土骨・歯牙について動物の種類、性別、年齢等が確認できなかつたため、人骨、人歯について榑崎修一郎先生に、また獣骨及び歯牙については宮崎重雄先生に鑑定を依頼した。以下にその概要を記し、第2節、第3節にその鑑定報告を掲載する。

1 人骨及び歯牙の鑑定

① 鑑定要件

依頼した鑑定要件は以下の通りである。

- (1) 個体数
- (2) 人骨・歯牙の種類
- (3) 性別
- (4) 年齢
- (5) その他報告すべき所見

② 鑑定の結果

鑑定の結果、89区5号土壙墓(57号土坑)の歯牙については、ヒトの歯であることは確認できたが、歯種、性別、年齢等は明らかにできなかった。89区6号土壙墓(8号住居内)出土歯牙は一人分で11歳の男児と想定された。90区4号土壙墓から出土したのはヒトの1個体分の焼骨で、成人女性のもので推定され、北頭位に据えられ、900°以上の温度で焼かれ、東日本型拾骨で拾骨されていたと推定された。

③ 鑑定結果の評価

5号土壙墓(57号土坑)出土人歯は所謂エナメルキャップである。歯種等は確認できなかったが、ヒトと確認されたので、土壙墓に伴うものと解釈される。こうした出土状態は、群馬県内でも縄文時代に上るものもあるが、一般的には中世以降(14世紀以降)と認識されるものである。

6号土壙墓(8号住居内)も歯牙の歯冠部のみ確認できたもので、住居の覆土中に下顎左側第1・2大臼歯が並んで出土していたため住居に伴うものではなく未確認の

土壙墓が在ったものと認識していたものである。鑑定により被葬者の性別(男性)、年齢(11歳)推定された。

4号土壙墓は火葬土坑である。出土骨は鑑定によって成人女性の遺骨と推定された他、火葬時に北頭位に遺体が据えられていたことが確認された。これは遺構の形態から推して所謂中世土壙墓と同じ体勢、即ち同様の棺に入れられて茶毘に付されていたことが想定される所見である。また火葬の温度を想定できたことも、今後火葬方法の検討に資するものと思慮される。

2 獣骨及び歯牙の鑑定

① 鑑定要件

依頼した鑑定要件は以下の通りである。

- (1) 個体数
- (2) 動物の種類
- (3) 骨の部位
- (4) 年齢
- (5) その他報告すべき所見

② 鑑定の結果

鑑定の結果、89区1号土壙墓の出土獣骨は、老齢の牛と馬と確認され、89区1号竪穴状遺構出土歯牙は壮齢馬の臼歯と牛の臼歯、後臼歯が確認され、89区23・26号住居出土の骨は獣骨と鑑定されたものの、骨の部位等の確認には至らなかった。また89区15号溝から出土歯牙は牛の臼歯と比較的年齢の高い馬の臼歯と確認された。なお、本遺跡出土牛の歯牙は、東京都伊皿子貝塚出土の弥生時代牛の計測値との比較により、黒毛和牛よりは大きめの弥生時代牛に近いものであったことが分かった。

③ 鑑定結果の評価

鑑定により1号土壙墓、1号竪穴状遺構、15号溝からは牛と馬の骨或いは歯牙の出土が確認された。本遺跡の出土獣骨、歯牙の遺存状態は、経験的に中世以降の所産が考えられるものであるが、当該の時代に本遺跡では牛と馬が共に飼育されていたと確認されるものである。

なお、1号土壙墓は骨の遺存状態から1遺体(牛)の埋葬と解釈していたが、牛馬の別なく遺体が投入されていたとするならば、往時1遺体に一墓壙を用意するのではなく、複数の遺体を投入したことが想起されるものである。

第2節 関根赤城遺跡出土人骨

はじめに

関根赤城遺跡は、群馬県前橋市関根町に所在する。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団による発掘調査が、平成24(2012)年4月～同年7月まで実施された。本遺跡の、89区5号土壙墓(57号土坑)及び6号土壙墓(8号住居内)・90区4号土壙墓から中世の人骨が出土したので、以下に報告する。

人骨は、水洗後に乾燥させ、観察・計測・写真撮影を実施した。なお、出土歯の計測方法は、藤田の方法を用いた(藤田1949)。また、歯冠計測値の比較は、中世時代人及び近世時代人は松村(Matsumura1995)を、現代人は権田(権田1959)を引用した。

1. 89区出土人骨

89区からは、5号土壙墓(57号土坑)と6号土壙墓(8号住居内)から人骨が検出されている。

(1) 5号土壙墓(57号土坑)

5号土壙墓(57号土坑)は、10世紀代の6号土壙墓(8号住居内)に位置する。この土壙墓は、8号住居が埋没した跡に構築されており、中世の土壙墓であると推定される。なお、遺物は検出されていない。土壙墓は、長軸(南北)約131cm・短軸(東西)約73cm・深さ約60cmの規模の隅丸長方形土壙墓である。出土人骨は、歯冠部破片のみであるため、歯種の同定・性別・死亡年齢等は不明である。しかしながら、人骨であることは間違いない。

(2) 6号土壙墓(8号住居内)

6号土壙墓(8号住居内)は、10世紀代の住居である。しかしながら、人骨はこの住居がクレーター状に埋没した覆土から検出されているため、中世の土壙墓であると推定される。なお、遺物は検出されていない。

①人骨の出土部位

人骨は、遊離歯の歯冠部のみ出土しており、頭蓋骨や四肢骨は出土していない。これは、本被葬者が未成人であるためと推定される。

②被葬者の個体数

出土遊離歯には、重複部位が認められないため、被葬者の個体数は1個体であると推定される。

③被葬者の性別

出土遊離歯の歯冠計測値が比較的大きいため、被葬者

の性別は男性(男児)であると推定される。

④被葬者の死亡年齢

出土遊離歯の歯冠の咬耗度を観察すると、咬耗が無いマルティンの0度か、エナメル質のみの1度の状態である。また、破片を含めて、すべてが永久歯であり乳歯は認められない。このような場合は、歯が萌出過程にある可能性が高い。歯根部が残存していれば、かなり正確に死亡年齢を推定できるが、歯根部はすべて破損しており、歯冠部しか残存していない。総合的に、被葬者の死亡年齢は、すべての乳歯が脱落した約11歳であると仮定すると矛盾しない。また、子供であるため、まだ薄い頭蓋骨や四肢骨は溶解したと推定すると出土状況と一致する。実際、出土状況の写真を見る限り、8号住居の竈近辺で柱状に残された上部には、遊離歯のみが検出されており、その周りには人骨は検出されていないようである。

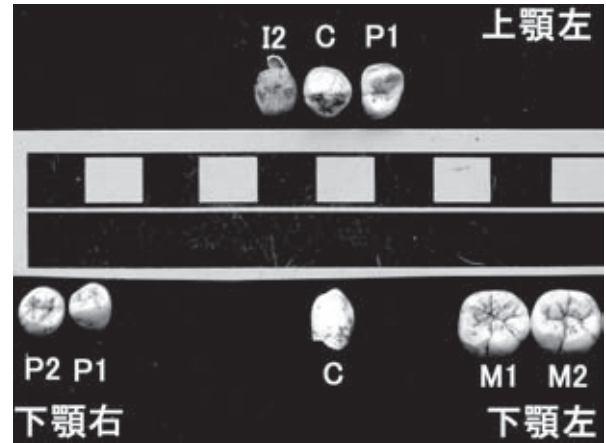


写真3 6号土壙墓(8号住居内)出土遊離歯咬合面観

表7. 関根赤城遺跡出土人骨歯冠計測値及び比較表

歯種	計測項目	関根赤城		中世時代人*		江戸時代人*		現代人**		
		8号住居		Matsumura, 1995		Matsumura, 1995		権田, 1959		
		右	左	♂	♀	♂	♀	♂	♀	
上顎	I2	MD	—	7.2	6.98	6.85	7.16	6.97	7.13	7.05
		BL	—	破損	6.55	6.26	6.74	6.33	6.62	6.51
	C	MD	—	8.1	7.96	7.43	8.01	7.60	7.94	7.71
		BL	—	8.6	8.50	7.94	8.66	8.03	8.52	8.13
	P1	MD	—	7.2	7.25	7.02	7.41	7.23	7.38	7.37
		BL	—	9.4	9.46	9.03	9.67	9.33	9.59	9.43
下顎	C	MD	—	7.5	6.88	6.55	7.06	6.69	7.07	6.68
		BL	—	破損	7.82	7.33	8.04	7.39	8.14	7.50
	P1	MD	7.3	—	7.07	6.96	7.32	7.05	7.31	7.19
		BL	7.4	—	8.10	7.72	8.34	7.89	8.06	7.77
	P2	MD	7.8	—	7.12	7.00	7.45	7.12	7.42	7.29
		BL	8.8	—	8.49	8.06	8.68	8.30	8.53	8.26
顎	M1	MD	—	12.2	11.56	11.06	11.72	11.14	11.72	11.32
		BL	—	11.6	11.00	10.49	11.15	10.62	10.89	10.55
	M2	MD	—	12.3	11.06	10.65	11.39	10.78	11.30	10.89
		BL	—	11.2	10.55	9.97	10.75	10.21	10.53	10.20

註1. 計測値の単位は、すべて、「mm」である。

註2. 歯種は、I2(第2切歯)・C(犬歯)・P1(第1小臼歯)・P2(第2小臼歯)・M1(第1大臼歯)・M2(第2大臼歯)を意味する。

註3. 計測項目は、MD(歯冠近遠径)・BL(歯冠唇舌径)を意味する。

註4. 「破損」とは、歯冠が破損しており計測不能であることを示す。

註5. 「**」は、権田(1959)より引用。

2. 90区出土人骨

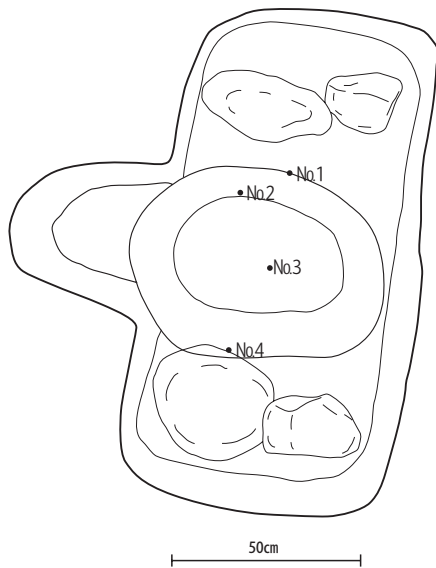
90区は、4号土壙墓から人骨が検出されている。

(1) 4号土壙墓

4号土壙墓は、約14世紀～16世紀の中世に比定されている。なお、遺物は検出されていない。

①土壙墓の規模

土壙墓の主体部は、長軸(南北)約135cm・短軸(東西)主体部約67cm～73cm・深さ約28cmの規模の隅丸長方形である。主体部西側には、長軸(東西)約40cm・短軸(南北)約35cm～42cmの突出部が認められる。この突出部は、煙道あるいは焚き口と推定されている。本土壙墓は、火葬跡と推定される。本報告者により、群馬県出土中世火葬遺構をまとめた研究によると、長方形土壙墓に突出部を持つ火葬遺構はタイプⅡに分類され、170基中55基(約32.3%)が認められている(植崎2007)。また、土壙墓の規模は、平均で長軸約119cm(N=54)・短軸約68.1cm(N=55)・深さ約25.8cm(N=55)と報告されている。同様に、突出部の長軸約40.1cm(N=55)・短軸約30.2cm(N=55)と報告されている。



第154図 4号土壙墓平面図及び人骨出土位置

②火葬人骨の出土部位

火葬人骨は、頭蓋骨片から四肢骨片と、少しずつであるがほぼ全身に及ぶ。大きな傾向として、本土壙墓北部のNo. 1及びNo. 2には頭蓋骨片や歯根が多く、土壙墓南部のNo. 3及びNo. 4には四肢骨片が多く検出されている。

③被火葬者の頭位

土壙墓北部から頭蓋骨片が多く、土壙墓南部から四肢骨片が多く検出されていることから、被火葬者は頭位を北にして火葬されたと推定される。

④被火葬者の火葬方法

出土火葬人骨の色は、全体的に白色を呈しているため、約900度以上で火葬されたと推定される。出土人骨には亀裂や歪みが認められるため、白骨化したものを火葬にしたのではなく死体をそのまま火葬にしたと推定される。また、被火葬者は成人と推定されている。土壙墓の規模から、頭位を北にした屈位で火葬されたと推定される。

⑤被火葬者の個体数

火葬人骨には、明瞭な重複部位が認められないため、被火葬者の個体数は1個体であると推定される。

⑥被火葬者の性別

火葬による人骨の収縮を考慮しても、全般的に華奢で小さいため、被火葬者の性別は女性であると推定される。

⑦被火葬者の死亡年齢

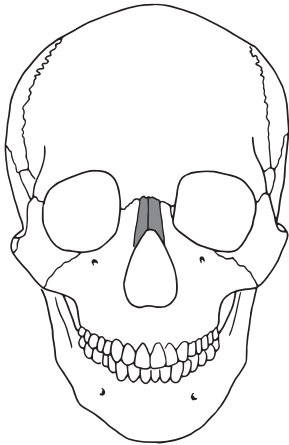
出土火葬人骨の内、右上顎骨を観察すると、歯槽は閉鎖しておらず開放の状態である。また、多くの歯根も検出された。このことは、少なくとも、歯が生前脱落して歯槽が閉鎖した無歯顎の状態ではないため、老齢では無いと推定される。恐らく、成人であると推定される。

⑧収骨(拾骨)方法

火葬人骨は、比較的残存量が多い。すべての火葬人骨を丁寧に全部収骨(拾骨)する東日本タイプの収骨(拾骨)方法ではなく、あまり破損していない大きな四肢骨片を中心に拾骨し、一部の火葬人骨のみ蔵骨器等に収骨した西日本タイプの部分収骨(拾骨)方法であると推定される。



写真4 4号土壙墓出土火葬骨(左右鼻骨)



第155図 4号土壙墓出土火葬人骨出土部位図(左右鼻骨)

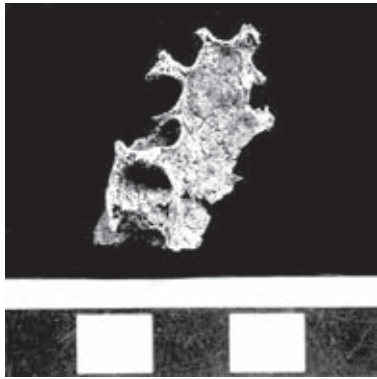
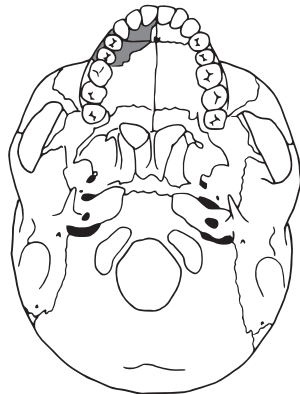


写真5 4号土壙墓出土火葬骨(右上顎骨)



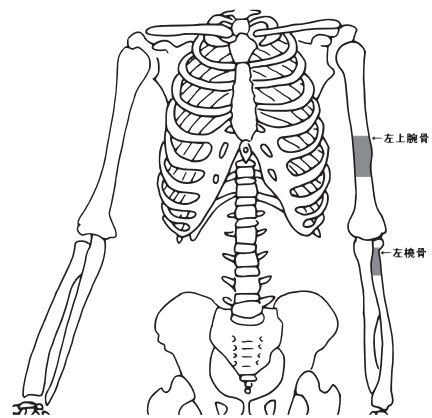
第156図 4号土壙墓出土火葬人骨出土部位図(右上顎骨)



写真6 4号土壙墓出土火葬骨(左上腕骨)



写真7 4号土壙墓出土火葬骨(左腕骨)



第157図 4号土壙墓出土火葬人骨出土部位図(左上腕骨・右腕骨)

まとめ

関根赤城遺跡の89区及び90区から中世人骨が出土した。89区5号土壙墓(57号土坑)の土葬墓からは、歯冠破片が出土したが人歯である事以外は不明である。89区6号土壙墓(8号住居内)からは、土葬された約11歳の男性(男児)が1体出土した。90区4号土壙墓は火葬跡と推定されるが、成人女性1体の火葬人骨が出土した。比較的多く火葬人骨が残存しているため、部分収骨(拾骨)した西日本タイプの収骨(拾骨)方法であると推定される。

引用文献

- 藤田恒太郎 1949 「歯の計測基準について」『人類学雑誌』、61：1-6。
 権田和良 1959 「歯の大きさの性差について」『人類学雑誌』、67：151-163。

MATSUMURA, Hirofumi 1995 A microevolutional history of the Japanese people as viewed from dental morphology, National Science Museum Monographs No. 9, National Science Museum

第3節 関根赤城遺跡出土の獣骨

I 89区1号土壙墓

長軸約210cm、短軸約130cmの楕円形の土壙墓から一頭分の牛が出土した。

保存状況がかなり悪いが、出土時の実測図や写真で観察すると、頭部を西に、尾部を東に、腹部を南に向けて横たわっている。前肢・後肢はほぼ平行に伸びていることから前肢・後肢を縛ってそこに棒を通し担ぎこんだものではないようである。

歯以外の部位は腐食・破損がはなはだしく、取り上げ後の現状で、確認できる部位は少ない。下顎の左第1切歯、左第2切歯、右第1又は第2切歯の3本、左上顎の第3前臼歯片、第4前臼歯、第1後臼歯、第2後臼歯、第3後臼歯の5本の5本、左下顎の第4前臼歯、第1後臼歯、第2後臼歯、第3後臼歯の4本及び左下顎骨の下顎三角部、下顎枝、下顎体の一部並びにきわめて保存不良の上腕骨片、橈骨片、大腿骨などが確認できるだけである。その他の骨片は破片化していて部位判定が極めて困難である。

下顎骨では第1後臼歯、第2後臼歯、第3後臼歯それぞれの歯の遠心端で、62.0mm、68.8mm、69.4mmの下顎体高が計測できる。体幹・体肢骨では有用な計測値を得られるものはない。

歯は咬耗がかなり進み、上顎歯では第1後臼歯・第2後臼歯の前小窩、後小窩のエナメル質が咬耗され、小さく残っているだけである。下顎歯では、さらに咬耗がみ、第4前臼歯、第1後臼歯では、咬合面のエナメル質が咬耗しつくされ、消失している。咬耗の進行は歯冠高にも表れていて、どの歯も極めて低く、老齢牛であることを示している。老衰による自然死の可能性も考えられる。

計測値表に示した通り、歯の大きさは西中川・他(1981)の報告した東京都伊皿子貝塚出土の弥生時代牛にかなり近い値を示し、黒毛和牛よりは大きめである。

この土壙墓の中には馬の歯も共存し、左下顎の第1切歯、第2切歯の唇側半と右下顎の第1または第2切歯の唇側半が確認される。壮齢馬のものと思われる。

牛・馬が一つの土壙墓から一緒に出土したことは注目される。

II 90区1号竪穴状遺構

その1:馬歯

馬の左上顎臼歯の頬側片が残存している。

歯冠高は33.7mmを計測する。

左上顎のいずれの歯であるかの判定はできないが、歯冠高から壮齢馬であることはわかる。

その2:牛歯

ウシの右下顎第3後臼歯と右上顎第3?後臼および数10片の細骨片が残存している。

右下顎第3後臼歯は歯冠長が39.0mm、歯冠幅が15.5mm、歯冠高が舌側で22.0mm、頬側で21.6mmある。

この歯の大きさは、西中川・他(1981)の報告した東京都伊皿子貝塚出土の弥生時代牛(歯冠長:左38.8mm、右40.1mm、歯冠幅:左13.5mm、右13.8mm)にかなり近い。

右上顎第3?後臼歯は前葉部のみが残存し、歯冠幅は20.0+mmを計測する。

以上の2本の歯は同一個体に属するものと思われる。

III 89区23号住居No.57

哺乳動物の細骨片数10片が残存する。

最大骨片は35.0mm×17.8mmである。骨片の厚さなどから馬又は牛の骨片と思われるが、いずれであるかの判断はできない。

IV 89区26号住居

その1:最大骨片29.0×24.0mmの数10片の獣骨である。

種の同定は困難である。

その2:最大骨片37.3×12.7mmの細骨片10数片である。

種の同定は困難である。

V 90区15号溝・No.1

馬の右下顎臼歯4本と下顎臼歯の細片である。

確認できた4本は第3又は第4前臼歯、第1後臼歯、第2後臼歯、第3後臼歯である。

歯冠高を用いた西中川・他(1991)の年齢推定法によれば、14～16歳程度の比較的年齢の高い個体であることがわかる。

第5章 自然科学分析

VI 90区15溝No.2

牛の右上顎第3後臼歯である。

歯冠長31.0mm、歯冠幅24.5mm、頬側歯冠高31.4mm、舌側歯冠高32.7mmを計測する。

この歯の大きさは、西中川・他(1981)の報告した東京都伊皿子貝塚出土の弥生時代牛(歯冠長31.5mm、歯冠幅24.5mm)にほぼ等しい。

参考文献

西中川駿・松元光春・金子浩昌(1981)「出土した家牛の頭蓋及び下顎骨の研究」『伊皿子貝塚遺跡』、478-485、伊皿子貝塚遺跡発掘調査会。

西中川駿編(1991)「古代遺跡から見たわが国の牛、馬の渡来時期とその経路に関する研究」平成2年度文部省科学研究費補助金(一般研究B)研究成果報告書

表8 関根赤城遺跡牛歯計測値

		第3前臼歯				第4前臼歯			第1後臼歯			第2後臼歯			第3後臼歯			
		歯冠高	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	歯冠長	歯冠幅	歯冠高	
関根赤城牛																		
伊皿子牛※	上顎歯	左	16.0	18.0	23.2	15.0	22.5	24.8	10.0	28.4	25.4	11.8	32.3	25.0	20.0			
		左	27.0	18.6	18.6	25.8	25.7	21.3	26.2	31.4	22.5	26.9	31.5	24.5	17.6			
		右	28.5	17.3	18.2	24.6	25.8	22.0	23.2	30.5	22.6	26.6	27.5	20.2	29.1			
黒毛和牛※		23.60	18.10	19.55	25.65	21.60	21.80	28.50	26.60	23.30	24.73	28.22	28.22	20.10				
関根赤城牛			23.8	13.8	11.0	22.0		8.6	27.4		11.0	39.0		21.0				
伊皿子牛※	下顎歯	左		21.5	13.2	22.6	24.2	15.2	25.5	26.9	15.5	26.2	38.8	13.5	23.4			
		左		22.7	13.9	20.4	23.1	15.2	18.8	27.3	14.8	23.9	40.1	13.8	23.4			
		右		17.57	11.35	15.97	21.52	14.53	15.92	25.57	15.98	20.38	37.13	15.22	21.78			
黒毛和牛※			17.57	11.35	15.97	21.52	14.53	15.92	25.57	15.98	20.38	37.13	15.22	21.78				

単位：mm

表9 90区15号溝No.1 馬歯下顎臼歯計測値

	第3 or 4 前臼歯	第1 後臼歯	第2 後臼歯	第3 後臼歯
	右	右	右	右
歯冠近遠心径	25.6	21.7	16.0+	28
歯冠頬舌径	14.2	13.1	11.9	11.3
歯冠高頬側	25.4	21.6	26.3	22
歯冠高舌側	27.3	21.4	26.3	26.5
下後錘谷長	8.2	6.5	7.1	6
下内錘谷長	8.5	5.4		7.9
doubleknot長	14.5	12.8		11.9
咬合面の傾斜	95°	110°	117°	115°
下内錘幅	5.4		4.2	

単位：mm

表10 89区1号土壙墓馬歯計測値

	左	右	
	第1切歯	第2切歯	第1又は第2切歯
歯冠長	38.3+	35.4+	29.3+
歯冠幅	13	13.8	12.6+

単位：mm



写真8 89区1号土壙墓出土牛骨(頬側)

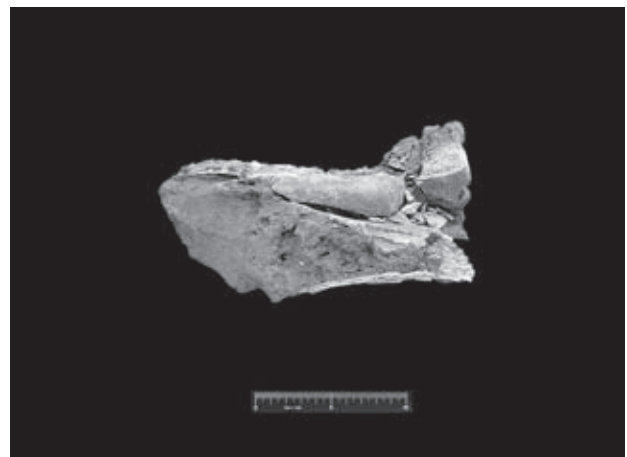


写真9 89区1号土壙墓出土牛骨(下顎骨)



写真10 90区1号竪穴状遺構出土馬歯



写真11 89区23号住居出土獣骨

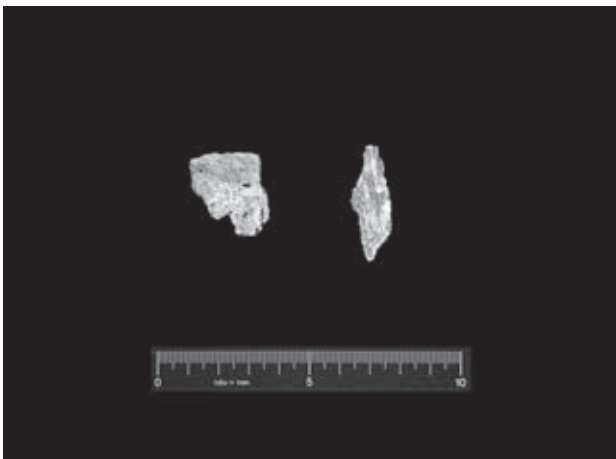


写真12 89区26号住居出土獣骨



写真13 90区15号溝出土馬歯

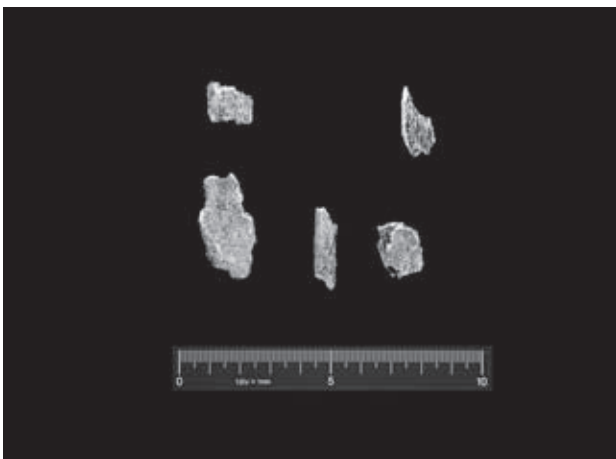


写真14 90区15号溝出土馬歯咬合面



写真15 89区1号土壙墓出土白歯咬合面

第6章 関根赤城遺跡のまとめ

第1節 概要

関根赤城遺跡では遺構面の下位層に在る砂利採取のための掘削によって広い範囲に攪乱を受けており、その調査範囲は限定的なものではあった。しかしながら、本遺跡に於いては2箇面の調査面で発掘調査を進め、1・2面合せて竪穴住居39軒、竪穴状遺構3基、溝18条、土葬墓4基、火葬土坑(荼毘所)2基、土坑95基、ピット27基の遺構を調査し、当該期の出土遺物を得ることができたのである。

かつて本遺跡付近は、広瀬・桃ノ木低地帯に含まれ、利根川の流路にあったと考えられていた。本遺跡の西方を流下する広瀬川だけでなく、桃ノ木川も応永34年(1427)の大洪水を契機として生じたとされる所謂利根川西遷によって生まれたと考えられてきたのであるが(広瀬桃ノ木両用水土地改良区1994)、田口上田尻遺跡、田口下田尻遺跡で古墳時代前期の集落が発見されるに及んで、本遺跡付近でも集落の遺存が疑われ、本遺跡に於いても集落が確認、調査されたのである。

なお、これらの遺構の評価について細かく述べることはできないが、本遺跡に於ける遺構の概要(経年的遺構の変遷)と竪穴住居について以下に述べることとする。

1 遺跡の経年的概要

本遺跡(調査範囲)の遺構は一部古墳時代に遡る可能性を有するものもあるが、殆どの遺構は平安時代から中世の所産と判断されるものであった。

これらの遺構を年代順に概観すると、その初めとして、古墳時代に遡る可能性を有する畠1面があり、9世紀後半に集落の一部として、或いは単独の竪穴住居、所謂「離れ国分」として竪穴住居が建設されている。そして10世紀後半に入るとはっきりした集落が営まれるようになるが、後述するように関東が亡弊の国と言われた11世紀に入ると衰退している。また集落の営まれていた時期には水路の可能性が考えられる溝が掘削されている。

一方遺構は確認されなかったが、集落と時期の近い製

鉄関連遺物の出土もあった。

更に11世紀後葉には畠作が営まれていた。その後、亡弊の状態を決定的にする天仁元年(1108)の浅間山の大噴火が発生し、軽石と火山灰の降下によって畠も埋没し、作物は壊滅したものと思慮される。しかし本遺跡ではこの火山災害からの復旧に伴うと見られる畠2面が確認されているが、峰岸純夫は「一時水田部分を放棄して、火山灰土壌に強い畠作物(麦・豆、粟、稗など)の栽培」で「一時的に飢えをしのぎ、徐々に水田復旧を果たしていった」(峰岸1989)⁽¹⁾と解釈していることから、12世紀中頃には復旧されていたと推定される。

出土遺物が極端に少ないことから、天仁元年の火山災害後の遺構の細かい時期は特定できなかったが、中世の遺構としては溝、ヒトと獣をそれぞれに埋葬した土壙墓、火葬土坑(荼毘所)、土坑などがあつた。このうち火葬土坑は中世に典型的な形態のもので、土坑は東西、或いは南北の軸線上に作られていて、土地区画の栓の存在が窺われる。

2 竪穴住居—集落—

上述のように竪穴住居は9世紀から11世紀にかけてのもの判断されたのであるが、主に集落が営まれた時期は10世紀後半から11世紀前葉と見られるものであった。この集落は本遺跡の位置から推して、西に近接する田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡一体の集落に属するものと想定されるものである。また田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡は10世紀後半をピークとしているが、本遺跡の住居のうち10世紀後半期の住居が調査した住居軒数の45%を占めるのは、これに対応するものと考えられる。

さて、本遺跡の集落と同一の可能性が考慮される田口上田尻・田口下田尻遺跡に於ける集落は7世紀以降連綿と営まれ続けるのであるが、11世紀に入ると衰退し、そして集落が営まれなくなると報告されている(桜岡2012)。本遺跡でもその集落は11世紀に入ると衰退し、11世紀後半の住居は僅か1軒が確認されたに過ぎなかった。僅かな範囲を調査したに過ぎないため断定はできな

いが、隣接遺跡の遺構の状況から推しても田口上田尻・田口下田尻遺跡の同様の集落の盛衰が窺われるのである。

この現象、即ち11世紀に入ると竪穴住居軒数が減少するという現象は、県下に広く見られる(石守2006)。一方、峰岸純夫は11世紀の中央では関東を「亡弊の国」と称していたと述べているが、氏はその原因として「おそらく自然災害による不作に加えて、役夫工米の過酷な徴収が亡弊の原因として考えられる」としており(峰岸1989)、本遺跡の当該期の住居軒数の減少は、峰岸の指摘する「亡弊の国」と呼ばれた関東の状態を示すものである。

さて数十年或いは数百年単位の気候変動は太陽の黒点の増減、即ち太陽の黒点の増大期は温暖となり、太陽の黒点の減少期は寒冷になるという説(J.A.エディ 1984)があるが、3世紀から11世紀の竪穴住居軒数を調査した結果では竪穴住居軒数が温暖期には増え、寒冷期には減る傾向にあった(石守2006)。しかし9～11世紀は比較的温暖な時期であり本来であれば竪穴住居軒数が増える時期、即ち人口の増加する時期であると予測されるのに対し、本遺跡に於いては11世紀に入って竪穴住居が減少しているのである。その原因として竪穴住居と掘立柱建物が共に使用されてきた段階から掘立柱建物のみが建築される段階への移行の可能性も考えられるが、少なくとも本遺跡でもそうであるように11世紀後葉まで竪穴住居は認められるのであり、本遺跡に於いて掘立柱建物やそれを窺わせる遺構は確認されておらず、集落そのものの極度の減退或いは消滅が確認されるのである。従ってその消滅は建物の選択によるのではなく、当該期が温暖期に入る時期であることから、寧ろ峰岸が指摘するように災害と過酷な徴収といった人為的要因が大きいように思われるのである。

【註】

(1) 峰岸純夫(峰岸1989)の71・72頁

第2節 おわりに

関根赤城遺跡に於いては限定的な範囲ではあったものの発掘調査を行い、平安時代から中世にいたる時期の遺構を確認、調査し、既に述べてきたような成果を得たのである。

かつて遺跡が無いと言われた本遺跡に於いて、遺構を確認、調査し、出土遺物を得たことにより、少なくとも本遺跡周辺地域が平安時代以降人々の生活の場として、その営みが重ねられてきたことの確認された意義は小さくないものである。そして本報告書に掲載した埋蔵文化財は、語られることの少なかった本遺跡周辺地域の、特に古代に於ける歴史を探るうえで貴重な資料となるものと思われるのである。

【参考文献】

【第1章】

首都圏整備委員会(1958)『首都圏整備 首都圏整備委員会報告1 1956-1957』

首都圏整備委員会(1962)『首都圏整備』

首都圏整備委員会(1969)『首都圏整備委員会告示第1号』

首都圏整備委員会事務局監修(1969)『首都圏整備の長期展望』、165

【第3章】

【第1節】

群馬県地質図作成委員会(1995)『群馬県10万分の1地質図』

【第2節】(17頁所収分を除く)

群馬県文化事業振興会(1977)『上野国郡村史1 勢多郡(1)』

群馬県文化事業振興会(1981)『上野国郡村史6 群馬郡(3)』

勢多郡南橋村役場(1955)『南橋村誌』

北橋村役場(1975)『北橋村誌』

萩原 進(1959)『群馬県史 明治時代』、高城書店出版部

前橋市(1973)『前橋市史 第2巻』、前橋市史編さん委員会編

前橋市(1975)『前橋市史 第3巻』、前橋市史編さん委員会編

山崎 一(1971)『群馬県古城址の研究 上巻』、群馬県文化事業振興会

【第6章】

石守 晃(2001)「復元住居を用いた焼失実験再び」『研究紀要』19、

95-104、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

石守 晃(2006)「気候変動と竪穴住居の増減について」『研究紀要』

24、63-70、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

J.A.エディ(1984)『地球が寒かった日々 太陽から黒点が消えた70

年間』、原訳：桜井邦明、編：日経サイエンス編集部、日経サイ

エンス、原著はJohn A. Eddy (1976) "The Maunder Minimum,"

SCIENCE Volume192, Nummer4245、1198-1202

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(2002)『中内村前遺跡(1)』、

320-321

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(2012)『田口上田尻遺跡 下田

尻遺跡』

桜岡正信(2012)「第2節 第1項 古墳時代前期～平安時代の集落に

ついて」『田口上田尻遺跡 下田尻遺跡』、988-993、財団法人群

馬県埋蔵文化財調査事業団

笹澤泰史(2007)「群馬県における古代製鉄遺跡の出現と展開」『研究

紀要』25、61-80、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係(1979)「まとめ」『大八木

水田遺跡』、52-54、高崎市教育委員会

植崎修一郎(2007)「群馬県出土中世火葬遺構」『研究紀要』25、101-

120、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

能登 健(1983)「群馬県下における埋没田畠調査の現状と課題—火山

災害史への考古学アプローチ」『群馬県史研究』17、14-51

広瀬桃木両用水土地改良区(1994)『広桃用水史 通史編』、1-3

峰岸純夫(1989)『中世の東国 地域と権力』、東京大学出版会

出土遺物観察表

出土遺物観察表

1 面

89 区 2 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率		計測値 (cm、g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			底	口	径	厚	重			
1	第16図	黒色土器 椀	埋土 口縁部下位～高 台部	口	7.0	台	7.0	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転か)。高台部は低く、底部へら削り後の 付け高台。全面にへら磨きを施す。内面黒色処理。	

91 区 11 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率		計測値 (cm、g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			径	口	高	厚	重			
2	第16図 PL.40	石製品 不明石製 品	埋土 略完形	口	4.4	重	88.5	粗粒輝石安山岩	上面を敲打・粗く研磨したのち、径7mm・深さ2.4mmの孔 を穿つ。体部に縦位の研摩痕が残る。被熱して煤ける。	

89 区 82 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率		計測値 (cm、g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			口	長	幅	厚	重			
3	第16図	須恵器 羽釜	埋土 口縁部～胴部上 位片	口	19.8			粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形。	一部に炭素吸 着。
4	第16図	瓦 丸瓦	埋土 破片	長	6.3	厚	1.7	粗砂粒/還元焰・酸 化焰ぎみ/にぶい 黄橙	外面はナデ。内面に布目痕を残す。側端面は面取り2回。	

遺構外の出土遺物

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率		計測値 (cm、g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			口	長	幅	厚	重			
1	第17図 PL.40	須恵器 皿	埋土 2/3	口	10.0	高	2.9	粗砂粒・白色・黒色 鈹物粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は八の字状に延びる。底部切 り離し後の付け高台。	
2	第17図 PL.40	須恵器 皿	埋土 2/3	口	10.3	高	3.0	粗砂粒/還元焰・酸 化焰ぎみ/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	炭素吸着。
3	第17図 PL.40	鉄製品 不詳		長	5.8	厚	0.5		断面ほぼ正方形で一端に向かい細くなるが鋭利にはとがら ない。	
4	第17図 PL.40	鉄製品 角釘	埋土	長	5.8	厚	0.7		断面7×5mmほどの角釘で頭部はやや薄く横に広げられる か折り返し等の形状は確認できない。先は破損後錆に覆わ れる。	

2 面

89 区 1 号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率		計測値 (cm、g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
			口	底	径	厚	重			
1	第22図 PL.40	黒色土器 杯	床上4cm 2/3	口	9.8	高	1.7	粗砂粒・白色・黒色 鈹物粒/還元焰・や や酸化焰ぎみ/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。内面 黒色処理。全面にへら磨きを施す。	
2	第22図 PL.40	須恵器 杯	床上7～12cm 埋土 口縁一部欠	口	8.8	高	2.6	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	
3	第22図 PL.40	須恵器 杯	埋土竈掘り方 口縁一部欠	口	8.8	高	2.5	粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/浅黄橙	底部は小径。ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、 無調整。	
4	第22図 PL.40	須恵器 杯	床上8cm埋土 3/4	口	8.7	高	2.2	粗砂粒/酸化焰/浅 黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	
5	第22図 PL.40	須恵器 杯	床上8cm 1/2	口	8.0	高	2.1	粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	底部外面、炭 素吸着。
6	第22図 PL.40	須恵器 杯	床上9cm埋土 1/3	口	15.2	高	4.2	白色鈹物粒/酸化 焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	
7	第22図 PL.40	須恵器 杯	床上14cm 1/4	口	9.1	高	2.6	粗砂粒・白色軽石 粒/酸化焰/にぶい 黄橙	底部は小径。見込み部は横に張り出した後、屈曲、口縁部 は斜め上方に立ち上がる。ロクロ整形(右回転)。底部は回 転糸切り後、無調整。	
8	第22図	須恵器 椀	床上15cm 底部～高台部	底	8.9	台	9.0	粗砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	内外面とも炭 素吸着。
9	第22図 PL.40	須恵器 皿	床上9cm掘り方 1/2	口	8.3	高	2.3	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。 口縁部の一部は焼成前に変形。底部は器肉が薄く底抜けと なる。	
10	第23図 PL.40	須恵器 羽釜	床面直上 口縁部～胴部上 位片	口	25.0			粗砂粒/酸化焰/黒 褐	罫部は成・整形後に貼付。ロクロ整形。口縁部は横ナデ。 胴部は縦位のへら削り。	内外面とも炭 素吸着、黒色 味。
11	第23図	土師器 羽釜	床面直上 口縁部～胴部上 位片	口	24.6			粗砂粒/良好/にぶい 赤褐	口縁部の立ち上がりが長い。先端を横ナデ。以下罫部ま での間は縦位にナデ。胴部は斜位のへら削り。内面は斜横位 の指ナデ。	内外面とも炭 素吸着。

出土遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	6.8 124.39			
12	第23図	羽口	掘り方	長幅 6.6	厚重 6.8	6.8		羽口先端部の小破片。先端部は溶融し外形が見えないほどにガラス化・発泡し孔周辺を覆う。	
13	第23図 PL.40	鉄製品 鉄鏝	床面直上	長幅 2.3	厚重 19.5	1.0		細身で茎との境を一周する形で段を有する。茎はやや曲がり端部を欠く。	
14	第23図 PL.40	鉄製品 角釘か	掘り方	長幅 0.7	厚重 5.14	0.7		やや丸みを持つ角棒状の鉄製品で両端部とも破損し詳細不明。	
15	第23図 PL.40	鉄製品 角釘か	床上9cm	長幅 0.55	厚重 0.72	0.3		断面長方形の棒状鉄製品。	
16	PL.40	鉄製品 不詳	床上13cm	長幅 0.8	厚重 1.44			狭三角形をした薄い板状の鉄製品で、先端付近は断面薄い紡錘形でやや反り気味で尖る。他端は、斜めにおり曲がるように終わり錆化前の破損と見られる。	
17	PL.40	羽口	掘り方	長幅 6.6	厚重 26.5	1.9		羽口先端部破片、表面黒色でガラス化・発泡する。	
18	PL.40	鉄滓 流動滓	埋土	長幅 6.5	厚重 137.9	3.8		流動滓。表面黒～紫黒色で光沢なし、ガラス化・発泡し破断面には0.2～1cm程の気泡・空洞が見られる。表面及び破断面の一部に酸化土砂が付着する。	

89区2号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底	5.2	台			
1	第25図	黒色土器 椀	床上22cm 底部～高台部	底	5.2	台	5.6	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(回転方向不明)。底部切り離し後、内面黒色処理。一面にヘラ磨きを施す。
2	第25図	土師器 羽釜	埋土 口縁～鏝部片	口	23.2			粗砂粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。

89区3号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	14.8 7.8	高 台			
1	第28図 PL.40	須恵器 椀	床上6cm埋土 1/4	口 底	14.8 7.8	高 台	6.3 8.8	粗砂粒・白色粘土 粒/還元焰・酸化焰 ぎみ/にぶい黄橙	口唇部は屈曲後、強く外反。ロクロ整形(右回転)。高台部は脚が長い。底部は回転糸切り後の付け高台。
2	第28図 PL.40	土師器 羽釜	埋土 口縁～胴部上位 片	口	23.4			粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/にぶい赤 褐	口縁部は歪む。鏝部は成・整形後に貼付。口縁部は横ナデ。胴部はナデに近いヘラ削り。内面は横位のナデ。
3	第28図 PL.40	石製品 砥石	床上9cm 1/2	長 幅	8.1 3.0	厚 重	2.7 63.7	低沢石	四面使用。背面側は良く使い込まれ、研ぎ減る。

89区5号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
1	第30図	須恵器か 羽釜	埋土 鏝部片					粗砂粒/酸化焰/明 赤褐	ロクロ整形。

89区6号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底	6.7	台			
1	第33図	須恵器 椀	床面直上 底部～高台部	底	6.7	台	6.3	粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。
2	第33図	須恵器 甕	竈掘り方 胴部片					小礫・粗砂粒/還元 焰/灰	紐づくり後、叩き整形。内外面ともナデ。

89区8号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	14.0 6.7	高 台			
1	第37図 PL.41	黒色土器 椀	竈床面直上 1/2	口 底	14.0 6.7	高 台	5.1 7.1	粗砂粒・白色・黒色 鈹物粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。全面にヘラ磨きを施す。内面黒色処理。
2	第37図 PL.41	黒色土器 椀	埋土 1/2	口 底	13.8 7.4	高 台	5.7 7.2	粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は低い。底部は回転糸切り後の付け高台。内面にヘラ磨き。
3	第37図 PL.41	須恵器 杯	床上6cm 2/3	口 底	9.9 4.7	高	3.6	粗砂粒・白色軽石 ・赤黒色粘土粒/酸 化焰/浅黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。底部の切り離し粗雑。
4	第37図 PL.41	須恵器 杯	床面直上 2/3	口 底	9.5 6.4	高	2.4	粗砂粒/還元焰・酸 化焰/ぎみ/浅黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。
5	第37図 PL.41	須恵器 杯	竈床上5cm 口縁一部欠	口 底	8.8 3.9	高	3.4	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	底部は小径。ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。底部の切り離しは粗雑。
6	第37図 PL.41	須恵器 杯	床面直上 2/3	口 底	10.3 4.8	高	3.3	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	口縁部一部歪んでいる。ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。
7	第37図 PL.41	須恵器 杯	竈床上4cm 底部一部欠	口 底	10.3 5.4	高	3.2	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。

出土遺物観察表

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口 底	高					
8	第37図 PL.41	須恵器 杯	埋土 1/4	口 底	9.6 4.2	高	3.3	粗砂粒・白色軽石 ・赤黒色粘土粒/酸化 焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。底部 の切り離し粗雑。	
9	第37図	須恵器 杯	床上19cm 1/2	口 底	9.5 4.8	高	2.7	粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	軽量。
10	第37図	須恵器 杯	床上6cm 1/4	口 底	10.4 6.0	高	3.3	粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
11	第37図	須恵器 碗か	埋土 口縁部片	口 底	10.3	高		粗砂粒・白色軽石 粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形(右回転か)。	外面磨滅。
12	第37図 PL.41	須恵器 碗	竈埋土 1/2	口 底	14.0 6.8	高台	6.2 8.4	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/にぶ い橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は脚部がやや長い。底部回転 糸切り後の付け高台。	
13	第37図	須恵器 碗	床上8cm 底部～高台部	口 底	6.3	高台	5.8	粗砂粒/酸化焰/浅 黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三角形で低い。底部は 回転糸切り後の付け高台。	
14	第37図 PL.41	須恵器 皿	床面直上 1/2	口 底	10.1 5.2	高台	3.1 6.8	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	外面磨滅。
15	第37図 PL.41	土師器 甕	床面直上 口縁部～胴部上 位片	口	22.0			粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/橙	口縁部は横ナデ。胴部最上位は斜横位、上位以下は斜縦位 のヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	内面にわずかに 黒色の付着 物。
16	第37図	須恵器 羽釜	竈床上13cm 口縁部～胴部上 位片	口	22.8			粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形。口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラ削りか。	
17	第37図	須恵器 羽釜	竈床面直上 口縁部～胴部上 位片	口	28.0			粗砂粒/酸化焰/に ぶい赤褐	ロクロ整形。口縁部は横ナデ。胴部は縦位のナデ。	
18	第37図	緑釉陶器 杯か	埋土 口縁部片					精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。内外面に施釉するも大半が剥 落。	

89区9号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口 底	高					
1	第39図 PL.41	須恵器 杯	床上10cm埋土 1/4	口 底	10.3 5.1	高	3.1	粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。底部 の切り離し粗雑。	外面磨滅。
2	第39図	須恵器 杯	埋土 口縁部片	口	11.5			粗砂粒/酸化焰/浅 黄橙	ロクロ整形(右回転)。	
3	第39図	須恵器 杯	埋土 口縁部下半～底 部片	底	7.2			粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	内外面炭素吸 着、黒色処理 か。
4	第39図 PL.41	須恵器 碗	埋土 完形	口 底	11.4 5.8	高台	4.3 6.0	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。 口縁部の一部は焼成前に変形。	
5	第39図 PL.41	灰釉陶器 段皿	掘り方 口縁一部欠	口 底	11.2 6.3	高台	2.2 5.9	精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は低い。底部切り離し後の付 け高台。釉は口縁部上半に漬け掛け。	内面摩耗、外 面に煤付着。 虎溪山1号窯 式。
6	第39図 PL.41	鉄製品 角釘か	床上4cm	長 幅	2.4 0.6	厚 重	0.6 0.83		断面四角形の小型の棒状鉄製品で劣化し全体が錆びに覆わ れ詳細は不明。	

89区10号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口 底	高					
1	第42図 PL.41	須恵器 杯	床上4cm 破片	口 底	14.5 6.0	高	3.4	粗砂粒少/酸化焰/ 浅黄橙	ロクロ整形(左回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	
2	第42図	土師器 土釜	床面直上 口縁部～胴部上 位片	口	26.9			小礫・粗砂粒/良好 /にぶい褐	器形の歪み有り。口縁部は横撫で。胴部は縦位に弱いヘラ 削り、内面は横斜位のナデ。	炭素吸着。
3	第42図	土師器 甕	竈床上4cm 口縁～胴部上位 片	口	23.7			粗砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は横撫で。胴部上位は横位にヘラナデ、以下縦位に 弱いヘラ削り、内面は横位のナデ。	炭素吸着。
4	第42図	土師器 甕	埋土 口縁部片	口	27.6			粗砂粒/良好/にぶ い黄褐	口縁部は外反強く、短い屈曲、外方を向く。胴部内外面と も横位のナデ。	外面煤付着。
5	第42図 PL.41	石製品 砥石	掘り方体部破片	長 幅	6.9 6.4	厚 重	6.3 299.9	粗粒輝石安山岩	四面使用。粗粒石材を用いた荒砥。背面側に縦位の粗い線 条痕が残る。	切り砥石

89区11号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口 底	高					
1	第45図 PL.41	須恵器 杯	埋土 完形	口 底	8.6 5.2	高	2.0	粗砂粒・白色軽石 ・黒色鈹物粒/酸化 焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	口唇部内面の 一部に煤付着、 灯明に使用さ れたか。

出土遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				底	台	高				
2	第45図	須恵器 椀	埋土 口縁部下位～高 台部片	底	6.7	台	7.8	粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	
3	第45図 PL.41	須恵器 椀	床上25cm竈掘り 方 1/3	口 底	20.4 9.2	高 台	6.4 10.2	粗砂粒・細砂粒/酸 化焰/にぶい黄橙	口縁部は大きく外反して立ち上がる。ロクロ整形(右回転)。高台部は、底部切り離し後の付け高台。	口縁部内面に 黒色の付着物。
4	第45図 PL.41	土師器 土釜	竈床上30cm掘り 方 口縁部～胴部上 半	口	26.4			粗砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は横ナデ。胴部は最上位を除き縦位にヘラ削り、内 面は横位にヘラナデ。	外面被熱。
5	第46図 PL.41	土師器 土釜	竈床上7cm掘り 方 1/4	口 底	26.0 10.6	高	31.4	粗砂粒・黒色鉍物 粒・雲母/良好/に ぶい赤褐	器形はやや歪んでいる。口縁部は屈曲後、短く立ち上がる、 横ナデ。胴部上位から中位は縦位のヘラナデ。下位は縦位 のヘラ削り、底部もヘラ削り。内面は横位にヘラナデ。	
6	第46図	土師器か 甕?	埋土 胴部下位～底部 片	底	8.0			粗砂粒/良好/浅黄 橙	外面胴部最下位の横位にヘラ削り。底部はナデ。内面は指 ナデ。	胴部径大きく なる可能性あ り。器面磨滅。
7	第46図	土師器か 羽釜	埋土 鏝部～胴部中位 破片					粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	胴部は縦位にヘラ削り、内面は横位のナデ。鏝部は成・整 形後の貼付。	被熱のため変 質。
8	第46図 PL.41	鉄製品 鉄鎌	掘り方	長 幅	9.9 2.0	厚 重	1.0 12.2		先端は三角形で棘を持たずに緩やかに狭くなり、茎との境 は袴状に広がり段を持って茎に移行する。茎に木質等の痕 跡は見られず端部は劣化後の破損する。	

89区 12号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高	台				
1	第48図 PL.42	須恵器 杯	埋土 口縁部片	口 底	13.8 6.8	高	3.8	細砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。	
2	第48図	須恵器 椀	埋土 体部～高台部 1/2					粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後に貼付。	外面黒色の付 着物。高台部 欠損後も使用 か。
3	第48図	灰釉陶器 段皿	埋土 口縁～底部片	口 底	11.4 6.6	高 台	2.2 6.0	夾雑物少/還元焰/ 灰白	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部切り離し後の付け高 台。低い。	内面磨耗顕著。 虎溪山1号窯 式。

89区 13号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				底	高	台				
1	第53図	黒色土器 椀	埋土 底部～高台部片	底	7.8	台	8.0	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は回転糸切り後の付け高台。 口縁部は横位、底部は一方向にヘラ磨き。内面黒色処理。	外面磨滅。
2	第53図 PL.42	須恵器 杯	床上18cm埋土 口縁一部欠	口 底	9.6 6.6	高	2.2	粗砂粒/酸化焰/橙	底部径は大きい。ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り 後、無調整。	
3	第53図 PL.42	須恵器 杯	床面直上 口縁一部欠	口 底	8.9 4.9	高	2.3	粗砂粒/酸化焰/浅 黄橙	ロクロ整形(左回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	軽量。
4	第53図 PL.42	須恵器 杯	床上18cm 1/3	口 底	9.2 5.0	高	2.7	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	底部小径。ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無 調整。	
5	第53図	須恵器 杯	竈埋土 口縁部～底部片	口 底	9.8 5.0	高	2.1	粗砂粒/還元焰・軟 質/にぶい黄橙	底部小径。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	炭素吸着。
6	第53図	須恵器 杯	床上8cm 1/4	口 底	10.0 7.0	高	2.0	粗砂粒・白色鉍物 粒/酸化焰/浅黄橙	底部径は大きい。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、 無調整。底部の切り離し粗雑。	
7	第53図 PL.42	須恵器 椀	埋土 1/3	口 底	9.2 5.4	高 台	3.8 5.5	粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は回転糸切り後の付け高台。	
8	第53図	須恵器 杯	床上18cm 口縁部片	口	13.6			粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/浅黄 橙	ロクロ整形(右回転)。	
9	第53図 PL.42	須恵器 椀	床上5cm 高台部片	底	5.8	台	8.0	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部切り離し後の付け高 台。	内面炭素吸着、 黒色処理か。
10	第53図	須恵器 椀	埋土 底部～高台部	底	6.4	台	7.0	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	
11	第53図	灰釉陶器 椀	床上9～10cm 体部～高台部片	底	8.0	台	7.7	精選/還元焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転か)。高台部は断面三角形。底部切り離 し後の付け高台。口縁部内面に釉が良く残る。	被熱を受け変 質・変色。虎溪 山1号窯式。
12	第53図	灰釉陶器 皿か	埋土 口縁部片	口	10.9			精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(左回転か)。	内外面に施釉。
13	第53図 PL.42	緑釉陶器 皿	埋土 口縁部下位～底 部片	底	7.0	台	7.0	精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(回転方向不明)。高台部は底部切り離し後の付 け高台。	内外面に施 釉、外面剥離。 東海産。
14	第54図	灰釉陶器 壺	床上10cm埋土 頸部～胴部下位 片					精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転か)。肩部以下に回転ヘラ削り。外面上 半部に釉。	

出土遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	厚	重			
15	第54図	須恵器 羽釜	埋土 口縁部～鏝部片	口	20.8		粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形。口縁部は横ナデ。胴部はナデ。内面は横位の ナデ。鏝部は断面三角形。成・整形後の貼付。	
16	第54図	須恵器 甕	掘り方 頸部片				粗砂粒・白色鉾物 粒/還元焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形。口縁部は平行叩き目痕に横ナデ を重ねる、内面は横ナデ。胴部は叩き整形、内面はナデ。	内面胴部に煤 付着。
17	第54図	須恵器 大甕	埋土 頸部片				粗砂粒少/還元焰/ 灰	紐づくり後、ロクロ整形。口縁部は横ナデ。胴部は平行叩 き目痕。内面はナデ。	
18	第54図 PL.42	土製品 有孔円板	埋土 完形	長 幅	6.1 厚 6.1 厚 1.0 0.7		粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形。底部回転糸切り後、無調整の須恵器杯の底部 を二次利用。周縁部の割れ口を円板状に整え、底部中央に 直径0.7cm程の小孔を開けている。	内外面とも磨 耗。
19	第54図 PL.42	不明 土器	床上5cm 不明	長 幅	6.1 厚 2.8	1.8	粗砂粒/酸化焰/に ぶい赤褐	横断面が扁平な棒状を呈する。両端とも欠損するが図示し た上位は弱く反り返る。器面にはナデが施される。	被熱。
20	第54図 PL.42	鉄製品 紡錘車	掘り方	長 幅	5.0 厚 5.0 重	0.2 27.4		紡錘車の紡輪で、中央の孔を含め全体が錆びに覆われ、紡 軸は見つかっていない	
21	第54図 PL.42	鉄製品 刀子	床上7cm	長 幅	6.3 厚 1.4 重	0.8 6.9		棟・刃側ともに関を持つ刀子で刃は研ぎ減りのためか細く 短い、先端は破損後錆化している。	
22	PL.42	礫石器 不明石製品	床面直上 完形	長 幅	4.5 厚 3.8 重	2.6 73.3	粗粒輝石安山岩	明瞭な使用痕はなく、機能・用途の詳細は不明。被熱して 焼ける。同サイズの円礫が23号住居にある。	球形礫

89区 14号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口	高	台				
1	第55図 PL.42	須恵器 杯	竈床面直上掘り 方 3/4	口 底	15.0 高 7.5	4.9	粗砂粒/還元焰/酸 化焰ぎみにぶい 橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転ヘラ切り。		
2	第55図 PL.42	須恵器 杯	床面直上 完形	口 底	8.7 高 6.1	1.7	粗砂粒・細砂粒/酸 化焰/にぶい黄橙	器高低い。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。		
3	第55図	須恵器 碗	埋土 底部～高台部片			台	8.7	粗砂粒/酸化焰/浅 黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	
4	第55図	須恵器 碗	掘り方竈埋土 底部～高台部片					粗砂粒/還元焰・軟 質/灰黄褐	ロクロ整形(左回転か)。高台部は底部切り離し後の付け高 台。	炭素吸着。
5	第55図 PL.42	灰釉陶器 碗	床上25cm 1/3	口 底	15.4 高 8.1	7.4 8.4	精選・白色鉾物粒 少/還元焰/浅黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三日月形。底部回転糸 切り後に貼付。釉は口縁部内外面に漬け掛け。	虎溪山1号窯 式。	

89区 15号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口	高	台				
1	第59図 PL.42	黒色土器 碗	床上12cm 1/2	底	6.9 台	7.0	粗砂粒・白色鉾物 粒少/酸化焰/灰褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三角形で低い。底部回 転糸切り後の付け高台。口縁部に横方向、底部に十字方向 にヘラ磨き。内面黒色処理。	外面も黒色味。	
2	第59図	黒色土器 碗	埋土 口縁部下半～高 台部	底	6.5 台	6.8	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は八の字状に外反。底部回転 糸切り後の付け高台。全面にヘラ磨きを施す。内面黒色処 理。	内面一部磨滅。 理。	
3	第59図 PL.42	須恵器 杯	掘り方 2/3	口 底	10.3 高 4.7	3.4	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。		
4	第59図 PL.42	須恵器 杯	埋土 2/3	口 底	9.2 高 5.3	2.6	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	外面に炭素吸 着。黒色。	
5	第59図 PL.42	須恵器 杯	埋土2/3	口 底	8.8 高 4.6	3.0	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。		
6	第59図	灰釉陶器 碗	埋土 口縁片	口	12.1			精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。下位に回転ヘラ削り。施釉は漬け掛 け。	虎溪山1号窯 式。
7	第59図	土師器 甕	床上8cm 口縁～胴部上位 片	口	23.7			粗砂粒/良好/灰黄 褐	胴部はもっと張る可能性があり。口縁部は横ナデ。胴部は 横位にヘラ削り、内面は横位にヘラナデ。	炭素吸着。
8	第59図	須恵器 羽釜	竈埋土 鏝部～胴部上位 片					粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形。口縁部は横ナデ。胴部は縦位にヘラ削り、内 面は斜横位のナデ。鏝部は成・整形後の貼付。	被熱のため変 質。
9	第59図	須恵器 羽釜	埋土 口縁部～鏝部片	口	24.5			粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形。口縁部は横ナデ。胴部は縦位にヘラ削り、内 面は横位のナデ。鏝部は断面三角形。成・整形後に貼付。	炭素吸着。

89区 17号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口	高	台				
1	第62図	須恵器 広口瓶	竈埋土 胴部下位～底部 片					粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形。付け高台。胴部、高台部との接合部分の直上 に押圧を兼ねた強いヘラナデ。内面は横ナデ。	

89区 19号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口	高	台			
1	第67図 PL.42	須恵器 碗	床面直上 2/3	口 底	10.0 高 5.6	4.2 5.0	粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転切り離し後の付け 高台。	

89区 20号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口 底	高	重				
1	第70図 PL.42	須恵器 杯	竈掘り方埋土 1/2	口 底	9.3 4.6	高	3.3	粗砂粒・白色軽石 ・黒色鈹物粒/酸化 焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。切り 離しは粗雑。	内外面とも炭 素吸着、底部 磨滅。
2	第70図 PL.42	須恵器 椀	床上10cm 完形	口 底	11.0 6.6	高 台	4.5 6.3	粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三角形、底部回転糸切 り後の付け高台。	
3	第70図 PL.42	須恵器 椀	床面直上 口縁一部欠	口 底	10.4 6.1	高 台	4.0 5.7	粗砂粒・白色軽石 ・赤色粘土粒/酸化 焰/浅黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三角形で低い。底部回 転糸切り後の付け高台。	軽量。
4	第70図 PL.42	土師器 羽釜	竈床面直上床上 5~6cm埋土 口縁部~胴部中 位片	口	23.4			粗砂粒・赤黒色粘 土粒/良好/橙	鏝部は成・整形後に貼付。口縁部は横ナデ。胴部は横ナデ 後斜縦位にヘラ削り、内面は横位にヘラナデ。	被熱・変質・変 色。
5	第70図 PL.42	羽口	埋土	長 幅	10.6 9.0	厚 重	8.7 738.5		ほぼ完形の羽口、先端は黒色ガラス化し発泡、一部に酸化 鉄付着する。側面を廻りなで状の整形痕が残る。	
6	第70図 PL.42	羽口	床上11cm	長 幅	10.9 8.6	厚 重	5.5 296.8		羽口の半裁破片で基部・先端部とも欠く。先端側では被熱 痕跡が高まるがガラス化・発泡は見られない。側面には撫 でと見られる痕跡がのこるとともに直径3mmほどの円形の 凹みが7箇所ほど残っている。	
7	第70図 PL.42	鉄滓 椀型鍛冶 滓	掘り方	長 幅	7.3 4.9	厚 重	2.7 89.78		椀型鍛冶滓破片で、一緒に出土に破片が接合した。表面は 茶褐色で断面では発泡が見られる。	
8	第70図 PL.42	鉄滓 椀型鍛冶 滓	床上7cm	長 幅	8.1 4.9	厚 重	2.3 93.82		椀型鍛冶滓破片で、表面は茶褐色の酸化土砂に厚く覆われ る。断面では炭および植物痕が見られる。	
9	第70図 PL.42	鉄滓 椀型鍛冶 滓	床上4cm	長 幅	8.7 7.7	厚 重	3.6 159.7		椀型鍛冶滓破片で、表面は茶褐色の酸化土砂に覆われるが、 一部に植物痕が見られる。	
10	第70図 PL.42	鉄製品 不詳	掘り方	長 幅	7.9 2.6	厚 重	0.6 11.17		雁又鋸に似た形状の鉄製品だが、端部は鉄板を襟元の様に 折り曲げ造られたもので用途不明。	

89区 21号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口 底	高	重				
1	第74図 PL.43	黒色土器 椀	床上6cm 口縁部下位~高 台部	口 底	8.0	台	8.6	粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は低い。底部回転糸切り後の 付け高台。全面にヘラ磨きを施す。内面黒色処理。	外面の一部に も炭素吸着。
2	第74図 PL.43	須恵器 杯	竈床面直上埋土 2/3	口 底	9.7 5.3	高	3.3	粗砂粒・白色軽石 ・黒色鈹物粒/還元 焰・酸化焰ぎみ/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	内外面とも炭 素吸着、黒色。
3	第74図 PL.43	須恵器 杯	掘り方 1/2	口 底	10.0 4.6	高	3.1	粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	
4	第74図 PL.43	灰釉陶器 椀	埋土 1/4	口 底	16.4 7.8	高 台	6.8 7.8	精選/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は回転糸切り後の付け高台。 底部は糸切り後の始末を行っていない。	虎溪山1号窯 式。
5	第74図 PL.43	須恵器 甕	竈掘り方 口縁部~胴部下 位1/3	口	15.4			粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形(右回転)。口縁部は横ナデ。胴部は整形後、縦 位にヘラ削り。	被熱、変色、 変質。
6	第74図 PL.43	土師器 羽釜	床上8cm埋土 口縁~胴部中位 片	口	22.8			粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部は縦位にヘラ削り、内面は横位にヘ ラナデ。鏝部は断面三角形、成・整形後に貼付。	被熱・外面炭素 吸着。
7	第74図 PL.43	須恵器 羽釜	埋土掘り方 口縁部~鏝部片	口	22.0			粗砂粒・白色軽石 ・赤色粘土粒/酸化 焰/明赤褐	ロクロ整形(右回転)。口縁部は横ナデ。胴部は縦位にヘラ 削り、内面は横位のナデ。鏝部は胴部を成・整形後に貼付。	外面の一部に 煤付着。
8	第74図	羽口	床面直上	長 幅	7.2 6.6	厚 重	3.7 222.7		羽口先端部側破片、先端部は灰~黒色でガラス化・発泡す る。側面にはわずかにひび割れが見られるとともになでの 痕跡がのこる。	
9	第74図 PL.43	羽口	床面直上	長 幅	9.9 9.9	厚 重	9.9 780.9		ほぼ完形の羽口、先端は黒色ガラス化し発泡、一部に褐色 部分が見られる。現存長よりも基部外径の方が大きく、特 に基部端で広がる形状を持つ。孔内に三条の皺上の亀裂が 見られる。	
10	第74図 PL.43	羽口	床面直上	長 幅	7.9 7.8	厚 重	4.4 178.9		羽口の半裁破片で基部・先端部とも欠く。一部にガラス化・ 発泡した部分が見られる。側面には撫でと見られる痕跡が のこる。	
11	第74図 PL.43	鉄製品 不詳	床上9cm	長 幅	6.4 0.7	厚 重	0.7 3.09		やや丸みを持つ角棒状の鉄製品で端部は角張り反対側は劣 化破損する。	
12	第74図 PL.43	鉄製品 不詳	埋土	長 幅	2.7 0.8	厚 重	0.7 1.62		やや丸みを持つ角棒状の鉄製品で両端部劣化破損する。	

出土遺物観察表

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				長 幅	厚 重	重 量			
13	第74図 PL.43	鉄製品 不詳	埋土	長幅 4.0	厚重 0.8	0.7 2.27		やや丸みを持つ角棒状の鉄製品で両端劣化破損する。	
14	PL.43	羽口	床面直上	長幅 4.6	厚重 4.6	3.5 59.2		羽口破片表面黒色化し細かくひび割れる。断面に植物痕が見られる。	
15	PL.43	羽口	床土25cm	長幅 8.1	厚重 6.8	4.1 120.7		羽口先端部破片、表面黒色でガラス化し発泡、端部では垂れ下がる。断面に植物痕跡が見られる	
16	PL.43	羽口	床土19cm	長幅 4.6	厚重 3.2	2.5 29.5		羽口先端部破片、表面黒色でガラス化。断面に植物痕跡が見られる	
17	PL.43	羽口	埋土	長幅 2.8	厚重 5.7	2.5 35.2		羽口先端部破片、表面黒色でガラス化し発泡。外系推定7cm孔推定径2cm。	

89区 23号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口 底	高 台	重 量			
1	第77図	黒色土器 碗	床上10cm 口縁部～高台部 片	口底 11.6	高台 5.6	5.7 6.4	粗砂粒/酸化焰/灰 黄褐	ロクロ整形(右回転)。口縁部は横位、底部は数方向にヘラ磨きを施した後、底部から口縁部にかけて放射状にヘラ磨きを重ねる。口縁部先端には横位のヘラ磨き。内面黒色処理。	
2	第77図 PL.43	須恵器 杯	埋土 口縁一部欠	口底 9.6	高 5.4	2.9	粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	
3	第77図 PL.43	須恵器 杯	埋土 1/4	口底 8.8	高 4.5	2.4	粗砂粒・白色軽石・ 赤黒色粘土粒/酸化 焰/にぶい黄橙	底部は小径。口縁部は見込み部が横に張った後屈曲、斜め上方に外反する。ロクロ整形(右回転)。底部は無調整。	
4	第77図	須恵器 杯	床面直上 口縁～体部片	口 13.0			粗砂粒少/還元焰・ 酸化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(左回転)。外面口縁部中位は回転ヘラ削り。	
5	第77図	須恵器 杯	埋土 破片	口 12.0			粗砂粒・白色軽石・ 赤色粘土粒/還元 焰/にぶい褐	ロクロ整形(右回転か)。	内外面とも煤と考えられる 黒色の付着物。
6	第77図	須恵器 杯	埋土 1/3	口 14.0			粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形(右回転)。	口縁部先端に 炭素吸着。
7	第77図 PL.43	須恵器 碗	床面直上 3/4	口底 9.7	高台 5.6	3.9 5.6	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/にぶ い橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	
8	第77図 PL.43	須恵器 碗	床上5cm 3/4	口底 11.4	高台 6.4	5.8 6.7	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/灰黄褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転切り離し後の付け高台。	内外面炭素吸 着。黒色処理か。
9	第77図 PL.43	須恵器 碗	掘り方 3/4	口底 10.9	高 6.1	4.8	粗砂粒・輝石或いは 角閃石か・黒色 鈹物粒/酸化焰/浅 黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三角形。底部回転糸切り後の付け高台。	
10	第77図 PL.43	須恵器 碗	床上12cm 3/4	口底 14.2	高台 7.3	5.1 8.2	粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は八の字状に外傾。底部回転糸切り後の付け高台。	
11	第78図 PL.43	須恵器 碗	床上8～15cm 3/4	口底 15.3	高台 7.0	6.7 9.0	粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は脚部が長い。底部回転糸切り後の付け高台。	
12	第78図 PL.43	須恵器 碗	床上17cm 3/4	口底 14.4	高台 6.8	6.5 8.5	粗砂粒・白色軽石・ 赤黒色粘土粒/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転切り離し後の付け高台。	
13	第78図 PL.43	須恵器 碗	床上15cm 1/2	口底 14.0	高台 7.4	5.4 8.4	粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい黄 褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	内外面炭素吸 着。黒色処理か。
14	第78図 PL.43	須恵器 碗	床上14cm 口縁部～高台部 片	口底 11.0	高台 5.5	5.3 6.2	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転切り離し後の付け高台。	内外面炭素吸 着。黒色処理 を施すが殆ど 磨滅。
15	第78図 PL.43	灰釉陶器 碗	埋土 体部片～高台部	底 6.8	台	7.0	精選/還元焰/灰黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三日月形、底部切り離し後の付け高台。釉は口縁部内外面に見られる。刷毛掛けか。	虎溪山1号窯 式。
16	第78図 PL.44	灰釉陶器 壺	床上24cm 胴部下半～底部 片	底 12.0	台	11.7	精選/還元焰/灰白	紐作り成形。ロクロ整形後、胴部に回転ヘラ削り。高台部は低い断面台形の付け高台。貼付後、周辺部に回転ヘラ削り。	
17	第78図	土師器 羽釜	床面直上 口縁部～胴部上 位片	口 22.2			粗砂粒/酸化焰か/ 褐灰	口縁部は斜横位にナデ。胴部は縦位に弱い削り、内面は横位のナデ。	内外面炭素吸 着。黒色。
18	第78図 PL.44	須恵器 羽釜	床上9～11cm 口縁部～胴部 中位片	口 19.6			粗砂粒/酸化焰/に ぶい赤褐	ロクロ整形。成・整形後に鏝部貼付。口縁部は横ナデ、胴部は縦位のヘラ削り。胴部径は大きくなる可能性あり。	内外面炭素吸 着。
19	第78図	須恵器 甕	床上20cm 口縁部下位～頸 部片				粗砂粒/還元焰・酸 化焰/にぶい黄褐	ロクロ整形。内外面は横撫で。	

出土遺物観察表

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
20	第78図 PL.44	土製品 不明	床上53cm埋土 破片			孔	0.5 粗砂粒/良好/橙	残存部分は球状を呈する。器面には焼成前にクシ状工具で開けられた小孔(未貫通)が6ヶ所残る。孔の直径は0.5cm。	
21	第78図 PL.44	鉄製品 鉄鏃	埋土	長 幅	10.3 1.8	厚 重	1.2 17.6	細身で茎との境を一周する形で段を有する。のかつぎ部分で浅く茎で深く(約110°)折れ曲がるがこれは劣化前の変形である。	
22	第78図 PL.44	鉄製品 槍鉋	床面直上	長 幅	13.4 1.7	厚 重	1.3 21.15	細身の槍鉋で砂泥を巻き込み錆化し脆弱。茎は断面長方形で端部に向かい細くなり端部はとがる、木質等の痕跡は見られない	
23	第78図 PL.44	鉄製品 刀子	床面直上	長 幅	12.7 1.5	厚 重	0.9 15.29	中央で劣化破損する刀子。棟側に僅かな関を持つが羽側はなだらかに移行する、茎に錆に覆われ脆弱なため木質の残存は不明。	
24	第78図 PL.44	鉄製品 鉄鏃	床面直上	長 幅	4.9 1.0	厚 重	0.8 5.08	両端が劣化破損するが鉄鏃ののかつぎ～茎の破片と見られる。茎に木質等の痕跡は見られない。	
25	PL.44	鉄滓 流動滓	床面直上	長 幅	4.4 5.4	厚 重	3.9 129.9	流動滓破片。表面黒色でガラス化・発泡。表面・破断面の一部に酸化土砂が付着する。	
26	PL.44	礫石器 不明石製 品	床上5cm 完形	長 幅	4.8 3.9	厚 重	3.3 82.5	粗粒輝石安山岩	明瞭な使用痕はなく、機能・用途の詳細は不明。同サイズの球形礫の円礫が13号住居にある。

89区 25号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
1	第80図	須恵器 椀	竈埋土 体部～高台部片				粗砂粒・黒色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	外面に黒色の 付着物。	
2	第80図 PL.44	土師器 羽釜	床上9cm竈床面 直上掘り方 2/3	口 底	22.2 5.6	高	24.0	粗砂粒・白色鈹物 粒/良好/にぶい赤 褐	口縁部は横ナデ。罅部は成・整形後に貼付。胴部は縦位にへら削り。底部内面は横位のへらナデ。	炭素吸着、黒 色味。破砕し た後に被熱し ている。

89区 26号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
1	第82図 PL.44	黒色土器 椀	埋土 1/4	口 底	11.0 6.1	高	4.1	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は短く、八の字状に外傾。底部切り離し後の付け高台。口縁部は横位に、底部は一方方向にへら磨き。口縁部先端はへら磨き。内面黒色処理。	口縁部の先端 も炭素吸着。
2	第82図 PL.44	須恵器 杯	掘り方 完形	口 底	9.2 4.7	高	2.1	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	焼成前、成形時に底部に小穴。ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
3	第82図 PL.44	須恵器 杯	床上6cm 完形	口 底	9.1 5.2	高	2.1	粗砂粒/酸化焰/浅 黄橙	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。	外面に黒色の 付着物。
4	第82図 PL.44	須恵器 杯	床上11cm 1/2	口 底	9.0 5.2	高	2.8	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部の切り離しは粗雑。	
5	第82図 PL.44	須恵器 杯	床上4cm 2/3	口 底	9.0 5.5	高	3.2	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/にぶ い黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、ナデ調整。	
6	第82図 PL.44	鉄製品 不詳	床面直上	長 幅	3.3 0.5	厚 重	0.5 1.35		断面正方形で一端に向かい細くなるが端部でも2mm角でとがらない。	

90区 27号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
1	第84図	黒色土器 椀	掘り方 口縁部下半～底 部片	底	8.0			粗砂粒/不明/黒	ロクロ整形(右回転か)。高台部は付け高台であるが、剥落している。底部内面にはへらによる幾何学文状の磨きが施されている。内外面とも黒色処理。	
2	第84図 PL.44	須恵器 杯	床上13cm～16 cm 1/3	口 底	11.0 5.6	高	2.8	粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
3	第84図 PL.44	須恵器 杯	床面直上 2/3	口 底	10.6 4.7	高	3.2	粗砂粒・赤色粘土 粒/酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	

91区 28号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
1	第85図	土師器 甕	竈床上6cm 口縁部片	口	17.2			粗砂粒・黒色鈹物 粒/良好/にぶい赤 褐	口縁部は横ナデ、輪積み痕を残す。頸部内面は横位のハケ目を残す。	内外面に黒色 の付着物。

出土遺物観察表

91区 29号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
1	第87図	須恵器 羽釜	床上22cm 鏝~胴部上位片				粗砂粒/酸化焰/灰 黄褐	ロクロ整形。鏝部は成・整形後の貼付。	胴部以外は煤 付着。
2	第87図 PL.44	土製品 土錘	床上6cm 完形	長 幅	4.1 1.1	厚 孔	1.1 0.3	細砂粒/良好	小型で直径が細い。一方の小口面はヘラ切り後、指頭で押 さえて整形を終えている。器面は丁寧なナデ。4.34g
3	第87図	鉄製品 不詳	埋土	長 幅	1.9 0.6	厚 重	0.6 1.84		一端は平たくその先は断面四角で緩やかに曲がりしの字形 をするが木質等は見られない。釘か
4	第87図 PL.44	鉄製品 鉄鏃	床上5cm	長 幅	17.8 1.1	厚 重	0.8 14.49		狭三角形で小型の先端に対し長いのかつぎを有し、茎との 境は棘を持たず段をもって細くなる。茎には木質等は見ら れない。

91区 30号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
1	第90図 PL.44	須恵器 杯	埋土1/3	口 底	11.2 5.8	高	2.8	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
2	第90図 PL.44	須恵器 椀	竈埋土 口縁一部欠	口 底	14.8 7.4	高 台	6.9 8.8	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は脚部がやや長い。底部切り 離し後の付け高台。	内面黒色の付 着物。
3	第90図 PL.44	須恵器 壺	床上10~25cm 胴部上半~底部	底	8.0			粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。胴部は最下位にヘラ削り。下半部に 縦位のヘラナデを重ねる。	内外面とも炭 素吸着。
4	第90図 PL.44	鉄製品 角釘	床上25cm	長 幅	5.5 1.0	厚 重	0.7 8.10		断面ほぼ正方形の角釘で先端は劣化後破損する、頭は角張 りが特別の構造は見られない	

91区 33号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
1	第92図	須恵器 羽釜	床面直上 口縁部~胴部上 位片	口	18.7			粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 橙	ロクロ整形。鏝部は成・整形後の貼付。	内面の一部に 炭素吸着。
2	第92図	瓦 丸瓦	床面直上 破片	長 幅	9.5 7.9	厚	1.5	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/黄灰	狭端面寄りの一部が残存する。外面はヘラナデ。内面に布 目痕を残す。側端・狭端面はヘラによる面取り1回。	
3	第92図 PL.45	瓦 丸瓦	床面直上 破片?	長 幅	19.6 14.0	厚	1.8	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/灰	広端面側の1/2程が残存。外面はヘラナデ。内面に布目痕 を残す。側端面は両側とも2回に分けてヘラ削り。広端面 もヘラ削り。	
4	第93図 PL.45	瓦 丸瓦	床面直上床上5 cm 一部欠	長 幅	36.0 13.9	厚	2.0	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰/灰	外面はヘラナデ。内面に布目痕を残す。側端面は両側とも 2回に分けてヘラ削り。広端面もヘラ削り。狭端面はナデ による成・整形。	

91区 34号住居

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
1	第95図 PL.45	須恵器 杯	埋土 口縁一部欠	口 底	8.5 5.2	高	2.1	粗砂粒/酸化焰/浅 黄	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部の 切り離し粗雑。	内外面炭素吸 着。磨滅。
2	第95図 PL.45	土師器 土釜	竈埋土掘り方 1/3	口 底	27.6 10.8	高	22.4	粗砂粒/良好/にぶ い褐	器形は大きく歪んでいる。横断面は長円形を呈していたと 考えられる。口縁部は弱く屈曲。その後、短く立ち上がる。 口縁部は横ナデ。胴部は縦位にナデに近いヘラ削り。底部 はナデ。内面は最上位に指頭圧痕を明瞭に残す他は横位に ヘラナデ。	被熱。器面全 体が磨滅。磨 滅。内外面とも炭 素吸着。
3	PL.45	鉄滓 流動滓	床上17cm	長 幅	5.2 5.8	厚 重	3.5 108.5		流動滓破片。表面黒色で光沢は失われ細かい発泡が見られ る。破断面凹部を酸化土砂が薄く覆う。	
4	PL.45	鉄滓 流動滓	床上45cm	長 幅	4.9 5.3	厚 重	2.1 82.2		流動滓破片。表面は黒~紫黒色で光沢なし。表面・破断面 凹部を酸化土砂が薄く覆い、破断面はやや丸みを持つ。	
5	PL.45	鉄滓 流動滓	床上34cm	長 幅	6.1 2.9	厚 重	3.1 61.6		流動滓破片。表面黒色でガラス化・発泡。表面・破断面の 一部に酸化土砂が付着する。裏面に土砂粒子を巻き込む。	
6	PL.45	鉄滓 流動滓	床上35cm	長 幅	3.6 3.4	厚 重	2.1 29.5		流動滓破片。表面黒色でガラス化・発泡。表面・破断面に 薄く酸化土砂が付着する。断面エッジはやや丸みを帯びる。	
7	PL.45	鉄滓 流動滓	床上25cm	長 幅	3.4 2.8	厚 重	1.5 21.9		流動滓破片。表面黒~紫黒色でガラス化するが光沢なし。 裏面には細かい発泡・気泡が見られる。	
8	PL.45	鉄滓 流動滓	埋土	長 幅	6.8 8.6	厚 重	3.6 212.3		流動滓破片。表面は黒色でガラス化するが光沢なし、一部 表面は荒れ細かい気泡・気泡が見られる。裏面には小土塊・ 小石が取り込まれる。	
9	PL.45	鉄滓 流動滓	床上15cm	長 幅	2.4 4.7	厚 重	2.9 38.5		流動滓破片。表面は黒色でガラス化し金属光沢有るが、一 部表面は荒れ細かい気泡・気泡が見られる。破断面のエッ ジはやや丸みを帯びる。	
10	PL.45	鉄滓 流動滓	埋土	長 幅	5.5 5.8	厚 重	2.3 65.7		流動滓破片。表面黒~紫黒色でガラス化し一部に金属光沢 が見られる、粘性は高く表面皺状。裏面凹凸し細かい発泡・ 気泡が見られる。	
11	PL.45	鉄滓 流動滓	床上38cm	長 幅	3.0 4.8	厚 重	1.7 36.1		流動滓破片。表面黒色ガラス化するが有れて光沢なく微小 発泡が見られる。破断面のエッジはやや丸くなる。	

出土遺物観察表

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				長 幅	厚 重				
12	PL.45	鉄滓 炉内滓	床上23cm	3.8 2.6	1.9 21.5		炉内滓破片。表面はガラス化するが有れて光沢なく、破断面ふくめ酸化土砂が覆う。		
13	PL.45	鉄滓 炉内滓	床上17cm	6.6 5.5	3.5 143.5		炉内滓破片。表面は黒～黒褐色ガラス化し発泡。表面および破断面の一部に酸化土砂付着、断面には不定形に変形した気泡・空洞有。		
14	PL.45	鉄滓 炉内滓	床上40cm	4.9 2.8	1.3 14.6		炉内滓破片。表面黒色で荒れて微小発泡が見られる。表面および破断面の凹部に酸化土砂付着。		
15	PL.45	炉壁	床上28cm	7.7 5.2	3.2 62.9		炉壁。表面黒～黒褐色でガラス化・発泡し軽い。裏面には植物痕跡が見られる。		
16	PL.45	鉄滓 流動滓	床上19cm	6.2 3.9	2.5 61.2		流動滓破片。表面黒～紫黒色で一部凹みに線～点状酸化鉄と見られる赤色部分が見られる。流動性は高く表面皺が見られる。		
17	PL.45	鉄滓 流動滓	床上42cm	2.9 2.0	1.7 13.4		流動滓小破片で破断面を酸化土砂が覆う。		
18	PL.45	鉄滓 流動滓	床上48cm	6.3 5.3	2.5 78.3		流動滓破片で表面は皺状、破断面は丸みを持つ。		
19	PL.45	鉄滓 流動滓	床上21cm	4.0 2.7	1.4 13.9		流動滓小破片で表面は光沢をもち滴状に垂れる。		
20	PL.45	鉄滓 流動滓	床上39cm	3.8 3.5	1.7 21.0		流動滓小破片で表面は荒れ細かく発泡枝状に垂れる、破断面には大きな気泡空洞が見られる。		
21	PL.45	鉄滓 炉内滓	床上12cm	7.1 6.5	5.8 154.8		炉内滓破片、一部表面を酸化土砂が覆う。表面は黒色で一部に光沢あり、全体に細かく発泡、破断面には気泡・空洞が見られる。		
22	PL.45	炉壁	床上43cm	6.4 5.9	2.6 40.4		炉壁破片、表面は黒色でガラス化・発泡あり一部に酸化土砂付着。裏側には植物痕が見られる。		
23	PL.45	鉄滓 流動滓	床上49cm	3.7 2.1	1.4 15.3		流動滓破片。表面黒色で破断面をふくめ全体を酸化土砂が薄く覆う。		

100 区 36 号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				口 底	高 台				
1	第99図 PL.46	須恵器 杯	埋土 1/3	15.4 7.0	4.2	粗砂粒/酸化焰/淡 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内外面磨滅。	
2	第99図 PL.46	須恵器 杯	床面直上 完形	9.1 6.0	2.3	粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	やや磨滅。	
3	第99図 PL.46	須恵器 杯	掘り方 1/3	9.0 5.2	1.8	粗砂粒・白色軽石/ 良好/酸化焰/にぶ い黄橙	器形歪んでいる。轆轤整形(右回転)。底部糸切り後、無調整。	内面炭素吸着 磨滅。	
4	第99図 PL.46	須恵器 杯	埋土 完形	8.2 4.7	1.4	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	器高低い。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。		
5	第99図 PL.46	須恵器 碗	床上13～30cm 1/3	15.6 7.3	6.3 8.4	粗砂粒・白色鈹物 粒/還元焰・酸化焰 ぎみ/灰褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は脚部がやや長い、底部回転糸切り後の付け高台。	全体に炭素吸 着。	
6	第99図	土師器 土釜	床上8cm 口縁部～胴部上 位片	24.0		粗砂粒・白色軽石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は横ナデ。胴部は縦位のヘラナデ、内面は横位のナデ。		
7	PL.46	鉄滓 流動滓	埋土	4.4 2.8	2.0 40.7		流動滓破片、表面黒色で光沢なく微細な凹凸あり。粘度高く流動性低い。		
8	PL.46	鉄滓 炉内滓	埋土	3.8 4.7	2.4 31.7		炉内滓小破片、全体に黒色で細かく発泡。破断面ふくむ表面の凹み部を酸化土砂が覆う。		
9	PL.46	炉壁	埋土	6.2 5.6	3.8 90.4		炉壁破片、表面は黒色でガラス化・発泡多く軽い。表面に斑に酸化土砂付着。裏側には植物痕が見られる。		

100 区 37 号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考
				底	高				
1	第103図	黒色土器 杯	床上12cm 底部片	6.0		粗砂粒/酸化焰/灰 黄褐	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部は一方方向にヘラ磨きを充填する。内面黒色処理。		
2	第103図 PL.46	須恵器 杯	床上5cm 完形	9.7 5.0	2.3	精選・細砂粒/酸化 焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	口唇部の一部 に煤付着・灯明 として使用か。	
3	第103図	土師器 甕か土釜 か	床上27cm 口縁部～胴部上 位片	20.6		粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は横ナデ。胴部は横位にヘラナデ、内面は横位にヘラナデ。頸部直下にハケ目を残す。		
4	第103図 PL.46	土師器 甕	床上12cm竈床上 20～26cm埋土 掘り方 口縁部～胴部下 位	29.6		粗砂粒/良好/褐	器形は大きく歪み、横断面は長円形を呈す。口縁部は指押さえ、横ナデ。胴部上位は縦位のハケ目、ナデ。中位から下位は斜縦位のヘラナデ。内面上位は横位にハケ目。中位は器面磨滅。下位は横位のナデ。	外面炭素吸着。	
5	第103図 PL.46	鉄製品 不詳	床面直上	8.6 1.1	0.5 2.9		断面狭紡錘形で端部は破損する。		

出土遺物観察表

100 区 38 号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口	高	厚				
1	第105図	須恵器 杯	床面直上 口縁部片	口	13.8		粗砂粒/酸化焰/に ぶい褐	ロクロ整形(右回転か)。内面黒色処理。口縁部には横位の、 底部には一方向のヘラ磨き。		
2	第105図	土師器 片口鉢	床面直上掘り方 竈埋土 完形	口 底	20.2 7.2	高	14.6	粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部の一端は片口となる。口縁部は横ナデ。胴部は横位 のヘラ削り。底部はヘラナデ。内面は横位のナデ。	外面の一部に 煤付着。内外 面とも磨滅。
3	第105図	土師器 甕か土釜 か	床面直上竈埋土 図上復元(胴部 中位欠)	口 底	25.8 14.0	高	24.7	粗砂粒/良好/にぶ い赤褐	口縁部は胴部から屈曲、水平方向に短く突出。底部は平底 で砂目が付く。口縁部は横ナデ。胴部は縦位にヘラナデ、 ヘラ削り。内面は横位のヘラナデ。	被熱、変色、 変質。2片か ら全体形状を 復元、作図。
4	第105図	土師器 甕	竈埋土 口縁部～胴部上 位片	口	19.8			粗砂粒・白色軽石/ 良好/にぶい赤褐	口縁部は胴部から屈曲、水平方向に突出する。口縁部は横 ナデ。胴部上位は縦位にヘラナデ、中位寄りにヘラ削り。 内面は横位にヘラナデ。	
5	第105図	鉄製品 刀子	床上10cm	長 幅	7.7 1.2	厚 重	0.7 8.47		細身の刀子と見られる破片で関は不明瞭、刃は茎から1cm 程で破損し端部は錆に覆われる。茎に植物痕跡が見られる が柄の痕跡とは形状が異なる。	

100 区 39 号住居

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口	高	厚				
1	第108図	須恵器 杯	掘り方 口縁一部欠	口 底	8.2 4.8	高	2.1	粗砂粒/酸化焰/淡 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内外面とも磨 滅。
2	第108図	土師器 羽釜	床上12cm埋土 鏝部～胴部上半					粗砂粒・黒色鈹物 粒/良好/橙	鏝部は先端に丸みを帯びる。胴部は縦位のヘラ削り。内面 はナデか	磨滅顕著。
3	第108図	須恵器 杯	埋土 口縁部片					粗砂粒・黒色粘土 粒/不明/灰褐	坩堝として利用されており、内面全面に金属滓が付着する。 一部は外面に点状に付着する。	被熱の為、変 色、変質。
4	第108図	須恵器 杯	掘り方 口縁部片					粗砂粒/還元焰か/ 灰オリーブ	ロクロ整形。内面は被熱により発泡状態となり凹凸。金属 滓が付着。坩堝として使用されたと考えられる。	
5	第109図	石製品 砥石	掘り方 完形	長 幅	34.6 9.6	厚 重	11.8 4787.3	粗粒輝石安山岩	四面使用。各面ともよく使い込まれ、研ぎ減る。右側面に 横位の刃ならし傷が残る。	礫砥石
6	第109図	石製品 金床石か	掘り方 破片	長 幅	14.2 15.8	厚 重	14.8 4996.6	アブライト	背面側平坦面、及び、稜部に敲打痕が残る。被熱剥落後も 金床石として使われ、部分的に鉄錆が付着する。	大形礫
7	第109図	羽口	掘り方	長 幅	7.0 3.2	厚 重	2.3 46.61		羽口先端部付近の破片。先端部は黒色でガラス化・発泡し 孔先端をわずかに覆い先を窄める形で覆う。	
8	第109図	鉄製品 楔	掘り方	長 幅	4.9 3.0	厚 重	1.8 59.2		袋状鉄斧に似た形で頭はやや広がる形状を持ち、鑿または 楔と見られる	
9	第109図	鉄製品 不詳	床上14cm	長 幅	4.1 1.2	厚 重	0.7 6.43		断面長方形の鉄製品で茎になる可能性があるが劣化破損し 詳細不明。	
10	第109図	鉄製品 角釘	床上35cm	長 幅	8.8 0.8	厚 重	0.8 7.1		断面四角形でくねくねと曲がった鉄製品で両端に向かい細 くなる、一端は劣化後破損する。	
11	第109図	鉄製品 不詳	床面直上	長 幅	7.1 00.7	厚 重	0.8 8.8		断面かまぼこ型の鉄製品で、U字型に曲げられている。真っ 直ぐな破片も同一個体の破片と見られるが直接の接点はない。	
12	PL.47	鉄滓 流動滓	床上27cm	長 幅	10.9 7.6	厚 重	8.5 401.9		流動滓破片、表面は灰～黒色ガラス化・発泡。表裏破断面 の一部に酸化土砂が付着する。酸化土砂中に炭が混入する。	
13	PL.47	鉄滓 流動滓	埋土	長 幅	8.2 8.2	厚 重	5.3 291.3		流動滓破片、表面黒色でガラス化・細かく発泡。破断面に は0.5～1cm程の大きな気泡・空洞が見られる。	
14	PL.47	炉壁	床上4cm	長 幅	8.5	厚 重	3.8 176.7		33と34接合炉壁で通風孔を含む。表面灰黒色で発泡、一部 に酸化土砂付着。裏面に植物痕が多数みられる。	

100 区 3 号竪穴状遺構

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				長 幅	厚 重	厚 重				
1	第112図	石製品 砥石	床上6cm 体部破片	長 幅	4.1 3.2	厚 重	1.2 26.7	変質デイサイト	四面使用。各面ともよく使い込まれ、研ぎ減る。	切り砥石

89 区 4 号溝

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
				口	高	厚				
1	第116図	土師器か 土釜	埋土 口縁部～胴部上 位片	口	18.8			粗砂粒・白色軽石/ 良好/にぶい褐	口縁部は横ナデ。頸部には指押さえの痕跡を残す。胴部は 縦・横位にヘラナデ、内面は横位のナデ。	被熱、炭素吸 着。
2	第116図	埴輪 形象か	埋土 破片					粗砂粒/窯窓/橙	基底部が高さ約7.5cmと低いことから形象埴輪の破片の可 能性があるが器種は不明。外面2cmあたり8本の縦ハケ。 内面は縦方向にナデ。残存部上位に突帯が貼付される。	
3	第116図	龍泉窯系 青磁 椀	埋土 体部下位片					灰	高台付近の胎土は浅黄橙色。残存部外面は無文。やや焼成 不良。	中世。
4	第116図	在地系土 器 片口鉢	埋土 口縁部片					B/灰	外面器表は黒褐色。体部は外反し、口縁部は尖り気味で 僅かに内湾。器表の剥離多い。	14世紀中頃。
5	第116図	常滑陶器 壺か	埋土 肩部片					灰	外面器表は赤褐色、内面器表は暗灰色。外面上位は自然釉 かかる。	中世。

出土遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
6	第116図 PL.47	渥美陶器 か甕	埋土 体部下位片				灰白	器表は暗灰色。内面に白濁した自然釉が斑状にかかる。	12世紀～13世紀前半。
7	第116図 PL.47	常滑陶器 甕	埋土 体部片				灰	外面器表は赤褐色、内面器表は暗灰色。外面は木口状工具による撫で。	中世。
8	第116図 PL.47	常滑陶器 甕	埋土 体部片				灰	断面は灰色と灰白色の縞状、器表は赤褐色で外面上位は自然釉がかかる。外面に叩き目。	中世。
9	第116図 PL.47	礫石器 石棒	埋土 頭部破片	幅	8.7	厚重 8.1 692.4	粗粒輝石安山岩	頭部は扁平で、円柱の体部が付く。背面側より裏面側が強く括れる。	有頭、2面
10	第116図	羽口	埋土	長幅	8.5	厚重 10.1 591.5		重厚な鉄滓破片。表面は酸化土砂を含み茶褐色で破断面は酸化被膜に覆われ金属光沢を持つ。	
11	第117図 PL.47	羽口	埋土	長幅	8.6	厚重 8.6 283.0		羽口先端部破片。先端部は溶融ガラス化・大きく発泡し先端部および孔に流れ込むように覆う。	
12	第117図	羽口	埋土	長幅	11.4	厚重 5.6 19.6		羽口先端部側破片、先端部は灰～黒色でガラス化・発泡するとともに先端部から8cm程は閉塞されている。	

89区5号溝

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
1	PL.47	鉄滓 流動滓	埋土	長幅	11.7	厚重 6.8 468.7		流動滓破片。表面は黒～灰黒色で光沢なし。表面・破断面凹部を酸化土砂が薄く覆い重厚。破断面には気泡・空洞が見られる。	

89区6号溝

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
13	第117図 PL.47	須恵器 杯	埋土 1/4	口底	10.0	高さ 5.6	2.6 粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内外面の一部に炭素吸着。

89区10号溝

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
1	第118図 PL.47	須恵器 杯	埋土 口縁部～底部片	口底	9.1	高さ 5.2	3.1 粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	軽量。やや炭素吸着。
2	第118図	灰釉陶器 壺	床上19cm 頸部片				精選/還元焰/灰白	もう少し口縁部が外傾する可能性あり。ロクロ整形(右回転)。外面に釉。内面の口縁部～頸部は剥離。	
3	第118図	須恵器 甕	埋土 口縁片	口	29.8		細砂粒/還元焰/褐 灰	ロクロ整形。	
4	第118図 PL.47	常滑陶器 片口鉢	埋土 体部下位片				褐灰	断面中央は褐灰色、器表付近と底部外面は橙色、外面器表は褐色、内面器表は暗褐色。内面器表は使用により摩滅して平滑となる。	片口鉢Ⅱ類。 中世。
5	第118図	常滑陶器 甕か	埋土 体部片				灰白	外面器表はにぶい赤褐色、内面器表は灰褐色。内面には自然釉は斑状にかかる。	中世。

89区11号溝

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
14	第117図 PL.47	須恵器 杯	床上15cm 口縁一部欠	口底	8.5	高さ 5.5	2.7 粗砂粒・赤黒色粘 土粒/酸化焰/橙	口縁部上半は強く外反。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	軽量。
15	第117図 PL.47	須恵器 杯	埋土 1/2	口底	9.0	高さ 4.2	2.1 粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 黄橙	口縁部上半は大きく外反。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	軽量。
16	第117図 PL.47	土製品 土錘	床上15cm 完形	長幅	6.8	厚孔 3.3 0.6	3.4 粗砂粒/良好/黒褐	大径。両小口はヘラで面取りをしている。器面にはヘラナデが加えられている。重さ63.49g	炭素吸着、黒色。
17	PL.47	鉄滓 流動滓	埋土	長幅	7.5	厚重 5.1 245.4	4.4	流動滓破片表面黒褐色で発泡するが重厚。破断面ふくめ薄く酸化土砂が覆う。	
18	PL.47	鉄滓 流動滓	埋土	長幅	4.1	厚重 2.5 35.9	3.0	流動滓小破片で表面黒～紫黒色で光沢なし。破断面に0.5cm程の気泡・空洞あり。	

89区12号溝

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
19	第117図	須恵器 羽釜	床上8cm 口縁部～鈹部片	口	30.2		粗砂粒多/酸化焰/ にぶい褐	ロクロ整形(右回転)。鈹は口縁部、胴部、成・整形後に貼付。	内外面とも炭素吸着・黒色。

90区14号溝

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
1	第119図	須恵器 杯	埋土 口縁片	口	9.0		粗砂粒/還元焰/酸 化焰ぎみ/にぶい 黄橙	ロクロ整形(右回転)。	内外面に炭素吸着。
2	第119図 PL.47	石製品 砥石	埋土 両端欠損	長幅	4.7	厚重 1.7 16.8	1.4 砥沢石	四面使用。各面ともよく使い込まれ、研ぎ減る。	切り砥石

出土遺物観察表

100 区 18 号溝

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
1	第121図 PL.47	土師器 杯	埋土 完形	口 底	12.4 8.6	高	3.8	粗砂粒・黒色鈹物 粒/良好/明赤褐	口縁部は横撫で。体部はナデ。一部に指頭圧痕を残す。底部は手持ちへら削り。内面はナデ。	外面に炭素吸着。
2	第121図 PL.47	土師器 杯	埋土 口縁一部欠	口 底	11.9 7.8	高	3.0	粗砂粒/良好/明赤 褐	口縁部は横撫で。体部はナデ、一部にへらナデ。底部は手持ちへら削り。内面はナデ。	

100 区 19 号溝

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
3	第121図 PL.47	鉄製品 刀子	床上42cm	長 幅	8.7 1.2	厚 重	0.9 10.8		棟・刃側ともに関を持つ刀子で先端は劣化後破損、茎には木質等の痕跡は見られない。	

89 区 101 号土坑 (2号土壙墓)

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
1	第140図 PL.49	須恵器 杯	床上6cm 口縁一部欠	口 底	9.4 4.1	高	2.4	粗砂粒少/還元焰・ 酸化焰/にぶい 黄橙	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部は切り離しが粗雑で断面が凸レンズ状を呈す。	炭素吸着。器形の歪み顕著。
2	第140図	須恵器 杯	埋土 口縁~底部片	口 底	15.8 7.0	高	4.6	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(左回転)。	口縁部の一部に炭素吸着。
3	第140図	須恵器 杯	埋土 1/4	口 底	8.7 5.6	高	2.2	粗砂粒/酸化焰/浅 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	

89 区 4 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
1	第141図 PL.48	須恵器 杯	床上6~12cm 口縁一部欠	口 底	14.4 6.6	高	6.2	粗砂粒・白色軽石 ・赤黒色粘土粒/還 元焰/にぶい黄橙	深み有し下半部は内彎ぎみに立ち上がる。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	外面磨滅。

89 区 7 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
2	PL.48	鉄滓 炉内滓	床上20cm	長 幅	9.4 6.1	厚 重	5.4 294.9		炉内滓破片。表面は黒~紫黒色ガラス化・発泡、一部表面に酸化土砂付着。表面・破断面に木材痕跡が見られる。	

89 区 14 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
3	第141図	須恵器 椀	埋土 底部~高台部片	底	6.8	台	8.0	粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	

89 区 33 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
4	第141図 PL.48	須恵器 杯	床上12cm 口縁一部欠	口 底	10.2 4.9	高	2.9	粗砂粒/酸化焰/黄 橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部の切り離しは粗雑。	
5	第141図 PL.48	黒色土器 杯	床面直上 完形	口 底	9.7 4.2	高	2.2	粗砂粒/不明/暗灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。内外全面にへら磨き。内外面黒色処理。	
6	第141図 PL.48	礫石器 敲石	完形	長 幅	23.8 9.6	厚 重	7.6 2546.0	粗粒輝石安山岩	小口部両端に敲打痕がある。背面側上端部に被熱剥落痕がある。	棒状礫
7	第141図 PL.48	礫石器 磨石か	完形	長 幅	8.4 7.9	厚 重	3.3 283.0	粗粒輝石安山岩	表裏面とも弱く摩耗するほか、側縁に敲打痕がある。	楕円礫

89 区 35 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
8	第141図 PL.48	羽口	埋土	長 幅	4.5 6.5	厚 重	4.0 77.02		羽口の破片で基部・先端部を欠く。一端は灰色でわずかに発泡が見られる。	

89 区 40 号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
9	第141図	土製品 支脚か	床上15cm 破片	底	6.6			粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	柱状品の一部。上方に向けて径を狭めていたか。支脚の可能性が考えられる。	

89区 41号土坑

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				長 幅	厚 重	3.8 100.9			
10	PL.48	鉄滓 炉内滓	床面直上		4.9 5.1			炉内滓。表面全体を酸化土砂が覆いわずかに黒褐色でガラス化した部分が見られる。表面凹部に微小な植物痕が見られる。	

89区 42号土坑

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				底	高	59.0			
11	第141図	須恵器 椀	埋土 底部片	底	7.4		粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい黄	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部回転糸切り後の付け高台。	
12	第141図 PL.48	土師器 甕	床面直上埋土 口縁一部欠	口 底	30.7 16.9	高	小礫・粗砂粒/良好 /にぶい黄橙	口縁部は大きく外反して立ち上がり先端は外方を向く。横ナデ。中位から頸部にかけては斜縦位の撫でを重ねる。胴部は上位で横・斜位のナデ。中位から下位は数回に分け縦位のナデ。胴部最下位は斜位のへら削り。底部はナデ。内面は細部の観察が困難であったが全体的に横位のナデが施されている。上半部では接合時に粘土紐を押しした痕跡がナデ消せず、器面に凹凸を残す。	外面胴部下半に炭素吸着・黒斑。
13	第141図	土師器 羽釜	埋土 口縁部～胴部上 位片	口	16.0		粗砂粒/良好/にぶ い橙	口縁部は横ナデ。胴部は横位のへら削り。内面は斜横位のナデ。罅部は成・整形後の貼付。	

89区 45号土坑

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口 底	高	3.4 3.5 3.1 3.3 5.1 7.0 15.0 20.2 7.3 6.0 7.0 7.45 8.2			
14	第141図 PL.48	須恵器 杯	床上21cm 2/3	口 底	9.7 5.1	高	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部の切り離しは粗雑。	
15	第141図 PL.48	須恵器 杯	床上9cm 2/3	口 底	10.1 4.7	高	粗砂粒・白色軽石 /還元焰/オリーブ 黒	ロクロ整形(左回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内外面炭素吸着。黒色処理か。
16	第141図 PL.48	須恵器 杯	床上24cm 1/2	口 底	10.2 4.8	高	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部の切り離しは粗雑。	一部に炭素吸着。
17	第141図 PL.48	須恵器 杯	埋土掘り方 1/2	口 底	9.6 4.8	高	粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	軽量
18	第141図	須恵器 杯	床上60cm埋土 体部～底部	底	5.1		粗砂粒・白色軽石 ・赤黒色粘土粒/酸 化焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部の切り離しは粗雑。	
19	第141図 PL.48	須恵器 椀	埋土 下半口縁部～高 台部片	底	7.0	台	粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。高台部はやや脚部が長い。底部切り離し後の付け高台。	
20	第142図	灰釉陶器 椀	埋土 口縁部片	口	15.0		白色鈹物粒少/還 元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。口唇部内面直下に細い沈線が廻る。釉は薄く塗布か。	虎溪山1号窯式。
21	第142図	須恵器 羽釜	掘り方 口縁部～胴部上 位片	口	20.2		粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形。口縁部は横ナデ。胴部は縦位にへら削り、内面は横ナデ。	内面に炭素吸着。
22	第142図 PL.48	鉄製品 鉄鏃	床上60cm	長 幅	7.3 3.0	厚 重	1.0 19.45	先端は細身で腸削りは大きく開くその先のかつぎで劣化4破損する。	
23	第142図 PL.48	鉄製品 角釘	床上60cm	長 幅	6.0 1.1	厚 重	0.8 6.66	断面長方形の角釘で頭部0.8cm程を直角に折り曲げる。先端は細くなるが鋭利にはとがらない。	
24	第142図 PL.48	鉄製品 刀子	床上10cm	長 幅	7.0 1.6	厚 重	0.8 7.45	細身の刀子の刃と見られる破片で両端は劣化後破損する。	
25	PL.48	鉄製品 不詳					重 8.2	断面円形で長さ45～14mm直径4～1.5mmの丸棒状鉄製品破片7片で錆化が著しく空洞化し接合は困難だが同一製品の可能性が高い。	

89区 47号土坑

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				口 底	高 台	2.9 1.9 2.2 2.4 6.0 4.1				
26	第142図 PL.48	須恵器 杯	床上12cm 口縁一部欠	口 底	9.9 5.5	高	2.9 粗砂粒・白色軽石 /酸化焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	内外面の一部に炭素吸着。	
27	第142図 PL.48	灰釉陶器 皿	床面直上床上7 ～9cm 1/3	口 底	11.2 6.6	高 台	1.9 6.1 白色・黒色鈹物粒 少/還元焰/灰白	口唇部は短く外方に屈曲する。ロクロ整形(左回転か)。高台部は断面三角形で低く、底部切り離し後の付け高台。内面に釉の塗布が見られる。	虎溪山1号窯式。	
28	第142図 PL.48	灰釉陶器 皿	床上11cm埋土 1/2	口 底	10.8 6.4	高 台	2.2 6.0 白色鈹物粒少/還 元焰/黄灰	ロクロ整形(右回転か)。高台部は底部切り離し後の低い付け高台。釉は漬け掛けか。	虎溪山1号窯式。	
29	第142図 PL.48	灰釉陶器 段皿	床上6cm埋土 1/4	口 底	13.4 8.0	高 台	2.4 7.8 白色鈹物粒少/還 元焰/灰白	ロクロ整形(右回転か)。高台部は断面低い三日月形か。底部切り離し後の付け高台。内外面口縁部上半に釉の塗布が見られる。	虎溪山1号窯式。	
30	第142図	土師器 土釜か	床上6cm 胴部下位片～底 部	底	6.0			粗砂粒/酸化焰/明 赤褐	胴部は縦位にへら削り。底部はナデ、指押さえ。内面は横位のナデ。	
31	第142図 PL.48	礫石器 敲石	床面直上 完形	長 幅	19.7 6.9	厚 重	4.1 864.7	粗粒輝石安山岩	小口部両端・右側縁に敲打痕がある。下端側小口部には敲打に伴い衝撃剝離痕が生じている。被熱して煤ける。	棒状礫

出土遺物観察表

89区 52号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考		
32	第142図	須恵器 壺か	床上23cm 胴部下位～底部 片			白色鈹物粒/還元 焰軟質/灰	断面台形の低い高台部が付く。胴部は棒状工具により横位に磨く。			
33	第142図 PL.49	黒色土器 椀	床面直上 2/3	口 底	15.1 7.4	高 台	6.9 8.1	粗砂粒/良好/灰黄 褐	器形は歪みが著しい。高台部の成形は粗雑である。外面の口縁部と内面全体にヘラ磨きが施されるが、粗雑で規則性を欠いている。口縁部内外面に黒色処理。	
34	第142図 PL.49	礫石器 台石	掘り方破片	長 幅	21.8 20	厚 重	15.4 7560.0	粗粒輝石安山岩	背面側は平坦で、弱い敲打痕が残る。被熱破損しており、部分的に煤ける。	大形楕円礫

89区 53号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
35	第142図	土師器 土釜か	床上5cm 胴部下位～底部 片	底	7.2		粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい褐	胴部は縦位にヘラ削り。底部はヘラナデ。内面はナデ。	

89区 54号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
36	第142図	灰釉陶器 壺	床上43cm 胴部下位～底部 片	底	16.8	台	16.6	精選/還元焰/灰	ロクロ整形(右回転)。高台部は低く八の字状に外傾する。外面は回転を伴うヘラ削り。一面に釉がかかる。
37	第142図	須恵器 甑	床上22～28cm 胴部下位～底部	口	22.0			小礫・粗砂粒/酸化 焰/にぶい赤褐	ロクロ整形(右回転)。胴部内面は横位のナデ。
38	第143図 PL.49	須恵器 大甕	床上15cm～52 cm 口縁部～胴部中位	口	33.2			粗砂粒・緑泥片岩/ 還元焰/灰	口縁部は無文。ロクロ整形、横ナデ。胴部は紐づくり後、叩き整形、外面は叩き具痕をナデ消している。内面は当て具痕をナデ消す。
39	第143図 PL.49	須恵器 甕	埋土 胴部下位～底部	底	17.4			白色鈹物粒多/還 元焰/暗灰	紐づくり整形。外面は平行叩き目痕を残す。内面は当て具痕を丁寧ナデ消している。

89区 56号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
40	第143図	須恵器 椀	床上14cm 口縁部下位～高 台部	底	7.8			粗砂粒・赤色粘土 粒/酸化焰/明黄褐	ロクロ整形(右回転)。高台部は脚部が長い。底部切り離し後の付け高台。取り付け後の始末は粗雑。

89区 66号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
41	第143図 PL.49	須恵器 杯	埋土 1/2	口 底	14.6 8.0	高	4.2	粗砂粒・白色軽石 ・黒色鈹物粒/酸化 焰/にぶい橙	ロクロ整形(左回転)。底部は回転糸切り後、無調整。内外面の一部に炭素吸着。黒班状。

89区 80号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
42	第143図 PL.49	須恵器 杯	埋土 口縁一部欠	口 底	8.9 3.9	高	2.9	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	底部は小径。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整
43	第143図	黒色土器 杯	埋土 1/4	口	10.8	高	1.9	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ非使用か。口縁部は横ナデ。底部は手持ちヘラ削り。口縁部は横位、底部は複数方向からヘラ磨きを充填。内面は黒色処理。

89区 88号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
44	第143図 PL.49	灰釉陶器 椀	床上25cm埋土 破片	口 底	14.1 8.1	高 台	4.6 8.0	精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は断面三角形に近い付け高台。釉は内外面に漬け掛け。
45	第143図 PL.49	灰釉陶器 椀	埋土掘り方 1/3	口 底	14.0 8.0	高 台	4.7 7.6	精選・黒色鈹物粒 少/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。高台部は低い。底部切り離し後の付け高台。口縁部内外面に漬け掛け。
46	第143図	須恵器 大甕	床面直上埋土 口縁部片	口	40.8			白色鈹物粒/還元 焰/灰	紐づくり後、ロクロ整形。口唇部直下に波状文を2段廻らす。3段目を施した様に見えるが一部ナデ消している。内外面とも横ナデ。

100区 96号土坑

No.	挿 図 PL.No.	種 類 器 種	出土位置 残 存 率	計測値 (cm, g)		胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備 考	
47	第143図 PL.49	須恵器 杯	埋土 口縁一部欠	口 底	9.5 5.6	高	2.0	粗砂粒・白色軽石 /還元焰/にぶい黄 橙	ロクロ整形。底部回転糸切り後、無調整

遺構外の遺物

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考
				口底	高				
1	第151図	須恵器 杯	埋土 1/4	口底 9.6 5.6	高	2.0	粗砂粒・白色鈹物 粒/酸化焰/にぶい 褐	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	炭素吸着。
2	第151図 PL.50	須恵器 杯	埋土 2/3	口底 8.8 4.6	高	2.9	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形(右回転)。底部は回転糸切り後、手持ちヘラ削りか。	やや炭素吸着。
3	第151図 PL.50	須恵器 杯	埋土 2/3	口底 9.1 5.8	高	2.1	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	底部径大きい。ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
4	第151図 PL.50	須恵器 杯	埋土 1/2	口底 9.3 4.9	高	2.7	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
5	第151図 PL.50	須恵器 杯	埋土 1/4	口底 9.4 5.0	高	2.8	粗砂粒/酸化焰/に ぶい橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	内外面、割れ 口に黒色の付 着物。
6	第151図 PL.50	須恵器 杯	埋土 1/4	口底 8.8 5.0	高	2.7	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。底部の 切り離しは粗雑。	内面炭素吸着。
7	第151図 PL.50	須恵器 杯	埋土 1/3	口底 8.8 6.6	高	3.3	粗砂粒/酸化焰/淡 黄	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。	
8	第151図	須恵器 杯	埋土 1/4	口底 9.5 6.0	高	1.9	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	底部径は大きい。ロクロ整形(右回転か)。	
9	第151図	須恵器 杯	埋土 口縁部～底部片	口底 9.3 5.6	高	2.6	粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい橙	口縁部は中位で屈曲後、斜上方に立ち上がる。ロクロ整形 (右回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	底部の一部に 炭素吸着。
10	第151図	須恵器 杯	埋土 口縁部～底部片	口底 9.1 3.8	高	2.6	粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	底部は小径。口縁部は外傾著しく立ち上がる。ロクロ整形 (左回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	磨滅。底部の 一部に炭素吸 着。
11	第151図	須恵器 杯	埋土 口縁部～底部片	口底 8.8 4.4	高	2.0	粗砂粒/酸化焰/灰 白	ロクロ整形(左回転)。底部は回転糸切り後、無調整。	
12	第151図	須恵器 杯	埋土 1/4	口底 12.7 5.6	高	4.1	粗砂粒少/酸化焰/ 淡黄	ロクロ整形(右回転)。底部の切り離しは回転糸切りか。	外面磨滅。
13	第152図 PL.50	須恵器 杯	埋土 1/3	口底 9.0 4.8	高	2.8	粗砂粒/不明/灰	ロクロ整形(右回転)。底部回転糸切り後、無調整。埴塼と して利用され、内面に金属滓が厚く付着する。外面の一部 にも滓付着。	被熱の為、変 色、変質。
14	第152図	土師器 高杯	埋土 杯部下位～脚部 上半				細砂粒/良好/にぶ い橙	脚部は縦位に磨き、内面は絞りの痕跡。	脚部欠損後も 割れ口を調整 し二次利用 か？
15	第152図 PL.50	須恵器 碗	埋土 3/4	口底 11.0 5.2	高台	5.2 5.8	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/還元焰・酸化 焰/にぶい黄橙	ロクロ整形(右回転)。高台部は底部切り離し後の付け高台。	炭素吸着。
16	第152図	須恵器 碗	埋土 口縁部下半～高 台部	口底 6.9	台	8.5	粗砂粒・白色軽石/ 酸化焰/にぶい橙	ロクロ整形(右回転)。高台は脚が長い、底部回転糸切り後 の付け高台。	
17	第152図 PL.50	灰釉陶器 碗	埋土 破片	口底 14.6 7.0	高台	6.5 7.2	黒色鈹物粒少/還 元焰/灰白	ロクロ整形(左回転)。口縁部下位に回転ヘラ削り。高台部 は付け高台。内外面に広く施釉。	虎溪山1号窯 式の初期。
18	第152図	灰釉陶器 碗	埋土 口縁部片	口底 12.1			精選/還元焰/灰白	ロクロ整形(右回転)。釉は漬け掛け。	内外面に煤付 着。丸石2号 窯式期。
19	第152図 PL.50	緑釉陶器 小壺か	埋土 体部片				精選/還元焰/灰黄 褐	ロクロ整形(左回転か)。	外面に施釉。
20	第152図	土師器 壺	埋土 口縁部片	口底 21.8			粗砂粒/良好/にぶ い黄橙	口縁部は八の字状に外反して立ち上がり、先端は平坦面を なし外方を向く。外面横位、縦位のヘラ磨き。内面にもヘ ラ磨き。	
21	第152図	土師器 土甕	埋土 口縁部片	口底 24.9			粗砂粒/良好/灰黄 褐	口縁部は屈曲後短く立ち上がる。横ナデ。胴部はナデの上 に縦位のヘラ削り。内面はナデ。	
22	第152図	須恵器 羽釜	埋土 口縁部～胴部上 位片	口底 19.8			粗砂粒/酸化焰/に ぶい黄橙	ロクロ整形。口縁部は横ナデ。鏝部は成・整形後の貼付。	内面に黒色の 付着物。
23	第152図	土師器か 不明	埋土 破片				粗砂粒/良好/にぶ い橙	角状を呈し中空。本体に接続していたと考えられるが、ど の部位となるのか不詳。外面はナデ、本体との接続部分は 横ナデ。	外面の一部に 炭素吸着。
24	第152図 PL.50	土製品 有孔円板	埋土 完形	長幅 4.9 5.2	厚孔	1.3 1.0	粗砂粒/酸化焰/橙	ロクロ整形の碗の底部を二次利用。周縁部は粗く割っただ けである。底部中央に直径1cmの孔を開けている。孔の縁 はやや磨耗。	土器の内面、 炭素吸着、黒 色。
25	第152図	中国青磁 瓶類	埋土 肩部片				灰	内面は轆轤目顕著。頸部にいたる屈曲部外面に2条の凹線。 内外面に貫入の入る青磁釉。	中世か。
26	第152図 PL.50	中国白磁 碗	埋土 体部下位片				白	内面下位に沈線。外面下位は無釉。	太宰府分類IV 1a類か。11世 紀後半～12世 紀後半。
27	第152図	常滑陶器 甕か	埋土 体部片				灰白	器表は赤褐色。	中世。
28	第152図 PL.50	龍泉窯系 青磁 皿	埋土 底部片	口底 4.8			灰白	底部内面は無文。底部外面は焼成前に釉を削り取る。	太宰府分類I- 1a類。12世紀 中頃～後半。

出土遺物観察表

No.	挿図 PL.No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm, g)			胎土/焼成/色調 石材・素材等	成形・整形の特徴	備考	
				長 幅	厚 重	重				
29	第152図 PL.50	龍泉窯系 青磁 椀	埋土 体部下位片				灰白	外面は鎬蓮弁文。	太宰府分類Ⅱ -b・c類。13世紀 前後～前半。	
30	第152図 PL.50	石製品 砥石	埋土 下端部欠損	長 幅	82.0	厚 重	2.15 8.8	砥沢石	四面使用。背面側左辺・右側面に刃ならし傷が残る。	切り砥石
31	第152図 PL.50	石製品 砥石	埋土 1/2	長 幅	21.0 24.7	厚 重	9.6 5563.5	粗粒輝石安山岩	背面側上端に縦位の刃ならし傷が残る。背面側中央は浅く 窪み、摩耗するように見える。裏面側を主体に被熱剥落痕 が著しい。	大形扁平礫
32	第152図 PL.50	羽口	埋土	長 幅	6.2 6.9	厚 重	3.8 102.17		羽口先端部付近の破片。端部は黒色でガラス化・発泡し、 孔先端内面に2cm程に薄く付着が見られる。	
33	第152図 PL.50	羽口	埋土	長 幅	4.6 4.8	厚 重	2.9 52.85		羽口先端部付近の破片。灰色～黒色でガラス化・発泡する。	
34	第152図 PL.50	鉄製品 不詳	埋土	長 幅	12.3 3.1	厚 重	3.1 98.63		厚さ1～2mmほどの鉄板が筒状に巻いて錆化し一部は二重 になっている。鉄鐙に似るが端部は劣化破損し詳細は不明	
35	第153図 PL.50	石製品 砥石	埋土 両端欠損	長 幅	6.4 3.6	厚 重	2.2 69.8	砥沢石	四面使用。背面側に斜向する粗い線条痕が残る。	切り砥石
36	第153図 PL.50	羽口	埋土	長 幅	7.3 5.4	厚 重	1.8 113.01		羽口先端部付近の破片。先端部は灰色でわずかに発泡、端 部のみガラス化が見られる。	
37	第153図 PL.50	鉄製品 角釘	埋土	長 幅	2.8 1.2	厚 重	0.6 1.57		断面約3mm角の角釘で頭部は薄く円形につぶし二段階に直 角に折り曲げる、先端は破損し錆に覆われる。	
38	第153図 PL.50	在地系土 器 内耳鍋	埋土 口縁部片				B/灰白～にぶい 橙	断面は灰色からにぶい橙色、器表は暗灰色。外面器表下半 に煤付着。器壁はやや厚。口縁部は内湾し、端部は尖り気味。	14世紀後半～ 15世紀中頃。	
39	第153図 PL.50	鉄製品 鉄鏃	覆土	幅 厚	1.5 0.7	重	12.62		細身の鉄鏃で腸刺りはなくなだらかにほそくなりのかつぎ へ移行劣化後破損により茎を欠く。	
40	第153図 PL.50	古瀬戸 おろし皿	埋土底部 1/2	底	10.8			灰白	底部外面は不定方向の撫で。底部内面は籠による卸し目。 内面に灰釉。	13世紀～15世 紀。
41	PL.50	鉄製品 不詳				重	27.9		厚さ1.5mm程の薄板状鉄製品で破片2点。大きい破片は5.3 ×6.5cm、小さい破片は3.2×3.5cmの不定形破片で両者と もくの字に折れ曲がるが、劣化前の変形と見られる。	
42	PL.50	鉄製品 不詳		長 幅	3.0 0.5	厚 重	0.6 1.86		断面正方形の棒状鉄製品、一端は劣化破損で他端は尖らず に角形で終わる。	
43	PL.50	鉄製品 不詳		長 幅	4.7 0.6	厚 重	0.6 3.47		断面正方形の角棒状鉄製品で片側に向かいやや細く角釘に 似るが両端とも劣化破損のため詳細形状は不明。	
44	PL.50	鉄製品 不詳				重	5.0		断面円形に近い棒状の鉄製品破片4点。錆化が顕著で内部 空洞化破損した破片で接合は困難だが同一製品の可能性あり。	

表11 炭化物同定表

区・遺構等	取上位置等	樹種	備考
89区K6グリッド	2面	クヌギ節	小破片
89区N7グリッド	2面	クヌギ節	材表面近くを含み割材に遺存するが加工は不明
90区59号土坑	覆土	クヌギ節	材表面分枝部近くを含む加工は不明
91区34号住居	No.35	クヌギ節	小破片

出土遺構		土師器						須惠器						灰釉陶器				備考					
区	遺構名称	杯 数	高杯 数	鉢 数	壺 数	甕 数	杯・碗 数	蓋 数	長頸壺 数	壺類 数	甕 数	羽釜 数	不明 数	碗・皿 数	壺類 数	g							
89	区 50 土坑																						
89	区 52 土坑	1	7				7	145	15	209					1	25							
89	区 53 土坑	5	19				11	128	11	166					5	140							
89	区 54 土坑	7	53				7	610	20	400					15	2065							
89	区 55 土坑	3	13				5	62	2	4													
89	区 56 土坑	1	4				1	19	11	51													
89	区 57 土坑						6	51	7	45					1	36							
89	区 58 土坑						11	145	20	171					1	80	42						
90	区 59 土坑						1	17							2	21							
89	区 63 土坑																						
89	区 64 土坑									2	9												
89	区 65 土坑	2	9				1	3									1	6					
89	区 66 土坑						3	22	9	90													
90	区 67 土坑						1	44															
100	区 71 土坑														1	10							
89	区 76 土坑	11	23				4	70	35	281							1	10					
89	区 78 土坑						4	33	2	43					1	15	1	22					
89	区 80 土坑	8	35				4	151	28	248							2	16	1	23			
91	区 82 土坑						3	44							2	41							
91	区 84 土坑																						
89	区 85 土坑						2	11	8	56													
89	区 86 土坑						2	23	19	254													
89	区 88 土坑						5	45	11	153													
100	区 94 土坑	2	14																				
100	区 96 土坑						1			32													
100	区 99 土坑									1	1												
100	区 100 土坑	3	10				1	5	1	33					1	43							
89	区 D-9C	1	7																				
89	区 I-9C	1	10							5													
89	区 K-5C						6	64													1	8	
89	区 N-5C						1	87	1	12													
89	区 N-6C	5	23				17	218	8	292					1	17							
89	区 N-7C						3	130	1	27													
89	区 M-5C						1	36															
89	区 M-7C	7	40				18	247	11	198					4	199	4	62					
89	区 O-6C														1	78							
89	区 O-8C																						
89	区 Q-9C																						
89	区 Q-10C						1	54															
89	区 T-10C	2	12																				
89	区 N-4C						2	4															
89	区 N-7C	8	47				7	79	5	72					1	29							
89	区 K-4C	2	40				10	71	4	23											1	160	
89	区 K-5C	16	67				6	82	7	141											2	28	
89	区 K-6C	13	64				5	29	10	102													
89	区 Q-7C																				1	7	

未掲載遺物一覽

出土遺構			土師器						須惠器						灰釉陶器			備考	
区	遺構名称	数	杯 数	高杯 数	鉢 数	壺 数	甕 数	蓋 数	長頸壺 数	壺類 数	甕 数	羽釜 数	不明 数	碗・皿 数	壺類 数	g	g		g
89	区 2面 Q-8C	2	8				2	18											
89	区 2面 Q-9C						3	21	3	14						2	170		
89	区 2面 L-4C						3	55	8	81									
89	区 2面 L-5C	2	7													2	100	1	8
89	区 2面 M-6C	3	16	1	6		2	17	2	17						2	28		
89	区 2面 O-6C	3	16													5	32		
89	区 2面 O-7C	3	7				9	68	5	34						1	15		
89	区 2面 P-6C																		
89	区 2面 P-7C	3	6													1	10		4
89	区 2面 P-8C						3	19	3	39									
89	区 2面 R-8C						3	27											
89	区 2面 R-10C	1	3				4	35	2	12									
89	区 2面 S-9C																		
89	区 2面 S-10C						3	24	4	89						1	30		
89	区 2面 T-9C	1	4				1	3	4	68						1	11		
89	区 2面 T-10C	3	11				3	81	3	33						1	29		
89	区 2面 T-11C	1	5				4	59	2	12									
89	区 2面 西	47	149				219	3200	342	3260						36	1390	25	649
89	区 2面 確認面	4	32				17	179	11	107						1	70		
89	区 2面 M-5C																		
89	区 2面 P-6C																		
89	区 2面 R-9C																		
90	区 1面						1	4	1	9									
90	区 2面 A-10C																		
90	区 2面 A-11C	2	2																
90	区 2面 A-12C	1	2				6	50	1	13									
90	区 2面 B-12C	3	12				14	105	4	27									
90	区 2面 B-13C																		
90	区 2面 C-12C						3	55	2	22									
100	区 A-10C															2	22		
100	区 N-5C															1	26		
100	区 O-4C																		
100	区 O-5C																		
100	区 P-3C	3	11																
100	区 P-4C	1	3				1	13	3	33									
100	区 Q-3C																		
100	区 Q-4C																		
100	区 S-4C																		
100	区 T-5						13	105	10	66									
89	区 東2面 確認面	7	25				1	36											
89	区 東2面 確認面						14	86	48	197									
89	区 2 ビット																		
89	区 17 ビット	5	17																
89	区 21 ビット	3	8																
89	区 2 竪穴						3	36	3	25									

出土遺構			土師器										須恵器										灰釉陶器				備考									
区	遺構名称	杯数	杯g	高杯数	高杯g	鉢数	鉢g	壺数	壺g	甕数	甕g	杯・碗数	杯・碗g	蓋数	蓋g	長頸壺数	長頸壺g	壺類数	壺類g	羽釜数	羽釜g	不明数	不明g	碗数	碗g	皿数		皿g								
89	区 確認面	14	78	1	4					40	619	67	702								6	436	12	220		11	126									
89	区 東 表採	4	20						5	50	5	13																								
89	区 西 表採								2	23																										
89	区 西1面 確認面	10	44						61	910	39	452									10	324	8	157		6	81	4	43		器台1片12g					
89	区 東 表採	4	8						10	181	12	159									3	67				1	30				緑釉1片2g					
89	区 西1面 確認面	5	33						2	53	2	6									1	3														
89	区 2面	9	42						9	169	21	359									4	189	2	72		6	85	2	35							
89	区 1.2面	36	134						25	299	28	350									2	55	2	72		5	18	1	7							
89	区 1 暗渠	5	20						83	968	65	1000									14	301	6	145		6	36	2	11							
89	区 2 暗渠	2	8						18	184	14	294									6	182	1	10		2	12									
90	区 3 土壙墓								8	83	3	30									1	10	1	7		1	11									
90	区 4 土壙墓								1	22																										
90	区 1 竪穴	1	3						6	173	1	27																								
91	区 攪乱																																			
91	区 一括																																			
100	区 1面								6	50	1	3									2	13	2	82												
100	区 3 畠								1	10																										
100	区 4 畠								5	32	1	6																								
100	区 6 畠																																			
100	区 7 畠																																			
100	区 2面	4	13						5	34	2	24																								
100	区 表採																																			
100	区 3 竪穴	2	6						3	56	1	37																							土釜1片6g	

写真図版



1 1面89・90区調査区全景(北西より)



2 91区土層断面(南より)



1 調査風景



2 トレンチ(未調査区)



3 89区北壁土層断面(南より)



4 89区土層断面(北より)



5 1号溝全景(北より)



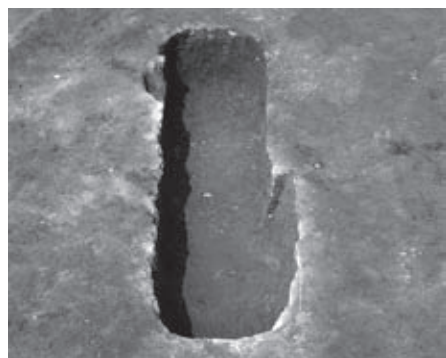
6 2号溝全景(南東より)



7 2号溝土層断面(南東より)



8 9号溝全景(北東より)



1 1号土坑全景(東より)



2 2号土坑全景(東より)



3 3号土坑全景(東より)



4 8号土坑全景(南東より)



5 9号土坑全景(南東より)



6 10号土坑全景(南東より)



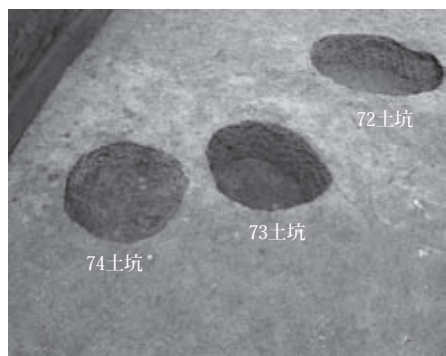
7 11号土坑全景(西より)



8 11号土坑遺物出土状況(西より)



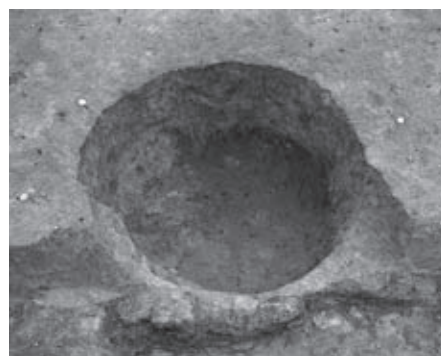
9 71号土坑全景(東より)



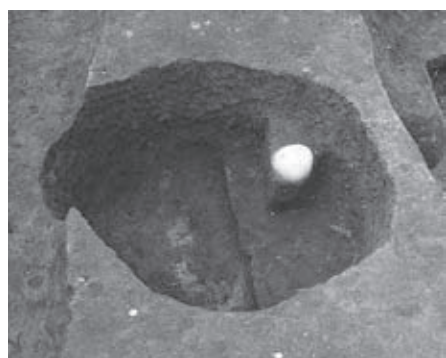
10 72・73・74号土坑全景(東より)



11 75号土坑全景(東より)



12 81号土坑全景(北より)



13 82号土坑全景(東より)



14 83号土坑全景(北より)



1 2面89区調査区全景(北東より)



2 2面89・90区調査区全景(北西より)



1 2面91・100区調査区全景(北東より)



2 2面91・100区調査区全景(南東より)



1 2面100区調査区全景(北より)



2 2面100区調査区全景(北東より)下位層確認調査



1 2面100区土層断面(北より)



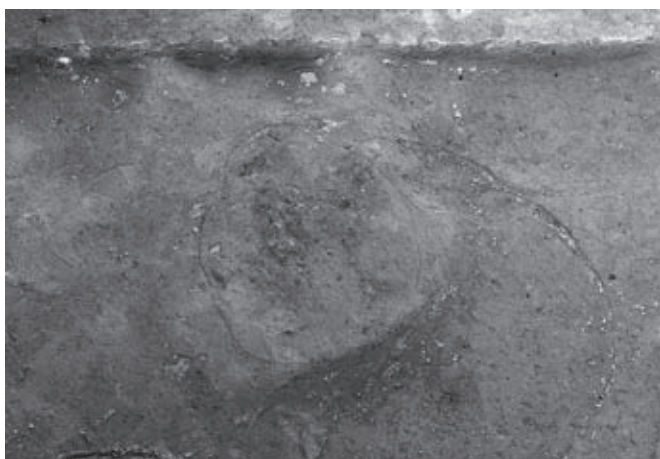
2 2面100区土層断面(北東より)



1 1号住居全景(南東より)



2 1号住居遺物出土状況(南東より)



3 1号住居焼土遺存状況(南東より)



4 1号住居竈全景(南西より)



5 1号住居竈掘り方全景(南西より)



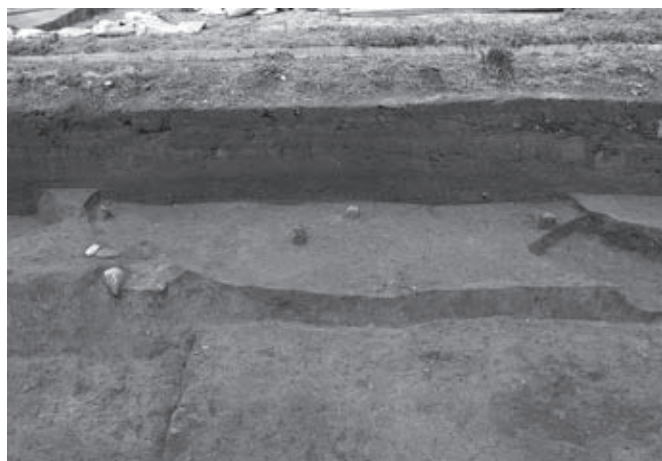
6 1号住居掘り方全景(南東より)



7 2号住居全景(南東より)



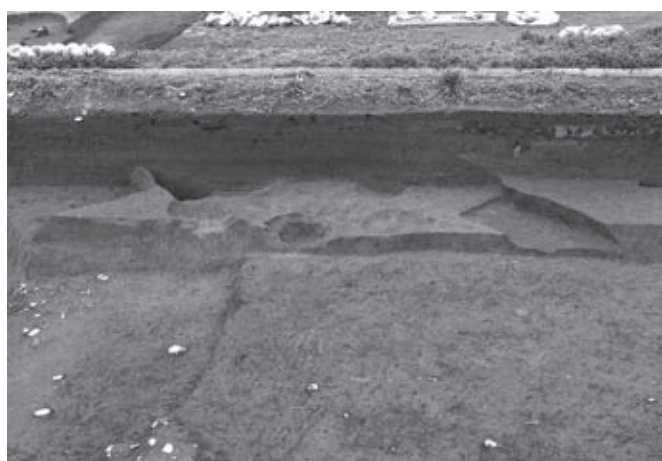
8 2号住居掘り方全景(南より)



1 3号住居全景(南東より)



2 3号住居竈掘り方全景(西より)



3 3号住居掘り方全景(南東より)



4 3号住居床下土坑3全景(東より)



5 4号住居竈全景(東より)



6 4号住居土層断面(東より)



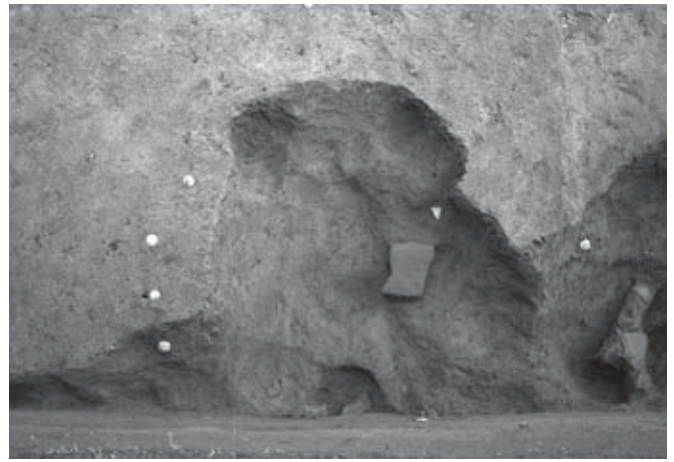
7 5号住居全景(南東より)



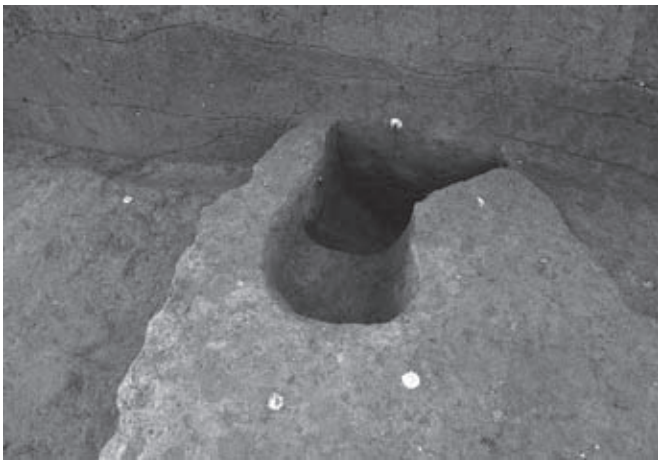
8 6号住居全景(東より)



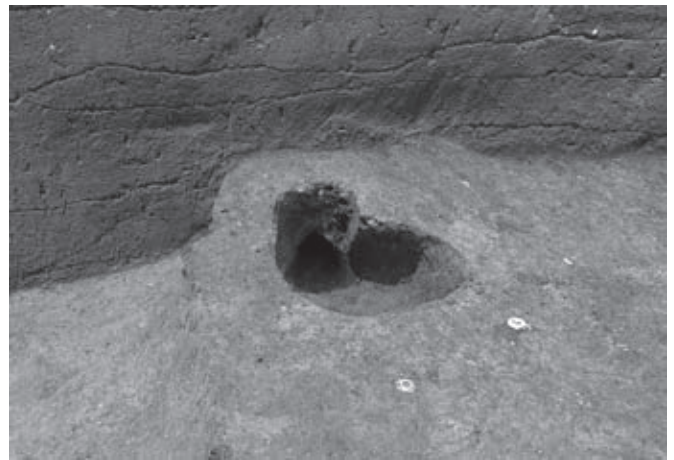
1 6号住居全景焼土遺存状況(東より)



2 6号住居竈全景(西より)



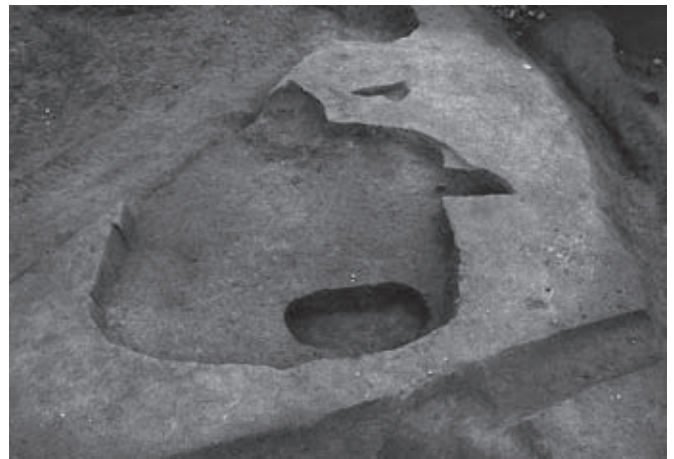
3 7号住居竈全景(南東より)



4 7号住居竈煙道部(東より)



5 7号住居竈土層断面(南西より)



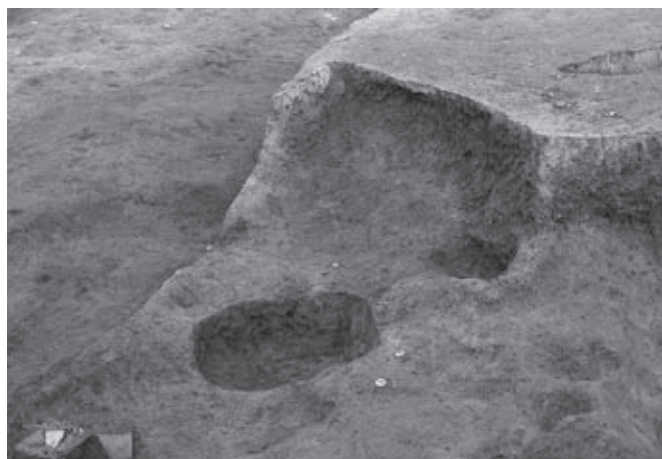
6 8号住居全景(西より)



7 8号住居竈遺物出土状況(西より)



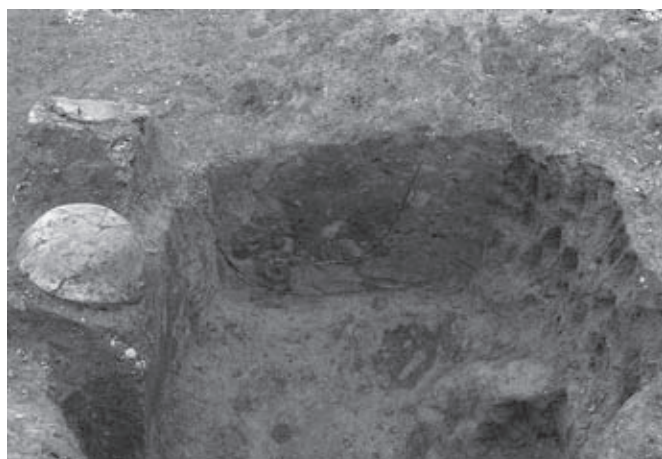
8 8号住居竈遺物出土状況(西より)



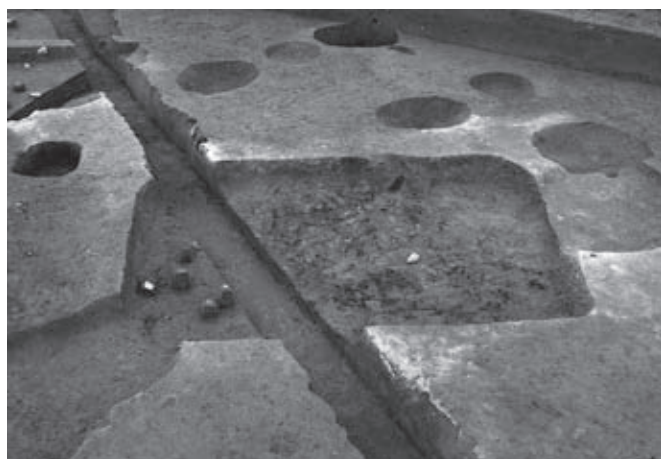
1 8号住居竈掘り方全景(西より)



2 8号住居掘り方全景(西より)



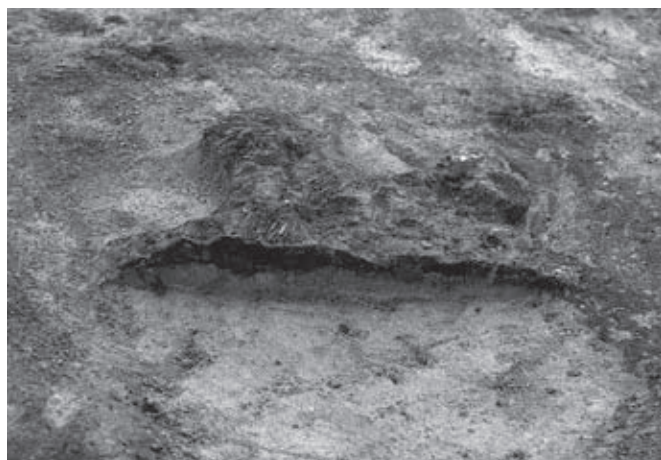
3 8号住居床下土坑1土層断面(北より)



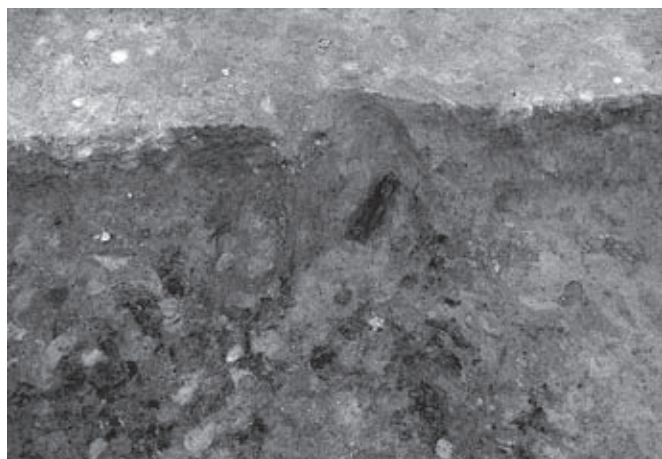
4 9号住居遺物、炭化物出土状況(北より)



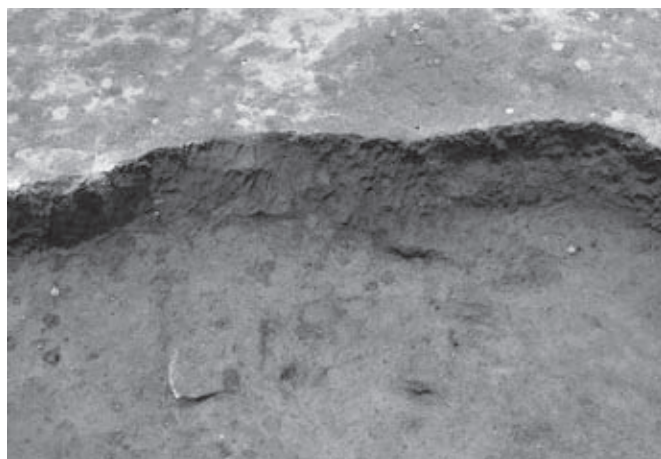
5 9号住居全景(北より)



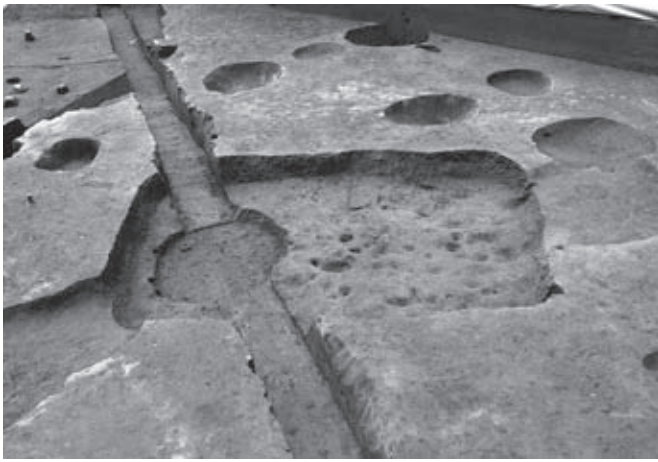
6 9号住居炭化物粒土層断面(北より)



7 9号住居竈全景(北より)



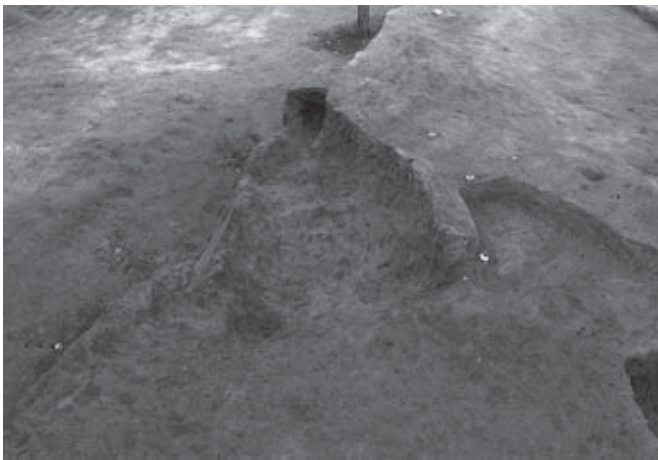
8 9号住居竈掘り方全景(北より)



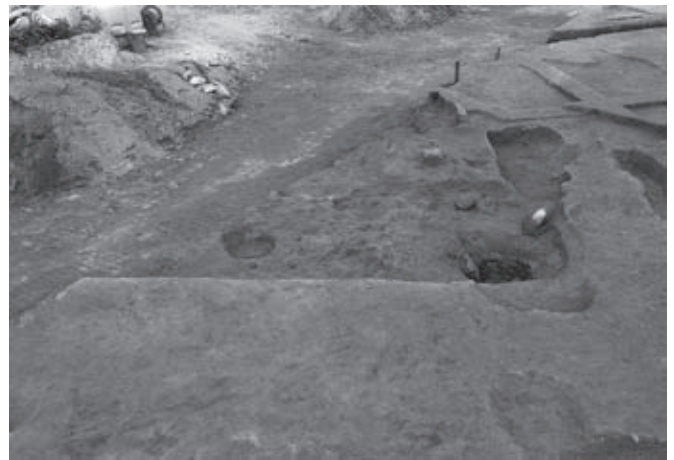
1 9号住居掘り方全景(北より)



2 10号住居竈全景(西より)



3 10号住居竈掘り方全景(西より)



4 10号住居掘り方全景(西より)



5 10号住居床下土坑2全景(西より)



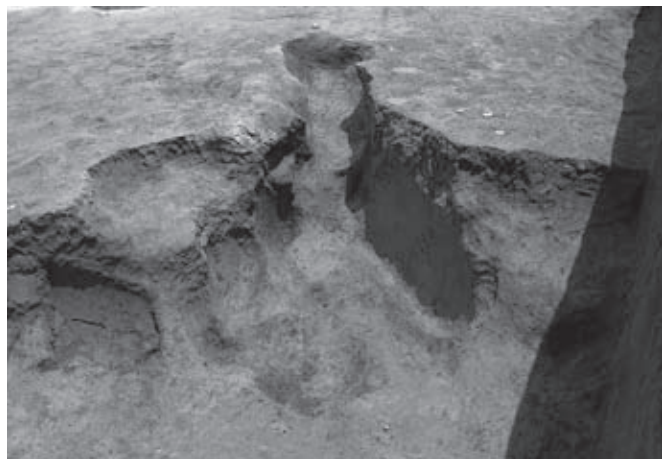
6 11号住居全景(北より)



7 11号住居遺物出土状況(西より)



8 11号住居竈全景(西より)



1 11号住居竈掘り方全景(西より)



2 11号住居竈掘り方遺物出土状況(西より)



3 11号住居掘り方全景(北より)



4 12号住居遺物出土状況(西より)



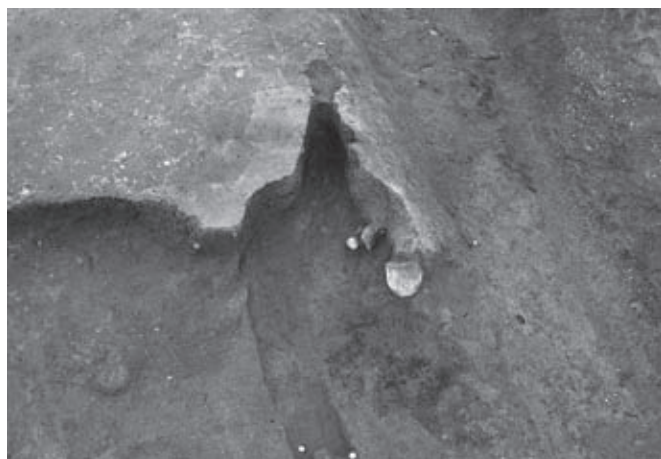
5 12号住居掘り方全景(北より)



6 13・26号住居全景(西より)



7 13号住居掘り方遺物出土状況(南より)



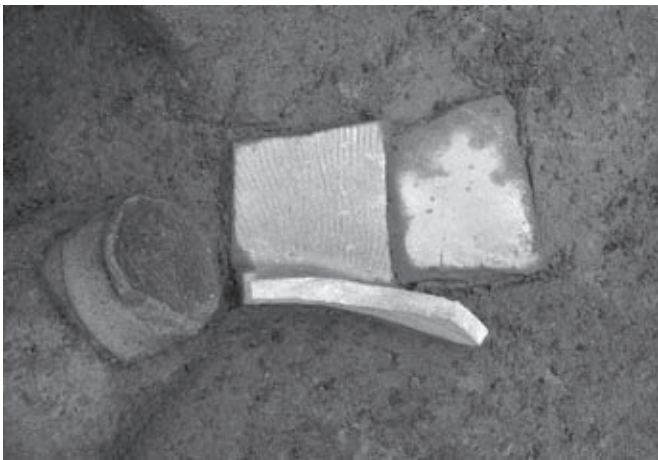
8 13号住居竈全景(西より)



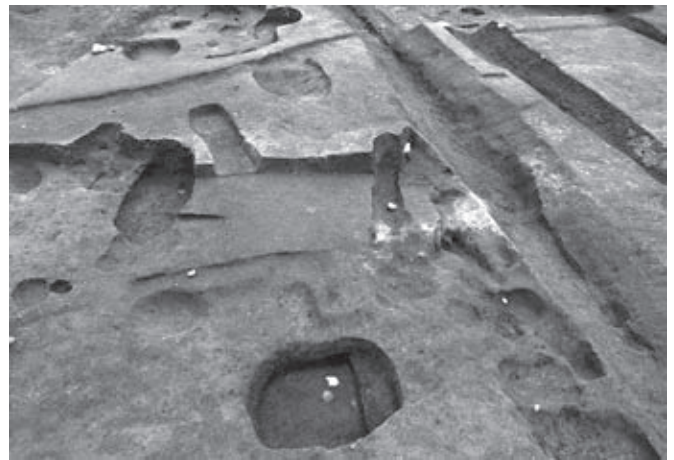
1 13・26号住居竈全景(西より)



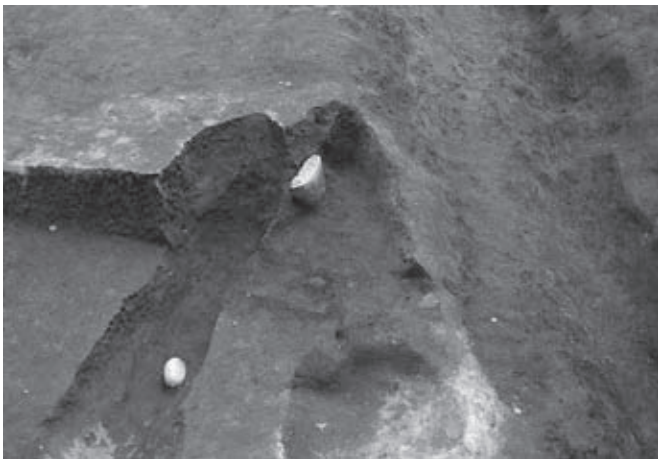
2 13・26号住居掘り方全景(西より)



3 13号住居床下土坑2 遺物出土状況(南東より)



4 14号住居全景(西より)



5 14号住居竈全景(西より)



6 14号住居竈遺物出土状況(西より)



7 14号住居掘り方全景(西より)



8 14号住居掘り方全景(西より)



1 15号住居全景(西より)



2 15号住居竈全景(西より)



3 15号住居竈掘り方全景(西より)



4 15号住居掘り方全景(西より)



5 16号住居土層断面(東より)



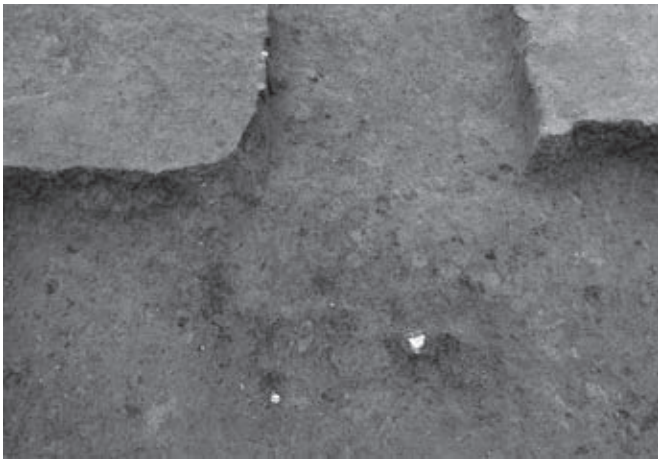
6 17号住居竈全景(南西より)



7 17号住居竈全景(東より)



8 18号住居全景(西より)



1 18号住居竈全景(西より)



2 18号住居掘り方全景(西より)



3 19号住居遺物出土状況(東より)



4 20号住居全景(西より)



5 20号住居遺物出土状況(東より)



6 20号住居竈全景(西より)



7 20号住居掘り方全景(西より)



8 20号住居掘り方全景(西より)



1 20号住居土層断面(東より)



2 21号住居遺物出土状況(西より)



3 21号住居掘り方土層断面(北より)



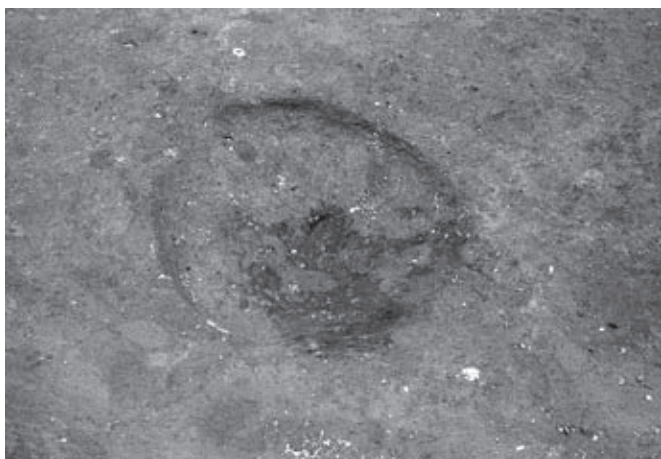
4 23号住居全景(西より)



5 23号住居遺物出土状況(西より)



6 23号住居掘り方全景(西より)



7 23号住居床下土坑1全景(南より)



8 23号住居床下土坑3全景(南より)



1 24号住居全景(東より)



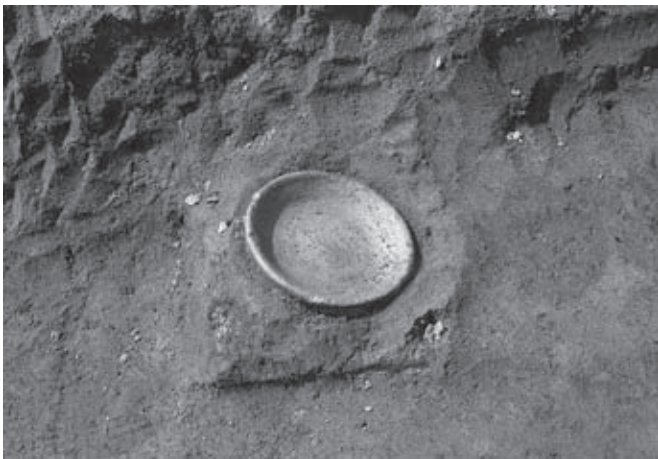
2 25号住居全景(西より)



3 25号住居全景(東より)



4 25号住居掘り方全景(北より)



5 26号住居遺物出土状況(南より)



6 26号住居遺物出土状況(南より)



7 27号住居床下土坑1 全景(東より)



8 28号住居全景(北東より)



1 28号住居掘り方全景(北東より)



2 29号住居遺物出土状況(北より)



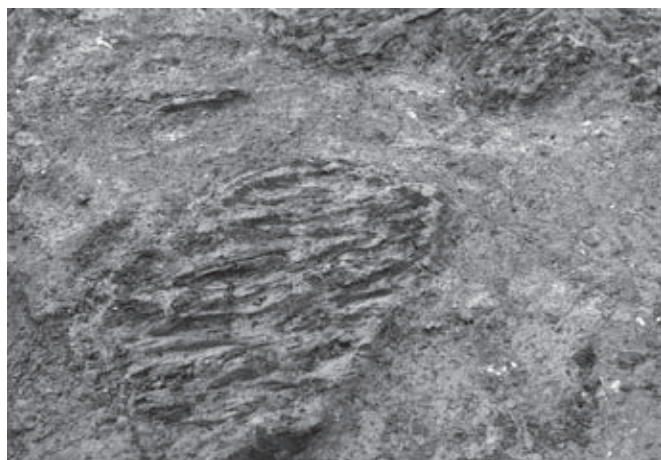
3 29号住居遺物出土状況(西より)



4 29号住居掘り方全景(北より)



5 30号住居全景(西より)



6 30号住居炭化物粒遺存状況(西より)



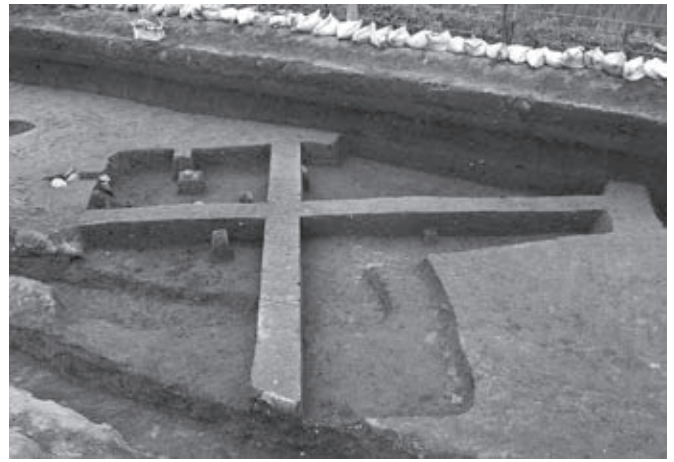
7 30号住居竈全景(西より)



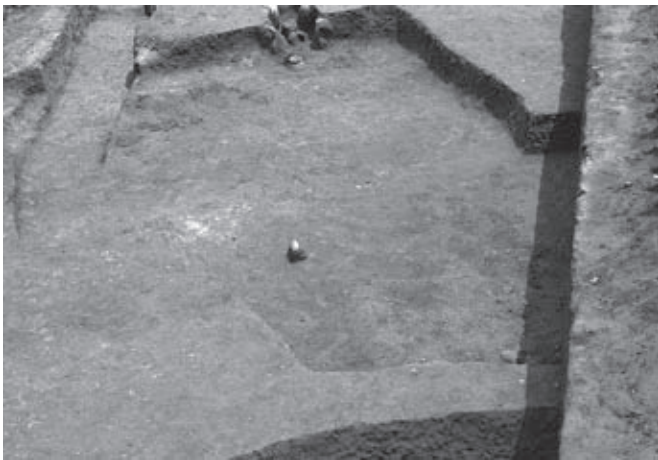
8 30号住居竈掘り方全景(西より)



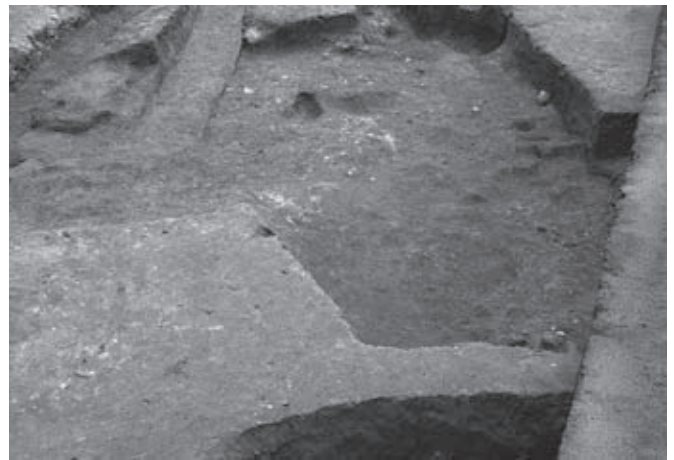
1 30号住居掘り方全景(西より)



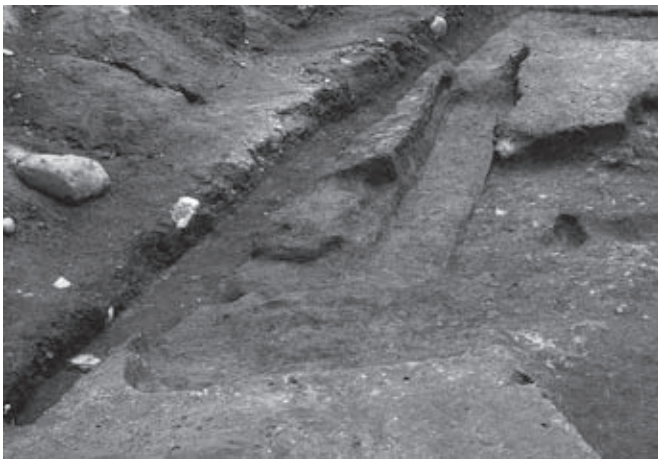
2 30・31・32号住居土層断面(北より)



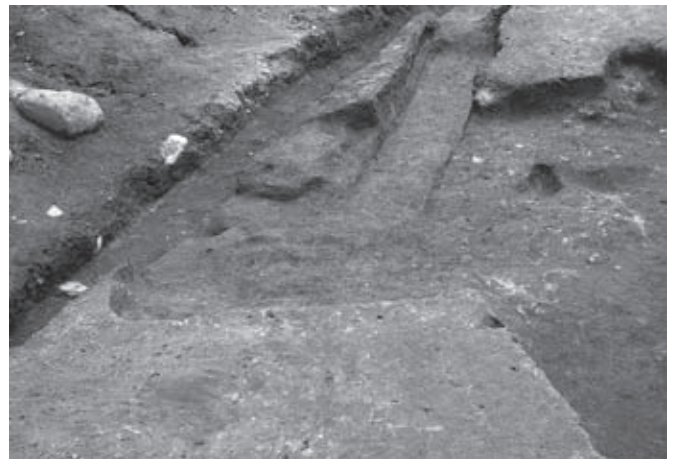
3 31号住居全景(西より)



4 31号住居掘り方全景(西より)



5 32号住居全景(西より)



6 32号住居全景掘り方(西より)



7 33号住居全景(北西より)



8 33号住居遺物出土状況(北西より)



1 33号住居遺物出土状況(北西より)



2 33号住居掘り方全景(北西より)



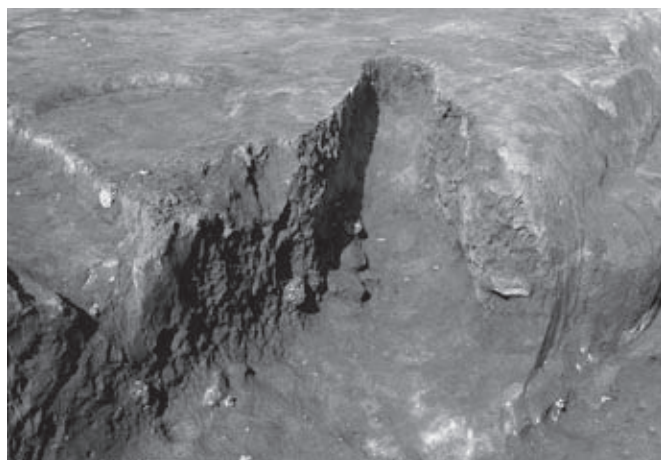
3 34号住居全景(北東より)



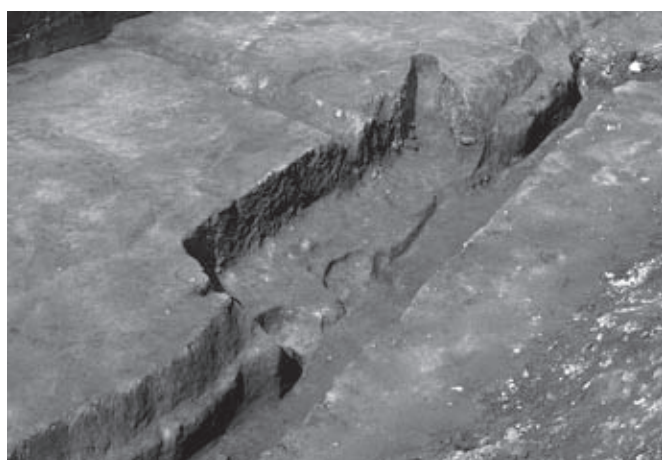
4 34号住居遺物出土状況(北より)



5 34号住居竈全景(東より)



6 34号住居竈掘り方全景(東より)



7 34号住居掘り方全景(北東より)



8 35号住居掘り方全景(北より)



1 36号住居全景(西より)



2 36号住居遺物出土状況(西より)



3 36号住居竈全景(西より)



4 36号住居竈掘り方全景(西より)



5 36号住居竈掘り方全景(西より)



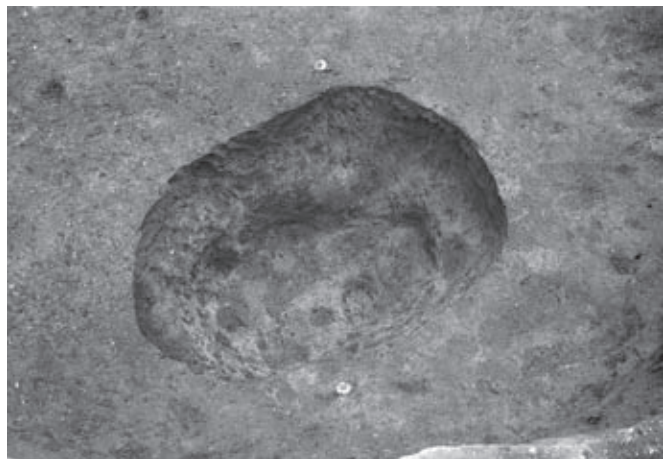
6 36号住居掘り方全景(西より)



7 37号住居全景(西より)



8 37号住居竈掘り方全景(西より)



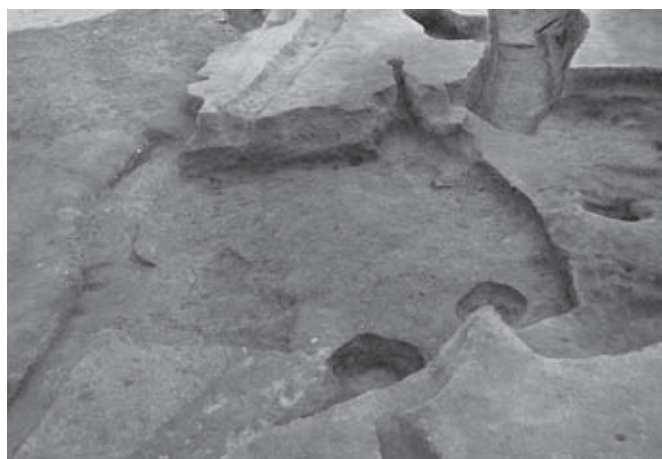
1 37号住居床下土坑1 全景(西より)



2 37号住居遺物出土状況(北より)



3 37号住居竈全景(西より)



4 37号住居掘り方全景(西より)



5 38号住居遺物出土状況(北より)



6 38号住居竈全景(北より)



7 38号住居竈全景(北より)



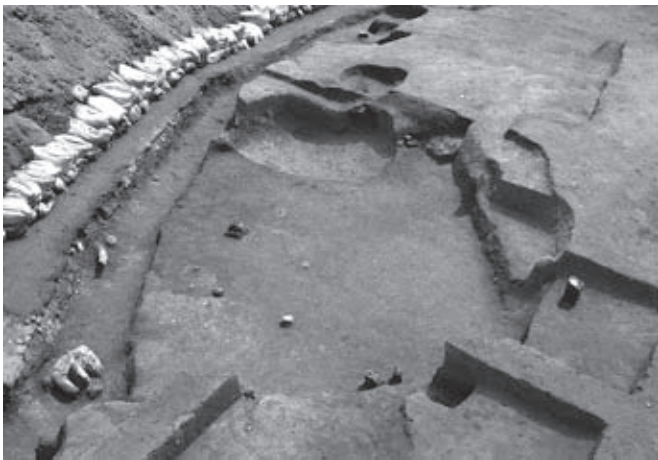
8 38号住居竈掘り方全景(北より)



1 38号住居竈掘り方全景(北より)



2 38号住居掘り方全景(北より)



3 39号住居全景(西より)



4 39号住居竈付近遺物出土状況(西より)



5 39号住居竈全景(西より)



6 39号住居竈掘り方全景(西より)



7 39号住居掘り方全景(西より)



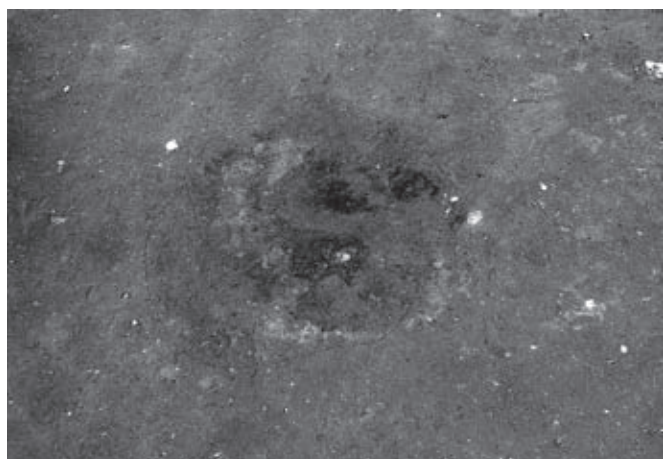
8 39号住居床下土坑1全景(南東より)



1 1号竪穴状遺構遺物出土状況(北東より)



2 3号竪穴状遺構焼土遺存状況(南より)



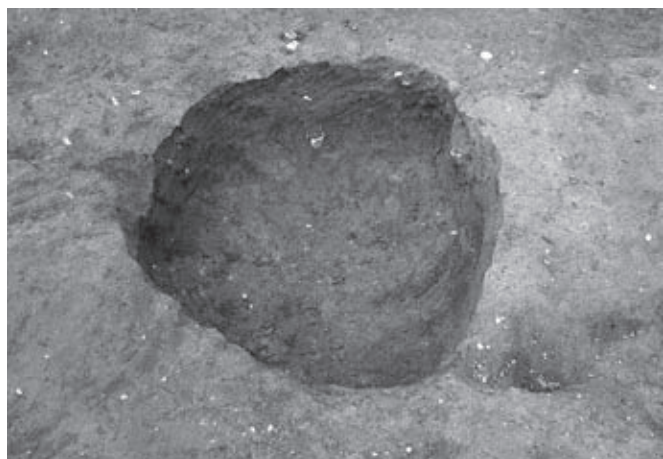
3 3号竪穴状遺構炭化物粒遺存状況(南より)



4 3号竪穴状遺構掘り方全景(南より)



5 3号竪穴状遺構掘り方土層断面(東より)



6 3号竪穴状遺構床下土坑2全景(南より)



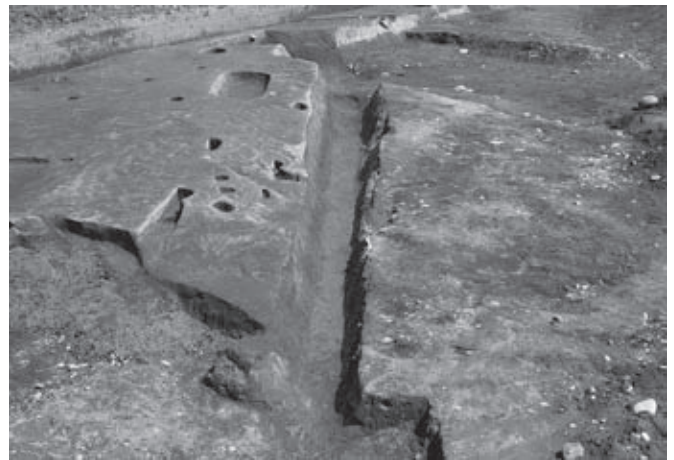
7 3号溝全景(東より)



1 4・11号溝全景(北東より)



2 4号溝遺物出土状況(西より)



3 5号溝全景(南より)



4 5号溝調査風景(南より)



5 6号溝全景(南より)



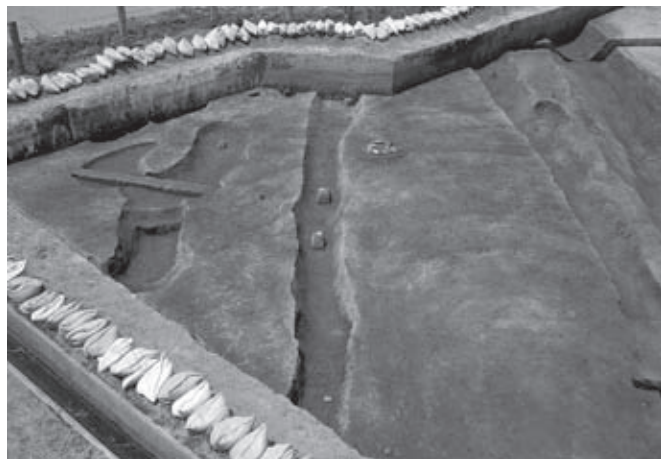
6 7・10号溝全景(東より)



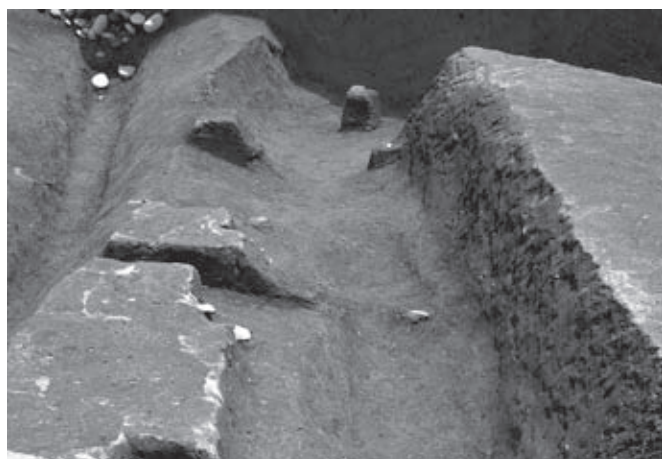
7 7・12号溝土層断面(東より)



1 10号溝全景(東より)



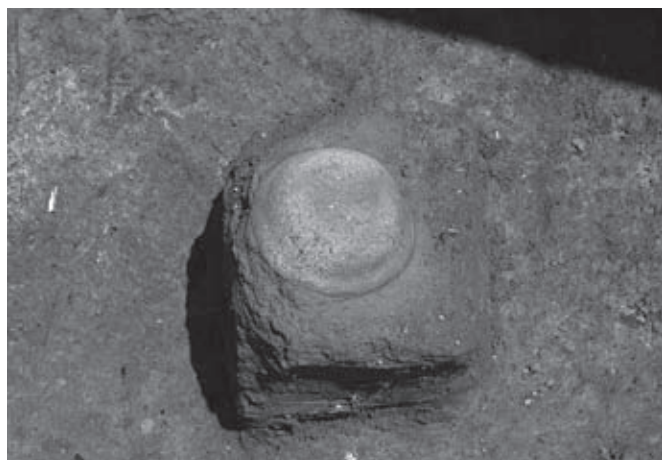
2 10号溝全景(東より)



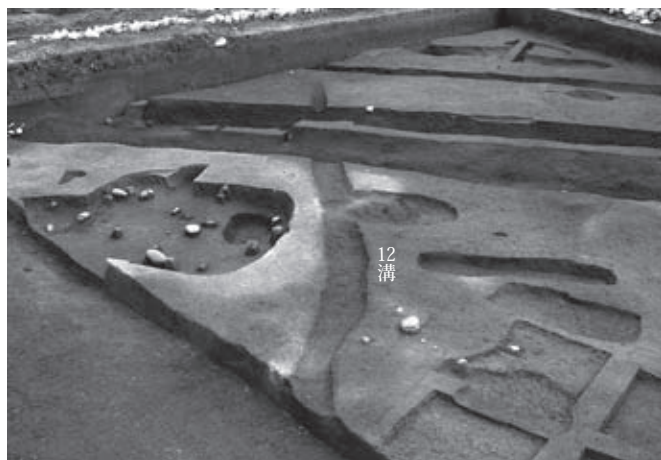
3 11号溝遺物出土状況(西より)



4 11号溝遺物出土状況(南より)



5 11号溝遺物出土状況(西より)



6 12号溝全景(北より)



7 12号溝全景(南より)



8 13号溝全景(北より)



1 13号溝土層断面(北より)



2 14号溝全景(北より)



3 14号溝土層断面(北より)



4 15号溝全景(北より)



5 15号溝土層断面(北より)



6 15号溝遺物出土状況(西より)



7 15号溝遺物出土状況(西より)



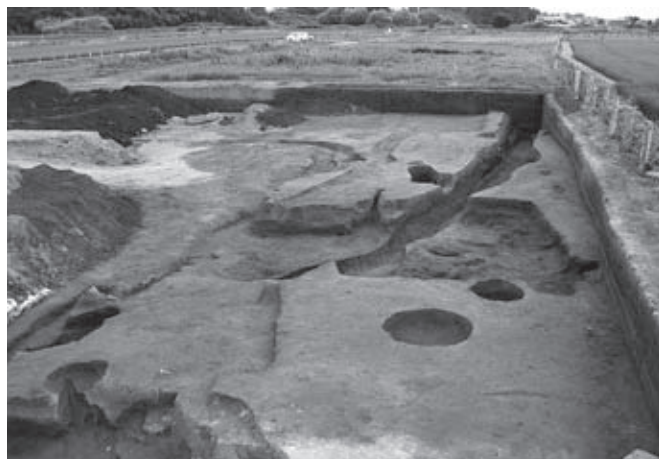
8 17号溝土層断面(東より)



1 18・19号溝全景(南東より)



2 18号溝調査風景(北西より)



3 18号溝全景(西より)



4 18号溝遺物出土状況(南東より)



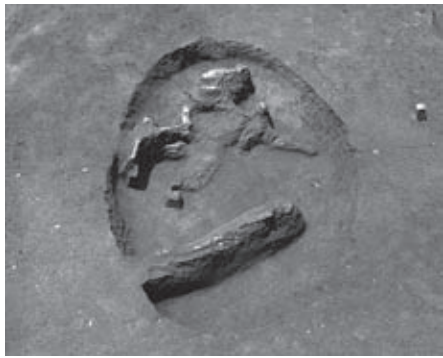
5 18号溝遺物出土状況(南東より)



6 18号溝土層断面(北西より)



7 18・19号溝土層断面(北西より)



1 1号土壙墓全景(東より)



2 1号土壙墓全景(東より)



3 1号土壙墓全景(北より)



4 3号土壙墓炭化物粒遺存状況(東より)



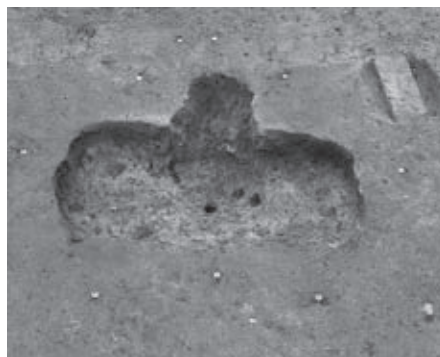
5 3号土壙墓全景(東より)



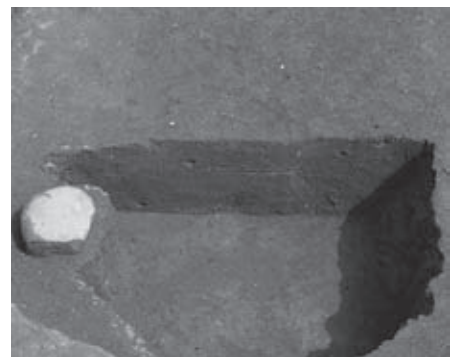
6 4号土壙墓炭化物粒遺存状況(東より)



7 4号土壙墓礫設置状況(西より)



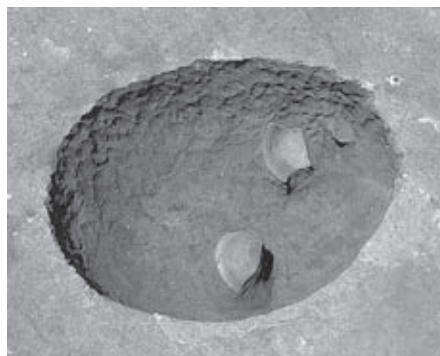
8 4号土壙墓掘り方全景(東より)



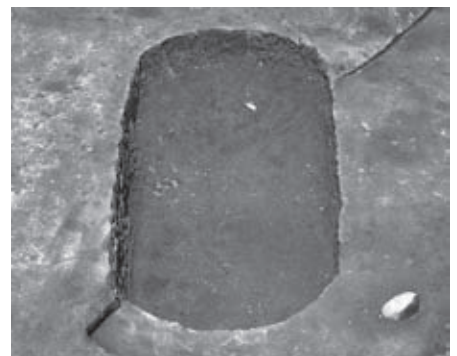
9 5号土壙墓土層断面 57号土坑より(南より)



10 6号土壙墓(8号住居内)人歯出土状況(北より)



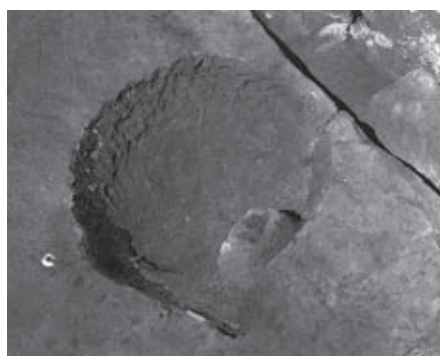
11 4号土坑全景(南東より)



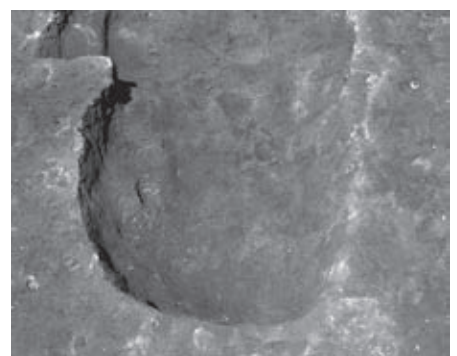
12 5号土坑全景(南より)



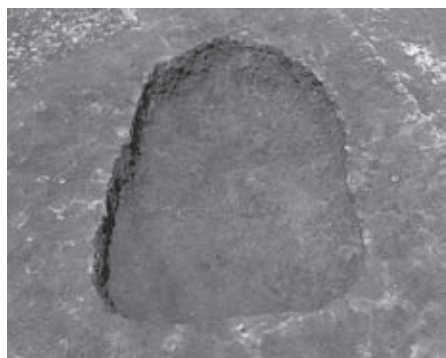
13 6号土坑全景(北より)



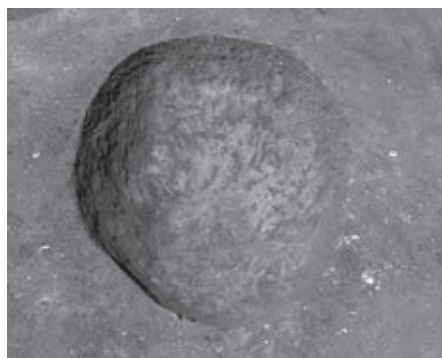
14 7号土坑全景(北より)



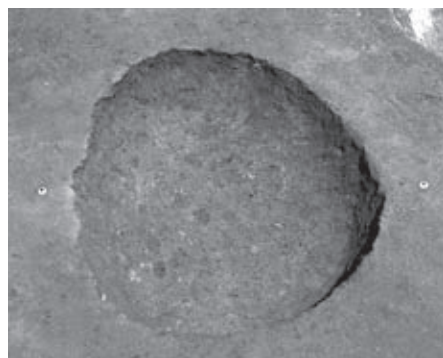
15 12号土坑全景(東より)



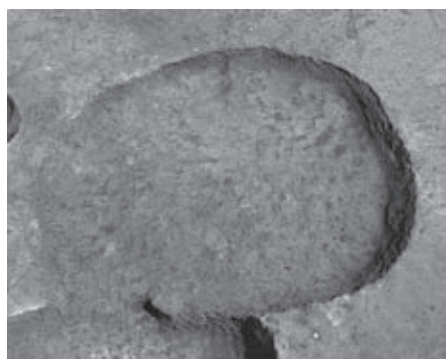
1 13号土坑全景(東より)



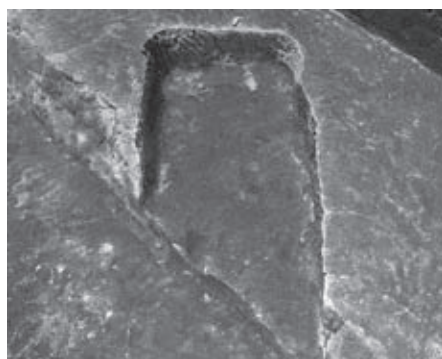
2 14号土坑全景(東より)



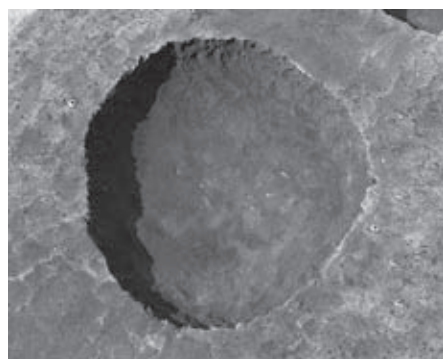
3 15号土坑全景(南より)



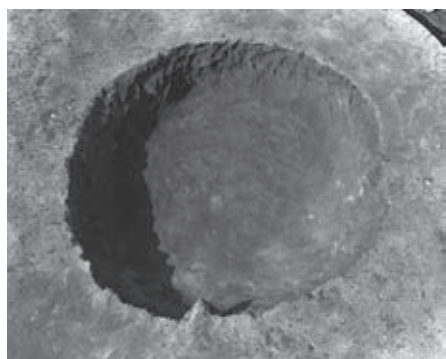
4 16号土坑全景(南より)



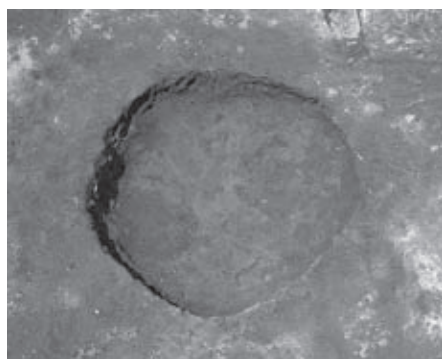
5 17号土坑全景(北東より)



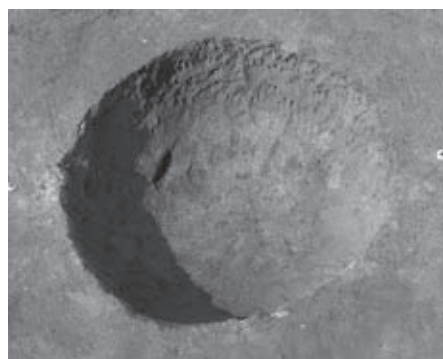
6 18号土坑全景(南より)



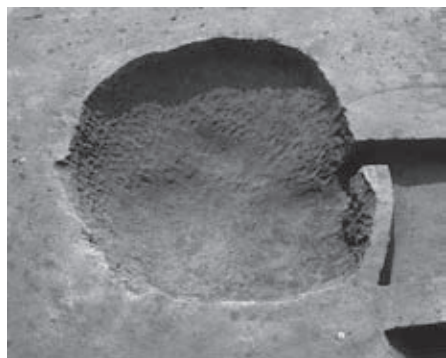
7 19号土坑全景(南より)



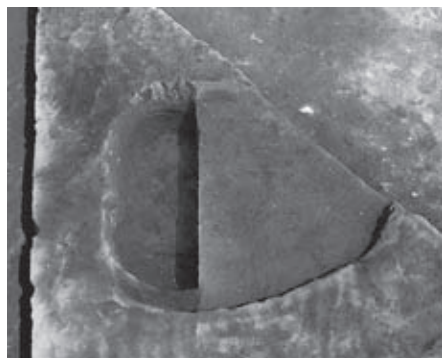
8 20号土坑全景(東より)



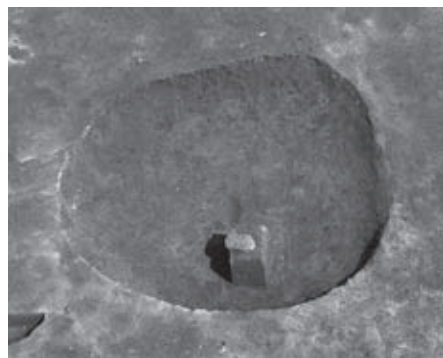
9 21号土坑全景(南より)



10 22号土坑全景(北東より)



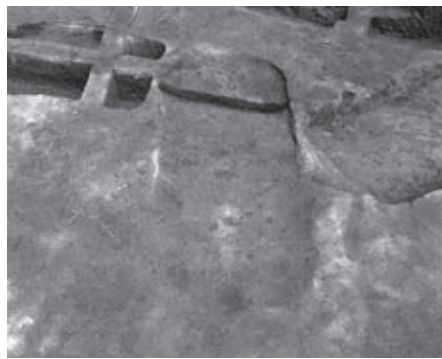
11 23号土坑全景(南より)



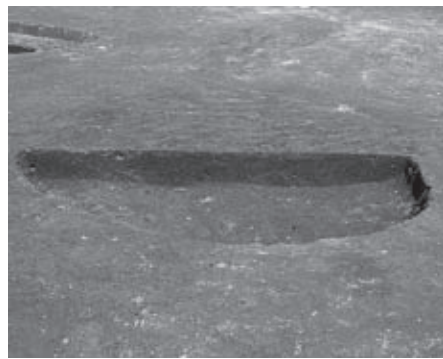
12 24号土坑全景(南より)



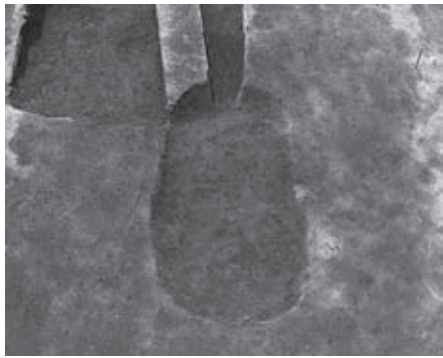
13 25号土坑全景(西より)



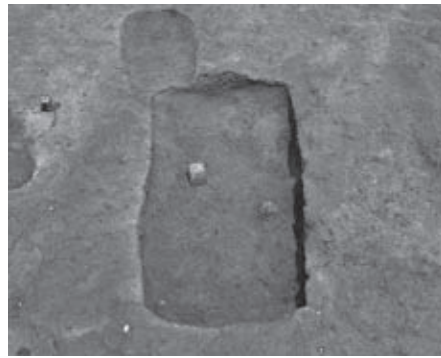
14 26号土坑全景(南西より)



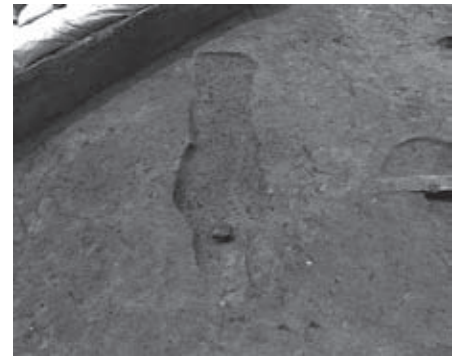
15 27号土坑全景(南東より)



1 28号土坑全景(東より)



2 29号土坑全景(南西より)



3 30号土坑全景(東より)



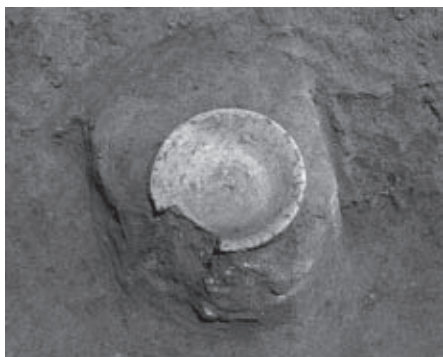
4 31号土坑全景(南より)



5 32号土坑全景(西より)



6 33号土坑全景(北より)



7 33号土坑遺物出土状況(南東より)



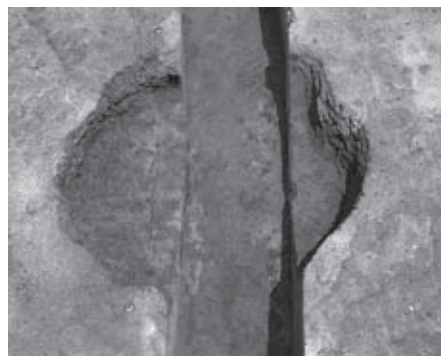
8 33号土坑遺物出土状況(北より)



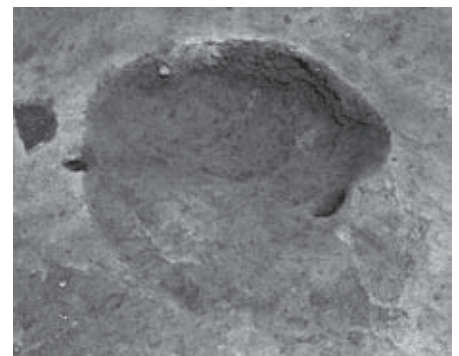
9 37号土坑全景(西より)



10 38号土坑全景(西より)



11 39号土坑全景(南より)



12 40号土坑全景(南より)



13 41号土坑遺物出土状況(南より)



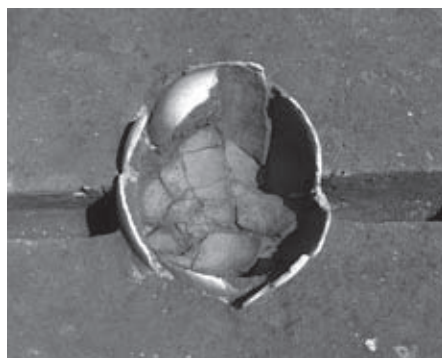
14 42号土坑全景(南より)



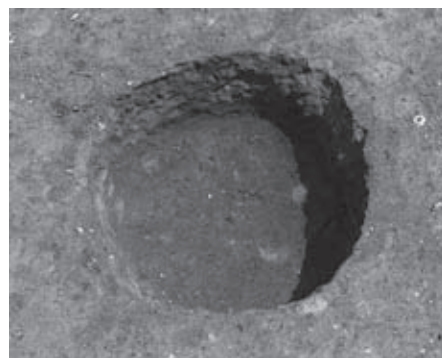
15 42号土坑遺物出土状況(南より)



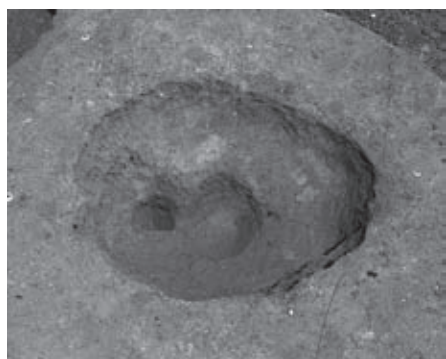
1 42号土坑遺物出土状況(東より)



2 42号土坑遺物出土状況(南より)



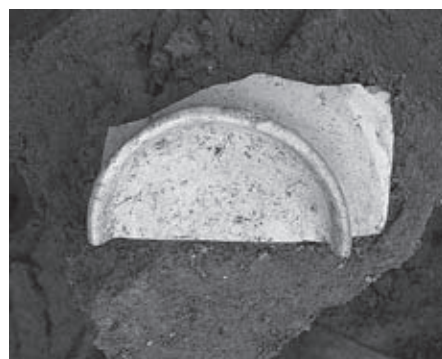
3 43号土坑全景(南より)



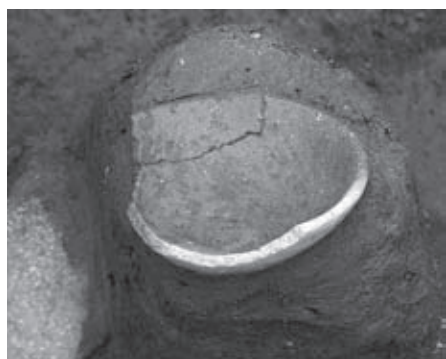
4 44号土坑全景(南より)



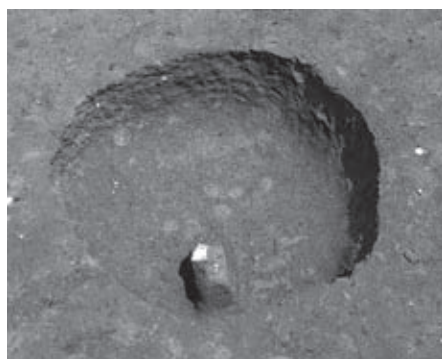
5 45号土坑全景(西より)



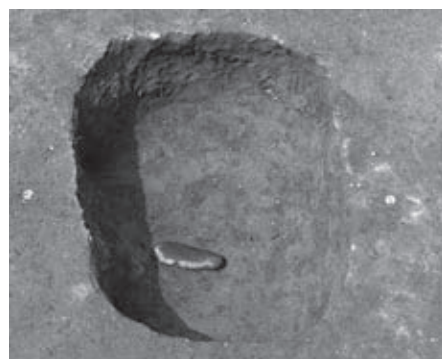
6 45号土坑遺物出土状況(北より)



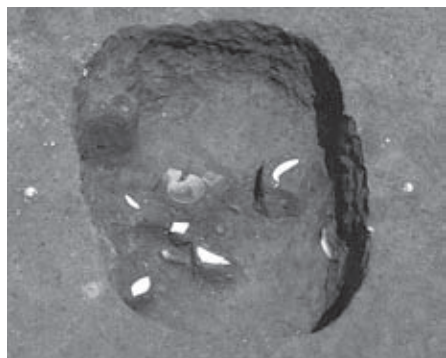
7 45号土坑遺物出土状況(西より)



8 46号土坑全景(南より)



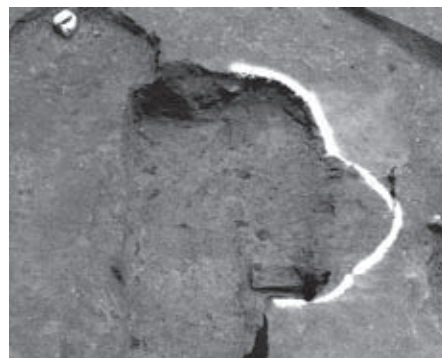
9 47号土坑全景(南より)



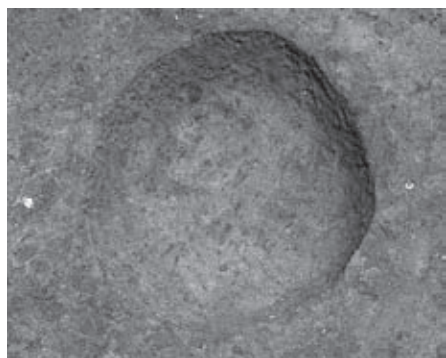
10 47号土坑遺物出土状況(南より)



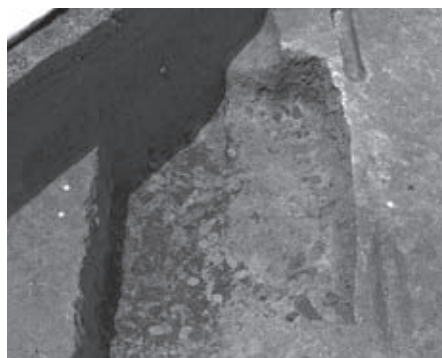
11 47号土坑遺物出土状況(東より)



12 48号土坑全景(西より)



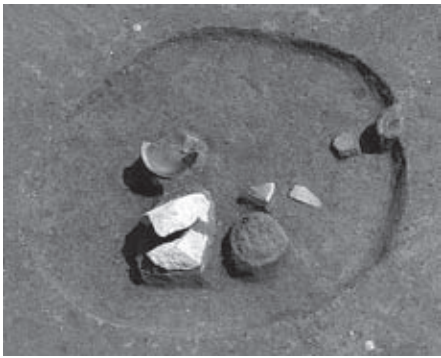
13 49号土坑全景(西より)



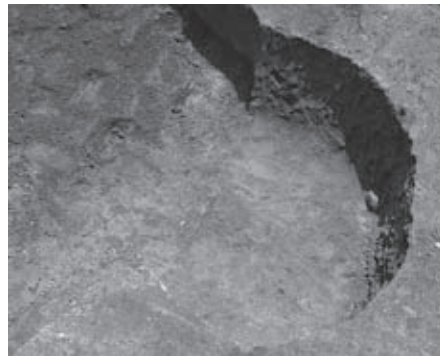
14 50号土坑全景(東より)



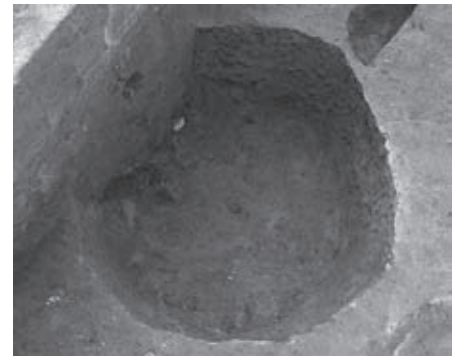
15 51号土坑全景(東より)



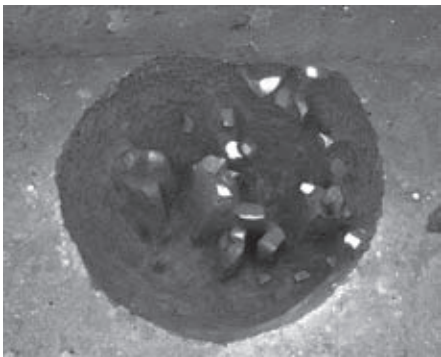
1 52号土坑遺物出土状況(南より)



2 53号土坑全景(南西より)



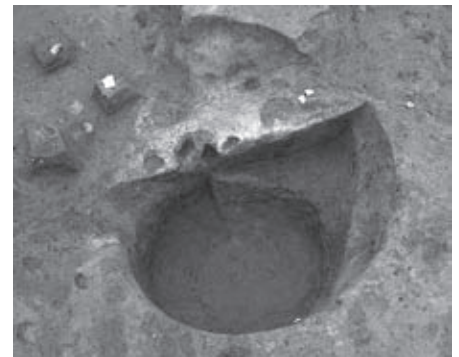
3 54号土坑全景(東より)



4 54号土坑遺物出土状況(北東より)



5 55号土坑全景(西より)



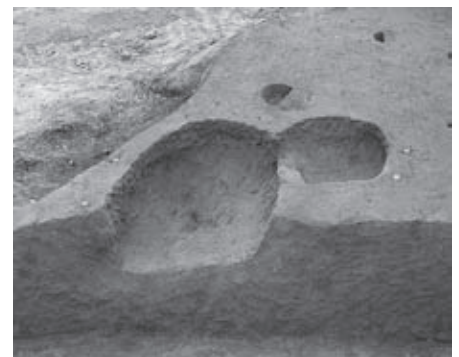
6 56号土坑全景(東より)



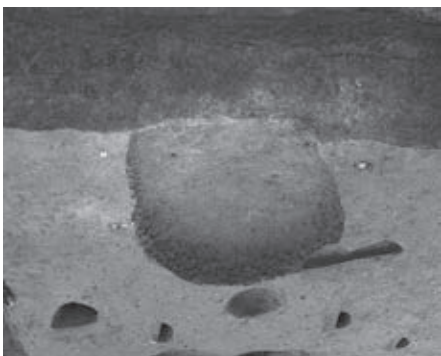
7 56号土坑遺物出土状況(北より)



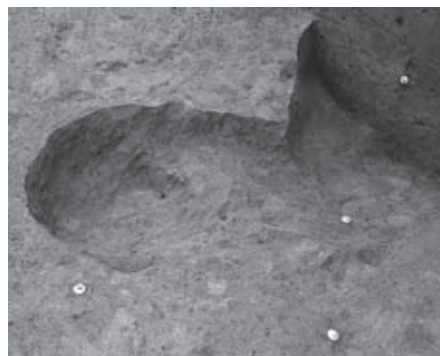
8 58号土坑遺物出土状況(西より)



9 61・62号土坑全景(東より)



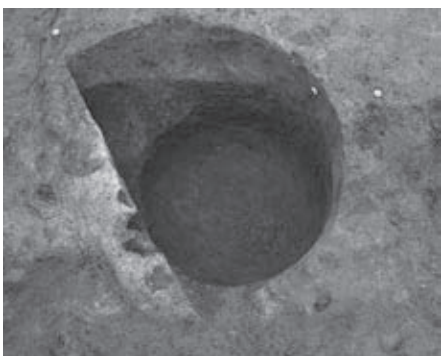
10 63号土坑全景(西より)



11 64号土坑全景(北東より)



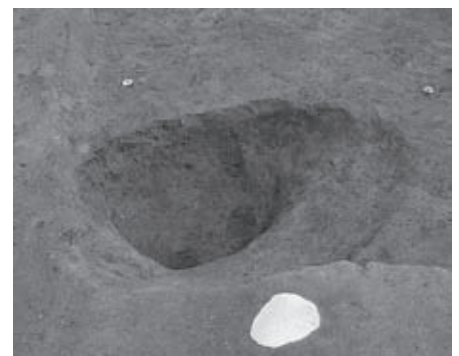
12 65号土坑土層断面(東より)



13 66号土坑全景(南より)



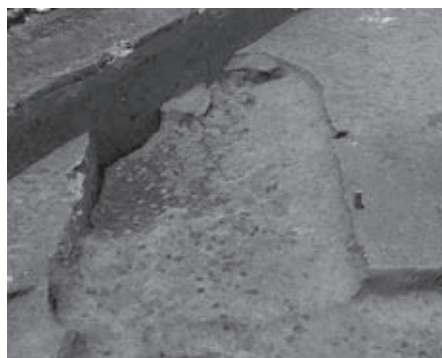
14 69号土坑全景(東より)



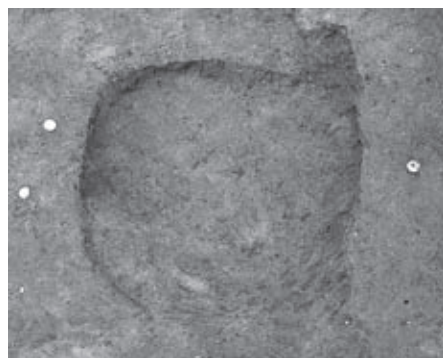
15 70号土坑全景(南より)



1 76号土坑土層断面(東より)



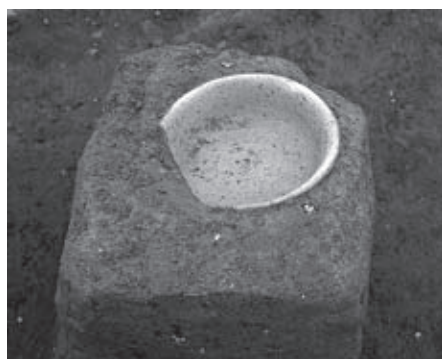
2 78号土坑全景(東より)



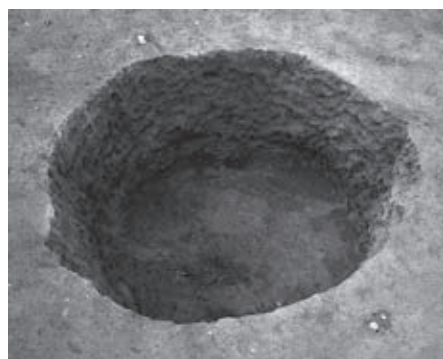
3 79号土坑全景(南より)



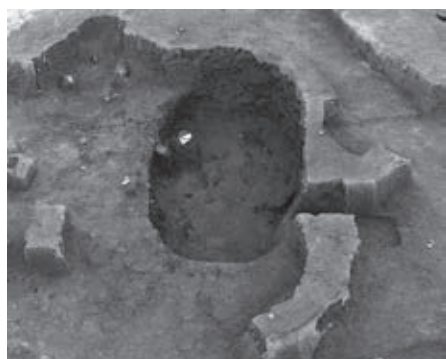
4 80号土坑全景(南より)



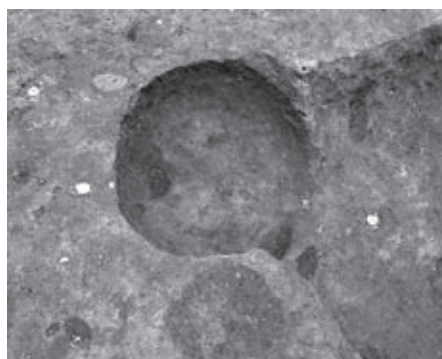
5 80号土坑遺物出土状況(北より)



6 85号土坑全景(東より)



7 86号土坑全景(西より)



8 87号土坑全景(東より)



9 88号土坑全景(南より)



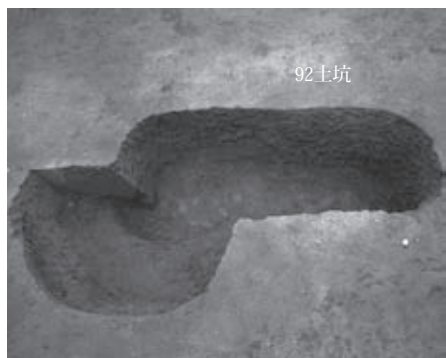
10 88号土坑遺物出土状況(南より)



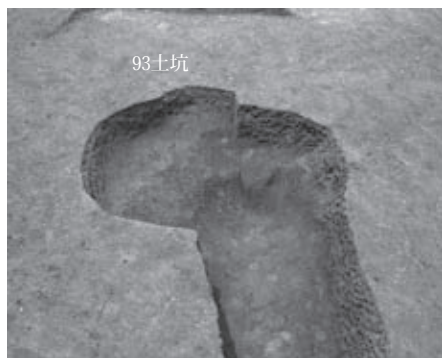
11 89号土坑土層断面(西より)



12 90号土坑土層断面(西より)



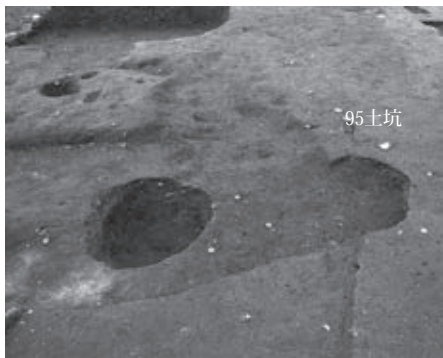
13 92号土坑全景(南より)



14 93号土坑全景(東より)



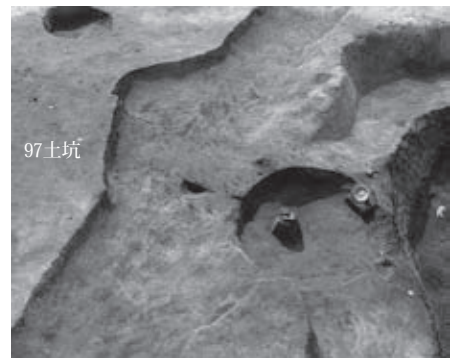
15 94号土坑全景(南より)



1 95号土坑全景(南より)



2 96号土坑全景(北より)



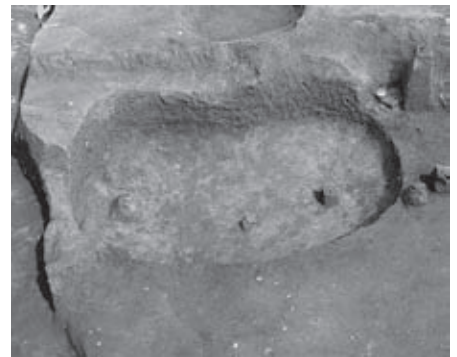
3 97号土坑全景(東より)



4 98号土坑全景(北より)



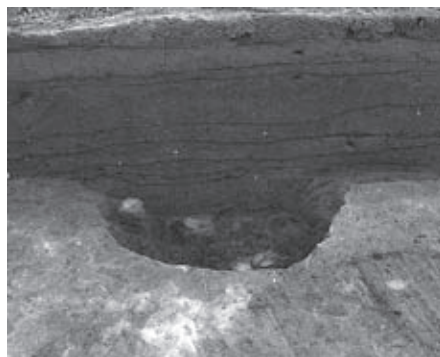
5 99号土坑全景(北より)



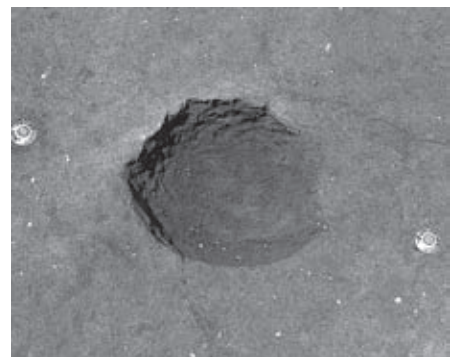
6 100号土坑全景(西より)



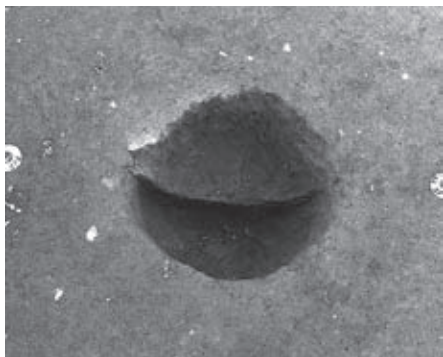
7 101号土坑全景(2号土壙墓より)
(東より)



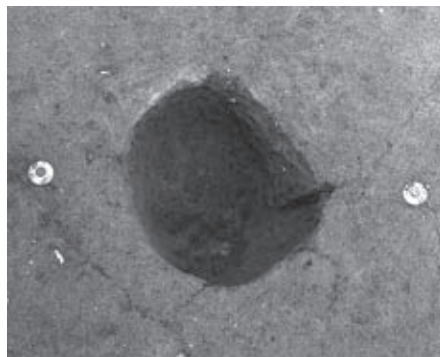
8 101号土坑土層断面(2号土壙墓より)
(北東より)



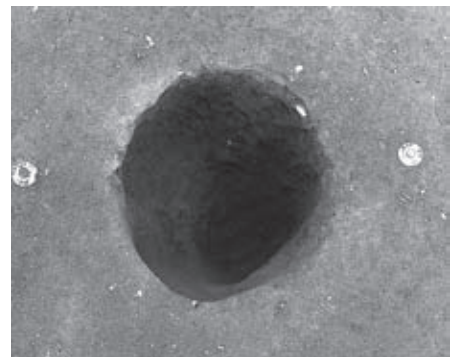
9 1号ピット全景(南東より)



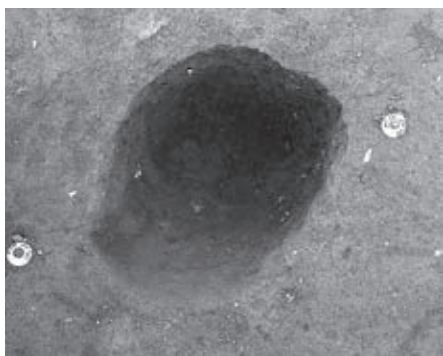
10 2号ピット全景(南東より)



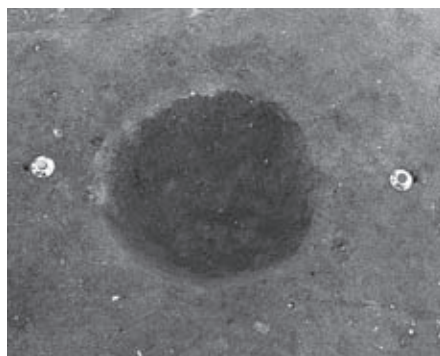
11 3号ピット全景(南東より)



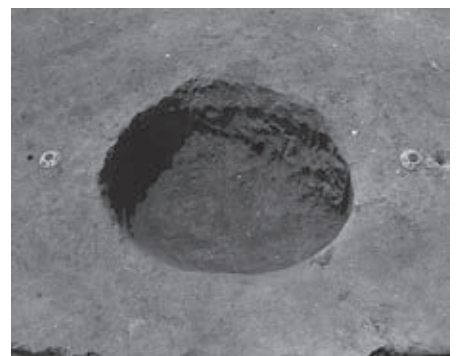
12 4号ピット全景(南東より)



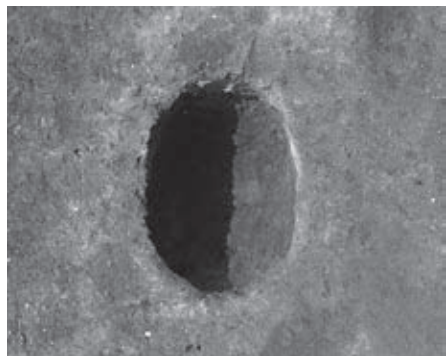
13 5号ピット全景(南東より)



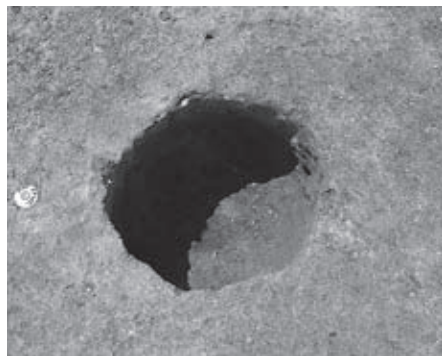
14 6号ピット全景(南東より)



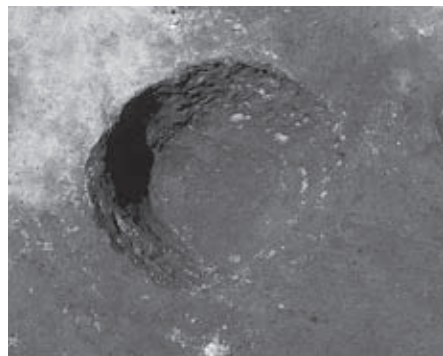
15 7号ピット全景(南東より)



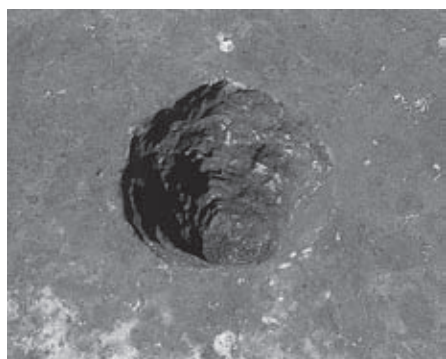
1 8号ピット全景(南より)



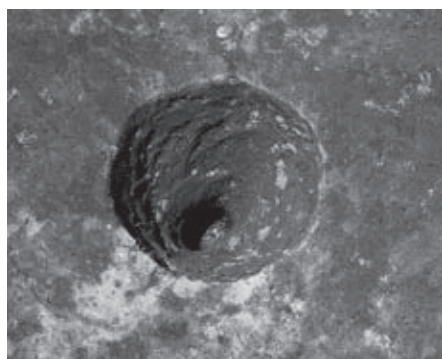
2 9号ピット全景(南東より)



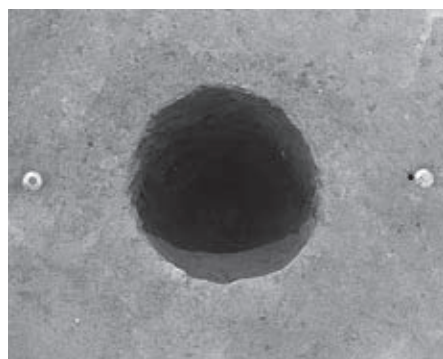
3 10号ピット全景(東より)



4 11号ピット全景(東より)



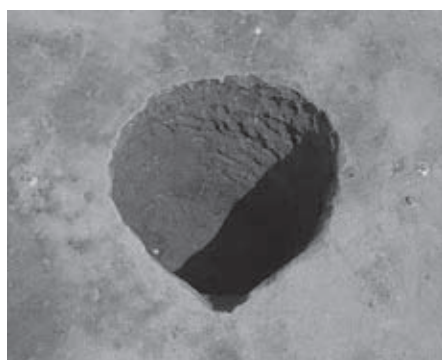
5 12号ピット全景(東より)



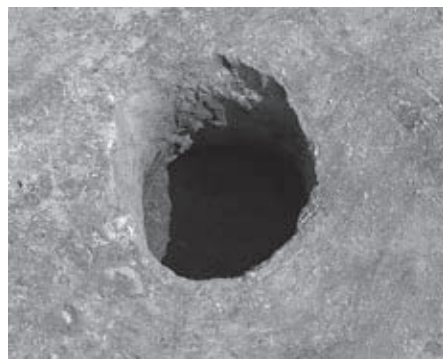
6 13号ピット全景(東より)



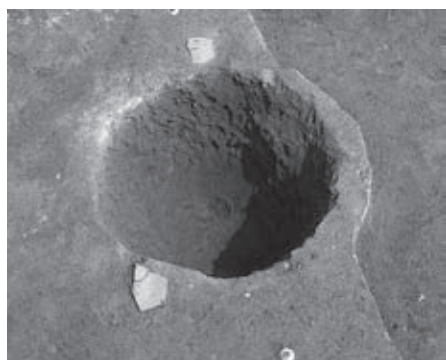
7 14号ピット土層断面(北より)



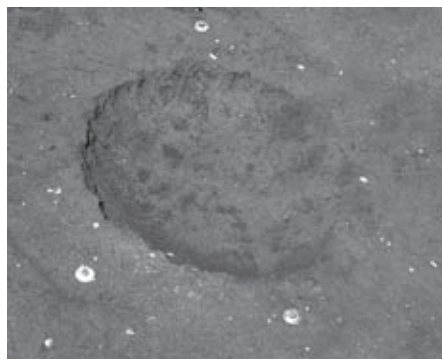
8 15号ピット全景(南より)



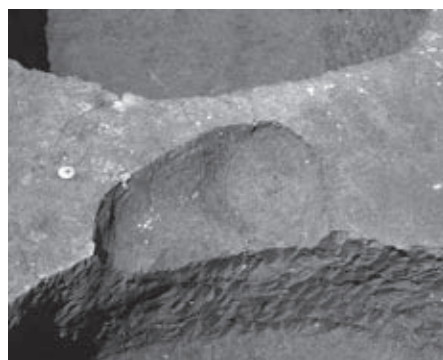
9 16号ピット全景(南より)



10 17号ピット全景(南より)



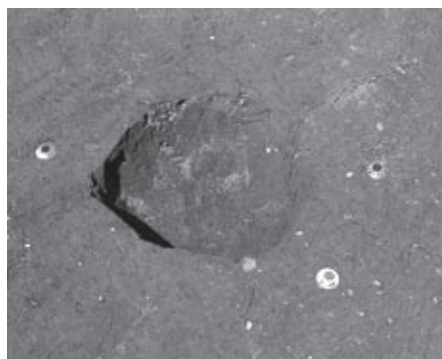
11 26号ピット全景(南より)



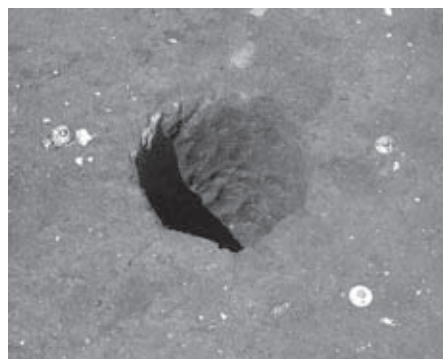
12 27号ピット全景(南より)



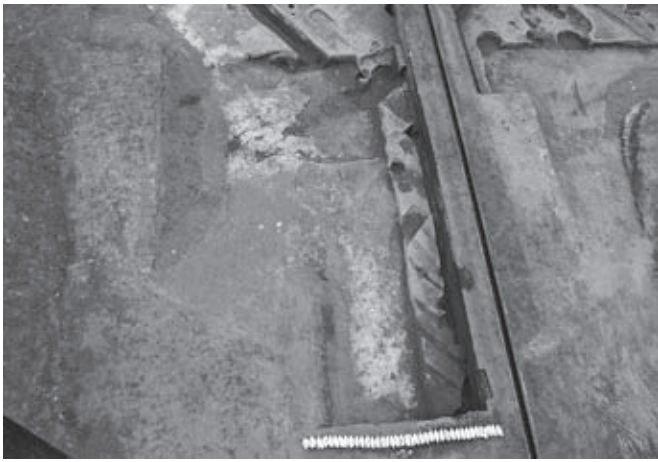
13 27号ピット土層断面(西より)



14 28号ピット全景(南より)



15 29号ピット全景(南より)



1 1号畠全景(北より)



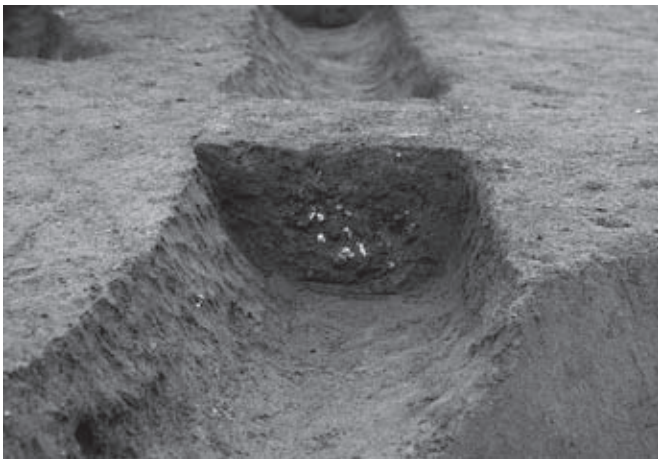
2 1号畠全景(南より)



3 1号畠全景(北東より)



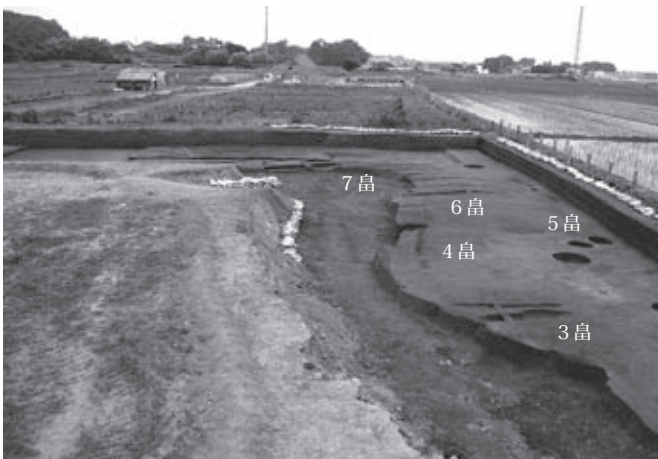
4 1号畠検出状況(東より)



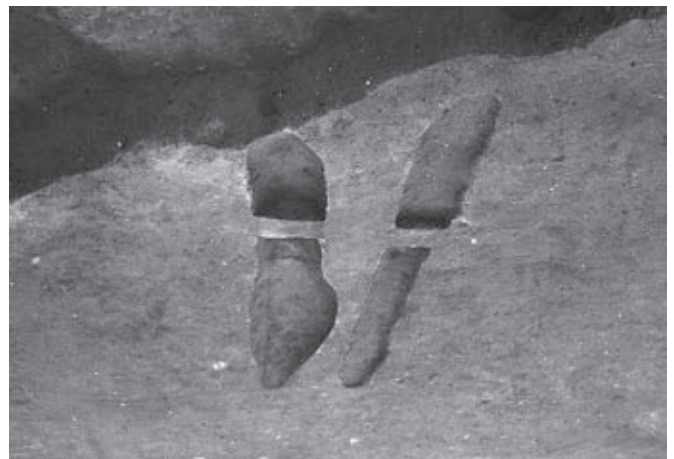
5 1号畠土層断面(南より)



6 1号畠土層断面(南東より)



7 3・4・5・6・7号畠全景(北西より)



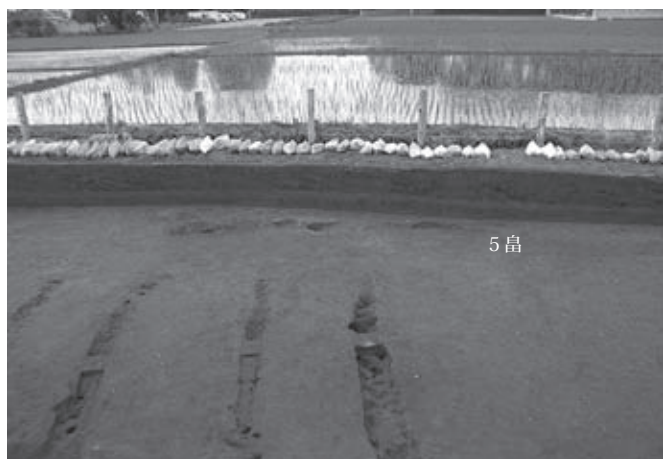
8 3号畠全景(北東より)



1 3号畠土層断面(南西より)



2 4号畠全景(北東より)



3 5号畠全景(北東より)



4 6号畠全景(東より)



5 6号畠全景(北より)



6 6号畠土層断面(南より)



7 7号畠全景(南西より)



8 7号畠全景(北より)

PL.40

1面



11±2 (1/2)

遺構外



1



2



3



4

2面

1号住居



1



2



3



4



5



6



7



9



10



13(1/2)



14(1/2)



15(1/2)



16(1/2)



17



18

3号住居



1



2

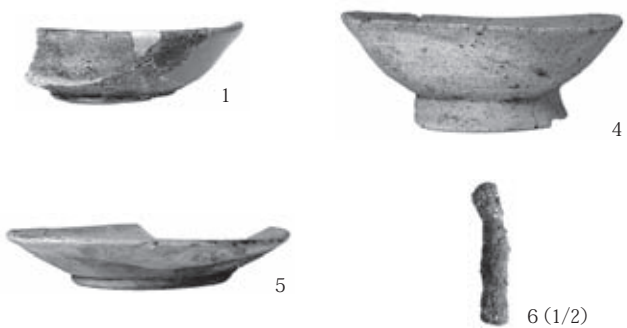


3(1/2)

8号住居



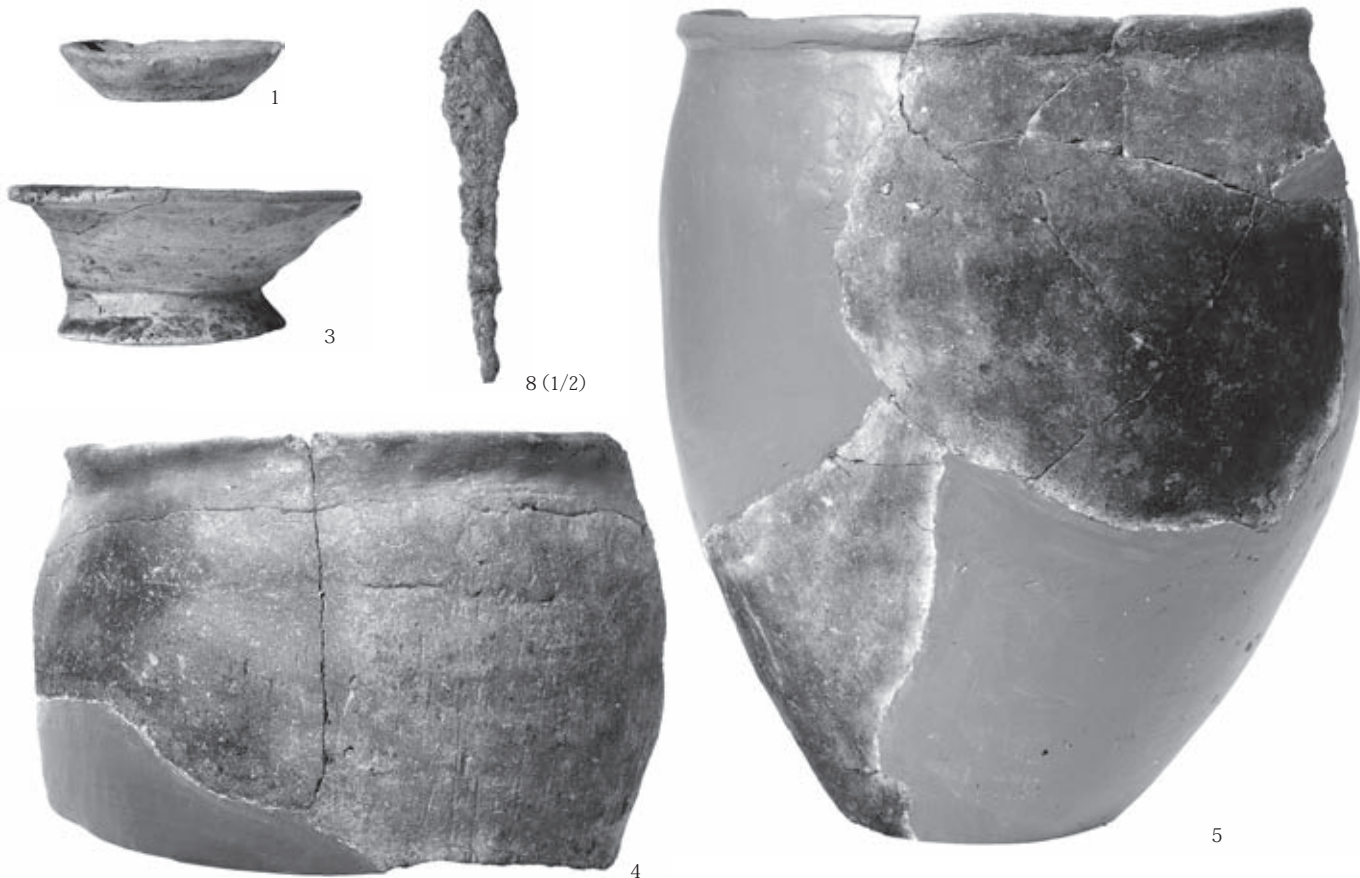
9号住居



10号住居



11号住居



PL.42

12号住居



13号住居



14号住居



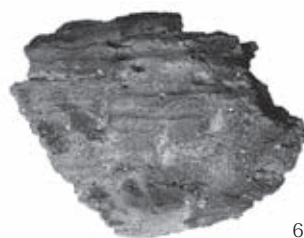
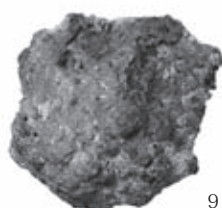
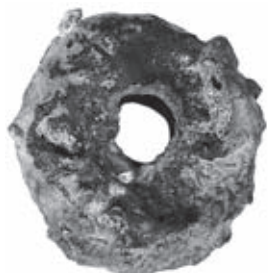
15号住居



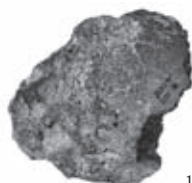
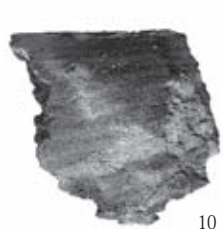
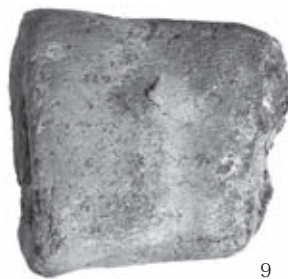
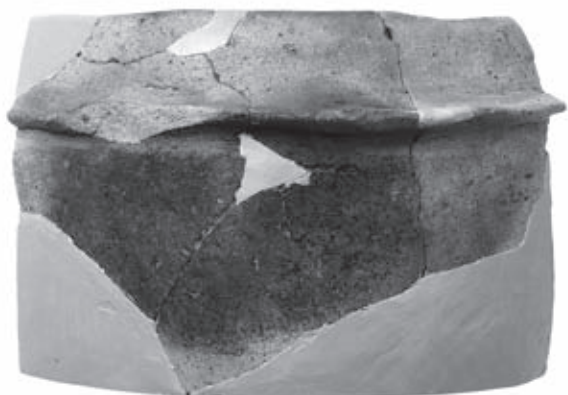
19号住居



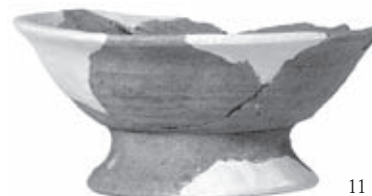
20号住居



21号住居



23号住居



PL.44

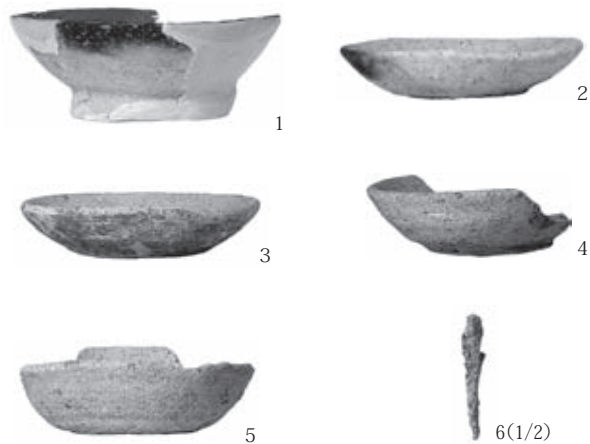
23号住居



25号住居



26号住居



30号住居



27号住居



29号住居



33号住居



3 (1/4)



4 (1/4)

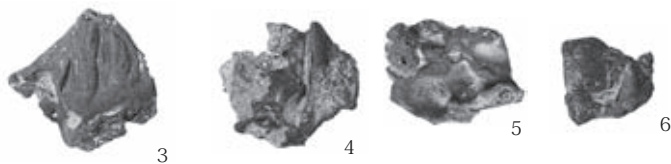
34号住居



1



2

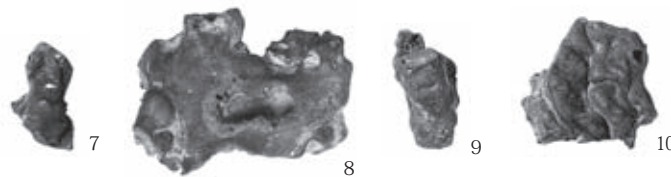


3

4

5

6

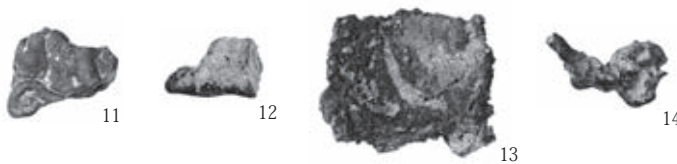


7

8

9

10

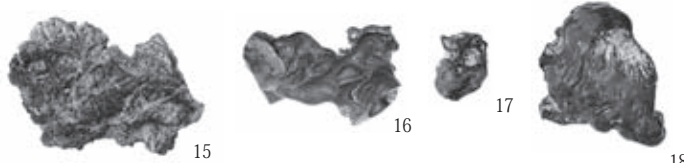


11

12

13

14

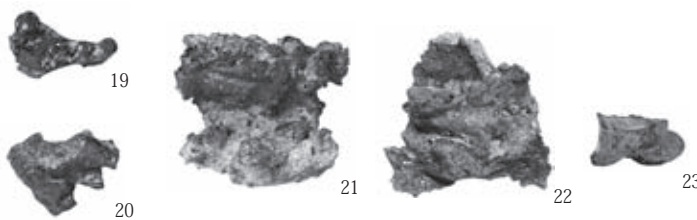


15

16

17

18



19

20

21

22

23

PL.46

36号住居



1



2



3



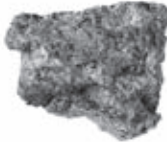
4



5



7



9



8



8

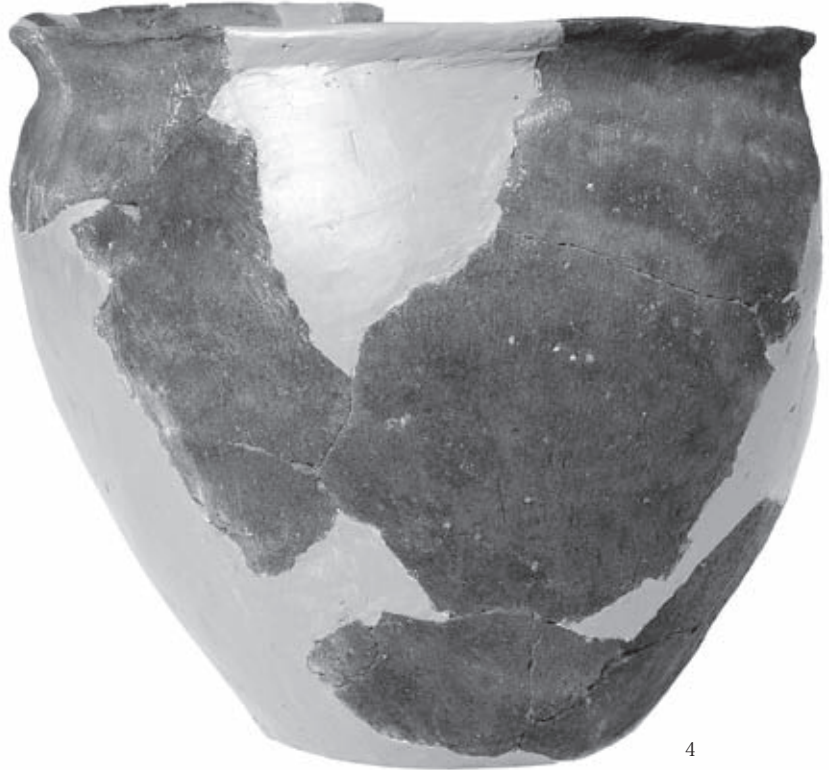
37号住居



2



5(1/2)



4

38号住居

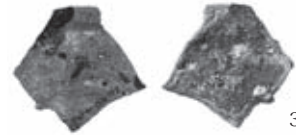


2

39号住居



1



3



5(1/2)



5(1/4)



6

39号住居



8 (1/2)



9 (1/2)



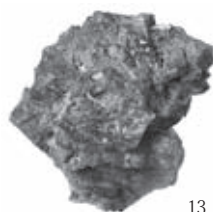
10(1/2)



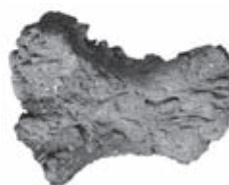
11(1/2)



12



13



14



3号堅穴状遺構

溝



1 (1/2)



4溝 4 (1/4)



4溝 5 (1/4)



4溝 6 (1/4)



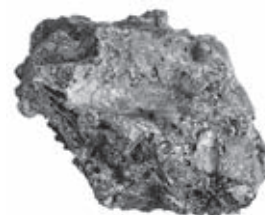
4溝 7 (1/4)



4溝 8 (1/4)



4溝 9



4溝 11



5溝 1



6溝 13



10溝 1



10溝 4 (1/4)



11溝 14



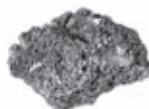
11溝 15



11溝 16 (1/2)



11溝 17



11溝 18 (1/2)



14溝 2 (1/2)



18溝 1



18溝 2



19溝 3

PL.48

土坑



4 ± 1



7 ± 2



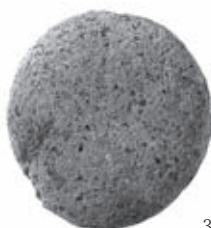
33 ± 4



33 ± 5



33 ± 6 (1/4)



33 ± 7



35 ± 8



42 ± 12 (1/6)



41 ± 10



45 ± 14



45 ± 15



45 ± 16



45 ± 17



45 ± 19



47 ± 26



47 ± 27



47 ± 28



47 ± 29



47 ± 31



45 ± 22 (1/2)



45 ± 23 (1/2)



45 ± 24 (1/2)



45 ± 25 (1/2)



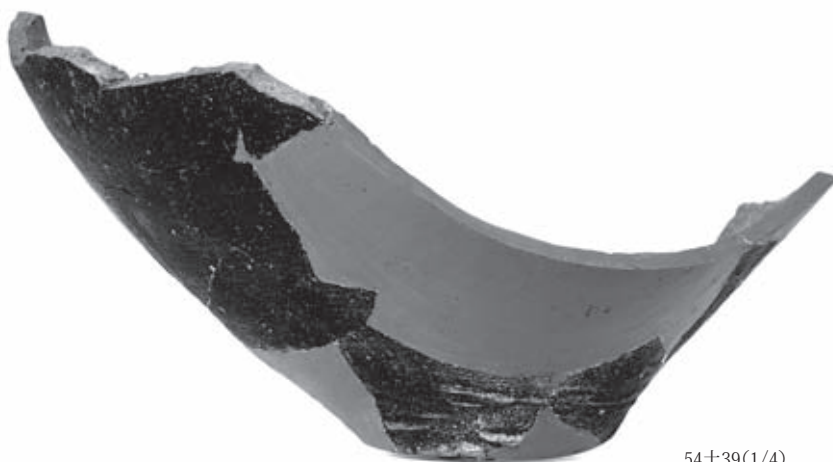
52±33



52±34(1/4)



54±38(1/4)



54±39(1/4)



66±41



80±42



88±44



88±45



96±47



101号土(2墓) 1

PL.50

遺構外



2



3



4



5



6



13



15



17



7



19



24



26



28



30(1/2)



31(1/4)



32



33



34(1/2)



35(1/2)



36



37(1/2)



38(1/4)



40



39(1/2)



41(1/2)



42(1/2)



43(1/2)



44(1/2)

報 告 書 抄 録

書名ふりがな	せきねあかぎいせき
書 名	関根赤城遺跡
副書名	一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財調査(その3)報告書
巻 次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	582
編著者名	石守晃・大西雅広・関邦一・徳江秀夫・楢崎修一郎・宮崎重雄
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20160317
作成法人ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住 所	群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	せきねあかぎいせき
遺 跡 名	関根赤城遺跡
所在地ふりがな	ぐんまけんまえばししせきねまち
遺跡所在地	群馬県前橋市関根町
市町村コード	10201
遺跡番号	前橋市 00803
北緯(世界測地系)	362616
東経(世界測地系)	1390313
調査期間	20120401-20120731
調査面積	1369.92m ²
調査原因	道路建設
種 別	生産/集落
主な時代	平安/中世
遺跡概要	集落-平安-住居39+溝5+土坑13-土師器・須恵器・灰釉陶器/集落-古代~中世-竪穴状遺構5+溝4+土坑56+ピット23-製鉄関連遺物/集落-中世-溝8+墓壇4(人2、家畜2)+火葬土坑2+土坑30/畠-古墳1+平安末2+中世3
特記事項	10世紀後半から11世紀前葉にかけての集落址
要 約	本遺跡は利根川左岸の沖積地上に立地し、9世紀から11世紀の集落や水路、土地区画に伴う溝、畠跡等も確認された。中世では初期に畠が営まれ、その後、墓壇や火葬土坑、家畜の埋葬坑等も確認された。また鉄滓、羽口等製鉄関連遺物の出土も確認された。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第582集

関根赤城遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財調査(その3)報告書

平成26(2014)年3月10日 印刷

平成26(2014)年3月14日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／杉浦印刷株式会社
